# 白き錬装士、恋姫世界に旅立つ

フォウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白き錬装士、恋姫世界に旅立つ

【Ｎコード】
Ｎ０５３５Ｏ

【作者名】
フォウル

【あらすじ】
ハセヲたちの活躍で平和を取り戻したＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄ。
しかし、そこにオーヴァンはいない。
だからハセヲは旅立つ。
――全てを取り戻すために。

# 第０話（前書き）

これが私の処女作になります。仕事の合間をぬっての作品となるので、更新は不定期になるとは思いますが、それでもよろしければお付き合いください。

# 第０話

「……これで最後だ！」

ハセヲは万感の想いを吐露し、双銃を構える。相対するは、Ｃｕｂｉａ。八相の碑文を全て取り込み、黄昏の鍵となったハセヲの反存在であり、放置すれば、第３次ネットワーククライシスを引き起こす元凶となるプログラムである。

その力は絶大であり、事実ハセヲのＰＣボディは先刻まで破壊されかけていた。

しかし、今の彼に恐れはない。なぜならば……

「……いけるな？　ハセヲ」

「……ああ！　当たり前だ！！」

オーヴァン。

ハセヲが目指すべき目標であり、第８相、再誕の碑文使いであった男。

その能力を使い、意識不明であった妹を救うも、代償として精神を崩壊させ、未帰還者となった男。

彼が、ハセヲに欠けていた碑文の力を貸し与えてくれたおかげで、破損していたＰＣボディは復活。

ハセヲの体から陽炎のように湧き上がるオーラが、彼に供給される碑文の力の強大さを物語っている。

その力を束ねながら、ハセヲはこれまでの冒険を省みていた。

憧れであった人との別離、力への奔走、新たな仲間との出会い、碑文使いとしての戦い、オーヴァンとの決着。

その記憶の多くが、悲しい現実を孕んでいた。

しかし、それらを仲間と共に乗り越えてきたからこそ……今のハセヲが”ここ”にいる。

だからハセヲはもう揺るがない。全てに決着をつけるべく、再度Ｃｕｂｉａに向かって飛び出した。

「俺が……Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄに刻んできた、想いの全てを……この一撃にぃぃ！！」

ギャァァァン！

渾身の一撃は、先ほどまで越えられそうになかったＣｕｂｉａのバリアを徐々に押し進み――――

パキィーーーン！

とうとうクビアコアに到達した。

「「いっけぇぇぇぇーーー！！」」

力の限りに放たれた言葉と込められた想いをのせた一撃はクビアコアを貫いて余りあるエネルギーを放出させ、世界を震わせる。

断末魔の叫びを思わせるＣｕｂｉａの咆哮と共に辺りは光にのまれ、

ハセヲは意識を手放した。

その間際――――確かにハセヲは見た。

己の肩越しから、オーヴァンが彼を支え続けてくれていた様を。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

ふと気がつくと俺は何もない白い空間に立っていた。

耳がおかしくなったのかと思えるほどの静寂に支配された空間。

だからこそ、何かしていないと気が触れそうな焦燥感を抱きつつ思考を奔らせる。

（あれからどうなった？　アトリたちは無事なのか？）

ショートメールで確認をしようとしたところで……誰かの視線に気づいた。

「オーヴァン！？」

「……ハセヲ」

望んだ変化が現れたというのに、俺の心は未だにざわめきを抑えられずにいた。

オーヴァンの姿に違和感を感じたからだ。

（……そうだ、左手にあった巨大な拘束具がなくなってる。それに……なんでそんなにも優しくて、何かをやり遂げた目で俺を見てるんだよっ！？）

まるで、もう何も思い残すことはないとでも考えているような……

「一つの終わりは、新しい始まり……」

嫌な思考に囚われそうになった俺を、オーヴァンの言葉がゆり起こす。

「俺たちの旅はまだこれからも続いていく。……そうは思わないか？」

そう言ってオーヴァンが踵を返す。

「何を言ってるんだよ？」

意味がわからない。

「何を言っているのか全然分からねえよ！」

嘘だ、本当はその言葉の意味を知りたくないだけだ。

今度は５年後か１０年後か……ひょっとしたら、ずっと逢えなくなるんじゃないかって。

「っまだ！」

俺は慌ててオーヴァンに向かって駆け出した。

声の震えを取り繕う余裕もなく、何度も見つめていた背中を追う。

「まだ言いたいことがたくさんあるんだ！！　オーヴァン！！！」

オーヴァンの腕をつかもうと伸ばした手は――空を切った。

伸ばした手は今回も届かず、光の欠片となって消えていったオーヴァン。

それを見て呆然としていた俺の前に何かが出現しようとしてくる。

温かさを彷彿とさせる燐光を纏って現れたのは、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの女神”アウラ”であった。

「彼の心を呼び覚ましたのは……貴方の想い。

想いに応え、信念を貫いたのは彼の想い。想いが想いをつなぎ、そして世界を紡ぐ。新しい世界はあなた方が紡ぐのです」

アウラがそう言ってくるが、俺はその願いを叶えることはできない。

いや、違う――それでは納得できないのだ。

「オーヴァンのいない世界じゃ、俺たちの世界は完成しない！」

そうだ、断言できる。

「オーヴァンは俺を救ってくれた！　オーヴァンは俺に与えてくれた！！　オーヴァンは俺の……居場所だった！！！」

（だから今度は俺の番だ！）

心に一つの誓いを。

（無茶でも無謀でも何でもいいっ！　取り戻すんだ！！　全てを！！！）

形となった想いをハッキリと告げる。

「俺がオーヴァンを救う！　俺がオーヴァンを見つける！！　俺がオーヴァンの居場所になるっ！！！」

（あれだけ好き勝手しておいて何の文句も言えずに、消えてしまうかもしれないだなんて、認められるかっ！）

「そう……決めたんだ！！」

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

アウラ　ｓｉｄｅ

「そう……決めたんだ！！」

彼は心からの想いを言い切った。その願いの実現が如何に可能性の低いものだと分かっていて、なお。

けれど、きっと彼は諦めたりなんかしない。
それだけの覚悟を、今の彼は持っているのだから。
ならば、私のするべきことは……
「非常に困難な道ですが、彼を救う手があるとしたら……どうしますか？」
私のこの言葉に、目の前の彼はすぐ反応した。
「本当かっ！？　どうしたらいいんだっ？」
予想通りの反応に、私はこれから話す内容が彼にショックを与えるものだと分かっていながらも……口を閉ざすことができなかった。
「実は……」

アウラ　ｓｉｄｅ　了

# プロローグ（前書き）

作者に三国志の知識は皆無です。

恋姫知識準拠でいくので史実との矛盾が多々あるでしょうが、ご容赦を願います。

# プロローグ

『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』

全世界で１２００万人を超えるプレイヤー数を誇る、大人気ネットゲームである。

４年前の黄金期に比べるといくらか低迷をみせるものの、相変わらずの人気をみせるゲームに、ある異物が混入した。

『ＡＩＤＡ』

膨大なネットワークの海の中に生まれた新たな生命体である。

最初は無害な存在であったＡＩＤＡに、突然変異種が生まれたところから歯車は狂いだしたのだ。

感染すると、正常な判断ができなくなり、最悪の場合、意識不明となってしまう。

そのまま、人的被害を拡大させ、増殖を続けるＡＩＤＡはついに、仮想現実世界の壁を超え、リアルの世界にまで影響を及すまでに至った。

『第３次ネットワーククライシス』

過去にも2回発生し、２０１７年に3回目として起きてしまったこの事件は、世界を大混乱に陥れた。

高度情報社会となったがゆえに、電子管理システムの停滞、情報統制の暴走などは致命的な打撃となったのだ。

そんな人類史にも語り継がれるであろう大事件を解決したのは、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの製作会社であるＣＣ社ではなく、ただの一プレイヤーとその仲間たちによるものであることを知っている者は・・・そう多くない。

彼らは、下手をすると意識不明者になる危険な道を、それぞれの信念のもとに走り抜け、見事に勝利を手に入れたのだ。

中でも、特に活躍をみせたのは、白き錬装士（マルチウェポン）であるハセヲ。

かつてＰＫＫ、死の恐怖と、ＰＫを生業とするプレイヤーから恐れられていた彼は、多くの出会いと別れを経て成長し、Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄを取り巻く戦いを終結させた。

彼の存在――彼を導いた者の存在もまた――がなければ、決してこの結果は得られなかっただろう。

では、そんな彼が戦いの終わった今、どこで何をしているかというと……

アトリ　ｓｉｄｅ

部屋に入る前に、手鏡でもう一度身だしなみをチェックした。

もう何度目の来訪かも分からないくらいなのに、軽く緊張を覚える。

（今からこんなんじゃ、希望通りの毎日が送れるようになったら、私大丈夫なのかな……）

そう思いながらもノックをし、部屋に入る。

「失礼します」

部屋に入って目にとまったのは、いつも通りの寝間着姿で――――個人用の病室のベッドで眠るハセヲ――――三崎　亮さんの姿だった。

あの戦いが終わってから……もう2カ月がたってしまった。

ＰＣ名「アトリ」である私、日下　千草が、あの戦い以降一切連絡が取れなくなったハセヲさんの身を案じていたところ、驚愕の連絡が入った。

ハセヲさんが、あの戦いの直後に意識を失って倒れたというのだ。

すぐに入院先の病院に向かった私がお医者さんから聞いたのは、体にはどこにも異常はないのに、意識だけが戻らないという……どこかで聞いたような話。

（ＡＩＤＡはオーヴァンさんの再誕で浄化されたはず。……ならなんで？）

ハセヲさんの意識は、まだどこかに囚われているのかな？　やっと戦いが終わったのに。

「ハセヲさんとやってみたいことが、いっぱいあったのになぁ……」

思わずつぶやきながら、持ってきた花を花瓶に移し替えて、備え付けのイスに座り込んだ。

そのまま、ここ最近で見慣れた亮さんの寝顔を見つめる。その顔からは何の感情も読み取れない。

そんな亮さんに、いつものように話しかける。

「早く起きてくださいね、亮さん。目が覚めたら……長い間ろくな食べ物をとってないんですから、私が病人のお腹にも優しい特製牛丼を作りますから」

『いや、牛丼な時点で病人には厳しすぎだろ！』

――と、言ってしまってから予想できた亮さんの反応を想像してしまい、少しの可笑しさと、それ以上の寂しさを覚えながら見つめる中で。

「あっ！？」

指摘の代わりだったのだろうか、亮さんの頬が……微かにヒクついた気がした。

アトリ　ｓｉｄｅ　了

？？？ｓｉｄｅ

「……流れ星？　不吉ね」

私のつぶやきに対し、昔馴染みの２人の重臣が出立の予定を延期しようかと申し立ててくる。

それに迷うことなく予定通りに出ると答え、私も部屋をあとにした。

「無知な悪党どもに奪われた貴重な遺産、何としてでも取り返すわよ！　出撃！！」

今の言葉はたしかに本心だけれど、それだけでないのも事実。

最近広まっている噂話を信じているわけではないけれど、先刻のどこに落ちたともしれぬ流れ星に妙な興味を惹かれている。

（私らしくもないわね。はっきりしないものを気にかけるなんて……）

スッキリしないものの、先ほどまでの思考を打ち消し、私は改めて出発先を見つめた。

？？？　ｓｉｄｅ　了

？？？　ｓｉｄｅ

「今は袁術の客将に甘んじているけど……乱世の兆しが見え始めた今、早く独立しないといけないわね」

私が近い将来、絶対に叶える願いを口にすると、母の代からこの国に尽くしてくれている宿将が応えてくれた。

「堅殿が死んだ後、うまうまと我らを組み入れたつもりだろうが・……いい加減奴らの下で働くのも飽きてきたしの」

「そういうこと。だけど、まだまだ私たちの力は脆弱。……何か切っ掛けがあればいいんだけど」

それほど返答を期待したわけではない私の言葉に対して彼女は口を開いた。

「切っ掛けか……そういえば策殿、こんな噂があるのを知っておるか？　なんでも、

『天より飛来する一筋の流星。其は七天を秘めし天の御遣い。その者は、この乱世を鎮めるであろう』……という、管輅と名乗る占い師が広めておるものじゃ」

「なにそれ～、胡散臭いわねぇ～」

思わずそうこぼしたけど、そんな噂が広がるくらい世が乱れているのだと認識して溜息を一つ。

その一方で別の気持ちも湧いてきた。

（天の御遣いねぇ～。本当に現れるなら……取り込むのもアリかな？）

しかし、思考時間はもう帰ろうという言葉で打ち切られ、私は街へと足を向けた。

？？？　ｓｉｄｅ　了

？？？　ｓｉｄｅ

「ほら～、二人とも早く早くぅ～！」

長姉である私の言葉に、二人の義妹が少し焦り気味に答えてくる。

「お待ちください、桃香様！　お一人で先行されるのは危険です！」

「そうなのだ、こんなお日様いっぱいのお昼に、流星が見えるなん

て、どう考えてもおかしいのだ！」

「鈴々の言う通りです。もしかすると妖の類かもしれませんし、そもそもどこに落ちたのかも分からないのです。急いでもしょうがないのでは？」

二人とも揃って私の行動を諫めてくる。この二人が守ってくれている中で、滅多なことなんて起こりそうにないんだけどなぁ。

「だって噂の天の御遣い様を乗せた流星だったかもしれないんだよ！　もし、そうなら私たちの願いを叶えるためにも、力を貸してもらいたいじゃない！」

「そのためには、あの占い師の言うことが本当だったら、という前提条件が必要なのですが」

と、はやる私の気持ちを抑えるように義妹の一人が言ってきたけど……

「……鈴々は、お姉ちゃんがどうしても行きたいと思うなら行けばいいと思うのだ！　何かあっても鈴々が絶対に守ってあげるのだ！」

と、もう一人の義妹の言葉に勢いを取り戻した。

「じゃ、改めて出発！」

後ろでまた「ああ、もうっ！」なんて声が聞こえた気がしたけど、気にしない気にしない。

私の心は、まだ見ぬ天の御遣い様のことでいっぱいだった。

???　side　了

役者は揃い、舞台は整った。
ゆえに新たな外史の扉が開かれる。

かくして再び白き錬装士の戦いが始まる。

## プロローグ（後書き）

一応次話から物語を展開していく予定です。
最後をあのような形にしたのは、まだルートを決めかねているからです。

というか、どのルートも書きたいんですけど・・・不可能ですからね。

今週中に決めれたら、と思ってます。

どなたか、それぞれのルートから選んで続きを書いてくださる方はいませんかねぇ。

# 第1話

## ハセヲ　ｓｉｄｅ

「……ここは？」

妙にスッキリとした意識。そのくせ、体には変な違和感――動かし方は知っているのに、初めて動かした体？のような――を感じる。

そんな説明しづらい状態で目を覚ました俺の目に映ったのは、地平の果てまで広がる赤茶けた荒野だった。

普通、目が覚めて全然知らない場所にいたら、非日常の始まりに取り乱すなり、心踊らすなりするだろう。

同じ状況に陥り、底なしの優しさと精力をもって走り抜けた、ち○こ太守だって初めは取り乱していたのだ。

まあ、その彼も今は新生した世界に連れ込んだ大切な女の子たちとよろしくやっているらしいが……ってなんか変な電波を受信しちまったが、そんな俺はどうかというと……落ち着いている。

この数カ月、目が覚めたら知らない場所にいたなんてことは何度もあったし、何より……俺は望んで“ここ”にいるのだから。

先ほどまで一度見たら当分忘れられそうにない――もちろん悪い意味で――人物と離れることができたという要因も大きいんだが。

「にしても、本当に……三国志の世界に来ちまったのか。まあ、明らかに日本じゃねーしな」

ここからでも、壮大な眺めなのだ。俯瞰風景をカメラに収めれば、素人でも多くの人の目を惹く作品を生み出せるだろう。

そう、日本では見られるはずのない光景。かといって、仮想現実世界（バーチャルリアリティ）にいるわけでもない――己の五感が訴えてくるがゆえに――光景。

こうなった今でも信じられないが、俺はアウラが言った通りに感覚の宿った自身（ハセヲ）の体を見まわした。

陽光を受けて輝く銀の髪。しなやかな白い軽鎧を纏い、赤い宝珠が埋め込まれたグローブをはめ、鉄甲で覆われたブーツを履いた姿。

つい昨日（？）までＭ２Ｄ越しに見ていたキャラグラフィックは……今では確かな一人の人間としての姿として俺の目に映っている。

「……妙な感じだ、リアルの自分じゃ考えられねぇほどの力が溢れてやがる」

今の俺は、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで鍛え上げたパラメータの恩恵をリアルに体感しているといっていいだろう。

ただ問題となるのは、この体を動かすのは俺自身の動作によるものだということ。

これまでのようにボタン操作で何でもできるわけではないのだから。

せっかくの力も、今の俺では持て余してしまうと考えていたほうがいいだろう。

体を慣らすまでは力に振り回されそうな自分の姿に辟易しつつ、俺はこの問題解決を当面の課題とすることにした。

「じゃあ次は……アウラに貰った腕輪の機能を確かめてみるか」

この世界に来る前に、アウラから貰った『黄昏の腕輪』。

碑文への適性を持つ者以外には見えないという濃緑色の無骨な腕輪。これには3つの機能が備わっているらしい。

そのうちの一つである、腕輪所持者の“手”となるものを呼び出して、

「……なんでこのブタが」

「ブタじゃないぶひ！　グランティぶひぃーーー！！」

現れたモノを見て、隠す気もなく嘆いた。

そいつは自身の存在に対しての主張を叫んでいたが当然スルー……そして敢えて聞かせるように重い溜息を吐いてやる。

まあ、こいつとは知らない仲じゃない。

俺がＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでマスターを務める――務めさせられることになった――ギルド『カナード』のマスコットキャラクター

である『デス☆ランディ』。

ギルドマスターを彷彿とさせる姿をもち、元々小さかったが、さらに小さく手のひらサイズにデフォルメされたこの喋るブタは「グランティぶひ！」

……もといこのブ「グランティぶひ！！」

「ああ、分かったよ！　ってか、なんで声に出してねえのに突っ込めるんだよ！？」

「お前の考えてることなんて、ぜ～んぶお見通しぶひ！」

「ほ～う、こんなナリで大口叩いて、何とかなるとでも思ってんのか！　てめぇ！！」

両手で胴体を掴み、前後に激しく揺すってやる。

脳内を激しくシェイクされたデス☆ランディは、間抜けな断末魔を遺して沈黙。

それによっていくらか溜飲を下げ、落ち着きを取り戻した俺は、出足をいきなり挫かれたかのような脱力感に見舞われた。

なぜこうなったのか……軽い現実逃避をするかのように、俺はこの世界に来ることとなった経緯を振り返り始めた。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

回想録

「実は……」

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの女神であり究極ＡＩでもあるアウラが、心から申し訳なさそうに口を開いた。

「私の友人がいる世界に……どうやらＡＩＤＡらしき反応が観測されたらしいのです」

「そんな、馬鹿なっ！　Ｔｈｅ　ＷｏｒｌｄにいたＡＩＤＡは全部オーヴァンが！」

ハセヲはアウラの言っていることを信じられなかった、いや、信じたくなかった。

ＡＩＤＡがまだ殲滅されていないだなんて……オーヴァンの覚悟は何だったのかと、八つ当たりしそうな心を押しとどめるハセヲ。

そんな彼の気持ちを察したのか、幾分かの間をとってアウラは話を続ける。

「確かにこの世界のＡＩＤＡは彼によって浄化されました。しかし、彼が浄化を行う以前に……彼が用意し、未使用だったＡＩＤＡの種が別の世界へと持ち去られていたらしいのです」

「別の世界って……他のネットゲームの世界へってことか？」

「いえ、文字通り異なる世界。貴方に分かりやすく言うなら、今から約１８００年前の古代中国。三国時代という群雄割拠の乱世です」

アウラの話を聞き始めてから驚きの連続であるハセヲ。

仕方ないだろう。ＡＩＤＡがまだ生き残っており、なおかつ居場所は１８００年前の中国だというのだから。

とにもかくも、アウラからの情報を整理し、ある程度の当てをつけたところでハセヲは口を開いた。

「その問題をお前はどうやって解決しようとしていたんだとか、そもそもその世界へどうやっていくんだとか、分からねえことは多いが……。その話を俺にしたってことは、俺がその問題を解決することができ、それがオーヴァンを助ける結果につながるってことで……いいんだな」

もはや質問というより確認といった感じで聞いてくるハセヲにアウラは答えた。

「……その通りです。その知らせを友人から聞いた時点では……別の者たちを遣わせるつもりでした。その世界への移動は友人が手助けをしてくれます。ですが、とても困難な旅になるでしょう。これまでの旅が……まだ救いがあると思えるほど。ですから無理に行「行くさ」……え？」

アウラの話を遮り、ハセヲは変に気負うことなく、自然とその言葉

を言い放った。

「ＡＩＤＡがいるなら俺は行く。ＡＩＤＡに対抗できるのは碑文使いだけ。そして何より、俺は……オーヴァンの覚悟を無駄にするわけにはいかない」

静かな、それでいて揺るがぬ意志が込められた言葉。

彼の覚悟は、アウラの話を聞く前よりもさらに確固なものになったようである。

こうなってしまえばと、アウラも強き想いの前に逡巡を捨て、ハセヲに協力することを決めたのだった。

具体的な詳細を2人は詰めていく。

「向こうの世界に渡るにあたってですが、貴方の中に眠る黄昏の鍵を解放し、精神のみを向こうに送ることになります」

「精神だけ？」

「はい、ＰＣはただの器。貴方の想い、その心の在り方にこそが重要な本質です。よって精神をＰＣに見立てて再構築することになります。精神体なので、いくら傷を負っても原則は死なない体なのですが、感覚はあるので致命傷を負ったり、精神に重い負荷をかけると心が参ってしまい、最悪消えてなくなることもあるでしょう」

「もし、向こうの世界で精神が壊れてしまったら？」

ハセヲの質問にアウラは予想通りの答えを返す。

「精神の死は肉体の死。リアルに残った貴方の肉体は……いつ目覚めるかも分からない永い眠りにつくでしょう」

そう、オーヴァンと同じ状況に陥るということだ。だが当然として、そうなるつもりはハセヲには微塵もないようだ。

アウラも迷いなく話を進める。

「向こうの世界に渡った貴方にはＡＩＤＡを倒し、ＡＩＤＡが生んだ歪みを浄化してほしいのですが……黄昏の鍵を解放すると共に、貴方の中に眠る碑文の力は弱体化してしまうでしょう」

「ちょっと、待て！　碑文の力なしで、どうやってＡＩＤＡに対抗するんだよ!?　それに歪みの浄化ってオーヴァンはもう……」

当然の疑問を投げかけ、次第に声を落としていくハセヲに、アウラは何でもないように言葉を続ける。

「ええ、ですから貴方にはこの腕輪を差し上げます。この腕輪は貴方の“手”となり“足”となり“盾”となって貴方を支えるでしょう。また、できれば使わずにすめばいいのですが……この腕輪の真の機能を使えば、弱体化した碑文を活性化させ、碑文使いとしての力を一時的に取り戻すことができます」

「そうか、それならＡＩＤＡに対抗できるか」

「ですが、この力を多用すれば精神は汚染されていき、最後に待ち受けるは身の破滅です。それを心がけておいてください」

「分かった。それで？　歪みの浄化のほうはどうするんだ？」

口ではそう言うハセヲだが、きっと彼はいざというとき躊躇いはしないのだろうと、眉をひそめながらアウラは口を開くも、そこから紡がれるのはハセヲの問いへの答えであった。

「はい、黄昏の鍵の解放をもって弱体化する碑文ですが、完全に消失するというわけではありません。それは、第８相『再誕』も同じこと。よって残った碑文の残滓を憑神器（ロストウェポン）として再構成し、それを核にして碑文の力を扱える適格者を、あちらの世界で見つけるのです」

アウラの言う解決策は、――彼女自身も分かっているのだろう――正直ハセヲには受け入れがたいものだった。

『再誕』の発動には、他の碑文を喰らった『死の恐怖』の力が必要となる。

加えて、考えてみれば思い浮かぶのは……再誕を発動してしまった者の代償はあまりにも――

「それは大丈夫です」

思いつめた雰囲気を漂わせるハセヲの考えを見抜いたのか、アウラの声が響いた。

「ネットワークがあるわけではないので、この世界でのような感染力や増殖力はないようです。これならば、真の『再誕』の発動は必要ないでしょう。碑文を喰らわせずとも、Ｃｕｂｉａと戦ったときのように、碑文の力を合わせれば事足ります。彼のように、精神を崩壊させることにはならないはずです」

その言葉で、最悪の考えは回避されそうだと安堵するハセヲ。

だが、それでも余計な苦労を背負わせる事実は変わらない――が、ここでグダグダ言っても他にどうすることもできないため、半ば折れるような形で――理解はできるが納得はしかねる――ハセヲは、最大限のフォローを行うことを前提にアウラの意見を実行すると決めた。

話を続ける2人。どうやら『再誕』の適格者はアウラの友人に心当たりがあるため、残る7人を探せばよいらしい。オーヴァンが使っていたロストウェポンは回収しており、すでに渡しているとのこと。適格者以外には見えない腕輪を足掛かりに、新たな碑文使いを見つけ、協力してもらう。

やるべきことを理解したハセヲは早速、行動に移るべくアウラにあちらの世界への移動方法を尋ねる。

「では、友人の下に送りましょう。そこであちらの世界についての話を聞いてください」

転送が開始され、足元から消えていくハセヲに、

「お行きなさい、母（モルガナ）の小さき子よ。貴方の旅に夕暮れ竜の加護があらんことを……」

アウラは、心からの祝詞を贈ったのだった。

ハセヲの強き想いならば、まだ完成していないという彼の世界を…

…彼の望む世界に変えられると信じて。

アウラに見送られ、転送が完了したハセヲの視界に飛び込んできたのは――――

「あらん♪　アウラちゃんの言ってた通り、可愛い子ねぇん♪」

暑苦しいまでの筋肉に覆われた身体を……何を考えているのかピンクのビキニパンツのみで覆っている人物。
明らかな、その筋のヒト。

瞬間、超反応で目をそらしたハセヲの耳に無視できない言葉が届いた。

「グフフ♪　そうねぇ～、まずは欧米スタイルでこの嬉しい出会いをお互いに分かち会おうじゃなぁ～い！」

その言葉に慌てて視線を戻したハセヲに飛び込んできたのは――――両手を横に広げ、目をつぶり、唇を突き出した――――まさに死の恐怖だった。

「っつウウウォォォォォオオオオ！」

かつてない本能からの恐怖にハセヲは重心を落とし、脇をしめて持ち上げた右の拳を腰の回転にあわせ、体重をのせたカウンター気味の一撃を、迫りくる恐怖へと打ち放つ。

地面が陥没したような音をたてて吹き飛ばされるオカマ。

「ぶるあぁぁぁ！　ヒ、ヒドい！　乙女の玉の肌を容赦なく殴りつけるなんてっ！」

「てめぇみたいなキ○ガイ殴っても、俺の良心は全く痛まんわ！」

「んなぁぁんですってぇぇぇぇぇ！　誰が見たら、生きとし者は死を選び、死んだ者は恐怖から蘇るほどのバケモノですってぇぇぇぇ！！」

「そこまで言ってねぇよっ！」

あまりの出来事に、どっと疲れたハセヲ。

しかし、目的のためには放置するわけにもいかず、渋々話を続けることにした。

「……んで？　アンタは一体何者なんだ？」

見れば、先ほどの渾身の一撃を受けてもアザ一つ見当たらないことに、ハセヲは恐怖を超えた諦めのようなものを感じながらも、胡散臭げな視線をオカマに向ける。

その視線を受けて、何を思ったのか腰を必要以上にくねらせながらオカマは口を開いた。

「私は都に咲いた可憐な一輪の花、踊り子の貂蝉よん。本当なら見物料をいただくところだけど、貴方なら特別にタダで私の「いいから、続きを話せ！」……もう、ご主人さまといい、貴方といい、恥ずかしがり屋さんばっかりなんだからぁん！　そうやって私のような乙女を困らせるのは、いつも「質問に答えろっ！」……せっかちな人ねぇん」

初めから脱線しっぱなしの話を正そうとするハセヲ。

その努力の甲斐あって、貂蝉からもたらされた情報は、要約すると以下のものだった。

本来の流れである正史と、多くの人の願いや想いから派生する外史という世界があること。

正史から派生した外史を管理する者がいること。

貂蝉もその一員だということ。

今からハセヲの行く外史は、ある一人の男の願いが中心となって、新生した外史であるということ。

その外史を快く思わない存在がいること。

ＡＩＤＡの種を持ち出したのも、彼らによるものらしいこと。

必要な情報を聞き終えたハセヲは最後の確認を行うことにした。

「なんでＡＩＤＡを持ち込んでまで、その世界を歪めようとしたの

か知らねぇが、俺が碑文使いを探し回るに当たって最大の障害になるのは……そいつらみたいだな。何か特殊な力を持ってたりするのか？」

「それは心配しなくていいわよん♪　前回いろいろやらかしたおかげで、その外史に干渉する権限をお互いに奪われちゃってるの。できるのは、ただ静観することだけ。だから別世界のモノに頼ってまで、ご主人様の願いが生んだ外史を歪めようとするなんて懲りない子たちねぇ……」

「なら、そいつらからの横やりは入らないわけだな。じゃあ、次だ。『再誕』の適格者に心当たりがあるらしいが……どんな奴なんだ？」

アウラが言うには、オーヴァンのようにはならないらしいが、それでもハセヲは気になっていたのだ。

「彼は、現地にいる私たちの協力者よ。条件が整い次第、私も彼と一緒に貴方と合流するわん♪」

貂蝉はそう言って口をつぐんだ。どうやらそれ以上のことを話す気はないらしく、ハセヲも仕方ないと判断し、最後の確認をとった。

「最後だ。俺がＡＩＤＡを倒して、歪みを浄化することに成功すれば……本当にオーヴァンを救えるんだな？」

「ええ、乙女の誇りにかけて誓うわ。そんなにイイ男を眠らせたままにするだなんて、この私が認められるわけなぁぁぃでしょう！　しっかりと上にかけあって協力させてやるわ！」

「そうか……サンキュ」

言っていることはアレだが、その言葉に妙な説得力を感じ、ハセヲは貂蝉には聞こえない声で礼を言うのだった。

「これを使えば外史へ行けるわ」

そういって背後に回した貂蝉の手に握られていたのは……古びた鏡だった。

（というか、今アイツは鏡をどこから取り出した!?）

貂蝉が身につけているものは見て分かるように、ピンクのビキニパンツのみ。

他に鏡をしまっておけるものなど……いや、きっと管理者の力とかを使って虚空から取り出したに違いない、と思い込むことにした。

鏡の力が溜まるまで、もう少し時間がかかるという。

そこで、ハセヲは何となく気になっていたものの、聞けてなかったことを尋ねてみた。

「そういやアウラとは友達なんだってな。どんな付き合いをしてんだ?」

何気なく聞いた質問に返ってきた答えは、とても気になるものだっ

た。

「私とアウラちゃんは、いわゆる“メル友”ってやつねぇん♪　見守るべき世界は違えど、世界を管理する者同士、いろいろ相談しあってるわん。最近はアウラちゃんも乙女としてだいぶ成長してきてるし、可能なら私の漢女道を継いでく……」

貂蟬の話を最後まで聞く前に、ハセヲは鏡から溢れた光に飲み込まれ――――Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの女神が間違った方向に進まないよう祈りながら――――緩やかな浮遊感を感じつつ、意識を手放したのだった。

ハセヲが旅立った後、貂蟬は彼に伝え忘れていたことがあるのを思い出していた。

「すっかり忘れてわ、まあ別に構わないわよねん！　ハセヲちゃんもなんだかんだいって男の子、彼女たちの魅力に抑えつけられていた獣を解き放ち・・・キャー♪　何て羨ましいぃぃぃ！！」

と、一人で勝手に盛り上がる貂蟬。

様々な女性との出会いは、ハセヲにとって避けては通れないもののようだった。

回想録　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

ふと気がつくと、太陽は南中に差しかかろうとしていた。
ここに来るまでを振り返っていた時間は、思いのほか長かったようである。

「やっと気を取り直したブヒか、相変わらずトロい奴ブヒ」

いちいち生意気なセリフを吐くデス☆ランディを疎ましく思いながらも、俺はコイツに一体何ができるのか尋ねてみた。

すると分かったのが――

・ギルドの倉庫からアイテムを出し入れすることができる
・簡易工房（アイテムの合成が可能）の使用

という、とても心強いものだった。

全てのアイテムが、この外史においてＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄと同様の効果を望めるわけではないらしいが、それでも十分なものだ。

加えて、デス☆ランディは黄昏の腕輪の管制システムのような存在でもあるらしく、コイツに何かあった場合、連動して腕輪も消失し

てしまうらしい。

つまり、ムカつくことではあるが、コイツにはしばらく力を貸してもらわなければならないわけだ。

「しょーがねぇ、力を貸してもらうぜ、デス☆ランディ？」

「しょーがないブヒね、まあ、お前のことは……鼻毛ほどには認めてやっているブヒから、馬車馬みたいに働くなら力を貸してやってもいいブヒよ」

――――プチン

どうやらまだ出発はできなさそうだと思いながら、俺は自らの衝動に従い、制裁を執行した。

ハセヲｓｉｄｅ　了

ちなみに、蛇足ではあるが……それからもう一悶着あり、出発できたのは2時間後だったそうである。

## 第1話（後書き）

次の話でようやく恋姫キャラを登場させられます。

誰にするかは決めてるんですが、その後の展開は・・・まだ未定だったり。

## 主人公設定（前書き）

とりあえず、今回はこれだけにしておきます。

ある程度、話が進んだら追加しようと思っています。

## 主人公設定

ハセヲが旅立った世界は、無印恋姫の最後で一刀くんの願いによって新生した外史という位置づけになっています。あと、本作に一刀くんは出てきません。

果たしてハセヲは外史を守りきり、オーヴァンを救えるのか！？

では、以下設定です。

ＰＣ名　ハセヲ
リアル（１７歳の高校生、本名は三崎亮）

Ｊｏｂ：錬装士（マルチウェポン）

特殊なイベント（最高２回）をクリアするごとにフォームチェンジし、最大３種類の武器を装備し使い分けることができる。

ハセヲの場合、双剣、大剣、大鎌に加えて、システムの仕様を超えたフォームチェンジ（ようするにチート）を経て、第４の姿――――Ｘｔｈフォーム――――となり、双銃を使うことができるようになった。

しかし、Ｘｔｈフォームは碑文とＰＣの完全融合というチートの産物であるため、見た目こそ、Ｘｔｈフォームではあるが、碑文の力が弱体化した現在のハセヲでは、双銃の使用は不可能である。

また、碑文の弱体化による弊害でハセヲの頬と肩に刻まれていた呪紋（エブ）（ウ）が消失している。

これにより、呪紋の力を借りて行使できる攻撃、回復補助スペルも使用不可である。

（これは、体に刺青を刻んでいると蛮族扱いされるということから、設定しました。）

ハセヲの装備

双剣　虚空ノ双牙
　通常攻撃ヒット時に、対象のＨＰを強制的に半減させることがある。

大剣　シラード
　敵への全ダメージが１．２５倍になり、敵からの魔法攻撃のダメージが半減する。

大鎌　万死ヲ刻ム影　第１相の憑神器（ロストウエポン）
　ゲームにおいては、ハセヲの頼りになる武器として大活躍したが、本作品では碑文の弱体化により、その能力を失い、殺傷と非殺傷を使い分けることができる武器となっている。当面の間、ハセヲくんにはこれを使ってもらう予定。

双銃　　現在使用不可

重鎧　　我が分身
　物理、魔法攻撃のダメージを７５％軽減する。
ダメージ置換能力は分かりづらいので、なしの方向で。

装飾品　　影法師
　ＨＰ、ＳＰ（精神力）が時間経過により、自動回復し、敵への全ダメージが１．２５倍になる。

凄まじい装備品効果ですが、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを救った英雄とはいえ、ハセヲは一般人。

三国志の英傑たちを相手にするなら、これだけの補正があっても攻撃面やフィジカル面はともかく、防御面やメンタル面において余裕はないでしょうしね。

とゆーか恋姫キャラも十分補正かかってますし。

まあ、それでも憑神（アバター）を使えば瞬殺できるんですが・・・本作では設定上ガンガン使うことはできません。

なんで、思いついたことがあれば・・・本編には関係ないオマケみたいな形で――私の余裕と皆さまからの要望があれば――いろいろ書いてみようかなと思っています。

あくまで、オマケ程度で、ですが。

話が変わって、作中に出てくるロストウェポンほか．ｈａｃｋの武器は、私の中で「リリカルなのは」に出てくるデバイスのようなものと考えています。

使用者の精神力を使うことで、武器にインストールされている必殺技（アーツ）や魔法（スペル）を、外史でも使えるようになる・・・みたいな感じでお願いします。

## 主人公設定（後書き）

次は、恋姫キャラとのファーストコンタクトですね。

なるべく早くあげるつもりなので、これからもよろしくお願いします。

## 第2話（前書き）

続きをお送りします。

この話から作者の好き勝手が始まります。それでもいいという方は、もうしばらくお付き合い下さい。

# 第2話

人と人の出会いにおいて、第一印象がもたらす影響はたいへん大きい。

印象が良ければ、打ち解けるまでの時間は短くてすむであろうが、印象が悪かった場合はそうはいかない。

両者の間にできた溝は、何らかのキッカケがない限り、埋まることはないだろう。

――では、この出会いはどう転ぶのだろうか。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

不毛な争いに見切りをつけ、ひとまず人を見つけて、最寄りの街なり世情なりを聞こうと考えた俺たちは、南へ向けて歩き出した。

太陽は、頂上を通り過ぎ出している。日が沈むまでどのくらいの余裕があるか分からないが、せめて明るいうちに飲み水の確保はしておきたかった。

（つーか、現代とちがってライフラインは……無いわけで。しかも時代は力がものをいう乱世なんだよな。これから碑文使いを探すに

しても、まずは身の振り方を決めねーと）

「ハセヲ、これからの活動方針は考えてあるブヒか？」

俺の肩に腰かけたデス☆ランディは、ちょうど考えていたことを聞いてきた。

「ああ、今考えてたとこだ。何をするにしても……一人でできることに限界はある。まずは、頼れる奴らを探さねえとな」

と、口に出したところで、ああ、変わったな、と思う。

『死の恐怖』と呼ばれていたころの俺は、自分にしかできないことだと一人で走り続けた。

確かに力は手に入れたが……一方的で芯の通っていない想いと覚悟の果てに得た力は脆くも消え去った。

だからといって、あの頃の自分を否定する気はない。

あの経験があったからこそ、俺は仲間を頼ることが“弱さ”ではないと気付けたのだから。

そのことに気づかせてくれた仲間――――リアルで自分の夢に向かって頑張っているであろう少女――――に感謝しながら、俺は話を続ける。

「今は、情報収集をしつつ、力を持ってて信頼のおけそうな味方を探すのがいいと思うんだが」

「そうブヒね、そうしたいなら、そうすればいいブヒ。ただ、一つ聞きたいことがあるブヒ」

そう前置きして、デス☆ランディは尋ねてきた。

「味方といっても、個人から集団、果ては国レベルの大きな勢力と関わる可能性もあると思うブヒよ。そして協力してもらう以上、見返りは必要ブヒ。個人レベルはともかく、どこかの集団や国に属することになった場合、その勢力のために働く必要が出てくると思うブヒが……分かってるブヒか？」

「……ああ、分かってるさ。元々こちらの事情を押しつけてるんだ。俺に出来る限りのことはするつもりだ」

デス☆ランディの問いに答えているようで、そうでない答えを俺は返す。

アイツもそれが分かっているだろうが、「ならいいブヒ」と退いてくれた。

アウラから、三国志の時代に行ってもらうと言われた時点で、予想はしていた。

今は、戦国の世。ゲームのようにリセットはできず、命が一瞬で失われる本物の戦場が、この世界には溢れているのだ。

戦場に赴いたとき、そこで命を奪いあうことが俺にできるのか。

（……分かってるさ、そんなことできるわけがない）

なら、いつも殺さずに無力化できれば……そう上手くいくだろうか。

そこまで楽観はできそうにないが、それでも俺は上手くいくことを願わずにはいられない。

乱世を生き抜き、必ずオーヴァンを救いだしてみせる……が、オーヴァンを救った後、俺は……血に汚れた俺がオーヴァンの傍にいられるだろうか。

現代社会では常識的な倫理観も、乱世においては現実（たたかい）を知らない者の発言にすぎない。

そうだとしても、俺には到底受け入れられそうにない。

（情けねぇが、答えはまだ見つかりそうにないな……）

この世界に来たことを、俺は後悔してはいない。

それでも……この葛藤だけは、俺が、この世界でずっと向き合っていかなければならない問題なのだと深く実感したのだった。

＊　＊　＊

会話が途切れ、ただ黙々と歩き続けていたところ――

「誰か近づいてくるな」

そう、こちらに向かってくる……大、中、小とメリハリのきいた3人の男の姿を発見した。

「ハセヲ！　あの3人ぐみぁあぁぁぁ！！」

と、奇声があがったのは、見られて無用の混乱になるのを避けるために、俺がデス☆ランディをポケットに突っこんだため。

ポケットの中で暴れる奴を無視しながら、俺は3人組に向かって歩き出して――気付いた。

（そういや、ここって中国なんだよな!?　やべぇ、言葉が通じねぇじゃねえか！）

と、今さら気付いた事実にアタフタしていたところで……

「よう、兄ちゃん。珍しい服着てんな」

「……」

フツーに声をかけられたため、呆然としてしまった。

「オイ！　聞こえてんのか!?」

「っああ、聞いてるさ」

（なんで、日本語で話してんだ!?　まあ、助かったんだが……）

「ちょっと聞きたいんだけどよ、ここってどっ!?」

未だ混乱しながらも、情報を集めようと話を聞こうとしたハセヲに突き出されたのは――

「いいから、あり金全部とその服を置いていきな、兄ちゃん。今の俺は機嫌がいいから命だけは見逃してやるぜ」

悪意に塗れた言葉と、包丁よりも大ぶりなナイフであった。

（チッ！？　……迂闊だった、こういう世の中だって分かってたはずだったってのに！）

とっさに後ろに下がり、いつものように武器を取り出そうとして両手を背後に回し――硬直した。

（ここはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄじゃねぇ、武器は取り出せるのか？）

武器の確認をしていなかったことを悔やんでいると、俺の一連の行動を抵抗と見てとったのか、リーダー格のヒゲ男が指示を出す。

「チビ、なるべく服を汚さないように始末しな！」

「ヘイ、アニキ！」

と、突進してくるチビが首筋を狙った横薙ぎの――あまりに遅い――斬撃を、放つ前に、俺は左足でナイフを持った拳を蹴り抜いた。

「いぎっ！」

しっかりと握ってなかったのか、ナイフは簡単にスッポ抜けていき、怯んで上体を反らしたチビの顔面に、そのまま蹴りあげていた左足の踵を打ち下ろした。

「チ、チビっ！」

それで終わり。チビと呼ばれる男は完全に伸びている。

俺もとっさの行動だったため、倒した実感があまりないんだが、やはりこの体には、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでの経験が蓄積されているようだ。

そこへヒゲ男から新たな指示がとんできた。

「い、行け、デク！　手加減はいらねぇ、バラしちまえ！」

チビがあっさり倒されたためか、ヒゲ男にはさっきまでの余裕がない。

命令されたデクと呼ばれた大男は、弱気を見せながらも俺に相対する。

大丈夫だとは思うが、チビよりも打たれ強いであろうデクを倒すには、やはり武器がほしいところだ。

そう思っていたところに、

「ハセヲ！　自分が使う武器を強くイメージするブヒ！　イメージして、銘を呼べば……答えてくれるブヒよ！」

ポケットから顔を出して喋るデス☆ランディ。

突然の声に周りを見回すデクを尻目に、俺は両手で長柄のものを構えているかのような形をとり、自己に埋没した。

呼び起こすのは、万の死を宣告する処刑鎌。

俺自身の鏡の象徴である、万象に等しく死を刻む一振りを思い描いて……その銘を呼び――

「万死ヲ刻ム影」

両手に確かな重量を感じた瞬間、それを――気を取り直してこちらにやってきたデクへと――薙ぎ払った。

「っギャフ!?」

その一閃（当たる瞬間に手首を返しての刃の腹での一撃）をもって、デクの意識を刈り取ったことを確認した俺は、意識を割いておいた残る一人へと視線を移す。

その先で俺がとらえたのは……

「ヒィー！　バケモノだぁー！」

恐怖から仲間を捨てて逃げ出すヒゲ男の姿だった。

（ったく、勝手に襲ってきて勝手なこと言いやがって）

それを見て、どうしたもんかと考え始めたところ……男の逃走先に

白い何かが立ちふさがるのが見て取れた。

ふいに現れたソレは、男をあっさりと打倒し、こちらに近づいて来る。

「必要なら手助けに入ろうかと思いましたが……いらぬ世話だったようで」

それは……赤い直刀の槍を携え、白を基調とした服をまとい、透きとおった青い髪と意志の強さを感じさせる切れ長の目をした女性だった。

そして、先ほどの男のあしらい方をみても目の前の彼女が相当の実力者であることがうかがえる。

（態度こそ、飄々としてるが……視線は俺の武器から離れてねぇ。まあ、警戒されるのは当然か）

「そんなことねぇよ、アンタのほうこそ強そうだ。自信あるんだろ？」

「さて、どうですかな。まだまだ精進中の身でして。それにしても大した得物ですな」

そう言われて俺は、万死ヲ刻ム影を改めて見回す。

身の丈を超える長柄から伸びる白刃は、これもまた身の丈を超えている。

自身の体重よりも重いはずである超重兵器――実際にかなりの質

量感を感じる――を、俺はＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄの時と同じように扱うことができていた。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄではゲームだからと深く考えなかったが、現実としてみれば、その在りようが際立つ。

ただそこにあるだけで、空気が引き締まるような――そんな威圧感を放っているようであった。

「そうだな、コイツには随分と助けられてきた。……んで、本当に聞きたいことは何だ？」

まだるっこしいのは好きじゃない。けど聞かれそうなことに見当はついていて……

「……それでは。お主は何者なのだ？　その見慣れぬ服に、どこから取り出したのかも分からぬ武器。妖術使いとでもいうのか？」

（やっぱり、それを聞くよな）

見当はついていたが、どう答えたものやらと、俺は空を仰いだ。

それでも何とかせねばと腹をくくって話を続ける。

「いや、確かに武器を取り出せるのはアンタから見たら普通じゃないかもしれねぇが……以前俺がいたとこ（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）じゃ普通だったんだよ」

「ほう。ならお主はどこから来たというのだ？」

「ここからなら……ずっと東の方向。海を越えた先にある島（ただ

し１８００年後）からだな」

「……海を越えた先から、と。そんな遠方からこの大陸に来たのは、何故なのだ？」

ふと、頭の中に仲間たちと楽しく語り合う姿が思い浮かび、俺は知らず拳を握りしめ、

「無くした日常（もの）を取り戻すためだ」

そう言いきった。

「……ふむ。稟、風。今のを聞いてどう思った？」

「嘘を言っているようには思えませんが……本当のことを話しているわけでもないですね。まだ信用はできません」

「ですが～、最後の言葉は信じてもいいかと～。怪しくはありますが、悪い人ではないみたいですねー」

いつの間にか現れた二人の女性が、俺の言動を見ての判断を論じていた。

片や身体のラインがはっきりと見て取れる服に身を包み、眼鏡をかけた、しっかりとした印象を受ける女、片やゆったりとした服に身を包み、なぜか頭上に変な人形を乗せ、話し方からも分かるおっとりとした女。

（……何とか話は聞いてもらえそうだな）

相手の反応から話くらいは聞いてもらえそうだと判断し、自身の危険性の無さを主張した。

「俺は、この腕輪を見ることができる奴を探したいだけなんだ。別にアンタらをどうこうするつもりは「腕輪とはお主の右腕のソレのことか？」……は？」

期待して話したわけでもない俺の言葉に対して、何でもないことのように返してきたのは白い服の女だった。

「星、貴女には見えるの？」

「星ちゃんには見えるんですか？　風には見えませんねぇ～」

「……二人は見えぬのか？」

出来すぎの状況に思わず俺は星と呼ばれた女性の両肩に手をかけ――

「星っていうのか、アンタ！？　アンタにはコレが見えっ！？　うおっ！！」

彼女の名を呼んだ……その瞬間に激変した彼女の雰囲気と槍の動きを視界の片隅にとらえた俺は、慌てて距離をとる。

「いきなり何しやがる！？」

間髪間に合った回避によって彼女の突きの射程外に逃れた俺は、予想外の展開に声を荒げる。

寸止めするつもりだったのか、当てるつもりだったのか……どちらにせよ、感じた風圧、速度に正直肝が冷えた。

「それはこちらの言葉だ！」

何が気に障ったか知らねぇが、怒り心頭の女は言葉を続ける。

「お主、いくら大陸の出でないとはいえ、ここまでの旅から、真名を勝手に呼んではならぬということくらい知っておるだろう！　一体どういう了見だ！」

「真名？　何のことだ？」

「この期に及んでシラをきるというのか！」

目の前の女から伝わる気配がさらに濃密なものになる。

一方で俺はといえば、急に変わった状況に加えて、これまでの戦闘で感じたことのない感覚に戸惑いを覚えていた。

（なんだ？　妙に身体は強張るし、動悸は激しくなるばかり。アイツの気迫に呑まれてるっていうのか！？）

――後にして思い返してみても、これは無理もないことだったと思う。

いくらＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて心身を鍛えられた俺であっても、本物の戦闘で感じる緊迫感、相手の気迫――しかも一流の武人のもの――を受けて感じる精神的疲労は段違いなのだから。

「セイッ！」

俺は、気を抜けば膝が折れそうになる身体を叱咤しながら、再度飛び込んできた女の一撃（さらに鋭くなった突き）を万死ヲ刻ム影の刃で受け止め、逸らそうとしたのだが……

ガギンっ！

握力まで弱っていたのか、衝撃で、大鎌を手放してしまった。

（……あ）

そこで緊張の糸が切れたのか、追撃をかけようとでも思ったのか接近していた女に向かって倒れこんでしまう。

女もまさか俺がこんな行動をとるとは思ってなかったのか、一瞬の硬直をみせ――結果として、俺が女に寄りかかるような形になってしまい、ハプニングが起きてしまった。

“チュ”

「「っ／／／／」」

交差は一瞬。

すぐに突き飛ばされるが……何故か接触した唇の感触と、自分のものではない熱さがはっきりと感じられたことと――

「おおぉ……」と妙に感情を抑えた驚愕のような声と、「っぶ！？」と何かが弾けたようなが聞こえたのをを不思議に思いながら――

（……ああ、リアルの俺じゃないとはいえ、今のはファーストキスになっちまうのか？）

と場違いな感想を抱いていた俺に向かってきたのは……

「キャアアアァァァァ！！」

初対面時の飄々とした態度はどこへやら。

顔を真っ赤にし、妙に可愛らしい悲鳴を上げながら槍を振るう女の姿が。

それを避ける気力も体力もない俺は、半ば諦めながら……一撃を受け入れ、空を飛んだ。

目が覚めた時、状況が少しでも落ち着きをみせていることを期待しながら。

しかし、そんな僅かな逃避も俺には許されないらしい。

ズシャアアア！！

「グアッ！？」

確かに意識は飛ばされたのだが、装備品の効果が効いているのと、落下した時にできた裂傷からくる痛みに、すぐ再起動を果たしたのだ。

意識があるとはいえ、一撃を受けた右腹部と左半身にできた裂傷からくる痛みで、体を動かすことはできそうになかった。

「ハセヲ！　今助けてやるブヒ！」

デス☆ランディが何か――――恐らく回復アイテム――――を使っているのを横目にしつつ、ただ体が動くようになるのを待つ俺であった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

？？？　ｓｉｄｅ

「キャアアアァァァァ！！」

常の余裕を保つことができず、とっさに渾身の一撃――――死にはしないが、重傷は確実――――を加えてしまった。

いくら武人として、世のために槍を振るおうと誓った身であるとしても、私だって女なのだ。

初めては、私が心から添い遂げたいと思った人物と経験したかったし、自身が男から見て魅力ある女である自負もある。

見ず知らずの男にくれてやるほど、安いものでは決してなかった。

（まあ、最早どうにもならんことだし、忘れるしかないか。それよりも問題は……）

ひとまず、先ほどの件について整理をつけた私は、新たに浮上するであろう問題を見据え、その原因となる人物に視線を向けた。

（……やはり、か）

彼女は、普段なら率先して助けるであろう親友の惨状を放置し、片手で口元を隠してこちらを楽しそうに見つめていた。

無理もない。

日頃、色恋話において経験の豊かさを主張する私が……まるで生娘（事実）のような声をあげたのだ。

彼女にとって、絶好のからかいネタとなったことだろう。

（さて……どう誤魔化したらよいものか）

普段は感情の起伏が少ないくせに、こういう場面では意外な行動力をみせる友人からの追及をどうやって回避するかを考えながら、私は二人の許へ向かって歩き出した。

？？？　ｓｉｄｅ　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

デス☆ランディからの治療を受けてから、体感時間で数十分後。

ようやく痛みが引いたため、体を起こして調子を確かめてみると、完治しているらしく、何の異常もないことが分かった。

俺が動けない間、デス☆ランディがある程度の事情を説明したらしく、その場の雰囲気も緊迫したものではなくなっている。

なぜか、デス☆ランディが人形を頭に乗せた女と、かなり仲良くなっているのが気になったが。

（何か通じるものがあったのかね）

そう思い、様子を見ていると――

「おうおう兄ちゃん、話に入りてえならそう言いな！　大の男が黙って見てるだけなんて情けねえ」

「……は？」

腹話術のつもりなのか、口元を舐めていた棒付きキャンディで隠しながら話しかけてくる女（ちなみに頭上の人形は宝慧というらしい）と、

「別にハセヲがヘタレなのは、今に始まったことじゃないブヒ！」

――相変わらず生意気なデス☆ランディだった。

懲りない奴に制裁のデコピンをくれてやると、俺を倒した白い服の女が話しかけてきた。

「本当に治ったのだな。正直、数年は起きられない怪我になったかもしれない一撃だったのだが」

「……俺じゃなきゃ、確実にそうなっただろうさ。酷い目にあったぜ」

「なに、治ったのなら良いではないか。それに……私のような好い女と接吻できたのだ、そう思えば安いものだろう？」

そう言いつつ、自分の唇をなぞる姿が妙に艶めかしく見え、俺は思わず納得しかけた思考を蹴飛ばして反抗した。

「ふざけんなっ！　その結果、あれだけの攻撃を受けさせられるなんて、ワリにあわねえよ！」

「それは、お主がいきなり真名を呼んだからだろうに」

「……知らずに呼んだのは悪かったけどよ。けど、その真名ってやつは、そんなに大事なものなのか？」

真名の話題になった途端、声の調子が変わった女に対して少々後ずさりしながらも、真名の重要性について教えてもらった俺は、その意味を身をもって体感したため、くれぐれも気をつけようと心に決めた。

そして、なら何と呼べばよいのか聞いたところ――――信じられない名前が飛び出してきた。

槍の使い手であった女の名は“趙雲”。

三国志の知識がない俺でも知っているビッグネーム。三国の中でもトップクラスの実力者だったはずだ。

（ただ、趙雲は男だったはずなんだが？）

本当に彼女が、あの“趙雲”なのかは分からないが、槍の使い手として、新たな碑文使いの適格者として、彼女にはぜひ力になってもらいたいと考える俺であった。

他の二人は、しっかりした子が戯志才、おっとりした子が程立というらしい。

二人の名前に聞き覚えはないが、趙雲が二人の知謀はかなりのものと言っていることから、軍師として三国志に登場する人物なのかと、当たりをつけた。

三人は、諸国を巡って見聞を広めつつ、自分が仕えるべき主君を探しているらしい。

「それにしても、貴殿があの“天の御遣い”だとは……」

自己紹介が一段落したところで、戯志才が未だに信じられないとばかりに言ってくる。

「天の御遣い？」

聞き慣れない言葉に、俺が聞き返したところで、

「管輅という占い師が最近になって広めだした予言なのです。この乱世を鎮めるという、英雄的な存在ですねー」

程立が答えてくれた。

「……俺はそんな大層な存在じゃねえぞ」

（確かにＡＩＤＡの脅威から、この世界を守るようには言われてるけどよ）

ＡＩＤＡを倒しても、それでこの乱世が鎮まるとは思えなかった。

その役目はー――いま目の前にいる三国の英傑たちによって切り拓かれる未来のはずだから。

「確かに、ハセヲの腕は中々のものだが……精神（こころ）の強さにはムラがあるようですしな」

「ハセヲ殿には、それなりに人を惹きつける器があるようですが……国を背負って立つほどのものとは到底思えませんね」

「お兄さんは、何だかんだいって自分に好意をもっている相手を無碍にせず、優しく接して自分に気があると思わせる女の敵らしいですからねー」

「……おい」

（いや、確かに自分で否定したけど、何かヘコむってか最後のアレはどういうことだ！？）

思わず、一つしかない情報源に視線を送り、慌てて視線をそらした奴に、

（お互いの立場ってやつをハッキリさせる必要があるな）

どう落とし前をつけさせるか、本気で考える俺だった。

……話がそれたが、状況的に俺が“天の御遣い”である可能性は高いらしい。

予言の中にある“七天”が、俺の中に眠る『再誕』を除く碑文なのだとしたら、碑文使いの力を集め、ＡＩＤＡの歪みからこの世界を救うことで、乱世の鎮静に大きく貢献することができるのかもしれない。

「む、噂に名高い陳留の刺史殿が来られたようだ」

趙雲の言葉で、思考を打ち切った俺が目にしたのは……地平線の向こうから“曹”の旗をひるがえし、砂煙をあげながら近づいてくる騎馬隊だった。

その圧倒的なスケールに呆然としながらも、どうするのかと尋ねたところ、

「ここから離れるのが得策だな。何か後ろ暗いことがあるわけではないが、官が絡んで面倒にならないことは少ないのでな」

との趙雲の言葉に、この場から離れようとする三人と、

「……やはり、着いてくるのだな」

「着いてくる気なのですね」

「着いて来る気みたいですねー」

「ワリィが、しばらく付きあわせてもらうぜ」

その言葉の通り、三人に着いていく気満々の俺であった。

折角、一人目の適格者を見つけたのだ。このままサヨナラするつもりは毛頭なく、彼女たちと共に動き出した。

「……やれやれ」

そのセリフは誰のものだったか。

三人は俺の方を、ある者は複雑そうに、ある者は仕方なさそうに、又ある者は興味深そうにチラリと見て――前へ向き直り、官軍をまくためにその速度を上げたのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

## 第2話（後書き）

え～結局ルートを絞り切れなかった作者です。
個人的に好きなキャラを仲間に入れるべく、こういう形にしてみました。いろいろとキャラ（特にハセヲ）が変わりつつあります。

なお、ルートは反董卓連合終了までには決めます。決めないと話が進みませんので。

次の話は3連休中には、あげたいと思います！

## 第3話（前書き）

このような作品にお付き合いいただき、ありがとうございます。

今回は、拠点風味でお送りします。

# 第3話

「クッ！」

思わず息がつまる。

ハセヲは、全霊をもって己を律しようとするも、その試みが上手くいかないことに歯噛みした。

「ハァ……ハァ……」

誰の目にも明らかなほどに呼吸は乱れ、体は小刻みに揺れている。

ハセヲは、ともすれば腰砕けになりそうな外部から来る激烈な刺激に必死で抗っていた。

「おやおや、どうしたハセヲ？　もう我慢できないのか？」

と、ハセヲを今の状況に追い込んでいる張本人――――趙雲が声をかけてきた。

「勝手に決めつけるんじゃねえ、まだこれからだ！」

「フフフ／／／　そうこなくては。私もその気にさせられて、これで終わりでは物足りないというもの」

そう返す趙雲の顔は上気しており、その声も高揚してきた気分と相まって艶がかっていた。

その頬を流れる一筋の汗。それは重力に従って趙雲の扇情的に開かれた胸元に落ちていった。

ハセヲは、まるで自分のものとは思えないほどに拍動を続ける心臓を落ちつけようと、深く息を吸い込み、吐き出す。

（いつまでも無様をさらしてられるか！）

――と、男の意地をみせるハセヲだが、趙雲の僅かな動きにも過敏に反応してしまう体はどうしようもできず……とうとう限界を迎えた。

「……チック……ショ……」

ハセヲは毒づきながらも、全くコントロールできない体はハセヲの意志を無視して屈服したのだった。

「……まあ、こんなものか」

そう言って倒れこんで動かないハセヲに近づいてくる趙雲。

その顔は満足とは言えないものの、ハセヲの頑張りを称賛しようとする気持ちはあるようで、微笑が浮かんでいる。

口を開こうとしないハセヲに変わって、趙雲が話を続ける。

「随分と耐えられる時間が延びたではないか。初めてのときなどは、

本当に一瞬で果てたというのに」

言い返したいハセヲだったが、紛れもない事実だったため耐えるしかなかった。

「しかし、達する時間が延びたからといって、私が満足できる程ではない。さらに男を磨くことだな」

ハセヲは趙雲の言葉を聞き流しながら、全身から感じる疲労の回復に努めようとして――

「なるほど、これが風の言っていたお主の手管なのだな。毎回焦らされ、気づけば、いつのまにかハセヲのことばかり気にするようになっていると「そんなわけあるかっ！」……ふふ」

無視できない言葉につっこむハセヲだった。

まったく、と声に出さずボヤキながら、未だに全身に感じる虚脱感をおしてハセヲは立ちあがる。

そして先ほどまで趙雲と繰り広げていた立ち合いを省みた。

といっても、単純に結果だけでみれば、悔しい話でしかない。

ハセヲは、趙雲から指一本触れられることなく、彼女からの気当たりだけで屈してしまったのだ。

一流の武人が放つ気迫の中で体感した時間は、普段のソレの何倍にも感じられる。

また、常に心臓を鷲掴みにされ、首筋に刃を当てられているかのような錯覚がつきまとい、体力的には問題なくとも、精神的に参ってしまうハセヲだった。

趙雲たちの旅に同行し、鍛錬を始めて五日目。

その成果は、趙雲が言っていたように、着実に伸びていた。

（それでも、３０分ほどなんだよな。それに趙雲も本気で殺す気はねぇから本気になりゃ、もっと短くなるかもしれねぇ）

ハセヲは今後、積極的に戦いに参加するつもりはないが、避けて通れるとは全く考えていなかったため、趙雲に手ほどきを受けることにしたのだ。

趙雲も最近は賊退治か自主鍛錬ばかりで手ごたえのある相手と手合わせをしたいと思っていたらしく、ハセヲの頼みをきいてくれた。

内容は、先ほどまでやっていたような相手の気に呑まれないように耐える訓練と、実戦訓練である。

主武装は“万死ヲ刻ム影”。

デス☆ランディ曰く、コイツの強力なスキルであった『ダメージ吸収効果』を失ってはいるが、相変わらずの強力な武器であることには違いないこと。

そして、ある意味、今のハセヲに最も必要な効果を“万死ヲ刻ム影”は持ち得ていたからである。

その効果とは『使用者の意志に応じて、“殺傷”と“非殺傷”を変更できる』ということだ。

“非殺傷”設定ならば、肉体にダメージはいかず、精神にダメージを負わせる（それでも一般人なら丸3日はまともに動けないほど）にとどめることができるとのこと。

ハセヲにとって、この世界で戦闘をするに当たって最大の心配事が、とりあえずの解決策を提示されたことになった。

もちろん、この条件で戦うとしても目を背けていることはあるわけだが、これ以上悩むよりは……と、ハセヲは時間を見つけては鍛錬に打ち込んでいた。

ハセヲとしては、戦場の雰囲気と自身の体の動きに慣れることを命題にしており、趙雲に打ち勝つことは二の次であるのだが、連戦全敗ではさすがに面白くない。

思考と体の動きが一致してくれば善戦できるのだろうが、それはもう少し先の話になるようだ。

ハセヲの複雑な胸中とは裏腹に、澄み切った空には雲一つなく、どこまでも広がっていた。

趙雲　ｓｉｄｅ

全く、不思議な奴だと思う。

ハセヲと出会ってから常に考え続けていることだが、私の疑問は現在進行形で増え続けている。

何もない虚空から、見たこともないほどの大鎌を取り出し、それに振り回されないだけの膂力をもつハセヲ。

しかも、その戦闘の流れは、一対多数を主眼においた、型にはまらない独自のもの。

常に足を止めず、動き回りながら得物の隙をついて襲いかかってくる姿は、獣とよんでも差支えないだろう。

さらに、緩急こそついているが、虚実のない、力に頼った愚直な一撃は、大鎌という武器の特性上、攻撃手段が限定されることもあって攻撃を読むのも楽なものだった。

間合いこそ僅かに相手の方が上なれど、速度に関しては言うに及ばず、相性もあって本来なら負けはしない相手（事実全勝中）であるのだが……

「厄介なのは、あ奴の地力の高さ、加えて時々くり出してくる必殺技（アーツ）とやらの存在だな」

そう、私の見たところ、ハセヲの地力は――――確実に今まで出会った男性の中では別格――――かなり高く、油断ならないものがある。

そして、必殺技（アーツ）という、人間離れした動きからくり出される一撃は、私をもって冷や汗をかかせるものだ。

一方で、それだけの武威を備えるハセヲの精神が、ああも実戦では持続しないこと、明らかに戦闘慣れしている動きをしているのに、身体の動かし方が何故かぎこちないなどと、不自然なことも多い。

（……ああ、そうだ。本当に不思議な奴だ）

私にとって未知の世界から来たというハセヲ。

ハセヲは私がもつ資質が、この乱れた世を救う一助になるかもしれないと言って協力を求めてきている。

私が槍を振るうのは、諸悪を討ち、弱きを助けたいという願いのためであり、ハセヲの言うことが本当ならば、協力するのもやぶさかではない。

事実、この数日間をハセヲと共にして感じたハセヲの人となりは、悪いものではなかった。

風にからかわれ、反応するたびにドツボにはまっていくも、最後は諦めたように風のいいようにされているハセヲ。

気真面目な稟にだめ出しされ、そのたびに鬱陶しく振舞うものの、最後は何だかんだで言う通りにするハセヲ。

それなりに戦える人間であるハセヲが、その気になればどうとでも出来る相手からの発言をしっかりと聞いている。

このことからも、ハセヲが私たちを一人の“個人”として対等に接してくれているのが分かる。

だが――

（頼りない面もあるが……向上心は高く、都合の悪いことから目を逸らさない気概も持っている。何としてでも取り戻したいものがあると言っていた気持ちは本物らしい。それでも……）

悪い奴ではないと思っていてもなお、協力に応えてもよいかと思うと、胸の中に妙なざわつきを感じ、踏み切れない私がいた。

（私らしくもない、何をそんなに気にしているというのか……）

――唇を奪われたことか？

――真名を勝手に呼ばれたことか？

――それとも全く別の理由によるものなのか？

ハッキリした答えは出ず、これ以上は無駄か、と思考を切り上げた私に声をかけてきたのは、私を悩ませている張本人。

私が色々と考えているというのに、ハセヲは私を前にしても、全敗を喫していることへの悔しさは滲ませているものの、それ以外は感じさせない声で再戦を希望する旨を伝えてきた。

ハセヲの態度に自分勝手ながら、憤りを覚えた私はハセヲに対して承諾の意を伝え、お互いに得物を構えて距離をとる。

（まだ、ハセヲとどのように接するかは決めかねるが……この場の対応は決まったな）

私はそう静かに決意し、いつもより苛烈に攻撃を加えていった。

趙雲　ｓｉｄｅ　了

その後は予想通り、ハセヲの断末魔が空に虚しく響き渡り、連敗記録が更新されたことはいうまでもない。

＊　＊　＊

「さあ、約束ですよ、ハセヲ殿。天の世界の道具を見せてください」

声をかけてきた郭嘉に反応し、ハセヲは顔を上げた。

日課である趙雲との鍛錬を終え、一息ついていたハセヲ。

その機嫌はいつもに比べて遥かに上機嫌であった。

それもそのはず、本日ハセヲは遂に趙雲から一本取ることに成功したのだから。

（思えば……時間的にはそう長くねえが、体感的にはとても永かったもんな）

負け続けること百と数十回。

その果てに三国志で名高い趙雲（？）と思われる彼女から勝ちをもぎ取ったのだ。嬉しくない筈がなかった。

その後、呵責ない攻撃を加えてきた趙雲に対して、防戦一方で疲労困憊のハセヲであったが、構わず立ちあがる。

彼女の後ろには、程立の姿もあった。

ちなみに、趙雲はまだ自主鍛錬を続けているようであった。

――ここで少し時を遡る。

そもそも何故こういう話になったかといえば、戯志才と程立の二人と天の世界について話し合っていたことが発端となっていた。

「天の世界では、真名の風習がないと言っていましたが、姓や名、字は無かったのですか？」

質問してくる戯志才に

「字ってやつは無いが、姓と名ならあるぜ」

そう返すハセヲ。

「では～お兄さんの場合、姓がハセ、名がヲ、とでも言うんですかー？」

「違う違う。ハセヲはハセヲだ。正確には俺にも姓と名は別にあるが……この姿なら俺の名はハセヲだ。まあ、この名こそが今の俺にとっちゃ、アンタらのいう真名ってやつに当たるんだろうな」

そう告げたハセヲが顔を上げて目にしたのは……珍しく心から驚愕している表情を露わにしている程立と、身体ごと後ろによろめき、口をパクパクさせている戯志才であった。

「何をそんなに驚いてんだ？　……ああ、ハセヲが真名ってやつになるかもってとこに反応したのか？　別に気にすんな。こっちには、そんな風習なかったんだからな」

ハセヲは二人が驚いている理由を推測し、フォローしてみる。

効果があったのか、まず程立が再起動を果たした。

「……やりますね～お兄さん。今のは完全に不意をつかれました。軍師が思考を止められたのですから、この勝負は完全に風の負けで

す。敗者は勝者に従うのみ。今が日頃の鬱憤を晴らす良い機会ですよ～。ああ、お兄さんの牙にかかる得物がまた一人増え「頼まれても、やらんわっ！」……今の発言もどうかと風は思うのですよ」

何だか好き勝手言っている程立を黙らせたところで、ハセヲは違和感を感じ取った。

常なら、程立の戯言を聞いて妄想を加速させた戯志才の鼻血が噴出（何故かそんな悪癖があるらしい）させ、場が落ち着く（？）ところなのだ。

――それが起こらなかった。

程立もハセヲと同じことを考えていたらしく、二人はほぼ同時に戯志才の方へ振り返った。

そこで見たのは、何かを悔いるような表情をした戯志才の姿。

ふと視線をあげた彼女とハセヲの視線が交錯した。

その瞬間、何かを決心したかのように戯志才はコクンと頷くと、その固く結んでいた口を開き、

「ハセヲ殿、貴殿に謝罪を。知らなかったとはいえ、貴殿が真名に値する名を呈してくれていたのに対して私は……戯志才というのは偽名なのです。私は貴殿が示してくれた心に対して何ということを……。謝っても許されることではありませんが、本当に申し訳ありません」

頭を下げ、心からの謝罪を伝えてきた。

それに対して、ハセヲは軽く「ハァ」と溜息。

いつまで経っても頭をあげようとしない戯志才をみながら、ポリポリと頭をかき――

そのまま手をおろしてワシャワシャと下げていたままの戯志才の頭を乱暴に撫でてやった。

「っな、何を！」

突然のことに困惑の声をあげる戯志才を見つめ、ハセヲは言い放つ。

「さっきも言っただろうが。俺の世界に真名なんて風習は無かったんだ。気にされてもどうしようもねえんだよ。……それに謝罪（そんなこと）よりも、もっと他に言うべきことがあるだろうが！」

そう言ってハセヲは戯志才から視線を逸らす。

（謝罪よりも、他に言うべきこと？）

「わ、私にできることなら、やれるだけのことはしますが……」

「……」

真っ先に思いついた意見はどうやら違っていたらしい。

（ハセヲ殿は私に謝ってもらいたいわけでもなく、礼を失したことへの謝礼を要求しているわけでもない。……考えてみれば、この人は即物的な対応を求めるような性格ではなかったしな。……では、

この方が望みそうなのはっ！？）

戯志才が辿り着いたのは、何てことはない単純な答え。

――しかし、共にいるのなら、大切な通過儀礼でもあること。

（……ああ、確かに。順番を間違えたな）

結論に至った戯志才は表情を改め、ハセヲに向けて正対し、言葉を紡いだ。

「我が姓は郭、名は嘉、字は奉孝。ハセヲ殿、これが父母から受け継いだ我が名です。

今後はこちらで呼んでください。そして、本当に申し訳ありませんでした」

そう言いきった郭嘉に向けて、優しげな笑みを浮かべたハセヲは、

「ああ、よろしくな、郭嘉」

待っていたとばかりに右手を差し出す。

郭嘉もそれに応え、二人はしばらくの間、握手を続けていた。

まるで、今ようやく二人が、互いを仲間だと思えるようになったのを、噛みしめているかのように。

程立　ｓｉｄｅ

目の前では稟ちゃんが晴れ晴れとした顔で、お兄さんと握手を交わしている。

それに対するお兄さんの顔も、とても優しげなもので……

（風のことを無視して、二人だけの世界をつくるなんて面白くありません。ここは、一つ、お兄さんの立ち位置というものを思い返させてあげるべきですねー）

そう思い立った風は、相変わらず自分たちだけの世界にとどまっている二人を目覚めさせるべく、言葉という名の導火線を投げ込むことにしたのです。

「お互いを認め合えたのは素晴らしいんですが～、いつまで二人だけの世界をつくっているんです？　お兄さんも普段否定してはいますが、風も滅多に見れない稟ちゃんの心からの微笑みを僅かな期間で引き出しているあたり、女性の気の惹き方は心得ているみたいですねー。稟ちゃんも満更ではなさそうですし」

「「っな／／／」」

二人は今更ながら、隣にもう一人いたことを思い出す。

「違うぞ、程立！　いい加減、ソッチ方面に俺を引きあいに出すのを止めろ！　ほら、郭嘉からも何と……か！？」

先に立ち直ったお兄さんが、慌てて否定に入りましたが、時既に遅し。

（お兄さんの照れ隠しの姿と反応で、導火線の火は点きました。後は弾けるだけですね～）

「ハセヲ殿は、自分にはそんなつもりはないと言いつつも、その手練手管によって私を焦らし、あくまで……私自身の口からハセヲ殿を求めるように仕向けようと……」

稟ちゃんという名の爆弾は、すでに秒読みを開始しており――

「妄想を止めろ、郭嘉！！　また無事でいられる保証はないんだぞ！」

「……ハセヲ殿は、言葉巧みに私を誘導し、遂には……その一線を越えっ！？」

「郭嘉っ！」

「～～～っぶぅーーーーーーーー！？」

見事、弾けたのでした。

「おい！？　しっかりしろ！　どう見ても、この出血量は致命的だろ！？」

まだ慣れてないお兄さんが慌てふためいてますが、稟ちゃんのコレはいつものこと。まあ、いつもより多かったような気がしないでもありませんが、大丈夫でしょう～。

今や、場の雰囲気は先ほどまでの穏やかさは、一切感じられないものになっています。

（風を無視して、二人だけの世界に入った罪は重いのですよ～）

結局、いつも通りの事態の収拾結果になったことに満足を覚えながら、風は二人の方へと歩いて行くのでした。

程立　ｓｉｄｅ　了

ちなみに、郭嘉の介抱が終わった後、ハセヲは何故か程立から頭を撫でるよう頼まれた。

「おい、兄ちゃん！　それを乙女の口から言わせるのは野暮ってモンだぜ！」

とは、程立の気持ちを代弁した宝慧の言葉であるが、何がズルいのか全く理解できないハセヲ。

何やら逆らってはいけない気配を感じたハセヲは、結局言われるままに、お姫様の言うことをきいてあげるのだった。

そして、時は戻り――

（結局、程立のアレは何だったんだろうな？）

ハセヲは二人との経緯を振り返り、未だに解らない程立の行動に頭を悩ませつつも、倉庫に収納してあるアイテムの中から適当な物を取り出させようと、のん気に昼寝をしていたデス☆ランディを叩き起こす。

二人は目にしたことのない道具を前に、深く知的好奇心を刺激され、ハセヲに質問の嵐を浴びせ、ハセヲも答えられる範囲で回答していった。

全てが終わって大いに疲れたハセヲだったが……一番疲れたのは、気づけば胡坐をかいていた自分の上に座って話を聞いていた程立への対応だったという。

## 第3話（後書き）

次の話で、ハセヲ君に大規模戦闘をしてもらう予定です。

次話は、私の頑張り次第ですが、速めにお送りできると思いますので、楽しみに待っていてくださるとうれしいです。

## 第４話（前書き）

すいません！！
戦闘シーンまでいけませんでした。

# 第4話

「へっへっへ……またひと暴れしてやるか」

雲に覆われた月の見えない夜空。

声をあげた一人の男がいるのは、森の中において、開けた場所だった。

黒々とした木々が風に吹かれるたびに、聴く者の心をざわつかせる音を奏でている。

「次の街は、そこそこのデカさらしいしな。それなりに期待できそうだ」

しかし、男は気にした様子もなく、考え事にふけっている。

焚き火によって晒された男の姿は、それなりに鍛えられた身体を無骨な鎧で覆い、頭に黄色い頭巾をかぶっているというもの。

「口だけ達者で、何もできねえ官の奴らに変わって、俺たちが金も食い物も有効利用してやるぜ！　やるぞ！　野郎ども！！」

「「「――――オオォォォ！！」」」

そんな男の呼びかけに応えたのは、これもまた黄色い頭巾をかぶった男たち。

その数は多い。四、五千はいるだろうか。

男たちの雄叫びを受けて、木々が一層にざわめいた。

まるで、これから起きる惨劇の幕開けを告げるように――――。

＊　＊　＊

「街が見えてきましたね」

郭嘉の言葉に、残りの三人は三者三様に安堵の表情を浮かべた。

というのも、残りの携行食料や路金が僅かとなったためである。

これまでの道中でも、立ち寄った街で日雇い労働を行い、旅の資金を調達していたハセヲたち。

そんな中、普段からは予想もつかない営業スマイルを浮かべて働く姿を見られ、からかわれるハセヲの姿があったらしいが、それはまた別の話。

とにも、物資の補給をすべく街に向かって歩いて行くハセヲたちであったが、近づくにつれ、様子がおかしいことに気付いた。

城壁付近の兵の様子が平時のソレでなく、緊急時のものであること。

街に入って見ても、街の人々は迫りくる恐怖を少しでも和らげよう

とするかの如く、身を寄せ合っているのだ。

（兵たちは全員ピリピリしてるし、街の奴らは怯えてるばかり。嫌な予感がしやがる）

明らかに何かが起ころうとしつつある雰囲気を感じ取り、情報を集めることにしたハセヲたち。

そして、適当な町人を捕まえて手に入れた情報は……最悪なものだった。

「この街に四千近い賊がおしかけようとしているだとぉ！？」

「……ああ。そして、この街の残存兵力は千だそうだ」

「おかしいですねー？　これほどの規模の街なら、最低でも二千はいそうなんですが」

と、程立が首をかしげながら疑問を口に出す。

「確かに、平時なら二千程の兵がいるらしいんだが、五日前に近くの村で千人ほどの賊が暴れてるって知らせが入ったらしくて。太守様が直々に兵を千五百ほど連れて出て行っちまったとこに、この騒ぎだ。賊たちは半日以内には、ここへやってくるらしい」

黙って話を聞いていた趙雲は俯けていた顔をあげ、郭嘉の方を見て口を開いた。

「フム、稟？　どう思う？」

「攻める機が、あまりに出来すぎています。十中八九、敵の策といっていいでしょう。常備軍の兵力の大多数を、囮を使っておびき出し、その間に本体が手薄になった目的地を襲撃。単純な手ですが、こうなった以上、効果は絶大ですね。遠征軍の帰還予定は？」

ハセヲは「やはりか……」と、おそらく同じことを考えていた趙雲がぼやくのが耳にしながら、町人が口にした答えを聞いて肩をおろす。

「早くても……二日後か」

ハセヲのつぶやきに、「実際は、囮役の賊たちの牽制が入るでしょうから、もっとかかるとみていいですねー」という程立からのダメ押しが入る。

（あと半日ほどで……ここが火の海になるかもしれないっていうのか！？）

ハセヲは、普段ならば多くの人が行きかい、商売に精を出しているであろう大通り――今はまばらにしか人はいない――を見渡し、これからも変わらず人の営みが続いていく筈だったこの場所が、無残にも壊されるだろう未来を思い浮かべ、きつく拳を握りしめた。

ハセヲたちが、陳留から北上し続けた先に辿り着いた街、“幽州啄郡啄県”。

奇しくもその場所は、別の外史においても“天の御遣い”が舞い降りた、始まりの地であった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「どうすんだよ、趙雲？」

ほんの確認のつもりで、俺は趙雲に問いかける。

俺がとる行動は決まっている、そしてコイツらならきっと……

「ああ、物資を確保するなど到底無理だな」

（何だって！？）

返ってきた返答は、俺の考えを突き放す言葉で。

「そうですね、厳しいですが、次の街まで粘るしかなさそうです。
そうと分かればすぐに出発するべきでしょう」

「そうですねー、早くしないと風たちまで巻き込まれかねませんし」

次々と続く言葉は、コイツらの掲げる信念を知っている俺にとって、
理解できないものだった。

「ちょっと待て！　お前らは、この街の状況を知っていて無視する
つもりなのか！？」

俺は、ここまでの旅の途中でも、山賊に焼き払われた村をいくつか
見てきた。

焼き払われた家屋、焼け焦げた死体、理不尽に奪われた命。

それらは、リアルにおいても俺とは関係ない場所――しかし、確かに同じ世界で――で起こっていたことでもある。

ニュースやネットで起こった事実だけ見聞きしていたことを、俺は直接目にすることになった。

正直なところ、俺には関係ない話だって、割り切ってたが、こうして目にした今となっては――何を今さらと言われようと――無視はできない、したくない。

（趙雲たちだって、このどうしようもない世を何とかしたいと思っている奴らの筈なのに！！）

「……ハセヲ、分かっているとは思うが、これから起こる戦闘は、今までの賊退治とは訳が違う。我らが参戦したとして・・・大局を動かすには足らぬだろう。であれば、我が槍を振るう場所をここで終いにするわけにはいかん」

そう語る趙雲の顔には、悔しさと――しかしそれ以上の決意が込められているように見えた。

それに郭嘉と程立も続く。

「主力軍が帰還するまで籠城して耐え凌ごうにも、この兵力差では二日持つかどうかといったところ。しかし、風の言った通り、帰還は遅れるでしょうし、さらに時間がないことから、十分な備えも期待できそうになく、とても持ち堪えられるとは思えません」

「かといって、討って出るのはあり得ませんからねー。いくら星ちゃんが一騎当千の強者で、お兄さんもそこそこ戦えるといっても、何とかできる問題ではないのですよー」

俺は、漠然と何とか助けてやれないかと考えていたが、三人は自分たちの力を読み取った上で、詳細を考えていた。

（……ああ、やっぱりコイツらは英傑って存在なんだな）

俺は、こんな状況じゃなきゃ素直に称賛できた想いを飲み込み、それでも、と言い返す。

「確かにそうかもしれねぇ。でもな、何もしないまま諦めるっていうのは納得いかねぇ！
数が足りねえってんなら……街の奴らに協力してもらえばいい。時間が足りねえってんなら……俺がつくってやる！だからっ「いい加減にしろっ！」……ガッ！？」

俺の話を遮り、趙雲は手にしていた槍を一閃。

完全に不意を突かれた俺は為すすべなく、地に倒れ伏した。

「現実（たたかい）を知らぬ者が、その場の感情だけで理想を語るな。力を持つ者は、その言葉にも責任を持たなくてはならん。その場限りの言葉で、街の者に希望を与えても……叶えられなければ、より深い絶望を与えることとなる」

倒れた俺に槍を突き付け、鋭い視線を向ける趙雲。

俺も呑まれないよう、必死で見返しながら、続きを聞く。

「それでも、この街を救うと言うのか？　……ハセヲ、この街を救うために、命を懸ける覚悟があるのか？」

――覚悟はあるか、と尋ねてくる趙雲。

本来なら、“ある”と即答するべき場面かもしれないが――俺は、趙雲の言葉の意味を改めて考えようと、顔を伏せた。

（……自分でも何でこんなに拘るようになったのかは分からねえ。ただ、確かなのは、目を逸らして良かったことなんか、一つも無かったってことだ）

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを駆け抜けた時に味わった、悲しい現実。

（でも、何があったって、俺は……俺たちは！　俺たちの想いを叶えるために戦ってきた！）

しかし、止まり続けることはなく……たとえ、歩くような速さであっても進み続けた日々。

（だから、今回も同じだ。俺は、俺の想いを叶えるために……関わってしまった奴らを切り捨てるわけには、いかねえんだ！）

――どれだけの間、思考に没頭していたのか。

俺が顔をあげると、趙雲は表情を変えることなく、槍を突き付けたままでいた。

チラリと横目に見ると、郭嘉と程立も俺の返事を待っているようだ。

「俺は……」

――――そして俺は、本物の戦場に身を投じることになったのだ。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

趙雲　ｓｉｄｅ

「良かったのですか？」

稟が尋ねてくるのは、先ほどしたハセヲとの約束。

私としても、中々の無理難題を言い渡したものだが……何故だろう、不思議と根拠は無いが、ハセヲならば、やり遂げてみせるのではないかと思ったのだ。

「まあ、受け入れたのはハセヲの意志だ。あ奴が私の求めに応えようとするならば、私もそれに応じるまでよ」

――――そう思うに至った、ハセヲの言葉を思い出す。

「俺は、俺が関わった全てに――――関わり抜くと決めた。……だから俺は、この街を見捨てるわけにはいかない」

そう、静かにハセヲが戦いに身を投じる、と言い決ったおり、私も参戦することを決意したのだ。

突然意見をひるがえした私に面喰っていたハセヲに突き付けたのは、3つの条件。

一つ、敵を最低でも、千は行動不能にすること。

一つ、戦闘に関わって起きたことの責任は、きちんととること。

一つ、どんなに無様を晒してでも、生き残ること。

しばし、呆然としていたハセヲだが、条件と戦闘予定地を聞き終えるなり微笑を浮かべ、通り過ぎざまに「任せろ」と言って、出て行った。

（……何を勘違いしたのかは知らぬが、妙に嬉しそうな顔をしよって！　最後のアレは……心配というのもあるが、それ以上に、ここで死ぬには惜しい奴と思っているだけ――――人は、それを心配するというのに――――というに！）

とにも、こちらを信用して何も聞かずに出て行ったハセヲに報いるためにも迅速に行動しなくてはならない。

（とにかく、やるべきことはたくさんあるが、まずは……）

「お兄さんを天の御遣いとして祀り上げ、心が折れかけている街の

人々を鼓舞することですかねー」

「そうね、戦いの指導者として分かりやすい指標になってもらわないと。けど、風？　肝心のハセヲ殿がもう出払っていますよ？　街の者に、どう説明するつもりなのですか？」

「……ぐぅ」

「寝るなっ！」

「……おぉ！？　どうしようもない現実を前に、ついつい逃避を……。それで、星ちゃん？　どうするつもりだったんですか～？」

私の心を呼んだかのごとく、言葉を続ける二人。

「稟？　風？　今回のことは、私の勝手であって、お前たちまで付き合うことは……」

「星、貴女がやる気になって、ハセヲ殿にあれほどの覚悟があるならば、私も応えたいと思ったのです」

「それに、お兄さんが条件を守ってくれるのならば、勝算は十分にありますからね～。まあ、普通なら無理な条件ですがー、風の人を見る目は確かなつもりですし～」

私の言葉を遮り、協力を申し出てくれる二人。

（これならば、ハセヲが条件を達成すれば、勝算はかなりのモノになる。後は、私の振舞い次第か）

そう結論した私は、風が最後に質問した疑問に答えることとした。

「街の者には……コレを見せればよかろう」

見せた瞬間、息を呑む二人を見て、これならば上手くいくと私は確信するのだった。

趙雲　ｓｉｄｅ　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

景色が高速で流れていく。

この時代における移動速度の基準を大幅に上回る速さをもって、俺は荒野を進んでいた。

蒸気バイク『狗王』。

俺の髪と同じ色を基調とした流線型のカウルに、車体後部に取り付けられたマフラーらしき扇状の物体、スロットルを開け、ギアに繋げば一気に最高速まで加速するエンジン。

そして最も特徴的な、一輪しか付いていない動輪。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて、共にエリアを駆け巡った俺の愛車であるマシンは、徹底的にチューンした性能をそのままに、見事再現されていた。

予想通り、腕輪の効果で“狗王”を呼び出す事が出来たため、趙雲に指定されたポイントまで移動した俺は、賊がやって来るだろう方角に目を向けようとしたんだが……唐突に昔のことを思い出し、空を仰ぐ。

（そういや規模こそ違うが、似たようなことがあったっけな）

俺を疎んじていたＰＫ百人が、徒党を組んで襲撃してきたものの、タビ―たちの助けもあって撃退に成功したのだ。

（あん時は百人だったが、今度はその四十倍。全部を倒す必要はねえが……厳しい戦いなのは事実。だが、やってやるさ）

そんな俺の様子を見て……

「ハセヲ、ここまで来て何をビビってるブヒ！　さすがに今回は大変そうブヒから、おいらもサポートしてやるし、何より腕輪の力も受けられるブヒ！　そんなだと、こっちの気まで沈んでしまいそうブヒから、シャッキリするブヒ！」

と、珍しくフォローするつもりなのか、そんなことを言ってくるデス☆ランディ。

（……やれやれ、コイツにまで心配されるような顔をしてたのか、俺？）

しかし、イイ感じに肩の力が抜けたのも事実で、「頼りにしてるぜ」と返してから、再び、敵が来るであろう方角を見据えること――――しばらく。

その先に砂塵が舞い上がるのを見てとった俺は“狗王”に跨り、ニュートラルギアのままアクセルグリップを絞り、スロットルを開け、吹きあがりを確かめて……心強いエンジン音を聞きながら、開戦の時を待つのだった。

## 第４話（後書き）

話が思いのほか長くなってしまったので、ここで区切らせてもらいました。

戦闘描写をもっと練りたいというのもありますが・・・時間かけてもほとんど変わらない気も（汗）

次話は週末までにはお送りできるよう頑張ります。また、何かご指摘があればお願いします。

# 第5話（前書き）

すいません、週末までにとか言って、結局遅くなってしまいました！

# 第5話

太陽は中天を通り過ぎ、若干西に傾き始めた頃――。

「……？　……何だ？」

黄色い頭巾をかぶった、四千もの集団の先頭を進んでいた者が、自分たちに接近してくるモノに気付き、疑問の声をあげた。

ほどなく、その報告は指揮官の男の耳に届く。

間もなく目的地に到着し、衝動の赴くままに剣を振るおうと気を良くしていた男の、水をさすかの如く現れた『ナニカ』。

最初こそ、自棄になった官軍が迎え討ちにでも来たのかと思ったが、砂塵の規模からそれはないと考えられた。

そもそも相手は尋常ではない速度で、こちらに近づいてきているらしい。

それでは、何も知らずに近づいてくる旅人かとも思われたが……明らかに、こちらを視認できる距離になったにも関わらず接近してきていることから、自分たちに何らかの目的をもって近づいてきている、と推察された。

「……にしても、何なんだ、この音は？」

……ウウブウウォォーーーーン！

聞いたこともない重低音に、妙な不安を感じながら、一向に速度を落とすことなく、接近してくる妙な塊?に乗った『ナニカ』が、ようやく自分たちを害そうとしている存在だと認識した時、すでに戦いの趨勢は決したといっていいだろう。

耳を塞ぎたくなるような重低音をバラ撒きつつ、高速で走り回る塊は、自分や仲間たちを未知への恐怖へと誘い、冷静な判断力を奪っていく。

慌てて弓を使うよう指示を出すが、狙いを定めようにも動きが速すぎるため、矢は目標を捕えることはできず、虚しく大地を穿つばかり。

為すすべなく賊軍全体に動揺が伝播しきったところで、妙な塊――――蒸気バイク『狗王』は、ひときわ激しい排気音を――――開戦を告げる銅鑼の音の代わりだと言わんばかりに、響かせて止まる。

それから降り立った『ナニカ』は、見たこともない姿をした、一人の男。

(何だってんだ!?　だが……あの妙な乗り物は消えちまったし、相手は一人。どうってことはねえ!)

妙な姿の男――――ハセヲが現れ、『狗王』が空間に溶けていくかのように消失していったことで、仲間たちの動揺は落ち着きを見せるかと思われたが……

「万死ヲ刻ム影」

周囲の喧騒の隙をついたのか、不思議と耳に届いた声と共に現れた

“大鎌”と“二人の男”によって、再度混乱に拍車をかけることとなる。

（あの武器やアイツらはどこから現れた!?　訳が分からねえが…それでもたった三人で四千に敵うと思ってんのか!?）

未だ混乱状態にあっても、「邪魔する者は蹴散らせ」という指示に反応した手下どもが――――まるで生気を感じさせない“二人の男”と、とりわけ異様な圧力を感じさせるような“大鎌”を見て委縮しつつも――――三人に襲いかかり、戦闘は始まった。

「オラアアアアアアアア!!!」

超重量を誇る大鎌の横薙ぎの一閃が、ハセヲの前方にいた数人の男たちを、まとめて吹き飛ばす。

一瞬で視界から消え去った相手を意識から外し、前方の空いた空間を埋めようと押しかけて来る新手に、ハセヲは返す刃を叩きこむ。

「――――邪魔すんな!」

巨大な白刃が通過した後に立っていられる者はいなかった。

斬られた者は、その場で糸が切れた操り人形の如く崩れ落ちるか、その場から吹き飛ばされ、身動き一つしなくなるか、のどちらかである。

そして――――

「吹っ飛びやがれ！」

ズシャアアア！

――――小さくない爆音を立てて、三度目の斬撃が衝撃波を伴って、全方位に放たれる。

ハセヲが放った円を描くような一撃。そこに込められた途轍もない力に、周囲にあった空気が弾き出されたのだ。

渾身の一撃を放ち終え、周囲の敵を一掃したことを見届けたハセヲは、さらに前へと突き進む。

だん、だんっと強く地面を蹴り、今の光景を見たことで呆然としていた相手を射程内に捉え、断罪の一撃を見舞っていく。

（っ！？　……何て奴だ！　こちら目がけて、どんどん喰い込んできやがるのに……潰れねぇ！）

本来ならば、突出した敵を十分な数の友軍で包囲すれば、自ずと敵は力尽き、殲滅されるものであるが……

「天葬蓮華（てんそうれんげ）！」

ドシャアアァァァ！

ハセヲが前方にいた敵を切り上げ、空中で大鎌を一回転させる。

凄まじいまでの範囲攻撃は、数十人単位で敵を薙ぎ払った。

このように、“量”をもって押し潰そうとしてくる相手を、圧倒的な“質”をもって打ち破るハセヲ。

――しかし、如何にハセヲであっても、絶対的な数の差を覆すには、現時点では至らない。

その足りない力を補っているのが……

「コオオォォォオオ……」

「グウゥゥゥウウゥゥ……」

”フィアナの末裔”

R；1の時代に生まれた伝説的PCとして名高い“蒼天のバルムンク”、“蒼海のオルカ”の姿を、女神アウラが再現し、生み出した存在だった。

かたや、かつての持ち主の高潔さを象徴するようであった白き両翼こそ失っているものの、流れる水の如く、停滞することなく敵を斬り伏せる騎士。

かたや、露わになっている上半身を筋肉の鎧で覆っており、敵の攻撃を受け止めては押し返す姿は、人の手にはおえない泰然とたゆたう海を彷彿とさせる勇士。

まるで幽鬼のような言動をとりながらも、それでいて手に持つ剣からくり出される一撃は、確実にハセヲの死角から押し寄せてくる敵

の意識を刈り取っていく。

ハセヲは、自分の死角から迫る敵を――――かつて戦ったこともあるがゆえに、申し分ない実力を持っている二人が、確実に相手取ってくれると信頼しているからこそ、前へと進むことができていた。

ハセヲの射程内に入らず、遠すぎずの距離をとって、三人はハセヲを頂点とする三角の形をとって突き進んでいく。

「クソ、こんな化け物の相手をしてられっか！　俺たちの目的は、こいつ等なんかじゃねえんだよっ！　前線は足止めに徹し、後方の部隊は奴らを迂回して街へ向かうぞ！」

短時間で少なくない被害が出ている報告を受け取ったことで、わざわざ真面目に相手をする必要もないと判断し、手下たちに三人組の足止めをさせ、後方の部隊を迂回させつつ、目前に迫った街へ向かわせようと決めた黄巾たちの指揮官。

交戦中の区域を右まわりに進みながら、戦線を離れようとした部隊の者たちの耳に……『ある音』が響いた。

ポオォォォーーーン

心の中にストンと落ちるように響いた音。
その音と共に現れた、握り拳程度の蒼い炎。

炎は瞬間的に大きく燃え上がり、中から新たな“異形”を呼び寄せようとしている。

（今度は何なんだよっ！？）

訳が分からないことの連続で、とっくに思考回路はマヒしている指揮官であったが……“ソレ”を目の当たりにした瞬間――真実、思考は停止した。

「アアァァアアアァァ……」

“ソレ”は、ツギハギだらけのくすんだ赤い軽鎧を纏い、禍々しいまでの刺々しさを感じさせる、三つ又の双剣を逆手に構えた男。

生気は感じられないが、こちらを見据える蒼い瞳は黄巾たちを捉えて離れない。

彼こそ、女神アウラが最も信頼したＰＣ――勇者カイトを模して造られた存在、“蒼炎のカイト”。

バルムンクとオルカを含めて“三蒼騎士”と呼ばれる三人は――かつてハセヲと戦った、因縁浅からぬ三人は――ハセヲの“盾”となり、主となった存在が進む道を切り拓くための“刃”となったのだ。

「何だっていうんだよおおお！？」

指揮官は、カイトが自分たちに向かって来るのを見ても、逃げようと考えることもできず――

ただ身を守ろうとする本能から武器を構え、行き場のなくなった感情を吐き出すのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

敵軍の中央辺りまで押し進む間に、強敵こそいないものの、必死の抵抗を受けた俺は――攻撃しようとする前に叩き伏せるか、本能的にかわしながら、足だけは止めないようにしてきた。

立ち止り続ければ――Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで数多の戦場を駆け抜けた俺だが、仮初めとはいえ、精神が宿った肉体が訴える心的疲労（ジレンマ）に屈してしまいかねなかったからだ。

そうなれば、俺が“関わる”と決めた奴らを救うことはできない。

（大切な人を失って苦しむ思いをする奴を見るのはゴメンだ！　だから、その原因をつくるコイツらは、何としてもブッ倒す！　……あれこれ考えるのは後でいい！）

俺は戦闘前に比べると少し重くなったように感じる“万死ヲ刻ム影”を強く握りなおし――

「ハッ！」

歪みそうだった視界に捉えた、眼前に迫った敵を下から斬り上げ、瞬間浮いた身体を落下する前に――

「せいっ！」

斬り上げたことで前に突き出す形になった長柄を叩きつけ、吹き飛

ばすことで、俺に向かってきた別の敵の動きを牽制し――――

「消えろっ！」

シャアアーーーーーン

その隙に、構えなおした“万死ヲ刻ム影”を薙ぎ払った。

とても大鎌で十数人を斬り払った音に聞こえないことと、凄まじいまでの切れ味を心強く思いながら、ざっと周囲を見回す。

三蒼騎士は俺が命じた言いつけを守り、命を奪うことはせず、自分の役割を確実にこなしている。

――――特にカイトの奮戦ぶりは、見る者に強烈なトラウマを残すこと確実、と思えるほどの勢いだ。

（……複雑だが、味方になってくれて、これほど頼もしい奴もいねえな。こいつらの気力も限界みてえだし、そろそろ大詰めか）

元々、普通では考えられない事態の連続で動揺していたことに加え、かなりの数を倒したこともあって、黄巾たちの心理状態は、破裂寸前の風船のようなものとなっている。

（あと一押しで、敵は総崩れになるな。ここが踏ん張りどころ「ジャアーン、ジャアーン」……何の音だ？）

状況を整理しつつも動いていた俺の足を止めたのは、大きな銅鑼の音。

俺から見て左の方向、小高い丘になっている場所を見た俺や黄巾たちが捉えたものは――――

「見よ！　我が主、“天の御遣い”の威光と力をもってすれば、何千の賊軍であろうと敵ではない！　我らには“天”の加護がついている！」

街の奴らと兵の混成部隊らしき集団の先頭に立ち、“輝く”槍を掲げて口上を述べる超雲と、そのすぐ後ろに控える郭嘉と程立の姿。

「今より“天”から授かりし我が槍が、卑劣な賊軍を斬り伏せよう！　お前たちは、言い渡した通り、二人一組で敵と当たれ！」

「……本当だ！　賊どもがあんなに倒されてるぞ！」

「御遣い様の力は本物だ！　勝てる！　俺たちは勝てるぞ！！」

超雲の言葉に感化された者たちの声を聞きつつ、槍を敵へと向けた超雲が最後の言葉を放つ。

「そうだ！　慢心なくば我らに敗北はない！　総員、突撃！！　我が槍に続けぇぇ！！！」

「オオオオォォォォオオオオっ！！！」

その号令の直後、力強い雄叫びと共に超雲率いる混成軍は、黄巾たちに横撃をしかける。

「決めていた相方と離れず、自分の役割に専念してください！　敵はもはや崩壊寸前、無理に攻める必要はありません！」

「逃げる敵を追っては駄目ですよー。自棄になって、手痛い反撃を受けるかもしれないので、この戦域から離れないようにー」

趙雲が槍を振るうたびに人が飛び、郭嘉と程立の適切な指示によって、黄巾たちは動きを封殺されていく。

（……ここまで、だな）

完全に戦意を喪失した黄巾たちが、蜘蛛の子を散らしたように逃げていくのを見届けた俺は、三人と合流するべく、進路上の黄巾たちを倒していくのだった。

「「「天の御遣い様、万歳！」」」

うって変わって、多くの人の歓喜の声で彩られ、活気を取り戻した啄県の街。

帰り際に“星”から簡単に説明を聞いていた俺だが、予想以上の反応に頭を抱えたくなってしまった。というか抱えた。

（そりゃあ、戦闘の結果に生じた責任は負えって言われてたけどよ。こういう意味だったってわけか……）

趙雲が街の奴らに何を吹き込んだかというと――

この乱れた世を救わんと、天の御遣いが降臨した。その力は、千の敵を容易く薙ぎ払うほどなんだとか。

平時では相手にされないような話を街の奴らに吹聴し、その証拠として俺が以前に譲り渡したロストウェポンを“天”の武器だと見せつけ協力を申し出たらしい。

実際、見たこともない武器がいきなり現れたのだから驚くのも無理はない。さらに開眼していなくても十分強力な武器ではあることだし。

結果、藁にもすがりたい思いであった街の奴らを、見事扇動した星は、そいつらを引き連れて太守の館へ。

そこで留守を預かっていた責任者を、“稟”と“風”の交渉（聞いた限りじゃ、むしろ脅迫）と星の実力をもって協力させることに成功したのだとか。

あとは、街に最低限の守備兵を残し、義勇兵を募って俺のもとへ駆けつけたらしい。

大体の流れを聞いた俺が頭を抱えていたところ、立ち直るための時間もくれずに、三人からの質問がとんできた。

風からは狗王について。
星からは三蒼騎士について。
稟からはロストウェポンについて。

答えられる限りの説明をしているうちに、すっかりと日が暮れてし

まったものの、無事に啄県に帰りついた俺たちに掛けられたのが、「「「天の御遣い様、万歳！」」」……この声だったわけだ。

ひとまず太守の館に向かった俺たちは、留守を預かる責任者から、太守がもどるまで滞在してほしいと頼まれ、元々この街で物資を補給したかったこともあって、その頼みを了承し、賓客扱いを受けることになった。

用意してもらった客室に通され、ようやく一人になれたことで、俺は大きく溜息を吐く。

デス☆ランディ曰く、星は美味い酒とメンマを提供してもらい、稟と風は館の書庫を自由に使用する許可をもらったらしいが・・・何か思うことでもあるのか、手放しで喜んでいるようには見えなかったらしい。

（俺は気付けなかったな。いや、気付こうともしなかった、か……）

帰りの道中のおいて、「仮にも私の主ということになったのだから、真名を預けんわけにもいくまい」と、どこかスッキリとした趙雲から真名を許され、「ならば私も」と、どこかなし崩し的ではあるが、郭嘉と程立からも真名を許されたのは、とても嬉しかったのであるが……

「……情けねえが、自分のことで手いっぱいか」

そう、口ではああ言ってはいるが、信頼の証として最大級の真名を許してくれた三人の気持ちに報いるどころか、自分のことしか考えられていないのだ。

そうまでして考えるのは、戦場で考えないようにしていたこと。

――俺が直接■した数はゼロだったかもしれないが、間接的にはどうだろう。

万死ヲ刻ム影で精神を喰われ、身動きできなかったために、流れ矢に当たって死んでいった者もいたはずである。

それに加え、この時代で捕まった者がどうなるのか……悪事に進んで手を染めた者の末路が何であるかなど決まっている。

（そうだ、何であれ……俺がアイツらの命を奪うキッカケになったことは事実。それだけのことをしようとしたんだから、何があっても文句を言われる筋合いはねえが……“俺が望むこと”のために、他の誰かを■したっていう事実は……黄巾の奴らと変わらねえのかもな）

本物の戦場で人の生死に触れ、ナーバスになっていることを自覚しながら……俺は、それでも無視していい問題ではないことと、再び活路の見出せそうにない思考に沈もうとしたところで……来室を告げる声が聞こえたため、顔をあげた。

正直、誰かと話す気分ではなかったものの、こんな時間に訪れるからには大切な話だろうと思った俺は、見知った彼女を部屋に招き入れたのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

## 第5話（後書き）

葛藤の描写をしようとしたら・・・どんどんグダグダになっていくんです（泣）
本当に小説って難しいですね。

え～次回は、星たちのハセヲへの想いを中心としたお話にしようと思ってます。

ちなみに、星に渡したロストウェポンは、誰のものか分かったでしょうか？

## 第6話（前書き）

キャラの話の配分がおかしいのは、作者の実力が足りないせいです。
三人とも大好きなんですけどね（泣）

今回は、読者の皆様にお願いしたいことがありますので、後書きにも目を通して頂けたら、と思います。

# 第6話

夜も大分ふけたであろう時間にあっても、ここ“啄県”の街の人々は、興奮のただ中にいる。

人々は、ひたすらに身の回りの財産、家族、大切な人を失わずにすんだことを喜んでいた。

半日前まで絶望の淵にあった人々は、今ここにある“当たり前の日常”がどれだけ尊いものか改めて実感し、祝勝の宴にひたっている。

――まるで、本来起こりえるはずだった悪夢に怯えていた記憶を、掻き消したいかのように。

しかし、街をあげての祝勝会の場に、この奇跡をもたらした立役者の姿はない。

“天の御遣い”

管輅が広げている噂の人物であり、事実として別世界から訪れた少年――ハセヲの姿は街ではなく、太守の館の庭にある東屋にあった。

口を開くことなく、ただ目前の何かを見つめるようなハセヲの視線の先――

若干雲がかかっているために淡くなった月光が照らし出したのは、対面に座った人形を頭に乗せた少女――風であった。

申し訳程度に聞こえる街の喧騒を耳にしつつ、二人は向かい合ったまま口を開こうとしない。

お互いに話し出すキッカケをつかめないのか、妙な沈黙が続いていたところ……、

「……グゥ」

「寝てんじゃねえ！」

――唐突に聞こえた寝息に思わず反応してしまったハセヲは、結局ペースを握られっぱなしなことに気付き、深く溜息をつくのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

――喜びを噛みしめている街の奴らから逃れるように用意された部屋にいた俺は、訪ねてきた風に半ば強引に連れ出され、庭園内にあった東屋までやって来ていた。

途中で人に会うことはなく、東屋付近にも人の気配はない。

「話があるのですよー」と、いつもの口調ではあったが、日頃眠そうにトロンとした半眼の瞳に何らかの力強さが宿っているような気がして、ここまで来たわけだが……

「……グゥ」

――だというのに、何も喋ろうとせず沈黙を続ける風が放った第一声が……これである。

「寝てんじゃねえ！」

まだかまだかと思っていたところだったため、この風の反応に対して、自分でも予想以上に声が出てしまった。

「おおっ！？」

そのせいか風の表情や声も、いつものに比べて本当に驚いたかのような反応の大きいものだった。

それを見て俺は、風に聞かせるように「……ハア」と深く溜息をついてやる。

（相変わらず調子を崩されっぱなしだな。これも軍師の駆け引きの一種ってわけか？）

知り合ってから、ひと月近く。

今もこれからも考えが読めそうにない少女のことを考えていると、知ってか知らずか、風は“ニヤリ”と擬音が聞こえてくるかのような笑みを浮かべてから口を開いた。

「いえいえ、風としたことが変に気構えてしまったようで……。おかげで妙になった雰囲気を和ませようと一芝居打っただけですよ～」

そう言ってくるが、あの笑みを見た後では素直に信じられそうになく、加えて……

「いや、あれは方法が悪いだろ」

至極当然だと思える俺の返事に、風はショックを受けたように（表情に変化はない）後ずさり、上目づかいに拗ねたような声をあげる。

「ひどいですよー、お兄さん。お兄さんの性格なら、街でバカ騒ぎすることはないにしても難しい顔をして部屋に閉じこもりはしないでしょう。星ちゃんも稟ちゃんも気にかけていたので、こうして風が代表として何かに悩んでいるお兄さんの力になれれば、と思って来たのですよー」

「……」

奇妙な言動に振り回され気味だが、風はよく人を見ている。

星や稟もしっかりしているように見えるが、何気に一番自己管理をうまくこなしているのは意外なことに風だった。

話をするたびに超展開をみせる会話の所々で、風は何気ない口ぶりでこちらを慮るような発言をする。

「だというのに、風の意を汲んでくれずに大声をあげるなんて……ビックリしたじゃないですか」

――心持ちうつむけて表情が読めない風から零れる声は、悲しいものに聞こえて。

（……俺が自分のことでいっぱいだった時に、風たちは俺を気にかけてくれてたのか？）

デス☆ランディが話していたこと――――三人が何かを気にかけているようだった――――が俺に関してのことなら、気を遣わせてしまったことになる。

そう思うと、むずがゆいものがあるが――――意地が悪くとも仲間想いの少女に礼をしないといけないと思い、俺は重たい口を開いた。

「……その、よ。悪かった……な、風」

「本当ですよ、お兄さん。今までにない雰囲気に、思わず夢の中に逃げ込んでしまったではないですか」

「……は？」

――――今コイツは何て言った？

「緊急事態でもないのに、寝ている人を大声で起こすなんて非常識だと思うのですよー」

そう言いながら頭をあげた風の顔には……“ニヤニヤ”とした笑顔が浮かんでいて。

「でも優しい風は、お兄さんの精いっぱいの気持ちがこもった言葉が聞けて満足しましたから、許してあげましょー♪」

気分が高揚しているのか、その声には分かりやすい“喜”の感情が

こもっているようで。

――と、ここまでの風の様子から、どこからかまた（最初からだったとは思いたくない）からかわれていたのだという結果に辿り着いてしまった俺は、

「……かえせ」

「何ですか？　その両手は？」

――両手を広げるように構える。

瞬間、何をされるのか予想できたのか後ずさる風。
しかし、当然としてそうさせるつもりはなかった。

（逃がさねえ、報いは受けてもらうぜ）

「俺のすり減った気持ちを、かえしやがれえええぇぇーーー！」

「～～～っつ！？」

声と同時に手を伸ばして目標を捕らえた俺は、十数秒間思う存分に捕らえた得物を、縦横無尽に振り回してやったのだった。

「……乙女に対して、この仕打ちはあんまりだと風は思うのですよー」

両の頬を俺によって（物理的に）赤くさせられた風が、不満をこぼしている。

「自業自得だろ」

そう返す俺は、微塵も悪いとは思っていない。

それでも赤くさせた頬を見るのは忍びなく、俺は風から視線を逸らし、腕を組んで雲がかかっておぼろげな光を放つ月を見やる。

空が澄んでいるためか、薄い雲がかかっていてなお、東京の空で見たそれより明るく思える月に……俺は失った日常（せかい）を幻視した。

（今はまだ、ハッキリと見えねえが……俺は必ず“全て”を取り戻してみせる！　そのためには……）

――そう、たとえこの先、また誰かを■すことになろうと、止まるわけには「誰かを殺してしまうことが、恐ろしいですか？」

「なっ！？」

考えていたことのため、知らず右手を月に向かって伸ばし、顔を強張らせていた俺の心を風の言葉に打ち抜かれた気がした。

……座っていて助かったと思う。でなければ、無様に尻もちをついていたかもしれない。

心臓は全力で走り抜いた後のように激しく鼓動し、両の手にはじんわりと汗が滲む。

「少し元気を取り戻したかと思えば……お兄さんの心の闇は随分深刻みたいですねー」

どのくらい自失していたのか、半開きになっていた口の中は渇ききっていた。

いくら待っても反応しない俺を見てか、風が話し始めたことで再起動した俺は、未だハッキリしない意識を、何とか風の方に向ける。

「お兄さんには、取り戻したい大切なものがあると言っていましたね。そのためにこの乱れた世を駆け巡るつもりなんですよね？」

「……ああ」

何とか返事を返す。

気を抜くと更なる無様を晒しかねないため、こみ上がってくるものを自制しながら。

「そしてその過程で、この街のように助けが必要になった場合、お兄さんは関わると決めたなら、関わり抜くつもりなんですよね？」

「……ああ」

そうだ、そうでなければ俺はきっと……立ち止ってしまう。

そうなってしまえば、もう日常（せかい）を取り戻すことはできないだろう。

「ですが、一方でお兄さんは誰かを殺す事を恐れています。お兄さんが倒した黄巾たちの検分の報告を聞いたんですがー……倒した数に対して、死傷者の数が極端に少ないんですよ。その死傷者たちの傷もお兄さんの武器によるものではなさそうですしー」

「……そう、だな」

風の言葉に俺の思考は再び凍りつきそうになる。

今さらシラをきっても無意味だし、素直に認めるしかなかったが……改めて他の誰かから言われると、どうしようもない事実だと俺はハッキリ自覚した。

「お兄さんの在り方は歪んでいます。今後も似たようなことがあれば、戦場に立つことを迷いはしないでしょう。ですが、そのたびにお兄さんの心に溜まる澱は……お兄さんを蝕み、歩みを止めさせるかもしれません。それでもお兄さんは……まだその“想い”を貫こうというのですか？」

――そのうえで、風に突き付けられた己の心の闇と向き合ってなお、俺がしたいことを告げなければならないと思った。

「……ああ。それでも俺は、歩みを止めるつもりはねえ。たとえまた“死の恐怖”と呼ばれることになっても……俺は前へ進むぜ」

「その途中で、直接その手で誰かを殺すことになってもですか？」

思わず目を逸らしたくなる場面を思い浮かべたが……

「先のことは分からねえ。そうならないように、全力を尽くすが……仮にそうなったとしても、その責任から逃げたりだけはしねえ！　まわりから何と言われようが……俺は、俺の想いを叶えるために、“ここ”にいるんだからな！」

――風の手前、意地になっている部分もあったかもしれない。

――相手を殺さずに戦場を踏破するなんて、ほぼ不可能だろう。

――相手の命を直接は奪っていないなんて、戯れ言をほざくつもりは毛頭ない。

様々な想いが交錯するなか、明確な指針こそ立っていないものの、“どうしたいのか”ということだけはハッキリした。

風に答えになってない答えを返した俺は、この意地が悪くて、何を考えてるのか分からないが……仲間想いの少女が、どんな反応をするのか待つのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

風　ｓｉｄｅ

「俺は、俺の想いを叶えるために、“ここ”にいるんだからな！」

風の問いかけ、もとい確認に、お兄さんは予想通りの答えを返してくれました。

（もとより、“お兄さんがどうしたいのか”ということは、ある程

度形になってましたからね～。今は、あれこれ考えていたせいで見失いそうになっていたようですが、ひとまず、乗り越えたといったところでしょうか。……といっても再発の危険は大きそうですがー）

デスちゃんからお兄さんが悩んでいるから、話を聞いてやってほしいというお願いを受け、では誰が行く（？）という話になったわけですが……日頃の行いがよいからでしょう。

風も含めて三人とも立候補したので、「では、くじで決めましょう」という稟ちゃんの提案に賛成し、見事風に白羽の矢が当たったというわけです。

ですが、風は別に大したことはしていません。

お兄さんが無視しているわけではなくとも、正面から向き合うのを避けていた事実を指摘しただけ。

後は、覚悟はできているお兄さんが、相変わらず歪んでいながらも自分が為すべきことをハッキリと言いきったのです。

それが如何に青臭い考えで、人によっては臆病者と罵られる考えであっても……これまでのお兄さんの姿を見てきた風ならば、それを笑い飛ばすなんてできません。

お兄さんがそれだけ本気ならば、風が言うべきことは――

「お兄さんが考えていることは分かりました。そのうえで聞きたいんですが、もしもお兄さんに倒されたことで恨みをかい、復讐されて命を落とすことになったらどうしますかー？」

禍根を残すというのは、それだけで煩わしいものです。

普通なら後顧の憂いを残すのは考えられませんが、お兄さんなら……

「俺には取り戻したい日常（せかい）がある。こんなところで、くたばってたまるか！　それに、そんな奴らにやられるようじゃ、最後まで生き残れねえだろ」

予想通り、やれるもんならやってみろとばかりの態度をとるお兄さん。

ならば、と次の質問を投げかける。

「それなら、関わると決めた人々を身捨てざるを得ない状況に陥った時、お兄さんはどうしますかー？」

「……俺に出来ることは限られてる。ギリギリまでは粘るだろうが……最後はきっと見捨てるだろうな。その結果、恨まれるようになっても仕方ねえ。当然の報いとして受け止めるだけだ」

若干間を取りつつも、淡々と述べるお兄さん。そこまで甘い人ではないと分かっているものの、風としては、お兄さんの言うギリギリの時が、どれ程のものか気にかかるのですが――――

「……では、最後に。お兄さんが今後“天の御遣い”として刃を振るうなら、この大陸に何をもたらせると思いますかー？」

お兄さんが珍しく饒舌なうちに、聞いておきたかった質問を風はしてみたのです。

お兄さんは一旦開いた口を閉じてしまいましたが……結局、「最後

に……」という前置きが効いたのか、話してくれました。

「別にそんな大層なモンを掲げるつもりはねえ。ただ、まあ……目についたところの奴らを助けてやるぐらいのことは……できるかもな」

「……お兄さんらしいのですよ～」

星ちゃんと同等なほどの武力を持ちながら、この時代の戦う人間では考えられないような甘い理論をもつ人。

かといって、現実を見ていないわけではなく、理想との葛藤に苦しみながらも、嫌なことから目を逸らそうとしない人。

――そんなお兄さんの人となりに触れ、風はある程度纏まっていた“答え”を完全なものとしたのです。

（星ちゃんと稟ちゃんは……まあ、おして知るべしといったところでしょうか～）

答えを得た風が、満足して立ち上がったのをみて、お開きとみてとったのか、お兄さんも立ち上がりました。

「それでは、そろそろ失礼するのですよ～」

「ああ、いろいろ……悪かったな、風」

お兄さんの顔は、ある意味開き直ったためか、普段のやや無愛想気味のものから、どこかスッキリしたような、頬の力が抜けた顔をしていました。

「いえいえ～、風としても中々興味深い話が聞けたので、満足ですよー。……ああ、では感謝してくれるなら、一つだけ風のお願いを聞いてもらえませんかー？　そこにしゃがんで目を閉じてほしいのですよ」

「ん？　こうでいいのか？」

言われた通りにしてくれたお兄さんを前にして、風は身を乗り出して……

“さわさわ”

「――――っ！？」

風が、右手でお兄さんの頭を撫でてあげたのに対して、お兄さんは慌てて身を起こしたのでした。

（ん～、残念ですね～。思いのほか撫で心地が良かったので、もう少しやりたいところですが……今後はお兄さんを丸めこんで、頭を撫でてもらうのも良いですが、逆もありですねー）

風が自己分析をしていたところ、照れ隠しに「何しやがる！？」と吠えるお兄さんを……

「先ほどのお兄さんのように、ほっぺたをつねらなかっただけ、感謝してほしいものですね～。風としては、頑張ったお兄さんを褒めてあげたつもりなんですがー。それとも、お兄さんとしては……口

づけの方が嬉しかったですか？」

「んなっ！？」

風のこの言葉により沈黙させました。

（フフ♪　風は、やられっ放しにされるつもりはありませんからね～）

「……風」

気分良く部屋に帰ろうとした背を向けた風の耳に、もうかかることはないと思ったお兄さんの声がかかりました。

声の調子には先ほどまでの狼狽は抜けているようですが……

（懲りずに、何か言い返すつもりですかね～）

そう思って振り向いた風が聞いたのは――

「なんだかんだ言って、風にはよく助けてもらってるからな。まあ、これからも目につくところにいたら……助けにいくさ」

「えっ！？　は、はい／／／／　ありが……とう、ございます」

「ん？　まだ頬が赤いな。ちょっと強くやりすぎちまったか……」

「い、いえっ！　これは大丈夫です、から」

「……そうか、じゃあな」

思ってもみない言葉をかけられたことで、風の身体に妙な熱がこもり、思考が停止しかけました。

お兄さんは軽くこちらに手をふって去って行きましたが……あの態度を見るに、風が考えるような深い意味は無いものと判断できそうです。

そのことを考えると、風一人だけが舞い上がってしまったような気がして、すぐさま妙な熱は冷め、思考は平時のそれに戻りました。

（なるほど、無自覚のなせる業というわけですね～。頭を撫でられた時の反応から窺うに、攻められるのには弱いと見えますが……あのヘタレぶりを見るに、そういう雰囲気になったら即逃走しそうな気もします。これは、やりがいがありそうな相手ですね～♪）

ひとまず思考を打ち切った風は、もう小さくなったお兄さんの背中を見つめ、片手で口を隠しながら言葉を紡ぎました。

「なんにしても、やられっ放しで終わる風ではないのです。数日後を楽しみにしているといいですよ～、お兄さん♪」

お兄さんに聞こえないことが分かっていながらも、お兄さんに宛てて紡がれた言葉は――――終幕を迎えたのだろう街からあがった歓声に混じるように消えていったのでした。

風　ｓｉｄｅ　了

## 稟　ｓｉｄｅ

（……今頃ハセヲ殿と風は何を話しているのかしら？）

用意された部屋の中で、自然と考えるのは二人の友人のこと。

ハセヲ殿には、友として助けてもらった恩が多々あった。

だから、悩んでいるというなら今度は私が助けになれればと思ったのだけど……

（私よりは風の方が適役だったかもしれませんね。私では、ハセヲ殿の傷を抉るような物言いになってしまうかもしれない）

――ハセヲが旅を共にしている三人の中にあって、稟の歯に衣着せぬ物言いは、含みの多い発言が目立つ他の二人と比べ、ハセヲにとっては分かりやすい相手だったりする。実際、稟に話を聞いてもらったほうが、ハセヲが被った精神ダメージは少なかったかもしれないのであるが、ここでは縁がなかったということで――

そう考えてはみても、私の心は平素の落ち着きを取り戻せずにいた。

――理由は分かっている。

数日以内で訪れる転機に対して、どうするか決めかねているからだ。

（星は、仮に演技だったとはいえ、ハセヲ殿を“主”と呼んだからには……そういう心積もりなんでしょう。他にやりようはあった筈だし、ほぼ間違いないわね。風に関しては言わずもがな、ね。きっと今頃、最終確認をしているころだわ）

私が信頼する二人は、道――自身の力を振るう場所――を定めたのだ、と思う。

それ自体はとても嬉しいことだし、ハセヲ殿が相手ならば心配はいらないだろう。

――曲がりなりにも家族以外の男性では、初めて真名を許した相手なのだから。

（そう、私だってハセヲ殿を信頼している。だけど、我が知謀を捧げるとなると……）

私には、将来我が“全て”を捧げたいと思っている、憧れの人物がいる。

その方は、ありとあらゆる“才覚”に恵まれ、英雄が持つ“風格”を自然と醸し出し、覇道を往くために必要な、ブレることのない“意志”の持ち主でもある。

その方に仕えたい気持ちは、今も変わらず強く胸に抱いているのに……ここ最近、別の思考に捕らわれているのも事実。

――その人には、英雄としての風格や威厳はなくとも、力に驕らず、私や風のような、どうとでもできる相手に対しても対等に接してくれるところがあって。

――その人には、道を貫くには少々心配でも、決して嫌なことから目を逸らさず、厳しい現実の中で戦い続けようとする覚悟をもっていて。

（私が手助けすることで、ハセヲ殿の道が切り拓けるのなら……私はその手伝いをしたいと思う）

ハセヲ殿の目的はハッキリしないが、それは私の態度とて同じこと。

私がハッキリしなければ、ハセヲ殿だって戸惑うだろう。

憧れである人物と、ここ最近気になりだした人物を秤にかけて、私は選択しなければならない。

（……私の才を十全に使ってくださる方の許へ往くか、……私の才を使って助けてあげたい方の許へ往くか）

――“臣”としてか、“友”としてか。

ここが私の人生の岐路であり、私はどう在るべきかと考え続け――

結論を出した私の顔には、隠せないほどの疲労と口元に微かな”笑み”が浮かんでいた。

稟　ｓｉｄｅ　了

星　ｓｉｄｅ

「今回は風に譲ることになったが、次はこうはいかんぞ」

街で振舞われた酒を頂戴し、城壁に腰かけて空を仰ぎ見る。

雲がかかっているため、月身酒というわけにはいかなったが、今宵はどうせ一人の身。

景観を気にすることもなく、メンマを肴にまったりと酒を楽しむことにした。

黄巾たちは、ハセヲたちの予想以上の活躍により崩壊寸前だったこともあり、こちらの損害は元の兵力差を鑑みれば、奇跡としか言いようがないほど少なかった。

「それにしても……天の世界の味方がいたにせよ、初陣で二千を倒すとは……本当に大した奴よ」

これに関しては報告を聞いた際に、しばし呆然としてしまったほどだ。

――そう、ハセヲと三蒼騎士が倒した敵の総数は二千を越えていた。しかも、そのうちの大部分が動けないものの目立った外傷がないということと、捕らわれた黄巾たちが「……アアアァァァアアア」と変な呻き声をあげている者がいるらしい――

「それほどの武威を見せつけておきながら、命を奪うのは嫌だと言う。本当に難儀な者を私は“主”などと呼んでしまったものだな」

口ではそう言っている私だが、顔には落胆の表情などあるはずなく、自分の気持ちを自覚した私は……今後の展望を考えて楽しそうに杯を傾けるのだった。

そう、私が自分の中で良く分からずに渦巻いていた気持ち――ハセヲへの想い――を自覚したのは、孤軍奮闘していたハセヲの姿を見た時だ。

私が目にした時、既に黄巾たちは崩壊寸前の様を程していた。

大軍の中に在って、見間違える筈もない白き軽鎧に、異様な圧力を放つ大鎌。

ハセヲはきっと私の出した条件を守るだろうと、根拠のない予感をもってはいたが……正直これほどまでとは思ってもいなかった私は、気がつけば口上をあげて突撃していた。

（本来ならば“主”と呼ぶつもりはなかったのだが……自覚してしまってはしょうがない。“これ”に勝てる女などおらぬからな）

自分でも驚きだが……どうやら私、趙子龍は、ハセヲに“一目惚れ”してしまったようである。

（よりにもよって、出会って早々にアレな出会いをしてしまった相手に、なぁ……）

そのことを考えると未だに複雑な気持ちになる私だが、これも「惚

れてしまった者の負け」と呼ばれるものだろうか、と一人納得することにする。

「思えば、ハセヲにあの条件を突き付けたのも……ハセヲの覚悟がどうとかいうのもあるが、私自身の覚悟も試していたのやもしれんな」

（そして、ハセヲが期待以上の成果を見せてくれたことで、私も自分の気持ちを素直に受け止めれたのだろうか）

今となってみれば、ハセヲに対してどうにも妙な感情を抱くようになっていた理由も、分かる気がした。

（……悔しかったのだな。この私が、突然現れた男にいいように負かされて、一人の女に変えられてしまうかもしれない、だなんて）

決して誰にも聞かせるわけにはいかない自身の心の整理を終えて、次に考えるのは……ハセヲとの今後の在り方について、である。

自分の気持ちに気付いたために、行動に迷いがなくなり、真名を預けることもできた。

一度、身をもって体験したため、真名の重要性は十分理解しているはずなのだが……どうにもハセヲは、女が家族以外の男に真名を許す意味について、考えが及んでいない面があると判断している。

それを踏まえて、私は――――私の想いを実現するべく強い想いを己が心に刻みつける。

（私が為すべきことは、“主”の道を切り拓く第一の矛として、我

が槍を振るうこと。そして果たすべきことは、“主”が抱える闇を共に背負うこと。最後に叶えるべきは……“ハセヲ”と女としての幸せを見つけること！）

刻んだ想いを反芻し、ちょうど最後の一杯になる酒を飲みほし、立ちあがる。

そのまま何もない虚空に手を伸ばし、強く念じた後、その銘を呼んだ。

「――静カナル翠ノ楽園」

私の言葉と共に現れた光輝く槍。

上下に輝く3つの光の刃が特徴的な、ハセヲから譲り受けた新たな槍。

とても最近使いだしたとはおもえないほどの、馴染み深さと使いやすさを感じさせる天の武器を私は掲げ、自身への誓約を紡いだ。

「今より我が槍は“天の御遣い”と共にあり！　我が槍にかけて、“我が主”の前に現れる障害の全てを討ち果たそう！！」

（さあ、ハセヲ！　私は決心したぞ。次はお前が応える番だ！）

やるべきことを見据えた今の私には、恐れるものなど何も無く、数日後に訪れる転機から始まるであろう今後の展望に、胸を躍らせるのだった。

――Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて、ハセヲの兄貴分的存在だった男の憑神器（ロストウェポン）は、この外史においては趙雲の手に渡る。彼の者の槍は、この世界でも変わらず、ハセヲを護るために振るわれるだろう――

星　ｓｉｄｅ　了

ハセヲたちが啄県に滞在してから3日後、太守率いる主力部隊が街に帰ってきた。

帰って来て早々に会うことを望まれたハセヲたちが目にしたのは、好い雰囲気を感じさせる初老の男性。

街を救うために尽力してもらったことへの礼や、黄巾の囮部隊の顛末（本体壊滅の報を受けた途端逃走したとのこと）を話し終えると、太守は顔つきを改め、仕官してくれないかと頼んできた。

その可能性があることを予想していたハセヲは、考える時間もなく要求を拒んだ。

街の奴らから聞いていた太守の噂と、話してみて感じた人となりで、信用のおけそうな者と判断したハセヲは、これでこの街の奴らとのケジメはつけれたな、と感じていたのだ。

他の三人も同様の返事を述べ、太守の城を出る四人。

また旅を再開しようとハセヲが思っていたところに、大挙して押し寄せてくる街の人々の姿が飛び込んできた。

「御遣いさま！　出て行くって本当なんですか！？」

「それならば私たちも連れて行ってください！」

「今回は何とかなったけど、次はどうなるか分かんねえ。御遣い様方は、この大陸を救う旅をしてるんだろ？　だったら、その手伝いを俺たちにもさせてくだせえ！」

前は、あんなに震えていた街の人々が、今では一つの想いをもってハセヲの前に立っている。

よく見れば、街の者だけでなく、正規兵の姿も見受けられた。全部で五百人ほどいそうである。

「……」

ここまでの展開は予想できてなかったのか、呆然とするハセヲ。

そんなハセヲに三人はそれぞれ声をかける。

「いい加減、個人の旅では限界もあると感じていたところです。これはこれで、良い経験になるかと」

「形だけでも軍を編成できれば、各地の主君に会うためのキッカケにもなりますからね～」

「戦闘の結果に生じた責任はきっちり取る、だったな。まあ、予想通りだったというわけだ。しっかりやれよ、天の御遣い殿」

ハセヲは、なんで平然とコイツらは受け止めているのかという疑問を感じていたところ、聞き逃せない言葉を聞いた。

「意味分からねえんだけど……星、これが予想通りって言ったな？　星たちはこの展開が予想できてたって言うのか？」

ハセヲの言葉を受け、何を言ってるの、とばかりの表情を浮かべた稟が先に口を開く。

「何を言ってるんですか、ハセヲ殿。こうなることが予測されたため、戦闘を行った日の夜に、風に貴殿にも伝えるよう言っておいた筈ですが？」

それを伝えた瞬間、ピシッと何かが軋むような音を稟は聞いた気がした。

「……風はどこに行きやがった？」

ハセヲがドスをきかせた声をあげるも風の姿は見当たらない。

「風なら先ほど急用ができたと言って、街の方へ行ったぞ」

「アイツは……」

ハセヲは俯けていた顔をゆっくりとあげ、視線を集まった者たちに向ける。

人々は、ハセヲの不機嫌さを隠そうともしない顔を見て、若干後ずさるも、立ち去る者はいなかった。

それを見たハセヲは踵を返し、小さく「……好きにしな」とつぶやき、歩き出した。

それを何とか聞き取った者が他の者へ伝え、喜びが全体に伝わったのを背中越しに感じ取ったハセヲは、「……やれやれだぜ」と複雑そうな表情を浮かべながらも、事情を説明するべく、太守の城へと向かうのだった。

そんなハセヲの背を、三人の少女たちはそれぞれの想いを込めて見つめていた。

事情を説明したハセヲの言葉に顔を引きつらせながらも、稟といつの間にか戻っていた風の説得もあって徴兵?をさせてもらい、義勇軍を結成する許可がおりた。

今や総勢五百余名となったハセヲたちの旅は、ここで一つの転機を迎えたといっていいだろう。

そこで――――

「我らの新たな旅路を踏み出すにあたって、決めなければならないものがある。この義勇軍の“名”だ」

「そうですね、いずこかの勢力かを表すためにも、名称は必要です。どうしますか、ハセヲ殿？」

「そうですよ、天の御遣いであるお兄さんが主君何ですから、お兄さんが決めてくださいねー」

（……名前ねえ）

そう言われてハセヲが思いついたのは、一つの名前。

「じゃあ、この軍の名前は――――」

ハセヲが紡いだ名前は、瞬く間に軍全体に広がり、ここに天の御遣い率いる義勇軍が結成された。

後に、類い稀なる勇将、軍師を有する軍だと、大陸にその名を轟かすこととなるハセヲたちの第一歩が、ここから始まったのである。

啄県の空は、ハセヲたちの門出を尊ぶかのように晴れ渡り、祝福のような風が、ハセヲたちを優しく送り出すのだった。

## 第6話（後書き）

無駄に長く、バランスの悪い話をここまで読んでいただきありがとうございます。

前書きで触れたように、お願いしたいことがありまして・・・
よろしければ、義勇軍の名前をどなたか考えて頂けませんでしょうか？

作者としては、”黄昏の旅団”でいいのかなとも思ったのですが（ゲームでは断っているハセヲでしたが、状況が違いますし）読者の皆様はどう思われますか？

コメントが無ければ、作者の好きにしようと思ってます。しかし、作者にネーミングセンスを期待しないでください。

そして、星のロストウェポンですが、クーンの「静カナル翠ノ楽園」のグリップを無くして、そこに槍の柄を取り付けたモノを連想してください。
ご指摘を受けた通り、槍のロストウェポンはゲームにはありませんでした。しかし、ゲームでは銃戦士だったクーンが、小説版だと重槍士だった、という設定を使わせてもらいました。
当初は桔梗を選ぼうと思っていたんですが、話の展開上動かしづらかったため、個人的に好きな星をねじ込めないかなーと思ってやっちゃったわけです。

すいません、長くなりました。次の話は、なるべく早めにあげる予定です。

# 第7話（前書き）

え～、読者の皆様の信任を受けた身（え、違う？）として、義勇軍の名前を決めました。

・・・ですが、明らかにハセヲのキャラではありません。

一応、名前の由来は後書きに書いておきますが、イメージを崩しそうという方は見られないほうが良いと断言します。

# 第7話

「あれは……純白の“錬”旗！？」

「う、噂の天の御遣い！？　かないっこねえ！　逃げろ！！」

荒涼とした平原にあって、互いの存在を認識しあった二つの勢力が衝突しようとした矢先、相手側の掲げた旗を確認した片方の勢力から戦意が急速に消失しつつあった。

砂塵の規模から、こちら側が有利だと判断していた――実際に兵数では倍近い差がある――黄巾をまいた賊軍たちは、相手の正体を知ったことで、本来ならば仕掛けるべき戦いを放棄して逃げ出そうとしていた。

――確かにその判断は間違いではなかった。

「う、嘘だろ！？　もう来やがった！」

グウォォオオオーーーン！

爆音をバラ撒きながら高速接近してきた白銀に輝く塊は、黄巾たちの足を止めるように、反対側へ逃げ出そうと突出していたところへ回り込んで来る。

「ひっ！」

ズシャアアーーっ！！

派手にドリフトを決めながら、ひときわ大きなエグゾーストノイズを立てて止まった狗王から降り立った人影。

その人物を見た瞬間、黄巾たちは噂に違わぬ異様さに息を呑んだ。

バイクの消失とともにどこからか現れた、明らかに身の丈を超す大鎌。

触れるモノ全てを斬り裂く鋭さと、視ているだけで委縮しそうになる圧力を放つ大鎌を構えたハセヲは、“天からの遣い”というより“地獄からの使者”というふうに黄巾たちからは見えているかもしれない。

さらに、その認識に拍車をかけるのが……

「コオオォォォォオオォ……」

「グウウゥゥゥウウゥ……」

黄巾たちに見せつけるように、空から舞い降り、大地からそそり立つように現れた“フィアナの末裔”と呼ばれる二人の騎士である。

その出で立ちが“人として”という以前に、まともな命ある存在には見えないがゆえに、唯一感じられる自分たちに向けられた“敵意”が一層強烈なものに思える黄巾たち。

本能が訴えている――アレを相手にしてはいけない、と。

「「あ、ああ……アアアッ！」」

そんななか、数人の黄巾たちが、恐怖に耐えきれなくなったのか、

やぶれかぶれに突進していくも――

「……そんなんじゃ、届かねえよ」

柏手をうったような音を響かせたハセヲの一閃により、その心ごと刈り取られ、倒れ伏す。

その一撃が突端となり、ハセヲたちの斬り込みが開始された。

結果、完全に浮足立った黄巾たちへトドメとばかりに、元々向かっていた軍勢が突き刺さる。

「罪無き民草の営みを壊そうとする輩たちよ！　その所業の愚かさを、我が槍によって教えてやろうぞ！」

とりわけ、趙旗を掲げる一団の奮戦を契機に、戦いはそのまま掃討戦へとうつっていき、驚くべき早さで終結を迎えるのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

思いがけず、俺を主君とする義勇軍“百日（ひゃくじつ）の旅団”が結成され、啄県から旅立って早二カ月。

相変わらず言われ慣れない“天の御遣い”としてのネームバリューに、三蒼騎士や星の実力、それらを存分に発揮できるよう支える稟

と風の働きによって、確実に力を伸ばしている。

何度となくくり広げた戦闘においても連勝を重ね、元々大部分が一般市民あがりの兵たちも、自信を持ち始めた節が見受けられた。

――ただ、単に連勝が続いているのは、頼れる軍師たちが相手を選んで戦っているというところが大きくもあるため、下手に増長されても困ると思ったが、調練の様子を見に行った際に、不安はすぐ解消されることとなる。

（確かに効果的なんだが……一般兵にはキツすぎだろ）

態度に驕りが見えてきた兵たちには、三蒼騎士立ち合いのもと、星直々に特別な指導が施されることになっているようだ。

戦場においては、味方として頼りになる存在である騎士たちだが、その風貌から平時の際には一般兵たちから多少距離を置かれている。

かくいう俺自身も、少なからず苦手意識はもっている。（なんせ、少し前までは敵同士だと思っていたわけだし）

そんな騎士たちが、腕を組んで三方から無言のプレッシャーを放ち続けてくるのだ。

それにあてられた兵たちは、自分がいかに舞い上がっていたかを悟り、可及的速やかにこの状況を脱するべく、黙々と指示されたメニューをこなすしかねーというわけだ。

（今はまだ、慎重なくらいでいい。ここでつまづくわけにはいかねえんだからな）

途中で立ち寄った街々で、俺たちの噂を聞いた奴らが旅団へ加入してきたり、打ち破った賊軍の食糧を一部失敬したりして、規模もそれなりに大きくなりはしたが、それでも総勢三千といったところ。

今回の戦闘の様に、こちらの噂を知っていて逃げ腰になった連中を相手にするならともかく、まだまだ戦力的には不安が残るわけで。

曲がりなりにも、各地の諸侯や官軍たちを苦しめている黄巾たちを相手取るには、力不足といえるだろう。

（本意じゃなかったとはいえ、俺がこの旅団のトップなんだ。俺についてきた奴らを余計な危険に巻き込むわけにはいかねえ）

いつこの世界に持ちこまれたＡＩＤＡに遭遇するかも分からない今、何の対抗策も持たない兵たちを共に連れて行くのは気がひけるが……啄県の時のように、一人では限界があるのも事実。

何より、積極的な募兵活動は行っていない（おかげで稟には露骨に溜息をつかれ、風には分からず屋を相手にしているようかの視線を向けられた）ため、あくまで自分の“意志”で俺についてきてくれた奴らの信頼を、無碍にしたくはなかった。

（……本当変わったよな、俺。前までなら何を言われようと、悪者ぶって拒絶してたってのに）

――向けられた信頼に応えたい。

本来なら肯定するであろうこの想いに対し、以前の俺なら無意識にも心の内を覗かせたくなくて、内心ですらこのように考えることは

なかっただろう。

（自分の変わり果てた姿に呆れ、でもそんな自分を受け入れつつある自分にビックリってとこか）

とにも、現状を受け入れようとするならば、最も俺に求められている振舞い――天の威光を前線で示す――をこなすべく、日課となっている鍛錬に励む俺だった。

「随分とやるようになってきたがっ！　まだまだっ！　とらせはせんよっ！」

「そうはっ！　言うけどよっ！　前ほどの余裕はっ！　なくなってきた……よなっ！」

星の愛槍“龍牙”の直刀は、さながら赤い流星のような軌跡を描いて俺に放たれる。

くり出される突きはまさに槍の壁と思えるほどの連撃を、俺は三つ又の双剣“虚空ノ双牙”をもって捌き続ける。

ようやく身体が思考と一致して動くようになってきたため、大鎌以外の武器も試すようになった俺の今日の鍛錬は、星の突きを捌きつつ一撃をいれること、である。

「調子にっ！　のるなよ！！」

「うおっ！？」

あと少しで首を抉られたと思うような一撃が、紙一重で回避した空間を貫いた。

あまりの驚きから多少動きが大きくなってしまったため、少しずつ縮めていた距離が減ってしまったが、気を取り直して再び前進を開始する。

未だ星の間合いにあるため、俺の攻撃は届くはずもなく、回避と防御に専念して星の全体像を捉える。

出会った当初こそ、あまりの速さから後手にまわっていた俺だが、最近は良い勝負に持ち込めるようになってきた。

今も相変わらずの見事な連撃だが、それでも回避できる回数は増えてきているし、それが無理なら双剣で攻撃を逸らすことはできるようになった。

可能ならば、槍を絡め取ろうと挑んでみるも、さすがに戻りが速すぎて叶いそうにない。

それでも、星との距離をジワジワと牛歩のごとく詰めていく。

そのまま時間の感覚も忘れ、相手の姿や身体の動き、息使いなど、星以外の全てが考えられなくなった俺は、一種の境地のようなものに達していたのかもしれない。

――――だから、気付けた。

槍を戻してから次撃に移るまでのタメと、踏み込み足への体重移動が、先ほどまでのそれを上回っていることを。

（勝負を決めるつもりか、上等！）

ならば、こちらはその一撃を凌いでカウンターをお見舞いするだけだと、感覚的に永くなった時間の中で即決し、星の次撃へと全神経を向けたところで――――その一撃は放たれた。

「――――！？」

これまでの中で間違いなく最速を誇る一撃。

凌ぐべく、両手に握る虚空ノ双牙を交差させ、捌いたところへ一撃を入れようと考えていた俺だが、ここにきて予想外の手応えが伝わる。

キィン！

（軽い！？）

速度はあるが、接触音、手応えとともに、会心の一撃とは程遠い、軽すぎる一撃を受けたのだ。

決めの一撃を予想していたこともあって、力を込めていた俺の身体が一瞬の硬直を見せたところに……

「隙ありぃぃ！」

力を込めていなかったとはいえ、速さは十分のっていたために、槍を戻しきれずにいた星。

にもかかわらず、俺の一瞬の間隙を見逃そうとはせず、自分の上半身の力だけで先ほどと遜色ない一撃を放ってきた。

つかまされたのか――という悔しさとともに、今の体勢からじゃ回避も防御も無理だと、感覚が鋭敏になったぶん間延びして感じる時間の中で判断。

ならば、俺に出来ることは――無理を覆すための道理（わざ）を使うことのみと決意する。

その瞬間俺は硬直状態にあった身体を無理やり動かし、目前に迫った槍の一撃を下から掬い上げるようにして打ち返す。

「なっ！？」

まさかの反撃を受け、驚きで打ち返されたままの姿勢で硬直した星を見据え、先ほどの一撃を放った勢いのまま宙へと浮かびあがった俺は――アーツを発動した。

「一双燕返し！」

落下の勢いも合わせて、両手の双剣を星に向けて叩き落とす！

ダアン！

着地の音を響かせ、星の両肩に触れる直前で寸止めした“虚空ノ双牙”を見やると、俺は溜息を吐きながら勝敗の結果を告げた。

「今回は、引き分け……だな」

――そう判断した理由は、俺の腹に触れるかどうかのところで止められた“静カナル翠ノ楽園”の存在である。

「そのようだ。しかし、この“あーつ”とやらは少々非常識なものだぞ。普通はあの状態で反撃などできようがない」

「そういう星だって、アーツを使おうとしてただろ？　……穿天衝だったか？」

そう、あの局面でとっさに龍牙を手放した星は“静カナル翠ノ楽園”を喚装し、対空技として優れるアーツを使おうとしていた。

――使わずに済んだのは、俺が攻撃を途中で緩めようとしたからにすぎない。

時間的にもそれなりに経っていたため、まだ納得のいかなさそうな星を宥め、今日の鍛錬を終了することにした。

（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは気にしなかったが、ここじゃ無理な動きには反動がくるみてえだな）

途中動作をキャンセルしてのアーツ使用を実際の肉体で行うには、それなりの反動を覚悟しなければならないらしい。

身体の節々から感じる鈍痛の程度を把握しながら、今後の参考とするべく頭を働かせていた俺の手を、柔らかいものが包み込んだ。

「……ハセヲ。鍛錬の相手を務めたというのに、終わったからと一人で納得して帰ろうとするのはどうかと思うぞ？　相手をいたわるのも礼儀のうちではないか」

そう言いつつ、しな垂れかかるかのように俺の手をとる星の顔は、鍛錬の直後のせいか赤く染まって見えた。

（っ！？　何を焦ってんだ！　疲れてるだけだって言ってんだろ！）

「まあ、そうかもしれねえ……けどよ／／／　さっきまでピンピンしてたじゃねーか」

妙に力が込められているため、取られた手を振り払いまではできないものの、何とか腕を組むぐらいまで密着を少なくさせ、星へ言葉をなげかける。

星は、そんな俺の態度が気に食わないのか、こちらを見据える目をスッと細め……

「私が主のためにこんなに尽くしているというのに……主からは優しい言葉の一つもかけてもらえぬとは……。照れ屋なのは分かるが、それも度を超すとただのヘタレと変わらんぞ」

「ケンカ売ってんのか！　明らかに、仮にも主と認めた人物に聞く口じゃねえだろ！？」

「うむ、お主こそ我が槍を捧げるに相応しい人物と思っておるよ。だからこそ、主君を想う臣下の言を聞きいれてもらえると助かるのだが」

「……余計なお世話だ」

――これである。

何を思ったのか、星も稟も風も俺を“主”と認め、俺の目的を達成するための手伝いを申し出てくれた。

その手伝いをすることが、この大陸を救うことに繋がると信じて――

――

その信頼に対する責任を、どう果たすか考え――まずは、ここまで俺を信頼してくれる三人を前にして、俺はこの世界にやってきた目的を全て伝えた。

ＡＩＤＡのこと、未帰還者のこと、オーヴァンのこと。

この三国志の世界に、俺の世界の異分子（アンノウン）が混入したため、今後何が起きるか分からない危険性があるという話をした際、少なからず困惑を見せた三人だったが――最も動揺したのは全てを話終えた際に、稟に尋ねられた質問に答えた時だった。

「……ハセヲ殿は、そのＡＩＤＡとやらを滅ぼし、大陸が安定したならば……天の世界に帰ってしまうつもりなのですか？」

「ああ、俺にとっての日常（せかい）を取り戻したなら、俺はそこに帰るだけだ。でもそれまでは……この世界の奴らへのケジメをつけるまでは、向こうに帰る気はねえよ」

「そう……です、か」

なぜか、悲痛な面持ちで引き下がった稟に続いて、星と風も疲れたから休むと一緒に出て行ったのが気にかかったが、次の日にはスッキリとした顔をしていつも通り（時にはいつも以上）に振舞うようになった三人を見るようになってからは、気にしないことにしていたわけだが……

（結局、あの時の反応は何だったんだろうな？　別れが寂しいなんて言う柄でもねえだろーに）

――ここに、クーンやパイがいたならば、配慮が足りないハセヲに忠告したり、星たちへフォローを行ったかもしれないが、無い物ねだりしてもしょうがない――

「……主！　……ハセヲ！！　聞いているのか！？」

「ん……ああ、聞いてるって」

思いのほか自分の世界に入っていたらしく、星の口調が厳しいものになっている。

「ほう、ならばきっちりと説明してもらえますかな？　私との口付けの感想を」

「な、なんでそんな話になってんだっ／／／！？　鍛錬の疲れがどうこうって話だったろうがっ！」

なぜか不機嫌な時に出る敬語に調子を狂わされながら――しかし、出会った時と比べると人間関係が大きく変わったが、頼りになる仲間には違いない星。

なら、この程度の口撃（からかい）くらい捌けなくてどうする！

そう思い、何とか乗り切ろうとしながらも、結局星の口車に乗せられてギャーギャー言っていた俺は――――稟たちの許に戻って指摘されるまで、腕を組んでいた事実を忘れており、そこでまた新たな言い争いの火種が生まれてしまうこととなる。

そんな俺たちの様子を遠巻きに眺めていたデス☆ランディは、「今日も旅団は平和ブヒね」とつぶやきながら、最近つけ始めた日記を開き、筆をはしらせていたのだった。

ったく、見てねーで助けろよ、そこは！

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

稟　ｓｉｄｅ

昨日の戦闘で出た被害報告――――状況に対してかなり軽微なもの――をまとめながら、私はこれまでの歩みを振り返っていた。

我ら“百日の旅団”の勇名は、幽州において、ほぼ知らぬ者がいないほどのものとなっている。

ハセヲ殿の意向で積極的な募兵こそできないものの、ここ二カ月で得た勝利数と兵力を考えれば、破竹の勢いといっていいほどだ。

軍資金に関しても、今のところは問題ない。

ハセヲ殿が“天”で手に入れた道具や武具を、その筋の好事家たちに売り払ったところ――私としては、効果的だと分かっていても納得しきれない部分があったけれど――当面の活動資金を手にすることはできたし、後援者たちもいくらかついてくれたのだ。

その結果、ハセヲ殿が持っていた“天”の道具の7割近くを失ったらしいが、特別に気にした様子もなかった。

ただ、“我巣派亞”とかいうハセヲ殿の仲間に、「売り物が無くなって困るぞ～」と言われそうだな、と言っていたけれど。

しかし、最終的なハセヲ殿の目的を考えれば、到底足りるものではない。

――だが、ＡＩＤＡに対抗できるのは、星のような一握りの人間だけだという。

（ハセヲ殿の力になりたいと思ったのに、私では本当の意味でハセヲ殿の力にはなれないのですね……）

もちろんハセヲ殿の目的はＡＩＤＡだけではないと分かっているため、私は私にしか出来ないことをすればいい。

ただ、主でもあり、“友”と思っているハセヲ殿の一番近くにいることのできない自分が悔しかった。

（あの話を聞かされてからは、星も風もハセヲ殿に対して、気持ち

を素直に見せ始めているし。私も、何らかの行動を起こさないと）

ハセヲ殿が目的を果たした後、天の世界に帰ると聞かされて予想以上に動揺した私たちは、一晩話し合った結果、二つの結論を得るに至ったのだ。

「ようするにですね～、この世界を、天の世界よりも大切なものだとお兄さんに想わせることができればいいんですよ～。そうすれば、天の世界に帰ろうとは言わなくなるでしょう」

「うむ、そう想わせるにあたっては、我らの力次第ということだな。しかし、万が一想わせることに失敗した場合は？」

星は真剣な面持ちで、風に続きを促した。

「はい～、その場合は天に帰ろうとするお兄さんに着いていくだけですよ～。天からこちらにやって来たのですから、帰れるのもまた道理。ならば、それに便乗するまでですよー」

「て、天の世界ですか。それは確かに興味がありますね。ですが、風？　本当に着いて行けると思いますか？」

私の質問に、風はおやおやといった感じで答えてきました。

「稟ちゃんは、例えそうなった場合、あっさりと諦めることができるのですかー？」

「いえ、それはあり得ません」

何の迷いもなく、自然と言い切った自分に内心驚いていたけれど、

それよりも驚いたのは、目の前のいつも眠そうにしている親友の目が見開かれていたことで。

「……驚きましたねー。稟ちゃんにここまでハッキリ言わせるとは。稟ちゃんをこうまでさせた以上、お兄さんにはきっちり責任をとってもらわないとですねー」

「え、ええっ／／／　ちょっと、風!?／／／」

慌てて、星に助けを求める視線を送るも、ニヤニヤとこちらを面白そうに見つめてきている。

それだけかと思えば「これは強敵が現れたものだ」と、さらに追い込もうとしてくる始末。

「違います！　私は……ただハセヲ殿を得がたき“友”だと思っているだけで……」

「オウオウ、姉ちゃん。男と女が、本当に友情だけで一緒にいられると思ってんのか？」

自分が本当に言いたいことを宝慧に代弁させる風。

（言いたいことは分からなくもないけど、ここはあくまでその考えを通さなければっ！）

――結局、この件に関しては、お互いに協力してハセヲ殿の想いをこの世界に繋ぎとめるべく、頑張ろうという話になった。

その日以来、毎日どこかでハセヲ殿の慌てふためく声が聞こえるよ

うになり、その事に対してハセヲ殿が、どうなっているのか私の許に相談に来るほどとなった。

星や風がからかってくるとしか思っていないハセヲ殿の鈍感さに呆れつつも――こうして頼ってくれることが嬉しいと感じている自分が、虚しくもある。

（私はどうしたいと想っているんだろう……）

積年の夢であった曹操様への仕官を諦め、ハセヲ殿を選んだことに後悔はない。

ハセヲ殿が成し遂げたいと思っていることを、私も手伝いたいと思っているのも事実。

（じゃあ、その後は？　ハセヲ殿が目的を達した後、私はどうしたいの？）

風にも答えたように、そのまま別れるという選択肢はなかった。

では、共にいて私は彼と何をしたいのだろうか？

（この答えを見つけた時、私はきっとそれまで以上にハセヲ殿の力になれるはず！　しっかりと見極めていかねば……）

――ここまで思考を別のことに割いていながら、しっかりと仕事はこなした自分を軽く褒めてあげたくなりながら、視線を横に向けると・・・目についたのは、星と仲睦まじく（私にはそう見えた）腕を組んで話をしているハセヲ殿の姿。

それを見た瞬間、こちらにやって来るハセヲ殿に、なぜか文句を言ってやりたくなる衝動を感じた私は、自慢の頭を駆使し、ハセヲ殿をどのように追い詰めるか予測を始めるのだった。

稟　ｓｉｄｅ　了

＊　＊　＊　＊　＊

ようやく、稟たちの追及を逃れたハセヲたちが行軍を続けていると、

「御遣い様！」

偵察のため、先行させていた一人が意気込みながら帰って来た。どうやら何かを発見したようである。

「何があったんですか～」

偵察兵を落ち着かせようとでもしたのか、風がいつもにも増して間延びした声で発言を促す。

「ここより西方五里の方角に激しい砂塵を確認しました。どうやら黄巾相手に交戦中の部隊がいるようです！　敵数はおよそ一万五千。それに対している軍は半数の七，八千といったところのようで、劣勢の様子。如何なさいますか？」

「……」

こうした件は初めてではなく、何度かあったことだった。

敵の数は多く劣勢にあるらしいが、旅団が支援を行えば、状況はかなりマシになる筈である。

星たち三人の視線が、ハセヲがどうするつもりなのかと問いかけてくる。

それに対し、ハセヲは特に気負うことなく声をあげた。

「……気付いちまったのに、それを無視するのも寝ざめがワリい。助けに向かうぞ」

出された声は気が進まなそうなものだったが、その瞳に込められた意志は、いつも通りの力強さを放っていることを見抜いた三人は――

「やれやれ、本当に我が主は、素直でない奴よ」

「本当ですねー、こちらが何を言っても、こういう時は聞く耳もってくれませんし～」

「……ハア、仕方ありません。またいつも通り、この戦闘でかかる負担は、ハセヲ殿の資産を崩して賄わせていただきます」

ハセヲ同様に、口では何だかんだ言っていても、出陣のための準備をするべく行動を開始していた。

それに対して内心深く感謝しながら、ハセヲ自身も出陣のために準備に移ろうとしたところで、新たに偵察兵が一人現れ、黄巾たちと交戦している軍の旗を確認したということで報告を始めた。

「確認できたのは、“関”に“張”に……“劉”の旗、か」

どうやら官軍ではなく、義勇軍であるらしい。

官軍の中には、自身の保身しか考えていないような輩もいるため、助けに向かう相手が同じ志を抱く人々だと分かったことで、末端の兵たちもヤル気が上がるだろうと、稟が思うところを述べる。

「よし、伝令を出せ！　百日の旅団は今から西方に向かい、黄巾たちの横っ面に横撃をかける！」

細かいところは稟や風がやってくれるが、旅団全体の方針や指示は、トップであるハセヲの仕事なのだ。

しかし、指示を出したなら後は任せる――という選択肢をハセヲがとるわけがない。

こうした慣れないことよりも、全体にかかる負担を少しでも少なくするべく、ハセヲは本陣を後にする。

何をする気かといえば――軍のトップが単独で先行し、動揺を誘うという本来ならば効果的だと分かっていても実践は考えられない――常々、稟から控えるように言われていたが、これだけは譲ろうとしなかった――策を今回も実行するべく、狗王を呼び出すハセヲだった。

## 第7話（後書き）

来週は仕事が忙しいため、執筆時間がとれそうにありません。そこで、この休み中に短くてももう1話ＵＰできないかなと思ってますが・・・いけるかな？（応援メッセージなどがあればぜひ！）

ちなみに、牙門旗はタイトルの”白き錬装士”から。

百日の旅団の”百日（ひゃくじつ）”は、百日草と百日紅（サルスベリ）の花言葉を意識して名付けたものです。

ハセヲが花言葉に詳しかったのは、忍冬関連のイベントから興味をもったという方向で。

百日草の花言葉は「別れた友への思い」「絆」「幸福」

百日紅の花言葉は「敬愛」「潔白」

・・・だそうですよ。

何となく黄昏の旅団は、やっぱりオーヴァンあってのものかな、と思った結果がコレです。

すいません、やりすぎました。

## 第8話（前書き）

ユニークがおかげ様で一万を超えました！　本当にありがとうございます！

# 第8話

???　side

「足を止めるな！　我らが足を止めれば、後ろの仲間の動きまで止まってしまう！　隊列を乱すな！！」

所詮、敵は数で上回っていなければ強気になれない雑軍でしかないが、この兵力差が厳しいのは事実。

――ならば、大徳の一の矛である我が使命は、苦境にあって活路を見出すこと。

「はあああぁぁぁ！」

裂帛の気合とともに振るった青龍刀は、黄巾たちを四、五人まとめて血飛沫をあげて吹き飛ばした。

密かな自慢である長い黒髪をたなびかせ、敵に我が武威を魅せつけるように戦場を駆ける。

吹き飛ばした男たちの身体が、別の黄巾たちにのしかかり、思うように動けずにいる者共を、私に続く勇士たちが倒していく。

「見たことか！　数が多いといっても所詮は烏合の衆だ！　我が青龍刀の敵ではない！！　劉家軍の勇者たちよ、我に続けえええぇぇーーー！」

「オオオォォーーー！！」

私の声に呼応して、頼もしい雄叫びをあげる兵たちに背を押され、私は青龍刀を振るい続ける。

（今のところ兵たちの士気は問題ないが……それもいつまで持つことか。しかし、何としても桃香様の理想を実現するために、こんなところで負けるわけにはいかんのだ！）

内心の想いを表情には出さず、斬っても斬っても湧いてくる新手を相手取ることしばらく。

「関将軍！　軍師様方より伝令！　銅鑼の音に合わせて張将軍の隊と左右に分かれて黄巾たちをやり過ごした後、横撃を仕掛けるとのこと！」

「なっ！？　この兵力差で隊を分散させては、策が上手くいったとしても桃香さまの守りが薄くなりすぎる！　それが分からぬ朱里たちではなかろうに！」

私は思いもよらぬ伝令の内容に、余裕のない状況にもかかわらず抗議の声を上げようとしたが……

「これは劉備様からの御言葉でもあります。それにご安心ください。援軍が現れた、とのことです」

「援軍が……？」

それではお願いします、そう言って戻っていく伝令。

「……」

それでも心配なものは心配なのだが、このままだとジリ貧なのは明白。

私はそう結論付けると、すぐさま思考を切り替え、本陣からの合図を待つ。

ジャーン、ジャーン

「――――!?　関羽隊、右翼にまわるぞ！」

伝令を受け取ってから数十人の敵を屠った後、届いた合図に反応し、私たちは敵の右後方を目指して迂回を開始した。

（桃香様は鈴々のほうへ行ったか。頼んだぞ、鈴々！）

その姿からは想像もつかないほどの武力を誇る義妹もきちんと隊を移動させ、その後方に移動した深緑の劉旗を見据え、私は再度号令をかける。

「行くぞ！　調子にのった賊どもに横撃をかける！　全軍突撃ぃぃーーー！！」

黄巾たちは、二手に分かれた我らの間を通り越したため、縦に伸びた形となっていた。

そのぶん薄くなったところを突くべく、左右から挟むように横撃をかける。

（ここまではいい。問題は援軍とやらがどれだけ……何の音だ？）

私がいるのは怒号が飛び交い、剣を打ち合って命を奪いあう戦場である。

そんな場所で聞こえる筈のない、どこか物悲しさを感じさせる澄んだ音。

見れば、周りにいた者たちも敵味方関係なく音の正体を気にしているのか、辺りを見回していた。

そして――――ある者が気付いた。

フワフワと蒼い燐光を放ちながら、降りてくる小さな炎。

それは敵軍のちょうど中央辺りで爆発的に燃え上がって消え、その場に“異形”を顕現させた。

「……」

”異形”が放つ圧力を前に、私ですらすぐに口を開くことができず、この辺りだけが妙な沈黙に包まれる。

この区域だけが戦場から切り離されたような錯覚を感じる雰囲気のなか、それまで動こうとしなかった“異形”が――――動き出す。

「アアアァァアア……」

身体を脱力させたかのように前のめりになった瞬間に加速。

一番距離の近かった男――――“異形”の三倍はありそうな体格をした大男――――の懐に飛び込み、右手を腹に当てる。

「グ、オオォォォーーー！？」

その瞬間、大男の身体は凄まじい勢いで吹き飛び、その直線状にいた仲間を巻き込んで、完全に沈黙した。

（――――！？　何という一撃だ。ただの発剄ではないことは確かだが……瞬間に見えた極光のような光は何だったのだ！？）

私以上に驚愕に陥っていた黄巾たちも、この一撃にて敵対する意志があると判断し、それぞれの武器を構え出す。

それに反応して、“異形”が手をかざすと、直前まで無かった筈の双剣を手にしていた。

「な、なんだコイツ、本当に人間か！？」

「なあ、あの不気味な姿に、異様な武器。アイツ、まさか噂の……」

「バカ野郎！　あんな噂信じられるわけねえだろ！」

再起動を果たした黄巾たちは、眼前に突き付けられたモノを見たくないかのように武器を掲げている。

それに対して“異形”は――――ついに攻勢に転じた。

（な、なんだ。何が起こっている！？　我らに危害を加えていないようだから、敵ではないようだが……あの者は何者なのだ？　まさ

か本当に噂の……）

私の常識では考えられないことが起きている。

しかし、今は戦闘中であり、指揮官である私が混乱していては隊を維持できないため、未だ正体がハッキリしないが、あの赤い男に注意を払いつつも黄巾たちを掃討するしかなかった。

――あの赤い男の正体が、最近よく噂に聞く“天”の守護者だとしたら。

（噂が正しかったというなら、桃香様が放っておかぬな。まあ、それももうじき判明すること、か）

どうやら賊軍全体の反応を見るに、鈴々の方でも何かが起きているとみえる。

ようやく希望がみえてきたかと、先ほどまで入りすぎていた方の力を少しだけ抜き、さりとて油断はなく敵を見据えた私は、心持ち軽くなったように思える青龍刀を再び振るいだしたのだった。

？？？　ｓｉｄｅ　了

？？？　ｓｉｄｅ

「愛紗ちゃん、心配してるだろうなあ～。でもでも、これでもう安心だね！　なんたって“天の御遣い”様が協力してくれるんだもん♪」

「はい、まだ予断は許されませんが、それでも勝利の可能性が大きくなったのは事実です。実際のところ、援軍を得られなかった場合、被害は深刻なものになったでしょうし。……申し訳ありません。私の予測が至らず、桃香様を危険な目にあわせてしまって」

「朱里ちゃんが謝ることじゃないよ、官軍を助けてあげたいって言ったのは私だし。でも、まさか私たちに押しつけて逃げちゃうとは思わなかったよね」

そう、私たちが行軍中に発見した賊軍と官軍の戦いが事の発端だった。

苦戦していた官軍を助けようと後方から奇襲をかけ、賊軍が混乱しているうちに立ち直った官軍と連携して挟撃をかけるつもりだったのに、あろうことか私たちに全部押しつけてそのまま逃げてしまったのだ。

（困っている人たちが手を取り合えば、そのぶん大きな力が生まれるのに……どうして？）

――私には叶えたい理想がある。

それは、とても困難で、矛盾を孕んでいて。

でも実現したなら――何よりも素晴らしいこと。

私にできることなんて少ししかないけど、最近仲間になってくれたばかりの朱里ちゃんやここにはいない雛里ちゃん、とっても頼りになる二人の義妹が私を支えてくれる。

（そう、どれだけ難しいことだって、協力すれば道をつくれるかもしれない。みんなが笑顔でいられる道を。だから私は信じたいんだ、届かない心（こえ）なんて……きっとないんだって）

――そのためにも、ここで負けるわけにはいかなかった。

私の我がままのせいで、私に着いてきてくれた皆を危険に晒しているという事実。

だから、私が何とかしないといけない筈なのに、ここで皆の無事を祈るしかできない歯がゆさ。

そういった思いを抱えながら、私はただ戦場を見つめる。

そんな何もできない私の代わりに、この小さくても頭は一流な朱里ちゃんは、こちらに向かって来る集団の存在と正体を把握した瞬間、伝令さんに指示を出して今の状況を作り出してくれた。

結果として、賊軍を二手に分かれた私たちが挟撃し、“天の御遣い”様たちの軍が空いている側面の一つを攻め出したことで、三方向からの攻撃をかけることになったみたい。

数の上では、まだ向こうの方が多いから、逃げ場所を一つ作っておいた方が被害が抑えられるってわけみたいだけど、よくこんな状況を”天“の軍の人たちと相談しなくても作れたなって思う。

「噂では、あちらにも優秀な軍師がついていると聞いていましたから、このくらいは問題ないと思ったんです」

「……」

何ていうか言葉にもできない世界があるんだなって、しみじみと思わされました。

「あっ！　決着がついたみたい」

戦場には、“劉”、“関”、“張”、“錬”、“趙”、“郭”、“程”の旗が一堂に会し、その存在を高らかに主張している。

その下にいる黄巾たちは動かない人ばかりで、動ける人はほうほうの程で用意されていた逃げ場所から逃走していた。

（助かった、んだ。……良かった。本当に、良かった！　御遣い様にはいっぱい感謝しなくちゃ！）

一瞬だったけど、もの凄く速い乗り物に乗って賊軍に突っこんでいったのが“天の御遣い”様だったのかなあと、私は当てをつけながら、お礼を言ってから何を話そうかワクワクしつつ、皆の帰りを待つのでした。

???　ｓｉｄｅ　了

## 第8話（後書き）

次の話でようやくあの人たちを出せそうかなあ、といったところです。
取りあえず、また碑文適格者が出る予定ですが、一人は結構迷ってたりします。

それと、ネメシス様。感想ありがとうございました。
同じ人から感想をいただけるというのは嬉しいですね♪
また、私の作品をお気に入り登録してくれてる方にも感謝を。

次の更新は未定ですが、今月中には行いますので、応援メッセージなどをいただけるとありがたいです。
単純な私は、それだけで結構頑張りますんで。

## 第9話（前書き）

ＰＶが１０万を突破！
ほんっとーーーにありがとうございます！

# 第9話

黄巾党と劉備率いる義勇軍の戦闘に介入した“百日の旅団”。

両軍の的確な用兵をこなす軍師たちと、一騎当千を誇る将たちの奮戦もあって、黄巾たちを追い返すことに成功するも、劉備軍の将兵たちの疲れは激しく、しばらくの休養が必要となった。

そんな中、ハセヲの姿は、慰問に訪れた劉備軍の中にあったのだが……

「……」

この短い時間の中、連続で起きた衝撃の事実の発覚に、ハセヲはもう声をあげることさえできなくなっていた。

（なんつー世界だ、ここは。アウラが言ってたように、ここは単純に俺たちの世界の過去じゃなくて、文字通りの“異世界”って認識でいたほうがよさそうだな）

ハセヲがそう思うのも無理はない。たとえば――

ケース？

「貴方が天の御遣い殿か。ご助力感謝する。我が名は関羽、字は雲長。この恩は忘れません」

「アンタが、あの関羽だって！？」

「……？？　御遣い殿がおっしゃるのが私かどうかは分かりませんが、私は確かに関羽ですよ」

話し方や雰囲気から、稟と同じで生真面目であり、義理固い人物でもありそうだとだと窺える女性。

三国志でも有名どころの人物が、またも女だったことに疑問を感じるも、たたずまいから伝わってくる雰囲気に、納得することができたハセヲだった。

ケース？

「にゃー、お兄ちゃんとっても強かったのだ！　今度勝負してほしいのだ！！」

「……また今度な。そういうお前もかなりやるみてーだ」

「むー、絶対だよー？　あと鈴々はお前じゃなくて、張飛！　字は翼徳なのだ！」

「っな！？　嘘、だろ？」

見た目こそただのガキのようだと思いきや、先ほどの戦闘で身の丈の倍以上ある蛇矛を縦横無尽に振るって敵を倒す姿を見かけたハセヲ。

この子どもが三国志でも最強の部類に入るあの“張飛”だとは信じきれない部分があるハセヲだったが、実際に戦う姿を見ていたこともあって、何とか納得できたのだった。

ケース？

「は、はわわ。はじぃ……はじめまして、みつかいしゃま！」

「あ、あわわ。あぶにゃ……危ないところをたしゅけていただき、感謝しておりますぅ……」

「それはいいんだけどよ、アンタらの名前を教えてくれねーか？」

明らかに戦闘を行う者に見えないことと、それでも軍に参加していることから、風たちのような軍師的存在なのかと当たりをつけるハセヲ。

だとするならば――

（関羽と張飛がいて“劉”とくれば、この軍は劉備の軍ってことで。その軍師っていやあ……）

「しょ、諸葛、亮です！」

「ほ、鳳統といい、ます……」

「～～～～っ！？」

もしかしたら、という思い通りのビッグネームが飛び出したものの、あまりのイメージの違いにフリーズしたハセヲだった。

しかし、稟や風をして、寡兵にて黄巾たちを相手にした際の戦術や戦略は見事だったこと、旅団が救援に駆け付けた後の対応も文句なしだったと言わしめたことから、少々顔を引きつらせながらも、納得したハセヲだった。

ケース？

いよいよ義勇軍の総大将である劉備と顔をあわせるわけになったハセヲであるが、星の件があってより、もしかしたら……と考えたこと――バカな妄想だと一蹴したが――が、現実味を帯びてきた。

（ここまできたら、劉備も女なんだろうが……徳の高さで知られる劉備なら志乃みてーな感じかもな）

かつての自分の拠り所であった、慈愛に満ちて落ち着きのある存在を想起しながら、ハセヲは劉備が控えているという天幕を訪れて――冒頭の状態になったのである。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「お兄さん！？」

「……風？　ああ、ちょっと現実ってやつを見失っちまったようでな。もう大丈夫だ。ここまでくりゃ、どんな奴が出てこようと、三国一の美女が変態にでもなってない限り驚きゃしねえよ」

「言ってることの訳が分かりませんが、本当に大丈夫ですか、ハセヲ殿？」

劉備と顔をあわせた瞬間、心ここにあらずな状態となってしまった俺を怪訝な表情で見つめる稟と風。

ああ、大丈夫だ、ともう一度言おうとして、何故かこの世界に来る前に出会った化け物を思いだしそうになり、思わず頭を抱えた俺を本気で二人が心配して駆け寄ろうとしてきたが、片手をあげて制する。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいては、キャラのエディットは自由なため、見た目を特に気にすることはなかった。

この世界でも、そういう心構えでいたほうがいいかもしれない、と俺が思うようになった問題の女性を改めて見やると――――

「あの～、御遣い様？　私がどうかしましたか？　まさか、知らないうちに失礼なことを！？」

「いや、こっちが勝手に考えこんじまっただけだ。気にすんな」

出会いがしらに大輪のような笑顔をみせた顔は、次第に不安の色に染まり出し、こちらの声で「良かった～♪」と再び笑みを取り戻す。

確かに人を惹きつける魅力を感じさせるものの、三国志の主人公格と言われれば、曹操と並んで真っ先に浮かぶ存在、“劉備”である筈の少女の在り方は、俺が予想していたものとは異なっていた。

戦いに赴く人間としては、無垢すぎるといってもいいほどに、純粋な瞳をした目の前の女。

この乱世において、コイツが見た目通りのお人好しならば、この義勇軍結成の目的は推察できる。

苦しんでいる民のために！と、立ち上がったのだろう。

口だけ達者で何もしない奴らが多い中で、何の後ろ盾もない状況でも実際に行動しているコイツは、確かに英傑なのかもしれない。

ただ、目的達成の過程で起こったことに対して、目の前でころころと表情が変わるコイツは、事実を事実として受け止めることができるのか、という疑問が生まれたが……俺はすぐにそれを打ち消した。

（ハッ！　人の心配をしてる余裕はなかったな。俺自身……今後のことは分からないっつーのによ）

自嘲気味に吐き捨てながら、これまでのことを振り返る。

今までも、戦いの直後は星たちに祝勝会だ！とかいって夜通しで付き合わされることが当たり前となっており、一人であれこれ考えるようになる時間が取れる頃には、幾分か気分も落ち着いている状態になっていた。

そのように気を遣ってくれる仲間を、内心とても頼りに思っている俺は、劉備も似たようなものかもしれないと思うのだった。

「改めて、はじめまして♪　私は劉備、字は玄徳。一応、私が総大将って事になってます！」

太陽のような明るい笑みを浮かべて、そう名乗った女。

桃色の長い髪の両端を羽根飾りで軽くまとめ、人懐こそうな雰囲気をしている。

（コイツは、何を想って“ここ”にいるんだろうな）

驚きの連続で正常に働いているか怪しい頭を軽く振って、とりとめのない思考を追い払い、気を取り直して俺は劉備と正対した。

「……ハセヲだ。旅団の総大将でもある」

劉備の控えめな自己紹介に、要点だけを話して応える。

「え～と、姓はハセ、名はヲでいいんですか？」

いつだったか、同じように名前を勘違いされたのを俺が訂正する前に――――

「我が主には真名も字も無いのでな。貴殿らは、ただ、ハセヲと呼べばいい」

「そうなのですか？」

ここまで口をはさまなかった星がフォローを入れた。

関羽、張飛、諸葛亮、鳳統、そして劉備が、揃って不思議そうな顔をした途端……

「ねえねえ！　字も真名も無いって事は、やっぱり貴方が“天の御遣い”様だから!?」

誰より早く立ち直り、身を乗り出しながら尋ねてくる劉備。

あと、もう友達感覚で話しかけてきてやがる。

「まあ、ここは違う世界に居た事は確かだが、本当に天の御遣いだって保証はねえ。俺自身、そう呼ばれたいとは思ってねーしな」

俺がそう言うと、劉備はやおら瞳にこもる熱をあげて、さらに身を乗り出してきた。

何だ、コイツのテンションの高さは?

「それってやっぱり、この乱世を治めるために天から舞い降りた使者って事!?　何か方術みたいなものが使えたり、あのとても速い乗り物が天の世界のっ「桃香様!」……ハイ（泣）」

獲物を捕らえて離さないとばかりに、俺の両肩を掴んで揺らす劉備を、猫の首根っこをつまむがごとく、ひっ捕まえて連行していく関羽。

そのまま少し離れたところで関羽に諭されている劉備の様子を見やる。

尻尾がついていれば、ガックリと垂れ下がっていることだろう。

（……タビーみたいな奴）

同じ習性をもってそうな者同士、多分気があうだろうなと考えていたところ、ある視線を感じ、そちらを向くと関羽と目があった。

関羽は、劉備の好奇心に素直な行動を俺に見られて恥ずかしがっているのか、あった視線をすぐに逸らしつつも、

「長姉が、失礼を……」

小さく呟いた。

むしろ、お前が姉でいいんじゃね？と思ったのは俺だけじゃない筈だ。

「まあ、ほどほどにするよう言っといてくれ……」

何故か、妙なシンパシーを関羽に感じた。

まるで、近い将来“天”の意志によって、俺も同じような立場に立たされそうな予感が。

「頑張れ、ハセヲ♪」……と、出会ったら一発ぶん殴ってやりたくなるような声を聞いた気がしたが、とりあえずスルー。

結果としては、劉備の少し抜けた行動が潤滑剤のようなものになったのか、ひとまずは和やかな雰囲気で、俺たちは自分たちが持って

いる情報などのやり取りを始めたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ふぅ……」

あれから劉備たちと一通りの情報交換や交流をすませたところ、大分太陽も傾いていたため、俺たちは共に野営の陣地を設置し、夜を迎えることとなった。

いつもの酒宴の誘いを何となく断った俺は、天幕から出て荒地の真ん中に座り込み、空を仰いでいる。

（何かこっちに来てから、よく月を見る習慣がついた気がするな……）

「……劉備、か」

ＴＶもネットもないこの世界では、現代人の俺が夜になってからできることはとても少ない。

そこで習慣になりつつある月見をしながら、ふと呟いた。

――皆が笑顔でいられる世界を作る。

そんな誰もが夢幻だと思う志を、抱き続けている少女。

それに惹かれて、関羽、張飛、諸葛亮、鳳統が、歴史の流れ通り、劉備の許へと集った。（星がこちらに付いてくれたことに関しては悪い気もするが、返す気はさらさらなかったし、そもそも伝えようものなら、どうあれ龍の逆鱗に触れるのは間違いない気がした）

ハッキリ言えば、劉備自体は別に何らかの能力に秀でているわけではないようだ。

ただ、話しているうちに、劉備の本質――――自分より他者に気を配る――――に触れ、この少女の助けになってあげたいと、周りの人間が考える理由、この義勇軍における結束力の高さの秘密が何となく分かった気がした。

（天然でやってるなら、あれが本当の仁徳ってやつなんだろうが、それでもあれで一国の王が務まんのか？）

どこか不安を感じつつも余計なお世話かと、まとまらない思考を切り捨て、別のことを考えようとしたところに、背後からナニかが近づいてくる気配を感じ、とっさに思い浮かんだ名前を呟いた。

「……劉備、か？」

「あ、あれ！？　ばれてました？」

「……わざとじゃなかったのか？」

真後ろから、あちゃーといった感じの声が上がる。

それに対する俺の声は冷ややかなものだ。

（本気でそお～っと、そお～っとって声に出しながら進んで来る奴がいるとは……）

振り返りはせず、そのままの姿勢で待っていれば、

「あ～あ、びっくりさせようと思ったのにな～」

相変わらず感情豊かなコイツらしく、頬を膨らませつつ、俺の隣に腰掛けてくる劉備。

何をしに来たか知らねえが、ちょうど俺もコイツのことを考えていたので、案外間が良かったのかもしれない。

「何か用か？」

「用がないと会いに来ちゃいけないんですか？」

劉備が拗ねたように言ってくるが、何となく本気で言ってるわけじゃないと感じ、だんまりを続ける俺に痺れをきらしたのか、劉備は溜息を一つ吐くと、「程立ちゃんが言ってたようにはいかないな～」と零してきた。

風に何を吹き込まれたか知らねえが、この程度で音を上げるなら、俺の敵じゃあねえ。

最近になって、星や風だけでなく、「……稟！？　お前もか！？」という事態までもが増えてきたため、なるべく平常心を保つよう心がけている俺だった。

――それでも星たちには勝てないのであるが。

「ハセヲさんが戦う理由って何ですか？」

空気が変わった。

昼間にかけてきた好奇心からの質問と違って、随分と真剣な質問だ。

「わざわざ別の世界からやって来てまで、この大陸のために戦ってるハセヲさん。それは、貴方の意志であり、そうまでして叶えたい願いがあったからじゃないんですか？」

（さすがに昼間の姿が全てじゃねえか、劉玄徳。こういう顔も、出来るわけか）

「私にはハセヲさんが抱えているものの重さなんて分からない。でも、天の世界から降りてきた貴方が……人の命を奪うのを恐れているのに戦場に立ち続ける貴方が、戦い続けられるというからには――相応の理由がある筈です。違いますか？」

昼間までの人懐こそうなナリは息を潜め、ここで俺との問答を望んでいる劉備の放つ気配は、今は未熟なれど紛れもなく一国の王のものなんだろう。

星と勝負をする時とは異なった、それでも気持ちが引き締まるような雰囲気の中、返答を待つ劉備が俺を見つめている。

考えてみれば、劉備たちの将来にも関わる問題でもあり、ひょっとすると劉備たちの中に適格者（ひぶんつかい）がいるかもしれない話だったため、話すのは構わない。

だが、ここで劉備だけに話すのも二度手間かと思い、後で詳しい話をすると約束し、今は抽象的な話だけをすることにした。

「俺の単なる我がままみてえなもんだ。気のいい仲間がいて、追いつきたい奴がいて……。そんな自分にとって護りたかった世界を取り戻したいってだけの……それでも譲れねえ理由」

こうして言うと、めちゃくちゃ恥ずかしい自分本位の話に聞こえた。

それでも、歴史に名を遺す英傑を前にして、何となく嘘をついていい場面じゃないと思ってしまった自分は、こんなに感傷に浸る奴だったのかと思う。

「分かったか？　俺は、アンタが考えてたような平和の使者なんかじゃねえ」

変に美化されたイメージを持たれてるようだったため、その幻想はブチ壊しておくことにした。

「確かに結果としては人助けをしているように見えるかもしれねーが、実際のところは違う。大切なものを護れずに苦しんでいる奴を見ると……俺も嫌なことを思い出しちまうからな。それが嫌でやってるだけだ。ソイツらのためじゃねえ、自分のためだ」

俺の言葉を、劉備はじっと俺の目を見ながら聞いている。

何故か目を逸らしたら負けな気がしたので、こちらも目を逸らせない。

「アンタみてえに、民のために！って想いでやってるわけじゃねえ」

「……」

昼間は分かりやすいほどの感情表現をしていた劉備だが、今はよく分からない。

「これでもまだアンタは、俺を“天の御遣い”という気か？」

「……」

先ほどから黙っている劉備を見て、幻滅して口も開けねーかと思っていると――

「……くすっ♪」

小さな笑い声をあげ、先ほどまでの真剣な表情はどこへやら、まるで面白いものを見つけたといわんばかりの、いい笑顔をした劉備が俺を見つめている。

何だ、今のどこに笑うところがあった？

「ハセヲさん」

「……んだよ？」

予想外の反応に、何となく気構えてしまう俺。

「なんで、必要以上に自分のことを悪い方に見させようとするのか知りませんけど、言ってて可笑しいって気付きません？　苦しんで

いる人を見るのが嫌なら……その人たちに関わって嫌な思いをする前に、見捨ててしまえばいいのに。さっきの言い方だと、それは無いって感じですよね？」

「なっ！？」

（いやいや、待て！　何でそうなる！？）

「いや、ちげーよ！　知っちまった以上、見過ごすのも寝覚めがワリいだろ！　それに俺は、俺の世界の仲間の覚悟を無駄にし、この世界を危険に晒す奴を何とかするために戦ってるんだからな！」

つらつらと自分でも何でこんなにムキになってるのか分からないほどの、言い訳染みた反論を並べる俺だが、劉備の奴に聞いてる様子は見受けられない。

（何で俺の周りの女どもは、俺の話を聞かねえ奴らばかりなんだ！）

当の劉備は、自分の中で良いように自己完結を迎えたのか、立ちあがって伸びをしている。

「ようするに、色々思うところはあるけど、ハセヲさんはこれからも大切な想いを叶えるために、戦い続けるって事ですよね♪」

「まあ、確かにそうなんだが……」

絶対都合の良い解釈をしてるよなと思いつつも、藪蛇になっても困るため、それ以上は突っこまないことにした。

「そんなハセヲさんを信じて付いて来てくれる人たちの信頼に応え

るためにも、ね」

それに関しては言われるまでもなかった。

俺の我がままに付きあわせていることを悪くも思うが……嬉しかったと思えたのも事実だったから。

「ハイ♪」

まだ座ったままだった俺に向けて手が伸ばされた。

瞬間、思わず手を伸ばしそうになったが、何となくここまで良いように丸めこまれているのが癪だったため、その手を取らずに俺は立ち上がる。

途端、ムスーっといった表情をしながら手を引っ込める劉備。

それを見て思わず苦笑しながら、いつのまにか劉備に対して引いていた線引きのようなものが、曖昧になっていることに気付いた。

（……よく分かんねえ奴だな）

そんな気持ちにさせられてしまう力が、目の前の少女にはあるのかもしれない。

「不思議な奴だな、アンタ」

今度は思っていたことを思わず口に出してしまう。

それを見て劉備は、また何か不満なことがあるのか再び頬を膨らま

せ……

「桃香です。ハセヲさんには、そう呼んでほしいんです」

再びこちらに向けて手を伸ばし、劉備の――――を彷彿とさせる、おそらく真名にあたる名で呼んでほしいと頼んできた。

背後を月明かりに照らされたその姿は、普段の明るい雰囲気から一転、儚げなものに見える。

――――まるで、この手を取らなければ消えてしまうかもしれないように。

「ああ、本当にお前は不思議な奴だな……桃香」

改めてそう言いつつ、桃香の手を取った俺を見た桃香は、先ほどの光景が嘘だったかのような、力強い笑みを浮かべている。

自然俺も桃香に対して、初めての微笑みを向けていた。

ハセヲｓｉｄｅ　了

稟　ｓｉｄｅ

「……」

（私は何をやってるのか……）

今日会ったばかりの女性と、こんな夜分に二人きりで話をしているなんて、流石は我が主君だと思う。

しかも歩み寄って行ったのは劉備殿の方ということもあり、その事実がなおさら私の心を、不透明なもので覆い隠そうとしている。

私の視線の先では、我が”友”にして”主君”のハセヲ殿と、義勇軍の総大将である劉備殿が会談?を行っている。

その様子を、私は二人から距離をとって窺っていた。

そもそも、何故私がこのような無粋極まりないことをしているかといえば、ハセヲ殿の様子がおかしかったことに起因する。

戦闘直後ということもあり、いつものように宴を行おうとすれば、今日は止めておくと言って出て行ったハセヲ殿。

その胸中はハッキリとは察せませんが、戦闘による気落ちではなく、別件によるものだと判断した私は、様子を窺おうと後をつけ、今の状況に至っている。

「悪くはない雰囲気ですね。まあ、ハセヲ殿の気疲れが回復するのであれば、良しとするべきでしょうか」

このままここにいると、私の方が嫌な考えに囚われるのではないかという不安と、これ以上続けると”覗き”になってしまうという思

いから、立ち去ろうと腰を上げかけた瞬間――

「さすが、お兄さん。素直になびかず、あくまで相手側に手を差し伸べさせようするあたり、性質（たち）が悪いですね～」

「まったくだ。しかも、あれで無自覚に振る舞っているというのだから、始末におえん」

「～～～～っつ！？」

私以外に誰もいなかった筈の背後に、いつの間にか存在していた二人の友人の声に反応して出しかけた悲鳴を、何とか噛み殺す。

「いつの間に来てたのですっ！？　ハァ……まあ、それよりも早く立ち去りましょう。これ以上は“覗き”になってしまいます」

私のこの言葉に対し――

「風たちより前から覗いていた稟ちゃんが言っても、しょうがないと思いますよ～」

片手で口元を隠しつつ、嫌な笑い顔を浮かべる風に、言い返しのできない事実を指摘され……

「それに、私がここにいるのは主の護衛のためでもあるのだ。それならば文句あるまい」

口の端をニヤリと歪め、これまた嫌な笑い顔を浮かべている星にも、ここに居る理由の正当性を主張された私は、口を塞ぐことしかできなかった。

「……まったく、貴女たちは」

ハセヲ殿たちが何も遮蔽物のない荒野の真ん中にいるため、距離をとって様子を窺っていることから、二人の会話は聞こえない。

しかし、遠目にも二人の間の雰囲気は、どこか一方通行だったものから……互いに想いを分かち合うような和やかなものになっているのが分かった。

うろたえた私が何も言えなくなっているのを良いことに、ハセヲ殿に対して思うことを言い合っている友人たちを見やれば、態度こそ普段通りなれど、瞳の奥には、常には無い感情が見え隠れしている。

――まあ、そういう私自身も、平常心を保っている自信はないのだけれど。

「しかし、実際何を話しているのかは気になる所だが……さすがに当人に聞くのは無粋よな。何より、私“まで”覗き呼ばわりされてしまう」

「星。いくら貴女でも、今の発言は見過ごせません。自分で言いたくはありませんが……私“たち”は、もう立派な覗きだと思います」

（ここまでやっておいて、あくまで自分を蚊帳の外に置こうとするなんて……さすがというか、何というか）

風が「風も覗き仲間認定ですかー」とか言ってるけど、そこは流させてもらうとして……

「稟ちゃんが最近お兄さんの味方ばかりで、風に冷たいのですよー」

「確かに何の話をしているのかは気になりますが、遠回しにせよ何にせよ聞きだす方法を考えてみましょうか。何なら明日にでも上手く誘導して「稟ちゃん」……なんですか、風？」

意図的に無視していた風から発せられた真剣な呼び声に応じて風を見やると、先ほどまでとはうって変わった面持ちをして私を見つめる友人がいた。

「いくら稟ちゃんでも、その役目は譲れません。お兄さんの人間（女性）関係に関しては、風が初めに対応しますのでー」

「いや、今回は私の方が適任だろう。啄県での件もある。今回は譲ってもらおうか、風」

「～～～～ハァ」

郭奉孝ともあろう者が、制御しきれない感情にやきもきさせられ、その友人である趙子龍、程仲徳らをもってしても、同様に振り回されている。

――たった一人のために。

ハセヲ――“天の御遣い”であり、我が“主君”であり、我が“友”である人。

あの人を見ていると、たまに自分が自分でなくなるかのような錯覚に陥ることがある。

研鑽を積み重ねた結果、あらゆる兵法、地理、政、経済、土木、農業といった知識を習得し、状況に応じた万全な対応をとる自信がある私も、あの人が絡んだ事柄に関しては、例外となってしまう。

（早く何とかしなければ……）

常に先を見通して動かなければならない軍師にとって、不確定要素は、少ないに越したことはない。

ましてや、自分の主君こそが不確定要素の塊だというのだから、ある意味致命的な問題の筈なのだ。

しかし、何でだろう。

あの人の存在が、私にとって大切な思考力を曇らせる。

そんな感覚は確かにあるのに、私の心は“それ”を心地よくさえ思っている。

（私はどうしたいと思ってるんだろう？）

ここ最近よく考えるようになった疑問を、再度思い浮かべた私は――瞬間、拳を強く握り締めた。

――私の視界の先では、ハセヲ殿と劉備殿が手を握り合い、今一番の穏やかな空気を感じさせているのだった。

稟　ｓｉｄｅ　了

＊　＊　＊　＊　＊

ハセヲ　ｓｉｄｅ

劉備率いる義勇軍と色々あった一日が終わって迎えた翌日。

俺たちの姿は、再び劉備軍の陣地内にあった。

結果として、新たな碑文適格者が現れたため、事の説明を行うことにしたからだ。

以前星たちにした説明を再度行い、ロストウェポンの譲渡には成功したものの、その間における俺の心情は正直複雑なものだった。

俺としては、自分の目的がまた一歩前進した喜びと、自分の世界の問題に無関係な人間を巻き込むことへの腹立たしさという二律背反めいた心地だったからである。

一方、碑文適格者ということが判明した当人たちといえば――――

「う～ん、これで私も天界の将になれたのかな？」

「はわわ……。わ、私なんかが天の武器を使いこなせるのかなぁ」

ＡＩＤＡという規格外の存在に対抗できる唯一の力を得たということで困惑する朱里に、同様に戸惑いながらも期待の色がみえる桃香。

星の時は、すぐに喚装できた筈のロストウェポンだったが、なぜか二人は呼び出すことができなかった。

それでもデス☆ランディ曰く、開眼さえすれば問題はないとのことで、ひとまず現状維持ということにしておく。

「桃香様ほどの大器の持ち主ならば、選ばれるのは当然です」

「でも、お姉ちゃん全然強くなったようには見えないのだ！」

「が、頑張って！　朱里ちゃん」

そんな中、突然の展開に目を瞠りながらも、義姉を誇らしげに見つめながら言いきる関羽、正直な感想を述べる“鈴々”ら義姉妹と、ただでさえ小さな身体を、自信なさげに丸めて呟く“朱里”に、拳を握りしめてエールをおくり、親友を励まそうとする“雛里”。

普通ならあり得ない事態に対して、桃香たちがここまで受け入れてくれたのは、正直なところ、昨夜の件が大きい。

今日になって、桃香が俺に真名を許したことを知った面々は、桃香が許したならば……と、俺に真名を呼ぶことを認めてくれたのだった。

真名とともに、信頼を預けてくれたおかげもあって、何とか話を受け止めようとしてくれたようである。

ただ、関羽だけは――

「命の恩人であることは、重々承知しておりますが、申し訳ありません。真名を許すまでは……」

と、本当にすまなさそうに伝えてきたため、了承した俺だった。（というよりも、星にあやうく殺されそうになった身としては、これが普通だと思っている）

しかし、オーヴァンのことを話終えたあたりから、関羽から向けられる眼差しに温かみが増してきたのが気にかかる。

終いには、「……早まっただろうか」と普段の自信あふれる姿はどこへいったのかといわんばかりに、そわそわしながら俺を見つめてきていた。

（ったく、どうしたってんだ？）

関羽のことも気になるが、それ以上に訳が分からないのは、俺に無言の視線を送ってくる星たちの様子である。

朝方から何か言いたげな視線を向けてくるのに結局何も言わないうえ、こちらが尋ねても「何でもない」と一蹴される。

風にいたっては、

「自分の胸に手ぇ当てて考えてみるんだな、兄ちゃん」

と、宝慧に思わせぶりな台詞を吐かせて立ち去る始末。

結局、何を気にしているのか分からないまま桃香たちを訪ね、桃香の名を呼んだあたりから更に視線に込められた力が強くなった気がする。

まさに針のむしろといった感じで、俺の精神は現時点なら三蒼騎士を上回るんじゃないかと思える程の眼力を放つ三人にガンガン削られ、悲鳴をあげかけている。

装備品効果による回復も追い付いていないうえ、見ていて何らかの癒し効果がありそうな気がしたため、はわわあわわ言っている二人の頭を撫でてみたりしたところ、風からの圧力を更に上げることとなった。

（俺にどうしろってんだ!?　つーか、ここまで怒らせるようなことしたか？）

悪くなるばかりの状況に、誰でもいいから、この状況を変えるキッカケをつくってくれないかと、切に思い出した頃――――

「周囲を警戒中の兵より伝令！　南方より、こちらに接近中の部隊あり。加えまして、その部隊の使者が来ており、我らの責任者に会いたいとのことです」

吉と出るか凶と出るか分からないが、新たな勢力が接近中という報告を聞いた俺が南を向くと、遠方で砂塵が舞いだしているのが見えた。

「掲げる旗は？」

星が聞いた質問に返ってきた答えは……

「“曹”……ね」

それは、俺がこの世界に初めて来た時に見かけた勢力で。

その時は余裕がなかったから思いつかなかったが、今から会う奴ってのは、おそらく――――

俺は、もうすぐ会えるだろう英傑のことを考えながら、擦り減った心を奮い起こし、相手の到着を待つのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

使者に「会おう」と返事をし、待つことしばし――――

「ふうん、これが噂の天の軍、か。中々優秀そうな人材が揃っているわね」

星たちを値踏みするような視線を向けながらこちらにやって来る、見た目のわりに尊大な態度をとる少女。

「何者だ！」

愛紗が桃香を護るように立ち塞がって威圧するも、少女はその気当

たりを軽やかに受け流したかのように、歩みを遅らせることなく近寄って来る。

少女の代わりに反応したのは、両側に控えるように並んでいる二人のうちの一人だった。

「控えろ貴様らっ！　この方こそ、我らが主、曹操様である！」

（コイツが……曹操）

――三月の終わり。

春らしい温かな日差しが降りそそぐ日、ハセヲは彼女に出会った。

## 第9話（後書き）

どうも、お久しぶりです。私の拙文をここまで読んでいただき、ありがとうございました。

そして紫電様、感想ありがとうございました！おかげさまで、私にしては早めに更新できたと思います。

え～、今後の予定としては、今月中にもう2話更新して次の展開にうつるつもりです。気になったら、また読んでくださると嬉しいです。

## 第１０話（前書き）

さて、今更ですが色々やってしまった今回の話。
読者の皆様はどう思われるでしょうか？

アンケートにもご協力いただきたいので、合わせてコメントをいただけると嬉しいです。詳しくは後書きにて。

# 第１０話

ハセヲ　ｓｉｄｅ

――曹孟徳。

三国志における、劉備と並ぶ主人公格にして、後に“魏”を建国する英傑。

歴史をあまり知らない人間でも、その名前ぐらいは聞いたことがある筈といえるほどの有名な人物であり、俺自身もそのうちの一人だ。

（コイツが……曹操）

華奢で小柄な身体からは想像もつかないような“絶対的な強者”、“支配する者”としての風格を醸し出し、こちらへ歩み寄って来る少女。

こちらの視線を一身に受けながらも、ぶれることなく見つめ返してくる透き通るような蒼い瞳は、面白いものを見つけたような歓心と、同時にそれらを見極めるような知的さを持ち合わせているかのように見える。

まさにその姿は、どこへ出ても恥じることはないといった堂のいったものであり、目の前に立たれると、とっさに背筋を伸ばしてしまいそうになる気さえ感じられるほどだ。

これまでに俺が出会った奴の中で、こんな思いをしたと感じたのは……“オーヴァン”と、ケストレルのギルドマスターである“がび”、イコロの“太白”くらいのもんである。

（“八咫”は……アイツの場合、無駄に口がまわって偉そうな上司っていうイメージが先行してそんな気にはならねえし、他に偉そうな奴といえば……さかk……嫌なモン思い出しそうになっちまった）

そのせいで思わず俺が顔をしかめると、それに反応したのか曹操がスッと目を細め、それに伴って空気も先ほどよりも緊迫したものになる。

実際、視線を横に向ければ、桃香の肩に不自然な力が入っているのが見てとれたし、朱里も若干腰が引けていたが、親友である雛里が後ろに回り込んでいるため、それ以上は下がれそうにないようだった。

関羽は突然現れた曹操たちを警戒して臨戦態勢をとっており、鈴々は場の緊迫感とは無縁のような雰囲気を感じさせつつも、本能で感じ取っているのか、いざという時はすぐに対応できる位置取りをしている。

後ろにいる筈の星たちは……良く分からない。

さすがにここで後ろを振り返れば、この目の前の「貴様っ！？　華琳様のご尊顔を見て顔をしかめるとは何事だ！　その腐った目、ここで抉りとってくれる！」……って、もう殺る気になってやがるのかよっ！？

帯刀している剣に手をかけ、こちらに飛び出そうとして来るのは曹

操ではなく、その横に控えていた赤い衣装で身を包んだ、長い黒髪の女。

それに思わず舌打ちしながら身を護るため、武器を呼び出そうとしたところ――

「春蘭、やめなさい！」

その凛と響く声に身体を急停止させた赤い服の女は、何故ですかと言わんばかりの顔を曹操に向ける。

「しかし、華琳様！」

「この男の顔を察するに、別の考え事でもしてたんでしょう。まあ、失礼なことに変わりはないけれど、初対面の人間をいきなり斬るというのも考え物だわ。“次”の機会まで我慢しなさい」

「ハッ！　“次”こそ必ずや！」

そう言って赤い服の女は、変わらず好戦的な目をこちらに向けながらも引きさがった。

というか気になることがあるんだが……

「なあ、今の言葉だと次に同じことがあったら、もう止めないっていうふうに聞こえたんだが？」

俺が、誰もがおかしいだろうと思う疑問を口にすると……

「ええ、そういう意味で言ったわ。ちゃんと一度目は止めてあげた

じゃない。権力を行使できる立場にいるくせに、失敗に学ばず、同じ過ちを繰り返す人間に、私は用がないもの」

「……」

何を当然なことを、というふうに言いきる曹操を、俺は半ば呆然と見つめる。

言ってることの意味は分からなくもないが、そこまで毅然と言い切る姿を見た俺は、同じ人の形をしていても、中身は全くの別物だということを強く認識した。

（これが、一国を担う者の在り方ってやつなのかもしれねぇが……まあ、理解はできても、共感したくはねぇな）

『過ぎたるは及ばざるがごとし』じゃないが、あれだと自分も周りも疲れてしまうだろ、と思った俺だったが、両側に控える二人は曹操に心酔しているように見えるし、何より……曹操が弱音を吐く姿を全く想像できなかった。

（まあ、何でもいいか。これ以上面倒なことになるのはゴメンだ）

「ああ、気をつけるとするさ。だから、ソイツの手綱をしっかりと握っておいてくれよ」

「それは貴方の態度次第ね」

「……」

こちらが肩をすくめて呆れた調子で返事を返せば、あちらも挑発的

な返事をよこす。

――大体分かった。

俺も大概捻くれ者だという認識はあるが、性格の方向性こそ違えど、コイツと比べたらカワイイもんである。

自分に絶対的な自信をもっていて、たてつこうとする者は何であろうと受けて立ち、打ち倒していく。

そうやって生きてきたんだろう姿が、言動からヒシヒシと伝わってきた。

（……とりあえず面倒な奴だってのは、良く分かった）

さて、一体コイツらがやってきた理由は何なのか、と考え始めたところで……

「～～～ぐぅ」

お、曹操の奴がつんのめった。

「こ、こら!?　風!」

「おおっ！　中々に嫌な空気が続いていたので、つい～」

とまあ、いきなりの剣幕から続いている嫌な空気の中、相変わらずマイペースな風のイビキ?が、場の空気を一気に弛緩させた。

稟が慌てて風をたしなめているが、俺は内心良くやったとエールをおくる。

「まあいいわ、改めて名乗りましょう。我が名は曹操。官軍に請われ、黄巾党を征伐するために、軍を率いて転戦している人間よ」

風のおかげ（？）で、良い感じに緩んだ空気の中、曹操は気を取り直そうとするかのように、淡々と自己紹介をしてきた。

「ハセヲだ。んで、こっちが……」

「りゅ、劉備と言います！」

いきなり話を振られたからか、まくしたてるかのように言葉を放つ桃香。

まだ、肩に力が入ってんのか？

「見ての通りの義勇軍として、ボチボチやってる」

「……」

曹操は、また全てを見通すかのような蒼い瞳で値踏みするように俺を、そして桃香を見つめ、口を開いた。

「……ハセヲ。では、貴方が“天の御遣い”だというの？」

（……桃香も知ってたみたいだが、その通り名ってそんなに広まってんのか？）

「そうなんですよ～、私も危ないところを助けてもらって！“天の御遣い”様の部隊は、とっても強かったですよ♪」

途端、俺を持ちあげるように、口を挟んできた桃香。

というか余計なことを言うな！　変に話がこじれでもしたら……

「ふうん、あのつまらない与太話が本当のことだと、そう言い張りたいのかしら？」

――見ろ、胡散臭げかつ馬鹿にしたような笑いを浮かべてやがるし。

「いや、例え本当だったとしても証明する気もねぇし。言いたい奴には勝手に言わせておけばいいじゃねえか」

投げやりに言い捨ててから、ふと気付いた。

妙な沈黙を続けている背後にいる仲間たち。

特に曹操に憧れていると聞いていた稟が静かなのは気になったが、振り返りはしない、できない。

今もまだかまだかと、曹操からの命令を待っている赤い服の女を前にして、隙を見せることはできなかった。

「貴様！　曹操様に何という口の聞き方を！」

――予想はしていたが、再び牙を剥こうとして来る赤服女。

「やめなさい春蘭。この男の言うことも尤よ。本物と証明する術が無い以上、それを信じるか信じないかはそれぞれが考えること」

まあ、いくらか証明するための方法はあるわけだが、これ以上変な関心を向けられるのは避けたかった。

（にしても、本当に気が短い奴だな、赤服女は。自分の服の色で興奮して突撃して来る牛かっつの）

そうだとするならば、さながら俺はマタドールといったところだろうが……倒しても倒しても肉体の限界を超越した“ナニ”かによって立ち向かってくるイメージしか湧かないのは何故だ？

「まあ、本物かどうかは置いておくとして。貴方がこの部隊を率いていたという訳ね」

「俺だけの力じゃねえ。俺の我がままに付き合ってくれる、馬鹿みてえなお人よしたちの力があってこそ、だ」

俺を主と呼び、付いて来てくれる星、風、稟、自らの意志で俺と共に闘うことを決めた旅団の仲間たち。

――俺は、絶対にコイツらを軽んじる気は無い。

「へぇ……」

何かに感じ入ったかのように呟いた後、曹操は俺の顔をジロジロと見つめ……

「悪くは……ない、か」

「何のことだ？」

良く分かんねえが、何らかの自己完結を迎えたらしい。

その表情は、これまでの不敵だとか嘲りだとか作り物めいたものではなく、どこか自然な感じがするものだった。

そして、もう一つ分からんのが、背中に突き刺さるような視線を感じるようになったことだ。

しかし、前述した理由により、振り返ることが出来ない俺は、この雰囲気を何とかしようと、話題を変える事にした。

「……それで？　わざわざ出向いて来たのは、俺たちを見かけたから挨拶に来たって訳じゃねえんだろ？」

俺の質問に、再び毅然とした顔を浮かべた曹操が「当たり前でしょう」と言いきり、

「ではハセヲ、貴方がこの乱世で決起して為そうとしている事は何？」

唐突な質問ではあるが、つい昨夜にも聞かれたばかりの質問を投げかけられた。

しかし、いくら何でもこの状況で全てを言って聞かせたとしても、信じてはもらえないだろう。

――牛女あたりは、何を訳の分らんことをーーー！とか言って飛び込んできやがるだろうし。

そこで俺は、昨夜桃香に話したばかりの話を、続いて曹操に話すことにした。

「俺の単なる我がままみてえなもんだ。気のいい仲間がいて、追いつきたい奴がいて。そんな自分にとって護りたかった世界を取り戻したいってだけの……それでも譲れねえ理由」

俺の願いであり、叶えるべき現実（おもい）。

また言う羽目になるとは微塵も思ってなかった。

しかも、劉備、曹操といった希代の人物に対して、だ。

「仮にも“天”から遣わされたとされる者が口にするとしては……小さい理由ね」

「アンタにとやかく言われることじゃねえ。何が大切か、それを決めるのは俺の『意思』だ」

「貴様っ！？　もう我慢ならん！」

俺の言葉に、三度激昂した牛女が躍り出ようとしてくるが、知ったことではなかった。

今の曹操の言葉を認めたら、俺が・・・Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄに刻んできた想いの全てを――否定する気がしたからだ。

「控えろ！　夏侯元譲っ！！！」

「っ！？　ハッ！」

そこに鳴り響いたのは裂帛の怒声。

これまでの中で一番の感情が込められていただろう制止の合図に、牛女はザッと跪く。

「誰から何と言われようと、そこに自分が決めた信念があり、それを貫こうとする人間は、嫌いじゃないわよ」

どうやら曹操に対して、礼を失していたとしても、すぐサヨナラという訳ではないらしい。

曹操は満足そうな笑みを浮かべ、続いて視線を横へ向け……

「では劉備、貴女は？」

元々、両方の軍に興味はあったんだろうが、今まで話を振らなかった桃香に対しても、唐突に同じ質問を投げかけた。

「私は……この大陸を、誰しもが笑顔で過ごせる平和な国にしたい」

先ほどの曹操の一喝によるダメージがあったのか、若干ふらつきながらも、胸に抱いた大志を、桃香は真剣そのものな表情で告げる。

「そして……そのためには誰にも負けない、負けたくないって、そう思ってる」

「そう……分かったわ」

ハッキリと言い切った桃香、ゆっくりと頷く曹操。

――真剣な面持ちで向き合う二人は、お互いに何を思っているのか。

「ならば劉備よ、平和を乱す元凶である黄巾党を殲滅するため、今は私に力を貸しなさい」

また唐突に……と思ったが、もとよりそのつもりだったのかもしれない。

そう感じさせるほど、曹操の言葉は“為るべくして為る”といったような、威厳に満ち溢れたものだった。

「今の貴女に独力で黄巾の乱を鎮める力は無いでしょう。だけど、今は一刻も早く暴徒を鎮圧することこそが大事。違うかしら？」

「……そうだと思う」

対する桃香は、曹操に話の主導権を握られっ放しなことに気付いているからだろう、少々戸惑い気味だ。

実際、桃香たちにとってこの申し出は嬉しいものだろう。

だが、曹操にとっては――

―
―
―
―
―
―
―

結果としては、協力を受け入れた桃香たち。

その様子を眺めていた俺に、曹操は予想通りの提案を持ちかけてきた。

「ハセヲ。貴方も、黄巾党の殲滅のため、今は私に協力しなさい」

「……『今は』、ね」

他意があって言ってか知らねえが、俺が呟いた言葉に反応し、曹操は口の端をつりあげて笑みを浮かべる。

（ああ、ハナっからそのつもりだったってわけか……）

それでも、黄巾党を殲滅するまでの間は信用してもいい相手かと、曹操の振舞いを見て判断していた俺は、いい加減何らかの反応を見せてほしい星たちへと向き直ろうとする。

その時だった。

「……どうした？」

俺の背中に、何かが軽くのしかかってくる感じがしたのは。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

## 稟　ｓｉｄｅ

「あ……」

昨夜、私は様子がおかしかったハセヲ殿が気になって後をつけた。

そこで見たのは、ハセヲ殿と手を取り合い、和やかな雰囲気をつくっている桃香殿――真名はお互いに許しあっている――の姿。

その光景は、私にとって『特別』なもの――ハセヲ殿と“友”になれた、始まりの記憶。

今の私の胸に渦巻く感情は何だろう。

嫉妬では……ない。

不器用で、愛想がなくて、捻くれているところもあるけれど……どこか気になる男（ヒト）。

この方の力になりたいと思った。

この方の障害となるモノを、我が知謀で切り拓こうと思った。

だから、恋慕の感情など抱いてはいない。

この身はただ、ハセヲ殿の願いの成就を成し遂げるために、悩みを抱えた時の支えとなるために砕けばよいのだ――“友”として。

（男と女が友情だけで一緒にいられると思ってんのか？）

だというのに、宝慧の言葉がサッと頭をよぎり、胸の辺りに鈍い痛みが走る。

（そうよ、そんな気持ちなんてない……）

そう在ることが、この乱世を鎮めることに繋がる筈なのだから。

――だから不安になったのは、別の事だ。

天から来たというハセヲ殿は、いつかは本当の居場所に帰ってしまう。

そのことが認められなくて、ハセヲ殿の心を『ここ』に繋ぎとめるため『鎖』となれる人物が必要だと、私たちは考えた。

『鎖』の数は多いに越したことはない。

といっても、横を見やれば星も風も面白く思ってないのは明らかだった。

私自身、似たような想いを抱えているわけだが、一方で……こんな考えが私の中に生まれている。

私にとって、ハセヲ殿が得難い“友”であり、“主君”であるように、ハセヲ殿にとっての同じ立場の存在ができたとしたら。

万が一、そのような者と出会った場合、ハセヲ殿は私から離れていってしまうのではないか。

昨夜のあの光景を見てからずっと、そんな事ばかりを考えていた。

ハセヲ殿がどんな選択をしようと、私はハセヲ殿と共に往く。

それだけは確かなことだけれど、ハセヲ殿が私と同じような想いに駆られて、私以外の誰かと共に歩もうとするなら、私にそれを止める権利はない。

そもそも、昨日の今日ということもあったがために話を聞く事も出来ず、ただ目まぐるしく移る展開に流されているように感じる自分が気に入らなかった。

憧れであった曹操殿との邂逅、曹操殿と劉備義勇軍の共同戦線の結成、そして――旅団への助力の要請。

曹操殿の言葉を、ハセヲ殿は態度こそ乗り気には見せないものの、否定の言葉を発さないことから、半ば以上受け入れるつもりだと察せられた。

（……あ）

その言動に、猛烈な不安が脳裏をよぎる。

次こそ……私から離れていくのだろうか？

そんなの嫌だ。

ハセヲ殿が次に発する言葉を、とる行動を……聞きたくない、見た

くない。

そう思った瞬間、今朝から妙に遠く感じたハセヲ殿との距離を縮め、私は両手をハセヲ殿の背中に当てて身体を寄り添わせ、体重を預けていた。

「……どうした？」

怪訝な表情で尋ねてくるハセヲ殿。

「……」

当然の疑問だと思うけれど、私自身、こうしている自分が信じられない。

しかし、預けた身体を離す気にはなれなかった。

（この身を離したら……）

皆に見られている。
離れないといけない。
これ以上は……まずいのだ。

早くしないと誤魔化せなくなる。
私の……“想い”が。

（私の――――“愛しい人”が離れていってしまう！）

ずっと憧れていた筈の曹操殿が目の前にいるというのに、今の私に感じ取れたのは、ハセヲ殿の広い背中と、その温もりだけだった。

凜　ｓｉｄｅ　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「凜？　本当にどうした？」

俺の背中に身体を預けたまま、何も言わない凜。

今朝から妙な視線を送ってきてたが、今度のこれにはどんな意味があるってんだ？

体重のかかり具合からいって、ほぼ完全に俺に身体を委ねている様子なため、動こうにも動けない状況。

何回かの声かけにも反応しないため、本格的におかしなことになったと判断した俺は、後ろ手に凜を掴んで引き剥がそうとしたんだが……

「（フルフル）……／／／」

「……おい／／／」

（何がしてえんだ、コイツは!?　なんつーか、もう別人だろ!?）

今、俺は稟に背後から抱き締められている。

俺が後ろに手を回そうとした瞬間、そうはさせじといわんばかりに、稟によって抱き締められたわけだ。

稟の顔は俺の背に埋もれて窺えないが、その身体が少し震えていることは、隙間なく触れ合っているために伝わってきた。

あれだ、夢でもみてるんじゃないかと思う。

だってあの稟だぞ、冗談でもこんなことをする奴じゃない。

だが、背中に伝わる温かさ、柔らかさは圧倒的な現実感をもって、俺を混乱の極地へと誘う。

（……本当に何が起こってるんだよ?）

「フフフ、大丈夫よ♪　貴女から彼を取ったりはしないわ」

ん?　震えが止まったか。

ずっと傍観していた曹操が放った不可解な発言の意味を理解しようとしたところ、これまで離れようとしなかった稟が、先ほどの言葉に反応したのか、身を離した。

目をやれば、俺の背に身体を預けていた稟は普段の毅然とした姿を

全く想像できないほどに、おとなしい感じになっている。

――――隠しようがないほどに、頬を赤らめて。

そして、ようやくさっきの曹操の言葉の意味に当たりをつけ……

（いや、それはねー）

即座に却下した。どう考えても、稟のキャラじゃない。

「なるほど、随分と慕われているようね。しかし、この様子では相当に苦労しそうだけれど？」

また得意の自己完結を迎えている曹操を見やる俺の横に、誰かが並び立つ。

「ああ、どうしようもないほどにアレな方ではあるが……“これ”が我が『主』なのでな」

「そうですね～、ここまでされて訳が分かってないような顔をされるのはどうなんだって感じですがー。まあ、“これ”がお兄さんですしねー」

どうして俺が責められる？

あと、“これ”っていうんじゃねえ！

「……もう少し、空気を読めるようになった方がいいですよ」

（……余計な御世話だ！）

いつの間に復活したのか、まだ赤さが残る顔で、気丈に振る舞おうとする稟。

ニヤニヤと見ている曹操、どこか羨ましそうな視線を送ってくる桃香、そしてその取り巻きたちをとりあえずスルーし、稟に正対する。

その顔は、今朝のそれはもちろん、普段のそれと比べても随分スッキリしたものとなっている。

――まるで、ようやく望んだ『答え』を得たかのように。

「……曹操の提案を受けようと思うんだが、構わないか？」

「どうせ、私が何を言ったところで貴殿は意見を曲げないでしょう？　ならば私の仕事は、共同戦線をはるにあたって、いかに相手側との折衝を上手くつけるかということ」

「風の仕事は、同盟相手との連携を考えたうえでの隊の再編成、指揮系統の確立、物資の補充といったところですねー」

「私の仕事は、共闘を見越したうえでの調練、そして戦場にて主の敵を討ち、道を切り拓く槍となること、だな」

打てば響くように返ってきた頼もしい返事を受け、改めて曹操へと向き直る。

「聞いた通りだ、協力しようじゃねーか」

それに対して「結構。詳細は軍師同士で話し合いなさい」との言葉とともに、満足そうに笑って用は済んだとばかりに背を向ける曹操。

その背中に、これだけはと思っていた質問を投げかけた。

「なあ、この腕輪がアンタ達には見えるか？」

こちらの言葉に反応し、首だけを振り向かせ、掲げた俺の右腕を見やる曹操、牛女、青い服の女。

この言葉が意味する事実を知っている星たちが、はっと息を呑みながら返事を待っていると……

「……」

「ハァ？　何を言ってるのだ貴様？　腕輪なんぞ、つけとらんだろうが」

「そのような物は見えないが……」

こちらを馬鹿にしきったような声をあげる牛女に、そういえば、初めて声を聞いた青服女。

（そういや、曹操の一喝を至近距離で喰らった筈なんだが……平気そうだな）

油断のならない奴だと俺が考えていたところで、妙な沈黙を続けている曹操に気がつく。

しかし、どうしたのか尋ねようとしたところで……

「……いいえ、そんな“モノ”見えないわ」

そう言い捨て、今度こそ背を向けて去っていった。

その姿をどこか複雑な想いで見送ってから、皆の方を振り返った俺を待っていたのは……

「お兄さん。今回は稟ちゃんに免じて許してあげますが、これからはもっと風たちの気苦労を察して、風たちに気を配りましょ～。まず、手始めに気疲れで上手く回らない頭を癒すべく、撫でてくれませんか～？」

この言葉を皮切りに始まった、相変わらず本気か冗談かよく分からない日常風景（じゃれあい）だった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

曹操　ｓｉｄｅ

「華琳様の好敵手となり得ますかな、劉備は？」

「なれば良し。我が覇業に華を添える、素晴らしき脇役となるでしょう。ならぬのならばそれも良し。所詮、一時の戯れなのだから」

先ほどの邂逅に想いを馳せ、私は久しぶりに心躍る日であったこと

を悦んだ。

「それでは、ハセヲは？」

私の本質を理解する、という意味では、この左腕たる娘に及ぶ者はいないだろう。

「……喰えない男、と言った所かしら。むしろ、あちらの方が面白そうではあったわね」

「面白そう、とは……また悪い癖が出ましたね」

言いながら薄く笑う秋蘭も、私と内心同じ想いを抱いたのだと思う。

「しかし、私は、それでこそ華琳様だとも思えます。貴女の傍に控えられるだけで、私の世界は鮮やかな色に染まるのですから」

秋蘭のその言葉に、気持ちが楽しく弾むのが分かる。

「ふふっ♪　それでこそ、よ」

それにしても……天の御遣い“ハセヲ”か。

「しかし、あの男……最後の質問はどういう意味だったのだ？　やはり馬鹿なことをぬかしたとして、斬っておくべきだったか！」

戦場においては誰よりも頼もしい我が右腕たる娘の言葉を聞いた途端、弾んでいた心が一気に凪いだ。

「華琳様？」

「……」

春蘭の言葉も耳に入らない。

何だろう、この感覚は。

まるで、突然自分の内に知らない『ナニか』が生まれおちるような……そんな感覚。

それは、訳の分からないモノに対する本能的な恐怖と。

それでいて、どこか馴染み深いモノという矛盾した感覚を孕んでいた。

“これ”を感じたのは、あの男を振り返りざまに見た時だ。

（そう……確かに腕輪なんて見えなかった）

ただ……何だろう？　一瞬だが、あの男の後ろに見えた気がしたのだ。

――煌々と輝く赤い三つ目をこちらに向ける、黒い巨人の姿を。

「……様！　華琳様！」

「っ！？」

「如何なさいました！？」

ハッと声のする方を見やれば、心配そうな顔を向ける我が両腕の娘たち。

それに「何でもないわ」と返してから、再度ほどほどに思考を開始する。

根拠はないのだけれど、“ハセヲ”という存在は、私にとって無関係ではいられない気がした。

「……面白い」

我が覇道にどのような関わりを持つかは分からないが、敵対するのであれば容赦はしない。

利用できるのであれば、精々上手く利用させてもらう。

そう結論付けた私は、背を向けていた“百日の旅団”の陣を今一度振り返り、再び本陣に向けて進み始めたのだった。

曹操　ｓｉｄｅ　了

それから半年、ハセヲたちは桃香、曹操の軍と共に転戦を続け、相対した黄巾党主軍との大戦に勝利する。

その時に首魁『張角』を曹操が討ち取ったという報告が入り、それ

を知った黄巾たちの抵抗力は一気に失われていった。

まだ黄巾たちの残党は存在していたが――事実上、黄巾の乱は、ここでその幕を閉じたのだった。

## 第１０話（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

そして前回感想をくださった御二方に心からの感謝を！ヤル気を出して書いてみた今回の話、どうだったでしょうか。楽しんでいただけたなら幸いです。

それから１０万アクセス記念にオマケ話を書こうと思っているので、良ければご協力願います。

ベタな展開として、現時点のハセヲのもとに、Ｇ．Ｕ．の仲間が一日だけ来訪する話にしようかなと考えています。なので次の内から、一人選んでください。

？アトリ
？志乃
？揺光
？パイ
？それ以外のＧ．Ｕ．キャラ（オーヴァンを除く）

？の場合、どんな話にするか考えてないので時間がかかるかもです。

（まあ、？～？で選んだとしても、あまり期待されないほうが良いですが。）

最後にもう一つ。こちらは読者の皆様の意見を反映するのは難しいかもしれませんが、今後のルート選択に関して、皆様はどのルートを希望されているのか参考までに知りたいと思っています。（ちな

みに、私はまだ決めてません。）

魏、呉、蜀の三ルートなら、どれが良いかも併せて教えてくだされればと思います。

このアンケートは、一週間で締め切ろうと思っていますので、どうかよろしくお願いします。

## デス☆ランディの日記～軍師編～（前書き）

前回のアンケートに協力してくださった読者の皆様！本当にありがとうございました！

アンケートは本日いっぱいで打ち切りますので、まだの方がいましたら、よろしくお願いします！

# デス☆ランディの日記～軍師編～

オイラはデス☆ランディ。

今はギルドを離れ、異世界までやって来て、ハセヲの面倒をみてやってるブヒ。

本当に……思えば遠くへ来たもんだブヒよ。

この世界に来てからそれなりに時間が経ったブヒが、ハセヲの周りには自然と人（特に綺麗な女性）が集まったブヒ。

いつも賑やかで結構ブヒが……フォローにまわるオイラの身にもなってほしいブヒ。

（この前だって、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄのアイテムを売って資金に換えるにあたって、強力なスキルの付加された武器を、危険性のないように改造するため、死ぬほど働かされたんだブヒ！）

まあ、そんなこんなで日課としている日記の話題には事欠かず、結構な量になったブヒ。

そこで今日は――

「たまには、ゆっくりしても罰は当たらないブヒね～」

日記に書いたハセヲへの愚痴や、間抜けっぷりな様子を読み返して過ごそうと決め、オイラはゴロリと横になって、日記に目をやったんだブヒ。

＊　＊　＊　＊　＊

〇月×日

「……それで？　何があったというのだ？」

本陣から少し離れた、もとより何も無かった筈の荒野にできた不自然な窪み。

その中心で仰向けになって倒れている、銀髪に白い軽鎧を纏った少年を確認し、星は面白半分驚き半分といった声で尋ねた。

その少年――ハセヲは、本当に疲れ果てたといった感じの声で答えてきた。

「……分かんねえよ。俺が聞きてえくらいだ」

「……」

その投げやりな答えに、星は一つ嘆息をくれてから、ハセヲに近づいていった。

近くで見れば、普段の無愛想な顔は、更なる不機嫌さと疲労感で歪み、遠目にも目立つ髪と服は、所々が焦げているようだった。

目の前まで近づいても、一向に起きる気配をみせないハセヲを見やり、ついで星は辺りを再度見回した。

特段変わったものは見えない――この窪みを除いては。

まるで、巨大な質量をもった石が落下してきたかのようなヘコミ具合。

その形はハセヲを中心として同心円状に広がっており、何らかの衝撃が均等な力加減でぶつかったものと推察された。

そしてそのハセヲには、何故か焦げたような痕が残っている。

「私が見たときには、風や稟といった軍師の御歴々方と一緒にいた筈だろう？　何がどうしたら、こんなことになるというのだ？」

突然に鳴り響いた轟音。

そして直後に飛び込んできた風と稟から、ハセヲを助けてあげてほしいと懇願されたため、慌てて駆けつけてみればこの有様だった。

しかし、駆けつけてみれば予想に反して緊迫はしていなかった空気に、星が疑問の声をあげたところで――

「アアアァァアア……」

背後からあがった呻き声。

その声に、星は思わず身震いするのを感じた。

――できれば聞きたくない声であったからである。

先ほどから、何とか気付かないようにしていたのだが、ここまでかと覚悟を決め、声のした方に振り返った。

そこにいたのは一人の男。

これまた遠目にも目立つ、ツギハギだらけのくすんだ赤の軽鎧を纏った少年?が顔を俯かせ、座っていた。

――――――体育座りで。

(……本当に何があったというのだ?)

あまりの不可思議な光景に、星が不気味さを感じるのも無理はない。

“天”の守護者として容赦なく刃を振るい、“ヒト”らしい感情が欠片もみせることなく、戦場を駆ける姿は、まさに鬼神のようだといわれているカイトが――ともあろうか体育座りをしている。

元々小柄な体躯を丸めていることもあって、その姿はとても小さく見えるが、あまりの異常性からか、その存在感は際立って感じられた。

(ん?　これは……震えているのか?)

星は信じられないものを見たかのように、整った顔を驚きに染めた。

良く見れば、カイトの身体は何かに怯えているかのように震えてい

たのだ。

「とにかく事の経緯を話せ。この光景は尋常なものではない」

星の言葉に首を軽く振って応えたハセヲは、倒れた姿勢のままにポツリポツリと事の経緯を話し始めたのだった。

そもそもの発端は、ハセヲが各陣営の軍師たちとしていた約束だった。

「どうして凛ちゃんがいるんですか～？」

「なぜ風までいるのです？」

普段は仲が良い二人であるが、今回の件に関していえばいない方がよかったために、自然と険のこもった声を、この事態を招いた張本人へと発した。

「俺が誘ったからだ。頼まれてた内容は似たモンだったしな。まとめてすませちまった方が効率いいだろ？」

それを受けたハセヲは、何を気にしているのか分からないといった感じで答えを返す。

あまりに分かっていない態度に、二人は深々と溜息をつき、ジロリと念のこもった視線を送る。

ハセヲが思わず後ずさっていたが、知ったことではなかった。

（本当にこの方はっ！？　そんな頼みなど、建前にすぎないというのに！）

（この時点で、風たちのことを好意的には見ていても、恋愛感情を抱いてはいないのは決定的ですねー。そもそも風たちからの気すら感じとってないようですし）

劉備や曹操との出会いを経て、ハセヲへの“想い”を確信した稟。

自分はどうしたいのか、その“答え”を得た稟にはもう迷いや恐れは無かった。

（私はハセヲ殿の“臣”であり、“友”である身だが……いつかは“伴侶”となるためにハセヲ殿と共に往こう。私はそうすると決めたのだから。それだというのに！？）

確かに迷いや恐れはなくなった稟であったが、目の前の唐変朴ときたら未だに訳が分からないといった顔をしているのだ。

このヤキモキ感だけは、ハセヲと共に在るならば、この先ずっと付きまとうものになるのだろうな、と稟は痛感していた。

一方の風といえば、先日の件で親友の迷いが晴れたこともあって、遠慮なく（初めからあったか？）ハセヲに絡むようになった。

今回の件も、ハセヲと二人きりで話をするための口実作りだったのだが、ひょっとするとハセヲに警戒されてしまったのかもしれない

と風は思う。

（何をしても、お兄さんときたら冗談としかとってくれませんし。この分だと想いを告げたとしても……流石にそれは……ない、ですよね～？）

関わった人の想いに対して、決して無視をすることはないハセヲではあるが、こと恋愛に関しては確信がもてない風だった。

二人が女性関係にはてんで弱いくせに、なぜか魅力的な女性との関わりが増え続ける主君について不満を募らせていると……

「はわわ……。天の世界のお話、とっても楽しみだね、雛里ちゃん！」

「そうだね、朱里ちゃん。わ、私は道具にも興味があるなぁ」

「つまらない話を聞かせるんじゃないわよ！　華琳様の代行として、きっちり納得いくまで終わらせてあげないんだからっ！」

――明らかにハセヲに用事のありそうな感じで、揃ってやって来た劉備、曹操陣営の軍師たちの姿が。

これも唐変朴（あなた）の仕業かと、風と稟が視線で問えば、悪びれもせず首肯してきた唐変朴（ハセヲ）。

思わず頭を抱えたくなった二人だが、新たにやって来た面々を見て帰る気は微塵もなさそうだと判断し、本来の用件――天の世界の話や道具の観賞――を始めることにしたのだった。（後にキッチリ埋め合わせをさせるつもりなのは言うまでもない）

―――――――――

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「……なあ、お前ら離れる気はねえのか？」

話し始めてからそれなりの時間が経ち、もう何度目かの言葉を投げかける。

しかし、それはまた誰にも受け入れられず、虚しく空へと吸い込まれそうだった。

「何を言うのです、ハセヲ殿。この人数で始めようとしたのは貴殿なのですよ。ならば、最後までやり遂げていただかなくては！」

言うことはまともなんだが、座って地面についていた俺の左手の上に、自分の右手をそえるように重ね、身体を預けるように俺の左肩にもたれている稟。

俺の最後の砦だった稟が……と嘆きつつも、その顔に以前のような陰りがないことから、しょうがねえかとも思う。

稟に取られている手から伝わる温かさ、左手に預けられた身体（特

にひじの部分）から感じる柔らかさに、思わずどぎまぎしてしまう。

これだけでも余裕のない俺の前には――風がいるのだ。

「そうですよ、お兄さん。今は風の背もたれとしての務めをしっかりと果たしてくれませんと～♪」

そういうお前はフリーダムすぎだ、と心から思う。

今の風は、俺が両足を開いて座ったことで空いたスペースに座りこみ、俺の胸にもたれかかっている。

穏やかな風が吹くたびに、まるで構ってくれと言わんばかりになびいてくる、風の豊かな黄金の髪がこそばゆい。

それと同時にほのかに香る良い匂いに、俺の頭は軽く酒でも飲んだかのような酩酊感を感じていた。

口では何にも言ってこないが、きっと俺の心音が普段通りのものじゃないくらい、風にはお見通しなんだろう。

何かにつけて俺の反応を楽しむ癖のある風にとって、今の状況は好ましいものなのか、言葉尻には喜色の色が窺えた。

――もとはといえば、座っていた俺の前にいつの間にか風が移動してきたため逃げようとしたんだが、その前に稟に手を取られて封殺、今の状況に至るわけだ。

この姿勢を維持し続けて、それなりに時間が経つ。

体力的な疲労はさほど感じないが、精神の方はヤバかった。

だというのに……

「はわ～、何てステキなんでしょう♪」

「うん、私も興奮しちゃって！　今日は眠れないかも♪」

それぞれ俺の両肩に手をそえ、もたれるように肩越しに顔を出している朱里と雛里。

最初こそ好奇の目を覗かせつつも、俺とは適度な距離をとっていたんだが、風の移動があってからジワジワと距離をつめ、今ではふと顔を動かせば頬がくっつくのではないかと思うほどに距離が近い。

実際、俺がそのことを指摘すれば真っ赤になって顔だけは遠ざけるのだが、気付けば元通りになっているのだ。

三回ほど繰り返したところで、探究心のなせる行動なのかと諦めかけたころ……

「「羨ましいなぁ……」」

――とっさに聞こえた、聞こえてしまった呟きのような声。

その後、何となく感じる視線を追えば、たまにＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄの道具ではなく、風や稟に視線が注がれていることに気付き……大いに嫌な予感がした。

（いや、きっと気のせいだ！　あいつらの目は、好奇心に満ちてる。

間違っても……望やガスパーみてえな物欲しそうな視線を“俺”に向けてくる訳がねえ！）

そうなったらきっと太刀打ちできない気がした俺は、今も感じる視線を無視し、唯一の安牌へと右斜め前方にいる少女へと視線を固定した。

――荀文若。

その名前に俺は聞き覚えがなかったが、曹操の軍師を務めるほどなんだから、実力は一級品ということは分かっている。

ただ、この女はハセヲにとって“二つ”の意味で厄介な存在だった。

まず一つ目の意味は――

「不必要に近寄るんじゃないわよっ！　ああもう！　華琳様からの命令じゃなきゃ、こんな男の傍にいるだなんて耐えられないわっ！」

「……」

可愛らしい見た目からは想像もできない毒を吐く“男嫌い”の“曹操命”な女であったことだ。

荀？が俺に向けて口を開くたびに繰り出される罵詈雑言は、無駄に語彙が豊かなこともあって、とどまることを知らない。

軍師を名乗るなら、これほど感情の起伏が激しいのはどうかとも思ったが、そこは曹操と共闘した際の陣頭指揮を見れば全くの杞憂となった。

相手の手を読み取ったうえで、権謀術数をめぐらした策をもって相手を絡め取る手腕は、見事としか言いようがなかったのだ。

――ただ、戦場ではどこまでもキレる頭も、俺に対して毒を吐く際にはなぜか鈍くなるようだ。幼稚な落とし穴なんて作るぐらいだし。

正直、口で風や稟には勝てる気がしねえが、筍？ならば勝率は五分五分といったところだろう。

まあ、勝ったとしても虚しいうえに疲れるだけでアホらしいため、スルーしようとしたところ……

「なに、アンタときたら私を無視してるわけっ!?　随分偉くなったものじゃない！」

「……話しかけんなっつったのは筍？だろ？」

「当たり前でしょ！　用もないのに話しかけられたら無駄に嫌な思いをするだけじゃない！　けどね、素通りされるのも馬鹿にされてる気がして嫌なのよ」

「じゃあ、どうしろってんだよ？」

無理やり話しかけてきた挙句、支離滅裂な会話を聞きながら、一応続きを促してやれば……

「私の視界に入る前に、どこかに消えなさい。てゆーか今すぐに！　むしろ死ね！」

「ふざけんなっ！？」

返ってきたのは、どこまでも突飛な言葉で、その後はいつも通りの不毛な言い争いとなる。

概ね俺と筍？の関係はこんな感じで続いているんだが、本当に気に食わない訳じゃない。

そもそも、俺と筍？はもう完全に『無関係ではいられなくなった』のだ。

それが二つ目の意味――――

「はあ？　天の武器だか何だか知らないけど、腕輪が“見える”からって理由だけで、そんな胡散臭いもの貰う気なんてないわ」

「……よりによって、コイツが、かよ」

相変わらずこちらに毒を吐く筍？を見やりながら、俺は力なく呟く。

そう、曹操の取り巻きの中で、腕輪が“見えた”のは筍？だけだったのだ。

俺としても、嫌がる相手にロストウェポンを渡したいわけじゃないが、どうしても開眼だけはしてもらわないと困るのだ。

どうしようかと悩みはしたが、結局解決策は一つしかなく、それを実行したところ、筍？はすんなりと意見を翻した。

「……まあ、構わないでしょう。“天”で振るわれし武器が、軍師の桂花に使えるのかは疑問だけれど、くれると言うなら受け取りなさいな」

――曹操からの鶴の一声さまさまだったわけだ。

その際、なぜ腕輪が見えることが重要なのかという質問を受けたが、ＡＩＤＡについては話さず、単純に適性の問題というふうに誤魔化した。

今の段階で全てを話しても、信じてもらえないことは明らかだったからである。

曹操たちが見守るなか、譲渡は無事に完了したが、終わってもロストウェポンは現れず、どうやら筍?も桃香や朱里同様に喚装ができないという結果となった。

それに関しては好都合だったと思う。

（もし口だけでなく、アーツかスペルみたいな実力行使のための手段が手に入ったら……）

そう考えると、冷や汗が浮かんでくる気がした俺だった。

前置きが長くなったが、碑文適格者となったからといって（曹操たちにはＡＩＤＡのことについて説明していないこともあるが）、筍?と俺の仲は相変わらずだ。

しかし、アイテムの説明を続けるうちに、筍？の顔は普段俺を見るときに浮かべる歪んだものではなく、真剣なものになっている。

新しい知識を求めることに集中しきっているんだろう。

そのせいか、気付けば随分とこちらの近くに寄ってきていた。もうすぐ、俺が伸ばしている足に触れるかといったところだ。

初めのうちこそ、気付いたら離れていく筍？であったが、朱里たちとは違って、完全に探究心からの行動だと分かり切っていた俺は、それ以上の事は言わず、次のアイテムを取り出すべく、デス☆ランディに繋がせた倉庫へのゲートに腕を突っこみ、『あるもの』を取り出した。

出てきたのはシンプルな造りだが、どこか神々しさを感じるような、持つ者の気品の高さを象徴するような、そんな業物。

「昴の……重斧？」

こんなアイテムあったっけか、と俺が疑問を感じていたところに、“ソレ”は現れ、“コト”は起こってしまった。

朱里と雛里の身体がビクッと震えたことと、何かが近づいて来た気配を感じた俺が視線を正面に向ければ……

「何だ、カイトじゃねえか」

「……」

周囲の警戒をしていたのか、散歩をしていたのか、相変わらず何を考えているのか分からねえが、無言でこちらを見つめてくるカイトの姿があった。

しかし、その姿にどこか違和感を感じる。

（そうか、妙に視線が泳ぎすぎなのか。まるで……何かに動揺してるみてーな）

そう、常なら感じさせることのない、ヒトとしての“感情”のようなモノを、今のカイトは発している。

見る者を凍りつかせるような蒼い瞳は、今や“ギュルルゥ”といった擬音が聞こえてきそうなほどに揺れ動き、“斧”と“女たちに囲まれた俺”を行き来していた。

そして俺は経験として、こういった事態で良いことが起きたことはほとんど無いという確信をもって行動にうつした。

「今日はこれで中止だ、何だか嫌な予感がしやがる」

その声に一番強く反応したのは……

「何言ってんのよ！　アンタにも道具の作り方や、構造理念が分からないものばかりっていうんだから、せめて一通りは……見せて……もらわ……ない、と……」

やはりというか筍？であったが、その声もようやく察した異常事態の前に言葉は次第に小さくなり、言いきる前に完全に沈黙した。

「……アアアァアアアアっ！！」

カイトは戦場の時よりも、ひときわ大きな呻き声をあげ、“虚空ノ双牙”を喚装。

いつものように無造作につっ立ってるわけじゃなく、腰を落とし、身体を半分だけ捻り、前傾姿勢になった構え――初めてカイトが構えるのを見た――をとったカイト。

（明らかに正常じゃねえうえに、身体が震えてやがる。これは……怯えてんのか？）

とにも、周りの奴らを怪我させる訳にもいかない俺は、風たちにここから離れるように指示し、何だか知らねえが受けて立つといった思いで、こちらも“虚空ノ双牙”を喚装した。

「――っ！」

息を吐くと、カイトから一歩遠のくように跳躍。手に取った双剣を強く握り締め、意識を切り替える。

意識を戦闘時の“それ”に切り替えれば――このスキルは俺にとって必要不可欠なもの――身体はすぐに反応してくれた。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを駆け抜けた俺の戦闘経験をいかし、鍛え上げたパラメータに振り回されないように鍛錬を重ねてきた身体だ。

初めは、一つ一つの動きの際に感じていた違和感も、今ではほとんど解消された。

跳んだ際に足にかかる反動も、耳元でうなる空気の音も、全てが自分を戦いの中で手助けしてくれる要素だと思えるようになっている。

そこで俺は、一つの思いを胸に息を止めた。

（……一呼吸の間で勝負をつける）

逃げるつもりは毛頭ねえが、長引かせるつもりもなかった。

間合いを十分取ったと判断した俺は、カイトに向けて身体を傾け、駆けだす体勢を整える。

それに構わずカイトは走り込んできた。

その軌道は直線ではなく、俺の左側に回り込もうとする動き。

カイトの狙いは何かと俺が予想を立てるよりも早く、相手の足が急に止まった。

お互いの武器の間合いに入る一歩手前だ。

そして一瞬の間をおいた後に、今度こそ一気に突っこんできた。

カイトの短い気合の声と共に放たれた左からの斬り上げ。

思わず身体を強張らせそうになるのを押しとどめた俺は、その一撃を身体をねじってかわしながら、カイトの右後方へ回り込み、お返しとばかりに斬撃を放つ。

それは先ほどの一撃の勢いのまま身体が流れて行ったカイトには届

かなかったが、牽制にはなってくれた。

カイトはすぐさま振り向き、追撃をしかけて来る！

俺もカイト目がけて一直線に突進し、そのまま交差ざまに剣を振りぬく。

キキキキィィーーーーーン

直後に聞こえた剣戟の音は、一つの長音。

だが、ほんの僅かに短くなった前髪や、薄く血が滲んでいる右肩の傷などを見れば分かる通り、あの一瞬の交差で俺たちは五撃もの打ち合いを果たしたのだ。

再び向き合った俺とカイトだが、今度はカイトが追撃をみせる気配はない。

蒼い瞳には相変わらず怯えのような感情が渦巻いている。まだ引く気はないのだろう。

双剣を使った勝負は、ほぼ互角。

ならば、どうするか――――

カイトは“虚空ノ双牙”を消失させた。

この武器では勝負がつかないと判断したのか。

そして、カイトがとった答えは……

「っ!?　データ・・・ドレイン、だと!」

カイトが突き出した右腕から形成される三枚の花弁。

その光景に、俺は思い出したくない記憶を刺激される。

(何だってんだ!?　ここまでする何かがあったっていうのかよっ!?)

「やめろ!　おい、ありえねえだろ!?　それは反則だ!」

俺の必死の叫びにもカイトは反応せず、花弁から迸る光はどんどん強力になっていく。

――どうする?

?何とか耐え凌ぐ。

?きっと冗談だ、何もしないで待つ。

?死なばもろとも、突貫あるのみ。

?腕輪の真の機能解放で迎え撃つ。

とっさに思いついた選択肢から俺が取った行動は……

「やっぱりテメーは俺の敵だあああああっ!」

「……アアアァアアっ！　暗黒吸魂輪掌破（データドレイン）！」

そう俺が叫びながらカイトに向けて突撃したのと、カイトから虹の極光が撃ち出されたのは同時だった。

――――そして世界は、光に染まった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

「……ということがあったわけだ」

そう言ってハセヲは長い回想話を締めくくった。

話を聞いた星としては、色々と突っこみたいことはあるが、特に言いたいことは“二つ”だけだった。

「まあ、思ったよりは元気そうで何よりだ。カイト殿もああ見えて、心に傷を抱えていたのかもしれん」

そう、今でも膝を抱えて震えている姿は、先ほどの話を聞いたことにより、更なる不気味さを醸し出している。

それも星としては気になるところだったが、もっとハッキリさせて

おきたいことがあった。

「それよりも“主”よ。先ほどの話を聞く限り、随分と風たちと戯れていらしたようで。さらには別の陣営のいたいけな少女たちまで手を伸ばすとは……考えものですな」

「は？　今の話をどう聞いたらそうなるんだよ？　今回の責任は俺だけじゃねー筈だぞ！？」

「問答無用ーっ！」

未だに立ちあがってなかったハセヲに龍牙の矛先を向けた星は、切れ長の瞳をさらに吊り上げ、突撃していく。

その怒りぶりは、思わずカイトが正気に戻るほど苛烈であったとか。

荒野にハセヲの悲鳴が再び上がったが、今度は誰も助けに向かわなかったという。

＊　＊　＊　＊　＊

今日はここまでにしておくかブヒ。

ハセヲの間抜けぶりを堪能していたら、思いの外時間が経ってしまったからブヒね。

また、暇な機会があれば読み直すとするブヒ！

でも、今後はいつ暇な時間ができるんだかブヒ。

そう思うオイラの視線の先には、少しは逞しくなったものの、まだまだ世話の焼けるハセヲの姿が見える。

それにやれやれと呟いてから、オイラは日記を片手に、ハセヲに向かって歩き出したのだった。

暗い、暗い空間。

窓を閉め切っているのか、そもそも部屋なのかさえ分からないような場所。

一切の日や月、星の光さえ届かない空間に動くモノが多数あった。

一番大きなモノ――――それでも子どもくらいの大きさ――――は、何かを堪えるように身体を震わせている。

その周りには、握り拳程度の大きさではあるが、その空間の暗さよりも更に深い暗さをした蠢くモノが多数見られる。

空間の中に響くのは身体を震わせる子ども？が立てている音のみ。

そんな空間に、段々と他の音が混ざってくる。

――――それは嗤(わら)い声。それも聞く者を思いきり嫌な気分にさせる類いのものだった。

「ハハハハっ！　来るがいい、下等な人間どもよ！　僕の力の前に、はむかおうと思った己の浅ましさを嘆くがいい！」

この空間に初めて生まれた赤い瞳(ひかり)と声を放った者の興奮した感情に反応するかのように、勢いづいた蠢くモノたちは更にその密度をあげ、空間を覆い尽くすかのように広がって行くのだった。

## デス☆ランディの日記～軍師編～（後書き）

軍師編と書いていますが、武将編があるかは未定です。まあ、要望があるようならば書こうとは思ってます。

・・・いえ、本当はこの話で、両方書くつもりだったんですが、好き勝手書いてたら、文字数が結構いってしまいまして、ね。ハイ、ようするにまたやってしまった訳です。

せっかく合流したんだから、ハセヲと恋姫キャラの絡みを書こうと思ったら、このザマです。出てきてほしいキャラが出なくて残念に思われている方、申し訳ありません。

え～次は１０万アクセス記念話です。今月中に・・・いけるか？

## １０万アクセス記念（前書き）

１１月中に間に合わなかったこと、申し訳ありませんでした！

また、前回の話において、カイトがああなった理由が分からなかったという方のために、活動報告の方に詳細？を書いていますのでご覧ください。

# １０万アクセス記念

そこは、いつからかＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに当然のように存在していた場所。

沈まぬ夕陽に照らされ、厳かな雰囲気を感じさせる壮麗な建築物。

多くの物語の始まりと終わりを見届けてきた場所――天隠すもの「△隠されし　禁断の　聖域」“グリーマ・レーヴ大聖堂”に、四人の人物の姿があった。

かつてここには一体の少女の像が祀られており、訪れた者の目を惹いたとされるが・・・今は失われており、代わりに目を惹くようになったのは、少女の像があったとされる台座に刻まれた、爛々と輝く赤い三爪痕（サイン）。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの各地で見られるようになったこの傷痕の“真”の意味を知る者は少ないが、ここに集った四人は、いずれもその意味を“自らの身”をもって知った者か、それに近い境遇を味わった者たちだった。

「……そっか。ハセヲの様子は相変わらずなんだ」

そう零したのは、普段は快活であろう顔を元気なく俯かせた双剣士“揺光”

「はい、入院してから今日まで特段の変化もなく、眠り続けているそうです。だけど大丈夫！　ハセヲさんはきっと目を覚まします！」

その言葉にそう返したのは、どこか危うさをまだ感じるものの、信じた想いを胸に“今”を生きようとしている呪療士の“アトリ”

「そうだね、ハセヲもきっと分かってるよ。私たちが待ってるから帰らなくちゃ、ってね」

永い眠りから目覚め、再びこのＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに帰って来た呪療士の“志乃”は、聞く者を心から安心させるような声を紡いだ。

それを聞いた揺光が、「ああ、そうじゃなきゃ困るよ」と反応したところで……

「ハセヲのことに関しては、八咫様も出来る限りのことをしてくださっているわ。せっかく志乃さんが帰って来たというのに、こんなことになるなんて……」

疲れが溜まっているのか、普段の凛とした声音をどこか曇らせて、拳闘士の“パイ”は、溜息混じりに言葉を放った。

「ふ～ん。そんなに疲れるくらい心配して調べてる訳だ？　アイツも人気者のなったもんだねぇ」

「……別に。仕事以上の気持ちはないわ」

どこか面白くなさそうに呟く揺光に、素っ気なく返すパイであったが、それなりに付き合いが長くなったアトリとしては、返事までの若干の間が気になった。

アトリ自身がそうなのであるが、ハセヲに恩義を感じ、手助けをしたいという想いを持つ者は多い。

揺光はそもそも隠そうともしておらず、パイもなんだかんだ言いながらハセヲを気にかけている。

志乃は普段から穏やかな笑みを浮かべているが、ハセヲの話になった時の笑みは、より温かみを増しているような気がすると、アトリは感じていた。

（結局、みんなハセヲさんに対して一定以上の気持ちを持ってるわけなんですよね……）

こうして４人が話し合っているのは、それぞれの伝手を当たって、ハセヲに関する情報を集め、交換するためだ。

もう何度目かの会は、これまで同様、何の進捗をみせることなく終了し、解散になると思われたのだが――

「……え？」

「どうかした？」

声をあげたと思ったら、辺りを見回し始めたアトリに声をかける志乃。

「聞こえるんです。私を……いえ、私たちを呼ぶ声が」

「え？　何にも聞こえないけど？」

「私にも聞こえないわ。貴女だけに聞こえるということは……まさかっ！？」

その二人の様子に気付いた揺光とパイも近づいて来て耳をすますも、何も聞こえない。

それぱかりか、パイは“アトリにしか”聞こえないという事実に過敏に反応するも、続くアトリの言葉に一応肩をおろすこととなった。

「いえ、“それ”とは違うと思います。あの時はこんなにハッキリとした言葉にはなってませんでしたから」

だからといって安心できるわけではないのだが、とにも謎の声の正体を探るべく、パイは八咫に連絡をとろうとしたところ……

「あら？　ちょうど八咫様からメールが……えっ！？」

「どうかしたんですか、パイさん？」

珍しく動揺を表面に出しているパイを見れば、今の状況が普通ではないことは明らかである。

何の連絡だったのか確認しようとするアトリに、パイは押し殺した声で要点だけを話した。

「このエリアにデータの増大を確認。以前にも観測されたデータとの照会の結果、この声の正体は……“この世界を見守る神”そのものよ」

「それって……」

「いいから！　憑神（アバター）を使って、彼女の声を増幅してちょうだい！

何か伝えたいことがあって出て来た筈だから！」

アトリの声を遮って、碑文使いとしての力を使えと言ってくるパイの剣幕におされたアトリは、疑問の声を飲みこみ、自らの内に問いかけ始めた。

（――そう、来て。私は……“ここ”にいる！　いつだって……“ここ”にいるんだから！）

その想いが強くなるごとに、アトリの身体を黄緑色の幾何学模様が覆っていき――

「イニス！」

アトリの声と同時に紋様は弾け――6枚の光輪を展開した天使が顕現したのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

鉄を打ち合う音が響く。

強く、重く、鋭く。

そこに込められた力、振るわれるモノの重量は、激突音や、その合間に聞こえる風切り音の凄まじさから尋常ではないことが分かる。

何が起きているのか直接目にせずとも、これだけの衝撃が伝わってくるのだ。

それを直接目にいている者たちが捉えたのは――まさに剣戟の嵐だった。

「ブッとべなのだあああぁぁ！」

「やってみやがれえええぇぇ！」

己が生みだした激突音にかき消されないよう、声を張り上げて応酬をくり広げる二人。

かたや、身の丈の倍はある蛇矛を豪快に振り回す少女――三国志に名高き猛将“張翼徳”。

かたや、巨大な白刃を纏った大鎌を薙ぎ払う少年――天の御遣いにして白き錬装士“ハセヲ”。

二人の武器がぶつかるたびに生まれる激突音や風切り音は、とても鍛錬の範疇とは思えないほどのものであったが、当の二人は全く気にしていないようだ。

しかも、どうやら避けるつもりはお互いにないらしく、足を止めて武器を振るいあっている。

「ううーーー！　やっぱりお兄ちゃんは強いのだ！　けどっ！　この勝負は鈴々がもらうのだ！」

「あの張飛にそう言ってもらえるのはっ！　ありがてえがっ！　最後の言葉は納得いかねえなっ！」

口では強気なものの、打ち合うたびに顔を歪める二人。

それもそうであろう。

先に足を止めて打ち合いだしたのはどちらだったか判別できないが、ここまで全力で武器を振るい、相手の攻撃を受け止め続けてきたのだ。

二人とも両手の握力は限界に近い筈だった。

――しかし、二人の勢いは止まらない。

それどころか、ますます激しさを増しているのだ。

鈴々の蛇矛の振りおろしによる一撃を、ハセヲは万死ヲ刻ム影の薙ぎ払いで受け止め、反動で後ろに反った身体を勢いを殺すことなく反転。

その間に片手を離して大鎌をもった手を返し、軸足を入れ替え、改めて両手で握りなおした一撃を鈴々へ放つ。

ガキィーーーン

遠心力ものった一撃は、ひときわ高い音をたてて鈴々が迎え撃ってきた一撃とぶつかり、火花をちらす。

「っオオオォォ！」

ここにきて勝負を決めようと思ったのか、ハセヲの咆哮とともに足元に円陣が現れる。

（――――これで決める！）

「環伐弐閃（わぎりにせん）！」

それまで拮抗していた攻撃を押し返し、ハセヲを中心とした円を描くような斬撃を連続で放つ！

アーツによってブーストされたハセヲの一撃は、鈴々の小さな身体を後方へと吹き飛ばし、勝負は決まったかと思われたが……

「う～～～～っ！？　すっご～くきつかったけど耐えたのだ！だからお返しなのだー！」

「しまっ！？」

握力が弱まっていたことと、アーツを放ち終えた直後の硬直状態をつかれたことで、万死ヲ刻ム影が、距離を一瞬で詰めてきた鈴々の一撃でハセヲの手から弾き飛ばされた。

「これで終わりなのだ！」

万死ヲ刻ム影が鈍い音をたてて転がり落ちる音が聞こえたが、そちらに向かう間もなく、鈴々の返しの一撃がハセヲに迫る。

後は蛇矛をハセヲに突きつければ、この勝負は鈴々の勝ちである。

勝負はついた――――はずだったのだが……

「まだまだぁぁー！」

「っ！？」

――Ｗｅａｐｏｎ　ｃｈａｎｇｅ

ハセヲは不敵な笑みを浮かべて迫りくる蛇矛を見据えながら、腰だめに何かを構えるように身を沈めると、両手を抜き放つように振り抜く！

その手に握られていたのは、両刃で肉厚の西洋剣。

思わず息を呑みそうなほどの巨大な刀身から零れる燐光は、何らかの加護を受けているかのような神秘さを感じさせる。

その銘を“シラード”。竜賢宮の元チャンプ“太白”から譲り受けた、強力な魔剣である。

軽く見積もっても百キロはありそうな超重兵器を、ハセヲは容赦なく鈴々へと叩きつけた。

この能力こそ錬装士（マルチウェポン）の真骨頂。複数の武器を装備でき、状況に応じた使い分けができる、というものだ。

この一撃に、完全に意表をつかれた鈴々は大きく後ろにのけぞった。

「くらいやがれぇぇー！」

そこへ、ハセヲはこれが最後だといわんばかりの、全ての力を振り

絞った唐竹割りの一撃を見舞う。

バキィーーー！

鈴々は辛くもその一撃を受け止めるが、ついに限界を迎えたのか、蛇矛が手から零れ落ちてしまった。

そこへ、ハセヲはシラードをつきつける。

「今回は俺の勝ちだな」

「う～～、次は！　次は絶対に負けないのだ！」

悔しげな声をあげる鈴々を見て苦笑を浮かべたハセヲは、ふと自分たちの鍛錬を見学していた筈の面々を見やると――そこに“いる筈の無い人物”がいることに驚愕し、またどういう訳かピンチになっている事に気付き、慌てて駆け寄るのだった。

――少し時間を遡る。

離れた場所から、ハセヲと鈴々の鍛錬を見学している人物がいた。

「ふわ～、ハセヲさんも鈴々ちゃんもすごいねえ」

「はい、鈴々の武に対して、あそこまで正面からぶつかり、一歩も退かぬとは……。ハセヲ殿の力は想像以上ですね」

二人の激戦ぶりを見て、心からの驚きの声をあげる桃香に、その腹心たる愛紗は相槌をうちつつ、彼女の中でのハセヲの株を急上昇させていた。

「なるほど、未だ弱小なれど、これほどの武を誇る将がいるなんてね。春蘭、でも貴女ならば、どちらを相手にしたとしても、私に勝利を捧げることができるかしら？」

「もちろんです、華琳様！　なんでしたら、今すぐにでも御命じ下さい！」

一方、二人の強さに心惹かれるも（特に同じ武器を扱うハセヲに対して）、自身の一番の剣だと自他ともに認めている娘を引き合いに出す華琳に、揺るがぬ自信をもって応える春蘭。

四人の人物が見つめるなか、ハセヲと鈴々の決着がついた瞬間、ハラハラしながら見守っていた桃香が、大きな溜め息を吐く。

「はあ～、私はどうやっても、あそこまでは強くなれる気がしないよ～」

その言葉は、普通ならば正しい認識なのだが、この場においては、面子が悪かった。

「劉備、貴女も総大将という立場なら、最低でも自衛ができるだけの武力は身につけておくべきよ」

「桃香様、曹操殿のいうことも尤もです。貴女の魅力はそんなことでは損なわれはしませんが、今の発言もどうかと」

思わず、反撃の言葉を受けたことで口を詰まらせる桃香を尻目に、華琳が改めてハセヲたちの方を向こうとした瞬間……

「あ！　やっと見つけた！」

「「「〜〜〜〜っ！？」」」

華琳を、春蘭を、桃香を、愛紗を“驚愕”が襲った。（桃香だけ意味が異なるが）

それもそうであろう、ここまで接近されたというのに、全く気付くことができなかったのだ。

気付いた時には、もう背後を取られていた・・・歴戦の武人である愛紗や春蘭をして。

その事実に信じられない想いを抱くも、何者か知らないが、この少女の正体をつきとめるべく全神経を張り詰めながら、主を護るように愛紗と春蘭は剣を少女に向かって突き出した。

「貴様、何者だ！」

「なぜ気配を絶って近づいて来た！まさか・・・華琳様の御命を狙う暗殺者か！」

「え？　ええっ！？」

暗殺者にしては目立ちすぎな格好をしており、なぜ先程の絶好の機会で事におよばなかったのかという疑問はあったが、愛紗は少しでも不自然な動作があれば、昏倒させるつもりだった。

立ち直った桃香が、少女の雰囲気が殺伐としたものではないことから、話を聞きたそうな顔をしていたが、愛紗の瞬間の流し目で封殺。

一方、春蘭といえば……

「その狼藉、もはや生かす価値なし！　叩っ斬る！」

すでにその気満々で、後ずさりしていく少女との間合いをつめる。

「春蘭！」

と、そこへ華琳からの制止の声がかかったことで、混乱していた少女はひとまず助かったと安堵の息を吐こうとしたが……

「殺しては駄目よ。これほどの能力をもった相手じゃ無駄だとは思うけれど、尋問して黒幕を吐かせるわ」

「〜〜〜〜っ！？」

助けどころか、余計に悲惨な光景（みらい）を想像してしまった少女は、声にならない悲鳴を上げて両手で身体を抱き締める。

その様は、暗殺者のものとはかけ離れていたものだったが、華琳から命令が下ったことにより、春蘭は今度こそ動き出した。

「っひ！？　ハ、ハセ「アトリィィーーー！」……ハセヲさん！」

戸惑いの声しか出していなかった少女から、ようやく意味のある言葉が出てこようとした時、そこに響いたのはハセヲが放った呼び声。

その声に応えた少女は、気が抜けたかのように、ペタンと腰を落としてしまう。

その光景を目にし、どうやら暗殺者がどうこうという問題ではないことは確かなようだと判断した愛紗と華琳、少女が酷い目にあわずに済みそうなことを喜ぶ桃香、未だに、状況が読み切れていないような顔をしている春蘭だった。

アトリｓｉｄｅ

「……そうですか。オーヴァンさんのためにハセヲさんは戦い続けているわけですね」

あの怖い人たちを説得してくれたハセヲさんに連れられて移動した天幕で、これまでの経緯をザッと説明された私は、ハセヲさんらしい決断だと思いつつも、心配の気持ちでいっぱいだった。

ここは、平和な現代と違って、力がモノをいう戦国時代。

理不尽な暴力の力によって、平和な時間が一瞬で奪われるのが珍しくない時代。

そんなゲームではない現実の戦場にハセヲさんが立っていると聞かされた時は、愕然としてしまったけど、実際に戦場に立っているハ

セヲさんの方が辛い筈だと、言いたい言葉を呑みこんだ。

（それに、もう“決めた”ことに対して、ハセヲさんが引き下がるわけないよね。それがオーヴァンさんのことに絡んでいるなら、なおさら……）

正直なところでは、無茶を続けるハセヲさんを何とか止めたいけど、決して止めることはできないと分かっているし、何より……そこで止まってしまうハセヲさんを見たくないと思う気持ちが、私にもあった。

そんなハセヲさんと出会えたから、私は変われた。

そんなハセヲさんだから、私は……貴方のことが……。

「なあ、アトリ？　そういや、お前はどうやってこっちに来たんだ？　ずっとこっちにいられるのか？」

「あっ！？　えっと、ですね。私がここに来られたのは……」

知らず、ハセヲさんをボーっと見つめていた私は、ハセヲさんが尋ねてきたことで意識を現実に慌てて引き戻し、答え始めたのでした。

回想録

イニスの力により、姿こそ見えないものの、女神アウラの声は全員に届くようになった。

そして彼女から伝えられた内容とは、私たちが一番求めていたものだったのです。

「ハセヲさんに会えるんですか！？」

「はい。ただ、時間制限もありますし、一人だけということになりますが」

アウラが言うにはハセヲさんがいるのは、今から約１８００年前の中国という信じられないような話だったけれど、ハセヲさんに会うためなら、どこへだって行くつもりだった。

「あの……「悪いけど、その役はアタシがもらうよ！　ハセヲが心配って気持ちはもちろん、三国志の時代をこの目で見られるかもしれないってのは見逃せないね！」

だけど、そう思っているのは私だけじゃないみたいで……

「私も……「私はハセヲのことはそこまで心配してないけど……もしアウラが言ってることが本当なら、後学のために行きたいわね」

「ですから……「私も、ハセヲに言いたいことといっぱいあるから、今回は譲ってほしいな」

私が喋ろうとする間もなく、ハセヲさんに会いたいと意思表示する皆さん。

（私だって……ハセヲさんに会いたいんです！）

その一念だけを強く強く想っていた私は、頭を俯かせた状態で身体

を戦慄(わなな)かせ、いつの間にか呪杖“陽炎ト踊ル巫女”を喚装していた。

――今になって思えば、この時の私は、一種の“トランス”状態にあった気がする。

だから、頭に自然と思い浮かんできた知らない言葉を紡ぎ出す事に、私は抵抗を感じなかった。

「……澄み渡る明光よ、罪深きものに、壮麗たる裁きを降らせよ」

顔をあげた私は、誰が行くかで揉めている三人を見据え・・・力ある言葉に導かれて呪杖に集った力を解き放つ。

「私の話を……聞いてくださあああぁぁーーーーーーい！！」

その瞬間、大聖堂に裁きの光(レイ)が雨のように降りそそいだ！

響き渡る轟音。炸裂した光の凄まじさに、周囲一帯は完全にホワイトアウトを起こしていた。

そして視界が回復した私の眼前には……

「「「……」」」

――もの言わぬ屍が三体転がっていた。

回想録　了

（結局、あの時頭に浮かんできた声は誰のものだったのかな？　何だか、良く似た声だったけど……）

さすがに、その時のことをそのまま伝えれなかった私は、その辺は上手くボカしたんだけれど、ハセヲさんは気にしなかったみたい。

というよりも、別の事に強く反応したといった方が正しい。

「そっか、志乃はリアルに帰ってこられたんだな」

本当に安心したといった感じの表情を見せるハセヲさん。

そのためにＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄで戦い続けたわけなんだから、そう思うのも当然だと思うけど……今は正直面白くない。

（今、ハセヲさんの前にいるのは私なんだけどな……）

私にとっては二か月ぶりの再会だけど、ハセヲさんにとっては、約半年ぶりの再会（どうやら時間の流れに差があるみたい）になるというのに、ハセヲさんは私に対して「久しぶりだな」としか、まだ声をかけてくれていない。

まあ、「会えて嬉しいぜ」なんてハセヲさんが言ってくれるとも思えないけど、せめて今浮かべているような微笑みを私（アトリ）に向けてほし

かった。

「まあ、いろいろあって疲れたろ？　ひとまずゆっくりしてろ。俺はこれからすることがあるから、その後で続きを話そうぜ」

「いえ、そんなことないです！　することがあるっていうなら、私にも手伝わせてくれませんか？」

せっかく会えたんだから、なるべく一緒にいたいと思った私は、ついていくことを希望。

けど、そこで新たな声がかかる。

「失礼ですが、貴女はこちらの文字が読めないのではないですか？　付き添うだけというのもなんですし、なるべく早めに終わらせますので、こちらでお待ちくださいませんか？」

自己紹介をしてから、これまで私たちの会話に口を挟むことなく、ずっと黙っていた眼鏡をかけた女性――郭嘉さんが話しかけてくる。

何となくパイさんに似てる雰囲気の、理知的で綺麗な女（ヒト）。

その言葉は、とても丁寧なものだけど、込められた気持ちは何となく有無を言わせないような感じがしたのは気のせいかな？

「だったら……その間で、せっかくだから何か軽い食事でも用意しましょうか？」

「ここじゃ、ガスも水道も使えねえし、あるのは保存が効く携行食

がメインだ。上手くできそうか？」

「……あう」

ならばとハセヲさんのために何かできそうな代案を思いついたけど、現代人の私にすぐ何とか出来る問題じゃないと、思い知らされただけだった。

「なるべく早く戻る。ちょっと待っ「ハセヲ！　天の世界の客人が来ているそうだな！」……星、まだ調練の時間じゃねえのか？」

そう言いながら、天幕に飛び込んできたのは、“またもや”綺麗な女性。

しかも、郭嘉さんはそうでもなかったけど（実際はどうなんだか）、この人とハセヲさんの距離感は妙に近い。

隣りにいても、全くお互いに気にしていないからか、そう在るのが、とても自然に見えるのだ。

（……私とだったらどうなんだろう？）

今も、「調練ならデス殿とカイト殿に任せてきた！」「お前な……」と言いあう二人は、ただの仲間同士という説明では、足りないものを持っているように見えた。

「おお、貴女が天の世界からの客人か。ハセヲとはどういった関係なのですかな？」

すると、こちらに興味深そうに探るような視線を向けて、趙雲（聞

いた時は思わず聞き返した）と名乗った女性が尋ねてきた。

「ええっ／／／　それは……ですね「アトリは俺の仲間だ」……」

趙雲さんの言葉に少しでも舞い上がってしまった自分が恥ずかしくなるくらいの、ハセヲさんの返答。

それは、普段ならばいつものことと流せるものだったけど……異世界までやってきたのに、苦しい戦いの日々を送るも、信頼できる女性（かま）に囲まれて、歩みを止めることなく進み続けているハセヲさんを見た私にとって――

（私は、ただの仲間にしか……過ぎないんだ）

どうしようもないほどにハセヲさんと私の関係をハッキリ示している気がした。

「「……」」

私の落ち込んでいる理由を察したのだろう、郭嘉さんはもちろん、聞いた本人である趙雲さんさえも、口を噤んでいる。

居たたまれなくなった私は、思わず天幕から飛び出し、当てもなく駆けだし始めた。

とにかく、このままここにいたら、もっと嫌な気持ちに囚われるんじゃないかという強迫観念に追われて――

アトリ　ｓｉｄｅ　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「「はあ～。今のはハセヲ（殿）が悪い（です）」」

訳も分からず、アトリが急に飛び出していった直後に吐かれた重い溜息に同じ責め言葉。

（くっそ、とにかくアトリを追わねーと！）

その旨を伝えようと、稟と星に顔を向けたところで、

「はい、追ってください。仕事の方はこちらで何とかしておきますから」

「仕方あるまい、貸し一つだぞ」

「ワリい！　頼む！」

相変わらず、気がまわる稟と星に感謝の意を告げ、外に飛び出す。

――結果としては、すぐ捕まえることはできた。

ただ、何が気に障ったのか、アトリにしては語気荒く思うところを話し始めた。

「いいんです！　ハセヲさんにとって私は仲間の一人なんです！それだけで良かった筈なのに……ハセヲさんと一緒にいられれば、何だって怖くないって思えたのに……！」

「アトリ……」

「それなのに……違うんです。今は怖いと思う時があるんです。さっきの趙雲さんたちと仲良く話してる時だって」

アトリがこっちを気にしているのは分かってた。

ないがしろにしていたつもりはねえが、この姿を見ちゃあ何も言えれねえ。

「ハセヲさんが、オーヴァンさんを救うために一生懸命頑張っているのに、私にはハセヲさんのためにできることが無い！　こんなことなら……私じゃなくて、パイさんみたいな人が来るべきだったんです！　私が来るべきじゃなかった！」

――――今、コイツは何て言った？

「私はいつもハセヲさんを困らせてばかりで！　だからきっとハセヲさんだって、私じゃなくて志乃さんだった方がきっと……っ！？」

続きの言葉を聞きたくなかった俺は、アトリを問答無用で抱き寄せた。

ちょうど俺の胸の辺りにアトリの顔が当たっており、モゴモゴ何かを喋ろうとするたびに息がかかってこそばゆい。

しばらくして、ようやく落ち着いて来たのか、動きが鎮静化してきたところで、俺はアトリを離してやり、じっとその顔を見つめる。

アトリはしばらく俺の視線を逸らさずに受け止めていたが、覚悟を決めたのか、目をそっと瞑った。

（覚悟はできてるってわけか……上等！）

ならば容赦はいらねえなと、俺の顔はアトリに向かって急接近し、その距離をゼロにした。

ゴオオォォーーン

「ひゃあぁぁ！？」

「目、覚めたか？」

景気よく鳴り響いた頭突きの音。おでこを真っ赤にして涙目でこちらを見上げるアトリを見据え、俺は口を開く。

アトリは何でこんなことになったのか全く理解出来てないらしく、おろおろしてやがるので、仕方なく話をしてやることにした。

「俺の気持ちを、勝手にお前が決めつけるんじゃねえよ。俺が……お前じゃなくて別の奴が来て欲しかったなんて言うわけねえだろうが」

「でも……私じゃ、ハセヲさんの役に立てるようなことはできないし、今だってハセヲさんを怒らせてるし」

アトリのこの言葉に、俺は深い溜息を吐きつつ頭をガシガシとかき回す。

（……言葉に出さねえと通じ合わねえものもある、か）

「バカ。お前は黙って俺についてくればいいんだよ！　俺には……お前が必要なんだからよ」

そう言い捨てるように、告げると足早にここから離れる。

今の顔をアトリに見られるわけにはいかなかった。

「えっ！？　ハ、ハセヲさん！　今、何て言いました！　もう一回言ってください！！」

そう言いながら、アトリが追いかけてくるが構わず走り出す。

「ハセヲさん！　お願いです、もう一回言ってください！　しっかりと心構えをしたうえで、もう一度聞きたいので！」

「ちゃんと聞こえてたんじゃねえか！　もう言わねえよ！」

俺が逃げる途中、ふと追いかけてくるアトリの顔を見てみれば……

「ハセヲさ～ん♪」

そこには半年ぶりに見る、アトリの心からの笑顔が浮かんでおり、
そのことに安心した俺は、少しスピードを緩め、もう少しアトリに
つきやってやろうと思うのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

オマケ（？）

もうすぐ日が暮れようかという刻限。

ハセヲとアトリは、結局あの痴話喧嘩（？）の後からずっと、話を
続けていた。

リアルのこと、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄのこと、仲間たちのこと。

概ねアトリが話す事をハセヲが聞くという形だったが、ハセヲにそ
れを嫌がる素振りは……多分見えなかったように思えるし、アトリ
は十分幸せそうだったから問題ないだろう。

だが、そろそろいい時間ということもあり、ハセヲはアトリに帰り
を促し、立ちあがったところで“ソレ”は放たれた。

「っな！？」

刹那、警告が走った身体の反応に身を委ね、とっさにかわしてできた空間を一筋の光が通り過ぎていく。

「今のは……レイザス！？」

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで使用できる攻撃スペルがなぜか飛んできた理由に見当がつかず、慌てて射線を辿ってみれば、“ソレ”は堂々と鎮座していた。

――――風の頭の上に。

「今のは……宝慧がやったのか？」

見れば、左目には先ほどの攻撃の残滓が残っているのか、微かに発光している。

なぜ自分が狙われるのか？
なぜ宝慧にあのようなことが出来るのか？

少なくとも、片方の疑問は分かる筈の風に尋ねてみる。

「風！　なんで俺を攻撃する！？　当たったらシャレにならんだろうが！」

「いえいえ～、風はただ一言こういっただけですよ～。お兄さんを楽しませるために、何か良い策はないかと～」

「ハイ、それで僕なりにハセヲさんが喜びそうなモノを取りつけてみたんです♪」

それがどうしてこんなことになるのか分からない俺の前に、予想外の人物が現れた。

「欅様！？」

「やあ、アトリ。ハセヲさんとは仲直りできたようで良かったねｗ」

そこに無邪気な笑顔を浮かべて佇んでいたのは――アトリも所属する“月の樹”のギルドマスターにして凄腕のハッカーでもある欅だった。

相変わらず、何を考えてるのか分からないやつである。

その無邪気な子ども然とした言動にこれまで良いように翻弄されてきたこともあり、こいつだけは敵に回したくないと常々思っている俺だった。

（とゆーか、こいつだったら、何をしても「まあ、欅だしな」って感じで受け入れそうな自分が怖い）

「とりあえず、突っこみたいことは山のようにあるが、ひとまず二つだけ答えろ」

俺の言葉に欅は笑顔で「ハイ、どうぞ♪」とすすめてきた。

「どうやって、ここに来た？」

「ああ、アトリがこちらにくる際に、僕も同じ通り道を失敬させてもらったんですよ。ただ、さすがに人数は誤魔化せても、こちらに移動できる容量の上限は誤魔化せなかったので、滞在時間が実質半

滅したと思いますが」

この返答に唖然とする俺、「ええ!?そんなぁ……」と肩を落とすアトリ。

「……なら次だ。何で宝慧にあんなことが出来るんだ？　さっき言ってが、お前の仕業なんだろ」

正直、聞きたくない気持ちが強かったが、聞かなかった場合も恐ろしいことになるのは目に見えていたので、ハッキリさせておくことにした。

「ああ、それは僕の趣味も入ってるんですが……」

欅はそう前置きした後、どこか自身気に胸を張って続きを話し出す。

「デス☆ランディの工房を借りて、あの人形にネットスラムで生まれた放浪ＡＩの“疑似人格”を埋め込みました。それだけでは捻りがないと思ったので、目から光線（レイザス）が撃てるようにもしてみました♪」

（宝慧が喋れるようになったってだけで驚きなのに、そこになぜ捻りがいるんだ？）

「あとはドリルも搭載したかったのですが……時間的な問題と、喚装システムが上手く機能しなかったことで、装着者にかかる重量の問題をクリアできなかったこともあって断念しました。今後の課題ですね♪」

（……コイツハ、ナニヲイッテルンダ？）

一人では不利だと思った俺は、仲間を求めてアトリに視線をやったんだが……

「すごいです！　さすが欅様！　これでまた世界は平和に一歩近づいたわけですね♪」

何を考えているのか、目をキラキラさせて欅の所業を肯定する電波女（アトリ）に、俺は絶望する。

（ここは、どこだ？　いつの間に俺は異界に迷い込んじまったんだ？）

思わず現実逃避を始めてしまった俺だが、だんだん日が暮れていくなかで、明るい光を放つモノの存在に嫌でも気付かされてしまう。

そこには、左目の中に収束した光を撃ち出さんと、今か今かと待ち構えている宝慧の姿が。

俺は、この短時間で激しく消耗した心を奮い起こし、宝慧へと問いかける。

「なあ、宝慧？　何で俺を攻撃しようとすんだ？」

「そりゃあ決まってるだろ、兄ちゃん。俺の風（マスター）をほったらかしにして、他の女の尻ばっか追いかけてるからだよ」

（やっぱり、そうか……）

結局いつもこうなのだ。

もはや習慣にも近い理不尽（おやくそく）に晒される。

「あ、そうだ。ハセヲさん、もちろん光線（レイザス）は非殺傷設定なので、いざという時も安心ですよ♪」

欅の言葉を聞き終えた直後に撃ち出された光条。

本能が訴える警告を無視し、その一撃の直撃を受けた俺は意識を手放し、闇に沈んでいった。

――――目覚めた時は、全て悪夢だったのだと思えると信じて。

オマケのオマケ
（本編とは関係なし）

「う……」

頭が妙にボーっとする。まだ視界は霞がかったようにハッキリしない。

何か嫌な夢を見ていたような気もするが、きっと気のせいだ。

そう思いこんだ俺は、妙に頭の下に感じる温かい枕から顔を上げようとしたが、何かに耳元をガシッと挟まれ、動きを封じられた。

何事かと思い、未だハッキリしない視界を回復させようと瞬きを繰

り返してみれば……

「やあ、ハセヲ。君の寝顔を初めて見ることができてとても嬉しかったけど、同時にすごく寂しくもあったんだ。やはり、視線が重なり合う方が嬉しいね」

「エンデュランス！？」

俺の頭を掴み、膝枕をしている男はエンデュランス。

他人には興味を抱かない奴だった筈だが、ある時から妙に俺に執着するようになったミステリアスな雰囲気を漂わせる男。

「どうしてお前がここに……？」

「君が意識を失ったと聞いてから、ボクの心は崩壊寸前まで弱り果てたんだ。君がいない世界になんて未練はないからね。するとどうだ……とても醜かったけど、親切な化け物が『寿命を半分失ってもいい』ならハセヲの傍に『ずっと居られる』と言ってきたんだ」

俺の疑問に、相変わらず本気だとは思いたくねえ返事を返してくるエンデュランス。

……っていうか、今聞き逃せない言葉が二つほどあったよな！？

「寿命の半分を失うって……オイ！　ならお前がここにいるってことは！？」

普通ならあり得ない選択をコイツは！？

「そう、受け入れたよ。あれ以上君に会えない日が続けば、ボクの心は確実に壊れていた。だから、この選択は必然だったんだよ」

エンデュランスは、この決断を当然のものとして受け入れたらしい。

なら、俺は――

「風の目を欺くとは……やりますねー、お兄さん。どうりで、あれだけされても気付いてくれないわけです」

「馬鹿なっ!?　ハセヲがアッチの世界の住人だった、だと!」

「……ハセヲ殿。私は貴殿がどのような道を歩もうと……ついていきます!」

外野の声が多少気になったが、俺はエンデュランスの本気(おもい)に真面目に応え（終われ

# １０万アクセス記念（後書き）

ハセヲ「・・・。」

どうした?何か言いたげな顔だな。

ハセヲ「ああ、お前今回の話の文量についてどう思う?」

どうって・・・こんなもんじゃないん?

ハセヲ「んなわけあるか!今までで一番長い話になってんだぞ!そのうえ、前置きは長くて、中身は薄いうえに、説明語りな表現が多すぎ、ときた。」

そ、そんなにハッキリ言わなくても（泣）

ハセヲ「しかも、こんな作品でも楽しみにしてくださっている読者の方に謝らなきゃいけねえことがあるんだろ?」

はい。申し訳ありませんが、師走となって仕事量が半端ないことになったため、次回の更新は今月１８日ということにさせてください。（集中力次第で前後する可能性あり）

ハセヲ「自分勝手な作者で本当にスマン。」

え～、それと作中でアトリが使った”レイ”ですが、中の人繋がりで、ＴＯＬからグー姉さんに協力してもらいました。

このシリーズは大好きなので、今後もボチボチ出てくるかも、です。

では、次から新展開です。よろしければ気長に待ってやってください。

## 第１１話（前書き）

お待たせしました！第１１話が完成したのでお送りします！！

# 第１１話

黄巾党本隊が撃破されてから数カ月。

首魁の“張角”を失った黄巾党の結成力は弱体化の一途を辿り、今では小規模の残党が小競り合いを行う程度となった。

この結果をもたらした立役者として功績が評価された劉備は、平原の相に任じられ、曹操も新たな官位を下賜され、それぞれの地力を高めるべく、内政に励んでいる。

――来たるべき、戦いの時のために。

そんな二勢力と同様に、黄巾党征伐の功績が評価され、その存在を大陸中に知らしめた義勇軍がある。

曰く、優秀な将、軍師を抱え、寡兵なれど心体ともに高水準の精兵をもつ。

曰く、ヒトならざる姿形をもつも、主を守護する絶対の“盾”となる武人がいる。

曰く、天の馬を駆け、魂を刈り取る大鎌を振るう、“天”の御遣いを盟主とする義勇軍。

その名を、百日の旅団。

――当の本人の意向とは裏腹に、天の世界から来た男が率いる軍

があるという事実は、広く民の間に伝わった。

天子を掲げる漢王朝としては、その男の存在を疎ましく思うも、それを糾(ただ)すだけの余力も無く、褒賞として領土を与えることで、権力者としての存在意義を示すに終わる。

このことを見越しての、風、稟による風評操作であったのだが、この乱において国力の衰退が露わとなった漢王朝にとってかわるべく、動き始めた者たちがいた。

――新たな時代の流れを告げる時が、刻一刻と近づいてきていた。

ハセヲｓｉｄｅ

眼前のパノラマいっぱいに広がる人と天幕。

どのような“想い”が込められているのか、各勢力が自己を主張する牙門旗を高々と掲げ、宿営の準備を整えている。

「なんつーか……圧巻だな」

「うむ、この規模だと……３０万弱というところか」

目の前の光景を見た俺がつい零した声に、隣に控えていた星が応える。

その驚きの数字に、俺は事前に風から聞かされていた、ここに集まっているだろう諸侯の名を思い浮かべた。

この連合を結成する発起人となった、河北の雄である袁紹。

その従妹にして、荊州は南陽の太守でもある袁術。

幽州から白馬長史と名高い公孫賛。

平原の相である劉備。

西園八校尉となった曹操。

西涼にその人ありと言われる錦・馬超。

そして――江東の麒麟児と謳われる孫策。

他にも参戦している諸侯はいるらしいが、風のお眼鏡にかかった勢力は、この辺りまでだということらしい。

（……反董卓連合か。聞き覚えはあるが、詳細は分からねえな。実際、董卓のことは風たちもよく知らねえみてえだし、まずは確かな情報がほしいとこだな）

俺たちがここにいるのは、黄巾の残党征伐から帰還したおり、河北を統べる袁紹から届いた檄文が届いたからだ。

きっかけは、霊帝の崩御から始まった朝廷内の権力争い。

そこから始まった、十常侍と軍部がそれぞれ擁立する皇子を、帝位に就かせようとくり広げられる骨肉の争い。

権力に溺れた者たちの血を血で洗う醜い戦いは、涼州に駐屯していた董卓を味方につけた十常侍筆頭の張譲に軍配があがったらしい。

その結果、霊帝の次子であった劉協を献帝として即位させ、権力を手中に収めた張譲は、董卓を相国に任命。

それに気をよくした董卓は張譲の腰巾着となって、自身の気のむくままに、悪政を布いているようだ。

袁紹から届いた手紙には事の経緯が細かく書かれ、最後には諸侯をあげて連合を組み、世を乱すこの二人を討つべし、と締めくくられていた。

俺たちは、この呼びかけに応えるか否か、熟考を続けた結果――

実際に都の生活が苦しいものになっていることは、都からやってきた商人たちの話でも確かなものであること。

一方で、民にとって苦しい政策を次々と施行させている董卓の目撃情報が無いこと。

風たちが集めた情報から浮かび上がる袁紹という人物は、この手紙で掲げるような御題目をもつ人物には当てはまらないこと。

有力な諸侯が顔をそろえる場ならば、新たな碑文適格者と巡り会えるかもしれないこと。

これらの判断材料を吟味したうえで、ここにやってきたわけである。

（何が正しいのか、周りに踊らされねえように自分の目で見極めねえとな）

各勢力が纏う軍氣とでもいうものにあてられたのか、自然と高揚してくる気持ちを引き締めた俺は、星と風に軍議が開かれるという天幕への同伴を頼む。

「御意～」

「ふむ、参りましょう」

風と稟が操作した風評に拠れば、俺の評判は中々のものらしい。

本物の天の御遣いであるかは置いておくとしても、その言動にはある程度の注意が払われるだろうとのことだ。

ま、それも俺が男であることが大きな理由でもあるらしいのだが。

もう諦めていたことなんだが、やはり有力者は全員女性であるらしい。

（本当に何て世界だ、ここは……。しかも経験上、クセの強えー奴らなのも間違いねー）

俺は思わず片手で眉間を押さえ、深く嘆息。

クーンだったならば、パラダイスだと思えたかもしれねえが、知り合った女から妙に理不尽な扱いをさせられることの多い俺としては、

複雑な気持ちだった。

「ハア……ったく、気が重いぜ。ああ、稟は設営の指示出しを頼むな」

「分かりました」

俺の声に従って、反対方向へと歩き出す稟を見送り、俺たちは陣地中央に設えてある無駄に立派な旗のある大天幕を目指し、歩き出す。

（そういや桃香や曹操と会うのは黄巾の乱以来か……）

「お兄さん？　何がそんなにお楽しみなのですか？」

「うむ、それも鼻の下が伸びるような楽しみ事ときた」

「はあ！？　何バカなこと言ってんだよ！」

そう言ったものの、頭の中で桃香たちのことを考えていた手前、正直に話しても無駄だと思った俺は、足を速めることしかできなかった。

それぞれの諸侯の思惑が渦巻く軍議に向かうということで、ゲンナリしていた気分と、少しだけ肩に入っていた力が、先ほどの二人の言葉で紛(まぎ)らわされたことに気付けたのは――――もう少し後の話。

天幕に到着し、案内された中、俺たちに用意された席は入り口からすぐの下座。

そこから目についた、上座にある空席。

そこに座るのは、この連合の発起人である袁紹なのだろう。

そこから少し下がって、一度目にしたら中々忘れなさそうな独特の髪形と、小柄ながらもそれ以上の貫録を感じさせる覇気をもつ少女が、こちらに相変わらずの不敵な笑みを送ってきた。

その脇に控える夏候姉妹。そのうちの姉？の方は、視線でこちらを貫き通せるんじゃないかと思えるような形相で、こちらを睨んでいる。

思わず、視覚化できるんじゃないかと思えるほどの怒気。

最後に会った時も、ここまで敵視された気は無かったと思うのだが、それは気のせいだったらしい。

しばらく会わない間に、随分と嫌われたもんだと思う。

だが一々気にするわけもなく、さらに視線を移せば……

「～～～♪」

「～～～！？」

うって変わって、俺に向かって軽く手を振り、満面の笑みを向けている桃香、ペコペコと頭を下げている朱里の姿が。

その相変わらずの姿に、俺は思わず口元が緩みそうになるのをグッと堪え、片手をあげて応え、席に着く。

その直後、鈍き俊足の……ほどではないものの、趣味の良くない金色の鎧に身を包んだ3人の女が入ってきた。

その中で、躊躇いも無く上座の席に腰かけたのが袁紹か。

曹操と同じで、人の上に立つことが当たり前といった雰囲気を纏っている。

ただ、その身なりから察するに、曹操は自らの所業をもって自己を誇示するのに対し、袁紹は、自らの財を常に誇示しようとするタイプの人間のようだ。

（確かに風たちの言うように、苦しんでいる民のためにってよりは、権力を好きに使ってる董卓に嫉妬してって感じの方がしっくりきそうだな。ま、とりあえず様子見か）

「皆さん、今日はよくお集まりくださいましたわ。それでは、軍議を始めましょう」

席につくなり口を開いた袁紹は、有無を言わせぬ態度をもって、軍議の開始を宣言。

その振舞いは確かに支配者としてのソレなのがろうが、なぜか中身は薄っぺらなものに思えた。

「まずは、初対面の人が多いのでしょうから、自己紹介をしてくだ

さいな」

そんな言葉と共に、袁紹は諸侯を見回す。

それに先ず反応したのは幽州の公孫賛。

それを皮切りに、曹操、劉備、馬超、袁術と自己紹介が続いていく。

そして、袁術の軍師だろう張勲が自軍の客将だといって紹介したのが……

「孫策よ」

その一言と、一礼だけに終わったにもかかわらず、強烈な印象を残した女。

（……コイツが三国の内の一国、“呉”の王、か）

腰の高さで切り揃えられた桃色の髪、女性として豊かな体型をしつつも引き締められた戦う者の体躯、そして、さながら虎を彷彿とさせる力強い眼光。

その眼に宿るのは、今はまだ雌伏の時と己を律しているものの、機が熟した時は容赦なく敵の喉元に喰らいつくかのような……壮絶なものだった。

――間違っても、袁術の客将で終わるような奴じゃない。

そう確信していたところ、自己紹介も最後に俺を残すだけになったため、席を立って簡単に名乗りをあげた。

「百日の旅団、団長のハセヲだ。そして、こっちが副長の趙雲、こっちが軍師の程立」

最低限のことしか喋らなかったというのに、俺が話し終えた瞬間にこちらを窺う視線の力が強まった。

ボソボソと聞こえる声を拾ってみれば、死神の化身だとか、地獄の使者、無限の剣の使い手、超鈍感野郎といった、明らかに過大誇張（最後のものとか意味不明）されたもので。

（……オイ、風。一体どんな噂を流したんだよ？）

視線で風に問いかけてみれば、風は知らぬ存ぜぬといった表情で前を見据えるばかり。

加えて、星はニヤニヤとどれに対してか知らねえが、首肯してる始末。

まあ正直、今さら聞いてもどうにもならないことなんだが、釈然としない。

「あ～ら、その貧相なのが、天からの遣いという輩ですの？　どこの下男かと思いましたわ」

各々が俺に対して奇異の視線を向ける中、袁紹は鼻にもかけないといった感じで切って捨て、俺に向いていた関心を自分へと向けさせる。

「これで、ひと通り終わりましたわね。それでは最後に、皆さんご

存じだと思いますが、私が袁「麗羽、貴女は有名なのだから、紹介はいらないのではなくて？」……ちょっと華琳さん！？」

「そうだな、本初は有名だもんな。」

袁紹の言葉を途中で遮る曹操と、それに乗っかる公孫賛。

それに食い下がろうとする袁紹に、馬超からのダメだしが入ったところで、袁紹は仕方なさそうに引き下がった。

先の二人と違って変な含みが無い分、正論が堪えたようだ。

「では！　僭越ながら、進行はこの私！　袁本初が行わせていただきますわ！　おーっほっほっほ！」

――今までの流れで大体分かった。

袁紹は、他者の上に立つ振舞いを知ってはいても、自身に相手を従わせるだけの能力がない。

だからだろう、コイツの仕草に重みを感じないのは。

（それでも無駄に力はある分、迷惑な奴には違いねえんだよな。あとは、どうやってコイツをあしらって話を進めるかだが……）

そして、この短時間に俺が至った結論に、以前から面識がある他の諸侯が気付いてないわけがなかった。

「では、最初の議題ですけれど。このわた「現状と目的の確認だろ？」……」

口を開こうとする袁紹の言葉を遮り、最低限の相談すべきことを出しあっては結論だけを伝え、状況を呑みこめずにアタフタする袁紹を置いてぼりにして、軍議はスムーズに進んでいく。

都への全軍における行軍構成ならびに経路、その間の予想戦闘区域、敵側の戦力規模など、各勢力がもっていた情報を交換、検討し、おおまかだが最低限の見通しをたてる。

にしても……

（同じ“枠”の中にいる者同士といっても、所詮は“傍観者”ってわけだ。連携も何もあったもんじゃねえ）

この連合の大義は、『天子を蔑ろにしている張譲、都の民を苦しめているとされる董卓を討ち、王朝の威光を取り戻し、都の民を解放する』というものであるが、それがただの建前であることは、ここにいる者はみんな気付いている事だろう。

それぞれが、自身の“利”に繋がるように動く。

――それが足の引っ張り合いだろうが、味方を見捨てることになろうが、だ。

実際、先鋒は桃香と公孫賛という兵力的にも厳しいところなわけで。

そう考えると、分かっていたこととは言え、溜息を吐かずにはいられない俺だった。

「これで大体は決まったわね。特にもう何も無いようなら・・・ど

うしたの、麗羽？　そんなに体を震わせて……風邪でもひいているのかしら？」

「っ！？　この私が！　風邪をひくだなんて醜態を晒すわけありませんわ！　華琳さん、そんなことよ「そりゃあ姫が風邪なんてひくわけありませんって。だって馬鹿hっギャフ！？」……私が名前も知らない田舎モノさんたちの話題よりも、もっと大切なことがあるでしょうっ！」

「はいはい、分かったから話してごらんなさいな」

愚図る子どもを相手にするような笑みを浮かべ、絶対に分かってて言ってやがる曹操に、すっかり蚊帳の外におかれていた事実を覆さんばかりの大声をあげる袁紹。

それでも、さっきまでの話を“そんなこと”よばわりするほどの、他に大切なことが思いつかず、聞く気になってみれば……

「それは、“総大将”を誰にするかと言う問題ですわっ！」

「……」

訪れたのは、何とも言えない沈黙。

数十秒前まで真剣に考えていた自分を笑ってやりたくなるような虚しさが、俺を襲う。

（ハアァァ……ったく、今までそんなことを提案したかったって言うのかよ）

さすがに、露骨に溜息を吐くのは不味い（俺一人ならどうってことないが、旅団の仲間にとばっちりを喰らわすわけにもいかないため）と思い、心の中で盛大に息を吐く。

周りを見れば、どいつも似たような表情をしている。

軍議の時の事といい、どうやら、この連合軍の心を一つにするためには、袁紹の働き？が鍵になってくるのかもしれなかった。

「この２０数万の大軍を預かる総大将なのですから、候補は自ずと絞られるというものですわ。それなりの家格と官位を持ち合わせている人物、といえば……」

「ハァ、もう麗羽でいいわよ……」

どーにでもしてくれといった感じの微妙な空気の中、全員の代弁のようなセリフを曹操は言い捨てる。

「ああ、他にやりたい奴もいないだろうし、本初でいいだろ」

「い、いいんですの！？」

公孫賛も投げやりな態度を隠そうともせず、曹操の言葉を肯定するが、袁紹は気付きもせずに、結果を喜んでいる。

さっきまでの不機嫌さは、すっかり回復しているらしい。

（他の奴らも、好きにしてくれって感じだな。余計なことを言って、とばっちりを受けるのは御免被るってとこか）

「これで話は終わりかえ？　ならば戻るのじゃ、七乃！　早う戻って、ハチミツ水を飲みたいのじゃ！」

「ハイハ～イ♪　お嬢様」

見た目も言動も明らかに子どもの袁術と共に張勲、そして孫策が退室していく。

それを契機に周りの人間も動き出した。

俺も早くこの無益な場所から離れたいという想いがあったんだが、それ以上に今は……

「孫策！　いきなりですまねえんだが、少し話せねえか？」

天幕から駆けだした俺は、先を行く孫策の前に回り込む。

蜀、魏の人間に碑文適格者がいたのだ。呉にもいる可能性は極めて高かった。

だから、この機会で少しでも関係をもっておきたかったのだ。

「……」

いきなりの俺の言葉に意表をつかれたのか、孫策は軽く目を見開いて俺を見たが……それだけ。

孫策は歩みを止めることなく、自陣へと帰っていった。

「おやおや、フラれてしまいましたか？」

「……うるせ」

俺は半眼になって呟くと、声をかけてきた星は何が面白いのか、片手を口元に添えてにっこりと笑う。

それを尻目に俺は、やはりそう簡単にいくわけなかったかと考えを改め始めた。

（ま、相手にされないのも当然か。胡散臭い奴には違いねえからな）

そう考えたものの、一瞬だったとはいえ目線が重なった時、孫策の瞳に宿っていた感情は無関心ではなく、面白いものを見つけたといった“愉悦”を感じさせるものだった気がしたんだが。

とはいったものの、現状で相手にしてもらえないならば、戦場において無視できないほどの功績をあげて注目を促す、といった代案を考えていたところ、裾をクイと引かれる感触で意識を揺り起こされる。

「お兄さん、お客さんですよー」

風が指さす方向を見やれば、桃香と朱里がこちらに向かって来ていた。

腹に何を飼っているか分からねえ諸侯の中において、数少ない信頼できる相手。

これまでの近況報告や、お互いが持っている情報交換など、先ほどの軍議よりも余程有意義な時間がとれそうだと思った俺は、二人の

方へと歩き始めたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

～洛陽にて～

「張譲様、諸侯が我らを討とうと連合を組み、都へ攻め上がろうとしているとの報告があがっております。首謀者は袁紹のようですが、如何なさいますか？」

董卓軍筆頭軍師“賈文和”は、表面上は冷静に、しかし内面には親友にして掛け替えのない君主である少女が危険に晒されるという不安と、そんな親友を自分から奪った男への憎悪を秘め、密偵が掴んできた情報を報告した。

報告を受けた者の名は張譲。

天子を傀儡とし、実質、この都の最高権力者となっている男である。

「ふん、三公を輩出した名門だか何だか知らないが、僕にたてつこうとは、愚かな奴だ。賈駆、諸国連合などに僕が負ける筈もないが、良い気になって都までやって来られるのも鬱陶しい。よって、露払いは任せよう。その頑張り次第によっては、董卓の処遇の件を再考してやってもいい」

「っ！？　本当ですか！？」

賈駆の確認の言葉に、くつくつと嫌な笑い声で応える張譲。

はっきりいって信用などできそうになかったが、親友の身柄を握られている以上、反抗するという選択肢は賈駆の中に存在しなかった。

一礼して、部屋から退出した賈駆は、先ほどまでの能面のような顔を一転、悔しさをにじませたものへと変える。

（月に大陸を取らせようと頑張ってきたつもりだったのに、逆に良いように使われてしまうことになるなんてっ！？）

爪が手の平に食い込むほど、両手を握りしめ、奥歯を強く噛みしめる。

あの時に戻れるというなら、賈駆は躊躇いも無く、浅慮だった自分を殺してでも止めるだろう。

董卓が相国になったまでは良かったのだ。

だが、その直後から少しづつ張譲の様子が変わり始めた。

狡猾ではあったが、何かを成し遂げるような意志の強さも胆力も無かった筈の男が自身を神だと僭称（せんしょう）するかのような、尊大な態度をとるようになったのだ。

――まるで、ヒト以上の何かになったかのように。

そして、気付いた時には天子も董卓も張譲の手におち、董卓配下の将は張譲に良いように使われる駒と同義になってしまった。

（何としても月だけは助けてみせる！　ボクの全てを懸けて！）

それでも！と、賈駆は心に強く刻み込んだ想いを叶えるべく、進み続けるしかなかった。

しばらく会っていない親友の笑顔を思い浮かべ……取り戻すべきモノの大切さを再確認した賈駆は、深く深く己の思考に埋没していくのだった。

## 第１１話（後書き）

今回は正直ほぼ原作通りだったので、あまり面白くなかったと思います。
ですが、次話では新たな適格者が出たり、ハセヲがちょっと無茶をしたりする場面があったりと見どころを考えてはいますので、もう・・・１０日（多分）ほどお待ちください（泣）

## 第１２話（前書き）

ツッコミどころ満載、過去最長の文となってますが、よろしければどうぞ！

そして、２０００００ＰＶ、２２０００ユニーク達成しました！
読者の皆様、本当にありがとうございます！！！

# 第12話

軍議が終わってから数時間後、ハセヲたちの姿は劉備軍の天幕にあった。

お互いにもっている情報の交換、近況報告をしたハセヲたちは、それでも途切れぬ会話を楽しんでいた。

「ハセヲ殿、あれから新たな“天”の武器の使い手は見つかったのですか？」

そうハセヲに問いかけてきたのは、三国志にその名を轟かす“関雲長”。

思わず目を惹く美しい黒髪をたなびかせて佇む様は、武神というよりも可憐な少女にハセヲは見えた。

だが――と、ハセヲは心中で嘆息と共に付け加える。

（関羽（コイツ）が青龍刀を振り回すたびに人が空を飛ぶ姿を見てなかったら……勘違いしてたんだろうがな）

「ハセヲ殿？」

こちらに反応がないことを怪訝に思ったのか、少し声を強めにした関羽を横目に、ハセヲは肩をすくめ、両手を軽くあげることで応える。

「いや、見つかってはねーんだが、一応当てはあるからそこまで悲

観はしてねえよ」

「そうなのですか？　ちなみに誰なのか聞いてみても……？」

「……ああ、孫策あたりがそうじゃねえかと思ってる」

既に事情を話している関羽たちに、今さら隠すような内容でもないと思っているハセヲだが、豊かな胸の前に片手を添え、心もち上目づかいで聞いてきた関羽に、妙な焦りを覚えたハセヲ。

少しばかり場の雰囲気が柔らかくなったかと思えば……

「「……」」

（またかよっ!?　何が気にいらねえってんだ?）

後ろにいる筈の星と風からの無言のプレッシャーが、ハセヲの心に起ころうとしていたさざ波を掻き消してしまう。

ハセヲはこうした視線に晒される理由に、“本当に”“これっぽっちも”“全く”“信じられないほど”に見当がついていないことが、星たちを大いにヤキモキさせていた。

元々、ハセヲをこちらの世界に留まらせるための鎖となれる存在を求めていたため、多少の女性との縁が生まれるのは仕方ないと思っていた星たち。

しかし、予想以上に知り合う女性が加速度的に増えていくのを別の意味で危惧しはじめ、こうして釘をさすようにしているのだった。

「あ～、孫策さんかあ。軍議では全然喋ってなかったのに、存在感あったもんね」

「はい、“江東の虎”と謳われた孫文台さんの嫡子にして、戦の天才と評されている方です。実際に対峙してみると――纏っている雰囲気は、研ぎ澄まされた抜き身の剣のように思えました」

ハセヲの答えに、関羽より先に実際に孫策を目にしている劉備、孔明が軍議の時のことを思い返しているのか、眉を寄せながら声をあげた。

「ふ～ん、朱里にここまで言わせるなんて、凄そうな奴なのだ！」

「ああ、戦場でまみえるのが楽しみだ」

それに反応する武闘派二人。

特に張飛は、先ほどまでの事務的な話をしていた時と違って、イキイキしていた。

「そうですね、戦場での采配は、まるでこうなることが事前に分かっていたかのようなもの（実際は直感）が多いと聞いています。桃香様の前に立ち塞がる大きな壁となることは間違いありません」

鳳統は軍師らしく、先のことを見据えた発言。

その顔は普段の気弱さを感じるものではなく、大きな障害にも果敢に挑もうとする闘う者のソレだ。

それに、張飛が「お姉ちゃんには鈴々がついてるから無敵なのだー！」と息巻いている。

「……」

「……？？　どうした桃香？　なんか心配ごとでもあるのか？」

そんな中、ハセヲは劉備が少しだけ困ったような顔をしながらこちらを見ていたことに気付いた。

そのまま、しばらく声をあげようとはしない劉備。

ただ、言いたくないわけではなく、言うか言わないか迷っているらしく、口を開いては閉じを繰り返している。

さらに時間を置いた後、彼女はかなり言葉を選んでから話し始めた。

「ハセヲさん、前に私に言ったよね。私のこと“不思議な奴”だって」

「……」

急に何を、とハセヲは思ったが、とりあえず続きを聞こうと黙って先を促してやる。

桃香もそれを察したらしく、構わずに続けた。

「私には、私の理想に共感してくれる素敵な仲間がいる。だっていうのに……ついて来てくれるみんなには悪いけど、私にはその想いだけで、他に誇れるものが見当たらないの。――――何かな？　その妙に納得したような顔は」

「いや、別に……」

言葉を濁しつつ、ハセヲは目を逸らす。

関羽や朱里は、桃香のこの言葉に反論したそうだったが、沈黙を貫いてくれていた。

「……まあ、いいけど。とにかく私は、ここことは違う世界から来たって理由もあるけど、それを除いても、ハセヲさんのような人に会うのは初めてだったんだ。何ていうのかな、見た目は無愛想で、言葉使いも悪いし、心も……やっぱり捻くれてる人」

「お前な……」

先程の仕返しかと思わんばかりの劉備のセリフに、ハセヲがしわがれた声をあげるも、「でも、それ以上に優しい人」という続きを聞いて再び沈黙させられる。

「そのとき思ったの。ハセヲさんと対等になりたいって。――そう、ハセヲさんにとって“不思議な人”じゃなくて、“頼れる人”に」

「……何でだよ」

そう、何とか呟いたハセヲ。

確かにそんな事を言った記憶はあったが、あの一言に桃香がここまで思うところがあったとは考え付かなかったのだ。

「だってね、私はハセヲさんのことスゴい人だって思うから。そのハセヲさんにも同じように思ってもらえたら嬉しいんだ」

「いや、お前はすでにスゴいっちゃ、スゴい奴なんだが……」

「本当に？」

全然そうは思えないといった感じで、桃香は首をかしげる。

実際のところ、その身一つから太守の座まで登りつめた時点で十分快挙だといえる。

しかし、そんなことを誇るような性格でないことはハセヲには分かっていたし、桃香自身も気にかけていないだろう。

――結局、桃香が自分を誇れるとしたら、それは仲間のために何かを為した時なのだ。

そう考えながら、三国志に名高い劉備の名を冠する少女を見つめるハセヲは、どこか共感していた。

周りにいる人間が凄すぎるため、自分に自信がもちきれない。

オーヴァンや志乃の役に立ちたい。

桃香の姿は――かつてオーヴァンと志乃を追いかけていた頃のハセヲ自身に重なって見えたのだ。

「なんつーかな、確かに目に見えて凄いところがねえってだけで、そう考えればそれだけのことなんだよ。そのかわり、お前にゃ桃香って・・・他の誰にも真似できねえ大層な素養があるだろうが」

ハセヲの言葉を反芻しているのか、桃香は視線を上に向け、まとめ

た考えを聞き返してくる。

「それってつまり、私の個性ってこと？」

「個性って言葉は、何だか言い訳がましい感じがして好きじゃねえんだがな。ま、そういうわけだ……って風、お前なんでそんなに驚いた顔してんだよ？」

「いえ、それがですねえ～」

まるで信じられないものを見た、けどどこか不満気という微妙な顔をしている風（星も似たようなもの）は、答え始める。

「まさかお兄さんが桃香様を気遣って慰めるなんて……。これは朴念仁なお兄さんの成長と喜ぶべきところなのか、相変わらずの手回しの早さだと咎めるところなのか、判断に迷いましてー」

「うるせえっ！」

そこまで広くない天幕に怒鳴り声が響き渡り、顔を紅潮させたまま、思わず風に飛びかかろうとしたハセヲだったが、宝慧の目に光が収束し始めたのを見た瞬間、動きを止めざるをえなかったのだった。

―――――――――

―――――

―――

―

ハセヲｓｉｄｅ

「――共に往かないか、か」

桃香たちの陣から帰って来た俺は、思わず先ほど言われた言葉を繰り返す。

それほど驚いたという訳でもあり、それもアリかと思った訳でもあったからだ。

風の茶々が入ったせいで微妙な雰囲気だったため、言いづらそうではあったが、結局のところ、桃香が一番俺に言いたかったことは“コレ”だったらしい。

「ハセヲさんには助けられてばっかりで……。だから今度は私たちに出来ることは協力したいし、それ以上に……助け合っていきたいんです。ハセヲさんにとって“頼れる人”として、これからも一緒に」

そういった桃香は、初めて二人で話をした時のように手を差し伸べてきた。

他の面子も乗り気だったみたいだが、意外だったのは関羽だ。

「桃香様の盟友となられるわけですから、そうなった場合……ご、ご主人様とお呼びしないといけませんね／／／」

「ニャハハ♪　愛紗ったら真っ赤になってるのだ！」

「愛紗ちゃんズルい！　私だってご主人様って呼びたいよ！」

関羽の予想外の悪ノリ？から始まった三人義姉妹の騒ぎ合い。

それと同時に再度背中に突き刺さる星と風の視線。

その場の居たたまれない雰囲気に屈したのと、さすがに俺の一存で桃香の手を取ることはできず、返事は必ずするといって帰って来たわけなんだが……。

「「「……」」」

（分かってたが……やっぱりこうなるか）

俺が思い出していた事と同じ内容を、留守番をしていた稟に伝えた後、背中に突き刺さる視線が更に一つ増えただけだった。

こういう状況に陥るのは、もう両手じゃ数えきれないほどだが、慣れる気は到底しない。

（というか……段々プレッシャーが上がってきてる気がするんだが？）

考えたくもない事実に気付かされた俺の耳朶を、笑顔を浮かべた三人（ただし目は笑ってない、嗤ってならいるが）の乾いた声がうつ。

「我が主に、後宮願望があったとは。今まで気付けずにいた我らをお許しいただきたい、ご主人様？」

「ええ、可愛い女性にかこまれて悪い気がしない男性などいないでしょうしね。そうでしょう？　ご主人様？」

「ち〇こもげろ、ですよ～」

（勘弁してくれ……）

桃香たちと共に往くかもしれないことには言及してこなかったくせに、ここにきて変に噛みついてきた三人からの口撃に、俺は為すすべなく耐えることしかできない。

なぜこんな事になってるのか、原因も分からないまま口を挟んでも事態が好転しないことだけは、これまでの経験で理解していたからだ。

今回も嵐が何とか収まるのを待とうとしていたところ……

「お話中、失礼いたします！　孫策と名乗る者が団長にお会いしたいと、訪ねて来ておりますが、いかがいたしましょうか？」

「は？　孫策が？」

予想外の来客を伝える伝令が駆け込んできた。

昼間の時とは一転、どういうつもりか分からねえが、俺としては望むところだったため許可を出すと、確かに孫策が二人の供を連れて颯爽とやって来た。

「さっきは無視して悪かったわね。袁術の目があるところで余計な接触は控えたかったから。特に今……名が売れだしている旅団の盟

主とは、ね♪」

昼間に見た時とはまるで違う、実年齢よりも幼く見えるような柔らかい態度をみせる孫策。

そのあまりのギャップに俺は、しばしフリーズしてしまった。

これが素だったというなら、やはりこの世界の住人はクセが強い奴らばかりだと思う。

「こら、伯符！　御遣い殿が呆然としているぞ。一軍の長として、その態度はないだろう」

「え～、やっと噂の天の御遣いと話せるんじゃない。昼間の軍議みたいな腹の探り合いをしに来たんじゃないもの」

そう言いつつ返ってきた孫策の言葉に溜息で応えるのは、長い黒髪を腰の下で一括りにし、普段はきつ然とした態度をみせているだろう相貌を、主君に関する苦悩で歪ませている女。

孫策もそうだが、額を大きくあけた髪型からは、意志の強さが感じられるとともに、豊かなスタイルを強調する服と、褐色の肌が放つエキゾチックな雰囲気と相まって、その姿はまさに“できる女”といったもの。

孫策に対する言葉使いをみるに、気心知れた関係といったところか。

「まあ、策殿の気持ちが分からんでもない。儂も興味があったのでな」

カラカラと懐の大きさを表すかのような笑顔でそう言うのは、俺と同じ銀色の髪を腰まで伸ばし、どこか達観したような所作をみせる女。

見ているだけで安心できそうな天真爛漫の笑みからは、同行を許されていることもあって、孫策にとって近しい存在なのだろう。

「それで？　私に何か話があるんでしょう？」

わざわざそのために来てくれたとは考えづらいが、簡単な自己紹介（周瑜と黄蓋だと分かった時は驚いたが）をすませた後は、時間的余裕があるわけでもなく、碑文適性判断に入らせてもらうことにした。

「祭？　貴女には本当に見えてないわけ？」

「うむ……策殿が言うような腕輪は全く見えんな」

「……そうだな。私と伯符には見えているのに祭殿には見えていない。どうやら担がれているわけではないらしい」

結果は予想通り、二人の適格者を見つけることができた。

あまりに出来すぎていると思えるほどの展開だが、二人の有名度合からいえば納得はできる。

あとは受け渡しなんだが――

「大丈夫だって、冥琳♪　いまいちピンとこないこともあるけど、天の武器を譲って貰えるなんて、私たちの今後のことを考えれば、

大いに役立つわ！何より「またカン、か？」……その通り！」

当然怪しまれはしたが、意外に孫策の方が乗り気ということと、“万死ヲ刻ム影”を喚装してみせたことで、周瑜の説得に成功。

なら私が先に受け取ろうと、周瑜が毒見といわんばかりに立候補してきた。

「相変わらず心配性ね～」と孫策がぼやく中、腕輪から溢れた光は周瑜の身体に吸い込まれていく。

「特に変わった事はないようだが……」

（またかよ……本当にこれで大丈夫なのか？）

無事に譲渡はできたはずなんだが、またしてもロストウェポンを喚装できないらしい。

星の時以来、誰も喚装出来ていない事実に一抹の不安を覚える俺だったが、とはいってもどうすることもできず、続いて孫策に譲渡を行ったところ……

「わ～、何か巻きついてきたわよ♪」

「これはっ！？」

孫策の身体に光が吸い込まれた瞬間、両手に顕現した拳当。

そこから伸びる紅水晶（ローズクォーツ）を思わせるベールピンクの光翼。

拳当から発生した7枚の光翼は、孫策の両腕の肘の手前あたりまで巻きつき、淡い光を放っている。

（第7相“復讐するもの”タルヴォスの憑神器（ロストウェポン）……“緋ニ染マル光翼”）

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの時とは勝手が違うが、見間違えるはずもなかった。

――神経質なところもあったため、初めの頃は反発しあってもいたが、冷静な判断と状況把握に優れ、いざという時の行動力も兼ね備えていた彼女（パイ）のロストウェポンは、この外史においては孫策の手に渡る。その緋に染まった翼を最後に休める場所は、彼女が望む世界であることを願いたい――

ハセヲｓｉｄｅ　了

孫策ｓｉｄｅ

「せっかく譲ってもらったものじゃが、この連合戦が終わるまでは、これは隠しておくべきじゃろうな。……策殿、気持ちは分かるが、そんな顔をするでない。策殿とて、その意味はよく分かっておるはずじゃろうに」

ムス～とした顔を隠そうともしていない私だけど、祭の言葉通り、それが正論だと理解はしている。

（だからといって、納得まではできかねているんだけど、ね……）

「それに、いきなり戦場に前例のない不確定要素（ロストウェポン）を持ち出されては、軍師としては堪らないわ。そんなものは貴女のカンだけで十分よ」

何だかまた頭を悩ませる要因が一つ増えたといわんばかりに、片手を額に当てて嘆息する冥琳。

そうは言っても、何だかんだで私の言を取り入れてくれるんだから大好きなんだけどね。

「なあ、孫策」

「ハセヲ？　何かしら？」

振り返ってみれば、新進気鋭の一軍として名をあげている百日の旅団の盟主であり、“天の御遣い”と称されるハセヲが神妙な顔をして私を見つめている。

乱世を鎮静するといわれている男がどのような人物であるのか、噂を耳にした時から気になってはいた。

自分の耳に入ってくるのは、さすがに尾ひれが付いたもの（超鈍感という事実もあり）だろうが、実際に見てみると……なるほど、全くのデタラメというわけでもないみたいね。

その所作には洗練されたものなど感じないが、私のカンでも測れそ

うにない底の深さ。

足取りなどを見ても、重心がぶれていないのか、滑らかではないものの安定感はある。

「実はな、信じられねえとは思うんだが……」

そう前置きして話し始めたのは、天の世界で起こった事件と私たちに降りかかるかもしれない危険性についてのものだった。

私と冥琳にその危険（ＡＩＤＡ）を討ち払う力があり、かつ私にその力が顕現したため、あちらの事情を話してくれたらしい。

「関係ないお前らを巻き込んじまうことは……すまなく思ってる。極力迷惑がかからねえように全力を尽くすし、いざって時は力になるからよ」

到底信じられないような話ではあったが、ハセヲの揺るがぬ意志がこめられた目を見れば、嘘か本当かなんてすぐ分かった。

しかも、今の事情を聞く限り、ハセヲ自身には何も悪いことなんて無く、ただ純粋に大切な仲間への想いを糧に闘っているようだ。

余計な苦労まで背負ってこちらを気遣ってくれることは、嬉しいことではある。

だが――――

「ふふ……ありがと。どんな表情をしていても何を企んでいるか分からないような連中とは違って、ちゃんと心からの言葉だとすぐ分

かったわ。でもね……」

「ん、何だ？」

「もしかしたら敵になるかもしれない人間にまでそんな心遣いをしてると、いつか何らかの決断を迫られた時、そういう感情に囚(とら)われて動けなくなるわよ」

私の言葉を受けて、ハセヲは軽く目を見開いた。

さらに視線を後ろにやれば、配下である三人も同じ心配をしていたのか、気づかわしげな視線をハセヲに送っている。

この乱世では稀(まれ)な人間――――まあ、事実違う世界の人間だということもあるが――――だとは思うが……甘い。

必要にさいして割り切りができる人間ならばいいんだけど、目の前の男がそういう人間であるようには全く見えなかった。

「……そうかもしれねえな。だけどよ、しなくてもいい忠告をする孫策も、俺のことをとやかく言えねえと思うんだがな」

どこか含んだように笑うハセヲから出てきた予想外の切り返し。

今度は私が目を見開くことになったけど、すぐに楽しげな笑みへと変わった。

「貴方、面白いわね。でも、私は必要とあれば笑いながら人を殺せるし、相手を陥れることだって躊躇わない女だと覚えておきなさい」

「……そうか。ま、そんな状況にならねえように努力するさ」

本当に分かっているのか疑わしげな調子で返事をするハセヲを見やる。

（仲間の覚悟を護るために違う世界までやってきて、失った日常を取り戻そうとする男……か）

やはり会いに来て良かったと私は思う。

――もし、ハセヲを呉に招くことができたならば。

（天の御遣いとしての知名度はもちろん、心の在りようでも私たちに良い影響を与えてくれそうだしね。まあ、もう一つしてほしいこともあるけど、それはまだ早計かしら♪）

「どうした？　なに気持ちワリイ笑顔を浮かべてんだよ」

ハセヲが若干身体を後退させつつ、警戒している声をあげる。

帰ったらみんなと相談（まあ何と言われようが押し通す気満々）してみようと心に決めた私は「何でもないわ」と取り繕う。

「そろそろ戻らないといけないわね。じゃあね、ハセヲ。“また”会いましょう♪」

そう言いつつ踵を返す私と、揃って溜息を一つ吐いてから付き従う冥琳と祭。

その顔は、私の気持ちを見透かしたうえでどうするべきか考えてい

るかのようで。

（ふふ、面白くなってきたじゃない。まずは蓮華をどう説得するかだけど……）

そう考えていた私の背後――――ハセヲたちがいた天幕――――から急激に膨れ上がった怒気と情けない悲鳴が。

それに振り向かずとも苦笑を浮かべながら、私は望む結果を手に入れるための方策を考えつつ、自陣に帰るのだった。

孫策ｓｉｄｅ　了

ハセヲｓｉｄｅ

「あれが？水関か」

俺が呟いた先に広がる険しい断崖に設えてある要塞。

その巨大な砦の足元に広がるのは、公孫賛と桃香の連合軍。

この連携の取れていない連合軍では珍しく、二つの隊はお互いを助けるような動きをとっている。

「さて、始まったわけですが……後曲の我らでは余程の事がない限り出番はないでしょうな」

「念のために密偵を放って周囲を調べさせたところ、今のところ背後を突かれる心配は無いですが、気を抜かないように願います」

稟の声に肩をすくめて応えるも、星は手持無沙汰なのを隠しきれていない。

俺としても、ただ見てるだけというのは気に入らねえが、旅団の仲間を余計な危険に晒す訳にもいかず、何とか我慢しているといったところだった。

「まあ、今のところはこちらが優勢みたいですし～。大丈夫そうですよ、お兄さん」

そう言いつつ、俺の頭をよしよしと撫でようとするかのごとく、背筋を伸ばす風をかわし、俺は戦場を見やる。

「む？　砦から兵士が飛び出てきたな」

「なあ、稟？　こういう状況での守る側の定石っていうと籠城戦じゃねえのか？」

確かに星の言う通り、関の門は開き、そこから“華”の旗を掲げる一団が飛び出して来ていた。

「そうですね、この場では定石通りに戦うのが最上。そうすれば我らの力をかなり削ぐことができると思うのですが……」

「先ほど愛紗ちゃんが何か言っていたようなので、挑発にのってしまったのではないかと～」

俺の質問に稟は呆れたような顔で答え、その後に続いた風の言葉でその理由を察した。

（そんなに自信がある奴なのか、ただのバカなのか……）

俺が自答している中、遠目にも目を惹く黒髪をたなびかせ、敵の大将に向かっていく人物が。

「ほう……愛紗め。うまく一騎打ちにもちこんだようだ」

星の言葉通り、敵の大将と激しく打ち合う関羽の姿が見える。

だが、遠目といえど両者の差はハッキリと見てとれた。ゆえに――――

「いい逃げっぷりですね～」

それほど時間はかからず、関羽に押し切られた敵の大将は、突撃時の潔さを捨て去るかのように転身、関に向かって逃げ出し始めた。

それに合わせ、曹操の軍や孫策の軍も追撃をかけるべく動き始める。

「ここぞとばかりに攻め始めたな。敵の罠だったらどうすんだ？」

「先ほどのように自ら追撃をかけ、今のように逃げ出すような者に、そんな器用な作戦が立てられる筈もありません。これが、今動き始めた諸侯たちの共通見解でしょう」

「……そりゃ、そうか」

ほんの思いつきで言ったことなんだが、稟が言い放った正論に俺は完全に納得した。

（まあ、相手がワリいってことか。一騎討ちで関雲長と渡り合える英傑なんざ、本当に数える……ほど……しか……）

そこで俺は、先ほどまで戦場に無かった筈のモノを目にし、思考停止に陥る。

何とか関に逃げ込み、門を閉めようとする董卓軍。
何とか門が閉まる前に中にねじ込もうと奮戦している連合軍。

門を中心とした激戦区に突如として現れた馬上の人物により、一気に連合側が押し返されたからだ。

その人物が手にするは方天画戟。

その人物の頭上に掲げられたのは――――深紅の“呂”旗。

（まさか……あれが敵側の将として名前だけは聞かされていた……“呂奉先”！？）

その武たるや三国史上最強であり、一人で黄巾三万人を屠ったなどと信じられない話を聞く存在。

事実として、ハセヲの偏った知識にも、呂布の強さはズバ抜けていたという記憶はあった。

その呂布がいきなり現れたという事実に、俺の思考はようやく再スタートする。

（なんで呂布がここにいるのかとか、そんなんは今更関係ねえ！どうする！？）

見れば、呂布の圧倒的な武力に目を奪われがちだったが、それでも連れている兵数は数百といったところ。

さすがに呂布一人で全員を相手にするのは不可能であり、敵の追撃さえ諦めればすむ筈の問題だった。

――あの光景さえ目に入らなければ。

「む、愛紗と鈴々が呂布と仕合いだしたな」

「っな！？」

見れば二人掛かりで挑んでいるというのに、あしらわれている関羽と鈴々の姿が。

二人が必死に戦っているというのに、呂布にはどこか余裕が感じられる。

このままだと――

「待って下さい、ハセヲ殿！　貴方は何をしようとしているのですかっ！？」

稟が慌てた声を出したことで、自分が何をしていたのか気付いた。

（……いつの間に俺は狗王を？）

最悪のビジョンを思い浮かべてしまった俺の、あの場所に駆け付けたいという反射的な想いに呼応したかのように現れた狗王。

それを見た瞬間、俺はすぐさまに飛び乗る。

「正気ですか、お兄さん？　いくら風たちの軍が少数とはいっても、この混戦中の戦場を、駆け抜けるなんて無理です」

風が今までに見たこともないようなキツイ視線を浴びせてきたが、今の俺はそれを気にする余裕はなかった。

「ああ、そうだな。旅団全員で行くなら、な」

「っ！？」

俺の言葉の意味を理解した三人が慌てて掴みかかってくるが、俺はもう狗王を起動させていた。

心強い重低音が響き始める。

「とにかく今は一刻も早くあそこに駆け付けねえといけねえんだ！　話は帰って来てからきっちり聞くからよ！」

「なっ！？　待てハセヲ！　行くならば私ｍブオオォォォーーーン！……ちぃ！？」

そう叫ぶ星の言葉を狗王の排気音が消し飛ばし、過去最高の速度をもって、俺は自陣を後にした。

ハセヲｓｉｄｅ　了

孫策　ｓｉｄｅ

（参ったわね。まさか噂が本当だったなんて……）

鎧袖一触とはよく言ったもので、無造作に戟が振るわれるたびに数人の兵の命が失われていく。

その一撃は、呂布にとっては本当に何でもない一撃なんだろうけど、一般兵からしてみれば、避けられようのない“死”そのものね。

そもそも、小刀で刺されようが、鉄球で潰されようが、人はある一定の損傷を与えれば死ぬ。

一定以上の損傷は余剰でしかなく、体力的にも効率的にも無駄なものといえるかもしれない。

ただ、この場においては……圧倒的な力で抵抗を許さず死をまき散らす呂布の行動は、恐怖が恐怖を呼んで足を絡み取り、確実に連合軍の歩みを止めようとしている。

もちろん、こんな状況が長続きする訳はない。

いかに呂布といえど、人の子だ。限界は必ずある筈なのよ。

（けど、その限界を迎えるまでに、どれほどの兵が犠牲になることか……）

それを見かねて呂布と戦い始めた関羽と張飛に助力を乞われ、私も参戦したはいいものの……現状は厳しい。

関羽の猛撃を易々と弾き返し、張飛の剛撃を鮮やかに捌き、そして私の連撃すら完全に見切られている。

そして呂布の攻撃を受け止めるだけで、こちらの体力は削られていくのだ。

（本当に……何て規格外なのよ）

自身より強い者と闘うのは、王としての前に、一人の武人として心躍るもの。

それでも今の状況は――――最高の相手を目の前にしていたとしても――――不味い。

このままじゃ追撃をかけるどころか、逃げた相手が態勢を整えてしまう時間まで与えてしまう！

そう考えていた私の耳に、聞いたことのない重低音と……

「どきやがれえええぇぇーーー！」

最近興味を抱いた人物の声が響き渡った。

孫策ｓｉｄｅ　了

ハセヲｓｉｄｅ

「どきやがれえええぇぇーーー！」

今までにないほどの暴走運転（よく人をはねなかったと思う）を続け、呂布まで約５０ｍをきったところで、俺はハンドルをきって車体を呂布に対して横に向ける。

その途端に生ずる地面を抉る音と焦げくさい匂い。

それまでに出していたスピードによる慣性力は、タイヤと地面との摩擦力の限界をあっさり超え、狗王はそのまま地面を滑っていく。

そして狗王が完全に停止する前に、シートを蹴り、慣性に身を委ねた俺は――――呂布に向かって弾丸のように飛び出した。

「おおおぉぉぉーーーー！」

飛び出した瞬間に俺は両手を腰の位置にやり、“万死ヲ刻ム影”を喚装。

そのまま身体を捻るように大鎌を呂布に向かって薙ぎ払った。

ズギャンっ！！！

重く、鈍く響いた激突音。

激突後、空中で完全に死に体となった俺の手を、空から舞い降りてきたバルムンクが握り、地面へと導いた。

（完全に勢いで突っ込んじまったが……呂布はどうなった？）

辺りを見回せば、さすがに馬上から落ちはしたものの、特に何ともなさそうな様子でこちらを見る呂布の姿が。

初めて見るであろう不可思議な物体に目をとられていた呂布は、反応が遅れたのか俺の一撃をかわさずに、受け流したのだった。

（すげえ奴だ。この感覚は……あの時と同じか、それ以上、か）

傍目には純粋そうな少女にしか見えないが、纏ってる雰囲気は――――別格。

目にしても理解できないような、自分にとって感知出来ない存在を、人は許容することができず、恐れてしまう。

目の前の少女はまさに、人という枠に収まりきれないほどの“強さ”を持っているのだろう。

俺は――――この感覚を知っている。

（そう、真のトライ・エッジとなったオーヴァンを初めて見た時と……同じ！）

「お前……何者？」

そう呂布は呟くと、方天画戟を掲げる。

さらに呂布から放たれるプレッシャーが強力になり、俺の口の中は既に乾ききってしまっている。

それでも、何とか後退せずにたち向かえているのは、星たちとの鍛錬の賜物だろう。

「ハセヲ殿、気をつけてください！　呂布の武はまさに万夫不当。小手先の技が効く相手ではありません！」

視線を呂布から外すことはできないため、分かってると声だけで関羽に応える。

そう、この相手に半端な技が通用するとは思えない。

なら――――

Ｗｅａｐｏｎ　ｃｈａｎｇｅ――――

俺は大剣“シラード”を喚装。今の俺に出来る最強の一撃を放つことを決意し、駆けだした。

対する呂布も俺を迎え討たんと、方天画戟を打ち下ろしてくる。

それに対して、俺がシラードの腹に片手を添えて下から打ち上げるように放った一撃が激突し、甲高い破砕音が響く。

が、俺はそのままアーツによってブーストされた身体を駆使して、そのまま呂布の攻撃を跳ね返して頭上まで飛びあがり……大剣最強のアーツを発動させた。

「秘奥義！」

俺の内から何かが欠けていくような感覚を味わった直後、変換された力がシラードの刀身に集い、帯電しているかのような音をあげ始める。

「……来い」

体勢を瞬時に整えた呂布は、これを受け止める気らしく、真っすぐ俺を見つめている。

その時、呂布の何を映しているか分からない眼に、何らかの感情が宿ったような気がしたが……

「重装甲破（じゅうそうこうやぶり）！」

シラードに集った力が臨界点に達したと悟った瞬間、気にせず俺は、大上段からの打ち下ろしを呂布へと解き放った。

「おおおおおぉぉぉーーー！」

「～～～～～～～～っ！？」

「っ！？　何て出鱈目な技よ！」

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて最高の攻撃力を誇る大剣の最強の技なのだ。誰かが思わず口走るほど、この一撃は強力だった。

辺りには、金属同士がぶつかったというよりも、１０ｔトラック同士が正面衝突したかのような音が響き渡る。

着弾時の火柱こそ、呪紋（ウェブ）を失っているためにあがらないが、それでも十分すぎるほどの威力が出ている筈だ。

それでも――

「潰れろおおおおぉぉぉーーーーーー！」

「っ！？　そう、は……いかな……い。」

呂布は膝を屈することなく、俺の一撃を受け止めきったのだ。

「これでも……足りねえってのか」

「そんなこと……ない。痺れた……」

そう言いつつ呂布は、方天画戟を何回か握り直している。

「……恋は呂布。お前……何者？」

唐突にさっきも聞かれた問いを繰り返してきた呂布に、俺は戦闘意欲を奮い立たせながら、胸を張って答えた。

「百日の旅団、団長のハセヲだ」

呂布は俺の名を何回か繰り返し口にし、さっと騎乗してしまった。

先程の凄まじい鍔迫(つばぜ)り合いを見て呆けていたのか、周りの人間も呂布の行動に対する反応が遅れてしまい、呂布は一言だけ告げると変わらず混戦中である？水関の中に消えていった。

「……ハセヲ。“また”……恋と闘う」

凄まじい力を見せつけた呂布は、俺に何とも言えない虚脱感を与えるとともに、避けては通れない障害だという重い事実を突きつけたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

# 第１２話（後書き）

説明と感謝とオマケ的な後書き？

ハセヲ「・・・なあ？」

言うな、分かってる。色々とツッコまれても仕方ないところがあるけど、そこは指摘をもらったらすぐに直せるだけ直そう。

ハセヲ「それならいいんだけどよ。つーか、なんでお前そんなにボロボロなんだ？」

あ～、前に竜王様のとこの竜馬くんの誕生日に、星の秘蔵のメンマを贈ったら・・・な。

ハセヲ「そりゃあ、自業自得だな。よくそんなに軽い仕置きですんだな？」

うん、危うく殺されそうになったから、お前との特別イベントを用意するって約束したら許してくれた。」

ハセヲ「はあああっ！？何勝手に俺を巻き込んだ約束してんだよ！？一体何をさせる気だ！」

え、そりゃあ・・・ナニを、ね。いや、だって身の危険を感じてさ。まあ、とりあえずその話はだいぶ先だから、楽しみにしといてね♪

ハセヲ「ふざけんな！その身勝手な性格を矯正してやｒうおッ！？」

ふう、これで落ち着いて話ができる。落とし穴も馬鹿にできないな。

え～、まず、雪蓮と適合した”緋ニ染マル光翼”ですが、形状は原作通りでいいんですけど、イメージとしては”烈火の炎”の八竜、”焔”が腕に巻きついたものが近いかと。

拳当としても、籠手としても使えますが、南海覇王の攻撃補助の意味合いが強くなると思われます。

さらに、今回の話で恋との戦闘フラグが立ちました。

まあ、”今”のハセヲ一人でまともにやったら１００回やって１回は勝てる相手かな～っていう認識なんですけど。・・・うん、頑張れ！

そして、以前に受けた指摘、恋姫キャラが主人公に惚れやすすぎじゃないかという点ですが、私としてはハーレムエンドにする気はありません。

その時がくれば、ハセヲには決断してもらわなければならないですね。

ちなみに現段階では星、風、稟の３人と、もう３人の恋姫キャラが、ハセヲに恋愛感情を抱く予定となっています。残りは親愛、友愛止まりかなという感じです。

なるべく、描写には気をつけていきたいと思っていますので、今後とも私の作品に付き合ってくださると嬉しいです。

あ、読者の皆様の反応次第では、この決定が変更される可能性があ

りますので！
その都度、アンケートを取ろうと思ってます。

また、前回の話では、お待たせしていたというのに肩すかしな内容だったとは思うのですが、それでも温かい感想や激励のメッセージをくださった方々、本当にありがとうございます！！

この話を書きあげるまでに、何回読み返したことか（笑）

さて、今年も残すところ僅かとなりましたが、何とか大みそかにもう1話更新するつもりですので、最後の挨拶は次の後書きでさせていただこうと思います。

それでは、また大みそかに！

＊以下はオマケみたいなものです。

ハセヲ「待ちやがれ！！」

あ、復活したんか。もう言わないといけないことは言っておいたよ？

ハセヲ「よく分かった。・・・どーも俺の周りには一度本気で決着をつけにゃならねえ連中が集まるらしいな。特に・・・テメ―とはな！」

ふ～ん、殺る気なの？

ハセヲ「何だ、随分余裕じゃねーか。・・・フカシだと思ってんのか？言っとくが、本気だぜ！」

まあ、いっか。なら武器を喚装してみろよ。

ハセヲ「言われるまでもねえ！・・・ん？な、何で反応がねえんだ！？」

フフフ・・・。ハセヲ、今のお前を構成している設定は、私が生みだしたもの。

お前にとって、私は創造主（かみ）とも呼べる存在なわけね。

外史で武器を喚装できるのも私の力によるもの。

・・・私の力を借りて、私を倒すだなんてことは不可能なんだよ。

ハセヲ「っく！？・・・テメーごとき、素手で十分だ！」

ふふふ、これを見ても強がれるかな？

――そこに顕現したのは、どこか流線型を思わせる、純白の竜。

西洋のドラゴンのイメージのような重厚さこそないが、そのぶん引き絞られた力が細身の体躯から伝わってくる。

なにより、その神秘的なオーラを目にすれば、人は自身のあまりの無力さに膝をつく。

これこそ、”うつろわざるもの”・・・かつて神皇と称された存在が駆る、神の姿（劣化版）だった。

ハセヲ「・・・ちっく・・しょう。」

そうそう、別に大人しくしてるんなら何もしたり・・・なん・・か・・。

ハセヲ「・・・何だ？この光は？・・・剣、なのか？」

嘘！？あれってデュランダル！？あの剣は、私の作品では出してない筈なのに！？

ハセヲ「この感じは・・・そうか、助かったぜ、竜馬。これでケリがつけれる！」

・・・あ！？以前に竜王様から貰った大剣か！

ハセヲ「・・・この剣には竜王と竜馬の想いがこめられてる。それは、テメーごときが支配できるもんじゃねえ！」

う、ううう・・・。

ハセヲ「”死の恐怖”を・・・知ってるか？」

くっ！？調子にのるなよ！真竜王吐息（パワーフラックス）！

ハセヲ「この剣と同じだ！俺のテメーに対する殺意（おもい）は、絶対に折れねえんだよおおぉぉーー！」

――両者から溢れ出た光刃の拮抗は一瞬。

世界を変えるのは強き想い。

どちらに軍配があがったのかは・・・語るまでもないだろう。

――長文失礼しました（汗）

## 第１３話（前書き）

今年最後の投稿になります。それではどうぞ！

# 第13話

「お邪魔するわよ……って何やってるの、貴方？」

「ほっといてくれ……」

旅団の陣を訪ねてきた曹操が目にしたのは、天幕中央にて疲れた顔をして正座しているハセヲの姿だった。

その周りを、妙に嬉しそうな顔をした三人の将が囲んでいる。

「何の冗談よ、これは？　一軍の長ともあろうものが、なんて無様を晒しているの？」

「これは無茶をしてくれたお兄さんへの罰でもありますので、口出しは無用に願います～。他の部下への示しの問題でしたら、特に心配いりませんし（日常茶飯事でもあるため）、曹操様が意図的に、実情を諸侯へ流言するとも思えませんから、このままで気にしないでいただけるとー」

「……」

曹操が不快なものを見たと顔をゆがませれば、風が何でもないように正座（ばつ）の正当性を主張した。

そう、呂布との戦闘を終えて帰還したハセヲを待ち受けていたのは、呂布に勝るとも劣らない気迫を感じさせる、三人の羅刹だった。

これまでで最大の危機だと即座に察したハセヲは、何とか機嫌をよ

くしてもらえないかという想いも強かったが、いつも世話になってること、迷惑をかけていること、日頃の感謝の気持ちをこめて贈り物をしたいと三人に伝えたところ……

「「「……」」」

鳩が豆鉄砲くらったような顔で沈黙した三人。

ハセヲは、己の考えが浅かったかという不安にかられた。

ところが……

「な、ならば、指輪が……指輪が欲しいです、ハセヲ殿！」

普段、自ら主張をすることが少ない稟が、指輪がほしいと頼んできた。

それに続いて星や風も同意の言葉を返す。

（そうか、やっぱりコイツらも女だもんな。そういうものをほしがるのも当たり前か）

一人で勝手に納得しているハセヲは気付かなかった。

指輪がほしいと言った後の三人が……自分の左手（よく見れば薬指）に視線を向けていたことを。

（デス殿や宝慧が言うには、天の世界において相手から贈ってもらった指輪を左手の薬指に嵌めるのは、将来を誓い合うという意味であるとのこと。これならば！）

（フフフ、意中の相手よりの贈り物がこれほど心躍るものであったとは……。ハセヲめ、私にここまで想わせているという事実を、もっと汲んでほしいものだ）

（贈り物をされるのには理想的な展開ではありませんが、お兄さんの場合はこれが最良だったのかもしれませんね～。それにしても…風にこんな単純な面があったなんて。やはり、風をここまで変えてしまったお兄さんには、責任をとってもらわないとですね～）

三人が嬉しそうな表情をしているのを見て、安堵の気持ちはもちろん純粋な喜びの思いにもひたるハセヲ。

三人を見つめる視線には、常はない温かさがあった――のだが、

「しかし、これはこれ、それはそれ、だ。まさか今ので我らの怒りが帳消しになるとは……よもや思ってはおらんだろうな？」

そう、幾分険がとれたものの、相変わらず凄みを感じさせる笑顔で話す星の言葉にうなだれたハセヲだった。

そして――現在に至るのである。

ハセヲの情けない姿を、曹操は白い目で、付き添いで来ていた夏侯惇には爆笑で、夏侯淵も口の端を少し歪めて見ていた。

「……それで？　何の用があって出向いて来たんだよ、指揮官様？」

「あら、言葉に随分と棘があるけれど、何か気にさわるような事をしたかしら？」

ハセヲが言葉尻をあげて、皮肉るように話しかければ、曹操も分かってて言ってると感じの笑みを浮かべる。

「劉備や孫策たちが必死で戦ってるってのに、それを囮にして？水関に攻め込みやがって……」

「敵の動きを見れば、連携が取れていなかったのは明らか。あれは呂布の独断による襲撃だったのでしょう。ならば、敵の追撃を図るという使命を誰かが為さねばならなかった。それがたまたま私だったというだけで、特に責められる謂われは無いわ」

「……」

何も悪びれることは無いと、毅然とした態度を崩さない曹操。

ただ、そうねと続けた言葉は……

「まあ、華雄はともかく呂布にも包囲を突破されて逃がしてしまったことはこちらの落ち度でしょうね。それに関しては謝罪するわ」

そう言いつつ、全然すまなさそうな顔をしていない曹操は、本当にたいした奴だと思うハセヲであった。

結果としては、曹操たちによって？水関は落とされ、敵将である華雄は虎牢関まで逃げのびたらしい。

この大手柄に対して、曹操に対抗心を燃やす袁紹は大いに悔しがり、次の交戦予定区域である虎牢関の一番乗りと追撃をかける役目を買って出た。

そして、袁紹の代わりに曹操が連合軍の指揮を執るらしい。

手柄がどうのこうのということに対して、ハセヲは特に思うことは無かったが、呂布が待ち受けているという虎牢関を、袁紹が破れるとはどうしても思えなかった。

「まあ、麗羽が呂布を倒せるなんて欠片も思ってないわ。それは、実際刃を合わせた貴方も良く分かっているはずよね」

「ああ、ありゃあ段違いもいいとこだ。関羽たちとの連戦の直後だったてのに、俺の渾身の一撃も防がれちまった」

曹操は、疑問というよりも確信といった感じで尋ねてくる。

それにハセヲは苦り切った顔で答えた。

その一撃が、いくら十全の効果を発揮できていなかったとはいえ、それでも呂布は連合軍の兵と大立ち回りをし、関羽、張飛、孫策という英傑を相手取ったうえでの、勝負だったのだ。

――彼我の実力差は明らかだった。

(だってのに何を思ったんだか、呂布の奴、また戦おうときたもんだ。こりゃあ、俺も腹をくくってかからねえとな)

何を考えてるかさっぱり分からない呂布であったが、最後のあの言葉には何らかの決意のような感情が窺えたハセヲ。

状況によっては、これまで使用しなかった自身の最奥(さいおう)に手をかける

ことも持さない覚悟だった。

「そこでよ、黄巾の時と同様に手を組みましょう。貴方も自分の“想い”を叶えるために連合に参加しているのでしょう？　ならば、これが終わるまでは……いいえ、これが終わった後も、我が旗の下で共に戦う気はないかしら？」

「……」

先日の劉備に続いて、曹操からも同じ提案を受けたことに、ハセヲは目を見開いた。

手を組もうという話かもしれないとは思っていたものの、さらにその先までを見越したものとは予想もしてなかった。

そんなハセヲを面白げに見つめる曹操は、さらに言葉を続ける。

「一地方の太守となったものの、すぐに代理をたてて黄巾の残党征伐で転戦を続け、本拠地には、ほとんど戻っていないと、貴方について私はそう報告を受けたわ。いずれ訪れる戦乱の世のために、内政に力を入れていないのは正直理解しかねるのだけれど。それが分かっていないとは思えないわ。
貴方が以前言っていた“取り戻したい日常”というものは、よく分からないけれど……それを成し遂げるためには、力が必要でしょう？」

「……」

ハセヲの沈黙を肯定と受け取ったのか、曹操はさらに言葉を続ける。

「ならば、我が国の将、精兵、資財をもって、貴方の“想い”の実現を助けましょう。このまま太守どまりで終わらせるには、貴方たちの才は惜しすぎるもの。その代わり……貴方とその将が振るう力、貴方の軍師が振るう采配を、私の覇道を切り拓くためにも行使してもらうわ。

ああ、臣下の礼をとるのが嫌だと言うならば、客将扱いでも構わないわよ」

曹操はそう言うものの、隣に控える夏侯惇は「華琳様に忠誠を誓わん輩など認めん」といった感じで凄んできている。

夏侯淵はよく分からないが……似たような気持ちは抱いているだろうなとハセヲは推測してから口を開いた。

「……話はそれだけか？　なら返事は必ずするから、今日のところは帰ってくれねえか」

ハセヲは自分でも、ひどく冷めた声を出しているという自覚をもちながら、曹操たちへ帰りを促す。

すると案の定、夏侯惇が忠犬よろしく噛みついてきたが、曹操にたしなめられ、退出していった。

去り際に「良い返事を期待しているわよ」と、こちらの素っ気ない態度を受けても、あくまで不敵な笑みを崩さずに告げて行ったのは曹操らしいと思うハセヲ。

だが、その胸中は自身にもよく分からない感情に苛まれていた。

（……前々から不思議には思ってたんだ。曹操を見ると……変に胸

がざわつく。なんか嫌なモンを思い出しちまいそうな感覚がしやがる）

曹操との話し合いが始まってより、徐々に膨れ始めた感情に心を雁字搦めにされたような気がしていたハセヲは、態度を取り繕う余裕もなく、冷静になってみれば失礼以外の何でもないような態度をとってしまった。

「どうしました、お兄さん？　曹操様に対して、何か思うところがあるのですかー？」

ハセヲの態度を不思議に思ったのか、風たちが声をかけてくる。

どこかの陣営が訪ねてくるたびに、ハセヲに突きさすような視線を浴びせることが多い三人であるが、今日の視線は心配するもののソレだった。

それに対して、この感情の正体が分からないハセヲは「心配すんな」とだけ零し、何でもなさそうな態度で立ちあがろうとしたのだが……

「……ワリイが、肩を貸してくれ」

「「「……」」」

曹操との話が始まるより以前から正座を続けていたハセヲの膝は、とうの限界を迎えており、情けなくも星と稟に肩を支えてもらって退出したのだった。

???　side

「おー、来た来た。ここぞとばかりに美味しい思いをしちゃろうと考えよるアホどもが」

「……」

「恋殿？　何を探しておられるのですか？」

虎牢関の城壁の上から、恋たちは本来眼前に広がっている筈の荒野に埋め尽くされた人と旗の群れを見やる。

目的の物は……あった。

「純白の……“錬”旗、見つけた」

「ほ～、最近売れ出し中の天の御遣いって奴か？　恋が興味を持つなんて、？水関で何かあったん？」

「戦ったら……面白かった。今までに、見たことない……相手」

霞が、興味深そうに聞いてきたから答えた。

横ではねねが、「恋殿にかかれば、どんな相手だろうが敵いっこないのです！」と小っちゃい体を張って話している。

それを見て……恋は強さを示さなきゃ、と強く誓う。

――強くないと、皆を護れない。

月を、詠を、霞を、ねねを、華雄を、そして大切な家族を。

（だから恋は……戦って……勝ち続ける。これからも、ずっと……）

たとえ、目の前に２０万以上の兵がいたとしても、だ。

「へ～、恋が面白いっていうくらいやから、ごっつ強いんやろうな！　ウチも戦ってみたいわ～」

「霞、……それはダメ」

分かっとる分かっとると笑い飛ばしている霞。

それを聞いて安心した恋は、眼前に広がる人の群れにおいて小さくても確かな存在を主張する、純白の“錬”旗をしばし見つめ……

「申し上げます！　華雄将軍が出撃するとのことです！」

「んなっ！？　懲りんと、あのイノシシがっ！？」

「……出撃する」

飛び込んできた伝令の言葉を聞いたうえで、出撃を決断した恋は、無造作に置いてあった方天画戟をつかむと、関から討って出るべく、城壁をあとにした。

???side了

## 第１３話（後書き）

今年も残すところ、数時間。

私は喪中につき、慎ましく新年を過ごすことになりそうですが、皆さま！よいお年をお迎えください！

来年も私の作品とハセヲにお付き合いくださると嬉しいです！

次回予告

――世界が反転する。

「こっからは本気だ！」

「・・・アアアァァァ。」

「いざ・・・参る！」

「ハセヲ・・・、来い。」

それは『ヒト』の限界を超える者同士の戦いだった。

次回もお楽しみに！

## 第１４話（前書き）

皆様！今年もよろしくお願いします！

今回は戦闘描写が多いので、とても苦労しました。

楽しんでいただけたら幸いです。

# 第１４話

「……アイツらの中では、守るって意味は攻めるって意味と同義なのか？」

虎牢関の城門が突然開き、銅鑼を鳴らしながら敵が攻めてきたのは予想外にもほどがあった。

？水関と同様に後曲に配置されたため、遠巻きに戦場を見渡しながら、そう呟くハセヲの前に構えられた巨大な要塞――虎牢関――から出撃してきた漆黒の“華”旗、深紅の“呂”旗、紺碧の“張”旗。

鉄壁ともいえる守りを捨て、数で負けている連合側に対して討って出るという選択をした理由が、ハセヲにはいまいち分からなかった。

「そうですね、このような場合ですと乾坤一擲、玉砕覚悟で敵の総大将の首級をあげにかかるか、ある程度の痛手を我らに与えてから逃走を図るといった案が浮かびますが……」

「行軍速度に乱れが見られるのでー、おそらくは前回の敗北の汚名を返上しようと息巻いた華雄が独走してしまい、それに釣られて出陣せざるをえなくなった、というあたりですかね～」

「そうか、だが……」

稟が討って出てきた敵側の行動から考えられる選択肢をあげ、それに続いて風が現状から推察した内容を述べる。

それを聞きながらも、ハセヲは眼前に広がる光景を呆れ半分、驚き半分で見つめながら口を閉ざしてしまった。

状況は董卓軍にとっては不利なものばかりの筈なのに、戦況は油断のならないものだったからである。

前曲に配置された無駄に豪奢な鎧に身を包んだ袁紹軍。

錬度はともかくとしても、その数の暴力は、董卓軍の進む道を隔てる巨石のように鎮座しているのだ。

それを――――

「どけえええぇぇぇいいい！」

斬り込み隊長といわんばかりに、猛将と謳われる華雄が鋒矢陣をとって袁紹軍に突き刺さる。

前回の汚名をすすぐべく、獅子奮迅の戦いぶりをみせる華雄の猛撃は、袁紹軍という巨石にいくつもの小さい穴を開けた。

そこへ――――

「邪魔じゃボケェ！　覚悟の無い奴はどきぃや！　今日のウチは機嫌最悪やからなあぁぁぁーーー！」

雄々しく突き進む張文遠の姿が見える。

華雄が積極的に攻めれているのも、張遼が袁紹軍をうまく誘導し、守りの薄いところを作り出している点が大きい。

“神速”の異名をもち、巧みな用兵術を扱うことでも知られる張遼の突撃は、自慢の機動力と用兵をもって、華雄が開けた穴を広げる。

――さながら、開けた穴に楔を打ち込むがごとく。

そして――

「弱い奴は……死ね」

その武たるや三国無双、“飛将軍”と謳われる呂布が、無慈悲な“死”をまき散らす。

見た目はともかく、造りもしっかりしているだろう鎧も、呂布の一撃の前では無力に等しかった。

誰にもその進撃を止めることはできず、張遼が広げた穴を強引に押し通る。

――楔へと打ち放つ鉄槌のごとく苛烈さをもって。

（これが……董卓軍が誇る三将の実力か）

戦場を見つめるハセヲ。その内心を読み取ったかのような言葉が、頼れる軍師から届く。

「もともと、呂布、張遼、華雄、三人ともが守りに徹するよりも、機動力を活かした突撃こそが強みの将です。
華雄の無謀だと思えた突撃が、結果として本来の持ち味を活かした戦術へ昇華されたようですね」

「出だしこそ十分な連携はとれていませんでしたが、それを素早く補助し、立て直した張遼の用兵は凄まじいですね～。まあ、それも呂布の突撃力があってこそのものでもありますがー」

稟や風が言う通り、呂布たちの勢いは袁紹軍の懐近くに食い込んだ今でも、衰えることなく突き進んでいる。

その軌道は、袁紹本人がいる中央部分を避け、右まわりに楕円を描くように反対側を目指しているもの。

総大将の首をとらせるわけにはいかないため、袁紹本陣の守りは堅固なものだ。

呂布たちも、さすがに本陣を突こうとまでは考えていないのか、構わずに突き進み続けている。

（なっ！？　このままだと俺たちのところに来る！？）

「む、まずいな。このまま袁紹軍を突きぬけるとなると……我らとも接触する」

星もハセヲと同じ考えに至ったようで、形の良い眉毛をしかめている。

（ハセヲ……、また恋と……闘う）

その時、ハセヲの脳裏によぎったのは、去り際に感情が読みにくい呂布が放った、何らかの決意を感じさせる言葉。

確かに呂布の進む道の先には、自軍の象徴でもある純白の“錬”旗が掲げられている。

「気まぐれじゃなかったってことか。いいぜ、やってやる」

「……？？　何がですか？」

事情を知らない稟たちに、前回の戦闘で呂布が言っていたことを伝えるハセヲ。

「また女か（ですね～／ですか）」

それに溜息混じりで応える星、風、稟。

「何で女（そこ）に反応すんだよ？　それより、迎撃態勢を整えるぞ！」

「……そうですね、まあ“今は”迎撃（それ）態勢のほうが大切ですか。ハセヲ殿、指示を願います」

稟の言葉に違和感を覚えたハセヲだったが、時間に余裕もないため、今もこちらに向かって進行中の呂布を一瞥し、気を取り直して声をあげる。

「右翼は稟とバルムンク、左翼は風とオルカ、本陣は……俺と星、カイトでいく。諸侯と協力しつつ、無理のない程度で敵を迎撃、危険だと判断したら、すぐ撤退の合図を……風、頼んだ」

「「「御意」」」

（そう……俺にはコイツらがいる）

指示に従い、すぐさま動き出す仲間たちを、ハセヲは頼もしく見つめながら、激しい戦闘音が段々近づくにつれて無意識に握りしめていた拳――――予想外に力がこもっていた――――を開き、星に促されて配置についた。

そして、その直後――――

「……突破する（するでえっ！／するぞっ！）」

ついに袁紹軍という巨石は、董卓軍が誇る三将に砕かれ、貫かれてしまったのだった。

呂布ｓｉｄｅ

（あとは……ハセヲと、戦うだけ）

数だけ多い邪魔な奴らは振り切った。

目的地まで邪魔をする奴らは、霞と華雄が引き受けてくれている。

「恋！　天の御遣いと仕合うんなら、四半刻（約３０分）が限界や！　それ以上は、周りの奴らの足止めはできんからな！」

「ふん！　呂布がそこまで固執する相手ならば、私もぜひ戦ってみ

たいが……お前には？水関での借りがあるからな。今回は、周りの奴らの露払いに徹してやる」

「……ありがと」

未だ馬上で行軍中でもあるのに、恋の声がちゃんと聞こえたのか、口元を緩めた二人が駆けだしたの見届け、血に濡れた方天画戟を一振るいし、純白の“錬”旗を目指して赤兎を駆る。

自分でも何でこんなにハセヲと再戦したいのか――よく分からない。

強さでいえば、？水関で戦った関羽って奴と同じか、ちょっと弱いぐらい。

馬じゃない変な乗り物に乗っていて、何も無いところから武器を取り出す変な奴。

最後の一撃はちょっと危なかったけど、一対一で戦えば、まず負けることはない相手だとは思う。

だけど――

（それだけじゃ……ない。ハセヲは今まで戦った奴とは……違う感じが、した）

前回の戦闘で感じた違和感の正体をハッキリさせたい。

その答えを知りたいと、恋の本能（こころ）が叫んでいる。

（……見つけた）

そして、ついにお目当ての人物をその眼に捉えた。

――戦場に立つ姿とは思えないほど白く煌めく軽鎧を纏い、身の丈を超す大剣を手にした男を。

呂布　ｓｉｄｅ　了

ハセヲ　ｓｉｄｅ

胸の中は不思議と落ち着いていた。

心音のリズムは一定を保っているし、思考もクリアだ。

ただ、胸の奥が妙に熱かった。

「ハセヲ……、約束通り、恋と……戦え」

（そんな約束をした覚えは、こっちにはねーが……上等っ！）

俺から１０ｍの距離をはさんで馬から降りた呂布は、すでに臨戦態勢でこちらを見つめている。

前回は、呂布が発していた闘気のせいで身体が強張ってしまった俺だったが、今は自然体である。

まあ、その理由はちゃんと分かってるんだが……

「いくぜ……、星、カイト。遅れんじゃねーぞ！」

「ふん、誰に言っているのだ、ハセヲ」

「……アアァァ」

横に目をやれば、“静カナル翠ノ楽園”と“虚空ノ双牙”を構える二人の姿が。

それに対して口元を緩めることで応えた俺は、視線を呂布へと戻し、不敵な笑みを浮かべ、見せつけるように告げた。

「見せてやるよ、呂布。――――これが俺だ」

「じゃあ……行く！」

俺の言葉に、再び呂布の眼に何らかの感情が宿ったような気がしたが……

ズダンっ！

大地を踏み抜くかのような踏みこみから、信じられないほどの加速をみせ、呂布の横薙ぎの一撃が俺を襲う。

「ふんッ！」

それでも慌てることなく、俺は腰だめに構えていたシラードを振り抜き、呂布を迎え撃った。

鍔迫り合いは一瞬。

一撃の威力では勝っていても、初動の差がつきすぎていたこともあり、俺の一撃はあえなく弾き返され、反動で身体が反り返ってしまう。

すぐさま呂布が返しの一撃を叩き込もうとしてくるが、俺の表情に焦りは無い。

「アアアァァアアーーー！」

すかさず俺と呂布の間にわって入ったカイトが虚空ノ双牙を交差させ、呂布の一撃を逸らし、懐に飛び込もうとする。

「……させない」

しかし、そこに遠心力を感じさせないような呂布の手さばきによって繰り出された柄による追撃が迫る。

カイトは何とか体を開き、右方に飛びのいてこれを回避。

「やるな！　ならば、これはどうだ！」

かなり強く飛びのいたものの、呂布の攻撃が予想以上に伸びたこともあって回避がギリギリになってしまい、戦闘の予備動作をとるべく硬直したカイトを救わんと、星が呂布の左側面から突きの雨を浴

びせる。

「はい！　はい！　はいぃぃ！！！」

「早いけど……それだけ」

静カナル翠ノ楽園が空を切るたびに、張りつめた弦を弾くような音が響く。

ここ一番でのトップスピードならば、俺たちの中でも随一を誇る星の連撃を、呂布は見事な体捌きのみでかわしきっていた。

（すげえな。あれを体術だけで捌くか……）

その事実に、星が顔をしかめる。ならばと、体勢を立て直した俺とカイトが加わった。

「……ん」

それに小さく眉をひそめた呂布は、さすがに三人を同時に相手するということもあって、戻りの早さを意識した突きが飛んでくる。

それでも避けられない一撃ではなかった筈だった。

だが――――

（速いっ！？）

俺は慌ててシラードを方天画戟の射線上に割り込ませ、片手をシラードの腹に添え、歯を食いしばった。

ギャリンっ！！

シラードの上から、腕を貫かれたかと思う痺れが伝わってくる。

ただ、それだけならば踏みとどまれないこともなかった。

（星もカイトもパワーじゃ呂布には勝てねえ。なら俺が――――突破口を開く！）

そう決心した俺は、二人に目配せを送ると、タンっと後方に飛びのく。

俺の意図を察してくれたのか、今も続く呂布の攻撃を捌き続けている二人が、さりげなく俺と呂布の間に入り、俺の姿を呂布から隠した。

「いくぜ！」

俺の声に合わせて左右に散った二人の間を、シラードを力の限り握りしめ、肩越しに構えた状態で駆け抜けた俺は、呂布に力の限りの袈裟斬りを放った。

「そんな単純な攻撃……当たるはず、ない」

言葉通り、余裕をもってサイドステップで回避した呂布の脇に、シラードが叩き込まれ、地響きに似た音があがる。

今の一撃を見ても、顔色一つ変えないあたり、さすがだとは思うが……

（これなら……どうだ！）

間髪いれず、俺はシラードに力を注ぎこむ。

その瞬間、爆発的に膨れ上がったシラードの力に呼応し、心臓がひときわ強く脈打った。

「奥義！」

そして俺は――――、シラードを突きだし、アーツ使用時のブーストによって予備動作を無視し、初速から最高速で呂布に肉薄する。

「――――っ！？」

ここにきて、隠しようがないほどに顔を歪めた呂布だったが、俺の突きを何とか受け止めきる。

その衝撃に両腕が痺れたが、両足を踏ん張って身体を背後にねじった俺は、受け止められた反動で弾かれたシラードを、そのまま俺の背後の地面に叩きつけた。

呂布は、俺の行動の意図が読めないのか怪訝な表情を浮かべながらも、背を向け、隙だらけの俺に対して戟を振るおうとしたようだが……

「……っ！？　攻撃、終わってない！？」

「甲冑割（かっちゅうわり）！」

俺の叫びと共に呂布の足元の地面が盛り上がり、シラードの刃が呂布を打つ。

シラードは、まるで円を描くかのような軌跡をもって、文字通り足元の大地を切り裂き、反応が僅かに遅れた呂布の戟を打ちすえ、その身体ごと宙へと打ち上げたんだが……

「……ビックリ、した」

「なんつー反応の良さだ。初見でこれかよ……」

正直、反則だとしか思えねえ。

予定なら空中で死に体となった呂布に、星とカイトが追撃をかける手はずだったんだが、とっさに手首を返して打ち上げたシラードが捉えたのは、方天画戟のみ。

加えて、あの一瞬で自ら後方にジャンプした呂布は、星たちの追撃可能範囲から逃れた軌道をとり、まるで猫を思わせるしなやかさで着地してみせやがった。

（単純な強さだけじゃねえ、戦闘センスっていうのか？　そういうもんもズバ抜けてやがる！　まさに三国無双ってわけだ）

無理な体勢からアーツを発動させたことによる反動で、無視できない痛みを感じる。

今の連撃で決着がつくとまでは思ってなかったが、全くダメージを与えられないとも思っていなかったってのにな。

「ハセヲ！」

そう考えていた俺のもとに、星とカイトが駆け寄ってきた。

「心配すんな。まだまだ余裕だっつの」

「……ああ、それだけ強がれるならば大丈夫か。しかし、我ら三人を相手に、つけいる隙を与えぬとは……」

俺に対する心配と、呂布に対する驚愕からか、星の表情は険しい。

実際、今はまだ拮抗しているように見えるが、今となっては、それも時間の問題だろう。

未だ、呂布が本気になっているとは思えなかったからだ。

「お前、不思議な……奴」

「……あ？」

ここで、何の脈絡もなく呂布が口を開く。

「変な武器や……技を使うだけじゃ、ない。ハセヲの攻撃には……殺気が、ない」

「……」

「どうして、殺す気で……こない？　ハセヲは……恋を殺さずに倒せるほど……強くない。このまま続ければ……ハセヲの、負け」

――確かにそうかもしれない。

「負けたら……大切な人、もう……護れない。だから……恋は負けない」

――それは俺だって同じことだった。

「だから……ハセヲ、本気……出せ。恋も本気で……行く」

どうやら、呂布の“スイッチ”が入ってしまったようだ。

（こっちはもう十分本気だってのにな。……仕方ねえ、“アレ”を使うか）

今までででも、十分強力だった呂布からのプレッシャーが、三倍増しになったかのような重い空気。

一般人だったら、発狂する奴もいるんじゃないかと思える気当たりを、俺はどこか他人事のように感じていた。

この時点で、俺の意識はすでに外界に対してのソレよりも、俺の内面に対してのソレの方を強く感じていたから――

（そうだ、呂布が“ヒト”の限界を超えるほど強いってんなら……）

このままでは、ジリ貧になりそうだと判断した俺は、これ以上手の内を晒す前に、一気に畳みかけることを決意する。

その前に一つ、呂布に伝えておきたいことがあった。

「呂布、俺にテメーを殺すつもりはねえ。お前にも、お前が死んだら悲しむ奴がいるだろ？　俺はもう、そんな奴の顔を見たくねーんだよ。

独善だろうが自己満足だろうが、俺はそう決めたんだ！

何度戦うことになろうが、俺は勝ち続ける！　護り続けてみせる！

自分（テメエ）が決めた信念は曲げねえ！　それが俺の覚悟（おもい）だ！」

言いたいことは伝えた。

もう、これ以上の言葉は必要ねえ。

あとは――決着（ケリ）をつけるのみ。

今の俺の言葉を反芻しているのか、呂布は軽く俯いて黙っている。

後ろから「やれやれ……」と言葉のわりに面白気な声が届いた。

「星！　カイト！　“アレ”を使う！　これで決めるぞ！！」

気にせず俺は、呂布と同じ高みへ至るべく、自身の最奥が一つの扉を――開いた。

「武獣覚醒！！」

ハセヲｓｉｄｅ　了

――世界が反転する。

「こっからは本気だ！」

「アアアァァアアーー！」

「いざ……参る！」

ハセヲの眼に映るのは朱金に染まった世界。

いや――正確には世界が染まったわけじゃなく、ハセヲたちが朱金のオーラを纏っているのだ。

全身の血液が沸騰しているんじゃないかと思えるような高揚感を、ハセヲたちは感じていた。

きっと、脳内物質が異常に分泌でもされて、最高にｈｉｇｈってやつになっているのだろう。

そして、身体を動かすたびに揺れる朱金のオーラは淡い光を放ち、その緩やかな流れとは裏腹に、内に莫大なエネルギーを宿しているのが分かる。

『武獣覚醒』

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて、制限時間はあるものの、物理攻撃に特化した恩恵（リミッター解除みたいなもの）を受けたハセヲたちは、改めて呂布と向き合った。

――Ｗｅａｐｏｎ　ｃｈａｎｇｅ

ハセヲはシラードに変わって“万死ヲ刻ム影”を喚装し、肩越しに構えて呂布を見つめる。

そこでようやく顔をあげた呂布の顔には、確かな感情が見てとれた。

待ち望んでいた“モノ”を見つけたかのような、無邪気な子どものような喜びの顔を。

「ハセヲ……、お前、面白い。恋が勝ったら……恋の“もの”に、なれ」

「はあ？」

呂布の脈絡のない会話に慣れてきたかと思っていたハセヲだったが、気のせいだったらしい。

（自分の”もの”になれって何だ？　俺はおもちゃか？）

「お断りだ。そもそも俺は負けねえよ！」

「恋が負けたら……恋がハセヲの“もの”に……なる」

「「んなああっ！？」」

当然というふうに、ハセヲが言ってのけた言葉に、呂布もまた当然といった言葉を返した。

それを受け、身体を驚愕を隠せないといった感じに身体を反らすハセヲに星。

「おい！　それじゃあ、どっちにしろ俺は、テメエと一緒にいることになるだろうがっ！？　どうしてもそうしたけりゃ、俺たちに勝つことだな！」

「じゃあ……そうする」

どこまで本気なのか（最初からとは思いたくない）分からない呂布を見つめるハセヲだったが、少なくとも呂布のヤル気は十分であった。

有言実行とでもいうのか、先ほどまで呂布の顔に浮かんでいた笑みが消え、無表情へと戻る。

いつもの表情に戻っただけなのだが、先ほどの笑みを見た直後ということもあり、その姿は、妙に貫録を放っていた。

呂布の発言により、場が崩れそうになったこと、なぜか、「負けるわけにはいかん！」と、凄絶な形相を浮かべている星が気になるハセヲだったが、何とか気を取り直して“万死ヲ刻ム影”を握りしめる。

「さあ……ここからだぜ」

「ハセヲ……来い！」

「オオオオオォォォォーーーーーーー！！」

「フッ！」

ハセヲは己でも信じられない程の加速と勢いをもって呂布へと接近し、二の太刀のことを度外視した薙ぎ払いを放つ。

呂布も鋭く息を吐き、方天画戟がしなって見えるほどの剛撃で迎え撃ってきた。

ズシャアアアアア！！！！

凄まじい力がこもったお互いの一撃が交差した瞬間に弾き出された空気が、衝撃波となって大気を震わせる。

渾身の打ち合いはドロー。

どちらかが打ち勝つこともなく、ハセヲも呂布も反動に逆らわず、大きく後ろに飛びのいた。

（〜〜〜〜〜っつ！？）

今の一撃だけで脳天にまできた痺れを、ハセヲは歯を食いしばって何とか噛み殺す。

そんなハセヲの両脇を、さながら放たれた白と赤の弓のような勢いで星とカイトが駆け抜けていった。

二人は呂布の周りを円を描くように回り始め、お互いにタイミングをずらして途切れることのない攻撃を浴びせ続ける。

「――――うっとおしい！」

焦れたような声を出し、呂布は一息で三百六十度――全方位――全てを横殴りに戟を振るった。

「くううううっ！？」

至近距離にいたが、なんとか腰を落として回避したカイト。

そして、静カナル翠ノ楽園で呂布の一撃を受け止めた星が、苦悶の声をあげる。

星を弾き飛ばした呂布に反撃をしかけようと、カイトが沈めていた身体をバネのように跳ねあげるが――それよりも更に呂布のほうが早かった。

一足跳びで戦場を離脱した呂布は、すぐさま攻勢に転じる。

再び、予備動作も少なく左上段からの振りおろしがカイトに迫る！

しかし、“死”の気配に満ちた一撃を、カイトは斜め前に踏み出すことで回避。

同時に、振り下ろされた戟にそっと虚空ノ双牙を添え、その軌道を僅かに変える。

重心が安定している呂布にとっては本当に僅かな狂いだったが、力の流れに生じた異常（ズレ）を正さんと、条件反射のように呂布の身体が一瞬の硬直をみせた刹那――

「アアアァァアアーーー！！」

その隙を逃さず、呂布の脇腹にカイトは膝を叩き込む。

とっさに呂布は片肘を差し込んだようだったが、小気味いい音とともに、呂布の身体がくの字に曲がって宙に浮きあがった。

この機を逃さぬというばかりに、さらに虚空ノ双牙の柄で呂布の側頭部を打ち、意識を刈り取ろうとしたカイトだったが……

「っ！？　下がれ！」
「ひゅうっ！」

呂布の苦痛か息吹か判別できない声を耳にした直後、慌てて叫んだハセヲの声に反応したカイトは、全力でバックステップ。

その眼前を、下から方天画戟が唸りをあげて通過していった。

――カイトの淡い緑色の髪が、数本宙を舞う。

武獣覚醒の効果により強化されたカイトの膝（直撃しなかったとはいえ）をもらってなお、武器を手放さなかった呂布は、お返しとばかりにカイトのあごを狙って、方天画撃を振り上げたのだ。

膝をもらって生まれた反動をも利用した、恐るべき反撃の一閃。

間髪回避が間に合ったカイトであったが、その様子はいつも通りのように見えて――そうではなかった。

アウラが施したプログラムにより、主と認定されているハセヲの指示に従う以外の出力（はんのう）を見せないカイトが、回避した先で右肩を軽く

突き出すように――構え（？）のようにも見える――軽く身体をひねっている。

相手を警戒しているとでもいうのだろうか。

一方、反撃を試みたものの、さすがに無視できない痛みに顔をしかめながら着地した呂布は、膝をもらった左腕を軽く振りながら、左肩と一緒に左足を半歩ほど後ろへひき、ダメージをもらった部分を庇う。

――そこで呂布は気付いた。

（……？　白い、女が……いない？）

呂布の視界に入っているのは、ハセヲとカイトのみ。

そして呂布の耳が捉えたのは、前方の二人の荒い呼吸音と……頭上から聞こえる細く長い息吹だった――

（っつ！？）

躊躇い無く、呂布が身を投げ出すように身体を低くした瞬間だった。

「ハアアァァァーーーっ！！」

雄叫びとともに、呂布の頭上を、黄色い閃光が通り過ぎていく。

呂布は地面についた身体を、前転の勢いを使って跳ね起こす。

同時に、先ほどまで呂布がいた場所に、星が姿を現していた。

――朱金のオーラを纏っていてなお、力強く明滅する黄の光刃を備えた槍を構えた姿で。

（まだ……何か、来る！）

その槍から感じる圧力が強力になったことを察した呂布は、体勢を立て直し、意識を整え、目を細めた。

そこへ――――

「刺々舞（ししまい）！」

一気に間合いを詰めた星は、アーツを発動した。

（――速い！）

間違いなく、これまでで最速、全てを貫いて余りある一撃が呂布へと迫る。

回避するしかないと瞬時に決意した呂布は身体を捻じった。

肉薄していた静カナル翠ノ楽園が、うす皮一枚を抉って進んでいく。

刃先がかすっただけにもかかわらず、内臓がひっくり返りそうな感覚が呂布を襲う。

（あと……少しっ！）

この一撃に込められていた力の凄まじさを思い知るとともに、呂布

は歯を食いしばって痛みに耐え、身体をひねり続けた。
結果、星を正面に捉えて移動し続けた呂布が星の真横まで来た時、星の一撃は完全に通り過ぎていた。
今ので決めるつもりだったのだろう。
星の顔が驚愕に歪むのを見た呂布は、隙だらけの背後に追撃をしかけようとしたが……
「させるかよっ！」
そうはさせじと飛び込んできたハセヲの一閃を捉えるやいなや、呂布はハセヲに向かって踏みこみながら、腰を限界まで落とす。
焦りから必要以上に大振りになっていた白刃が駆け抜けていくのを見届けた呂布は、返しの刃が迫る前に――――戟から離した右手をハセヲの腹に当てた。
瞬間的な脱力からの、下半身への体重移動。
亀裂が入る音を意識の片隅で捉えながら、両足で大地を踏みしめる。
さらに、沈めた腰を戻す勢いをも利用し、膝から腰、腰から肩、肩から腕へと至るまでに増幅した力を、呂布は前方へ解き放つ。
「発（はっ）！」
「っ！？　環ぎｒ、うっおおオオオオオオーーー！」
短い気合いの直後、ハセヲの身体を浮遊感が包み込み、そして僅か

に遅れて衝撃がきた。

ハセヲの身体を横殴りに吹っ飛ばす強烈な発剄が炸裂する。

ハセヲは５ｍ近く吹っ飛び、そのまま大地に投げ出されるかと思われたが……

「アアアァァ……」

「ぐっ！？　助、かった……ぜ、カイト」

地面に叩きつけられる直前で、回りこんで来た赤い“モノ”。

さすがに、強力な運動エネルギーを小柄なカイトが受け止めきれるはずもなく、二人して地面を滑ることになったが、受け身を取る余裕は生まれた。

（くそっ！　不完全だったはずなのにこの威力かよ！　完全だったなら、肋骨が爆砕してかもしんねえな……）

腹を貫かれたような痛撃を感じながらも何とか起き上がったハセヲは、思わずそう考えてしまい、ぞっとした。

その視線の先には、呂布が左手にもった戟を支えにして立ちあがった姿が見える。

発剄を打ちこまれる直前――――、ハセヲは不完全ながらも環伐（わぎり）を発動させ、呂布を吹き飛ばしたのだ。

「ハセヲっ！？　すまん！　大事ないか！」

そこへ星も合流する。

その顔は、初めて見るほど心配の色に染まっている。

ハセヲは、装備品効果による自然回復が効いているのを自覚し、それに「問題ねえよ」とだけ返し、思考に沈む。

（これだけ攻めてもクリーンヒットはゼロ、か。……しょうがねえ、覚悟を決めるしかねえってことか）

武獣覚醒の効果時間も残り少ない。

先ほどの腹へのダメージを思い出しながら、“万死ヲ刻ム影”を右手で強く握り締める。

覚悟を決めて呂布へと突貫することを決断したハセヲは、懐から”とあるアイテム”を取り出し、顔をあげて呂布を見据える。

その顔には、恐れも、迷いも、未練もない。

呂布を倒す――その純然たる“意志”だけが、そこにあった。

雪蓮　ｓｉｄｅ

「やるじゃない、ハセヲ♪　ここまでとは思ってなかったわ」

？水関において呂布と戦ったことで、冥琳の怒りをかった私は、はやる気持ちを抑えながらも、本陣からハセヲの戦いぶりを観戦していた。

呂布の強さは、常軌を逸している。

相手の力を巧みに受け流し、時には強引に、時にはしなやかに方天画撃を振るう姿は、まさに“歴戦の兵（つわもの）”という称号に相応しい。

事実、私自身も手に余る相手だと感じていた。

その呂布に対して、よく分からない光に包まれ、真っすぐぶつかっていくハセヲ。

今まで見たこともない戦闘風景に心が躍るのを感じながら横を見れば、妹である蓮華もまた、奮戦するハセヲの姿を驚愕の眼差しで見つめていた。

「どう蓮華？　あれが、前に話した天の御遣いよ」

「……はい、？水関では単騎で呂布に挑んだと聞いたので、自信過剰で自己中心的な輩かと思っていましたが……今の戦いぶりを見るに、周りの仲間の動きをよく見て動いているのが分かります。確かに噂に踊らされただけの人物ではないようですね」

「でしょ～♪　だからきっと、孫呉に招けば力になってくれること間違いないわ！」

「それとこれとは話が別です！　何より、いくら冥琳が納得したからといって、私に何の相談もなく、正体の知れない天の武器を譲り受けたなんてっ！　姉さまの身に何かあったら……！」

（う～ん、結局こうなってしまのよねえ……）

私たち三姉妹の中にあって、なぜか頭の固い蓮華（そこが妹の長所でもある）に苦笑をこぼし、再び視線をハセヲに戻す。

――あとで蓮華に聞いた話によると、この時の私は、良いところでお預けをくらった子どものような顔をしていたんだとか。

雪蓮　ｓｉｄｅ　了

華琳　ｓｉｄｅ

「うわ～、あの兄ちゃんたち強いね～」

「うん、あの呂布と互角に渡り合ってる。私たちじゃ……厳しいね」

「あら？　じゃあ、ハセヲたちが私と敵対した時、誰が私を護ってくれるのかしら？」

小柄な体に信じられないほどの力を秘めている、我が親衛隊長の二

人――季衣と流琉――に、意地悪気に聞いてみる。

もちろん、どんな答えが返ってくるかなんて分かりきっていたのだけれど――

「華琳様はボクたちが命に代えてもお護りします！」

「はい！　私も季衣も、この命尽きる時まで何者であろうと、華琳様に触れさせはしません！」

「ええ、分かっているわ。頼りにしているわよ」

予想通りの答えに満足した私は、再びハセヲの戦いぶりに魅入った。

洗練されたとは言い難いが、それゆえに力強い動き。

愚直なまでに真っすぐな、己自身を表しているいるかのような一閃。

そして――何よりも眼を惹く、揺るがない意志を感じさせる瞳。

（これほどの人材をのさばらせておくなんて……認められない）

優れた才を持つ人間は、それを振るう自由があるが、同時にその結果に生じた出来事に対する責任がある。

その認識に欠けていた場合、どれほど優れた才をもっていたとしても、その者はいずれ日の当たる世界にはいられなくなるだろう。

その点で言えば、ハセヲは心配無い。

多少危うげな部分があるのも事実だけれど、呂布と戦えるほどの“武”はもちろん、私が一番気に入っているのは、ハセヲの信念となっている“覚悟（おもい）”なのだから。

改めてそう実感した私は、さらに視線にこめる熱を強くし、決着をつけようとしているハセヲと呂布の姿を追っていた。

華琳　ｓｉｄｅ　了

桃香　ｓｉｄｅ

「す……ごい。ハセヲさん、こんなに……」

私は、遠目にも激しさが伝わる戦いに、とりわけハセヲさんの戦う姿に目を奪われていた。

これまでにも、何回か同じ戦場に立つことはあったけど、ここまで接戦をくり広げたことはなかったから、ただ自慢の義妹たちと同じくらい強いとしか思っていなかった。

それでも十分強いっていうのに――愛紗ちゃんや鈴々ちゃんでも歯が立たなかった呂布さんと、一歩も引かずに戦っているハセヲさんの存在が……何だかとても遠くに感じられた。

――そのとき思ったの。ハセヲさんと対等になりたいって。そう……ハセヲさんにとって“不思議な人”じゃなくて、“頼れる人”に――

前にハセヲさんに伝えた言葉は、私の本心だ。

今でもこの想いは私の胸の中にある。

けど――

（遠いなぁ……ハセヲさんの背中。そんなこと、最初から分かってたことなのに、さらに遠くなっちゃった気がする）

思わず挫けそうになるけれど、そんな暇があるわけないっていうのは分かってる。

ハセヲさんには、口だけで何を言っても意味なんて無い。

――必要なのは、強き想いのみ。

（そう……私は一人じゃない）

私を護ってくれる人が、支えてくれる人が、必要としてくれる人がいる。

だから、自分に出来る限りのことをすればいいんだ。

――今は、こうしてみんなが無事に帰ってくるのを待つことだけだとしても。

（今はまだ……これが未熟な私にできる一番のことだから、ね）

つい、悲観的なことを考えそうになっちゃったけど、現状を再認識できた私は、呂布さんに弾き飛ばされたハセヲさんの無事と勝利を願いながら戦いの行方を見守り続けた。

桃香　ｓｉｄｅ　了

天の御遣いとその仲間、そして飛将軍の戦いは、どちらも譲らぬ激戦となる。

しかし、体力的な問題、時間的な問題からくる限界が、両者を苛んでいた。

――決着の時は近い。

## 第１４話（後書き）

え～、いかがだったでしょうか？

私の知識不足のため、戦闘描写に致命的な矛盾があったかもしれません。

何かありましたらご指摘ください。可能な限りで訂正します。

次話で呂布戦も決着なんですが・・・こんな話が、あと最低三話は続くんですよ。

途中で力尽きなきゃいいんですけど（苦笑）

ハセヲの見せ場なんだから頑張らないといけないんですけど・・・

今後は、■ファンの人には怒られそうな展開になったり・・・？

・・・まあ、それはさておき！

ここでいきなりクイズです（笑）

ハセヲは、最後に取り出した”とあるアイテム”を使って、何をするつもりなのでしょうか？

もし当たったら・・・反董卓連合終了時にはルートが確定していますので、そこでの拠点話のキャラ指名権をお譲りします！

（正解者が複数いた場合は、こちらがクジでも作って決めさせていただきます。）

締切は１５話を投稿するまでです。予定としては・・・今月の１５日前後くらい？

よろしければ、ご参加ください！

ちなみにヒントとして・・・

？Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで手に入り、戦闘中に使えるもの。

？私の独自解釈（え！？）により、本来の用途から少し外れること。

？今のハセヲだから、必要になったもの、です。

それでは～♪

ハセヲ
「それでは～♪・・じゃねえええ！！」

ぎゃあああ！

ハセヲ
「ふう、相変わらず好き勝手やりやがって。あ～、まあ、軽い遊びのつもりで付きあってやってくれ。めんどうならスルーしていいぞ。」

ひ、ひど・・・い（泣）

たしかに、ネタ集めを兼ねたりもしてるけどさ。

ハセヲ
「下心丸見えなんだよ。少しは自重しろ。」
・・・以後、気をつけます。

## 第１５話（前書き）

お待たせしました！１５話を投稿します。

前回あげた幕間話は、この話の冒頭に結合していますこと、ご了承ください。

それと最後に登場するキャラは、アニメ基準で捉えてください。

それではどうぞ！

果たして、ハセヲの決め手とは！？

# 第１５話

――時は、虎牢関戦が始まる少し前までさかのぼる。

「ハァ、やっぱり使えそうにねえな」

百日の旅団長にして天の御遣いとも呼ばれているハセヲは、普段から無愛想な顔を、さらに不機嫌そうに歪めて呟いた。

その出で立ちは、この時代（がいし）の人間には見慣れないものだが、Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄにおいては、積み重ねた実績もあって、多くの人に認知されている。

ただ、今のハセヲを見た時、遠巻きでしかハセヲを見たことがなかった人でも、何らかの違和感を抱いたことだろう。

その違和感の正体とは……

「いくらやっても無駄ブヒよ。呪紋（ウェブ）が無いのに魔法（スペル）や、呪紋が関係した必殺技（アーツ）は使えないブヒ」

「そうみてえだな……」

ハセヲの試行錯誤の様子を見守っていたデス☆ランディが言った通り、ハセヲの両頬と両肩に刻まれていた呪紋が、この時代（がいし）に来たおりに、消失してしまったのだ。

その結果、先ほどデス☆ランディが言った通りの状況に陥ってしまったわけなのである。

「今のハセヲは……言うなればフィラメントの切れた懐中電灯みたいなものブヒよ。
精神力（でんち）はあっても、魔法（ライト）は使えない状態なんだブヒ」

（今の俺は壊れた電球と同じってわけか……）

デス☆ランディの例え話を聞いたハセヲは、自身の状態を何となく理解したが、はいそうですかと諦めるわけにもいかなかったのだ。

（重装甲破も防がれちまった以上、呂布と戦うんなら手は多いに越したことはねえ。何かないか……ん、これは？）

「まあ、無いものねだりしてもしょうがないブヒ。足りないものは、今ここにあるアイテムで何とか補っていくしかないブヒよ」

（足りないものは……補うしかない……っつ！？）

デス☆ランディの声を聞き流しつつ、並べられたアイテムを見渡していたハセヲが目に付けた一枚の“符”。

そこで、ハセヲの脳裏にあるイメージが浮かんだ。

「これを使えば……“アレ”ができるかもしれねえ」

方法として正しいのかどうかはともかく、理論上はいけるかもしれないと、ハセヲは試しに挑戦してみたところ……

「……何とかなった、な」

初めは突拍子もないアイデアかと思いもしたが、天（かみ）の加護を受けたかのような滑り出しの良さもあって、何回かの失敗を重ねた結果、見事に目論見（もくろみ）を成功させたのだった。

その一部始終を見届けていたデス☆ランディが「何て強引な奴ブヒか」と、呆れとも驚きとも思える声で呟いた声が、地面から円状に何かが飛び出してきたかのような跡が残るさら地に、虚しく響きわたっていた。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

それは、この世界に来て初めて知った感覚だった。

何かが胸の内から欠けていくかのような感覚に陥った直後、それまでとはうって変わって、身体中を雷が駆け抜けていくかのような衝撃が駆け巡り、力が満ち溢れてくる。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは、ボタン一つですましていたから――当たり前のものと享受していたこと。

自らの身をもって、放つようになったために――気付くことができたこと。

（……アーツって、こんなにスゲえものだったんだな）

俺は、そう思わずにはいられなかった。

時として、人間の限界を超えた動作を可能とする、絶対的なアドバンテージをもたらす切り札。

実際、これまでにも何回も助けられてきたわけで。

（だから……これで決めてやる！）

俺は荒くなっている呼吸を整え、懐から一枚の“符”を取り出して呂布を見据え、口を開いた。

「呂布、お互い余裕はなさそうだしよ。そろそろ決着といこうぜ」

「……ん」

コクンと頷く呂布の背後には、主の戦いに水を差させまいと、粉骨砕身で駆け回る騎馬隊の姿が見える。

絶対的な数の違いがあるなかで、奴らの表情や動きには、悲壮感みたいなものは感じられなかった。

きっと呂布を信じてるからだろう、と俺は素直にそう思う。

だが、こちらも負けるつもりはさらさら無く、吸いこまれそうに思える呂布の紫の瞳を見ながら、俺は心の中で念じる。

――――自分に言い聞かせるように。

（足りねえ力は“コレ”で補える。あとは覚悟だけだ。ここで呂布

を――――倒す！）

俺は大鎌“万死ヲ刻ム影”に持っていた符を貼り付け、必要な力を請い願うべく、その起動キーを叫んだ。

「地獄蟲の召喚符！」

とたん、符から一切の混じり気もない深い闇が顕現する。

自分の望む力が万死ヲ刻ム影に収束していき、その白刃を漆黒に染め上げていく。

本来、闇の力を封じこめた攻撃用のアイテムであった符は、その威を敵へと振るわず、俺の力となって、一瞬で万死ヲ刻ム影を漆黒の大鎌へと変貌させた。

その黒刃に秘められた闇の力が、まるでプロミネンスのように噴き出している。

その様子を、ポカンという擬音が聞こえてきそうな顔で見つめてくる呂布に、俺は思わず苦笑を零しそうになるのを堪え、万死ヲ刻ム影を突きつけて――――告げた。

「いくぜ、呂布！」

「（フルフル）……恋」

「……あ？」

「呂布じゃ……ない。……恋で、いい」

「……どういうつもりだ、呂布？」

決着をつけるべく放った俺の言葉に、何を思ったか首を横に振った呂布が言ってきたのは、おそらく真名にあたる名で呼べという催促。

本当にコイツの思考が読めねえ。

しかも確認の声をあげたところ……

「（フルフル）……恋」

「いや、だからよ、呂布「恋……」……わあ～ったよ！　恋！　これでいいのか！？」

最早やけくそと言わんばかりの勢いで言ってのければ、満足したのか首肯してくる始末だった。

今の状況を忘れて、叫びながら頭を掻きむしりたい衝動にかられた俺だったが、何とか押し殺すことに成功する。

これ以上、相手のペースに呑まれたくなかったのもあるが……ここが戦場であるのを忘れそうになった自分を戒める必要があったからだ。

――とりあえず、今までのやり取りで、一つ分かったことがある。

コイツは見た目、物事にあまり頓着しないように見えるが……頓着したことには、とことん我を通すタイプだ、絶対。

「じゃあ……いく」

「……」

こちらの気も知らず、方天画撃を掲げる恋を見つめ、俺は無言で万死ヲ刻ム影を肩越しに構えることで応じた。

今の恋の表情を、三国無双と謳われる“呂奉先”としての圧倒的な存在感を放っている姿を見れば……心はすぐに引き締まってくれた。

そこで俺は、万死ヲ刻ム影にありったけの力を注ぎこむ。

――求めるは、大鎌に与えられた最強のアーツ。

威力でこそ重装甲破より劣るも、命を奪いかねないために、どこか手加減してしまうアーツと違い、全力で振るえる万死ヲ刻ム影に許された“最優”の技。

ちぎれていた何かが繋がったような感覚と共に、俺の求めに応じ、万死ヲ刻ム影から漆黒の燐光が溢れだす。

「星、カイト。巻き込んじまうかもしれねえから、下がってろ」

それだけ告げると、俺はひき絞られた弓の様に――恋へと真っすぐ駆けだした。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

決着が近いことを悟り、二人の戦闘を見守る誰かが思わず息を呑んだ瞬間だった。

「「ハアアアアアアアアアーーー！」」

全く同時に駆けだしてきた呂布とハセヲは――――お互いの中間地点で、渾身の踏みこみからの反動力をのせた一撃を激突させる。

「「～～～～～～っつ！？」」

激突した瞬間に発生した衝撃波に顔面を叩かれながら、ハセヲは両腕から伝わってくる痺れを、奥歯を砕きそうなほど噛みしめて耐え、手首を返す。

そこで軸足を入れ替え、鍔迫り合いから離れた万死ヲ刻ム影の勢いを殺すことなく回転。

二度目の踏みこみと、遠心力も合わせた第二撃を恋へと打ち放った、のだが！

「恋の……勝ち」

「っがああ！？」

ハセヲの第二撃よりも疾く、呂布の攻撃がハセヲの脇腹を強打した。

刃は立てていなかったため、出血こそ無いものの、骨が砕ける嫌な

音が響き渡る。

「ハセヲヲヲヲヲオオオーーー！」

ハセヲの身体を、脇腹を中心として鋭い激痛が駆けまわり、星の悲痛な叫びがハセヲの耳を打った。

勝負はついた。この光景を見た誰もがそう思ってしまった。

それでも――――

（全てをっ……取り、戻すためにっ！　それに今、は……アイ……ツらに、もう二度と……見たくもねえ顔を、させ……ねえっ……ためにっ！）

耐えがたい苦痛から逃れようと、今にも断絶しそうな意識を繋ぎとめ……

きっと今の自分を見て顔を歪ませているだろう、仲間たちの姿をハセヲは想い……

「負、け……られっ……ねえ、んだよおおおーー！」

「っ！？」

崩れ落ちそうだった足を踏ん張り、砕けそうだった腰をすえ、ハセヲは止まりそうだった攻撃を、気力を振り絞って打ち放つ！

逆袈裟気味に放たれたハセヲの一撃は、驚愕からギリギリで復帰した呂布の戟によって受け止められるも、その身体を宙へと持ち上げ

る。

その結果を見届ける前に、ハセヲは熱いものが胸の中からこみ上げてくるのを我慢しつつ、跳び上がった。

その様子を呂布は、未だ自由のきかない空中にありながら、信じられない想いで見つめていた。

彼我の距離は１０尺（約３ｍ）ほど。

この距離ならば、ハセヲの武器は自分には届かないはず。

そのはずなのに、今もまだ燐光を失っていない大鎌の存在が――――

今の状況が危険だと、警鐘を鳴らし続けている。

――――“アレ”を解き放たせてはいけない。

着地するまではどうしようもないと分かっていながら、かつてないほどの焦りを呂布は感じとる。

そこにハセヲは、喉も裂けよとばかりに”万死ヲ刻ム影”に内包された力を解き放つ言葉（キー）を叫んだ。

「環伐乱絶閃（わぎりらんぜつせん）！！」

振り下ろした万死ヲ刻ム影が地面に突き刺さった瞬間、魔法陣が展開され、そこから悪魔を思わせる八本の巨爪が円状に出現し、空中にいた呂布を襲う。

凄まじいエネルギーを放出しながら迫る漆黒の爪を、呂布は戟で何

本か捌いたが……

「ア、アアアアァァーーー！」

それでも、３本目を捌いた後の一撃が呂布の肩に突き刺さり、身体が硬直してしまった瞬間――――残りの爪が、呂布の五体を貫く。

あまりの鋭さを誇る攻撃により、呂布は痛みを感じる間も無く、意識に霞がかかっていくのを感じた。

爪の痛みの代わりに呂布が感じたのは、地面に落下した際の鈍痛と、爪に貫かれたところから感じる、骨に食い込むような冷気のみ。

（ゴ……メン、月。恋……負け、た）

仰向けに大の字で倒れ、眼前に広がる蒼穹を見つめながら、大切な存在のことを思い……呂布の意識は完全に落ちた。

「ハァ……ハァ……」

着地後、大きな外傷こそ見当たらないものの、死んだようにピクリとも動かない呂布を、ハセヲは息を荒げながら見下ろす。

「……っく」

しかし、俯いたハセヲの膝が、腰が、肩が一気に震えだしたかと思うと、その震えが全身に伝播した。

さらに、武獣覚醒の効果で纏っていた朱金のオーラも消失してしまい、ハセヲは力なく地面に倒れ伏してしまう。

――その瞬間だった。

「……っぐあ！？」

呂布に貰った一撃のダメージに加えて、無理な動作からのアーツの使用、ならびに武獣覚醒で、ヒトの限界を超えた肉体の酷使による反動が、一気にハセヲを襲ったのだ。

全身の神経と筋肉を念入りに焼かれるような苦痛が、ハセヲの身体中を駆け回る。

涙で視界は歪み、腹へのダメージを思い出したかのように激しく咳きこんだ口を押さえた手には、血が滲んでいた。

「っつ！？　何をしているのです！　早く恋殿をお救いするのですぞ！」

「主を護りぬくぞ！　我に続けっ！」

周囲がざわめき出したことを気にかける余裕も無いハセヲは、あまりの激痛に耐えれるわけもなく、意識をあっさりと手放してしまったのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

「フフフ、どう？　あれが、最近“天の御遣い”と名高いハセヲちゃんよ。良いオ・ト・コでしょ♪」

「……そうか、彼が……」

連合軍と董卓軍の戦いを、遠巻きに見つめる二人の人物がいた。

二人とも身長は高く、体格も良い。

フードのついた外套で全身を覆っているが、その所作は何らかの道の境地に至ったかのような泰然としたものである。

まあ片方の人物は、時折よからぬことでも考えているのか、妙に腰をくねらせているのが気になるのだが、ここにはそれを指摘する人間はいなかった。

「ん～、傷ついたハセヲちゃんを癒してあげに行きたいところだけど……そうはいかないわねん。そろそろ“あの子たち”も動き始めるでしょうし」

「……そうだな」

二人はそう言って戦場から離れ出したのだが、一人が首だけ戦場に振り向け、呟くように告げた。

「強くなれ……ハセヲ。いつか俺の――――を――――――――ほどに！」

言葉を紡ぎ始めたところに突然吹きすさんだ風が、彼のフードを少し持ち上げ、彼の言葉を一部かき消す。

その際に少しだけ露わになった蒼髪と、眼鏡の下に隠れた力強い瞳を垣間見せ、二人の姿は、荒野に消えたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「……ここは？」

未だ夢か現か判断がつかないような心地で、俺は目を覚ました。

あれからどうなったかは分からねえが、こうして横になれているぐらいだから、ひとまず窮地は脱したかと思いつつ、上半身を起こす。

手足は重く、身体には気だるさと共に、緩慢な痛みを感じる。

（そういや……恋にやられたとこは？）

脇腹におそるおそる触れてみると、若干引きつるような痺れがあるものの、ほぼ治っているようだった。

（あとでデス☆ランディに礼を言わねえとな）

自分の身体について、一通りの状況把握を終えた俺は、全身を起こそうとして――ふと気付いた。

（なんだ？　足元に妙に温かいものが……んなっ！？）

かけられていた布をめくったところ、俺の目に映ったのは黄金の髪。

そして見慣れた寝顔（断じて、変な意味ではない）

そう――なぜか風が俺の横で眠っていたのだった。

それと今気付いたんだが、枕元には宝慧が置かれていた。

――なぜ、気付かなかったんだ、俺。

（どんなとこでも寝れるっつっても、これはやり過ぎだろ！？　風にとって、俺は男として見られてねーってことか！？）

男としての尊厳に関わる問題かとも思い、思わず両手を戦慄（わなな）かせてしまったが、だからといって何もできるわけがない。

そんな中、大きく吐息した俺に反応したのか、風の身体が小刻みに動き……

「……おお、お兄さん、目が覚めたのですね。そして……その怪しい動きをしている両手で何をしようとしていたのか、聞かせてもらいましょうか～？」

「は？　あ、いや、これは違うぞ！　そもそも、俺が寝ているとこに割り込んでたのは風だろうがっ！？」

「フフフ。何が違うのか、何を思い浮かべたのか気になるところではありますが～、まあ、お兄さんのことですから本当なんでしょう。あ、風が一緒に寝ていたのはですねー、お兄さんの看病をしていたところ、ついウトウトしてしまい、気付いたら“こう”なっていたんですよ～」

起きたと思ったら早々に、同衾（どうきん）していたことなんて欠片も感じさせず、面白そうなモノを見つけたって感じの笑顔で俺の行動を追究してきた風を煙に巻くため、俺は覆しようがない事実を突きつけた。

ところが、返ってきた内容は俺のためということもあって強くでれないことで……

「お兄さんは丸二日も眠っていたんです。本当に……心配したんですよ」

そう言いつつ、風は顔を俯けながら俺の服の袖を掴む。

「へっ。俺の風（マスター）にここまで心配かけたんだ。相応の対応を頼むぜ？　兄ちゃん」

宝慧に言われるまでもなく、風に掴まれた袖から微かな震えが伝わってくるのを感じた俺は……

「失礼しま……す！？」

風の両肩に手を添え、感謝の言葉を紡ごうとした矢先――割って入った言葉に反応して硬直した俺は、声がした方――左へ振り向く。

そこには、真名が現す通りの佇まいで入室してきた稟の姿があった。
手には湯気が昇っている桶と清潔そうな布を抱えている。
しかし――
「……あ」
「あ？」
「貴方という人はっ！？」
桶と布を近くの卓の上にのせた稟は顔を俯かせ、その細い両肩を震わせながら、常にない感情を露わにした声をあげた。
そのまま、足音も荒く俺が横になっている寝床へ近づいて来る。
（……ああ、そうか。そうだったな、俺）
運命なんざ信じてねえが、こういう理不尽（おやくそく）なんてものは確かに存在していると、俺は知っていた――身をもって、だ。
だから、一応予防はしておこうと思ってたんだ。
それが努力ってモンなはずだろ？
――たとえ、抵抗すればするほど痛い目を見るだけで、決して避けられない事があるとしても、だ。

そして、いつも以上に小さく見えた風の姿が、俺の心の防壁を解除したところで――結局こうなっちまった。

ここまで考えたところで、目の前まで迫った稟を見上げる気も起きなかった俺は、思考を放棄した。

意識の端で、稟がこちらに手を伸ばしているのが分かったが、抵抗する気はなく、全てを受け入れようと構えていた俺は……

「……へっ？」

拍子抜けした声をあげることしかできなかった。

見れば、相変わらず風の肩に手を置いていた俺の脇の下を通すように、稟は俺を抱き締め、俺の左肩に額を当てて顔を隠している。

予想外の展開と、反動で痛みを訴えている身体をしてなお、稟の身体の柔らかさからくる心地よさに混乱した俺は、隠しようもなくうわずった声をあげる。

「お、おい……稟？　どうし「貴方はっ！」……」

「貴方は、どれだけ私を心配させれば気がすむんですか！？　私を心配させるのが好きだとでも言うんですか！？　最後の一撃を……受けた時なん、て……」

「……ワリい」

「簡単に謝らないでください。

無茶をしたという自覚があっても、今後もどうせ同じような状況に

なった時、貴殿は止まってはくれないのでしょう」

「……ああ」

顔は見えねえが、稟の声からは心配や安堵といった想い以上に、怒りや恐怖といった想いが伝わってきた。

自分にとって大切な存在を失うんじゃないかという……もう感じたくねえ想いを。

でもな、だからこそ、俺はそんな現実に抗うために立ち止まるわけにはいかねえんだ。

――たとえそれが俺の仲間を不安にさせることになっても、必要とあれば、だ。

稟も、そんな俺の覚悟（おもい）を知っているからか、確認というより確信といった感じで聞いてくる。

それに、ハッキリと返事をしたところで、稟が登場してより大人しくしていた風が口を開いた。

「お兄さんのコレは、もう風たちにはどうしようもないことは分かってるんです。ただ……一つだけ約束してほしいんですよ～」

「ああ、全てを取り戻すまで、俺は立ち止まるわけにはいかねえ。だが……ちゃんと戻ってくるからよ。この世界での俺の居場所は“ここ”だからな」

「お兄さん……」

「ハセヲ殿……」

風たちに心配をかけさせているのは自覚してる。

それでも――俺は歩き続けると決めた。

ただ、それではいつか壊れてしまうか、焦って道を見失うかもしれねえ。

それは、前の経験で分かっていたことだったから、な。

だから――歩みを止めて休む時は、コイツらのいるところに戻ってこよう。

俺にとって、コイツらがいる”ここ”は、この世界で最も護りたいものだからな。

「……そうですね～、今はまだ……それで」

「はい、それだけでも……必ず」

俺の返事に何かまだ思うところがありそうな節を見せるも、納得してくれたのか、俺の胸にもたれるように体重を預けてきた風と、抱きしめる力を強めた稟。

それに俺は風の肩に置いたままだった左手を、稟の首に添って肩を抱き、二人の好きにさせてやるかと、しばしの間、心安らかな時を過ごしたのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

「馬鹿みたいな話ですが……」

あれからしばらくして、さすがに気恥かしさと疲労から少し横になっていいかとハセヲが断ったことにより、寝床の近くの椅子に腰かけた稟が、そう前置きしてから話し始めた。

「私は、自身の“知”に誇りをもっていますし、今後もハセヲ殿の力となれる自負があります。ですが、呂布と戦っているハセヲ殿を見ているしかできなかった時は……戦う力のない自分が恨めしくも思えたのです」

「稟……」

稟が目をふせながら苦笑しつつ、そう零したのをハセヲは、放心しているかのような表情で見つめた。

あの稟にここまで言わせてしまった自分が情けないという気持ちと、どこか温かい気持ちが、ハセヲの胸の中に広がっていく。

「稟、本当に「それは困る。主の“一番の槍”という立場は譲れんのでな」……せ、星っ！？」

話し始めた言葉を遮る形で颯爽（さっそう）と部屋に入ってきた星に、拍子をぬ

かれるハセヲ。

（タイミングが良すぎんな。もしかしなくても……）

「……星、いつから聞いてたんだ？」

「はて？　いつからだったか……。とにかく、『俺の居場所は“ここ”だからな』というのは聞いていたな」

「……ほとんど最初からじゃねえか」

予想通りの答えに、ハセヲは咎めるように呟いた。

それに対して星は思うところがあるのか、心外なという表情で話し出す。

「何を言うか。これでも空気を読んで入ってくる機を窺っていたのだぞ。咎めるどころか労(ねぎら)ってほしいくらいだ。
それに、風は気付いていたようだぞ」

最後の言葉に、ハセヲは思わず風の方に目をやると「風はいろいろと一流ですから～」と、したり顔を浮かべていた。

それに思わずため息を吐いたハセヲだったが、その言葉自体は星にも伝えるべきだったと思い直し、納得することにした。

しかしー――

「……」

それでも半眼になって軽く睨む程度の釘はさしておくことにしたようだ。

――――今後のことも考えての行動だろう。

「おお、そういえば稟。もう例の件はすませたのか？」

「……例の件？」

あまりにわざとらしい逸らし方だったが、気にもなったハセヲは星の言葉に反応し、稟を見やる。

「ああっ！？　まだでした！」と慌てるような反応を見せ、立ち上がった稟は、入ってきた時に持ってきていた桶を手に取った。

「ああ、もう冷えてしまっていますね。ハセヲ殿、しばらくお待ちください、すぐに換えて参りますので！」

「ちょっと待て！」

そう言って出て行こうとした稟を、ハセヲは慌てて呼び止めた。

彼のこういう時だけ鋭い感が、働いたためである。

「稟、それで何をしようとしてるんだ？」

おそるおそるといった感じで、感情を抑えたような声を出して聞いたハセヲの質問に、稟は明らかに恥ずかしそうといった感じで顔を赤らめながらも答え始めた。

「その……ハセヲ殿の身体を拭いてさし「断るっ！」……な、なぜですかっ！？」

とても許容できない内容に、稟に最後まで言わせず、拒否を告げるハセヲ。

稟の言葉を聞いた瞬間、思わずその光景を想像してしまったハセヲの顔は、稟に負けないくらい赤くなっている。

その二人の様子を、星と風は面白そうに見つめていた。

「あたりまえだっ！　それくらい自分でできるし、お前だって恥ずかしそうだろうがっ！？　無理にやるもんじゃねえよ！」

「いえ！　恥ずかしいのは認めますが……無理などとは思っていません！　それに“今日は”私の番なのですから、このままでは終われません！」

「……は？　今日……は？」

稟の言葉に反応したハセヲは、油のきれたロボットのような動きで、星と風を見やる。

――――頼むから、最悪の予想が外れていることを願って。

「ふむ、“昨日は”私だったぞ。中々に良い経験ができたな」

「“明日は”風の番ですので、よろしくお願いしますね～♪」

だが、やはりというかハセヲの淡い願いは、二人の言葉に容赦なく

砕かれた。

「……ハセヲ殿？」

そのまま俯いて動かなくなったハセヲは……

「そうか、これが……俺の”死”か……」

やはり、逆らいようがない運命が存在するのかもしれないと、ハセヲは捨て鉢気味に思いながら――その言葉だけを残し、沈黙したのだった。

その後のハセヲがどうなったかは……彼のためにも語らないでおこう。

～～～洛陽にて～～～

十常侍筆頭であり、都の実質的指導者でもある張譲は、洛陽城の奥へと続く廊下を一人で歩いていた。

その足取りは悠然としたものであるが、その顔には多少の苛立ちが見てとれる。

（結局、露払いも満足にいかないとは……役立たずな連中だよ）

先ほど都に届いた報告によると、予想以上に早く虎牢関が落ち、いずれ都に連合軍が到着するらしい。

その内容に不快を示しても、恐れは感じなかった張譲は、いつかやって来る自分に楯突こうとする愚か者たちを迎えるための準備を行うべく、ある部屋に辿りついた。

洛陽城の奥深く、厳重に設えられた部屋――宝物庫である。

中に入れば、様々な価値ある財宝が種類ごとに整理、陳列されていた。

張譲は、貴重な文書や芸術品には目もくれず、真っすぐ武具が置かれている区画を目指す。

そこには宝飾の美しい宝剣や、技巧を凝らして作成された宝具が並べられていたが、張譲が手に取ったのは『無骨な鞭』であった。

長さは１５尺（約４．５ｍ）ほどで、赤銅色をしている。

余計な装飾はないが、そのぶん武器としての性能を追求したかのような機能美を感じさせる業物だった。

「部下の不始末は、その主が追うべきだね。彼の者と同じく、我が国を護るためにその力を振るってもらおうじゃないか！
せめて君はボクの役に立ってくれるよね！」

ここでようやく声をあげた張譲の顔に浮かんだのは、見た目相応の笑み。

しかし、その言葉、その心の内は、どこまでも自己を肯定し、他者を省みないものであった。

「くっふっ……ふ、ははは……」

静かな宝物庫に、張譲の嫌な嗤い声が響き渡る。

嗤い声が大きくなるにつれて、もとより薄暗かった宝物庫に、さらに暗い“ナニか”が溢れだし始める。

その“ナニか”は、やがて張譲の姿を完全に覆い尽くしてしまったのだった。

## 第１５話（後書き）

戦闘描写も難しいですが、心理描写も大変ですね。

少なすぎると淡白に感じるけど、多すぎてもくどくなるし。

ハセヲならこのぐらいだろうかと思って書いたんですが、いかがだったでしょうか？

まあ、それはそれとして、とりあえず！

クイズの正解は、『符の力を借りて環伐乱絶閃を使う』でした。

そして素晴らしいことに正解者が出ました！

竜王様！おめでとうございます♪

拠点のキャラ選択権は、第一部終了後にお知らせをいれますので、よろしければその時にお使いください。

また、クイズに参加してくださった方々！ありがとうございました！

おかげで、思いついたネタもできましたので、本当に感謝しています♪

それで次回ですが・・・更に！いろいろやりたい放題の内容になるかもです。

予定としては、一月中には投稿したいと思っています。

それでは、また次回に！

予告

――少年は強き想いを胸に、“力”を望む。

「・・・来い、・・・・・来いよ！俺は・・・・“ここ”にいる！」

## 第１６話　前編（前書き）

お久しぶりです、皆様！

一応ほぼ書き上げたのですが、今回の話は過去最長となってまして・・・。

なので、前後編に分けて投稿したいと思います。

ちなみに、まだ最後のあたりを書き足しているところでして（苦笑）

自分を追い詰める意味を込めて、まず前編をお送りします。

そして！　３００００ｐｖ、３１０００ユニーク達成しました！

感謝感激しております！

# 第16話　前編

愛車『狗王』を送還させ、ハセヲは幾分前から視界に収めていた街を見つめていた。

帝都『洛陽』。

漢王朝の頂に座す天子が居を構え、政治と経済の中心である場所。

そして反董卓連合軍にとって――決戦の場所。

もうすぐ全てに決着がつく――というのに、ハセヲを含め、諸侯たちは一様に困惑の想いに囚われていた。

それも無理のない話であろう。

「……なんで守備兵の姿が見あたらねえ上に、城門が開かれてるんだ？」

ハセヲは、皆が疑問に思っていることだろう思いを口にした。

その顔は普段の無愛想顔を超えて、どこか影を落とすような疲労感を窺わせるものだった。

洛陽（ここ）に至るまでに生じた、星たちによる奉仕作業（やっかいごと）は、ハセヲの精神を大いに削っていったのだ。

「ああ、平時の時であっても見張り番くらいはいようにに……それすら見あたらんな」

「全面降伏という意志を掲げているようにも見えませんしね。何らかの策だとしても、我らの目的地がここで在る以上、“空城の計”を行う意味はありません」

「兵力は絶対的にこちら優位ですし、かといって都を捨てて移動しているという報告もありませんからねー」

疲れの元凶たちが続けて口を開くのを聞きつつ、ハセヲは何となく空を仰ぐ。

太陽はまばゆく輝き、風は爽やかに吹き抜け、鳥たちが快い鳴き声をあげていて――

世はなべてこともなし――そんな言葉が相応しい空の下、明らかに現状にそぐわない洛陽の様子が、事の異常性を助長しているかのようにハセヲは感じていた。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

連合軍が虎牢関を発ってから、数日――

敗走した董卓軍の襲撃を受けることもなく、無事に洛陽に到着したはいいが、俺たちは攻めるのを躊躇っていた。

来る者拒まずといった感じで開かれた重厚な門は、董卓軍には最早抵抗するだけの戦力が残っていないと分かっていたとしても、何かあるのではないかと足を止めさせたわけだ。

（ここまで来たってのによ。まあ、しばらくは様子見か……）

歯がゆい想いを感じるものの、軽はずみな行動をして仲間たちを危険にさらすつもりは微塵もなかったため、自制はしていたんだが……

「ふふふ。歯がゆいのは私も同じですよ、ハセヲ殿。ですから、そんな顔をしないでください。
まあ、少しは堪えがきくようになったところは、良い傾向ですね」

「……別に俺は、いつも無茶やってるわけじゃねえぞ」

不満気な気持ちが顔に出ていたせいか、稟に図星をつかれてしまった。

加えて、後半はまるで躾のなってない犬にむかって言っている感じがしたため、返す声音も低く、異議を唱える。

「ほう、それでは言わせていただきますがハセヲ殿？　貴殿が「俺が悪かった！　だから勘弁してくれっ！」……ならばよいのです」

俺が反論を唱えた瞬間、目の据わった稟を見てしまい、すぐさまに降参の意を告げる。

情けないとは思わない。

呂布との決戦以降、あの目を浮かべた稟を敵にするのだけは控えるようにした俺だった。

長々と続く説教だけならば、これまで通りだ。

だが、その後に……

「こ、これだけ言っても聞き届けていただけないというならっ！ば、罰として！　恥ずかしい思いをしていただきます／／／」

顔を真っ赤にしながら、俺に抱きついてくるようになったのだ。

（自分も恥ずかしいだろうってのに、何でここまでやるんだ！？いくら臣下だからってそこまですることねえだろ！）

どっちの罰だって話だと思った俺だが、不思議とその後の機嫌は良いため、言及はしていない。

「まあ、ハセヲの気持ちも分からんでもない。私とて、この状況は面白くないな。

だが……どうやら待つ時間は、それほど長くはならんですみそうだぞ」

俺と稟の話を面白そうに見守っていた星が、ここで何らかの変化を掴んだかのような発言をしてきた。

その意味を考えだした俺は、十数秒の間をおいて、星の言葉の意味に辿りつく。

「どこかの部隊が動き始めてんな。あれは袁紹軍、か。向かう場所

は……洛陽！？」

「思いきった行動をとるものだ。いや、何も考えていないだけやもしれんな」

辺りを見やれば、諸侯の牙門旗が揺らめく中で、袁紹軍の旗が洛陽に向かって進行しだしたのが分かった。

他の連中をほっといて、だ。

「虎牢関では、呂布にいいようにあしらわれてしまい、良いところ無しでしたからね～。
功を焦っての突撃といったところでしょうかー」

「ええ、華雄は孫策軍の前に敗走しましたし、打ち倒された呂布を逃がそうと奮戦した張遼は、曹操殿によって捕らえられ、降ったそうですね。それと結局、呂布は行方不明だとか。
そして虎牢関は、機に乗じた桃香殿たちによって制圧されたわけですからね」

「あの我がままなお姫さんにとっちゃ、面白くねえ結果だからこその行動ってわけだ」

星たちの言う通り、悔しそうな顔を浮かべている袁紹の姿がありありとイメージできた俺は、溜息を一つ。

それで気持ちを切り替え、一軍のトップとしての意向を伝えた。

「いつでも動けるように準備をして待機だ。このまま何も起こらないわけがねえ」

今のところ、何の問題もなく入城している袁紹軍を見つめながらも、どうにも嫌な予感が消えてくれない。

それでも傍観しているだけという選択をするつもりのない俺は、しばらくして、洛陽に向けて進軍を開始したのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

「これが……国の首都だってのか？」

城門をくぐった瞬間、どこか重くなったような空気を感じながら、ハセヲはそう言わずにはいられなかった。

大通りには連合軍の兵以外の人の姿はなく、商店や民家の門扉は固く閉ざされている。

聞こえるのは各部隊の指揮官の声と、まばらにあがっている兵たちの声以外には乾いた風が吹く音のみ。

時々あがる声も、普段の力強さには及んでいない。

誰もが感じているのだろう、この異常性を。

「……尋常ではありません。まるで“忘れられた都”ですね」

「だが、人の気配は感じる。じっと息を潜めているようだ」

確かに人がいなくなったわけではないようだった。

しかし、兵たちの呼びかけにも住民は応えようとはしない。

――まるで、何かから必死で隠れようとしているかのように。

「困りましたね～、住民から詳しい話を聞きたいところですが、とてもそれどころじゃありません。
下手に強硬策をとろうとしたら、逆に暴動が起きそうなくらいですね～」

風が相変わらずの調子で話しているが、その内容はとても楽観していられるものではない。

この都で何が起きているのか――

訳が分からない状況に、ハセヲたちが頭を抱えている時に――“ソレ”は現れた。

「なっ！？　アレは何だ！？」

最初に気付いた星が驚愕の声をあげる。

都の奥――直前までは何もなかったはずの場所に、“黒い箱”が鎮座している。

高い――その辺にある山ほどの高さなソレは、何でもないように

突如として顕現したのだ。

「妖術使いの仕業とでも言うのでしょうか。しかし、あの黒い箱……いえ、“檻”といった感じでしょうか。あれは一体……？」

「それよりも、アレが現れてから始まった戦闘音が気になりますねー。住民が残っている市街地内での戦闘なんて、非常識にも程があります」

普段ならば、冷静な態度を崩さない稟や風の声にも、固さのようなものが感じられる。

稟が言うように、黒い檻は洛陽城を覆うように展開されているようであった。

その檻の役目は――中の獣を閉じ込めておくためのものか、はたまた、中に迷い込んだ者を逃がさないようにするためのものか。

「……ハセヲ？」

段々激しくなる戦闘音が気になるところであったが、黒い檻を見てから顔を俯けて無言であったハセヲが気になった星が、声をかける。

そこでようやく顔をあげたハセヲの顔には……

「……ふざけやがって。また関係ねえ奴らを巻き込む気かよ……ＡＩＤＡ！」

仇敵を見つけた“喜び”と、それを遥かに上回る“怒り”が浮かんでいた。

「あれがＡＩＤＡの仕業というのですかっ！？」

いち早く反応したのは稟。

続いて風も星も、自らが主と認めた人物が追い求めているモノが現れたという事実に驚きを隠せない。

「ああ、間違いねえ」

ゲームのディスプレイ越しでも感じられた嫌悪感、脈打つかのように蠢くその姿を、ハセヲが間違えるはずもなかった。

――――“アレ”によって、大切な人たちの人生が狂ってしまったのだから。

「ＡＩＤＡの相手は、普通の奴らには無理だ。ここからは俺と三蒼騎士たちとで「無論、私も付き合う。嫌とは言わせん」……分かった、無茶だけはすんなよ」

ハセヲとしては、星を同行させるのは止めたかったのだが、有無を言わせないといった感じの星を説得する時間が惜しかったため、やむなく許可する形となった。

とにも今は、何よりも早く現場に向かい、事態の解決を図るのが重要と判断したハセヲは、頭を軽く振って気持ちを切り替える。

「俺と星、バルムンク、オルカの４人であそこに向かう。そこで必ず、この騒ぎの元凶をブッ倒す！

稟、風、カイトは、旅団のみんなと協力して、住民の避難を頼む。

何が起こるか分からねえ、くれぐれも慎重に行動してくれ」

「御意！／応（おう）！」

いつも以上に真剣な面持ちの旅団長（ハセヲ）の言葉を聞いた者たちが、力強く頷く。

かつてない緊急時という緊張感で、表情が強張っている者もいたが、その声に戸惑いは感じられない。

その声には、確かな“信頼”と“絆”が込められた強さが溢れていた。

星　ｓｉｄｅ

黒い檻に包まれた洛陽城に辿りついた私たちが、唯一道を閉ざされていない正門をくぐって目にした光景は――まさに地獄絵図だった。

「……惨（むご）い」

視界の先に開けた広場。

そこで私たちを出迎えたのは、むせかえるほどの血の匂いと無造作にばら撒かれた、かつて人間だったモノ。

うち捨てられた人形のように、くず折れた人々による血化粧で、見たくもない赤い大輪が至る所に描かれていた。

原形をとどめている者もいるが、ピクリとも動く気配はない。

この国の中心として、歴史の推移を見届けてきた壮麗な城は、今やほの暗い熱気を纏った退廃的なモノになり下がってしまっていた。

（この国を支えてきた漢の都の中枢で、このようなことが起こるなど……）

この国の一員として、思うところがない訳ではなかったが……そんな感傷に浸る時間はなさそうだった。

「これをやったのは、テメーか？」

「……」

確認の形をとってはいるが、否定は許さないといった凄みを感じさせてハセヲが問い詰めたのは、小柄な少女だった。

その姿は、戦装束とは思えない一部の上流階級の人間が着るような礼服で身を包み、血のように紅いベールによって、口元しか見えないといったもの。

そして、遠目にも分かる、武器を振るうようには見えない白磁のような手に持つ――黒い斑点が蠢く赤銅色の鞭。

（アレがＡＩＤＡ！？　あれほど禍々しいものを人が宿せるという

のか！？）

「貴方たちも……私の邪魔をするのですか？」

ここでようやく反応をみせた少女が放った言葉。

細くも透き通るように響いたその声には、我らへの敵意が滲んでいる。

「何をしようとしてるのかは知らねえが、ＡＩＤＡ（それ）は潰す！
それがどれだけ危険な存在か、分かってて使ってるのか！」

全く同感だ。
あのようなおぞましい力は、身を滅ぼすモノとしか思えん。
途中で必死で逃げるようにすれ違った袁紹軍が、この世の終わりを見たかといったばかりの表情を浮かべていたのも無理はなかった。
だが、少女にとってはそうではないらしい。

「この力は、張譲様が私にお貸しくださった“願いを叶える力”なんです。
それを奪おうというのなら……容赦はしません！」

感情の昂りに反応したかのように、黒い斑点が蠢き出し、少女が手を動かしているわけでもないのに、鎌首をもたげた蛇のように鞭がしなりだした。

――まるで鞭自体が意志をもっているかのように。

「張譲っていやあ……」

「ああ、都の最高権力者の名だな。あ奴が言ってることが本当なら……この後には張譲（おおもと）が控えているということになるが「関係ねえよ」……」

私の言葉を、ハセヲは短くも力ある言葉で遮り、双剣“虚空ノ双牙”を喚装し、逆手に構える。

それと同時に、バルムンク殿とオルカ殿も剣を喚装し、一歩前に進み出た。

「俺のすべきことは、ＡＩＤＡを駆除すること。そして、その過程で生じた結果を見届けることだ。それまでの道に何が待ってようが、関係ねえ。突き進むだけだ」

何でもないように言ってのけるハセヲの背中を、私はどこか危なげに見つめていたが、どうやら話にはまだ続きがあるようだった。

「それによ……、星も付き合ってくれんだろ。なら負けてやる理由もねえな」

「っ！？　と、当然だ！」

やられた。これまで敵から片時も意識を外していない私だったが、この瞬間は完全にハセヲの背中しか見ることができなかった。

鋭く息をのみ、何とか答えを返す。

（……初めは連れて来るのを拒んでいたというに。ここにきて、そ

んな言葉（しんらい）を向けてくるとは……。本当に人が悪い！）

しかし、内心とは裏腹に心が温かいもので満たされていく。

ハセヲが疑問形でなく、確信して共に戦ってくれると思っていてくれたことが何より嬉しかった。

（……ああ。だからこんなことを考えるのは、ハセヲに対して申し訳がたたん！　今はただ、全力でハセヲの進む道を切り拓くのみよ！）

私の想いに呼応したかのように、重槍“静カナル翠ノ楽園”が現れる。

槍を握った両手が柄と同化したかのように感じる一体感を頼もしく思いながら、私は心の奥底に嫌な考えを押しこむ。

――この戦いの結果次第で、ハセヲが天の世界に帰ってしまうのではないかという考えを。

「私は護るんです！　この力で、大切な仲間を！！」

「どんな願いだろうが、ＡＩＤＡを使ってる以上！　テメーのその願いは俺が喰らってやらあああぁぁぁ！」

獣染みた雄叫びを放ちながら突撃するハセヲより僅かに速く。

私は、主の往く道を切り拓く槍たらんと、少女へと駆けだしていた。

星　ｓｉｄｅ　了

## 第１６話　前編（後書き）

いかがでしたか？

話の展開に納得いかない方、作者の頭の悪さを再度実感した方もいらっしゃるでしょうが、こういう外史なんだと思っていただけるとありがたいです。

後編は只今より、２４時間以内には投稿します！

## 第１６話　後編（前書き）

後編をお送りします。

自分のせいなんですが、戦闘描写がキツかった（泣）

多対一の戦闘は当分書きたくない気分になりました。

そして今回は、封神演義ネタが絡んでおります。

まあ、その他もろもろと思うところのある問答などが出てきますが、寛容な気持ちで読んでやっていただけると幸いです。

# 第１６話　後編

対峙した両者の距離は、約３０ｍほどだった。

真っ先に飛び出した星は、３歩目の時点でトップスピード一歩手前まで達し、少女へと迫る。

鞭使いの達人ならば鞭の先端は音速に近い動きを見せるといわれているが、星はそれすら見切る自信があった。

（初撃が放たれたところで、それを捌き、全速で間合いを詰める！）

神経を鞭の先端に中心に、全体を捉えるように見つめながら星が突き進むなか、明らかに鞭の間合いにすら入っていないにもかかわらず、少女が腕を振るう。

「！？」

その意味を瞬時に理解した星は、息を吐く暇もなく、全力で横に跳びのいた。

そのすぐ横を黒い残像が通り過ぎていく。

直後、星の背後で重い衝撃音が響いたが、それが武器同士のものだと分かったものの安堵する間もなく、星は足を止めずに後退する。

その動きに追従するかのように鋭い気配が迫って来ていた。

耳障りな音をたてながら床の石に深い傷跡を刻んで戻っていく鞭。

「っく！？」

ここでようやく息を吐く暇を与えられた星が油断なく周囲を見渡せば、吹き飛ばされたオルカと、元の位置まで後退したハセヲとバルムンクの姿があった。

「これが、殷の聞太師が用いたとされる仙術兵器（パオペイ）“禁鞭”――その一部を組み込んで造られたとされる模倣品です。さすがに聞太師のように４里（約２ｋｍ）先までは攻撃できませんが、この広場内でしたら、どこだろうと届きます」

またいつでも跳べるよう、床に足を押しつける形をとりながら、ハセヲたちは少女の信じられないような話を聞いていた。

そこへ、先ほどの言葉に嘘はないとでもいうように、少女は禁鞭を間断なく振るってきた。

その刃を何とか避けているうちに、お互いの距離がどんどん開いていくのを、ハセヲたちは悲惨なほど自覚する。

鞭は長ければ長いほど、先端速度が速くなる。

ゆえに、距離が開けば開くほど不利になるという事実が分かっていても、どうしようもない現状にハセヲは歯噛みした。

熱くなっていた身体が、冷や汗によって熱が失われていくのが分かる。

それでも……

「まだまだっ！」

一つ呟き、避けれそうな攻撃は無様に転がろうと避け、避けきれない攻撃を虚空ノ双牙で受け止め……きれずに弾き飛ばされても、ハセヲは前へ踏みだし続ける。

状況は限りなく悪いが、不幸中の幸いというべきか、ＡＩＤＡによって力が増幅されたといっても鞭捌きは素人だったのだろう。

飛んでくる攻撃は力任せに振り回しているといった感じであり、攻撃も何とか視認できるものだ。

それでも十分な脅威であるのだが……そんなことは関係がないのだ。

「これだけいいようにされても、まだ戦うというのですか！？」

「当たり前だ！」

どこか悲痛な少女の声に、ハセヲはノータイムで言い返す。

戦闘開始前にハセヲが言い切った通り、譲れぬものが懸かっているというなら。

戦わなくては護れないというなら、戦い抜くだけ。

ただ、それだけのことなのだから。

何度めの試みか分からない突進を敢行するハセヲを目がけ、禁鞭が下から跳ね上がるように向かい撃ってくる。

その攻撃にハセヲは右手の虚空ノ双牙を添えるように当て、突進の勢いをなるべく殺さず、さらに一歩踏み込む。

とたん、背後から鋭い気配が迫って来るのを感じたが、同時に感じた気配に背中を任せ、ハセヲはさらに一歩前へ。

「穿天衝(せんてんしょう)！」

星の力強い声と重い衝撃音に背を押され、ハセヲは少女との間合いをさらに詰めようとしたが……

「させません！」

しかしそこで、鞭を持つ手を強引に振り下ろしたことにより、穿天衝で打ち払った禁鞭が十字の形となって落下してくる。

それを捉えた瞬間、前進を断念したハセヲは、次へと繋げるための一撃を放った。

「破裏剣舞(はりけんぶ)！」

虚空ノ双牙に氣を纏わせ、円を描くように薙ぎ払った一撃は禁鞭を弾き飛ばす事に成功するも、ハセヲ自身も吹き飛ばされ、床を転がることになる。

しかし、その顔には床に打ちつけられた痛みに歪んではいても、悔しさは感じられなかった。

「コオオォォーー！」

「グウウゥゥーー！」

ハセヲの両脇から、天を舞うようにバルムンクが、地を滑るようにオルカが、少女へ迫る！

それに慌てることなく、少女は手首を返して禁鞭を横一文字に振り抜いた。

お互いの武器が激突し、ガラスを引っ掻くような嫌な音が響き渡る。

――しかし、拮抗は一瞬だった。

「「■■■■■ーー！！」」

人の可聴域を超えた雄叫びをあげたバルムンクとオルカは、瞬間朱金のオーラを纏い、禁鞭を押し進め、お互いの剣を十字に交差させるように切り結んだ！

ズバアアアーーーンッ！

瞬間的に武獣覚醒を行ったバルムンクとオルカの交差斬りにより、禁鞭は中ほど辺りで切断され、元の長さに戻って力無く地面へと崩れ落ちていく。

「もらったあああーー！」

表情は窺えないが、身体の震えから少女の心に動揺が生まれたと確信した星は、ここぞとばかりに突撃した。

少女はまだ動揺から立ち直っていないのか、駆け寄る星を見つめたままで動かない。

（油断するな！　何が来ようと、確実にこの一撃を届かせてみせる！）

あと数瞬の間。

今の速度なら、それで静カナル翠ノ楽園の間合いに入ると判断した星は、さらに踏み込む足に力をのせる。

しかし、ここにきて……目の前の少女が笑ったように星は見えた気がした。

刹那――

「よけろおおおぉぉぉーーー！」
「やめてえええぇぇぇーーー！」

同時に響いた叫び声に反応するよりも前に、何かが弾けるような閃きを感じ、星はスピードを瞬時に殺す急速停止と、慣性の法則を無視したほぼ直角に近い方向転換を同時に行う。

結果、一回限りの奇跡の体捌きを可能とし、命をひろうことができた。

直前まで星がいた空間を、黒い何かが轟音をたてて通り過ぎていく。

（くう!?　今追撃をもらうとかわしきれん！）

無理な回避行動は、星の体勢を大きく崩し、直後に訪れる追撃を覚悟しながらも、距離を開けることに努めたが……何故か追撃はこな

かった。

「もうやめて、月！　月は……月だけは護ってみせるって決めてたのに！？　これ以上、手を血で濡らすのはやめて！　そんなことはボクたちだけで十分だったのに！」

その理由は、月と呼ばれた少女に縋るように抱きついている――――月と呼ばれている少女の背後に倒れていた、深い翠の髪に眼鏡をかけた小柄な少女にあるようだった。

てっきり被害者の一人かとハセヲたちは思っていたが、少女の反応を見るに、そういう訳でもないようである。

バルムンクとオルカに切断された禁鞭は、切断面から先をＡＩＤＡによって再構成されたのか、武器としての性能を取り戻しているようだったが、今のところ沈黙を保っている。

「それじゃダメなんだよ、詠ちゃん。私だって皆を護りたいの！　私なんかのために、詠ちゃんも、恋さんも、霞さんも、華雄さんも、ねねちゃんも命を懸けて戦ってくれた！　だから今度は私の番なの！　敵が来るなら私が……殺す。必ず詠ちゃんを護るよ。そう……決めたんだから！」

「月……」

その言葉に何を思ったのか、詠と呼ばれた少女は顔を俯けて、肩を震わしていた。

その心に宿っているのは、護ると決めた対象の手を汚させてしまった自分に対する無力感か。

それとも、いかに自分が無様だと分かっていても、護りたい存在からここまで想われているという幸福感か。

「……じゃあ、聞くけどさ、月」

ここでようやく顔をあげた詠の表情は、無力感でも幸福感でもない――どこまでも目の前の少女に対する心痛で溢れていた。

「どうしてそんなに泣きそうな顔をしてるのよ？　そう決めたっていうんなら……どうしてそんなに辛そうなのよ！？　本当はこんなことしたくないんでしょ！？」

「……？　何を言ってるの、詠ちゃん？　私、泣きそうな顔なんてして「してるわよ！　ほら！」……あ！？」

そう言って深紅のベールを剥ぎ取られた少女の瞳には、確かに今にも零れそうな涙が見てとれた。

月という少女も今まで気づいていなかったらしく、呆然としている。

『――そう……決めたんだから！』

詠は目の前の少女が先ほど言ったように、自身に課している誓約を改めて伝えるべく、力を込めて親友の肩をつかみ、想いを紡ぎだした。

「お願い、この力をもう捨てて！　このままじゃ、月はもう二度と笑えなくなっちゃう。泣きたいほど辛いのに、それさえ分からなくなっちゃう。
そんなの……ボクには耐えられない！」

「嫌だよ！　私を護るために、多くの人たちが戦って死んでいったの！　もう、護られているだけなんて嫌なの！　私も何か皆のためにしたかったの……」

詠の言葉を打ち消すように、月は声を張り上げ、詠の手を払いのけた。

その瞳は、未だどこか虚ろ気であったが、だんだんと焦点を結びだしたかのように、力無くも自身の配下にして親友の顔を見つめている。

「……うん、分かった。なら、こうしよう？　もう月には苦労はさせないなんて言わない。ここまで、思いつめてたんだもんね。だから……これからは、みんな一緒よ」

月にこんなことを言わせているのは、自分のせいだと感じながら、詠は決然とした眼差しを親友に向ける。

――新たな関係を始めるための言葉を告げるべく。

「ボクとしては、月が笑っていてくれればそれが一番なんだけど。でも……これからは、辛いことも、苦しいことも、嬉しいことも全て分けあうわ。
そうやって……一緒に生きていきましょう？」

「詠……ちゃ、ん」

月は目を丸くし、空いている左手を詠に向けて伸ばし始める。

詠はその手を両手でしっかりと握りしめ、離そうとしなかった。

「でも、私はもう……今まで通りにはいられない。これだけのことをしてしまったんだから」

「それだって、もう月だけのせいじゃない！　ボクにだって責任はあるんだから！
張譲から月を護ってあげられなかった！」

「そう……張譲様からお借りしたこの力で敵を、敵をっ！？」

「月！　どうしたの！？」

詠の目は、もう溢れる涙を抑えるだけの力は残されていなかったため、視界はほとんど歪んでしまっていたが、それでも気付けた。

親友の瞳が、美しい紫から禍々しい赤へと変貌していくのを。

「あ、ああ……あああああっ！！」

月は、小柄な身体のどこからこれほどの声が出るのかと思えるような咆哮をあげる。

それに応じて、沈黙を守っていた禁鞭も動きを再開していた。

（ＡＩＤＡの力が暴走していやがる！？　抑えつけられていた力が解き放たれたみてーな感じだ！）

これまで、少女たちの動向をずっと静観していたハセヲであったが、最早これまでと、介入せざるをえなくなった。

このままでは、少女の精神（こころ）が危うい！

「そこのめがね女！　そこからさっさと離れろ！　巻き込まれんぞ！！」

――Ｗｅａｐｏｎ　ｃｈａｎｇｅ

虚空ノ双牙に換わって万死ヲ刻ム影を喚装したハセヲは、自失したかのように動かない少女に向かい、声を放つ。

「っ！？　ダメよ！　月を殺させなんかしな「死なせたくねえんなら、さっさとどけ！　これ以上長引かせると、本当にやべえんだ！」……信じられないわ！」

「信じられなかろうが、今だけは無理やり信じとけ！　じゃなきゃ、ソイツと一緒にテメーも死ぬだけだ！」

「……月を死なせたら、絶対許さない！　どんな手段を使っても、アンタを殺してやるから！」

そう言って何とか離れてくれた少女を速やかに意識から除外したハセヲは、頭上に掲げられた先で段々とその姿を荒れ狂う竜巻のように唸りをあげていく禁鞭を見つめていた。

全てを呑み込み、引き裂く大自然の猛威としか思えないほどの光景がそこにある。

しかし、この状況にあってもハセヲがすべきことは変わらない。

「星、お前は一直線にアイツ目がけて突き進んで、鞭を手放させてくれ。それまでの道は、俺たちが何とかする」

「……やれるのか？」

竜巻を指さし、虚言は許さんといった感じで星が尋ねてくるのに対し、ハセヲはただ一言だけで応える。

「やれるさ」

言葉には出していないが、向けられた視線に“俺たちならな”という想いが乗っているような気がした星は、苦笑一つで了承の意を告げる。

バルムンクとオルカは再び朱金のオーラを纏っており、いつでも来いといった感じであった。

「――――続け！」

ならばと、ハセヲも武獣覚醒を使用し、星と共に朱金のオーラを纏って駆けだした。

2歩目でトップスピードとなった4人は、さながら4連星の流星群となって死地へと向かう。

そこへ、限界までひき絞られた禁鞭の横薙ぎの3連撃が襲いかかるが……

「蒼天大車輪！」

ハセヲは万死ヲ刻ム影で全方位を一閃！

白銀の斬撃は禁鞭の連続攻撃を全て弾き飛ばし、ＡＩＤＡへと続く道を切り開いた。

星は、自身の身体を叩く衝撃波を気にすることなく、最短距離をトップスピードのまま突き進む。

（――あと１０歩！）

「アアアァァァーーー！！」

させじと、再び禁鞭の一撃が星の行く手を覆うように広範囲に渡って降りそそぐ。

どこにも逃げ場は無いと瞬間で判断した星だったが、だからとどうしたと言わんばかりに、スピードを緩めはしない。

そこへ――

「「闇魔……大車輪」」

バルムンクとオルカが絨毯(じゅうたん)爆撃のような鞭の嵐を、己を中心とした剣戟の制空圏を展開して防ぎきり、無理やり人が一人通れるほどの道を作り出す。

そこを星はスピードを殺すことなく、通り過ぎた。

（――あと３歩！）

ここまで接近したことで、幾分スピードの落ちた鞭の軌道を武獣覚醒の効果で強化された目は完全に捉える。

（そうだ――ここで――前へ！）

攻撃の予備動作を見てとった瞬間、大きく前へと星は跳び込む。

首筋を冷気が走り抜けていくかのような風圧が通過していくのを感じつつ、星は最後の一歩を踏みこんだ！

（――届いた！）

少女までの距離、7尺（約2m）。

――完全に、静カナル翠ノ楽園の間合い。

「ハッ！」

短い気合と共に煌めいた黄刃を背後に回し、石突きを鋭く少女のみぞおちへと放つ。

その一撃に身体を震わせ、力が抜けた右手から零れた禁鞭の柄を、星は静カナル翠ノ楽園の黄刃で打ちあげた。

（後は任せたぞ、ハセヲ！）

星は意識を失い、武器を手放した瞬間に崩れ落ちた少女から、黒い斑点が抜け出していくのを見やり、この戦いが終結を迎えることを確信する。

普段はヘタレなところもあるが、こういう時にはキチンと決められる奴だと分かっている主（ハセヲ）に、後を託した。

そして、星の期待を裏切ることはなく……

「消え去れえええぇぇぇぇーーーー！！」

万死ヲ刻ム影で、禁鞭の柄を斬り砕いたハセヲの姿が見てとれたのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「月は大丈夫なの！？」

戦闘が終わるやいなや、駆けこんできためがね女。

親友らしいこの少女が心配でしょうがないんだろうが、現時点ではハッキリとしたことは言えなかった。

「死んじゃあいねえが、目を覚ますかどうかは五分五分だ。それとまずは「ちょっと！　それはどういうことよ！」……とりあえず落ち着け」

話はそれからだと告げると、思いのほか早くに気を取り直した。

見た目通り、頭の切り替えは早い奴のようだ。
――俺を睨む目だけは、未だに凄まじいものだったが。
「ＡＩＤＡに感染した奴は、意識を取り戻せず、眠り続けることがあるからだ。ひとまず今は、様子を見守るしかねえ。仮に意識が戻らなかったとしても……絶対に俺が何とかしてやる。だから、教えてくれ。ここで、何が起きてるってんだ？」
「……」
最初にこちらの所属と名前を告げ、知っている事情を話しているまでは胡散臭げな視線を向けながらも聞いていたためがね女。
ところが、最後の質問を口にした瞬間、こちらに向けていた敵意をねじ伏せたように、表情を消しためがね女の眼差しが俺を見据える。
冷ややかな空気がたちこめようとした時、それを吹き飛ばしたのは星の言葉だった。
「先刻の発言から察するに……この少女が董卓なのであろう。そして、そう仮定するならば……お主は賈駆といったところか」
「……」
「そうなのか？」
連合の軍議で聞かされていた人物像とは全く異なった風貌だったが、恋や華雄の名前も出ていたから、確かにその可能性は高いと俺も思

い至る。

めがね女――――賈駆は一言も発しねえが、沈黙は肯定とみなされるといった雰囲気の中、星の言葉は続く。

「護られているだけでは我慢できなくなった董卓は、張譲から与えられたＡＩＤＡの力を振るい、挙句の果てに暴走させてしまった。まあ、仮に目が覚めたとしても、待ち受けているのは洛陽をこのようにした責任をとっての死罪「月が悪いんじゃない！」……ほう？　では何のせいだというのだ？」

ここでようやく言葉を発した賈駆は、会話を誘導されたことに気付いたものの、口火をきってしまったことにより、観念したのか事の経緯を話してくれた。

急変した張譲に董卓を拘束され、いいように使われていたこと。

張譲の口車に乗せられるような、思慮の足りない人物ではないこと。

仮に言いくるめられたとしても、普段は虫一匹殺せないような優しい心の持ち主である董卓に、大量虐殺（こんなこと）ができるはずがないということ。

大体の事情を聞き終えた俺は、とにかく張譲に会って話を聞く必要があると判断し、ひとまず身柄を旅団で預かろうと、董卓と賈駆を星たちに託し、先に進もうとしたんだが……

「一人で行く必要などない！　彼女たちを運ぶなら、バルムンク殿とオルカ殿でも十分だろう！」

「それだと、稟や風に事情が説明できねえだろ。話のできる奴が必要なんだよ」

「なら、ハセヲ！　お主も一緒に戻ってから改めて行けばよいではないか！」

「そんな暇はねえだろ。ボヤボヤしてたら逃げられちまうかもしれねえ。
ようやく見つけた相手なんだ、ここでケリをつける！」

やはりというか、同行を求めてくる星に、状況が状況なためもあって何とか説得を試みる。

そしてようやく、辿り着いた妥協点は……

「いいか！　すぐ戻って来る！　決して無茶をするんではないぞ！」

その言葉を残して、凄まじいスピードで駆け戻っていく星と、董卓と賈駆を背中におぶったバルムンクとオルカ。

その姿を見送ったところで――俺の平常心は限界を迎えた。

「この奥にＡＩＤＡの感染源が、いる……」

禁鞭を砕いた直後に溢れ出したＡＩＤＡは、俺たちを襲うことなく城の中へと消えていった。

つまり可能性でいえば、張譲が感染源であるというのが一番の仮定となるわけだ。

（身体へのダメージは……問題ねえな）

武獣覚醒の反動が身体を蝕んではいるが、展開時間が短かったこともあり、痛みは無視できる範囲内だと切り捨てる。

俺の思考は、今や敵を屠ることしか考えていない。

万死ヲ刻ム影を握りしめ、どうせ一番奥でふんぞり返っているだろう相手の元へと堂々と歩いていった。

道案内は必要ない。

進むごとに、濃密になる嫌悪感を頼りに、俺は洛陽城の奥――――いわゆる玉座の間とでも呼ばれていそうな場所に辿りつき、その人物に出会う。

「ふん、外が静かになって董卓に貸していた力が戻ってきたかと思えば……。
使えない部下をして、その主あり。結局は満足に役目を果たせるわけもなかったということか。
禁鞭まで持たせてやったというのにね」

本来、皇帝が座るはずの玉座に腰をかけ、董卓をあざ笑う白髪で小柄な少年。

（コイツが……黒幕か）

確認の必要もなさそうだったが、はやる気持ちを何とか抑えつけ、俺は口を開いた。

「テメーが張譲か……」

「口を慎め。貴様のような輩が呼び捨てできるほど、安い名前ではないのだよ」

完全に俺を見下しきった言葉が、他に人気のない閑散とした玉座の間に響き渡る。

この受け答えを聞いただけで、俺は確信した。

――――コイツを潰すのに容赦はいらねえと。

「知るか。それより答えろ。ＡＩＤＡの力を誰からもらった？　それの危険性を知ってるのか？」

「あいだ？　……ああ、この力のことか。そんなことは覚えてないよ。

それよりも、この力をどう使っていくかを考えるので忙しかったからね。

それとこの力が危険だって？　それは力を使いこなせずに暴走させてしまった董卓のような奴だったらの話さ！　僕には関係のないことだよ」

「……なぜＡＩＤＡの力を董卓に貸し与えた？　董卓は願いを叶えるためにだとか言ってたが」

目の前のコイツの性格を考えると、せっかく手に入れた力を僅かとはいえ、他の奴に貸し与えるとは思えなかった。

自発的に董卓の想いを叶えてやりたいと思う奴にも見えねえ。

ならなんで――――

「ああ、それは趣向のようなものさ。部下の不始末は、その主の責任。だから董卓にはこの城に押し寄せる馬鹿どもの露払いを頼んだんだよ。ちょうど、董卓もお仲間を護りたいって甘ったれたことをぬかしていたしね」

「……」

「ただ、董卓は心の弱い奴でね。戦闘を行うには、邪魔な感情（もの）が多すぎたのさ。
だから、この力を使って後押ししてあげたんだよ。細かい感情（こと）は気にせず、力を振るえと」

ＡＩＤＡは人の想いを増幅させる。

コイツは……董卓の良心的感情を上回るほどの殺意を芽生えさせたってことか。

仲間を護るために、自分の心がいくら傷つこうと――――それに気付きもしないほどに！

「……董卓はな、泣いてたんだよ。仲間を護るために、敵を殺しながらな」

「ははは！　良かったじゃないか！　願いが叶ったんだろう？　結局貴様に倒されてしまったようだけれど……ふむ。失礼な点は多々あるが、この際仕方ないか。
僕と組まないか？　僕の力がどれほどか、貴様も良く分かっただろ

う？　董卓に預けていた力は、ほんの2割程度さ。誰も僕を倒すことはできない！
だから僕についてくれれば、大陸はおろかこの世界そのものを支配することさえ夢じゃない！
さあ、この提案の素晴らしさが分かるなら、今すぐ跪いて忠誠を誓うがいい！」

張譲は唇を弓のように吊り上げ、俺にとうとうと語りかけてくる。
どこまでも自分（テメエ）に酔った、その言葉を聞いた俺は……

「……ああ、分かった」

どうしようもなく、心に満ちたこの想いを口に出さずにはいられなかった。

「ああ、物分かりのいい者は嫌いじゃないよ。ならば「テメーが救いようのねえクズだってことがな」……なん、だって？」

張譲の顔が満足気なものから一転、盛大に引きつった。

しかし、その程度じゃ俺の怒りは微塵も収まりそうにない。

「救いようのねえクズに、これ以上かける言葉はねぇーんだ。
さっさと消えろよ……今すぐ！」

自分でもどうやって出しているのか分からないほどの低い声が零れる。

どこまでもふざけたことをぬかす張譲に対し、俺は心底キレていた。

コイツは董卓の願いを知った上で、もてあそびやがった！

仲間を護りたいという想いを歪めて、自分のために利用しやがった！

心の痛みに気づけず、泣いていた董卓を嗤いやがった！

（コイツだけは――――許せねえ！！）

とっくに臨界点を超えていたと思っていた怒りは俺の胸に収束し、更なる密度をもって、全身を回る。

堪忍袋の緒どころか、袋自体が怒りの膨張・増幅という言葉が生ぬるいと思えるほどの勢いをもって破裂したかのような、感情の発露。

それは、旋風という物理現象となって玉座の間を震撼させる。

気づけば俺の身体を“赤いオーラ”が包み、右腕には、光り輝く“黄昏の腕輪”が見てとれる。

左腕に持ったままだった万死ヲ刻ム影は、何かに共鳴しているかのように振動していた。

「許さん！　貴様はこの僕自らが、塵も残さず消し去ってやる！」

顔を蝋人形のように強張らせて叫び、張譲の全身がＡＩＤＡに覆われた瞬間、その姿は霞のように消えていた。

だが、逃げた訳じゃねえ。

言うだけあって、強大な力が現れようとしているのが感じ取れた。

――全身が総毛だつような圧力。

その直後に光が溢れ、視界が回復した俺の目にうつったのは玉座の間ではなく、地平線がどこまでも広がる認知外空間（アウタースペース）。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄで見慣れた光景を改めて見つめる俺の視界の先に……ソレは具現する。

「どうしようもない程の力の差を思い知るがいい！」

二本の触角のようなものを頭部に生やした怪鳥のようなＡＩＤＡ――Ｖｉｃｔｏｒｉａｎ――

その両翼を広げた大きさは軽く３０ｍはあるだろう。

その表面は、半透明の光沢が良いゼリーのようなもので覆われている。

趣味の悪い飴細工を眺めてるような気分で、胸がムカムカしやがる。

だから……

（忌々しいアイツはここで潰す！　必ずだ！）

決意した俺に呼応したかのように、赤いオーラがさらに勢いを増す。

身体が内から“何か”が弾けるんじゃないかと思えるほどの力が溢れだそうとしている。

――――そう、この感覚に身を委ねればいい。

この力は俺を喰らってしまう危険性をもってもいるが、覚悟をもって臨めば最強の力となることを俺は学んだのだから。

「……来い」

赤いオーラと共に不可思議な紋様が、俺の全身に浮かびあがる。

「……来いよ！」

右手を、顔にかざすように添える。

黄昏の腕輪が激しく明滅しているなかでも、そこに映った俺の瞳が赤く輝いているのが見てとれる。

そして、腕環に映った俺の赤い瞳のさらに奥から……血の色よりも紅い三つ目が、こちらを見つめているような気がした。

「俺は……“ここ”にいる！」

大げさでなく、この世界全てのエネルギーが俺に集ってくるかのように感じられる心地のなか……

「スケェェェェィスっっっ！！！」

その碑文（な）を呼び、世界を揺るがすほどの光が溢れ、集束した場所には……一柱の“死神”となった俺がいた。

# ハセヲ side 了

## 第１６話　後編（後書き）

ようやくスケィスを登場させられました！

次はアバター戦なんですが、どうしたものか・・・。

気分的には瞬殺したいところですが。

それと、今回の話で月に憑いていたＡＩＤＡは、張譲のＡＩＤＡの一部が宿っていたと解釈してください。

私の設定では、恋姫世界に持ち込まれたＡＩＤＡの種は一つだけです。

そして紫電様！竜王様！感想ありがとうございました！！

また、竜王様からは、ミニチュア版スケィスの人形もいただきました♪

本当にありがとうございます！

今後は２月中に第一部を終了させるべく頑張っていきますので、よろしくお願いします。

予告

「生きているモノである限り、恐怖（おれ）から逃れることはできねえよ。」

少年は、死神(せかい)の処刑鎌(しんり)を突きつけ、言い放つ。

「テメーが、今感じている感情(もの)・・・。それが”死の恐怖”ってやつだ。」

## 第17話（前書き）

禍々しき波の何処かに生ぜしかを知らず。
星辰の巡りめぐりて後
東の空昏（くら）く大気に悲しみ満ちるとき
分かつ森の果て、定命の者の地より、
波来たる先駆けあり
行く手を疾駆するはスケィス
死の影をもちて、阻みしものを掃討す

エマ＝ウィーラント　著　　黄昏の碑文より

# 第17話

曹操ｓｉｄｅ

どんな状況であろうと己を律し、私に忠誠を誓い、我が覇道を共に往かんとする者たちに最善の指示を出す。

今まで当たり前のようにこなしてきたことであり、今後も“かくあるべし”と自身に課している信条が――果たせていない自分が理解できない。

（っく！？　私の身体の中で、何が起きているっていうの！？）

自分のことが自分に分からない――こともあろうに、この曹孟徳がだ――などと、普段の私ならば考えられない状況に陥っていた。

「華琳様！　いかがなさいました！？」

私のかわいい桂花が悲痛な声をあげるも、それに応える余裕もない。

こうしている間も呼吸は乱れ、心臓は全力疾走直後のように拍動を強めているし、耳鳴りまでしてきている。

そして、ついに立っていることもできなくなった私は、地面に膝をついてしまったようだった。

膝に感じた土の感触で、ようやく気付けた自分の無様さに腹がたつ。

（本当に何だというの!?　まるで、私の心（なか）に違う“ナニカ”がいるかのような……）

洛陽に到着してより、前代未聞の事態ばかりが生じたことで、後手に回っていることを自覚しながらも、情報収集と住民の避難に尽力していたところで、突如私を襲った強迫観念めいた衝動。

卵の内側から殻を破ろうとしている雛鳥を彷彿とさせるような……私を違う“ワタシ”が侵食していくかのような……そんな感覚。

（冗談じゃないっ!!　私は曹操（わたし）だ！　それ以外の何者でもっ!?）

己の尊厳を踏みにじらんとする感覚に対して、私が心の叫びをあげたところで……一際強大な感情の波が、私を揺さぶった。

私の意識が、身体が、緩やかな浮遊感を感じながら呑まれていく。

ポオオォォォーーーン

視界がかすみ、耳鳴りと桂花の声が響く中で。

どこからか聞こえた、心に澄み渡るような音に導かれるように、私の意識は完全に闇に沈んだのだった。

曹操ｓｉｄｅ　了

神とは何だろうか。

全知全能にて、あらゆる事象に介入できると同時に、あらゆる法則から干渉を受けない高次の存在か。

はたまた、無から有を生み出せる力を持つ存在か。

議論の余地はいくらでもあるだろうが、ここでは単純に絶対的な力量の差を持つモノという解釈で考えてみることとする。

大地を這うアリがいくら力を合わせようとも、大地を踏みしめて進む象の歩みは止められない。

ゆえに、アリからすれば圧倒的な存在である象も、神に等しい存在だと考えられるかもしれない。

そして、ここ――――どこまでも地平線が広がる虚構の世界（認知外空間）――――に、音叉を鳴らしたような音とともに具現した、ヒトから見て神のごとく存在感を放つ、二体の異形の姿があった。

一方は、“都の最高権力者”張譲の化身――――Ｖｉｃｔｏｒｉａｎ――――

そしてもう一方は、“天の御遣い”ハセヲの憑神、創造主（モルガナ）の８相が第１相　死の恐怖――――スケィス――――

その姿は、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎに比べて、二回りは小さい。約５ｍほどだろうか。

だが、放っている圧力は、強者としての圧倒的なソレであった。

しなやかさと疾さを感じさせる細身の体躯を、黄金と紫のラインが入った肩当てで覆い、両脇両膝から天を衝くかのように突起した爪が鋭く光っている。

両手首と両足首、および背中には、緋色の円環が展開されており、等速で回転し続けていた。

白塗りの能面のような顔には、三角形の頂点のように並んでいる赤い三つ目が爛々と輝いており、頭部には円状に後ろへ反り返るように、二本の角が生えている。

そして、なかでもいちばん目を惹くのが、右手に持つ巨大な処刑鎌だ。

柄と刃の結合部の細工も見事だが、刃の意匠はさらに素晴らしい。

まるで、一種の前衛芸術品か、神聖な儀式における奉納用の祭器かと思えるほどの逸品である。

ここで、ハセヲが具合を確かめるかのように、処刑鎌を軽く一閃した。

風を切る音すら斬り裂いたかのように、質量に対して極僅かな音が響く。

死神が振るう武器のイメージにはそぐわないかもしれないが、本来の役割を果たすには全く支障はないようだ。

この刃は、相手の身体（こころ）を容赦なく刈り取るだろう。

「……ふん。貴様も何らかの力を持っているようだが、僕の力の前には全てが無力だ！　格の違いを教えてあげるよ！」

「……一々わめくんじゃねえよ。耳に障る」

「っ！？　貴様あああアアァァーーー！」

ハセヲを良いようにあしらう想像にでも浸っていたのか、笑みを浮かべていた張譲の顔が、どこまでも冷たいハセヲの言葉によって歪む。

同時に両翼を大きくはばたかせ、最早我慢ならんといわんばかりの勢いでハセヲへと迫ってきた。

「ふっ！」

それに慌てることなくハセヲは短く息を吐き、その場から動かずに処刑鎌を両手で握りしめ、張譲を迎え撃った！

片翼と処刑鎌が交差した瞬間、金属同士がぶつかったような甲高い破砕音が鳴り響く。

接触部分では火花が飛び散っていた。

「オラアアァァーーー！」

「なっ、んだと！？」

スケィスの鋭い一撃は、翼を断ち切ることはできなかったが、巨大

な質量を誇るＶｉｃｔｏｒｉａｎの突進を、その場から後退する事も無く弾き飛ばした。

予想外の事態に張譲は大きく後退し、ハセヲとの間合いをとる。

張譲は、今の一撃でハセヲを粉砕するぐらいのつもりだったのだ。

両者の大きさは大人と子どもほどの差がある。

それほどの質量差がある状態でぶつかり合った際、どちらに軍配があがるかなど考えるまでもない。

ゆえに、張譲も同じように考えていたのだ。

実際、先ほどの突進をくらえば、アフリカ象だろうが簡単に爆砕できただろう。

だがそもそも、この戦いに大きさの差など関係なかったのだ。

ただ両者とも、己の力を戦いやすい形態に変換させたら、このサイズだっただけ。

むしろその分、力が凝縮されているようにさえ感じられる、歴戦の戦士を彷彿させる死神の姿がここにあった。

「どうした、その程度か？」

「くっ、調子に乗るな！」

張譲が再度突進してきたのと同時に、スケィスの背中の円環が加速

する。

直後、ノーモーションから一気にトップスピードに乗せる驚異的な推進力が背後に生まれ、スケィスはそれに乗って弾丸のように飛び出した。

黄金と虹の流星が、その身に秘められた莫大な力を惜しげもなく放出し、再び衝突。

そのまま縦横無尽に駆け回り、交差するたびに処刑鎌と翼がぶつかり合うことで生ずるエネルギーにより、空間が軋みをあげている。

何回も激突を繰り返しては、お互いに距離をとり、敵を追従するための良い位置取りを狙う両者だったが、ここで経験とスピードで勝るハセヲに軍配があがる。

（これで――――どうだ！）

交差するとみせかけて、目前で高度を落としたスケィスの頭上をＶｉｃｔｏｒｉａｎが通過したのを見計らった瞬間、上昇を開始。

ループの頂点で背面姿勢からロールし、インメルマンターンをきめて、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの背後をとり、左手からショットを放つ。

「ぐあっ！？　こ、の……ちょこまかと！」

４連続で放ったショットのうち、２発の被弾を見届けたハセヲは、お返しとばかりに張譲が放った高速で迫る数十発の光弾を、その間隙をぬうように軽快なステップで捌く。

放たれた光弾は、標的に触れることなく虚しくエネルギーを散らして消えていった。

「これならどうだっ！？」

前進を止めないスケィスに、ならばとＶｉｃｔｏｒｉａｎから射出された十数発のエネルギー弾。

（これは……誘導弾か！？）

その動きは、先ほどのものと比べると遅いが、スケィスの動きに追従してくる性質をもっているものだろうと、かつての戦いの記憶から判断する。

ならば――

「全て斬り捨てるまでだ！」

スピードを緩めることなく、突撃したスケィスの処刑鎌による通り抜けざまの３連撃。

全てのエネルギー弾は、処刑鎌の斬撃に一瞬の抵抗も許されず、掻き消されてしまった。

「！？」

「この程度で呆けてんじゃねえっ！」

「しまっ！？　ぐ、がああぁぁぁっ！！」

ハセヲは、驚愕からか動きを鈍らせた張譲へと、叫びとともに４度目の斬撃を放つ！

処刑鎌の刃に、限界まで圧縮されたエネルギーが戦輪（チャクラム）の形をとって集束し、張譲を強襲。

Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの二本ある触角のうちの片方を、根元から切断する。

「……おのれ！　おのれおのれオノレオノレ――――！！」

無敵の存在となったことを疑っていなかった張譲は、取るに足らない存在だと思っていた者から傷を負わされるという、あまりの屈辱にうち震える。

血走った目から、可聴域を超えた叫びからは、もはや勝負前の余裕は全く感じられなくなっていた。

（……やっぱりだ。コイツ――――ぬるい）

ハセヲは、迫りくる光弾をダッシュで回避しながら、張譲に対する評価を再認識していた。

なんだかんだで、奴は気を抜いて勝てるような相手ではないし、見た目ほど馬鹿でもない。

ただ――――圧倒的に経験が、判断力が、覚悟が足りていなかった。

「なぜだっ！　なぜ当たらない！？」

今もそうである。

誘導弾では速度が足りず、全て掻き消されるうえに、発動後の硬直を狙って懐にもぐりこまれやすい。

ゆえに連射がきき、速度もある光弾を選択したまではいいのだが、問題はその使い方だった。

全てを命中させようと的を絞るあまり、散弾のような技の特性を殺してしまい、さらにハセヲが回避するチャンスをも広げてしまっているのだ。

（借りた力の上に胡坐（あぐら）をかいてる奴に……）

ハセヲは余裕をもって光弾を回避し、狙いも甘く広範囲にショットを散らす。

慌てることなく、地道にダメージを蓄積させ……

「あっ、ぐう！　か、身体が！？」

積み重なったショットの効果で身体が麻痺してしまったＶｉｃｔｏｒｉａｎめがけ、スケィスは最接近して処刑鎌を４度に渡って振り抜く！

「負けられるわけねえだろうがあああぁぁぁーーー！」

「がああぁぁぁーーーっっ！！」

ダンプカーにはねられた犬のように吹き飛んでいくＶｉｃｔｏｒｉ

ａｎを見つめながら、ハセヲは思う。

（勝つための努力を何にもしてねえ奴には負けられねえ！　それに、ここで奴に負けちまったら奴のほうがオーヴァンより強いってことになっちまう！）

己の勝利条件を達成するために、１％でも確率をあげるための努力をせず、現状に満足してしまっている張譲に、たとえスケィスが本来の力を発揮できていないとしても、ハセヲは負けるつもりはさらさらなかった。

――ハセヲは、オーヴァンを倒して“ここ”にいるのだから。

「ありえない！？　この力があれば僕は無敵のはずだ！　何も恐れるものなんてない！！　全てを支配できる力を僕は手に入れたんだ！！」

「……他人を支配して何になるってんだ。そもそも、自分さえしっかり支配できてりゃ、他人を支配する必要なんかねえんだよ。それが分からねえってことは……テメーがテメーを御せれてねーってだけの話だ」

「き、貴様！　言うにことかいて、この僕を！？　張譲を未熟者扱いするというのかあああぁぁぁーーーーっっ！！」

張譲の雄叫びが衝撃波となって世界を揺るがし、顔をあげた先の空間が歪み始めた。

（妙な力場が集束していく……っ！？　重力砲撃かっ！？）

Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの攻撃を察したスケィスは、その場で反転。
全速で距離をとるべく離脱を開始したのと同時に、その一撃は放たれた。

「っちぃ！？」

「消え去れ！！」

射線上の光を歪めて放たれた砲撃は、スケィスがとっさに上昇して回避した空間を貫いた。

さらにと、追い撃ちで打ち出される重力砲撃は、すぐに消失することなく、黒い光条となってスケィスの動きを制限する。

「そらそらっ！　必死になって逃げるがいい！」

先ほどまで違って、全力で回避を行っているハセヲを見て溜飲がさがったのか、張譲の声に余裕が戻ってきた。

「ははは、良い気味だ！　身の程を思い知れ！」

（――ぬかしてろ！）

次々と放たれる黒い煌めきの奔流を無言で回避し続けていたハセヲは、突如高度をとってぐんぐんと上昇していく。

十秒もかからないうちに、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの大きさが子猫ほどに見えるぐらいの距離をとったスケィスは、急速停止から反転。

処刑鎌を強く握り締め、魂を震わすような雄叫びとともにＶｉｃｔｏｒｉａｎへと、ほぼ垂直降下に近い軌道で突き進む！

「オオオォォォオオオーーーっっ！！」

「自分から当たりに来るとは……血迷ったか！」

“滅殺”の意をこめて薙ぎ払うように放たれた重力砲撃の一閃は、スケィスへと突き刺さる――――ことなく、虚空のみを引き裂いた。

スケィスは持ち前の推進力に、落下による重力の力を加え、瞬く間に音速を突破。

さらに螺旋を描くような軌道の旋回――――バレルロールを行いながら迫る砲撃を回避し、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎへと迫る！

「っひ！？　く、来るなああアアー！」

距離が詰まるにつれて再び余裕を失っていく張譲が、がむしゃらに放った砲撃がスケィスの左肩の肩当てを、右膝の角を、着弾の音も無く消し飛ばす！

それでもスケィスは止まらない。

「張ォォォ譲オオオオーーー！！」

叫び声を置き去りにして相手の間合いに入ったと認識したスケィスは、怖いものから目を逸らそうとするかのように縮こまっているＶｉｃｔｏｒｉａｎへと処刑鎌を振り下ろした。

「くたばれえぇぇーーー！」

「くううう、ああっ、あああーーー！」

処刑鎌はＶｉｃｔｏｒｉａｎの両翼に激突した瞬間、局所的大地震が発生したかのようなエネルギーをばらまき、鉄壁かと思えた両翼に無数の亀裂を刻んだ。

だが、そこでとっさに出現した光弾による反撃を回避しようとスケィスが後退したため、なんとか切断をまぬがれたようだ。

対するスケィスも、左の肩当てと右膝の爪を失っている。

とはいえ、微塵も闘気が衰えていないハセヲを、張譲は信じられない思いで見つめていた。

（こんな状況がありえるはずがない！）

自分は選ばれた、その他大勢の有象無象よりも優秀な人間なのだ。

あのような下賤な男などに、これほど追い込まれるわけがない！……と思おうとした張譲は、不意に処刑鎌を持ち上げたスケィスの動きに思わず反応し、後退する。

張譲は、その行動をとった意味が分からず、前へ進もうとして――動く事ができず、その場で硬直してしまった。

張譲の視界の先には、処刑鎌を頭上に構えた姿が――――月下に佇む死神を彷彿させる光景がある。

「――――ひっ！？」

思わず息を呑んでしまう。

死神が自分を、“死”そのものが具現したかのような存在が、張譲を見下ろしている。

戦闘開始時よりも煌々と輝いて見える赤い三つ目は、張譲の意識を捕らえて離さない。

「な、何なんだ、お前は！？　何だっていうんだよッ！？」

今でも十分に強力な力を感じてはいるが、目の前の存在に対するには心もとないのでは（？）という想いが張譲の心に生まれ、増大していく。

その心は、静かな湖畔に巨石を投げ込んだ水面のようにかき乱れていった。

「俺が何だろうと、テメーには関係ねえ。テメーはここで潰す！」

その問いに対し、ハセヲが約束された勝利（けつまつ）を告げたことで会話は終わると思われた。

だが、ふと何か思い立ったかのように「ただ……そうだな」と、ハセヲが再び口を開く。

「生きているモノである限り、恐怖（おれ）から逃れることはできねえよ」

ハセヲは、死神（せかい）の処刑鎌（しんり）を突きつけ、言い放つ。

「テメーが、今感じている感情。それが”死の恐怖”ってやつだ」

――それは、純然たる意志の宣告。

その言葉を聞いた瞬間、張譲の心に満ちた感情が指向性をもって身体を動かそうとする。

敵わないから退却……いや、降伏しろ、と。

（馬鹿な！　何を考えている!?）

しかし、本能に近い感情の声に、自分は絶対的な強者であるという自尊心が立ちはだかる。

たった一人の男の前に敗走するなど、強者である自分のすることではない、と。

「最後にもう一度聞く。ＡＩＤＡの力をテメーに与えた奴らについて話せ」

「……」

もはや自分のことなど眼中にないと言わんばかりのハセヲの態度に、張譲の心に満ちていた感情と共に、ふつふつと怒りがこみ上がってくる。

（認め……られないっ！　僕を見下す輩をここで……殺す！）

身体の自由は取り戻せたのかＶｉｃｔｏｒｉａｎは、ひび割れた両

翼を大きく広げ、いつでも跳び出せるよう前傾姿勢をとる。

その動作には、ぎこちなさは未だ残っているものの、躊躇いは見あたらない。

（話す気はねーってか。なら……）

その様子を見てとったハセヲは、スケィスの処刑鎌を両手で肩越しに構えた。

もとより、期待して聞いた訳ではない。

だとするなら――

「僕を見下すなあああぁぁぁああーーー！！」

「テメーの心に聞いてやらあぁぁーー！！」

両者は、互いに譲れぬ想いを一撃にのせて、疾駆する。

その間際――

「ハセヲオオォォーーー！」

ハセヲの耳を聞き慣れた――かなり切迫している――声がうったのだった。

## 第17話（後書き）

スケィスが2ndフォームなのは、ハセヲの中にある他のモルガナ因子をロストウェポンとして譲渡してしまったせいです。

現時点でハセヲの中にあるのは”死の恐怖”を除けば、『蒼炎の守護神』と『再誕』、『クビア』の構成データだけという設定ですね。

次の更新は・・・三連休中にできるといいなぁ（遠い目）

予告

「関わると決めた人々を身捨てざるを得ない状況に陥った時、お兄さんはどうしますかー？」

嫌なタイミングで嫌なことを思い出した。

だが、風から尋ねられたこの質問に俺はどう答えたんだっけか・・・。

――そして少年は決断する。

## 第１８話（前書き）

有言実行はできたものの、自分でもアレだと思える話になってしまいました。

・・・ここまでやるつもりはなかったんですけど（汗）

今回は鬱展開ありです。ご注意ください。

# 第１８話

――洛陽城。

未だ太陽は昇っている時刻であるにも関わらず、周囲を覆っているＡＩＤＡのせいか薄暗い廊下を、奥へと急ぐ女性の姿があった。

百日の旅団、副団長の趙子龍である。

普段は飄々とした余裕の態度を崩さず、人を煙にまくのが巧みな人物なのだが、その表情には常の余裕は感じられない。

董卓と賈駆の身柄を稟と風に預け、最低限の説明だけをして、ここまでとんぼ返りしてきたのだ。

董卓との戦闘、並びにここまでの往復による体力などの消耗が、彼女の身体を蝕んでいる筈なのだが、重厚な石畳を蹴る足取りには、疲労を感じさせない力強さがある。

彼女がここまで急ぐ理由は、ひとえにこの場所の異常性のためだった。

（……ここはいつから伏魔殿になったというのだ？）

異界にもぐりこんだかと思えるほどに、歪み、淀み、重くなっていく空気。

その中心にいるだろうハセヲの無事をただ祈って走り続ける。

奥に進むほど強く違和感を感じるようになるも、星は速度を落とさず、神経を張り巡らせた。

他の人の気配は感じられないが……いる。

――自分のものさしでは測りきれない“ナニカ”が、この奥に。

確信めいた想いを抱いて進んでいた星は、視界の端で何かを捉えた。

視線だけを斜め下にうつせば、握りしめていた“静カナル翠ノ楽園”――その光刃が、何かに共鳴しているかのように明滅している様――が見てとれる。

それが意味するところは星には判別できなかったが、嫌な予感が膨れ上がるのを抑えつけるように、さらに速度を上げるのだった。

――そして辿りついた、この異界の起点となっている場所。

その入り口となっている扉の前で、星は乱れている呼吸を無理やり落ち着かせた。

自分でもよく分からないが……分かる。

ここが、現実（こちら）と非現実（あちら）の境界線だ。

踏みだしたなら、何が起きるか分からない。

それでも――

（この奥にハセヲがいるというなら、進むのみ！）

決意とともに、静カナル翠ノ楽園を一閃し、頑丈そうな扉を両断する。

そこで星の眼が捉えたのは……

（ここは一体……っ！？　あれは……ハセヲ！？）

扉の奥に広がっていた今にも壊れそうな造り物めいた世界。

そこで対峙している二体の異形。

そのうちの一体――大鎌を構えた黄金の巨人――スケィスの像が霞のように一瞬ぼやけた際に見えた、少年の姿。

「最後にもう一度聞く。ＡＩＤＡの力をテメーに与えた奴らについて話せ」

「……」

人智を超えた力を纏い、もはや勝負はついているかのような言葉を突きつけるハセヲ。

対する敵――Ｖｉｃｔｏｒｉａｎ――は無言で両翼を広げ、突撃姿勢をとる。

それを迎え撃つつもりなのか、大鎌を握るスケィスの両手が限界までひき絞られていく。

（遅かったようだが、あの様子ならば問題あるまい。この勝負もら

っ……何！？）

両者の様子を見るに、ハセヲの優勢を確信した星は、視界の先――――スケィスの後方――――に蠢くモノを見つけた。

鋭い得物で斬断された傷口から黒い斑点を溢れさせ、蛇のように体（？）を震わせる５ｍほどの物体。

それが瞬時に、中に鉄芯を通されたかのように直立し、宙へと浮かびあがっていく。

（あれは……まさかっ！？）

その物体が、敵の切断された触角だということ。

その先端が槍のように鋭く硬質化しており、ハセヲを狙っていることを察した星は……

「ハセヲオオォォーーー！」

おそらく気づいていないハセヲを助ける――――その一心で全力で駆けだした。

星ｓｉｄｅ

ただひたすらに早く、速く、疾く――――前へ。

それだけを望み、それを為すための術を求め、私は静カナル翠ノ楽園に持てる力の全てを注ぎ込む。

燦然（さんぜん）と輝く重槍を掲げ、私はかつてない力に後押しされるように加速。

神経が研ぎ澄まされているのか、凄まじい速度で激突しようとしているハセヲと張譲の姿さえ、はっきりと見てとれる。

途中、私はハセヲの背中を一瞬だけ見やり、

（――護りきる！）

自身に課している誓約を果たさんと、駆けだした勢いのままに跳躍。

それと同時に射出された触角の横面に、全力の技を叩きこんだ！

「滅天怒髪衝（めってんどはつしょう）！」

その声と同時に放った一呼吸の間の5連撃。

それは硬質化していた触角をまるで泥のように抉り、バラバラに引き裂く。

技の威力に耐えれず、爆裂四散する触角の欠片を、その存在さえ認めんと、私は未だに唸りをあげる静カナル翠ノ楽園に残された力を――解放する。

「消し飛べっ！」

今の私ですら見切れない速度で撃ち出された力の奔流が――いや、槍に込められた“撃滅”の意志が、無数の欠片を一つ残らず消滅させる。

塵さえ残さず、ここに敵の一部が存在していたという痕跡を消し去ったのだ。

（こちらは何とかなったが、ハセヲはっ！？）

慌てて頭上を見上げれば、そこには……

「終わりだ！」

「こ、こんなこと、が……」

不意打ちを私に潰された動揺からか、動きを鈍らせた張譲の翼をかいくぐったハセヲが、通り抜け様に処刑鎌を一閃。

その一撃を受けた張譲から、何かが砕けるような音が鳴り響いたとともに、奴が放っていた圧力が大きく衰えていく。

「……すまねえ、星。助けられたみてえだな」

「何、主を救うのは当然のこと。我が槍は、そのために振るっているのだからな」

当然のように言い返す私に、ハセヲが軽く微笑んだのが分かる。

それでも、すぐ様に視線を張譲へと向け直し、持っていた処刑鎌を

消失させ、右腕を突き出した。

とたん、ハセヲの右腕に目玉のような紋様が出現し、そこからまるで何かを打ち出す射出台のような外観をしたモノが形成される。

そこに集束し始める途轍もない力。

束ねきれずに迸った光だけで、先ほど私が最後に放った一撃と同等以上の力を感じるほどだ。

（何というデタラメな力。これが、ハセヲの真の実力なのか……）

張譲は未だ、うなだれるように沈黙している。

――これならば。

（よし、これでっ！？　何！？）

決まったかと思い出した私の思考を遮るように、突如顔をあげた張譲の化身が、大きく雄叫びをあげる。

その声に呼応したかのように、私の周囲に現れた黒い斑点――ＡＩＤＡ。

視認した瞬間、私目がけて殺到してくるソレを、防衛本能以前に、生理的な嫌悪感からかわそうと身体を動かしたが……

（っく！？　身体がっ！？）

ここにきて、蓄積された疲労が反応を鈍らせたのか、迫りくるＡＩ

DAに足を捕らわれる。

直後、足から全身に“ナニカ”が侵入してきた。

――人間にとって、異物でしかない“ナニカ”が。

「うっ、ぐう!?　ああ、アアァァーーっ!!」

その“ナニカ”が私の心をかき乱していくのを、ただ必死になって抑えつけることしかできない。

（わ、私のな、かで……これ、は……っ!?）

これまでの人生で初めての、純粋なまでの衝動を感じる。

その迫りくる激流のような感情の波に、私の心は刹那の抵抗も許されずに呑まれていく。

「ハ、セ……ヲ……」

意識が消え去る瞬間、絞り出すように紡いだ声と引き換えになるように、私の意識を上回る“ナニカ”が私を塗り替えていくのが分かった。

（頼、む！　どう、か……私に、かま……わ、ず）

それが限界。もはや口を動かしても、空気を震わす力さえ無くなっていた。

――そして、ハセヲが私の真名を叫んだのを聞いたのが最後。

そのまま、私の意識は完全に塗り替えられてしまったのだった。

星ｓｉｄｅ　了

「星っ！？　テメーっ、さっさと星を解放しやがれ！！　さもねえと……」

「さもないと……何だと言うんだ？　この女の命がどうなってもいいというなら別に構わないが？」

「ちっ……つくづくクズな奴だな、テメーは」

「何とでも言うがいいさ。油断した負け犬の遠吠えにしか聞こえないからね！」

ハセヲの言葉にも反応することなく、張譲は余裕の態度を再び張り付ける。

そして、ハセヲが迂闊に動けなくなったことを確信した張譲は、ＡＩＤＡに浸食された星を見せつけるように、自身の方へと導く。

星の身体から噴き出すＡＩＤＡを忌々しくハセヲが見つめるなか、星はＶｉｃｔｏｒｉａｎの胸で磔（はりつけ）にされた。

――まるで、帆船の船首に設われた彫像のように。

力無くうなだれた星を、ハセヲは感情の読めない顔でしばらく見つめ……

「……で？　結局、何がしてーんだよ、クズ？」

醒めきった顔と声で、分かりきったことを張譲に尋ねる。

それに対し、張譲は顔をニタリと歪めて答えてきた。

「分かるな？　余計な動きは一切するな。僕が受けた屈辱をたっぷりと貴様に返してくれる！　どこまで耐えれるか、非常に興味深い」

その様は、まるでオモチャを前にした子どものようだ。

その瞳には、幼い子ども特有の、無知であるがゆえの残酷さが宿っている。

「はっ！　テメー如きの屈辱なんざ、涼しいモンだ」

「ふん、相変わらず生意気な奴だ。まあ、いい。今の僕が興味を惹かれるのは、貴様の苦痛と断末魔の叫び声だけさ。

……ああ、それと言うまでもないと思うけど――」

そこで一旦言葉をきった張譲は、もはや狂乱者以外の何でもない、悪魔然とした嗤(わら)いを振りまきながら――

「――楽には死なせないよ」

どこまでも人の道から外れたモノにしか浮かべられない、愉悦に満ちた宣告をハセヲに突きつけたのだった。

星ｓｉｄｅ

「やめろおおおおおっっっ！！」

私は声の限りに絶叫した。

そのつもりだが、ハセヲには私の声は届いていない。

そもそも、“本当の”私は、意識を失ったままなのだから。

今の私はどういう訳か、眼前に広がる大窓（スクリーン）に映った現実世界の戦いを見ることしかできない。

身体の自由――――というより手足の感覚自体――――はなく、できるのは目を開くか閉じるかということと、外には聞こえていないが、ここで口を開くことだけ。

――――そしてもう一つ。

「ははははっ！　どうだ、お前の主が良いようにいたぶられている様は？」

「殺してやるっっ！！　貴様だけはっ、必ず！！」

私が何を言っても、この男を喜ばせるだけだと分かっていても、口に出さずにはいられない。

外の声はここには聞こえてこないというのに、なぜかこの男の声だけは、直接頭の中に語りかけられてくるこのように聞こえるのだ。

猛毒に満ちた言葉を投げかけた張譲が、私の反応に満足気な吐息をよこし、再びハセヲに対して容赦なく力を振るい始める。

その様子を、私は目を逸らさずに見つめることしかできなかった。

愛しい男が、護ると誓った男が、私のせいで無残に痛めつけられている様を。

「あああっ！　あああああああっっっ！！」

無数の光を撃ちこまれ、ボロボロになったハセヲの化身（スケィス）。

そこへ畳みこむように打ちこまれた、両翼による剛撃。

たび重なる攻撃を受けたことにより、すでに左腕は、あらぬ方向へとねじ曲がっていた。

「ハセヲおおおおおおっっ！」

思わず目を逸らしたいほどの嫌な光景も、ずっと見つめてきた視界が急に歪みだす。

それが、いつの間にか溢れていた涙のせいだと、ようやく気付いた。

（私はっ！　何で……こんなにも!?　力になりたかった！　ハセヲの力になりたくて、ここまで来たというのにっ！！）

私が己の無力さと無様さに歯噛みしていたところで、ソレが再び口を開く。

「女、貴様のせいで僕の策略が一時は台無しになったかと思ったが……今では感謝しているよ。ありがとう」

「――――っ！」

礼を言われてこれほど怒りを感じたのは初めてだと、私は屈辱に打ち震える。

張譲は、そんな私の思いを気にも留めず話を続ける。

「だから、きちんとそれに相応しい礼をしようじゃないか。貴様の願いは、この力（ＡＩＤＡ）を通じて分かっている。僕が叶えてあげようじゃないか」

「どういう……意味だ」

（私の願いを叶えるだと？　何のつもりでそんなことを……）

かすれた声で、張譲に対して真意を問う。

どうせ、悪意に満ちた返答が返ってくるだろうと思っていた私に、

予想通りの返事が届いた。

「ああ、二人で仲良く叶えるがいいさ。あの世で、ね！」

その言葉が、私が聞いた、この男の最後の言葉となった。

私の視線の先で、残っていた片方の触角に胸の中心を貫かれ、身体を脱力させたハセヲの姿が映る。

「……あ」

そして、張譲はゴミを投げ捨てるようかのように、ハセヲを無造作にうち捨てた。

「……ああ」

ハセヲが――――力無く落下していく。

「あああああああああああああああああああああああああっっっ！！！」

――――どくん！

その時、私の奥で“ナニカ”が脈動した。

感覚の無かった全身に、沸騰しているんじゃないかと思える血が流れ始め、駆けまわっているような感覚が生まれる。

「嫌だ！　ハセヲを失うのは……嫌だあああああああああっっ！！」

認めれない、認めたくない現実に抗おうと、恥も外聞も無く叫ぶ。
それでハセヲが救われるなら、何だってしてみせると強く願うように。
そして……
ポオオォォーーーン
どこか物悲しい、けれど心が静まるような音に誘われ、私の意識は、新たな“ナニカ”にさらなる上書きを加えられ、塗り替えられたのだった。
星ｓｉｄｅ　了
ハセヲｓｉｄｅ
「……はぁ、はぁ」
「ふふふ、どうやらもう限界のようだね。ようやく、その生意気な口を閉じられたようだ」
「……るせー。まだまだ余裕だっつの……」

「ははは！　そうこないとね！」

とは、強がってみたものの、状況は一向に悪くなるばかり。

星は相変わらず囚われたまま、俺も積み重なったダメージが無視できないほどになっている。

左腕は折れて動かず、黄金の爪や鎧はひび割れがひどく、ところどころが砕けていた。

（だからって、星を見殺しになんてできねえ！　どうする！？）

そんな思いを抱える俺に構うことなく、調子に乗ったクズがいたぶるように、光弾をばら撒く。

「ぎっ！？　ごふっ！」

「何だ、もうぼろきれみたじゃないか。貴様も所詮、董卓と同じで、心の弱い奴なんだね。
仲間のためだとか、甘い事をぬかしてさ。少しでも僕より強いのかと思った自分が情けないよ」

（なん……だと？）

クズのその言葉に、俺は怒りで身を震わせた。

身体中でもはや痛くない場所などどこにも無かったが、それでも今の言葉を取り消せと、胸の奥で苦痛とは違う痛みを俺は覚えた。

――――そう、だから速やかにその勘違いを正す必要があった。

「まあ、今回の事は僕にとっても良い経験になったかな。さて、それ「誰の心がテメーより弱いって？」……何？」

「だから、董卓の心がテメーより弱いなんて、勘違いにもほどがあるっつってんだよ。オメデてー奴だな」

頭の悪い奴に言い聞かせるような感じで、言葉を放つ。

「護るべき仲間も持ってねえテメーが、董卓より強いわけねーだろが。

身勝手な欲望でしか前へ進めねえ奴は、何か不都合なことが起これば、すぐにそこから目を逸らす。

だがな、仲間を持ってる奴は違う。何が起ころうと目を逸らしたりなんかしねえ！

自分が望む世界を手に入れるために、正面から立ち向かえる強さを持ってんだよ」

目的を叶えるために、世界に意志で挑む――それだけの意志を、持っている奴こそが強者なはずだ。

そんなことさえ分からず、未だに自分が強者だと思い込んでる張譲が……クズを通り越して哀れにさえ思えてくる。

「愚かな。それこそ弱い奴の考えだ。一人じゃ何もできないから群れるだけなのさ」

「ああ、そういう奴もいるだろうな。ただ、それだけしか考えられねえって言うんなら……」

そこで俺は一旦言葉をきる。

この言葉を放てば、どうなるかは分かってる。

それでも――俺は口元の端に笑いを刻み、言葉を続けた。

「テメーは、これまでの人生で本当に大切なモノに出会えなかった“可哀相な奴”だってことだ」

「ふ、ふざ、け……るなっ！！　僕を……哀れむと言うのかっ！？」

絶対的優位に立っている自分を、哀れだと断じられた怒りからか、声にありったけの怨念めいたものを込めるクズ。

その身体から、今の俺にとっては厳しいばかりの力が溢れだす。

「――もういい。始末してやる」

「っ！？　がっあああああぁぁぁああああーーーっ！！」

その言葉を聞いた直後、胸に感じた鋭い痛み。

そして、胸の奥からこみあげてくる鉄臭いものを吐き出すのと同時に、投げ飛ばされたのか浮遊感を感じた。

クズを見上げる形になって落下していく途中で、ようやく何が起きたかを悟る。

（ぐぅ……さす、が……に、きつい……な）

Ｖｉｃｔｏｒｉａｎに残っていた触角で、スケィスの胸の中心にある赤い水晶体を貫かれたらしい。

そのまま、認知外空間の底まで落下した俺のかすれていく視界に、落雷かと思える光が差し込む。

「塵も残さん！　完全に消滅させてやる！」

Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの眼前に、雷雲と嵐を凝縮したかのようなエネルギーが集束していく。

確かにあれをくらえば、完全にオダブツだろう。

貫かれた胸から大事な何かが失われていく心地のなかで、避けれようがない事実だと俺は認識する。

（データ、ドレ……インさえ……できれ、ば……）

いよいよ決断を迫られた俺が空を仰いでいると、今度は何だといわんばかりの“光”と“音”と“叫び”が世界に溢れる。

それは、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの胸の辺りで生まれていた。

――煌く黄色の閃光。

――響いた音は、聞き慣れたハ調ラ音。

「嫌だあああああああああああああああーーーーっ！！」

星の魂の叫びに呼応して、身体を黄色い紋様がはしり、光が弾ける！

「何だ!?　この力はっ!?」

「ま、さか……」

果たしてそこに、“ソレ”は具現していた。

肥大した肩、細くくびれた腰に、木の実を思わせる装飾具を纏った、大樹を思わせる巨人。

腰から下に伸びた蔓（つる）のような尾から、枝葉のように展開された木の葉状の装飾具が、ＡＩＤＡの蠢きと合わさって、不気味に揺らめいている。

そして頭部から突き出している、発芽した子葉のような触手。

（開……眼、したのか……）

第３相“増殖”――メイガス――

その真の力――憑神（アバター）に開眼したようだ。

だが、“そのせいで”状況はさらにヤバいものになっちまったらしい。

「更なる力が満ち溢れてくる!?　素晴らしい！　コイツをこのまま取り込むことができれば……僕は、まさに神となれる！」

Ｖｉｃｔｏｒｉａｎに半ば呑みこまれている形で、メイガスは具現している。

かすみそうな目を凝らせば、メイガスの力に引き寄せられるようにＡＩＤＡが、その密度を増やしているのが分かった。

碑文とＡＩＤＡが共鳴し、その力を爆発的に高めているようだ。

そのためか、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの前で集束していたエネルギーは、嵐をこえて大型台風を無理やり凝縮したかのように吹き荒れている。

ここで殺されるのか――迫りくる死を前にして、俺はどうするべきか決断しなければならなかった。

ここで死んでしまえば、クズのせいで他の奴らがどうなるか分からない。

星は、その力をいいように使われて……最後はどうなるのか。

そして――俺が取り戻したかった、あの日常（せかい）も永遠に失われちまう。

クズが俺を見てあざ笑っているのが分かる。エネルギーの集束も間もなく終わりそうだった。

（ここ、で……死ん、でいい……の、か？）

このまま何もしなければ、間違いなく死ぬ。

だが、何かすれば星の命が……

（関わると決めた人々を身捨てざるを得ない状況に陥った時、お兄

さんはどうしますかー？）

――嫌なタイミングで、嫌なことを思い出した。

だが、いつだったか風から尋ねられたこの質問に、俺はどう答えたんだっけか……。

――――――――

――――――――

――――

――

（そう、か。……そうだった、な）

「ん？　貴様、抵抗する気か！？」

決断したなら、悩むことはない。

俺は、まだ動く右腕をＶｉｃｔｏｒｉａｎに向かって伸ばし、データドレインの準備を始める。

幸いにも、右腕はすぐさま砲台の形に変換され、俺が発射の意を送るのを待っているようだ。

「ははははっ！　撃てるものなら、撃ってみろ！　その代わり、この女は確実に死ぬぞ！」

「……」

相変わらず、クズが耳障りな声で鳴いているが、決断した俺はもう揺るがない。

一秒でさえもったいなく、残りの力を振り絞り……

「なっ！？　本気で、この女を見捨てる気かっ！？」

ここで、ようやくこちらの本気を悟ったのか、クズがうわずった声でまくし立てている。

俺はそれを聞き流しながら、こちらの攻撃が先手をとれると確信し、ひきがねを――――引いた。

「くらい、やがれえええーーー！」

「っっっ！？」

射出された極彩色に輝く光球は、一直線にＶｉｃｔｏｒｉａｎへと疾駆する。

そこでＶｉｃｔｏｒｉａｎは、とっさに集束していた力を霧散させ、さらにメイガスをデータドレインの射線上に放出。

盾にされたメイガスへとデータドレインは突き刺さり、込められていた力を炸裂させたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

## 第１８話（後書き）

次の更新は・・・１０日以上かかるかと（泣）

長くなりそうなんで、また第１９話も前後編に分けるかもしれません。

そして第２０話が、第１部のエピローグという予定です。

予告

「今日をもって、百日の旅団を解散する！」

旅団長の静かでいて、決意のこもった声が団員たちの間に響き渡った。

# 第１９話（前書き）

何だか最近、キャラ把握ができなくなってる気が・・・

# 第19話

ああ、夢をみているのかと気付いた。

身体の感覚は無いが、妙にスッキリとした意識からハセヲは確信する。

（そうだ、これは“まだ”取り戻せてねえ……いつか必ず取り戻す俺の『日常』）

バラバラになったジグソーパズルを組み立てていくかのように、少しずつ広がっていく光景。

――それは、本当に夢のような日々の名残（なごり）。

ハセヲからすれば、そこにいる人物たちは騒がしく、遠慮もしないが……自分を案じてくれる奴らだと、よく分かっている。

何を夢中で語り合っているのか激しく気になる、アトリとエンデュランス。

それを見て憤慨している朔に、何とか抑えようと朔に抱きついてる望。

また何かやらかしたのか、八咫とパイから説教をくらっているクーン。

そして、そんな彼らを遠目に見守るように立っているオーヴァンと、寄り添うように隣に控えている志乃。

（確認なんざしなくても、分かってるさ。俺は――必ず手に入れる！）

決意とともに、ハセヲは目の前に広がる日常へと右手を伸ばそうとする。

欅と一緒になって何やらきな臭い話をしている風、揺光と激しく戦っている星、アトリとエンデュランスの話に乱入した稟が、視界に入ったことを驚きながらも――より切実に。

「……殿！　……ハセヲ殿！」

「……う」

泥沼に浸かっているかのような気だるさからハセヲの意識を揺り起こしたものは、凛と響く声に、なぜか伸ばしていた右手を握る、心地よい手のぬくもりだった。

その声とぬくもりで意識に芯が通ったかのように覚醒し、ハセヲは上半身を寝床から起こす。

（何か夢を見てた気がするが……思い出せねえな。それと何だ、この感じは？）

気だるさ以外にも、何とも言えないような違和感を感じながら、ハセヲは視線を横に向ける。

座っていた椅子から身を乗り出した稟の姿が、初めに飛び込んできた。

どこかの部屋を借りているらしく、見慣れた天幕ではなく、しっかりとした寝床で手当てを受けたようだ。

「稟、か。……ワリい、また心配させちまったな」

「全くです！　“正視に堪えない人物”が貴殿らを運んできた時など、何が起きたのかと思いました。貴殿とは知り合いのようでしたが、何者なのです？」

「気にすんな。俺にもよく分かんねえし、分かりたくもねえ」

また心配に染まっていた表情を一転、その時のことを思い出したのか、顔を歪めながら尋ねてくる稟の質問を、ハセヲは切り捨てた。

自分でも、あの後に起こった出来事を整理しきれていなかったためでもあるが、それ以上にアイツとの関わりを持ちたくないという理由が、大半を占めたせいである。

「それもそうですね。他にも尋ねたいことはありますが……まあ、何にしても良かった。貴殿は丸3日も寝込んでいたのです。旅団の兵たちも、風も、私もどれだけ……」

最後の方は、あまりの想いから声にならなかったのか、できななかったのか。

握りっぱなしだった手を離し、再び椅子に腰かけてそのまま沈黙してしまった稟。

ハセヲはその様子を見やりながら、胸の内にすまなさと嬉しさをないまぜにしたような感情が生まれていくのを自覚した。

（勝手だとは分かっていても、改めるつもりはねえからな。それでも、できるだけ稟や風に……風！？）

シリアスっていたところで、ふと思い返したことを確認するべく、ハセヲは下半身にかけられていた布をめくりあげ――――何も無いことに安堵して元に戻す。

すると、ハセヲの一連の行動に疑問を覚えた稟が、質問を投げかけてきた。

「ハセヲ殿、どうされたのです？」

「いや、前にあっただろ。風の奴が看病疲れだとかで、自分の部屋に帰らず、俺と一緒に寝てたったことが。それで、まさか……と思ってな」

「……」

「まあ、落ち着いて考えれば、もう二度とそんなことが起こる筈がねえって……どうした、稟？」

急に黙り込んでしまった稟を見て、自分の発言に呆れられたのかとハセヲは思ったが、どうやらそうではないらしい。

顔はうつむいてしまったことで、自分からは見えないが、どこか赤っぽいように見える。

良く見れば、小刻みに身体が震えているのも分かった。

（まさか……）

その様子から、一つの結論に至ったハセヲは、慌てて稟に確認を取るべく声をかけた。

「稟！　お前、まさか仕事や看病疲れのせいで、体調を崩してんじゃねえのか！？」

「……はい？」

その何言ってるんだ、コイツ的な返事に、違うのかと思いながらも安心し、息を吐く。

「なら「ハセヲ！　そこでそんなお約束みたいな勘違いをするのはどうかと思うブヒ！」……いたのか、お前」

言いかけたセリフを遮られたことにハセヲは気分を損ねながらも、声がしたほうに視線をおろせば、ふんぞり返るように立っているデス☆ランディが見てとれた。

「男なら、そこは察して黙って抱きしめてあげるとこブヒよ」

「どう考えたら、そんな結論になるんだよ？　いい加減なこと、ぬかしてんじゃねーぞ」

訳の分からないデス☆ランディを冷めた視線でハセヲが見つめてやれば、奴は奴で自分を可哀相な人を見るかのように肩をすくめながら、話し出した。

「いいブヒか？　稟の反応を見るに、どう考えても「デス殿？」…ブヒィ！？」

そう呼びかけた瞬間、稟の顔から表情が消えた。

あまりの豹変っぷりに、とっさに逃げだそうとしたデス☆ランディを左手でわし掴み、押し殺した声で言う。

「手伝ってください」

「ブヒ？」

「おしゃべりをする暇があるなら手伝ってください」

「な、何をブヒか？」

「はい、今晩のおかずに叉焼（チャーシュー）でも作ろうかと思いまして」

「っ！！！？」

稟は淡々と言葉を紡いでいる。

どうあっても譲らないと言わんばかりに。

「オ、オイラに手伝えることはあまりなさそうに思うブヒ！！」

「そんなことはありません。むしろ、貴殿がいてくれないと何もできないくらいです」

締め付けられる手の力がだんだんとあがっていることを指摘したくとも、できない。

一瞬たりとも外れない稟の据わった眼差しが、『調子にのるブタは取って喰う』と言っているようで、デス☆ランディは生きた心地がしなかった。

「さあ、どうです？　手伝っていただけますか？」

「ああっ！　そういえば、オイラも大切な仕事があったんだブヒ！　だから、さっさと必要なことだけ伝えたら、仕事に戻るブヒよ！」

とってつけたように、まくしたてたデス☆ランディは、ハセヲにとって大変な事実を突きつけたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ

俺は、言われたことでようやく違和感の正体に気付き、話し終えたデス☆ランディが退室していくのを気にもとめれず半ば呆然としていた。

憑神戦でのダメージは，デス☆ランディがアイテムを使って治して

くれたようで、感じるのは寝たきりだったためによる身体のダルさぐらいになっている。

見た目には、普段と変わらない姿にうつるだろう。

しかし――――

（確かに、黄昏の腕輪が変色してやがるな。だが……スケィスは、もう……）

張譲との決戦で『真の機能』を解放した黄昏の腕輪は、これまでの濃緑色に黄色が混ざった斑模様になってしまっていた。

色の変色具合で精神浸食の段階が分かるらしいが、デス☆ランディ曰く、腕輪が完全に赤くなった時はどうなるか予想もつかないとのこと。

さらに、こっちの方が、俺にとって重要な事だったんだが――――俺はもう、スケィスの力を使うことができなくなったらしい。

その原因は、ただでさえ弱体化していたモルガナ因子を、張譲の攻撃――――胸のコアを貫かれたのが決定打だったのこと――――によって傷つけられたため、腕輪の力を使っても最早どうにもならないんだとか。

最後に、今回の戦闘で回復アイテムもほぼ使い切ったため、今後は怪我をしても自然治癒に任せるしかないとのこと。

だからといって、俺の半身ともいえる存在を失ったことによる喪失感に浸っている訳にもいかなかった。

（大分状況は苦しくなったが……それでもやるしかねーんだ）

いつの間にか、うつむき気味だった顔をあげ、稟の顔を見やる。

稟も心配げな視線と俺の視線がぶつかるが、お互いに逸らしはしない。

確実に目的達成のランクは高くなったわけだが、だからといって諦めるはずがない。

奴らがこの世界を滅ぼすつもりだというなら、この世界で出来た俺の仲間たちが殺されてしまうかもしれないということだ。

そんなことが認められる筈がなかった。

そのためにも情報が欲しいとこだったが、事情を知ってそうな化け物の行方も不明だ。

――近々、合流するとは言ってたが。

何にせよ、碑文の力を失ったとしても、“アイツら”に対抗する力まで失ったわけじゃない。

この状況は確かに不利ではあるが、反撃ができないほどじゃないのだ。

前回のように、いいようにされるだけのつもりは無かった。

だから――

「これからまた、いろいろと大変なことが起こるかもしれねえ。だからよ……これからも力を貸してくれるか？」

「もちろんです。我が全てをもって、貴殿を助けましょう」

「――――おう」

力になってほしいと願い出た申し込みを、稟は当然のものと受け入れてくれた。

視線を逸らさずに稟を見つめたまま放った俺の言葉を、稟は誇らしげな笑みで受け止めている。

そのことに気恥かしさを覚えた俺は、ようやく合わせっぱなしだった視線を逸らしたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

「……ところでよ、あれから星はどうなったんだ？」

「あ……」

目が覚めてより、ずっと気になっていた事をハセヲは尋ねる。

ある程度の予想はできていたため、あまり聞きたくはなかったのだが、聞かない訳にはいかなかったからだ。

だが、途端に誇らしげに輝いていた稟の笑顔は曇ってしまうのを見たハセヲは、その様子から自身の予想が間違っていなかったことを悟った。

「やっぱり……悪いのか」

「……はい、私たちではどうすることもできそうにありません」

悲痛な声を漏らす稟の態度で事態は相当深刻なものだと、奥歯を噛みしめながらハセヲは判断した。

そのまま寝床から起き上がり、慌てて寝床に戻らせようとする稟を片手で制したハセヲは、つぶやくように、だが言葉に力をこめて問う。

「星はどこにいる？　知ってるなら教えてくれ」

「……おそらく、城壁のどこかかと」

必要なことを聞いたハセヲは、そのまま部屋を出ようとしたが、その背中に稟の声が待ったをかけた。

「星は、2日前に目を覚ましてから、感情を殺したような言動をとり続けています。理由を尋ねても、自分の未熟さのせいだからとしか答えてくれません」

「……」

ハセヲは振り返らずに、そのまま扉の前で話を聞いていた。

――拳を握りしめながら。

「だから、お願いします。星を、私の友人の心をどうか……」

耳に届いた稟の言葉に、頷きを一つだけ返したハセヲは、そのまま部屋をあとにする。

外に飛び出し、一番最寄りの城壁に向けて駆けだした。

星ｓｉｄｅ

人気の無い、乾いた風が吹きすさぶ城壁。

そこで私は何をするわけでもなく、ただ座って空を仰いでいた。

視界の先には、今の私の心を皮肉るかのように澄んだ空が広がっている。

（私は甘かったのだろうか……）

我が槍を捧げるに相応しい人物を見つけ、共に歩もうと誓った。

なのに――どうだ。

私のせいで、ハセヲは負わなくていい怪我をした。

一命は取り留めたものの、かなり危険な状態だったはずだ。

今回は助かったからいいものの、次はどうなることか……。

そこまで考えたところで私は立ち上がり、静カナル翠ノ楽園を喚装した。

そのまま構えをとって、乱れている心を鎮める。

さらに、我が心をも槍とせんと集中を深める。

（そうだ、槍は迷わない。槍は何も――考えない）

――ハセヲは、この戦いの結果次第で、天の世界に帰ってしまうのではないか。

ハセヲの身が心配だったのはもちろんだが、この想いに駆られて戦いの結末を見届けたいと思っていたのも事実。

そういった心を乱す感情に囚われていては、今度こそハセヲを失うかもしれない。

だから――この身を“一振りの槍”としてしまおう。

ハセヲの言動に振り回される心などいらない。

――揺らがず、惑わず、ただハセヲのために振るわれる槍に。

私は静カナル翠ノ楽園を送還させ、自分にそう言い聞かせてから身体を横に向ける。

先ほどから意識の端で捉えていた、こちらに向かってくる人物の方へと。

星ｓｉｄｅ　了

ハセヲｓｉｄｅ

「目を覚まされたのですね。しかし、もう少し御身を御自愛されたほうがよろしいかと。まだ全快したわけではないのでしょう」

たしかに重傷のようだった。

俺が傍に来るやいなや、膝をついて臣下の礼をとり、調子が狂うとしか思えない丁寧語で話しかけてくる星。

その様は、普段の掴み所のない態度から一転、触れるものを切り裂く抜き身の武器を思わせるような、危うげなものになっている。

そして、言葉からもハッキリと感じれる、今までにない明確な“線

引き”。

星は俺の目の前にいるはずなのに、その距離がずいぶんと遠くに感じられた。

「俺はもう平気だ。星、お前こそ大丈夫なのかよ？」

「はい、問題ありません」

「いや、問題だらけだろ。何だよ、その口調？　調子が狂ってしょーがねえんだが」

「何をおっしゃるか。そもそも“主”とその“臣”の間には、絶対的な上下関係があるのです。今までの方がおかしかっただけです」

「……じゃあよ、何で急にこういう態度をとろうと思ったんだ？」

相変わらず膝をついたまま淡々と話す星の真意を知る必要があると思った俺は、質問を投げかける。

それに微かに身体を震わせた星は、少しの間をおいてから話し始めた。

「はい。私は主を護る、一番の槍であらんとしてきました。だというのに……主を護るどころか、私自身が敵の手におち、主を危機にさらしてしまったのです。

これは、ひとえに私の心の在り方に起因するもの。余計な感情（もの）に振り回されたがために起こったことなのです」

「だから感情を殺して戦うことに専念するっていうのか？　これか

らもずっと？」

「はい、強くなければ護りたいものを護れないというのなら、この身を“一振りの槍”にするまでです。
ですから……この期に及んでというのは分かっていますが、どうか私を旅団の戦列に残していただきたい。
何か罰が必要というのでしたら、いかようにも……」

そう言って頭を垂れた星を見下ろしながら、俺は盛大に心の中で溜息を吐いた。

（ったくよ……）

「顔あげろよ」

その言葉に反応して顔をあげた星の両目の間に、びしりと指を突きつけてやる。

光を失った星の瞳が、俺の指に釘付けになったところで……

「ふんっ！」

瞬間に指を折り曲げ、溜めに溜めたデコピンを星のおでこに炸裂させた。

「っつあ！？」

もんどりうって、両手でおでこを抑える星。

しかし、すぐさま弾かれたように顔をあげた星の目の端には涙が滲

んでいる。

結構な威力があったようだが、知ったことではなかった。

「何一人で勝手に決めて納得してんだ！　しかも胸糞ワリイ内容だしよ。

余計な感情（もの）に振り回されてるだあ？　その程度で弱くなるようなタマかよ、お前は！？　感情（それ）さえ呑みこんで、強さの糧にできる奴だと俺は思ってたんだけどよ。

どうなんだ、趙子竜！　俺の過大評価だったってわけか、ああ！？」

「っ！？　私だって望んでやってるわけじゃない！

だが……それでも恐ろしいのだ。そうしないと、また私のせいでハセヲを傷つけるんじゃないかと……」

「別に今回の件は、お前だけのせいじゃねえよ。それをいえば俺だって……下手したらお前を殺していたかもしれねえんだ」

最後に放ったデータドレインは、確実に星の命を奪わないという保証はなかった。

それでも、あの時は――なぜか聞こえた“アイツ”の声を信じたかったから。

「それこそ、ハセヲが気にすることではない！　私はこうして“ここ”にいる。それ以上考えることなどないのだ！」

「ああ、そう言ってくれるなら、俺のことだって同じだ。俺も“ここ”にいるんだからな」

「それとこれとは「同じだ」……ハセヲ」

星の言葉を遮った俺は、座り込んだままの星に手を貸し、立ちあがらせてやる。

ようやく、いつもの口調には戻ってくれたが、まだまだ“らしくない”星の肩を、片手を首元に回すように掴んでやる。

意表をつかれたのか、軽く目を見開いた星から顔を背ける。

しかし、それでも姿勢は変えずに、

「確かに形式としちゃあ、主と部下かもしれねえが、それだけでもねーだろ」

気恥かしさを抑えつけ、何とか平静を装って、投げやり気味に言葉を放つ。

「からかわれるのは正直ウザってーが……今のお前を見てる方がよっぽどイラつく。
今まで通り、遠慮のいらねえ仲間でいればいいじゃねえか。
お前は、そう思わねえのか？」

「……そう思う」

「なら決まりだ」

これでこの話は終わりだと、短く言葉を切り、肩を抱く手の力を強める。

そこで、星が微かに身を震わせていることに気付いた。

顔を向ければ、デコピンの時の涙がまだ残っていたのか、困ったような泣き笑いの顔が見てとれる。

「……全く、これで慰めているつもりか？　こういう時は、優しく抱きしめてやるのが相場だろうに」

「はっ、ようやく本調子がでてきたか。もう心配なさそうだな」

そう言って俺は手をどけようとしたが……

「すまんすまん。もう少しだけ、このままでいてくれるか？」

「……ああ」

そう言って身体を寄せ、頭を俺の肩に置いてきた星を、仕方ないかと受け入れる。

そのまま、お互いに口は開かねえが、気まずさはない沈黙に浸る。

そして――――

「星」

お互いの呼吸が重なったように感じた瞬間、俺は声にのせた力を叩きつけた。

「今回はいいようにされちまったが、次はそうはいかねえ。奴らをブッ潰すぞ！」

――だから一緒に戦ってくれ、という意味をのせた言葉を星に告げる。

「無論だ」

間髪いれず、星から普段の自信に満ちた返事が届く。

それが、俺には本当に頼もしく感じられたのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

「お帰りなさい、お兄さん、星ちゃん。それにしても、さすがお兄さんですねー。あの状態の星ちゃんを見事立ち直させるとは～」

「まあ、あの状態で放置しておくのは精神衛生上よろしくねーからな。それと……心配かけたな、風」

二人の帰りを、妙な笑みを浮かべた風が迎えてくれた。

それに対し、バツが悪そうに声がしぼんでいくハセヲへ、風が小さい子を叱るように人さし指を突き出し、「反省してください。メッですよ」と言わんばかりの態度をとる。

しかし、身長差から上目づかいになっており、見上げるために胸を反らしている風を見つめるなかで、妙な焦りを覚えたハセヲは、軽く頭を振って星の話を始めた。

「お互い思うとこは吐いて少しは楽になったしよ。もう、正気に戻ったと思って良いと思うぜ」

「さて、もとより正気を失くしていた覚えはないが」

「……ほ～う、あれほどの様を見せといて、そんな口を叩けるなんてな」

とぼけた返事をしてきた星の肩をつかみ、自分の方へと引き寄せながら押し殺した声でハセヲはうなる。

その見慣れた不機嫌な顔を、星は微笑みながら見つめていた。

（――ああ、決めてしまったんだからな）

気づいてしまえば、何も迷うことはなかったのだ。

護ると決めた、その誓いを無かったことになどできない。

過ちを繰り返さないため、更なる精進を目指し、共に闘う。

啄県でハセヲの力を、心を知った時より、星は決めたのだ。

――ハセヲと共に在り、その全てを見届けることを。

先ほどより近くなったハセヲとの距離を、星は自分から更に寄せていく。

「なっ！？　お、おい――――」

予想外の展開に、ハセヲから驚きの声があがる。

それでも星は気にせず、距離をつめていき――――

ついに二人の距離は、ゼロを超えてマイナスとなった。

ハトが豆鉄砲をくらったように口をパクパクさせているハセヲの、少し赤く染まった耳元に唇を寄せ、星はささやく。

「もはや、恐れるものは何もない。覚悟しておくことだ」

もう手放しはしない。
どうあっても離れもしない。

星は改めてそう決意する。

「これからもよろしく頼む、主（ハセヲ）よ」

そう言って、ハセヲの耳に軽く息を吹きかけ、星は身をひいた。

「うおっ！？」

慣れない状況のため、神経過敏になっていたハセヲは、それに面白

いくらい反応する。

頬が触れ合うほどに密着した際の星の体温と、その甘い吐息は、ハセヲにとっては金槌で殴られるほどの衝撃に感じられたのだ。

「む～～～、ずるいですよ、星ちゃん」

そんな二人の様子を見て、風が拗ねたような声をあげる。

落ち込んでいた友人が復活したのは嬉しいが、自分だってハセヲのことを心配していたのだ。

にもかかわらず、自分を放って楽しそうにしている二人を見るのは面白くなかったのである。

「風は放置ぷれいで喜ぶような変態ではないのです。そこのところ、しっかり分かっていますか～、お兄さん？」

「分かんねえよ！　何の話だ、何のっ！？」

「ふふふ、分かっている。だから吐息（あれ）だけにとどめたのだ。本当ならば、以前のような事故ではない接吻（モノ）をしようと思ったくらいだったのだぞ」

「あ～、完全にいつもの星ちゃんですねー。さすがお兄さん。武だけでなく、女性の気の惹き方まで天下無双のようです」

「ああ、ちがいない」

「いい加減にしろっ！　さっきから何わけ分かんねえ話ばっかして

やがる！
それと星、前言撤回だ。あん時のしおらしさを少しは残しとくべきだったんじゃねーか？」

相変わらず考えの読めない風に、先ほどまでの大人しさから一転、いつも（以上？）の調子を取り戻した星を見て、ハセヲは早まったことを言ってしまったかと思い始めていた。

しおらしかった時は人形細工のような目をしていたが、今の星の目は、獲物を狙う猛禽類の如く、鋭い輝きを放っているようにハセヲは感じていた。

しかも、その眼差しが自分を射抜いているように見えるから、落ち着かない。

「仕方あるまい。ハセヲ、お主が思い出させたのだぞ」

「……何を？」

「それを私が話すわけにはいかん。自分で辿りつくことだ」

返ってきた言葉が、予想外の弁明のセリフであり、星が何を言っているのか分からないハセヲは、疑問の声をあげることしかできない。

だが、星はその答えを教えようとはしなかった。

それは風と稟に対して思うところがあったこともあるが、ハセヲ自身が気付くか、その気になってほしかったと思うところが大きい。

星も一角の武人であると同時に、年頃の女性なのだ。

――ハセヲにとって、最も大切な女性でありたい

ＡＩＤＡに浸食された際に、星の胸を焦がすほどの熱を感じた強き想い。

この超鈍感野郎（ハセヲ）に対して、胸に抱いた想いを叶えるためには、大人しくしていられるはずがなかったのだから。

風ｓｉｄｅ

星ちゃんの調子が戻ったことは嬉しいですが、お兄さんを狙っている人は、最早風たちだけではありません。

今回の連合戦は、良くも悪くもお兄さんの存在を誇示してしまいましたから。

「ですが星ちゃん、相手は強大ですよ～。加えて、敵は内だけではなく、外にもいるんです」

「……桃香殿のことか？」

「はい、さらに言えば孫策に曹操も、お兄さんに会いに来ていましたから油断はできません。まあ、曹操は情報収集の意味合いのほうが強そうでしたがー」

「桃香たちが俺に会いに来てたのか？」

もうすっかり話に着いていけず、聞き流していたお兄さんが、ここで口を挟んできました。

答えないわけにもいかず、お兄さんが意識を失っている間に、先にあげた三人が尋ねてきたこと。

お兄さんが話のできる状態ではないことを風が伝えると、また折をみて足を運ぶと言ってそれぞれ引き上げていったことを伝えると……

「そうか」

その一言だけで済ませてしまいました。

どうでもいいとまでは思ってないようですが、そこまで重要ではないと考えていいのでしょうかねー？

ただ、お兄さんの場合だと本人がどうこうというよりも、相手がどう出てくるかという方が心配なため、あまり当てにならないのが悲しいところです。

（……やはり、心構えは必要ですね～）

とりあえず風は、あてがわれた自分の部屋に戻ろうとしているのか、背を向けたお兄さんに忍び寄って行きました。

自分の主が、諸侯から注目を浴びるようになったのは嬉しいことであるし、そう仕向けたのも自分であると、風は心得ています。

それでも……

（現時点において、有力な勢力に目をつけられているのは今後のためにも望むところですが、それがあそこまで魅力的な女性たちばかりとなると……面白くありません。それでも、最後に笑うのは風なのですが～♪）

自分がここまで興味をもった初めての人、何をしてでも手に入れたいと思っている男。

その人物の横に回り、風は掛け声とともに、首に手を回すようにして肩に抱きつき――

「とうっ！」

細身に見えて、引き締まっているお兄さんの大きな背中や胸の感触を堪能したい気持ちを抑え、肩口のあたりに軽く口付ける。

「ぐえっ！？」

首がしまったのか、潰れたカエルのような声を出したお兄さんは、風の口付けには気づかなかったようです。

さっき星ちゃんが踏みとどまった行為を風がしたことに。

それは文字通り『唾をつける』ということ。

お兄さんは風が手に入れるという、自分への新たな誓約。

星ちゃんの目が細まったこと、「いきなり何しやがる！」と怒鳴っているお兄さんの声を気にせず、その声に割り込ますように、風は囁きました。

『――風を、ここまで想わせた責任取ってもらいますからね～』

風の囁いた言葉は、お兄さんの耳には届かずに打ち消されてしまったようでしたが、関係ありません。

ここに新たな誓いは為され、風はそのために進み続けるのみ。

そこまでは良かったんですが、それはそれとして――

（ひとまずは、星ちゃんの追求とお兄さんの怒りをかわす方法を考えないといけませんか～）

風を見据える眼力が次第に強力になっている星ちゃんとお兄さんから目を逸らしながら、まずはここを越えなければと、風は頭を悩ませ始めるのでした。

風ｓｉｄｅ　了

――風の囁きがハセヲに届かなかったことは、不運だったのか、幸運だったのか。

その結果が分かるのは、まだまだ先のお話。

## 第１９話（後書き）

さてさて、ハセヲからスケィスの力を失わせてしまいましたよ、私（おいおい！？

それと腕輪の機能についてですが、私の設定ではモルガナ因子の活性化と、認知外空間の構築を考えています。

星のように開眼したといっても、認知外空間でなければ憑神にはなれません。

（ロストウェポンの付加スキルは使えるようになりますが）

ちなみに、認知外空間を構築できるのは、現時点でハセヲ、カイト（使用後に身体が崩壊する　半年ほどで再生可能）のみです。

腕輪の浸食率は、現在３０％ほど。

ひとまず、今後はハセヲに代用できる力を与えるつもりです。

そんなこんなで、とりあえず次回へ続く！　（今週末には何とか？）

## 第２０話（前書き）

４０００００ｐｖ、４００００ユニーク達成しました！

嬉しすぎです！！　ありがとうございます！！！

# 第２０話

それから、時間が少し経って――

旅団のメンバーたちが逗留している建物の一室に、ハセヲと星、稟、風といった首脳陣が勢ぞろいしていた。

張譲との決戦の報告を聞きたいと言われたためである。

ハセヲとしては話すべき内容だと思っていたため、特に問題無かったのだが、ここで予想外の人物が同席を望んでいるという話を耳にする。

反対は受けたが、それでも無関係ではないからとハセヲは同席を認めるのだった。

「まずは、このような場を私共に与えてくださった御厚情に深く感謝いたします」

「……」

「……ああ」

「この都を治めていた為政者の一人として、ここで何が起こっていたのか、そして事の結末だけでも知っておきたかったんです」

聞いていて痛々しいくらいに細い声を紡ぐのは、一連の戦闘の渦中の人物である董卓。

その隣で沈黙している、董卓の懐刀である賈駆。

洛陽城での戦闘後に二人の身柄は一時的に旅団が預かり、これまで軟禁状態にあった。

幸か不幸か目覚めた董卓は、元々儚さそうだった姿を、もはや病的にさえ見えるほどやつしている。

心が完全に死んでしまっていると思えるほどだ。

しかし、それも無理のないことではある。

元来心優しい少女であった董卓。命を尊び、その営みを素晴らしいものだと感じていた少女が、張譲に宿されたＡＩＤＡの力で、理性を越えて一部の感情（ねがい）を増大させられ、大量虐殺を行ってしまったのだ。

その被害は、三千弱と伝え聞いている。

しかし、情報元が袁紹であることから、実際はもっと被害は大きかったのではないかというのが稟の見込みであり、ハセヲもその可能性が高いと踏んでいた。

さらに、生存者がいたという情報は、今のところ皆無である。

その重い事実を、心優しい董卓は背負うことになったのだ。

――その心に刻まれた悔恨（かいこん）の念は、計り知れない。

そんな董卓を見つめる賈駆の姿もまた、弱々しいものだった。

親友にして主たる少女が抱える悲しみを分かち合おうとするかのように、言葉なく寄り添っている。

――でもこれからは、辛いことも、苦しいことも、嬉しいことも全て分けあうわ。

そうやって……一緒に生きていきましょう？

洛陽城での約束を反故にする気はないのだろうが、いかんせん董卓の沈みぶりが尋常ではない。

長い時間を共に過ごしてきた賈駆だからこそ、董卓の気持ちが良く分かる分、どうしようもないといったところだろう。

そんな二人の様子を、ハセヲは醒めた視線で見つめていた。

主の様子を見守る三人――特に星――は、その胸の内が何であるか薄々気づいていたため、もはや何も言うつもりもなく、聞くことに集中するようである。

「それじゃあ、話すぞ。といっても、俺も最後まで意識があったわけじゃねーんだがな……」

そう前置きして、ハセヲは話し始めた。

ハセヲが覚えている、あの場所で起こった事の結末を――

回想録

「くらい、やがれーーーーっ！！」

気力を振り絞るように放ったデータドレインは、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎの盾にされたメイガスに突き刺さり、その内部へと収縮していく。

それと同時に、スケィスの右腕にも変化が現れた。

砲台と化していた右腕から突き出てくる八枚の赤い花弁。

それが展開された途端、メイガスから幾本もの数列が飛び出し、スケィスの右腕に吸収されていく。

その数列に刻まれたモノの正体はハセヲには分からなかったが、最後にメイガスから飛び出してきた極彩色に輝く球体を右腕で受け止めた時、スケィスの全身が脈打つように大きく震え、星の声が聞こえた気がした。

「……っ！？　星は！？」

気を取り直し、慌てて目を凝らしたハセヲの視線の先に、メイガスの姿が掻き消えていくと同時に現れた星の姿が映る。

捉えた瞬間、ハセヲは星のもとに急ぎ、砲台から元に戻った右腕で、黄色の燐光に身体を覆われ、虚空をフワフワと重力に逆らって浮いていた星を優しく抱きとめた。

（生きて、る！）

すぐさま無事かどうか確認したハセヲの目が、星の胸が上下に動いていることを確認し、安堵に染まる。

ギリギリになったら、きっと見捨てる――そんな決断を取るしかなかった俺の耳に届いた声。

『ハセヲ、データドレインをブチ込め！　安心しろ、俺が女の子を悲しませるようなことを言うと思うか？』

普段の調子にのった声の中に、妙な説得力を与える言葉が含まれているアイツの顔を思い浮かべた俺は、その言葉通り、データドレインを放った。

きっと大丈夫だという予感はあったが、それでも絶対ではなかったことから、ハセヲは胸の中に溜まっていた嫌な想いを吐き出すように、大きく息を吐く。

メイガスが持っている特殊能力“増殖”によって、データドレインによる攻撃から星の身は護られたようだった。

そのことに深く、深く感謝する。

星の身が無事だったこと、そして――これで何の遠慮も無く張譲を潰せることを。

「ひ、ひぃ！？」

無様に声を裏返らせて、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎは後退した。

不意に顔をあげたハセヲの――――スケィスの視線に押されたかのように。

メイガスの力を吸収したおかげか、力が僅かに回復したスケィス。

それでも、依然としてボロボロの状態であり、あと一押しで倒せるように傍目には見える。

しかし張譲にはとてもそうは思えなかった。

スケィスから放たれる激烈な殺気と視線――――それらが、張譲の心を雁字搦めにしているからである。

絶対の自信で護られていた心の防壁をハセヲに砕かれ、星という人質を失い、何も自分を護るものの無い状態で浴びた、純粋な殺気。

明確で迷いのない“殺戮の意志”が張譲の全身を貫き、周囲の空間までもが余りある殺意に満たされていく。

（殺、される。間違いなく、僕はコイツに……殺される!?）

「テメーの顔も見飽きた。速攻でケリをつけてやる」

「あ、ああ……い、嫌だあぁぁぁぁーーーー！」

「っち、逃がすかあぁぁぁぁーーーー！」

あまりの恐怖から思考力を奪われた張譲に出来たのは、本能に従って逃げるということのみ。

当然逃がすつもりはないハセヲは、星を抱えたまま後を追おうとした、その時――

突如、新たな気配をハセヲは感じとった。

あやふやというか、不透明というか、とにかく自分を毛嫌いしていることだけは確かな、悪意ある気配を。

「今度は何だってんだっ!?」

クズの奴がまた何か仕掛けたのか――ハセヲはとっさにそう思ったが、その視線の先。

逃げ続ける張譲の頭上から急降下してきた一人の少年が、片手に掲げた黒い本をＶｉｃｔｏｒｉａｎへと叩きつけた。

「ＧＲＲＲＹＹＹＧＧＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡ!!」

途端、張譲の口から人として絶対に出てはいけない“音”が溢れた。

これが声などと、誰が信じられるだろうか。

そう思うしかないほど、地獄の苦しみがこの世に体現したかのような悲痛な音が、Ｖｉｃｔｏｒｉａｎから黒い本へと何かが吸い込まれていくたびに漏れ続けている。

（あれは……ＡＩＤＡを無理やり引き剥がしてるのか!?）

精神的な融合を果たしている張譲とＡＩＤＡ。その魂の結合を、無理やり引き裂いているとでもいうのだろうか。

とにかく、いきなり現れた男が持っている本は危険だと判断したハセヲは、張譲のもとに急ごうとして――――再び動きを止める。

いや、止めざるをえなかったのだ。

「――――旋律の戒めよ」

未だに悪夢にうなされそうな音が響き渡る中でハッキリと聞こえた、力ある声。

それと共にスケィスの周りに球状に浮かび上がった光列の檻。

「我が名のもとに具現せよ、神代の譜檻（ミスティック ケージ）！」

言葉が紡がれるごとに光は輝きを増していき、結びの言葉で光列は完全にスケィスを覆いこんでしまう。

何とか脱出しようと星を肩に乗せ、右腕だけで処刑鎌を振るうも、檻はビクともしなかった。

（アイツらは何者だ!?　何をしようとしている!?）

「っぐ!?　急いで……くださいっ！　拘束術だけだというのにっ……反動が凄まじい！」

先ほどとはうって変わって、苦悶に満ちた声が聞こえた方をハセヲが振り向くと、そこには理知的な風貌に眼鏡かけた一人の青年が浮かんでいた。

檻に向かって両手を突き出し、なぜか口元から血を吐きながらも、懸命にこの檻を展開させ続けるべく、力を振り絞っている。

この青年の声に「分かっているっ！」と短く返した少年が手にしている本が輝きを増す。

その度にビクンと身体を痙攣（けいれん）させながら人として大切なモノが奪われていっている張譲を見つめながら、ハセヲは嫌な予感を大きくさせていた。

離れていても感じられる、あの本に集められている力のおぞましさを危険だと判断したからである。

（とにかくここから脱出しねえと始まらねえ！　だが、いよいよ俺も限界が……）

こうしている間にも、何度も処刑鎌で斬りつけているのだが、檻は健在のままだ。

そんな中、疲れから顎があがり、ハセヲの視線が自然と上に向いた瞬間――ソレは降りそそいだ！

「「なっ！？」」

響いた驚愕の声は、ハセヲと青年のもの。

そして、大気を裂くような轟音と共に降りそそいだ三本の光条は、その威力の高さからか、それとも外側は脆かったのか、あっさりと光列の檻を突き破る。

ガラスが割れるような音と共に檻は砕け散り、スケィスが解放される。

「今のは……塵球至煉弾（じんきゅうしれんだん）！？　銃剣のアーツが何で……っ！？　今はそれよりも！」

スケィスを拘束から解き放った攻撃が、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおける銃戦士の技にそっくりだったことを疑問に思ったハセヲだが、今は気にしている場合ではないと残りの力を振り絞り、黒い本を持つ少年の元へ疾駆する。

残された力での最後の一閃を、黒い本へと薙ぎ払うが……

「ちっ、ここまでか！？」

忌々しげに呟き、すんでのところで姿を消失させた少年の残像だけを切り裂き、その勢いで握力の弱まっていた処刑鎌が右腕から離れ、そのまま空間に溶けるよう消失していった。

見れば、眼鏡をかけた青年の姿も見あたらない。

「やは……り、ＡＩＤＡの……力に対抗、できるだけあって、碑文……使いの力、恐ろ、しいですね」

息も絶え絶えといった感じの苦しげな声がどこからともなく聞こえ、「対応策を考えねば……」という声を最後に、完全に気配は感じられなくなった。

どうやら逃げたようだ。

（……限界、か）

そして、最早声を出す事も出来ないほどに消耗したハセヲが、スケィスの姿が崩れていく中で露わとなり、そのまま星と一緒に重力に従って落下していく。

見る間に近づく地面（？）を見据えながら、せめて星だけでもと思うハセヲだったが、身体は言う事を聞いてくれず、悔しさに歯噛みした瞬間だった。

温かく、たくましい腕が、ハセヲと星を優しく受けとめたのだ。

迫りくる死を覚悟するしかなかったハセヲは、力強い腕の持ち主に心から感謝しようと思ったのだが――

「ウフ♪　私が来たからには、もう大丈夫よ、ハセヲちゃん！」

「――――グハッ！？」

――それで全てが終わった。

かすむ視界でもハッキリと分かる貂蟬（へんたい）の姿は、今日一日で様々な出来事に遭遇したハセヲにとって、耐えられるものではなかった。

意識を留めようとする気力も起きず、ハセヲのまぶたが閉じられていく。

「あ～ら、乙女の腕の中で眠れるなんて最高の幸せとは思うけど、私もアノ子たちを追わないといけないの。名残り惜しいのだけどねえ。でも、この世界を滅ぼされる訳にはいかないのよ。
それでも、安全なところまでは届けてあげるから心配はいらないわ♪

それと、近々合流しようと思っているから、くれぐれも無茶のないようにねぇん！」

どこかに運ばれる途中、色々と言いたい事を言ってくれているとハセヲは思ったが、それを指摘する余力も無く、ハセヲの意識は完全に落ちたのだった。

回想録　了

「「「「「……」」」」」

ハセヲが話し終えた後、聞いていた五人は言葉をしばし失っていた。

ハセヲと出会ってから、常識という枠を超えた事象に何度も遭遇している星たちをもってしても、奇怪に過ぎる話なのだ。

実際にその力の一部を行使した董卓はともかく、賈駆にとっては、夢幻の物語を聞かされているような心地だったかもしれない。

「それで……張譲はどうなったのでしょう？」

「ああ、生きてるかどうかは知らねえが……“あの状態”じゃあ、生きてたとしても廃人同然だ。ふざけやがって……」

少しの間をおいて、董卓から出た質問に対し、ハセヲは怒りを隠そ

うともせず、吐き捨てる。

その怒りは、張譲に落とし前をつける機会を奪った敵に対してのものか、それとも例えクズだったとしても、ＡＩＤＡに関係をもった人間の過ちを止めきれず、精神を壊させてしまった自分への不甲斐なさか。

そんなハセヲの想いを打ち切るかのように、星が言葉を放つ。

「――――最後はお粗末だったのだな。まあ、弱者を踏みにじる権利を行使する者は、より強い者に踏みにじられる義務を負うのが道理。これ以上、奴のことを考える必要はない」

その顔は醒めきっており、語る声にも感情がこもっていない。

言葉通り、考える必要も、思い出す価値すらないとでも言うように。

その反応に、ハセヲは苦笑をこぼし、握りしめていた拳を開いた。

星の言うように、今は考えるべきことは山のようにある。

張譲という存在は記憶から消し去るとハセヲは決めていたが、この事件で起きた惨状まで忘れていいとまでは思わなかった。

反省は必要だが、後悔からいつまでも立ち止っているわけにもいかないのだ。

自分のもとには、護るべき大切なものがたくさんあるのだから。

だから、今は前に進むべきだろう。

そしてそれは――――ハセヲたちだけに限った話ではなかった。

月ｓｉｄｅ

「それで、お前はどうするつもりなんだ？」

「……」

話を終えた、御遣い様からの問い。

その声は淡々としているけど、向けられている視線に込められた力は鋭いもの。

その視線を正面から受け止める心（つよさ）が今の私にはなく、下を向いてしまいました。

（……もう、私にできることなんて一つしか、ない）

話を聞き終えてから、せめてもの気がかりだった内容を知った私の胸には、もう罪悪感しか残っていません。

だから、御遣い様の目を見返しながらは無理だったけど、思ったことは口から出てくれました。

「都の人々を苦しめ、人の道を外れた力を振るって多くの人々を死なせてしまった責任を取るつもりです」

「っ！？」

私の言葉に、隣にいた詠ちゃんが息をのむのが分かった。

視線を詠ちゃんに一瞬だけ向けると、目を大きく見開いて呆然としている姿が映り、とても悲しく思う。

あの約束はとても嬉しかったけど、私が背負った罪は大きすぎる。

――――到底、許されるものではなかったから。

「ふん、どうやってだ？」

「私を……殺して下さい」

間が空いてしまったけれど、ハッキリと断罪を求める言葉を口にする。

それ以外に、私に出来る事なんて思いつかなかった。

「お前が死んでどうなるってんだ？」

「私が死んだとしても……それで全てが無かったことになるとは思っていません。

それでも……私は許されない罪を犯しました。もう死んでお詫びするしか……」

心から不思議そうな声に思わず顔をあげた私の目に映ったのは、変わらず醒めた表情に鋭い視線を突き刺している御遣い様。

そのまま舌打ちを一つ零して口を開いたのです。

「お前もさっき言ったよな。自分が死んだところで全てが無かったことにはならないってよ。当たり前だ、お前一人の命で苦しんだ数千、数万の人間が釣り合うわけねーだろ」

「っ！？」

自分でも分かっているはずだった事実を突きつけられ、改めて認識した己の罪深さにうち震えることしかできない自分が情けなくてならない。

そのまま下に向けようとした頭を大きな手に掴まれ、強引に上に向けられ、またあの視線と向き合うことになった。

「ふざけんじゃねえ。お前のいう責任（それ）は、ただ逃げてるだけだ。罪の重さから目を背けて、償う方法を考えもせず、楽な死（ほう）に逃げ込もうとしているだけだろうが！」

「あ、ああ……」

御遣い様の言葉が私の心の弱さを暴きだし、涙が溢れてくる。

本当なら泣き叫びたいくらいなのに、そんな力すら私には残されていない。

「ちょっとアンタ！　さっきから黙って聞いていれば、月の覚悟を

何だと思って「黙れ」……く！？」

「主のことを想うなら黙っていろ、賈駆。今の彼女に必要なことなのだ」

私の身を案じて割って入ってくれた詠ちゃんを言葉で押しとどめた趙雲さん。

本当は私が止めようと思っていたんだけど、その瞳に込められた厳しくも温かい力の前に、詠ちゃんも振り上げた手をおろして下がってくれました。

（……それでいいの。今は、この人に聞かないといけない事ができたから）

「そ、それなら……どうすればいいのですか？　これほどの罪を償う方法を貴方は知っているのですか？」

切実な問いだった。

もしそんな方法があるというなら、どんなに苦しくともやりきってみせると思えるほどに。

しかし――――

「俺にも分かんねえよ、そんなもん」

「なっ！？　さっきはあんな事言っておいて……それは、あんまりじゃないですか！？」

あまりの無情な答えに、思わず御遣い様を責めるような言葉が飛び

出してしまう。

――それくらい勝手な発言に思えたから。

それでも御遣い様は涼しげな態度を崩すことなく、言葉を続ける。

「俺は見ず知らずの他人に同情できるほど、『できた人間』じゃねえ。そもそも人に聞くようなことじゃねえだろ。

……しっかり目を開いて、耳を澄まし、思考しろ。

深呼吸して、一歩でも多く歩け。そしてその先に……答えを見つけてみせろ」

「……見つかると思いますか？」

「さあな、だがそれで頑張っている奴を俺は一人知ってる」

「……」

何かを思い出すかのように言葉を切り、頭を掴んでいた手を離した御遣い様を、私は少しだけ力を取り戻した視線で見つめる。

それを見て顔を横に背けた御遣い様が「それとな……」と、最後に付け足すように話してくれたのです。

「お前という存在が、賈駆にとって価値があるものなら、お前は簡単に死んでいい訳ねえんだ。お前の命を……簡単に背負わすんじゃねえよ」

「っ！？」

そんな風に考えたことはなかった。

横を見れば無言で……でも声に何て出さなくても痛いくらい気持ちが伝わってくる顔をした詠ちゃんがいる。

そこで、気付いた。

（……ああ、私は結局自分のことしか考えれてなかったんだ）

生きているのが辛いという想いから死を受け入れようとして、その結果、私にとって大事な人をさらに傷つけてしまうところだったんだ。

そんなこと、もう二度とさせたくなんかない！

にじんでいた涙をぬぐい、背筋を伸ばして初めて御遣い様と正対する。

今の私の顔は、正直心労と涙でひどいものになっているはずだった。

それでも――今の表情には自信がもてる。

「ありがとうございます、御遣い様。私は……まだ死ぬわけにはいきません。何があろうと生きて、償う方法を探したいと思います」

「ああ、そうしたいなら止めねえさ。こうやってお前の考えを変えさせちまったんだから、今さら赤の他人とは言えねえしな。……行く当てがないなら旅団に残ればいい」

「……よろしいのですか！？」

御遣い様の言葉には散々驚かされてきたけど、今の言葉は特別です。
――――大戦犯である私を匿ってくれるだなんて。

「……本気なの？」

「ああ、何とかなるだろ？」

詠ちゃんが目を細めて御遣い様の真意を探るように尋ねるのに対し、御遣い様は気負うことなく自然体で応えている。

ああ、今日は本当に何て日なんだろうって思う。

「まあ、今回の件で言えば、私とて思うところがあるから何とも言えんのだが……」

「軽く無茶を言ってくれますね、ハセヲ殿。まあ、それが主命であるなら従うしかないのですが……」

「大きな火種を抱えることになるわけですから、大変な風たちをしっかりと労ってもらうのですよ～」

「……お手柔らかに頼む」

「――――ぷっ」

その御遣いさまの言葉を受けて、臣の方々も言葉を濁しはしても、反対を唱える人はいませんでした。

特に最後の方の言葉を受けて、御遣い様が嫌そうに顔をしかめながらも納得してしまったところなんて！

（……本当に、なんて器が大きい方たちなんだろう）

あまりに予想外かつ場違いな問答に思わず笑ってしまい、詠ちゃんが心配しているみたい。

うん、確かにここで笑うなんて、可笑しいよね。

でも、そのおかげで少しだけ自信が持てたんだ。

（さっきまでは絶望の淵にいたっていうのに……笑うこともできるんだ、私）

本当にこれでいいのかなという不安はまだあるけど、きっとこの人たちと――御遣い様と一緒にいれば大丈夫だって想いがどんどん強くなっているのが分かる。

「そういうことだ。どうする？」

その言葉に、横にいる詠ちゃんに視線を向けると……

「……」

無言で顔を逸らされてしまう。ようするに、私に任せるってことだ。

――それなら答えは、決まっていた。

「我が名は董卓、真名は月。貴方がたの恩義に報いるべく、決して

裏切らぬ事を誓い、我が身を砕いて働きたく思います。どうか、よろしくお願いします」

「ボクは賈駆、真名は……詠。世話になるわ。それと……月を助けてくれて、ありがと」

「ああ、よろしく頼む。……それとな、月」

「は、はい、何でしょうか」

家族以外の男性から初めて真名を呼ばれたことに少し驚き、そしてどこか温かさと嬉しさも感じながら返事をした私に、御遣い様は私を見ているようで見ていない視線を向けながら口を開いた。

「これから先も色々あるだろうが……『自分の罪』から逃げるんじゃねえぞ」

「……はい」

果たして、その言葉は私だけに向けられていたものだったのか？

少し視線を逸らして御遣い様の背後を見れば、仲間の方々の心痛な眼差しが御遣い様の背中に注がれていることに気付けた。

（苦しんでいるのは私だけじゃない。御遣い様もきっと……）

そう確信した私が考える今後の方針は――私に出来る旅団への力添え、償いの方法探し、そして御遣い様が苦しんでいる時の支えになれるよう努力すること。

「私に出来る事なら何でも言ってくださいね、ご主人様」

「……あ？」

「「「ほう」」」

そういった想いで放った私の言葉が、柔らかくなってきたはずの空気が再び凍りつかせたような気がした。

隣では詠ちゃんが片手で頭を押さえて溜息を吐いている。

「主よ、従順な娘に何を頼もうというのだ？」

「ハセヲ殿、まさかこうなる事を見越していた訳ではありませんよね？」

「ふふふ、風としたことが甘かったようです。ちょっと『おはなし』しましょうか？」

そう言って迫って来る三人から、怯えながら後退する御主人様を、良く分からないけど助けようと前に出ようとした私を……

「アイツの事を想うなら、止めておきなさい、月」

「え、そうなの、詠ちゃん？」

止めるように前に回り込み、その言葉によって思いとどまることにしました。

視線の先では、蛇に睨まれたカエルのように縮こまった御主人様の

姿が。

「本当によく分からない奴らよね、どこまで本気なんだか」

「うん」

詠ちゃんは、斜に構えた態度を崩そうとはしてないけど、私にはよく分かっている。

――――心の底の想いはきっと一緒だって。

「でも、本当に良い人たちだよ」

「……そうね」

最後にぼそっと呟くように声になった言葉は、御主人様の悲鳴によって掻き消されたのか、私にしか聞こえてないみたいだった。

揉みくちゃにされている御主人様の様子を見ていた私たちは、どちらからともなく自然に笑い合い、いつ以来かの心穏やかな時間を過ごしたのでした。

月ｓｉｄｅ　了

「風、これだけは言っておきたかったんだがよ」

「何でしょうか？」

月の問題発言のせいでボロボロになったハセヲ。

そこでようやく溜飲を下げたのか、風も聞く耳を貸してくれるようになったようである。

ちなみに残りの女性陣は退出済みであり、室内にはハセヲと風の二人だけであった。

窓から差し込む光はもう大分弱くなっており、間もなく日も暮れるだろう。

（ん～、やりすぎたことを責められるのと思いましたが、これは違う感じですねー）

風がハセヲの真意を見極めようとする前に、ハセヲは気恥かしさから視線を逸らしながらも、しっかりとした口調で話し始めた。

「さっき話した通り、これから先も色々と大変なことが起こるかもしれねえ。だからよ……これからも俺に力を貸してくれ、風」

「……」

ハセヲのこの言葉に、風は目を見開く。

（本当にこの人は……捻くれてて、乱暴で。でも、一緒にいると楽しくて面白い人ですね）

普段は分かりづらい優しさを言動ににじませる程度だが、たまに――本当に稀にだが、こうして真っすぐな気持ちをぶつけてきてくれることがあるのだ。

だからこそ、風は良い機会だとばかりに口を開いた。

「実は……3日前、お兄さんが倒れた日に夢を見たんです」

「……夢？」

質問の答えとは全く関係ないと思える話を始めた風にハセヲが視線を合わせれば、風は顔をうつむけていた。

その表情は窺えなかったが、それでもハセヲには風の声がいつもより弾んでいるように思えたのだ。

「はい、風が佇んでいるところに白銀に輝く日輪が舞い降り、それを風が両手で掲げるという夢です。何かを象徴しているかのような素晴らしい夢だと思いませんか～？」

「ん……俺にはよく分かんねえな。まあ、悪い夢じゃねえだろ」

「はい、なので夢にあやかり、今日から風は程？と名乗ることにするのですよ～。まあ、お兄さんは今まで通り、風と呼んでください」

「ああ、まあ風がそうしたいってんなら、そうすりゃあいいさ。んで？　さっきの質問の答えはどうなんだ？」

「ふふふ、風はちゃんと答えましたよ」

そう言って上げた風の顔には柔らかな笑顔――――思わずハセヲが口を半開きにするほどの――――が浮かんでいた。

その様子を見てとった風の笑顔が、ニヤニヤという擬音がぴったりな笑みに豹変する。

「っ！？」

慌ててハセヲが我に返るが……遅い。

自分の迂闊さを呪い、どんな口撃（からかい）がとんでくるかハセヲが警戒したところで……

「夕食に行きましょう、お兄さん♪」

「お……おう」

予想に反して、夕食をとろうと言う風に片手をとられ、部屋を後にした。

廊下に出ると不思議と誰もおらず、二人の足音だけが響き渡っている。

そのまま無言で食堂に向かう途中、並んで歩く風が、足を止めずに口を開いた。

「先ほどのお兄さんの顔に免じて教えてあげるとですねー。言われるまでもなく、日輪（おにいさん）を支えるのは風の役目です。ですが、頼られたのは嬉しかったです。これからもよろしくお願いするのですよ～」

「……助かる」

またしても風の柔らかな笑顔に焦りを覚えたハセヲは、何とかその一言だけを返し、前を向いて歩き続けた。

風は、そんなハセヲを支え続けようと強く想い、握った手の力を強めるのだった。

反董卓連合から始まった、百日の旅団の戦いはここに終結した。

碑文（スケィス）の力の消失、星の開眼、月と詠の合流。

ハセヲを取り巻く状況も、大きく動き出している。

しかし――――

さらなる状況の変化が、ハセヲに迫ろうとしていた。

ハセヲｓｉｄｅ

俺が目覚めて二日後の昼下がり、旅団員が逗留する建物の一室に来客者が訪れていた。

出迎えた俺たちと来客者が一堂に会した部屋の空気は――――非常に重い。

……まあ、気にせずに一人は眠りこけてるようだが。

その理由は、正対している人物が放っている存在感によるところもあるが、一番の原因は……

「……春蘭、貴方は隣の部屋で待機していなさい。これでは落ち着いて話もできないわ」

「華琳様っ！　しかし、この者たちは！？」

「姉者、私が付いている。何かあっても、姉者が来るまでは問題ない」

「う、うう……分かった」

そう言って、雰囲気を悪くしていた一番の原因が部屋を出ていったことで、ギスギスしていた居心地が大幅に改善された。

（……ったくよ。あそこまでされるような事したっけか？）

去り際に一睨みしていくことを忘れなかった夏侯惇に関する記憶を思い出し……該当する記憶を見つけられなかった俺は、アレは『そーいう生き物』なんだと納得することにした。

まあ、今のところ実害はねえしな。

心の中で盛大に溜息を吐き、改めて対面の人物に顔を向ける。

「前に来た時は話もできない状態だと聞いたけれど、今は随分と元気そうで何よりだわ、ハセヲ」

「ああ、何とかな。それで？　今度は何が聞きたくて、足を運んでくれたわけだ？」

まただ、と思う。

この来客者――――曹操を目の当たりにすると、なぜか心がざわめくのだ。

（さっさと本題を聞いてお帰り願うか。董卓たちのこともあるしな……）

あれから董卓たちは、その有名過ぎる名を捨て、ただの少女として生きることになった。

今はとりあえず、負傷兵の手当てや世話、その他雑務など裏方の仕事を手伝ってもらっている。

旅団にこれまでいなかった性格の女性ということもあり、団員の中ではとりわけ月の人気は高い。

まあ、余計な手を出そうものなら、いつも月の動向に目を光らせている詠が猛烈な牽制をかけているため、特に問題なさそうではあるが。

「あら、つれないわね。まあ、いいけれど。
洛陽城に現れた黒い檻といい、城を守護していたという謎の人物といい、今回の戦闘では前代未聞の出来事が続発しているの。でも貴方なら……何か知っている。騒ぎの中心にいたという情報は掴んでいるのだから」

「……」

俺の内面を知ってか知らずか、曹操は余裕の態度を崩すことなく、事件の真相を知りたいと言ってきた。

まあ、別に曹操陣営もＡＩＤＡの件に関しては無関係ではないため、話すことは問題ない。

ただ、関係者が筍？だけであるという点で、他の陣営と比べて説明するのに相当骨が折れることは間違いなかった。

（曹操も頭が固いわけじゃねえだろうが、実際に目にしねえと信じられないだろうしな）

どうしたもんかと、俺が頭に右手を添えるように俯いていた時、

「ねえ、さっきから気になっていたのだけれど、その腕輪はどういったものなのかしら？　微かに光を放っているようだけれど「何だってっ！？」……な、何よ！」

「今、この『腕輪が見える』と言ったのか！？」

俺は右腕を曹操に見せつけるようにかざす。

曹操は何をそんなに興奮しているのかという顔で、俺を見つめていた。

（本当に見えてるってのか!?　初めて会った時には見えないと言ってたのに……いや！　それよりも、今の段階で残されてる碑文といいやあ……）

「華琳様、私には見えないのですが、本当に腕輪が見えているのですか？」

「……？　それはどういう「華琳様！　いかがなさいました!?」……春蘭!?」

「……げ」

俺の大声を聞きつけて飛んできたのか、夏侯惇が部屋に飛び込んで来た。

今の状況はといえば、俺が身を乗り出す感じで曹操へとにじり寄っている、という風に見える訳でもあるんだが……

「貴様っ!?　華琳様に何をしようとしている!」

「やっぱり、そうくるか!?」

「ハセヲ！」

ひたすらに単純な思考をしている奴だと再認識したところで――――星が割って入るのが見えたが、反射的に間合いを取ろうと動いた最

中のことだった。

「うおっ！？／きゃあ！？」

とっさに飛びのいた時に、俺の右腕が曹操の左手に当たった瞬間に感じた軽い衝撃。

そして、全身が弛緩してしまったかのように倒れこんでしまった。

（何が起きた？　それと、いま頭の中に流れ込んで来たイメージは……っ！？）

そこで、俺は見た。

――見てしまったのだ。

「華琳様……」

「その大鎌はどこから……？」

「分からないわ。どうなっているの？　説明してもらうわよ」

呆然としていた曹操が、凄むようにして俺を見据えている。

その眼が「洗いざらいを吐け、虚言は許さない」と雄に語っている事は明らかだった。

まあ、当然の話だ。誰だって、いきなり武器が現れたりしたら狼狽するに決まってる。

それにしても――サイズが曹操に合わせてか、一回り小さくなっ

ているが間違いなかった。

「馬鹿な……」

「それは……ハセヲ殿の……」

「どういう事です、お兄さん？」

星たちも驚きを隠せていない。

俺だってそうだ。だが、もう認めるしかなかった。

（……そうかよ、そういう事だったんだな）

ようやく合点がいったという心地の中、俺はその言葉を口にした。

「いま分かった。お前が俺の……鏡だったんだな」

俺の視界の先――曹操が携えていたのは、俺の半身ともいえる大鎌“万死ヲ刻ム影”。

――それが意味するところは一つ。

（この世界での“死の恐怖”の適格者は曹操。これで……全ての適格者が見つかったってわけだ）

洛陽に着いてから目まぐるしく動く状況の中、これからどう動くべきか。

俺は、これで少しは状況を説明しやすくなったかと、無理やりポジ

ティブ思考に身を任すのだった。

ハセヲｓｉｄｅ　了

―――――――

―――――

―――

―

曹操が適格者だと判明してから二日後。

旅団長から重大な発表があると、全団員たちに集合がかけられた。

何事かと団員達の予想が飛び交う中、白く輝く服に身を包んだ少年の姿が見えたことで、団員たちは口を閉ざし、姿勢を正した。

自分たちより遥かに若い少年であっても、彼らは天の御遣いである少年――ハセヲの素っ気ない態度の下に隠された内面を信頼し、誇るべき人物だと思っている。

そんな少年からの重大な発表とは……

誰もが固唾（かたず）をのんで見守る中、旅団長（ハセヲ）の静かでいて決意のこもった声が団員たちの間に響き渡った。

「今日をもって、百日の旅団を解散する！」

## 第２０話（後書き）

色々書きましたが、とりあえず月と詠が今回の話にて、星、風、稟に続く新たなヒロインとなりました。

・・・人選は私の趣味です、はい。

え～、それから多くの方が予想されてたのではと思うのですが、華琳がスケィスの力を引き継ぎます。

もともと華琳は私の作品におけるキーパーソンでした。

後は、敵となるか味方となるかが迷いどころだったんですよね。

ちなみにプロット段階では、ハセヲの反存在的（クビア）ポジションになってもらおうかとも考えていたんですが、それは没に。

ひとまずは、次が第１部エピローグになります。

更新は・・・仕事がヤバいので３月中にとしか言えません（泣）

ああ、本当は２月中で終わらせたかったのに・・・。

おっと、最後にですが、今回で万死ヲ刻ム影を失ってしまったので、今後ハセヲに装備してほしい大鎌があれば教えてください。

特に指定がなければ、こちらで決めさせていただきます。

それでは、また次回の話もよろしくお願いします♪

# エピローグ（前書き）

今回の話で第1部は終了、所属も確定です！

それではどうぞ！

# エピローグ

反董卓を掲げて集った諸侯が、それぞれの目的を大なり小なり達成し、洛陽を去ってから二カ月。

一連の騒動で疲弊しきった後漢王朝に諸侯を抑えつける力は残されておらず、時代は力在る者が生き残る群雄割拠の時代を迎えていた。

その中で、天の御遣いとして大いに名をあげた少年はといえば――

「……ハア、今度は何を手伝わされるんだか。ほんと、人使いが荒え奴だよな」

ここ二カ月ですっかり通い慣れた城の廊下を、ハセヲは見るからに面倒くさそうな顔をして歩いていた。

その足取りは重いものだが、それでも止まることなく前へと踏み出され続けている。

それは何も、立派な勤労意欲からきているものではない。

（あれは本気でシャレになんねえからな。アイツに言わせれば、あれもスキンシップらしいが……）

言う事に従わなかった場合の対応がどうなるか、その身に嫌というほど味わったことを思い出したハセヲは、気持ち歩く速さをあげた。

途中ですれ違う文官や侍女たちが、その様子を見て顔を青ざめさせ、

サッと道を譲ろうとする。

――大人が横に並んで五人は楽に通れそうな廊下の壁際に張り付くように、だ。

ハセヲの不満気な顔や雰囲気に当てられてというには、大げさすぎる反応。

自分に対して、必要以上の恐れを抱いている彼らの様子の理由に心当たりがあるハセヲは、速やかに立ち去る事くらいしかできなかった。

（……今度は何を吹き込んだんだか？　いつも忙しすぎるはずのくせに、こんなことに使う余力があるってのか？）

「アンタを陥れるためなら、どれだけ手間をかけても構わないわっ！」という返事が聞こえた気がしてゲンナリしたハセヲだったが、ここで無理やり意識を切り替える。

遂に目的地に到着したからであった。

「……」

躊躇は一瞬。思い切って開いた扉の一番奥、この国の王が座るために用意された椅子に、その少女は座っていた。

来客の存在に気付き、振り返った少女の特徴的な黄金の髪が美しく揺れる。

小柄な身体から尋常ではない存在感を放つ少女――曹操は、来客

者がハセヲだと気付くと、口の端に笑みを刻んで言葉を紡ぎだした。

「待っていたわ、ハセヲ。もう少し待っていても来ないようであれば、春蘭を迎えに出そうかと考えていたところよ？」

「……迎えを寄こすなら、人選はしっかりするべきだろ。きちんと役割を果たせる奴を、よ」

「おい、ハセヲ！　貴様、私が迎えの一つもできんと言っているのか！？」

絶対に分かって言っている曹操――――華琳の言葉に、無駄だと思いつつも抵抗を試みるハセヲ。

華琳の、鈴を転がすような綺麗な声から繰り出される悪戯めいた言葉に対して、正論をぶつけたハセヲだったが、予想通りに待ったがかかった。

「なら聞くが。話があるから連れて来いと言われたってのに、剣を振り回して俺を追いかけまわし、結局二人揃って遅刻して怒られる羽目になったのは……どこのどいつのせいだったっけか？」

「あれは、さっさと捕まらんかった貴様のせいだろうが！　昏倒させてから連れていけば楽だったものを」

「ふっざけんな！！　アレくらったら昏倒どころか永眠するわっ！？」

「馬鹿か貴様！　華琳様をお待たせする輩など、殺されても文句なかろう！」

「おい！？　今の返事のおかしさに気付いてんのか！　連れてこいっていう命令なのに、殺そうとしてどうする！？　あとな、テメーに馬鹿って言われるのだけは納得いかねえぞ、春蘭！」

火花散る視線をぶつけ合い、主君の前だと言うのに遠慮なくお互いをののしり合う二人を、華琳と秋蘭は興味深げに見守っていた。

――ハセヲたち、元『百日の旅団』の団員たちが曹操陣営に加わってから二カ月。

曹操陣営におけるハセヲたちの扱いは、良く言えば『盟友とその配下』、悪く言えば『使い勝手の良い傭兵集団』といったところだろう。

後漢王朝の衰退から治安の維持を保つのが困難となったことで、増発するようになった盗賊集団の鎮圧などのために、ハセヲたちは力を振るっている。

“天の守護者”といわれていた三人の騎士たちこそいなくなったものの、その強さと結束力はいまだ健在である。

変わらず前線に立ち続けて味方を鼓舞するハセヲに星、的確な戦術と戦略を提示し、勝利へと至る道を万全なものにしてくれる稟と風を擁する天遣隊（てんけん）は、敵から見れば脅威でしかなかった。

しかし、内部（みうち）から見れば……

「もう我慢ならん！　表に出ろ、ハセヲ！！　我が剣によって、その思いあがった態度を正してやろう！」

「ほー、今までのどこに我慢があったんだって聞きてえとこだが……望むところだ！　いい加減、俺も限界だってんだよ！」

「はいはい、そこまでにしておきなさいな。二人の仲が良いのは、よく分かったから、ね」

「どこが（だ／ですか）！」

その反応に華琳は肩をすくめることしかできない。

この二人はいつもこうなのだ。大抵……というか、ほぼ春蘭の何かしらの言い掛かりから、ケンカに発展する。

普段ならばハセヲが煙に巻く形で終わらせるのだが、今日はその気はないようだ。

本人も言っている通り、限界に達したのだろう。

そこまで華琳は考えたところで、聡明な妹の方はこの状況をどう思っているのかと思い、ふと視線をずらしてみると……

「ああ……左目を失ってより沈みがちだった姉者があんなにいきいきと♪」

（まあ、それは私も思っていたことだけれど……）

仕方ないと、姉の元気な姿に感激している秋蘭から視線を二人に戻した華琳は、まさに外へ出ていこうとしている二人の背中に声をか

けた。

「待ちなさい、春蘭。私が話があると言って呼び出したハセヲを、用も終えていないのに連れ出そうとするなんて……イケナイ娘ね」

「も、申し訳ありません、華琳様！　ですが、それも「少し黙っていなさい」……はい」

すぐさま身体を華琳に正対させ、直立不動の姿勢をとった春蘭だったが、声は荒げていないものの、主君の容赦ない一言で発言を禁止され、うなだれてしまった。

その様子を、いいザマだと眺めていたハセヲだったが……

「ハセヲ、貴方の日頃の態度にも問題はあるわ。我が軍に籍をおく者なら、それらしい態度で職務に当たりなさい」

「華琳、それは俺よりも春「稟からもっと説明させるよう頼んであげてもよいのだけれど？」……善処する」

二人が大人しくなった事に満足した華琳は、ようやく目的の話を始めれそうだと内心で溜息を吐く。

ハセヲたちの加入により、助かった部分もあれば、余計な問題が発生してしまった部分もある。

それでも――

（この感じ……悪くはない。必要以上に気を抜かないように注意は必要だけれど……今はまだ……）

覇王と称される少女は、ハセヲによって生み出された新たな雰囲気の中で、自身の内に生まれた感覚に身を委ねてもいいかと感じていた。

当然として、自身が掲げる使命が疎かになるようであれば切り捨てるべき心の贅肉だと分かっていながらも、今はまだ、と。

そう思うに至った原因となった少年を華琳は見つめる。

その顔は、何とか平静を保っているようにも見えるが、口元のひくつきだけは止めきれていない。

その様子を見てとった華琳から苦笑いが零れた。

これまでの噂や、実際に呂布との戦闘を見た事から忘れがちになってしまうが――ハセヲは、武人であって武人ではない。

――強き想いに裏付けられた覚悟とともに、いつからか置き去りにしてきた心の持ち主なのだから。

（さあ、ハセヲ。貴方は私に何をもたらす？　勝利？　希望？　敗北？　絶望？
何だっていいわ。全てを呑み込み、その果てに私は……望む全てを手に入れてみせる！）

内心で決めた想いを胸に、華琳は「それで本題だけれど……」と話を続けだした。

このとき、華琳が思い描いた望む全ての中に、ハセヲという存在がどのように関わっていくのか。

それが分かるのは……もう少し先のお話。

# エピローグ（後書き）

この通り、魏ルートでいくことに決定しました。

ルート選択にあたっては、以前に読者の方々から大変参考になる御意見をいただきました。本当にありがとうございます！

今のハセヲを取り巻く状況、人間関係、終了に向けての流れで総合的に考え、選んだのが『魏ルート』でした。

納得のいかない方もいらっしゃるかもしれませんが、ご容赦ください。

そのかわり、いくら時間がかかっても完結だけはさせます！

それから・・・この話だけ読んでもどうなったのか分からない部分

・碑文の力を失ったハセヲの状況について
・三蒼騎士について
・華琳に対して感じていた感情について
・桃香や雪蓮たちについて
・解散宣言後の流れについて

などは、後日に状況報告の話を更新した時に、簡単にですが触れたいと思います！

最後になりますが、今後は拠点話を書こうと思っていまして・・・誰の話を読んでみたいかアンケートに協力いただけると助かります。

基本、ヒロインである星、稟、風、月、詠の話は書こうと思ってい

ますが、それ以外の魏メンバーに関しては、極端に出番が少なくなることも（汗）

なので、よろしければ御一人様につき二票まで、好きな魏メンバー（稟、風を除く）に投票してください。
（一人に二票入れるのもＯＫ）

期限は三月中にしたいと思います。

それでは～♪

## 第1部終了時点での状況報告（前書き）

簡単ではありますが、エピローグで触れなかった内容も書いています。

最後には第二部の予告のようなものも。

それと、アンケートにご協力いただいた方々に感謝いたします！

それでは、どうぞ！

## 第1部終了時点での状況報告

第一部終了時点でのハセヲを取り巻く状況について

反董卓連合終了後、曹操と共に戦うことを決意したハセヲは、百日の旅団を解散する。

それを受けて一部の団員は故郷へと帰って行ったが、大部分の団員たちはハセヲと共に戦い続けることを選んだ。

元々この解散の意図は、激化する戦いを見据えて団員達の身を案じたものだったが、多くの団員からの温かい言葉を受けたハセヲの照れた姿は、中々のものだったとか。

さらに解散を受けて、天の守護者として尽力してきた三蒼騎士たちは、劉備陣営にカイト、孫策陣営にバルムンク、オルカが降っていった。

星のように不慮の事態で開眼した時、暴走を抑える役を負ってのことである。

この指示は一時的なものではなく、黄昏の腕輪から三蒼騎士の命令権限を完全に劉備と孫策に譲渡してしまったため、今後もハセヲの元に戻ってくることはない。

劉備は結局、ハセヲと共に往けない事を最後まで残念がっていたが、それでもハセヲにとって「頼れる人」になるべく成長していくこと

を約束し、別れた。

孫策も残念がってはいたが、何を思ったか余裕のある態度を取り戻し、また会える日を楽しみにしているわと零し、ハセヲと別れる。

その心は「ようするに、私がハセヲに勝って降らせればいいわけよね♪」というわけらしい。

そうして、ついにハセヲたちは曹操陣営に加わることとなる。

“死の恐怖”の適格者である曹操が重要な立場である事も大きいが、それ以上にハセヲにとって何とかしてやりたいと思える理由があったからである。

その理由とは・・・

ハセヲの日記より一部抜粋

○月△日

曹操が“死の恐怖”の適格者だと分かった。正直なところ、複雑ではある。

それでも、もう結果は変えられねえんだから、折り合いをつけて今後のことを考えていく必要がある。

これで、全ての碑文使いは見つかったんだから、あとは星以外の適格者を開眼させること。

だが、開眼するためには精神的ショックを受ける必要があるうえに、下手すりゃ暴走の危険だってある。

曹操も孫策も桃香も、もうすぐ本拠地に帰っていくわけだから、いざという時のための保険も兼ねて護衛が必要になるな。

これは・・・アイツらに頼めねえか、明日にでも相談してみるとする。

そして、俺たちはどうするべきか・・・。

まあ、分かってんだ。俺がどうしたいかってことはよ。また俺の我がままにアイツらを付きあわせることになっちまうのが心苦しいが。

あの時――万死ヲ刻ム影が曹操の手に渡った時、奴の記憶?のようなものが俺の中に流れ込んできた。

その中で、アイツは自分に自信を持ち、自分にも他人にも厳しく接しながらも、慕ってくれる仲間を大切にしていた。

なのに・・・奴の心は孤独を感じていたんだ。

なのに、それを訴えようともしねえ。

笑顔を見せながら仲間に接していても、本当の心の奥底には誰も寄せつけようとしてねえ。

その理由が何なのか分からねえし、仮に知ったとしても理解したくもねえが・・・その事実は気に食わなかった。

前から、気になってはいた。曹操を見ると感じる不快感めいた想い。

今になって思えば、その正体は碑文の力を失うことへの本能的な警戒心もあったんだろうが、それ以上に昔の俺に似たコイツを見るのが嫌だったからかもしれねえ。

まあ、曹操は俺とは違って他人からの力を受けいれてはいるが、結局心の奥底では何らかの線引きをして、自分に寄せつけようとはしてない。

自分だけで何とかしてみせるなんて、傲慢な想いを抱いてるわけじゃねえが、最後にコイツはどうなっちまうんだろうとは思う。

俺の時は、馬鹿みたいなお人好したちのおかげで何とかなった。

でも、曹操の配下たちに同じことが・・・できねえよな。少なくとも、そのためには曹操と同じ立場で話せる奴じゃねえと。

あー、つまり可能性があるとしたら俺なんだろうよ。

この時代の考えや変な枠に囚われずに、ズカズカ曹操の懐に飛び込んでいけるのはよ。

あの曹操相手にどうやってだとか、そこまでしてやる義理があんのかと思うことは多々あるが・・・きっと俺を導いてくれたアイツらはそんな事は考えてなかっただろうし、な。

ああ、やってやるさ。

適格者全員を無事に開眼させ、ＡＩＤＡによるこの世界の歪みを浄

化する！

あの二人組の企みはブッ潰す！

んで、曹操の心の問題も解決してみせる！

そして、必ずオーヴァンを取り戻してやる！

そうと決まれば、明日は星たちとこの内容について話し合うことにしよう。

・・・ということらしい。

だが、ハセヲはいつの日か天の世界に帰ることを理由に、曹操に忠誠を誓えないと断言。

そしてＡＩＤＡの脅威を取り除き、大陸に平穏が訪れるまでは帰るつもりはないとハセヲは続ける。

この発言に、春蘭や桂花は露骨に態度を悪くしたが、出来る限りの力を尽くすと言うハセヲの言葉、さらに華琳の一声に引き下がるしかなかった。

そこで真名を許し合い、『天遣隊』として正式に曹操陣営に加わったハセヲたちであった。

第1部終了時のハセヲの状況

碑文（スケィス）の力を失ったことにより、データドレインは現在使用不可。

三蒼騎士もいなくなり、弱体化が目立つが、それでも呂布を除けば最強クラスの実力者。

スケィスの力の代わりには・・・蒼炎の力を借りようかとw

そして、武獣覚醒、魔導覚醒、神威覚醒は使用可。憑神覚醒は使用不可。

とにかく今後も大暴れしてもらいます。

加えて、華琳に盗られた？大鎌“万死ヲ刻ム影”に代わって、“死出鎌・観音掌”を今後は使ってもらう事にします。
（記念話で欅が来訪しているので、その時にもらったという設定でお願いします！）

ただし、全力を振るう相手（呂布や関羽など）に対しては、以前竜王様からいただいた“黄昏の鎌器――ラグナロク”を使わせてもらおうと思ってます。

加入時点でのハセヲと魏メンバーの関係一覧

華琳
自分からスカウトしただけあって興味はもっているが『そこ止まり』
今後どうなるかは、ハセヲ次第。
といっても、ハセヲの存在が華琳にとって得難いものであるという
自覚はあります。呼び名はハセヲ。

春蘭
心から認めれない人物だと、いつもケンカをふっかけているが、秋
蘭に言わせれば甘えているようなものでもあるらしい。
本当に興味がなければ、そもそも相手にしないんだとか。だからと
言って、ハセヲにとっては苦行でしかない。
私の作品内においては、いつも怒ってばかりですが・・・別に嫌い
なわけではないです。
むしろ、ハセヲとどう絡ませるか、一番楽しみな人物なほどで♪
呼び名はハセヲ。

秋蘭
沈みがちだった姉の元気を取り戻してくれた人物として、ハセヲに
は比較的好意を向けている。ただ華琳第一主義でもあることから、
それを素直には表せない苦労人。
きっと、心を許せれば一番ハセヲと気が合う人。呼び名はハセヲ。

桂花
原作とは違い、稟と風がハセヲに仕えているため、仕事に忙殺され
ている。（もちろん稟や風も多少は手伝っているが）
それでも、ハセヲに対するデマを広げるあたり、その執念は見事と

しか言えない。
ちなみに、うちの桂花がデレる日は・・・来るのだろうか？　呼び名は・・・一杯。

季衣
ハセヲを兄ちゃんと呼び、慕っている。ハセヲが魏軍で心許せる数少ない人物。
よく一緒に食事に出かけているのは、一刀くんと同じ。

流琉
ハセヲを兄様と呼び、慕っている。ハセヲが魏軍で最も敬っている人物。
やはり、台所を制する者は強い。
ハセヲも簡単な調理はできるため、たまに一緒に厨房に立っている。

凪
天遣隊の監視兼育成を狙って、華琳からハセヲの隊に加わった人物。
ハセヲと立場は同格だが、ハセヲのことを頼れる上司として見ており、一刀くんと同様な態度で接している。呼び名はハセヲ殿。

沙和
天遣隊の監視兼育成を狙って、華琳からハセヲの隊に加わった人物。
一刀くんには効果抜群だったおねだり攻撃も、星たちに鍛えられたハセヲには通じない。
だが、厳しくも鬼ではないハセヲのことを信頼してはいる。呼び名はハセヲくん。

真桜
天遣隊の監視兼育成を狙って、華琳からハセヲの隊に加わった人物。発明家としての血が騒ぎ、デス☆ランディと結託して色々暗躍しているもよう。
呼び名はハセヲ。

霞
元董卓軍の将。ハセヲたちの加入と共に、無事な月と詠の姿を見て驚愕。
事の経緯を聞き、ハセヲに感謝の意を伝え、何かと絡むようになった。ハセヲにとっては、少し元気すぎるも、気の置けない仲間となっている。呼び名はハセヲ。

天和
人気アイドルの長女。ハセヲは世話役を引き受けてはいるが、ほとんどはデス☆ランディ任せにしている。
その理由は、何だか気付いたら相手のペースに乗せられているという恐怖めいた感情からくるものだとか。呼び名はハセヲ。

地和
人気アイドルの次女。小悪魔然とした態度でハセヲを翻弄（ほんろう）する。
ハセヲが世話をやくうえで、最も苦労している人物。呼び名はハセヲ。

人和
人気アイドルの三女。姉たちは覚えていないみたいだが、自分たちを苦しめたハセヲに対し、苦手意識を抱いている。
ハセヲから見れば、最も落ち着いている人物だが、自分のことを警戒している風にも感じられることを気にしてはいる。呼び名はハセヲさん。

第二部　『君願フ道』編　ダイジェスト

譲れぬ想いを胸に、開眼していく適格者たち。

「私は、諦めない！　必ず貴女を取り戻すために、ここに戻って来る！」

「我が主君の邪魔をする者は、どんな手段を用いても封殺してみせます！」

「私は私だ！　この身がその誇りを捨てはしない限り、私はいつだって私でいられる！」

「来たれ再誕！」

「あああぁぁああああっ！！　私を殺す者たちにぃぃ、死の報いをオオオォォーーー！！」

「死なせはしない！　貴女を死なせはしないわ！」

「私は・・・お荷物なんかじゃないんだからあああぁぁぁーーー！！」

その前に立ち塞がる者たち

「さあ、開幕を告げる雷(かね)を鳴らしましょう」

「この世界を、潰す！　それは決定事項だ！」

そしてハセヲに突き付けられる事実

「～～～～っざけんなあああぁぁぁ！　こんなのねえよ！　こんな・・・救えねえ未来！」

――半年後より、更新予定

## 第1部終了時点での状況報告（後書き）

以前申し上げた通り、ひとまず第一部終了をもって私用により、執筆活動を半年間ほど休止させていただきます。

次回の本編更新は、私にとってちょうど活動一年目になる9月30日にしたいと考えています。

その間で、しっかりとネタを集め、よりよい作品を投稿できるよう、努力したいと思います。

・・・それでも、フラッと本編以外を投稿するかもしれませんが（たとえば、本編では使用予定のないＢｓｔ－ｆｏｒｍを使った話とか・・・興味ありますか？）

それでは、またの更新をお楽しみに♪

## 番外編　～神と人と獣～　『起』編（前書き）

これは本編の番外編です。

もしハセヲが魏ではなく、呉に行っていたら起こったかもしれない物語。

それではどうぞ！

## 番外編　～神と人と獣～　『起』編

――その笑顔を覚えている。

「私はね、江東（ここ）に住む人たちが大好きなの」

――その決意を覚えている。

「だから、彼らが安心して暮らせるように、必ず天下を取ってみせるわ！」

――その約束を覚えている。

「ふふっ、貴方にも見せてあげる。
約束するわ。今の私に見えている……素敵な世界を、ね」

そう言って胸を張る彼女の姿に魅入った少年は、心に決めたのだ。

自分の目的のためだけでなく、自分の都合に巻き込んでしまったことへの負い目でもなく。

純粋に彼女が見ている世界を、自分も見てみたいという想いに従って。

――彼女の言う素敵な世界づくりを手伝おう、と。

「あ、あああああっっ！」

城からほど近い森の外れ。小川を流れる水のせせらぎの音に、少年の悲痛な叫びが混じる。

叫びをあげる少年の腕の中には、胸に矢を受け、グッタリとした女性の姿があった。

素人目にも解る。
この傷は致命傷だと。

傷口からは恐ろしいほどに血が流れ出し、この国の王である女性――雪蓮の顔から血の気がひいていく。

いつも快活である雪蓮が放つ存在感が、どんどん失われていく。

「大丈夫だ！　絶対にっ、絶対に助けてやるっ！　だからしばらく我慢してろ！」

そう叫んで雪蓮を力強く抱き上げたのは、天の御遣いにして孫家の盟友であるハセヲ。

その顔には、鬼気迫るほどの悲壮感が溢れていた。

（まだまだコイツにはやってもらわなきゃならねえことがある！こんなところで死なせてたまるか！？）

ハセヲは雪蓮から誘いを受け、袁術戦の戦勝報告を兼ねた彼女の母親の墓参りに訪れていた。

そして目的を果たし、帰路につこうとした時に惨劇が起きてしまったのである。

「とにかく、まずは城へ「ダメだよ……」……何？」

なるべく雪蓮の身体を揺らさないように駆け出そうとしたハセヲを止めた声。

それは、普段では考えられないほどに弱々しい声をした雪蓮だった。

「ハセヲだって……分かって、るんでしょ？　私はもう……ダメだって」

「～～～～っ！？」

「そんなことはない」と即座に言い返そうとしたハセヲだったが、傷口を抑えたハセヲの手から溢れる血の温かさが――彼女が生きている証が失われていくという事実を、容赦なく叩きつけてくる。

焦点さえおぼつかなくなったのか、雪蓮の澄んだ蒼い瞳はハセヲを見据えてはいなかった。

「それがどうした！　簡単に諦めんじゃねえよ！！」

「……」

「この国にはお前を必要としてる奴らがたくさんいる！　蓮華や小蓮、冥琳たちや街のみんな。それに……俺だって！！」

「泣いてくれるんだ、ハセヲ。私のために……」

「どうしてそこで笑えんだよ……？」

気がつけばハセヲは涙を流していた。

涙は頬を伝って雪蓮に落ちていたらしく、目が見えてなくとも気づけたようである。

その顔に微かな笑みが浮かんでいたことを不思議に思ったハセヲの疑問に、雪蓮は本当に嬉しそうに話しだす。

「だって……今まで私が何しても慌てて逃げるか、素気ない態度しかみせなかったのに。今は心から私の身を案じてくれてるでしょう。気になってる男にこんな態度を見せられて……喜ばない女がいるわけないわ」

「はっ！　だったら明日からはもっと親身になってやるさ。だから……がんばってくれよ……」

「そっか……」

ハセヲの懇願めいた言葉に対して、本当に悔しそうな苦笑いを浮かべる雪蓮。

お互いに分かっている。もうじき、こんなやり取りもできなくなることを。

――雪蓮は、いつもハセヲを振り回していた。

何だかんだ言って結局付き合うことになるハセヲ。共に闘うことになって数カ月しか経っていないのだが、冥琳や稟に怒られた回数は数え切れない。

そのたびにもうこりごりだと思うハセヲなのだが、最終的に仕方ないという結論に至ってしまうのだ。

雪蓮の表情、姿、仕草、声、態度。

口には出してやらないが、雪蓮という人物を構成するファクターの一つ一つが内包する魅力を前にすれば、瑣末事（さまつごと）だという想いもある。

だが、一番の要因は……

（どんなに失敗しても……道に迷っても……アイツの笑顔が俺を導いてくれる。そんな気がしたんだ）

自信と力強さが同居した笑顔。

この世界でハセヲが見つけた、新しい絆。

ハセヲのみならず、多くの人々の心を支える笑顔が失われようとしている。

――何のせいで？

「ハセヲ、聞いて……」

「っ！？」

知らず、奥歯をかみ砕きそうな勢いで噛みしめていたハセヲは、雪蓮の呟きのような声で立ち直った。

そのまま、おそらく最期になるだろう雪蓮の言葉を聞き逃さないよう耳を傾ける。

「私は後悔してないわ。孫呉の悲願こそ蓮華たちに託すことになるけれど……母様のものだった地を取り戻すことはできた。孫呉の王として、最低限の務めは果たせたはずよ」

「……」

ハセヲは思うところが多々あったが、雪蓮の言葉を遮るわけにはいかないと、黙って続きを促す。

それを知ってか知らずか、雪蓮の身体から僅かに力が抜けた。

「この国はこれからどんどん大きくなる。でもそれには冥琳たちだけの力だけじゃなく、貴方たちの力が必要になるわ」

「……」

「蓮華や小蓮、明命、亞莎たち……若い子たちと力を合わせてがんばってほしいの」

「……」

「私の天命はここまで。後は蓮華に任せるわ。どうか私たちの悲願を「雪蓮！」……ハセヲ」

「お前言ったじゃねーか！　お前が見ている世界を俺に見せてやるって！　なのにっ！？」

こんな事を言っても雪蓮を困らせるだけ。
そう分かっていたはずだったが、我慢の限界だった。

もう雪蓮は助からない。

”また”ハセヲの腕の中で大切な仲間が消えていこうとしている。

しかも、今回はいつか目を覚ますかもしれないという希望のない、永遠の眠りへと、だ。

過去のトラウマを刺激されたハセヲは、聞き分けのきかない子どものようにまくしたてる。

かろうじて残っている冷静な部分で、今の自分の様子を見たら雪蓮を失望させてしまうという思いに囚われながら。

そこで、ふと見た雪蓮が浮かべていたのは……

「そうだったよね……ごめん、ハセヲ。私との約束は守れないけど……いつかその世界を見ることは絶対できるよ」

少しだけ困った顔を見せながらも、普段通りの笑顔を見せようと頑張っている雪蓮の姿があった。

「何でお前がっ、謝るんだよ……。それにその絶対ってのは何でだ？　またお得意のカンってやつか？」

雪蓮が必死で浮かべている笑顔に応えようと、ハセヲも無理やり普段の表情を浮かべようとする。

たとえ、雪蓮には見えてなかったとしても、そうせずにはいられなかったのだ。

「そーいうこと♪　ふふっ、私のこと良く分かってきたじゃない。あ～あ、やっぱりもっと勝負に出ておくべきだったわね」

「……何のことだ？」

「……後悔はしてないけど、満足はして……ないってこと、よ。もっと……貴方と……やってみたいことが……あったなあって」

「おいっ！？　雪蓮！？」

だんだんと声が小さくなっていく、雪蓮の身体をハセヲは強く抱きしめる。それで分かった。

――もう雪蓮の身体が冷たくなりつつあることを、雪蓮の命が尽きようとしていることを。

「ねえ、ハセヲ……気づいてた？　私、貴方のこと……」

「！？」

それで終わり。

雪蓮の最期の言葉は途中で途切れ、全身の力が一気に抜け落ちた。

「嘘、だろ……」

もう二度と雪蓮と話すことはできない。もう二度と雪蓮と触れ合うこともできない。

「なあ……嘘、だよな」

もう二度と――――あの笑顔を見ることはできない。

「しぇれえええええぇぇぇぇーーーーーーんっ！！！」

森の中にハセヲの慟哭の声が響く。

その声に応える者は誰もいない。これが現実なのだと、思い知らせるかのように。

「くそっ、くそおっ！　ちっきしょうがあああぁぁーーー！！」

動かなくなった雪蓮の身体を抱きしめる。どうしようもない感情が、はけ口を求めて口からもれた。

失った日常を取り戻すべく訪れたこの世界で見つけた、心地よい場所。

星、稟、風、月、詠、元旅団の団員達といった心強い仲間に囲まれながら、雪蓮のもとで戦った日々。

それはほんの数カ月の間でしかなかったが、それでもハセヲにとって満ち足りたものだったと言える。

星と雪蓮の酒飲みに付き合わされたり。

稟に雪蓮と一緒に怒られたり。

風の昼寝に雪蓮と一緒に付き合ったり。

月と同じ格好をしてみたいと、雪蓮に自分に合わせた衣装を用意しろとせがまれたり。

詠のアノ日に雪蓮が挑戦しようした結果、巻き込まれてケガをしたり。

思い返せば酷い目にあっていることが多かったが、それでも「悪くない」と胸を張って言える、そんな記憶（おもいで）。

（俺は……弱いっ！　強くなったつもりだった。だが結局、護りたい女一人護れねえ！）

どこまでも沈んでいく気分の中で、ハセヲは自身の不甲斐なさを嘆く。

何を勘違いしていたのだろう。自分は、志乃を失ったあの事件から、成長したと思っていた。

ところがどうだ、結局は繰り返してしまっている。

護りたい存在は、ハセヲの腕の中で息絶え、その心には志乃の時ほどとはいかないものの、復讐を願う暗い情念が芽生えている。

『復讐は何も生み出さない不毛な行為である』と、平和を訴える良識ある人物は言うだろう。

かくいうハセヲも、そうは思っている。

志乃を未帰還者にした存在を追い求め、復讐のためだけに生きていた間でさえ、有意義なことをしているとは思ったことはない。

ただ――他にすることがなかっただけ。言い換えれば、それ以外にすることを”考えつけれなかった”だけなのだ。

だから、必死に強さを求めた。

他のことを切り捨て、たった一人の存在を取り戻す――そのためだけに。

しかし――

「分かってるさ！　そんな暇はねえよな、雪蓮。お前から託された願いを叶えるためには……前を見ねえとよ。復讐に囚われて、歩みを止めるわけにはいかねえ。ああ、それでもな……」

ハセヲはいったん言葉を切り、雪蓮の顔を見る。

その表情は、激痛にさらされていたのだろう、汗で前髪が額に張り付いてはいたが、驚くほど安らかなものだ。

その様子に、何とも言えないような衝動が胸に込みあがるのを意識しながら、ハセヲは再び口を開く。

「今日一日くらいは勘弁してくれよ、雪蓮。明日からはいつもの俺に戻る。だが今日だけは……」

雪蓮の亡骸に誓約をたて、そう言って言葉を切ったハセヲは、自分の心の中に、ささくれ立った感情――懐かしい感情が大きく膨れ上がっていくのを……認めた。

とたんに口元に浮かぶ、不敵な笑み。しかし、その眼に込められたのは憎悪と狂気。

普段の不器用な性格は息を潜め、”死の恐怖”と、無敵のＰＫと噂された彼が戻ってくる。

「くっ……くっくっく……」

思わずこぼれた笑い声。それは、ヒトとして外れたモノだけが放つ”狂笑”というものに相応しいものだった。

「せめて……お前を殺した奴だけは「それだけでは意味がありませんよ？」……っつ、誰だ！？」

「私のことなどどうでもいいでしょう、貴方は？　それよりも重要な話があるんですよ。
この地に、北方から軍勢が向かっています」

「な……に？　北っていうと曹操か！？」

周囲を見回し、どこからか聞こえてくる声の主を探そうとするハセヲだが、それらしい姿は見当たらない。

どこかで聞いたような声だったのだが、聞き捨てられない言葉に反応したハセヲは思わず思考を止めて声をあげる。

その声に、謎の人物は「その通りです、よくできましたね」と、人を小馬鹿にするような返事を返してきた。

（コイツの言うことが本当って保証はねーが、一瞬だけ見えた犯人たちが着てた鎧は……曹操軍のものだった気はするな）

胡散臭げな奴の話に付き合う暇はないと思っていたハセヲだったが、気が変わって話だけは聞いてみることにする。

抱きかかえていた雪蓮を優しく手近な木にもたれさせ、神経を張り詰めさせていく。

もしこれが本当に曹操の仕業だというなら――ただではすまさないという気持ちをこめて。

「おい、どこのどいつだか知らねえが……テメーの目的は何だ？俺に何の用があって近づいてきた？」

「私の目的と貴方の願いが一致しそうなので、声をかけることにしたんです。どうですか、力が欲しくありませんか？」

「あ？」

「このままでは孫策が愛した土地も、仲間も、民も全てが曹操軍によって支配されてしまうでしょう。いまだに袁術戦での消耗が回復しておらず、軍備に余裕のない今の孫家軍では……曹操軍には勝てない。違いますか？」

「……」

「加えて主を失った兵たちは、たとえ仇を討つべく死力を尽くして戦ったとしても……被害は甚大なものになるはずです。それでは、孫家軍に未来（さき）はない」

「だから俺に力を貸すってか？　そんなことしてお前に何の得がある？　曹操に恨みでもあんのか？」

「それは秘密です。で、どうです？　力を求めますか？」

聞いたのは間違いだったとハセヲは後悔していた。

聞きたくもない指摘を受け、挙句の果てには力を貸すと言う。そんな謎の人物の問いにハセヲは……

「余計な御世話だ。胸糞ワリいテメーの力なんざ借りなくても、この国は俺が護ってみせる！　雪蓮の想いは途切れさせやしねえ！！」

考えるまでもなく切り捨てた。

というか、相変わらず正体の知れない奴も本気で力を貸そうという

気はないはずだと、ハセヲは感じていた。

人をくった態度をとり続けるコイツが、真面目に話し合うつもりがあるわけなかったからだ。

「だからテメーもさっさと消えろ。さもなけりゃ……ここで潰す！」

にもかかわらず、このような態度をとり続ける意味は……

「やれやれ、それでは仕方がありません。ならば……」

「っ！？」

その言葉と共に突如現れた黒い本。そのページがゆっくりと開かれた。

中には何も描かれてはいない。その代わり、この世の底に通じていると思えるほどの深淵が顔をのぞかせ、”ナニカ”が溢れ出ようとしている。

「スマートな方法ではありませんが、手段を選んでもいられませんので、ご容赦ください」

全然すまなさそうには聞こえない声に意識を割く余裕もなく、かつてない危機感がハセヲの身体を動かそうとしたが……

「雪蓮！？　テメー最初っから、ぐっ！？」

雪蓮を狙っていた”ナニカ”の射線に割って入ったハセヲの身体に、黒い帯が突き刺さった！

「ぐっ、があっ……う、うう……」

そのまま黒い”ナニカ”はハセヲの体内に馴染むように溶けていく。

すぐさま立っていられなくなったハセヲは四つん這いになって、必死に心を保とうとする。

激烈な勢いでハセヲの心を呑みこもうとする衝動――破壊衝動の前に。

――ナンノセイデ、シェレンハシンダ？

（俺がっ、油断してたせいだ！）

――ホントウニ？

（他に何があるってんだよ！？）

――ワカッテルクセニ。

（――っ！？）

ハセヲの胸を駆け巡る衝動は、無意識にハセヲが思いながらも、意識下には出そうとしなかった想いを暴きだす。

「ぐうううう……ｇｕｕａａａぁぁあああーーー！」

苦痛に耐えるようにハセヲから漏れ出ていた声に、獣染みた声が混じりだす。

四肢は震え、身体全体から紅い光がこぼれ出していた。

（雪蓮を……殺した！　曹操（やつ）らのせいで、雪蓮はっ！？）

ハセヲの胸の内にある怒りが、明確に定められた曹操軍（てき）へと向けられ、集束していく。

――その瞬間だった。

ズオッッ！！

「ＧｕｕｕｕｒｒｕＯＯＯＯＯＯ――――――っ！！」

これまでの苦痛に耐える声ではなく、溜めこんだものを解放したかのような咆哮と共にあがった、天を衝く光の柱。

その光を払って現れたのは、一匹の”獣”だった。

３ｒｄフォームをさらに禍々しくしたかのような突起物に全身を覆われた、どす黒い鎧を纏っている。

手足の先には鋭い鉤爪が光っており、獰猛な肉食恐竜のソレを彷彿とさせた。

さらに、背後には三本の尾が、それぞれが意思をもっているかのように、別々の動きをしていた。

すると、ここで今まで下を向いていた獣が顔をあげる。

その顔には理性の欠片も見当たらない。

異常なほどに見開かれた眼は紅く染まり、憎悪を超えた、妄執とも呼べる負の感情に囚われている。

これほどの悪意に身を染めた存在が、正気を保っていられるわけもなく。

今のハセヲは、ただただ一つの意志に支配された存在だということが解る。

すなわち――殺戮するモノ。

黙示録に名をつらねる獣が顕現した姿――Ｂ－ｓｔフォーム。

「ｇｒｕｕｕ……」

ここで獣は辺りを見回すと、何かを感じ取ったのか、四肢に力を込めて走り出す。

その様子は、俊敏な獣同然の四足歩行状態だ。

人間の骨格上、不可能なはずの動きと跳躍力、速度をもって、獣の姿が森に消えた。

「ふふふ。さあ、思いのままに力を振るうのです。そして、その先に待ち受ける絶望を甘受するといい」

この結果に満足したのか、その声を残して謎の声の主も消え去る。

コレならば、確実に自分の目的を達成できるという確信をもって。

――ここに、最凶の獣が産声をあげたのだった。

## 番外編　～神と人と獣～　『起』編（後書き）

次は中編になるのか、後編になるのか？

これは以前に感想をいただいた時に浮かんだ話でして。

次回はいろいろヤンチャをしようかなと考えています。

いつになるかは分かりませんが・・・よろしければ次も見てやってください！

## 番外編　～神と人と獣～　『承』編（前書き）

みなさん、こんにちは！
人事が決定し、四月からバリバリ頑張ろうと燃えているフォウルです！
異動もなく、労働条件も向上し、言うことはありません。

あとは、夏の試験さえ突破できれば・・・

それはさておき今回の話では、以前にいただいた贈り物を使用しています。

その件と、今のハセヲに関しての簡単な補足説明などを、アンケートの経過報告も兼ねて活動報告にあげていますので、良ければ目を通してみてください。

それではどうぞ！

# 番外編　～神と人と獣～　『承』編

乾いた風が吹きすさぶ荒野。

視界の開けたその場所を、かなりの速度を出しながらも一糸乱れぬ陣形で駆け抜ける数百の騎馬隊がいた。

彼らは、自らを覇王と称し、実際にそれだけの才覚をもつ曹操が誇る騎乗兵のエリートたちだ。

彼らは主命に従って、その機動力と突破力をいかんなく発揮し、これまでにも多くの戦功をあげてきた。

そこへある人物が加わったことで、その強さは更なる高みへと至る。

その人物こそが、騎馬隊の先頭を行く――

「ん～、さすがに全部は潰せんかったけど、華琳が望んどるぶんの仕事はこなせたやろ！　そろそろ引き上げるで！」

豊かな胸をサラシで覆い、その上に羽織を纏うという大胆な服装をした女性――張文遠。

厳しい指導の中にも、兵たちの心の機微を察した配慮のできる好人物として、曹操軍に加わって日が浅いにもかかわらず、多くの信頼を寄せられている女性だ。

また、”神速”の二つ名を冠することで有名な彼女は、カラカラと満足げに言ってのけると、本陣に引き返す旨を知らせる。

曹魏が侵攻してきたことを伝えようとする守備隊を補殺するべく、遊軍を率いて孫呉のかなり奥深くまで突き進んでしまったのだ。

今の状況で孫家軍に襲われれば、いかに張文遠――霞といえど、勝ち目はない。

それでも霞をはじめ、騎馬隊の面々の顔に焦りはない。

孫呉に、自分たちの速度についてこれる者など存在しないと――――驕(おご)りでも何でもなく、揺るがない事実として確信しているからである。

それだけの自負をもつに足る訓練を行い、結果を残してきた彼女たちだからこその判断だった。

そして、それは間違いではない――――いや、”間違いではなかった”はずだった。

「――――っ！？」

最初に気づいたのは霞。数秒遅れて他の兵たちも気付きだす。

自分たちに向けられる凶悪なまでの殺意、そして――――何かを叩くような音に。

何かが来る、自分たちの命を脅かす”ナニカ”が。

「なんや、このむき出しの殺気の塊は！？　一体どこから……？」

とっさに停止命令を出し、霞は周囲を見回すが、それらしい敵の姿は見あたらない。

そもそも、ここは何の遮蔽物もない荒野なのだ。

何がいようとも、見つけれないわけがなかった。

しかし――――依然として殺気は健在であり、馬たちも怯えている。

（嫌な予感がしよる。はよ戻らん……と！？）

気づけたのは偶然だった。

なんとなしに顔をあげた霞の視線の先に生じた、”何もないはずの空間に入った亀裂”。

途端、これまで全身にまとわりつくように感じられていた殺気が、凄まじい密度をもって突如上空――――亀裂が入った部分に湧いた。

戦慄が全身を駆け抜ける。

「散れえええええぇぇぇーーー！」

ドンっ！！！

先頭を行く霞は愕然と空を仰ぎ、そう叫ぶことしかできなかった。

兵たちも日ごろの訓練のたまものだろう、霞の命令に考える間もなく反射的に従い、左右に散る。

その瞬間だった。
シャレにならない力が上空の一点に集い、亀裂を突き破って黒い獣が現出。
そのまま直前まで霞がいた空間に、落下の力も加えた渾身の一撃を振りおろした！
ズズンッ！！
重々しく響いた轟音に相応しく、地面に激しい陥没が刻まれる。
さらにその凄まじい力によって生まれた断層により、周囲の大地が隆起し、粉塵が舞う。
その一撃に巻き込まれた――隊の中央部にいたため分散するのに遅れてしまった何人かが落馬したところへ、獣は剣のように鋭く伸びる尾を一閃した！
直後、ゴトッと鈍い音をたてて、三つの首が大地に転がる。
瞬きをする間もなく、三人の命が失われたのだ。
それでいてなお――確実に息の根を止めたというのに、獣はまだ物足りないのか、執拗に死体を凶悪なまでにそり返った爪で引き裂いた。
十秒にも満たない時間で、もはや何の肉かも判断できないほどに細切れにした獣は、未だにとどまることを知らない殺気を全力で退避しようとしている霞たちに向ける。

（冗談やないわっ！　いつから呉はあんな化けモンを領内で放し飼いしとんねん！）

アレは人間が御せるような存在ではない。ただただ、目の前にあるモノを殲滅するだけの化身だ。

アレを前にした今、本気になった恋が子犬のように見えると、大げさではなく霞は思った。

そんな悪い冗談としか思えない事態に、霞は夢なら覚めてくれと心から願う。

しかし――――こちらを追跡しようと、尋常ではない速度で後を追ってくる獣を見て覚悟を決めた。

「ウチがあの化けモンの相手をする！　その間に大将に伝えるんや。ここからすぐに逃げるんやってな」

「そんな！？　それならば、我らが「アホぬかせっ！　お前らだったら欠伸（あくび）しとる間にやられてまうわ！」……っ！？　し、しかし！」

「ウチかてどれだけ保たせられるか。それでも簡単にやられるつもりはないわ。せめて腕一本……それが無理なら、指の二、三本は潰しちゃる！」

この霞の発言に、この隊の副長である男は、自身の認識の違いを叩きつけられた。

どんな敵にも臆すること当たっていく将軍が口にした敵に対する評価が、ここまで追い詰められたものとは。

それほどの決意をした将軍の行動に異を唱えることなどできるはずもなく、副長は噛みしめた口を開き、こう告げることしかできなかった。

「分かりました、必ずや曹操様にお伝えします！　御武運をっ！」

「おうよ、頼んだで！」

その一言を残し、隊から離れて転身した霞は馬から降り、自身の得物を掲げる。

陽光のきらめきを反射し、まばゆい輝きを放つ飛龍偃月刀を構える霞の姿は力強さに満ち溢れ、美しかった。

――たとえ、その力強さも獣の前には……かすんでしまうとしても。

「Ｆｕｓｙｕｕｌｌ」

そんな霞の姿を目にとめたのか、足をとめた獣の固く噛みしめられた口から、白い気炎がもれる。

死体を引き裂いたために血がしたたる両手を前足だといわんばかりに地につけ、臨戦態勢をとった。

さらに、獣の右手が変化――鈍い光を放つ、鉛色の鉤爪が現れる。

途端、獣から放たれる圧力が爆発的に膨れ上がり、ビリビリと霞の身体を叩く。

霞が知る由もないが、それは”黄昏の爪器”と呼ばれる、とある人物の想いによって創造された武具だった。

武具に刻まれた、大切な者を護るという本質（おもい）こそ、獣の歪んだ心によって変質せられており、本来の能力を発揮しきれていないもの、それでも十分に強力なものである。

ますます手に負える相手ではないという想いが、霞の神経をすり減らしていく。

すでに口の中は乾ききってしまっていた。

それでも霞が浮かべていたのは……絶望に染まった表情ではなく、笑顔だったのだ。

（これがウチの”最期の死合い”。相手は掛け値なしの強者や！理性なんぞ跳んどるやろうから、勝負の駆け引きなんかは必要ない。単純な力量の勝負……派手にいったろうやないかいっ！）

声に出していない呟きが聞こえたかのように、獣が突進してくる。

恐怖がないと言えば嘘になる。それでも霞は恐怖以上の高揚感さえ感じていた。

もはや生き残れるなどとは思っていない。刺し違えるくらいの気概で、ようやく一矢報いれるかといった相手。

そこで霞は、どこまでも楽しげな凄絶なまでの笑みを浮かべ――

「Ｇｏｏａａａａ－－－－！！」

「我は”神速”の張文遠！　楽に倒せると思うんじゃないわあああああーーーー！」

最期に自身を武人として華々しく散らせてくれるだろう獣に対し、高らかに自己の存在を訴え、首筋を狙う爪撃を迎え撃ったのだった。

（必ずだ！　必ずやっ……将軍の伝言を曹操様に！）

伝言を預かった副長と、それに続く兵たちは、ただそれだけを思って本陣へと急ぐ。

霞の決死の覚悟に背を押されて。

――しかし、現実は無情だった。

何に変えてもこの命令を成し遂げようと全員の心が一つになっていたところに、悪夢が再び世界を彩る。

「そんな……馬鹿なっ！？」

背後から突き刺すように放たれる殺戮の意志。

それはあっという間に兵たちを覆い尽くし――

「ｇｕｕｕａａａ－－－！」

雄たけびと共に凄まじい速度で、獣が最後尾の兵に迫り来る！

（早すぎる！？　こんな短時間で……張将軍はっ！？）

その事実に、兵たちは恐怖を抱かずにはいられなかった。

この獣は、人類共通の敵であることは間違いない。

意味など考える必要もなく、ただこの獣は生あるモノを殺し尽す。

そんな存在に恐怖を抱くなという方が無理な話なのだ。

しかし、この状況にあって彼らが真に恐れていたのは……

（将軍の命令を成し遂げるまでは死んでも死にきれん！）

別れ際に霞が放った「頼むで！」の一言が、絶体絶命の状況であっても、彼らの心を繋ぎとめていた。

その命令を叶えることこそが、彼らにとって至上。

であるならば――――

「「「「「先に行け！」」」」」

最後尾の兵たちが獣の足を止めるべく叫ぶ。後のことを託し、決死の覚悟をもって。

全力疾走していた馬に急制動をかけ、獣の殺気で怯えている馬を解放し、獣へと正対する。

その身一つで獣に挑む張遼隊の兵たちが放つ気当たりは、背水の陣を敷いた者特有の壮絶なものだ。

それぞれの得物を構え、間もなく接敵する獣を見据えた彼らの瞳が――ある一点に集中した。

「「「「「あ……」」」」」

その場にいる全員の声がそろい、目が見開かれる。

彼らが見つめるのは、三本ある獣の尾のうちの真ん中の一本。

正確には、その中ほどに引っ掛かっていた――血にまみれた羽織。

その出血量は致命傷ではないのだろうか？

血でほぼ完全に赤黒く染まった羽織が、獣の尾の動きに合わせて彼らに見せつけるように揺れる。

さらによく見れば、左の尾の先――他の二本が磨き抜かれた剣のように鋭く尖っている部分が砕かれていた。

『ウチかて、タダじゃやられんわ！』

将軍がどうなったのか、彼らには分からない。ただ、それを確認する前にやらなければならないことができてしまった。

それを認識した途端、彼らの身体が震えだす。

武器を構える手に力が入り過ぎているのか、皮膚を破って流れ出た血が武器にしたたっていた。

――――脳を焼き切らんばかりに溢れる怒りを感じながら。

どんっ

誰かが足を踏み鳴らした。

どんっ、どんっ、どどんっ！

それは速やかに周囲に伝播し、いつの間にか随分と増えていた味方全体による足踏みが、地鳴りのように大地を震わせる。

「ｕｕｕｇｕｏｏｏｏｏｏｏ――――！」

そこへ、この光景に気をとられることもなく間合いを詰めるための最後の跳躍をした獣が、彼らの中心へと砲弾のような蹴りを打ち込む！

グシャアっと何かが潰れる音が響いた。同時に辺りに散らばる凄まじい鮮血。

近くにいた者に血の雨が降り注ぐ。時折身体に当たる柔らかいモノは、人だったものの欠片なのだろうか。

だが――――それがどうしたと言わんばかりに、無残に命を散らした戦友のことを意識から外した兵たちは、降りかかる理不尽な暴力に

果敢に挑む。

自分たちに殺れるのか、などとは誰も考えていない。

殺るのだ！

全員の命を懸ければ、獣の身に届くと信じて。

「「「「「死ねえええぇぇーーー！」」」」」

将軍が自分たちに託した命令を成し遂げるため、将軍に手傷を負わせた獣を討つため。

彼らは後先を考えず、防御を捨てて持てる力を全て武器に込め、前へ踏み出す。

たとえ、それさえも獣から見れば――儚い抵抗だったとしても。

「み、見えた！　あと少しでっ！」

ついに本陣の牙門旗がギリギリ目視できる距離まで辿り着いた副長は、ここにきてようやく張り詰めていた感情を少しだけ緩めることができた。

今や、張遼隊の選りすぐりだった面々で残ったのは自分だけ。

その事実が副長の心を激しく締め上げるが、それでも彼は手綱を再度強く握り締めた。

将軍や戦友だった兵たちの決死の努力を無駄にするわけにはいかなかったから。

（そんなことが認められる訳がっ！？　――来やがった！）

再び背後に感じた狂おしいまでの殺気。チラと後ろを見れば、遥か後方に見える小さな黒点。

こんな距離からも存在を感じられる異常性に辟易しながらも、副長はこれならば命令は達せられると安堵した。

（速やかに伝言を伝え、態勢を整えた全軍の力をもってすれば、いくらあの化け物だろうがぁっ！？）

そこまで考えたところで、副長の身体は馬から転げ落ちた。

かなりの速度が出ていた中での落馬によって、大地に激しく打ちつけられた副長であったが、命と意識だけは繋ぎとめれたようだ。

しかし、仰向けに倒れた身体はピクリとも動かないうえに、全身が焼けるように熱い。

中でも一番酷いのが右の脇腹に刺さった『短剣（ナイフ）』である。

刃は目に見えないが、流れ出る血によって浮かび上がった輪郭は、小型ながらも肉厚で凶悪なものだ。

（一体ど、こ……から？）

副長は、どこからこの短剣が飛んできたのか見当もつかなかった。

刺さった短剣の向きから察するに、斜め下から投擲されたようだ。

しかし――そこには自分の影しか映ってなかったはずでは？

そこまで考えたところで、何の前触れもなく短剣――”黄昏の刃器”が消失した。

途端、傷口からの大量の出血により、感覚がおぼろげになっていく。

そのままどれだけの時間が経ったのか。

何もかもがあやふやになっていく中で、自分の顔を妙にハッキリと感じられる、生温かい風がなでていることに気付いた。

鉄臭いにおいと、生理的な嫌悪感をもたらす感覚を伴って当たった風の正体は、獣の吐息だった。

「ぐ……うう、き、さま……」

獣に対しての何らかの対処をしろという本能からの叫びと、将軍の命令を果たすための行動を起こせという理性の叫びが副長の心を押していたが、身体は全く動かない。

できるのは――固く握りしめられた左拳を、今にも振りおろそう

とする獣を見据えることだけ。

（張将軍、みんな……すまん！！）

まともに動かない口から声を出すのを諦めた副長は、心の内で自分をここまで送り出してくれた者たちに、自身の不甲斐なさをわびる。

グチャッ！

何かが潰れる音。

最後の意地で、迫りくる拳を前にしても目をそらさなかった副長の意識は……それで完全に消えた。

びゅうううぅぅ

風向きが変わるのと同時に、風の性質まで変化したように、夏侯淵――秋蘭は感じていた。

乾いているはずなのにどこか肌にまとわりつくような、淀みを感じさせる風。

空は晴天であるにもかかわらず、体感温度でいえば、うすら寒いと感じられるほどだ。

「嫌な風だな」

「ああ、そうだな姉者」

どちらかといえば呟くように口を開いた姉の夏侯惇――――春蘭の言葉に相槌をうつ。

それに対し、春蘭は二の句を継がなかった。

ただ呟いただけかと秋蘭は思ったが、どうやらそうでもないらしい。

何かを言いたげな顔を浮かべるが、上手くそれを口にすることができないもどかしさを感じさせるように、口を開けては閉じる。

同じことをしばらく繰り返した後、ようやく得心がいったという表情で春蘭は口を開いた。

「もしやこれは……何事かの『コチョウ』というやつなのか？」

「……は？」

思わず目が点になった秋蘭だった。

武においては誰よりも頼りになる姉も、智においては……残念としかいいようのない人なのだ。

しかし、代わりといっては何だが、戦場における姉の動物的本能の如き判断力を深く信頼していた秋蘭は、姉の意味不明な言葉を無視していいとは思えず、理解に努めようとする。

（コチョウ……誇張？　胡蝶？　いや、それでは意味が通じない。

ならば……）

類似する言葉を並べたててみようと、秋蘭は豊かな胸の前で両手を交差させ、思考に沈む。

一方、姉である春蘭は、聡明であるはずの妹が困っている様子から、また何か間違っていたことを言ってしまったのかと弱腰になっており、再び口を開こうとしたが……それよりも秋蘭の方が早かった。

「姉者、もしかして『予兆』と言いたかったのではないか？」

「お？　おおっ、それだ！」

「ふっ、そうか。確かに私も妙な胸騒ぎを覚えているのだ。霞が何らかの情報を持ち帰ってでもくれれば良いのだが……」

春蘭が納得した様子を見て口元を緩めた秋蘭だったが、気持ち顔をうつむけつつ一旦言葉を切る。

いつもならここで、頼りになる姉が「そんな不安なぞ我が剣で振り払ってくれるわ！」と根拠もなく、だが不思議と安心できる言葉を返してくれるのだ。

結果としては、本当に無茶をしながらも何とかしてしまうのだから、凄いとしか言いようがない。

そんな姉のことを、秋蘭は心から信頼していた。

だから今回も同じ望みを抱いたのだ。

先ほど姉に話した言葉は普段通りの杞憂にすぎないと、秋蘭は姉に

迷いを断ち切ってほしかった。

ところが――

「……うむ、私も今回ばかりは嫌な気が拭えんのだ。しかし、ここまで来ておいて何の根拠もなく、進軍を止めてほしいなどと具申はできん。華琳様が、こたびの戦いで孫策との決着を心から望んでいるのだから尚更だ。

ならば私の役目はただ一つ！　何が起ころうとも華琳様だけはお守りしてみせる！　それだけだ」

「……そうだな、姉者」

何とか言葉を返すことができたが、秋蘭は心に浮かんださざ波を抑えきることができなかった。

そんな彼女の様子に何を思ったのか、春蘭は「前線の様子を見てくる」と言って離れていく。

それに首肯一つで黙って見送り、独り残された秋蘭は、それでも決して短くはない時間、痛ましげな眼差しで姉の背中を見つめ続けた。

どうしたことだろう。我が姉をしても嫌な気がするという今回の戦。

何が起ころうと、華琳様だけはお守りするという気持ちに揺らぎはない。

いかに孫家軍には、天の御遣いが率いる部隊と名高い”天遣隊”がいるといっても、総合戦力では負けてはいない。

加えて、こちらには姉者と同等以上の戦力を誇る”存在”もいるのだ。

（まあ、それさえも相手の掌の上だという可能性があるのだが……）

加入当時から繰り返し、抱いてきた想いを無理やり打ち切る。

この件に関しては、もっとも反応すると思っていた姉がすんなりと認めてしまったのだから、秋蘭としては強く出きれないところがあるのだ。

姉に言わせれば、お互いに通じるところがあったのだとか。

残るは、策略を駆使した頭脳戦だが……これも心配は、ない。

そのために霞が出撃しているのだし、布陣している場所も見晴らしのいい荒野なのだ。

何かが現れればすぐに気づける。

だというのに……

（――よそう、これ以上今の思考に囚われるのは）

思い出す。

遠い記憶、けれど今でもハッキリと思いだせる言葉、幼き頃に交わした三人での――約束。

総毛だつほどに衝撃的で、それ故に困難に満ちていて、しかし――

―たとえようもないほどに望ましい、そんな世界。

「我が主の往く道の邪魔は、誰にもさせません」

そう言い切った秋蘭の瞳は、どこまでも静謐（せいひつ）に輝いていた。

その身体（うち）に、己の原点となった熱い想いを秘めながら。

そして――ソレは、秋蘭の覚悟を試しているようかのタイミングで現れた。

## 番外編　～神と人と獣～　『承』編（後書き）

まずは、ここまで読んでくださったことに御礼を言わせてください。

ありがとうございます！

さて、そのうえで皆様が思われただろうことを私から・・・

これだけ書いて――――曹操の本隊と接触できてない、だと！？

前々から思っていたのですが、話のテンポに難ありですね、私。

まあ、結局後編の内容的に、ここで区切ったほうがいいだろうと判断（合理化）し、投稿したわけですが（汗）

え～、ひとまず次回で本格的に激突＋α！

・・・三月中には出したいなあ（遠い目）

## 番外編　～神と人と獣～　『転』編（前書き）

みなさん、こんにちは！　そしてごめんなさい！！

タイトルを見れば分かると思いますが、この番外編は４部作になりましたｗ

大丈夫です、さすがにこれ以上は・・・伸びないはず（汗）

# 番外編　～神と人と獣～　『転』編

「何だよ、あれ……」

誰かが呟いた。

孫家軍との決戦を目前に控え、まさに部隊を展開させようとしていた曹操軍に浴びせられた、凶悪な殺気。

どれほど勘の鈍い者――本来、危険を察知する能力のない虫ケラであろうと、条理を越えた何かに押されて逃げ出すほどのものだ。

そんななか、勘の良い者たちが見上げた空の先に“ソレ”は現れた。

「ｓｙａａＡＡＡ――――！」

青空を切り抜いたように浮かび上がった、闇よりも暗い、昏(くら)い、冥(くら)い影。

影は急速に拡大し、輪郭を鮮明にしていく。

「「「き、来たあがふっ！？」」」

それがはっきりと人(ケモノ)の姿をとっていると分かった時点で、何らかの行動を起こそうとした者たちは、糸の切れた操り人形のように尻もちをついた。

一呼吸にも満たない間。

その僅かな時間で、砲弾のように打ち込まれた蹴りによって着弾地点の人間を爆裂四散させ、その周囲にいた兵たちをも尾によって切り裂いた獣。

――あまりに規格外。

爛々（らんらん）と輝く紅い瞳は、見る者の意識を凍りつかせ、人類が持ち得た最高の力である“思考能力”を奪っていく。

それは、歪みきってはいるものの、超然とした光景に間違いは無く――兵たちは、そんな光景から目が離せない。

結果、見せつけられることとなる。

常軌を越えた光景――人がヒトでなくなっていく様を。

周囲の人間を一掃し、次の獲物を求めて首を振る獣を見つめる兵たちの心は、絶大な恐怖で支配されていた。

厳しい訓練をつんだ精兵でさえ膝の震えを抑えるのがやっとの相手を前にして、最近になって補充されたばかりの新兵たちが、耐えられるはずがなかったのだ。

暴力の嵐に触れ、完全に思考が停止した新兵たちに向かい、獣が一足跳びで間合いをつめ――

「Ｇｕｕｕｕｏｏ……っ！？」

人の身体など紙も同然に切り裂く一撃が、新たな肉の塊を生み出そうとした瞬間。

横合いから繰り出された強力な一撃が獣を吹き飛ばす。

「か、夏侯惇将軍！？」

「貴様らっ、それでも我が曹魏の一員か！　さっさと立ち上がって態勢を整えろ！」

怒号一喝。恐怖に心を支配されていた兵たちの瞳に、僅かながらも理性が戻って来る。

それでも尻ごみしている兵たちに向かって春蘭が吠える。

「次に奴と剣を合わせるまでに立ち上がらなかった者は、戦闘の邪魔だ！　奴より先に叩き斬ってくれる！」

「「「は、ははっ！」」」

凄まじい怒号に全身を叩かれた兵たちは、未だにおぼつかない足を必死に動かしながら後退していった。

（何という硬さだ――――化け物め）

このままでは無駄死にのうえ、軍全体が恐慌を起こしかねないと考えるまでもなく感じ取った春蘭は、兵たちを退けさせた。

その直後――――誰も自分の顔を見ていないと悟った途端、表情が苦いものへと変わる。

春蘭は、先ほどの一撃だけで自分たちが『追い詰められる側』だと自覚してしまったのだ。

兵たちに気を取られ、無防備となっていた脇腹に叩きこんだ斬撃。

踏み込んだ足の指先にまで痺れるほどの反動が突き抜けた一撃だったのだ。

だというのに――――鎧を、骨を砕いた感触はない。

（奴を倒すならば、むき出しの頭を潰すしかないというわけか）

忌々しげに呟く。

こちらは数万、相手は一人。

にもかかわらず、それがなんだと思えるほどに絶対的な数の差を物ともしないような強さを、目の前の獣は放っていた。

春蘭が片時も外していなかった視線の先で、獣は血走った眼を自分へと突き刺していた。

自らの狩りを邪魔した春蘭への憎しみを募らせているのか、尾を振り乱し、両手を天へと掲げる。

その手で、天をも掴もうとしているかのように。

そして――それに応える武具（もの）があった。

「何だ……その剣は？」

春蘭が見据える先に突如出現した二振りの刀剣。

右手に握られるは、白銀の刀身をもつ日本刀――“黄昏の刀器”
左手に握られるは、金色の輝きを放つ西洋剣――“黄昏の剣器”

獣の意志により、ただ相手を殺すことだけを望まれ具現した刀剣は、触れるモノ全てを切り裂く鋭さを示すかのごとく、妖しい光をくすぶらせている。

「おい、貴様は何者だ!?　孫呉の手の者か？
だとするならば……ここに来るまでに出会ったであろう、騎馬隊の者たちをどうした？」

聞くだけ無駄だろうと言う想いと、聞きたくない返事がかえってくるかもしれないが聞かねばならないという想いを胸に、春蘭は獣に問う。

しかし、獣は何も言葉を発しない。

ただ――人語を解しているとばかりに、嫌な笑みを口元に張り付かせた。

喜怒哀楽の感情の内、“怒”の感情しか持っていないと思われた獣が、それはもう気持ち良さそうに。

「そうか――貴様が言いたいことは、よく分かった」

獣の反応に、剣を構えることで応えた春蘭は怒りをその身に宿しながらも、慎重に獣の出方を窺う。

対する獣は、現れた刀剣を構えることもなく、春蘭目がけ突進。刀剣が放つ光の粒子を置き去りにして、剛腕を振るった。

「おおおぉぉーーーっ！」

乾いていた口元を舐め、迎え撃つべく、春蘭は気合と共に、下からすくい上げるような斬撃を放った。

それは獣の上段から振り下ろされる交差斬りと激突、一瞬の拮抗をみせるも――獣を弾き飛ばす！

「「「おおおおっ！？」」」

「ＧｕａａＡＡＡ！」

その事実を誇るでもなく、外野や獣の声を気にすることもなく、春蘭は剣を目線の高さで横に構え、獣の反応に僅かでも遅れまいと神経を研ぎ澄ましていく。

そこへ獣は再度突撃をかけ、かすっただけでも命取りとなる剛撃を繰り出し続ける。

まさに、荒れ狂う殺劇の宴といわんばかりの強襲。

しかし、一撃たりとも刀剣の刃は春蘭の身体に届いてはいなかった。

それどころか、凄まじい激突音と衝撃波をバラまいている剣戟が激しさを増すごとに、獣が持つ刀剣の刃に“亀裂”が生じていく。

この事実に苛立ったかのように、獣が腕の回転をさらに上げる。

洗練されてないがゆえに読みにくい神速の斬撃が春蘭の全身を叩くが、彼女は嵐の中心にありながら、その攻撃を逸らし、捌き、受け止め、挙句には反撃まで仕掛けていた。

獣が終始足を止めず、雷霆（らいてい）のごとく押し寄せる暴風だとするなら、春蘭は大地にそびえ立つ大樹であった。

その両足は、大地に根を張っているかのごとく不動。

人智を超えた獣のいかなる攻撃にも、鍛え抜かれた全身の力と、これまでの経験からなる技巧を以て渡り合っている様は、まさしく『魏武の大剣』の名に相応しい姿だった。

「す、凄い！　さすがは将軍だ！」

後ろに下がって陣を編成中の兵の誰かが呟いた。

とても、人の手には負えないと思えた獣に対し、将軍が互角以上の戦いをみせている。

（この調子ならば……）

――獣を打倒できるかもしれない。

他の者たちも、声には出さずとも同じ意見を抱いていることだろう。

では、春蘭はどうかというと――

（頼む！　『その時』が来るまで保ってくれ、我が身体よ！）

戦闘開始時より変わらない――追い詰められた状況にあった。

春蘭の思考はシンプルだ。

獣の攻撃を捌き続け、決定的な隙が生じた瞬間に、全力の一撃を叩きこむ。

それまで生き残れば、春蘭の勝ち。

出来なければ――死あるのみ。

それを為すため、獣の攻撃を相殺するたびに、春蘭の身体の内から何かが千切れ、軋む音が響いていた。

良く見れば、一撃も攻撃を受けていないにもかかわらず、全身のいたるところに青あざが浮かんでいるのに気付けただろう。

春蘭の身体は、すでにボロボロになりつつあったのだ。

獣の剛腕を受け止めるたびに骨は軋み、ところによってはヒビが入り始めていた。

獣の隙を突くべく、無理な動きをもって反撃を試みるたびに、筋肉繊維は断裂していく。

いかに春蘭が“才”に溢れた英傑であったとしても、人を越えた獣

を相手取るなら代償は必要だ。

文字通り命を削る戦いを繰り広げながら、春蘭は『その時』が来る事を信じて剣を振るい続ける。

そして――

パキィィーーン

甲高い音をたて、たび重なる衝撃に耐えられなくなった“黄昏の刀器”、“黄昏の剣器”の刀身が、中ほどから砕け飛ぶ。

（――もらった！）

不意の出来事に思わず動きを止めた獣――絶好の好機と、春蘭は斬撃を叩きこむ。

もてる全力を込めた一撃。

それゆえに気がつかなかった。

別の生き物のように、春蘭の死角となっている左後方へと回り込んでいた尾の存在に。

「後ろだ、姉者！」

切迫している秋蘭の声と、尾による一閃は同時だった。

とっさに跳んだ春蘭の首筋を、あわやかすめるというところで、鞭のようにしなった尾が通り過ぎていく。

「っく！？　すまん、秋蘭。ちぃ、もう少しで奴の頭をかち割れたものを……」

「ご無事ですか、春蘭様！？　くらえ、化け物！」

春蘭の後方からまばゆい輝きが差し込む。

それは、獣が放つ淀んだ氣を駆逐せんと爆圧的に膨れ上がった氣。

敬愛している上司を苦しめている獣に対し、怒り心頭となっている楽進――凪は、猛り狂う氣を視覚化できるまでに凝縮させ、氣弾として撃ち放つ。

ごぅんっ！！

着弾した証である爆音がとどろき、獣が粉塵に包まれた。

「やった、か……？」

粉塵が収まっていく中、自信なさげに呟く凪の前に紅い円柱形の物体が映った。

思わず目をみはる凪の前で、それは周囲を薙ぎ払うように一閃された。

３０ｍは離れた凪の所まで風を運び、粉塵の晴れた場所に無傷の獣が現れる。

その手に紅い大金槌――“黄昏の槌器”を携えて。

「うわ〜、気配だけでもビンビンだったのに……間近で見たらメチャクチャ怖いのー！」

「しかも凪の氣弾を簡単に防ぐとか……。ああ〜、正直相手したくはないんやけど、これも都勤めの辛いとこやなぁ」

獣が放つ圧倒的な存在感に、何事かと沙和と真桜も駆けつけてきた。

顔は軽く涙目、声にも不安がにじみ出ているが、それぞれの武器を掲げ獣を見据える目を外しはしない。

この場から立ち去る気は微塵もないようだ。

「来ます！」

鋭く凪が叫ぶ。

凪は渾身の一撃を防がれたことに一瞬の動揺をみせたが、瞬時に気を取り直し、更なる氣を練り上げ始めていた。

すでにその身は、輪郭がかすむほどの燐光を纏っており、こちらへと槌器を回転させながら近づいてくる獣へと放たれるのを、今か今かと待ちわびているようだ。

「回避に専念しろ！　あれだけの重器だ、必ず隙はできる！　頭を潰せ！」

秋蘭の指示のもと、全員が首肯一つで散開。

獣を打ち取るべく、途切れぬ波状攻撃をしかける。

だが、ここで――獣の戦闘スタイルが変わった。

いや、本来のスタイルを取り戻したというべきか。

もとより獣は、この場の誰よりも力、速度、敏捷など、何の能力をとっても上回っている。

唯一及んでいないとするなら、それは武器を扱う技量だけ。

春蘭が先ほどの戦闘で身を削ったことに加え、刀剣を用いての戦闘に獣が執着していたことが、互角以上に渡り合えた要因だったのだ。

ならば、必然として――

「Ｗｏｏｏ〇〇〇――！」

獣が咆哮と共に、大金槌を振りおろす。

凪は精神を圧迫する剛撃を体を逸らしてかわし、懐に飛び込もうとした――獣の身体が不意に浮かび上がる。

直後、目の前に迫る、獣の蹴撃。

大地にめり込んだ槌の柄を軸として、打ち出される黒い鞭のような一撃を、凪はとっさに手甲を交差して受け止めた。

「あっ……ぐっ！？」

地に足をつけていてなお、踏ん張りを越える凄まじい衝撃が生まれ、

爆発したかのように後ろへ吹き飛ばされる。

何とか受け身はとれたものの、すぐには立ち上がれそうにないと、悔しさを噛みしめる凪は獣を睨みつける。

その視線の先で、獣は追撃をかけるつもりなのか、めり込んだ槌器を持ち上げようとしているところだった。

そこへ――――

「「くらえ（なのー／やー）！」」

左右斜め後方に回り込んでいた沙和と真桜が、同時に仕掛ける。

その攻撃に、獣は視線を向けることもなく……

「ｓｈａａＡＡＡｌｌ！」

鋭く尾を一閃、二閃。

「ぐっ！」

「きゃあっ！？」

真桜を地面に叩きつけ、沙和を弾き飛ばす。

余裕のつもりか、獣はすぐ横でうめいている真桜に手をかけるでもなく、先に槌器を持ち上げた。

重々しい響きをあげて、槌器が頭上に掲げられていく。

「――――！？」

獣が次に何をするつもりか感知した凪は、親友を救うべくようやく動くようになった足を叱咤し、全力で駆けだした。

その直後、自分の身を追い越して、三条の矢が獣へと吸い込まれるように疾る。

その三連射を、獣は羽虫でも追い払おうとするかのように、三本の尾を薙ぎ払って防ぎきる。

（ありがとうございます！）

凪は声には出さず秋蘭に礼を言うと、何とか立ち上がった真桜を抱えるように獣から距離をとる。

獣はそこで、一番煩わしい相手を秋蘭と定めたのか、凪と真桜には目もくれず、秋蘭へと疾駆。

近づけはさせまいと連射を行うも、獣は槌器を前方へと掲げ、矢など気にもかけず突進してくる。

あと3歩で獣の間合いに入る――――その瞬間だった。

「「せーの！」」

横合いから獣を挟みこむように飛び込んで来た二つの小さな体躯。

その身に信じられないほどの力を秘めた二人――――季衣と流琉が、それぞれの武器を獣へと叩きこむ。

「Ｇｕｕｏｏ〇〇〇ーー！」

獣はここで初めて悲鳴めいた叫びをあげて後方へ吹き飛ぶ。

さすがに少しは堪えたのか、獣は地面を滑りながらも態勢を整えると、様子見をする気か“足を止めた”。

「ここだああぁぁぁーーー！」

凪は自分に練れる限界ギリギリまでを集束させた氣――直径一ｍはある――を獣へと撃ち放つ。

よけるつもりがなかったのか、余裕がなかったのか。

全身で氣弾を受け止めた獣に喰い込むように、輝きが収縮していく。

恐ろしい密度に凝縮された氣は半ば物質化し、粘り気のあるマグマのような熱を放ちながら、獣の周囲を巡っている。

「ＧＲＹＹＡＡＡーーー！」

ここで絶叫をあげた獣が、両手で抱き締めるように受け止めていた氣弾を完全に掻き消す。

それと同時に、精根尽きたといった感じで凪が膝をついた。

あれだけの熱量を感じさせたというのに、獣の身には焦げ目一つ見当たらなかった。

その事実を知ってか知らずか、獣の口の端に嗤(わら)いが刻まれる。

対する凪の顔には――――これもまた、“笑み”が浮かんでいた。

「よくやった、凪！　あとはウチにまかせときぃぃぃーーーっ！」

力強い叫びと共に、激しい駆動音をとどろかせ、自慢の創作武器“螺旋槍”を構えた真桜が獣へと肉薄していた。

かわしようのない絶妙なタイミング。

岩盤程度なら、たやすく抉り進む槍は、存分にその力を炸裂させる。

獣の眼前に盾のように具現した大剣――――“黄昏の大器”へと。

ぎゃりんっ！！

頑強なイメージに反して脆かったのか、やはり本来の力が失われているせいなのか。

螺旋槍の一撃によって刀身を貫通されたものの、獣の身には傷一つ作らせることなく防ぎきった大器は、役目を終えて消え去った。

「んな、アホな……」

この結果に呆然としたために、一瞬回避が遅れた真桜に獣の剛腕が迫る。

「よけるのーっ！」

「ぷぎゃあっ！？」

妙な悲鳴が上がるが、構っている暇はなかった。

間髪わって入った沙和に押されて剛腕を回避した真桜だったが、命が数秒伸びただけだ。

次はかわせない。

そう思い、親友の身体を抱き締めた沙和の前に、人影が現れた。

――『魏武』の象徴とうたわれる人物が。

「「……春蘭様」」

春蘭は剣を構えたまま、黙して何も語らない。

後ろからで春蘭の表情が見えない二人であったが、何となく笑っているような気がした。

実際はどうだったのか分からない。

それでも、獣は春蘭の表情に何かを感じ取ったのか、再び足を止め――

「ＧＹＡＡ！？」

短い悲鳴を上げて、たたらを踏んだ。

血走っていた赤い瞳が、光を失っていく。

見れば、左側頭部に深々と“矢”が刺さっていた。

「――終わりだ」

春蘭は淡々と呟くと、残された全ての力を込めた斬撃を獣に見舞い、首を刎ね飛ばしたのだった。

「……やったか」

「やりましたね、秋蘭様！」

姉が獣の首を刎ね飛ばしたのを見届け、秋蘭はようやく張りつめていた神経を弛緩させていく。

可愛い妹分のような少女――流琉の声が乾ききった心に染みいるように響く。

それに続いて、固唾をのんで将軍たちと獣の戦いに魅入っていた兵たちの間に歓声が上がり始めていた。

しかし、それに応える余裕も無く、秋蘭はその場に膝を突く――前に流琉に背中を支えられ、ゆっくりと腰をおろす。

「結局、あれの正体は何だったんでしょうか？」

「ああ、それならば心当たりがある」

「本当ですか！？」

身を乗り出して尋ねてくる流琉に、「おそらくだがな」と前置きしてから秋蘭は離し始めた。

「姿、髪形、纏っている雰囲気と、何が起こったのか思うほどに豹変してはいたが……天の御遣いだったと思うのだ」

「え！？　孫呉戦での最大懸念の人だったんですか、今のが！？」

「落ち着け、話ができる状態ではなかったし、確証はない。だとしたらありがたい話なのだがな……うっ！？」

さらに驚きを強くする流琉を、片手を上げて制しようとした秋蘭が口元を覆い、身体をうつむけた。

「どうされたんです、秋蘭様！？」

すぐさま背中をさすりつつ、様子を聞いてくる流琉に「心配するな」と返す。

急に込み上げてきた嘔吐感が落ち着くまで、背中を丸めていた秋蘭だったが、回復したのか背筋を伸ばして再び話し出す。

「ふう……ただ疲れただけだ。最後の一射にかなりの集中力を使ったのでな。

正直、もう一度やれと言われたとしても、できる気がせんよ」

「確かに素晴らしい射でしたね。見ていて鳥肌がたちましたもん、私」

「ああ……あれならば、呂布さえ討てた自信があったな」

秋蘭はそう言いつつ思い出す。

最後の一射を前に、己が辿り着いたある種の境地。

刹那の間によぎった、遠い記憶を。

殺意など感じようと思わずとも、獣が放つ圧倒的なソレは、うねりをもって肌へと突きささる。

あわや、震えを隠しきれないほどに。

覚悟をもって臨んでいたはずが、それさえも甘かったと思えるほどの非常識な存在。

その存在の前に春蘭――姉が立っている。

（無茶だ、姉者！　その体では！？）

秋蘭は、反射的に新しい矢をつがえていた。

意識はその瞬間に先鋭化している。

（届く……か？）

自身の技量に疑いはない。

何千、何万と繰り返してきた、意識せずとも身体が覚えている、完成された動作。

もし邪魔されずに届いたなら、獣の息の根を止められることは間違いない。

秋蘭は、弦を引き始める。

（無駄な力は要らない――）

（必要なのは、威力ではなく疾さだ――）

（最善の完璧を成せ――）

（敵が誰であろうと関係ない――）

（想像しろ、最強の自分を――）

（目指すのは――細緻（さいち）の極限！）

これらの言葉を一つ一つ胸に刻んだわけではない。

全てが一瞬で閃き、一瞬で消えた。

そして――それら全てを一瞬で理解できた自分がいる。

生涯を捧げると決めた主君と、親愛なる姉と、自分。

（私についてきなさい。そしてこの国を――変えてやりましょう）

そう言って優しく微笑んでくれた“あの方”と、これからも続いていく、続いていかなければならない物語を描くために――

（――お前は邪魔だ！）

間髪入れず放たれた弓は、何者の抵抗も受けはしないとばかりに残像すら残さず獣へと一直線に迫り、側頭部に突きささったのだった。

「春蘭様っ、大丈夫ですか！？」

「おお……季衣か。怪我はなさそうだな」

「ボクは大丈夫です！　それよりも心配なのは春蘭様ですよ！　明らかに身体の動きがおかしいじゃないですか！？」

「ああ……さすがに疲れたぞ」

地面に大の字で倒れていた春蘭は、駆けつけてきた季衣に助け起こされ、力の抜けた声を上げる。

今後、数十年に渡って魏を支え続けたであろう力の大部分を、獣との一騎打ちの果てに失ってしまったのだ。

「……にしても季衣よ。お前や流琉が前に出てきているということは、華琳様は「それなら“兄ちゃん”が護ってくれてるから、大丈夫です！」……そうか、ならばいい」

こんな状況にあっても自身の身体より主君の身を心配するあたり、やっぱり春蘭様は凄いと、季衣は心配な気持ちを抱えながらも、敬愛の眼差しを向ける。

妹分である少女から熱のこもった視線を浴びせられた春蘭は、気恥かしさから目を閉じてしまった。

そして、視覚を閉じた分、鋭敏になった他の感覚に身を任せ、自身の身体の状況を探ろうとする。

――その時だった。

どくんっ！

何かが脈打つかのような音が聞こえた瞬間、春蘭は感じた悪寒に従い、季衣の身体を力の限り突き飛ばす。

直後――

「がっ、あぁ……」

「……え？」

春蘭の胸に突き立てられた双剣――“黄昏の双器”。

突き刺したのは……“首のない”獣。

「あり……え、ない。こんな、の……ありえないよおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーー！！」

誰もが信じられないという想いを代弁するかのごとく少女は叫ぶ。

飛び散った血の温かさと鼻をつく臭いが、少女に現実を叩きつけても。

――――覚めることのない悪夢だという事実を、決して認めはしないとでも言うように。

季衣の悲しみに満ちた慟哭が、獣との第2ラウンドを告げる合図となった。

## 番外編　～神と人と獣～　『転』編（後書き）

獣が死ななかった理由は、序盤の設定通りです。
精神体なので、いくら致命傷を受けても、原則は死なない身体なのです。

とはいっても痛覚はあるため、普段のハセヲであれば、ショックに耐えれず精神が崩壊して死んでしまうでしょう。

精神が肉体よりも優位であると考えられる獣だからこそ、肉体的限界を意志で克服できるのではないか、と考えて書いてみました。

かなり無理やりですが、納得していただけると幸いです。

さて、次の『結』編でさすがに終わらせないとですね。

明るい話ならともかく、この流れの話を楽しみにされている方は少ないでしょうし。

では、次回は最初からクライマックス。劇場版シーンの再現？といきますので、良ければ見てやってください。

# 番外編　～神と人と獣～　『結』編（前書き）

番外編シリーズ第４部目をお送りします。
何とかこのシリーズも完結を迎えますが、ここで注意を。

この話には、読者の皆様を不快にさせる表現が多く含まれています。

正直、誰得？って感じです。

しかも長いです。何と一万五千字弱（汗）

そんな感じの話なので、引き際にご注意ください！

それと、５００００ｐｖ達成しました！
本当にありがたいです！
ヤル気をたくさんいただきました♪

それでは、どうぞ。

# 番外編　～神と人と獣～　『結』編

ざあああああぁぁぁ……

それは、風の音だったのかもしれない。
何かが逃げていく音だったのかもしれない。
本来聞こえるはずのない、血の気がひく音だったのかもしれない。

それを確かめる意味はない。つまるところ、何だってよかったのだ。
何が起きようと、何をしようと、彼らの“逝きつく先”は同じなのだから。

ぼとぼとと、何かが落ちてきた。

高密度の殺気――もはや、妖気ともいえる――にあてられ、即死した鳥たちだ。

外傷は見あたらないが、もう二度と動くことはない。

その音を生み出すキッカケとなった獣は、春蘭の血に濡れた双剣を気はすんだとばかりに放り捨てた。

そして空いた手を、何かを手繰り寄せるように手招く。
すぐさま手に飛び込んでいったのは、刎ねられた首。

舌をだらしなく垂らして息絶えているようにしか見えない首の断面から、突如何かが伸び始めた。

「う……ああっ！？」

誰かが呟いた。

いや、ただ信じられないモノを見て、のどが震えただけだったのかもしれない。

心を、恐怖を越えた絶望に染め上げられた者たちの目が捉えたのは、断面から伸びてきた神経や筋肉が絡み合い、傷跡さえ残らずに元の姿に戻った獣の姿だった。

「「「ひ、ひひぃ……きひゃひゃひゃあああぁぁ！」」」

どこからか奇妙な笑い声が響き始めた。

恐怖のあまり、兵たちの精神の均衡が崩れてしまったのだろうか。

――それも無理はないことではある。

どこに、首を刎ねても死なない生き物がいるというのか。

そんな存在がいる筈が無い――いや、いてはいけないのだ。

それが、存在しているだけで“死”をばら撒く存在であるならば、なおのこと。

「Ｗｏｏｏ〇〇〇〇〇〇〇ーーーーーっ！！！」

刹那、時が止まる。

この咆哮を聞いた者たちは、例外なく思考を停止させられた。

大部分の者たちが、その身に秘められた力を全開にした獣の気にあてられ、自失している。

彼らの瞳は何も映していない。

これ以上、獣の恐怖に怯えなくてもいい、という意味で考えれば、それは幸運だったのかもしれない。

逃れられぬ絶望の前に、正気を保とうと踏ん張れる人間は少ないだろう。

何をしようと無駄であるというなら、抵抗する気もなくなるというものだ。

その中で――獣に向かって“歩き始めた者”がいた。

「よくも……」

その身に宿す感情を力に変え、震える声を絞りながら、季衣は岩打武反魔を旋回させ始める。

対する獣は、季衣を見ていない。

その遥か後方――静かなれど、激烈な怒りを放っている人物を見据えていた。

「よくもっ……春蘭様ををおおぉぉーーーっ！！」

放たれた音さえ消し飛ばすように迫る大鉄球。

当たれば巨石すら爆砕する一撃を、獣は地を這うような低姿勢ですり抜ける。

そして――――

「う、あああっ!?」

大鉄球が戻って来るよりも早く間合いをつめ、すれ違いざまに腕を一閃。

腹を深々と抉られ、季衣は血だまりに沈んだ。

「季衣っ!?」

親友のところへ駆けつけたい一心で、ここまで近づいていた流琉だったが、こうしている間にも足を止めずにこちらへと迫る獣を見て歯噛みし……

「消えろっ化け物!!」

生涯の中で、初めて抱いた“純粋な殺意”を込めた攻撃を、獣へと解き放つ。

必殺の気合を込めて放たれた、何のけれんもない、まっすぐな一撃。

それゆえに避けることは困難だった。

実際、獣は避けるつもりはなかったようだ。

獣は、迫りくる破壊の鉄槌を、あろうことか握りしめた“右手”で殴りつけた。

バキィッ！！　グシャアッ！！

直後に響いた音の正体は、お互いの武器が壊れたものだ。

伝磁葉々は鈍い音をたてて、獣の拳を受けた場所を中心として砕け散る。

そして、獣の両手にいつの間にか装着されていた黒光りしている手甲――“黄昏の拳器”もまた、激しいひび割れを被ったようだ。

「うそ……あ！？」

愛用していた武器の重みが消失した瞬間、意識を獣から外してしまったことが、流琉の敗因となる。

気付いた時には、流琉は宙を舞っていた。

右のわき腹付近に、風穴が空いたのではないかと思えるほどの喪失感を味わいながら。

それが、残されていた左拳の拳器による打撃だと気付いたところで、流琉の意識は闇に呑まれた。

（やって――くれるじゃないの、ハセヲ……）

華琳は、内心の想いを表情にこそ出していないものの、その透き通るような瞳に常にはない光を湛えていた。

鍛えぬかれた精神は、胸を焦がすほどに感じられる華琳個人の感情を殺しきっていた。

視線の先で、ハセヲだったはずの者――獣が、大切な部下たちを壊していっている。

地に倒れ伏した春蘭、季衣、流琉はピクリとも動かず、血だまりを大きくしていた。

（覚悟はしていた。全員が無事に帰って来られるだなんて、甘いことを考えるはずがない。それでも……）

この状況は予想外もいいところだという、嘆きにも近い想いが生まれていたことも確かだ。

しかし、それ以上に……王としての矜持が、『力を持つ者』として望んで前線に立とうとする想いを妨げていることに対する悔しさの方が強かった。

今も、疲れ切ったはずの身体をおして獣に相対している秋蘭や凪、沙和、真桜を、ただ黙って見ていることしかできないというのか。

――そう思った瞬間だった。

「――――！」

もどかしい想いを胸に、獣を刺殺さんばかりの視線を送っていた華琳の目が交錯する。

裂けるのではないかと思えるほどに唇をつりあげた、狂笑を浮かべている獣と。

「ＧＷｏｏｏｏｏｏＯＯＯＯＯＯＯＯｌｌｌｌｌｌ！！！」

咆哮が天を衝き、獣の身が朱金のオーラに覆われ――――粉塵を残して消失する。

「「「「――――なっ！？」」」」

秋蘭たちは、目にもとまらぬ疾さで姿を消した獣を探す。

粉塵の立ち昇り方を見るに、超高速で上昇したのだということは分かるが……

（どこへ……っ！？？？？）

あっさりと見つかった。

獣が放つ強烈な殺気が、居場所を隠そうともせずに肌に突き刺さったのだ。

それは、最も護らなければならない存在の――――背後！

気付いた時は手遅れだった。

獣の剛腕は、彼女たちが全力で護ってきた存在を、あっさりと屠るだろう。

そう思っていた――――獣が姿を現した直後に浮かび上がった“赤い影”を目にするまでは。

響いた轟音、駆け抜けた衝撃。

華琳は至近距離でそれらを受けながら、愕然と振り向くことしかできなかった。

一瞬前まで誰もいなかったはずの背後に、二つの人影が現れている。

「ＨＡＡＡａａ――」

「アアアァァ……」

一つは獣。目当ての人物をしとめる邪魔をした存在を、背筋が凍るような悪意ある視線で突き刺していた。

もう一つは、かつて――――目の前の存在（ケモノ）を守護していた人物。

今や曹魏の守護者として、その刃を振るっている“蒼炎のカイト”であった。

「カイト……助かったわ」

カイトは、獣の拳を“虚空ノ双牙”で受け止め、弾き飛ばす。

そのまま華琳の声に応えず、虚ろな視線を獣に固定した。

小柄な体躯が、強大な獣を前にしてより小さく見えたが、立ち昇る気配は今にも決壊しそうな堰(せき)を彷彿とさせるものだ。

その身に収まるはずがないと思えるほどの、尋常ではない力が溢れだそうとしている。

目の前のカイトから、そして――――自身からも。

（この感覚は……あの時の!?）

ポオオォォーーーン

境界を分かつ音が響く。

同時に塗り替えられていく地平線――――いや、世界そのものが遮断されているのだろうか。

カイトが作り上げた認知外空間は、獣と華琳だけを取り込んで完成した。

驚きに目をみはる華琳の視線の先で、直視できないほどの蒼い光が

弾け、収縮した場所には異形が顕現していた。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにまします『女神』の守護者の真の姿――蒼炎の守護神が。

（何て空虚な、それでいて神々しい姿なの……）

展開された刃渡りの長い三枚刃の双剣を手に、カイトが瞬間だが視線を華琳へと向けた。

錯覚だったのではないかと思えるような、刹那の出来事。

しかし、その意味は――自身の中から弾けようとしている力が教えてくれた。

是非もない。

むしろ望むところだと言わんばかりに、華琳は王としての矜持を意識の底に沈める。

代わりに表層へと浮かび上がった、歓喜にも近い想いに身を委ねながら、碑文（ちから）を解放する。

“向こうからやってきてくれた”敵を迎え撃つために。

「いいわ、来なさい！」

胸元に握りしめた右手を当てる。

そこから溢れ出そうとしている氾濫した大河のような力の奔流、たとえようのない全能感が華琳を呑み込もうとした。

だが、それらの力に翻弄されることなく、束ねきった華琳の身体に赤い紋様が疾り……

「私は“ここ”にいる!!　スケィスっ!!!」

超新星の爆発のごとき光を放って弾けた。

降臨するは、赤みのかかった黄金の輝きを放つ巨人。

かつて、天の御遣いが洛陽にて駆った、死神の化身。

ニ千年の時を遡り、受け継がれた想いの碑文(ちから)――憑神“スケィス”が顕現したのだった。

華琳は変わらぬ憤怒を胸に、それでも冷静に感情を制御しきり、力へと転化させる。

（首を刎ねられても死なないというのなら……滅ぶまで斬り捨てるまでよ！）

内心で獣への処断を宣告した華琳は、音もなく具現した処刑鎌を突きつけた。

その横でカイトも飛び出そうとしているのか、バネのように身体を

縮めだす。

――対する獣からも、力の奔流が陽炎のように揺らめき、溢れだそうとしていた。

『武獣覚醒』により、再び朱金のオーラを纏った獣が、両手を背後に回す。

その手は、形を取った力が生みだした大剣を掴んでいた。

直後、獣の背後の空間に縦に亀裂が入り、その奥から――鉄の塊が顔をのぞかせる。

良く見れば、それらは全て大剣だった。

何千、何万といった数の大剣がギシギシと軋みをあげながら大蛇のように鎌首をもたげ、うごめく。

陳腐な言い方をすれば、もはや怪獣大決戦としか言えない光景だ。

半年ほど前であれば、鼻で笑っただろう状況を現実として受け止めた華琳は、カイトと共に、獣が両手に持つ大剣――『大百足』を虚空から引き抜き、地面に叩きつけた音を合図に駆けだした。

同時に、大剣が意志をもっているかのごとく、二人を迎撃しようと迫りくる！

華琳は疾走しながらもショットを放つが、瞬時に掻き消されてしまった。

一つ舌打ち、横へ旋回。

剣群の突撃を回避した勢いのままに、華琳は手に持つ処刑鎌を獣へと叩きつける。

「ＧＲＲＹＹＹっ！？」

処刑鎌を迎え撃った獣は、大剣”大百足”を一撃のもとに叩き折られ、人形のように吹き飛ばされた。

いかに人を越えし獣といえど、神には敵わないということだろうか。

そこに、好機とばかりに回り込んだカイトが突進。

凄まじい推進力が生みだす莫大な運動エネルギーを、自身の巨大な体躯にのせての“ぶちかまし”を敢行する。

「ＧＧＧａａＡＡＡｌｌｌ！」

しかし、空中で死に体となっていた獣の手が、下から上昇してきた剣群の先端にあった一本を掴み、そのまますくい上げていく形で、カイトの攻撃を逃れた。

獣はそのまま掴んでいた大剣の上に飛び乗り、十分な高度を取ったところで剣群を停止。

あたかも、天へと帰っていく昇竜を彷彿とさせる剣群の高みから、華琳とカイトを見下ろす。

そして、おもむろに両手で足元にある大剣を掴み、もとより備わっ

ていた並はずれた膂力に加え、『武獣覚醒』で強化された力を用いて、投擲（とうてき）を開始した。

「くっ、これは！？」

華琳は迫りくる凶悪な剣弾を、処刑鎌で捌きながらも状況把握に努めた。

接近戦では分が悪いと判断したのか、獣は執拗なまでに投擲を繰り返す。

高度上空から射出された大剣は、自重に落下の速度も加えてたやすく音速を突破。

超音速の大剣が大気を切り裂いて殺到、追随する衝撃波（ソニックブーム）が、回避した空間さえも広範囲に渡って押しつぶしてくるのだ。

試しにとショットも放ってみるが、またも効果はない。

かといって、こうして捌いているのも苦しい。

ならば――

（カイト、頼んだわよ）

華琳の瞳に込められた意志を慮ってくれたのか、同じく防御に専念していたカイトが後方へ大きく退く。

逃げるためではなく、戦うために。

そのまま、距離をとったカイトは急上昇を開始。

獣よりもさらに上空まで駆け昇り、一気に降下し始めた。

カイトの降下と同時に、華琳も上昇を開始。

獣を挟みこむように、お互いの距離をつめていく。

「Ｇｒｒｏｏ〇〇ーーー！」

雄たけびに呼応し、獣の背後でうごめき出す剣群から、カイトに向けて剣弾が射出される。

剣群を自由に操れるだろう獣が、両手でしか大剣を投擲できないはずがないと華琳は察していた。

それでもこの状況ならば、獣の意識に必ず隙が生じる筈と判断した華琳は、恐れることなく突き進む。

かすかに意識を向けられた獣の背後――そこに映ったカイトもまた、乾坤一擲の一撃を与えんと、獣に向かって双剣を振りかぶった。

しかし、近づいた分、大きくなった的（カイト）に対して打ち込まれた剣弾は、カイトの身体を削っていき、とどめとばかりに胸の中心に風穴を開ける。

それでも――カイトは止まらない。

「アアアアァァアアっ……ア……」

怯むこと無く、華琳より先に獣へと右手に握られた剣を叩きつけようとしたカイトの手が――止まってしまった。

力尽きたわけではない。

いつの間にか、カイトの全身を絡みつくように具現していた、白い鎖――“黄昏の縛器”によって虚空に縫いとめられたのだ。

縛り上げた相手の能力を封じ、決して千切れることのない能力を失った鎖は、カイトの身を封じ切ることができず、ところどころが砕け散り始めていた。

もはや、指を曲げるのにかかる時間ほどしか鎖が保たない。

解き放たれたカイトは、獣の身体を消し飛ばすだろう。

そして――実際に吹き飛ばされた。

獣の身体が、剣群の下へと落下していく。

――“蒼炎の守護神”と共に。

鎖が千切れ跳ぶ瞬間、人さし指をカイトへと突きつけた獣。

直後、具現した黄の光刃を輝かせる槍――“黄昏の槍器”に頭部を吹き飛ばされたのだ。

対する獣の身体には、欠けたところは見あたらない。

とっさに左手に持っていた大剣で防いだようだった。

何枚もの刃を組み合わせて作られたかのような、非常に重厚な作りの大剣である。

かなりの質量を感じさせるが、獣には問題ないのだろう。

一方カイトは、吹き飛んだ顔の断面から蒼い光の粒子を舞い散らせ、虚構の世界に溶けるように消えていく。

（ここしかないっ！　ここで……必ず貴様を滅ぼす！）

華琳は、砕け散っていくカイトが作ってくれた機を無駄にはしないと、鎌を持つ手を限界までひき絞った。

処刑鎌の刃に収束、集中した力が、太陽のごとき輝きを放ちながら世界を彩る。

カイトの消失によって、認知外空間の維持ができなくなりつつある中、ほとばしる光の斬撃が獣を切り裂かんと迫り……

「ＷＯＯＯＯーーーーっ！！」

「なっ！？」

獣が持つ大剣へと処刑鎌を叩きつけ、刀身を弾き飛ばした――と華琳は思ったのだ。

すぐさま追撃をかけようとした華琳の周りに浮かぶ、朱金に輝く六つの物体。

華琳が弾け飛んだ刀身だと思っていたそれらの物体の正体は、一本の大剣から分離した”六本の剣”であった。

重力に逆らい、虚空に浮かぶ剣の一本を、スケィスの攻撃によって吹き飛したと思っていたはずの獣が『掴む』。

（まずっ！？　……っつあ！）

獣は朱金のオーラを煌めかせ、何も無いはずの“空”（くう）を蹴って華琳へと垂直落下。

大上段から剣を一閃、左の肩口を深々と切り裂く。

（ぐっ……反、げき……を！？）

鋭い痛みに加え、斬られた場所から凍りつくような冷気を感じながらも華琳が処刑鎌を振り抜こうとした瞬間だった。

目の前にいたはずの獣が、朱金の輝きを残して消失。

同時に、背後に生まれた気配と、何かを掴む音を捉える。

「あぐっ！？」

とっさに背後へと振りかぶった華琳を嘲笑うかのように、今度は右方から現れた獣が、すれ違いざまに一閃。

加速した身体を止めることなく、残像を残して視界から消える。

（な、ぜ……？）

いま微かに捉えた剣は、先ほど持っていた剣とは異なっていた。

いつの間に背後に回った？

いつの間に持ち替えていたというのか？

碑文で強化された華琳の感覚でさえ、獣の動きは捉えきれない。

そこからは一方的な展開となってしまった。

斬、斬、斬、斬、斬、斬！

容赦ない斬撃が、スケィスの背中を、首筋を、腹を斬り裂き、左腕を、右足を、角を斬り飛ばす。

華琳は、竜巻の中心に呑み込まれてしまった人形のように全身をズタボロにされ、虚ろな視線で獣を見つめていた。

あまりに甚大な痛撃に晒されたためか、感覚はなくなっている。

それでも、手を伸ばそうとする心を諦めることだけはできなかった。

（わ……た、し……は……）

自身の願いのためにも、この身に付き従っている者たちのためにも、歩みを止めるわけにはいかないと、右腕に砲身を形成し始める。

「ＷＷＷＯＯＯＡＡＡ

そこへ、何かを察知した獣が絶叫をあげながら、獣が上空から高速落下。

だというのに、幻術にでもかかっているのか、それぞれが異なる剣を持つ”獣たち”が前後左右から斬撃を放つ。

残っていた手足さえ斬り飛ばされ、集い始めていた力は虚しく霧散していった。

（ここまでか……）

華琳のかすれゆく視界が、最期だとばかりに捉えたのは、自身へと迫る“朱金の流星”。

それは狙い違わず、スケィスの胸の中心にある赤い水晶球へと突き刺さり、込められていた力を炸裂させる。

直後――――空間（せかい）が震えた。

突き刺さった剣から、解き放たれた獣の力がスケィスの内部にとどまりきらず拡散したのだ。

ばら撒かれたエネルギーによって、不安定となった世界さえも崩壊していく。

不世出の英傑であった少女の命と共に――――

（ああっ、もう!?　どうして非常時にはこうも立て続けに面倒事が起きるのよ!）

曹操軍の頭脳である筍?――桂花は、主不在という非常事態に加え、獣の強襲によって主要機能が麻痺している状態で迫りくる孫家軍に対抗するための指示をとばすべく、奮起していた。

内心の愚痴を言葉にすることができないほど、小さな口は休むことなく動き、指示を飛ばし続けている。

本当は華琳のことが心配でならなかったのだが、どうやら馬鹿二号（カイト）が絡んでいるようなため、そちらは何とかなるだろうという予感もあった。

当初こそ何を考えている奴か分からず、男嫌いであるという以前に生理的嫌悪感を抱いていた桂花だったが、日々を過ごすうちに、“そういう存在”なのだと割り切れるようになったのだ。

（信頼できるかどうかは、その点は鋭い馬鹿一号（しゅんらん）が信頼しているようなので大丈夫だろうと判断していた）

「何としても、華琳様が戻られるまではっ……て、きゃあああああっ!???」

桂花は巻き起こった風と砂塵に叩かれながら、何が起きたのかを見

渡そうとした。

一番に目に入ったのは、自分から２０ｍほど離れた場所に着地した忌々しい獣だ。

次いで、数瞬遅れて獣の周りを囲むように降りそそぎ、大地に突き刺さった五つの鉄の塊。

形状は変わっているが、おそらく剣なのだろうと当たりをつけた。

（って、冷静に観察してる場合じゃないわ！？　対抗手……だん、を……！？）

桂花、周囲の曹家軍、孫家軍たちの視線が獣に―――獣が掲げるモノに釘づけになった。

獣が何とはなしに伸ばした右手に、吸い込まれるように天から落ちてきた、一振りの剣。

獣はその剣を―――その刀身で貫いている“モノ”を、周囲に見せつけるかの如く高らかに誇示していた。

それは、脱力しきった手足を放り出し、黄金に輝く特徴的な髪を力無く垂らした、かつての主君だったはずの存在で……

「いやぁ……いやあああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁあああああーーーーーーーーーーっ！！！！」

声の限りの絶叫が荒野に響く。

とたん、桂花の身体から燐光が溢れだした。

不可思議な紋様が身体を覆いはじめると同時に、明滅を強めだし……

「筍？様っ……なあっ！？」

まさに弾けると思われた瞬間だった。

獣は、持っていた大剣を無造作に打ち捨てると、空いていた左手をスッと桂花に向ける。

突如、息苦しくなるような圧迫感を伴い、上空から〝龍〟が出現した。

おびただしい数の大剣で形成された、大いなる存在が。

その光景は、圧倒的という表現すら消し飛ばして、自身の存在を見る者たちの意識に鮮明に刻みこむ。

――曖昧な認識を抱かせる余地なく、アレは人には決して対抗しえないモノだ、と。

すると、ギシギシと不快な音を上げる龍の身体が――弾けた。

死と破壊をまき散らす、無慈悲なる大剣（あめ）が降り注ぐ。

その中で、とっさに軍師を護ろうと前に躍り出た兵士ごと、桂花はその小さな身体を大剣によって貫かれてしまったのだった。

――夢ならば早く覚めてほしい。

常ならば弱い心から生ずる逃避の気持ちだと一蹴しただろう想い。

しかしながら、孫呉の暫定最高責任者である孫権こと蓮華は、そう思わずにはいられなかった。

姉の死、曹魏による侵攻、大切な仲間であると同時に想い人でもある少年の失踪。

激流の如く押し寄せた出来事は確かに蓮華の心を凍りつかせたが、だからといって自分の為すべきことを忘れはしなかった。

現時点では未完の大器だとはいえ、蓮華は生まれた時より孫呉の王族たらんと覚悟を抱いて生きてきたのだ。

不測の事態を受け入れる心構えは、できていたはずなのである。

そんな彼女が、なぜ王としての在り方を見失っているかといえば……

（一体、何が起きているの!?　どうしてしまったのよ……ハセヲ!?）

変わり果てた人物（ケモノ）が戦場を駆けまわっていた。

いや、獣から見ればここは戦場ではなく“処刑場”と呼ぶべきだったのかもしれない。

抵抗という言葉が馬鹿らしく思えるほどの、一方的な蹂躙。

何が彼をそこまで駆り立てているのか……

当初こそ蓮華は、一つしか思い浮かばない理由に対し、”妹”としては感謝を、”女”としては悔しさを覚えた。

しかし、今やそんな事を考えている状況ではなくなっていた。

「蓮華様、お下がりください！　今の奴は……”我らにまで”殺気を放っています」

「そんな……」

思春が、完全に表情を消した顔で信じられないことを口にした。

大剣による広範囲殲滅攻撃を受け、曹家軍はもはや壊滅的だ。

だというのに、獣は大地に突き刺さった大剣を――敵味方関係なく無差別に振るいだした。

元の所属を同じくする、旅団時代からの仲間たちにさえ。

「アレをハセヲだと思ってはいけません！　アレはもう……っ！？」

「ハセヲ！？」

思春が息をのんで見つめる先。

そこには、重力の枷（かせ）から解放されたかのような驚異的な跳躍をみせ、間近に現れた獣がこちらを見据えていた。

赤銅色の刀身を、更なる鮮血で染め上げた――”紅蓮剣・赤鉄”を携えて。

そしてこれが――彼女たちが見た最期の光景となる。

この日、大陸を三分する勢力の内の二つが、たった一匹の獣によって滅ぼされた。

「遅かったか……」

つぶやいた言葉は、誰に聞かれることもなく、景色にとけていった。

言葉では表せないような酷い光景。

大地は抉れ、紅く染まり、死臭ただよう人だったモノの残骸が散乱

している。

そして、大剣がまるで墓標のように突き刺さっていた。

その中心に――この世に地獄を体現させた獣が、未だ尽きることのない殺意を放ちながら天を仰いでいる。

「こうなってはもう……仕方あるまい。退場願うとしよう……」

静かに、されどそれが変わらぬ事実だとでも言うように宣言し、地獄に足を踏み入れていく一人の男がいた。

旅人が用いる外套で全身を覆っているため、風貌は分からない。

それでも、フードからのぞく眼鏡の奥にある瞳は、地獄を目にしたというのに揺るがぬ力強さを感じさせた。

「ＧＹＹＹＡＡＡ――！」

ここで、獣が男に気付いた。

新たな得物の登場に目を輝かせ、近くに刺さっていた大剣――”シラード”を引き抜く。

対する男は、そのまま歩を進めるだけ。

その手には何も持ってはいない。

代わりに――外套の下から、”水色の燐光”が溢れ出していた。

「その目に焼きつけろ……」

「ＧｒｒｒｒｕｏｏｏｏＯＯＯｌｌｌ！！」

神速の踏み込みからの超加速――――獣の姿がかすむ。

高まる力を刃にのせ、さらに細く、どこまでも鋭く。

全ての力を一点に――――

黒の弾丸となった獣は、突き出したシラードで男の頭部を吹き飛ばす……ことはできなかった。

「我が――――――――――――よ！　これがっ！！」

シラードは、“男の声の一部”と“空”のみを斬る。

完璧な見切り。

身体を半歩ずらしただけの最小限の動きでシラードを回避した瞬間、男は重心を落とした。

両足で大地を踏みしめ、勢いのまま突進してきた獣の頭を――――右手のみで掴み止める。

瞬間の威力であれば、１０ｔトラックに正面衝突を受けるのと同等の衝撃を受けたにもかかわらず、男は後退することなく、獣を完全に受け止めきったのだ。

しかも驚くべきことに、男の動きはまだ止まっていなかった。

男は、獣を受け止めたままの体勢でいながら、さらに力を絞り込む。

「お前が抱いた現実だっ！！！」

「ＧＷｏｏっ！！」

渾身の力で獣は地面に叩きつけられる。

そのまま反動によって、獣の身体が宙を舞った。

狂気に輝いていた目は光を失い、手足は脱力しきっている。

とはいえ、頭が砕けていてもおかしくない衝撃を受けたにもかかわらず五体満足であるあたり、末恐ろしいとしか思えないのであるが……ここが終焉のようだった。

元の色を取り戻した獣の目が、その光景を捉え見開かれる。

意識が跳んだ一瞬の隙に、男が構えていた武器――“冥銃剣・逢魔ヶ刻”に集い始めている力。

獣の身体を瞬時に蒸発させるだろう、絶対的な力が溢れていた。

集った力に呼応してか、輝きを増して立ち昇る水色の燐光が、周囲の空間をも蒼く染め上げていく。

「……慈悲だ」

短く呟かれた言葉と共に撃ち放たれた蒼の閃光。

放たれた一撃は、力無く落下してきた獣を呑みこみ、獣を構成する想いを、更なる想いで包み込み、滅ぼしていく。

「――――――！」

断末魔の叫びすら消し飛ばし、獣の姿が爆炎に呑まれていき……完全に消滅した。

「クッ、あとは蜀を残すのみというところで……。あの男、一体何者でしょうか？」

獣が誕生した森から少し外れた場所に、一人の青年が立っていた。

眼前には森の木々しかないのであるが、青年には別の光景が見えているようだ。

眼鏡の奥の瞳は、何かを食い入るように見つめ、動きまわっている。

それからしばらく視線をさまよわせていた青年は、フゥと疲れたような溜息をこぼした。

「仕方ありません。また一から力を集め直さねばなりませんが……幸いなことに供給場所は今出来たばかり。頑張るとしましょう」

気を取り直すように顔を上げた青年は、いつの間にか黒い本を手にしていた。

途端、森の中にこだましていた鳥や虫の鳴き声、小動物たちの気配といった、生命の営みの証が失われる。

痛すぎるほどの静寂。

その中に、パラパラという音だけが響く。

風が無いにもかかわらず、ほんのページが勝手にまくられていく音だけが。

その様子を興味深く見据えていた青年の顔が――

「そこまでよ」

「――――!?」

驚愕に染まった。

自分の手を万力のように締め上げる鍛え抜かれた手。

どうやって隠しておけたのかと思えるほどの、人ならざる気配。

極めつけは、青年が今まで聞いたことがないほどの、抑揚のない声。

「貂蝉っ!?」

「終わりよ、于吉。もう逃がさないわ」

于吉は瞬時に浮かんだ疑問を押し殺し、逃げるための算段を講じようとしたが……

「無駄よ。老人たちに掛けあって、力を一時的に解放してもらっているの。術を使う暇は与えないわ」

「……」

そうはさせじと、貂蝉は空いている手を于吉の下腹部――丹田に添えた。

少しでも妙な気を起こせば、という警告である。

丹田は氣の流れの起点になっている重要な場所だ。

ここを乱されれば――転移のような高度な術を使用するならばなおさら――力は制御を離れて暴走、術者に牙をむく、という訳である。

ならば、純粋な力で……いや、考えるまでもない。

（これは……詰み、ですね）

黒い本――『太平妖術』も押さえられてしまった以上、自分たちの望みを叶える手段は無くなったということだ。

ここに、于吉は完全に封殺されてしまった。

「……全く、あと一歩というところでこのザマですか。せっかく、

あれほどの力を与えたというのにっ、ぐぅ！？……使えない男でしたね」

「……ハセヲちゃんは、何も与えられてなんかないわ」

貂蝉は締め上げる手の力を強めつつ、さらに感情を消した声で訂正を入れる。

「あの子は“全てを失った”だけよ」

「……」

「貴方たちと……私のせいでね」

その言葉を最後に、二人の人物の姿が消失した。

森に満ちていた不穏な空気の元が消えたせいか、再び森が本来の姿を取り戻す。

先ほどまでの静寂が嘘だったかのように、森はこの地に生きる存在を穏やかに迎え入れていた。

――BAD　END

蛇足

???　side

「……大したものじゃな、さすがは三国に名高い伏龍、鳳雛というわけじゃ」

朱「いえ、これも卑弥呼さんの協力あってのことでしたから」

雛「はい、私たちが特別に何かをしたわけじゃないですよ」

「ほう……儂はただ、もうすぐ曹魏が孫呉に侵攻しそうだという話を広めただけなのじゃが……。何のためだったのか、後学のために御教授願えぬか？」

戦いの始まりから結末までを見届け、儂は思わず興味深げに小さな軍師たちに問いかけた。

この年で、よくもこれだけの成果を出せるものだと思うわ。

朱「はあ……構いませんけど。
まずは、基本的な考えからです。損失を可能な限り抑え、多くの利益を得ること。これが策の理想ですよね」

雛「今回のような三すくみの状況の場合ならば尚更です。そのために目指すべき最高の状況は、『直接的にも間接的にも関わらないこと』なんです」

朱「原因になるのではなく、原因を生み出せばいいだけの話なんですよ。主犯になるのではなく、主犯を用意するのでもなく、私たちとは関わり合いの無い誰かが主犯になる状況、因果関係を積み上げる必要があった訳です」

「……言いたいことは分かるが、そんなに単純な話ではあるまい？」

当然の疑問だった。思わず言葉尻が上がってしまう。

朱「いえ、実はそう大したことじゃないんです。大ざっぱに言ってしまえば、朝起きた時に顔をきちんと洗うといったような、日々ささいな決まり事を守る程度の話ですから」

「ささいな決まり事、な……」

明言は避けたいようだが、本気で隠しきりたいわけでもないらしい。

儂の呟きに、無言を貫いた二人をしばし眺める。

先ほどの言葉の裏に、どれだけの労力を払っていたというのか。

「話を遮ってすまんかったな。続けてくれ」

「いいえ」とだけ返した二人は、話を再開した。

雛「幸いなことに、曹操さんは英雄と謳われる孫策さんと決着をつけることに執着されていたので、絶好の機会だと思いました」

朱「でも、曹魏には隙が見つかりませんでした。あの陣営は曹操さんに利権が集中しきってますから、入り込める余地が無かったんです。
ですから……」

雛「狙うならば、孫呉。そう結論付けました。
とは言っても、そちらだって一筋縄ではいきません。孫策さんはあ見えて隙の無い人物です。論理を超えた思考（カン）の持ち主でもあるため、私たちの手に負えない事態も考えられました」

朱「ですが、そこで気付いたんです。
孫策さんを始め、孫呉の幹部たちの心を掴んでいるハセヲさんという存在を突けばいいのではないか、と」

雛「そう考えていた折、卑弥呼さんと出会ったんです。この世界を取り巻く詳しい状況、“太平妖術”という本を利用した者たちの企みを教えていただいて……覚悟を決めました」

朱「この手をどんなに汚そうとも」

雛「桃香様に大陸を治めていただくために」

「「私たちは、ハセヲさんの心を、強さを利用する、と」」

「……」

この者たちは分かって言っておる。

その方法が、いかに人の道に背いていようとも、望む世界を手に入れるために。

雛「……決めてしまえば行動は簡単でした。間者を放ち、ハセヲさんが誰に一番心惹かれているのかを調べたんです」

朱「仲間内でヘタレ扱いされているものの、一度その気にさせてしまえば……あとは一直線ですから。ああ見えて、一途な方のようでしたからね。
以前に天の世界のお話を聞く会に参加した際にも反応を窺ってみたところ、同じ印象を受けましたし」

雛「調査の結果、孫策さんが最も大切な存在だと判明したところで、あとは孫策さんをどのようにしてハセヲさんを揺さぶるか考え……一つの手を打ったんです」

朱「孫策さんに恨みを抱いている人たちの背中を押してあげたんですよ。流言を操作し、彼らの怒りをあおり……計画通りの悲劇が起きました」

なるほど、そろそろ話が見えてきたわ。

そこで儂が広めていた話に喰いついてくるかもしれない于吉たちをも利用したというわけか。

“太平妖術”の力でハセヲを強化、かつここで“太平妖術”さえ押さえておけば、于吉たちは何もできなくなるわけだからな。

その点で言えば確実性があったわけではないが、博打に出て勝った

というわけじゃ。

まあ、元々于吉たちが現れずとも、十分な結果は得られたのだろうがな。

雛「あとは、卑弥呼さんの言う“世界の崩壊を企む存在”がどう出てくるかというところでした。呂布をも倒す力を持つハセヲさんが本気になれば、曹魏を相手にしてもかなりの痛手を与えてくれると思っていましたけど……これは想像以上の結果です」

「うむ、于吉もハセヲとやらに相当期待しておったようじゃ。ゆえに、ダーリンに倒されてしまったのがよほど悔しかったのであろう。でなければ、捕らえられたかどうか……。

とにかく策は見事成ったという訳じゃ。今や曹魏と孫呉は壊滅状態。これで大陸は劉蜀が取ったも同然。

ならば誇るがよい。そうでなければ、死んでいった者たちが浮かばれん」

「「はい」」

今回の戦で、十数万もの人間が犠牲になった。

もっと上手い方法があったのかもしれんが、儂も結局この計画に賛同したのだ。

ならば、顔を曇らせてばかりではおれんわ。

この戦いで犠牲となった者たちより、もっと多くの者たちを救うべく励まねばならん。

それが、この戦いに関わった者としての義務であり、許される筈もないが贖罪の一端にもなるのだろう。

そんなことは無論この二人も分かっている。

心の奥で凄まじい葛藤に苛まれているのだろうが、それを苦に足を止めることはないだろう。

身体はか弱くとも、心は紛れもない英傑であると同時に、もう一つの心（ちから）を宿してもいるのだからな。

「さあ、これからはお主たちがこの大陸の舵（かじ）取りを担うのだ。しっかりと励むがよい！
策謀家（ゴレ）の名を継ぐ少女たちよ……」

そう言い放った儂の視線の先――変わらず佇んでいた少女たちの気配が突如変質した。

その身体に薄く煌めく“緋”と“水“の燐光を纏い、年に似合わぬ艶（つや）やかな笑みを浮かべ……

「「我が生涯をこの国に」」

どこまでも透き通った声に曇り無き意志をこめ、宣誓を述べたのだった。

？？？ｓｉｄｅ　了

# 番外編　～神と人と獣～　『結』編（後書き）

ここまで読んで下さった読者の皆様、本当にありがとうございます！！

この話は、本編では起こりえない、起こってはいけない話ですよね。

こんなに極端な話は無いと思いますが、これも一つの結末かなと思いながら書きました。

今日という日を見据えた取り組みを狙ってもいたんですけどね。

（エイプリルフール）

まあ、原作が好きな方から見れば、ふざけるな！と言われそうですが・・・

原作キャラを好き勝手に扱ったり、リミット技出したり、マジカルなアンバーさんの引用をしたりと、やりたい放題でしたからね。

その代わり、本編はきっちり締めてみせます！

何かご指摘があれば、コメントください。

答えられる範囲でお答えします。

ちなみに、一部情景描写や戦闘描写で手抜き・・・もとい省略している部分は、本編の方で詳しく書きますんで！

それでは、またいつの日か♪

## とある恋姫の日常風景　『星』編（前書き）

今回からは拠点話シリーズをお送りしたいと思います！

第一弾は時系列的な関係で、アンケートぶっちぎりだった『華琳』のはず・・・だったんですが、予定変更で『星』の話になりました。

この話の元ネタは、私の大好きな作品のエピソードを参考にさせてもらっています。

書いていて、やはり星は良いキャラしてるなと、改めて思いました。

同じ気持ちを抱いていただけたら幸いです。

それではどうぞ！

「ふふふ……ふっふっふ……」

腰に手を当て、胸を張り、星はこれ以上ないほどの笑みを浮かべて仁王立ちしていた。

本人はひたすら『決まった姿』を演じているらしいが、傍目には怪しい人物にしか見えない。

「はぁーはっはっはっはっ！」

吹き抜ける風に負けじと、声高に繰り返される笑い声。

後ろにまとめてある髪と、服の裾をたなびかせ、星は高らかに宣言する。

「ついにこの日が来た！　南蛮大麻竹を用いて作られた『伝説のメンマ』の販売日―！」

彼女の魂の叫びが街にこだまする。

「――というわけでだな、手伝ってほしいのだ！」

何が「というわけ」なのかよく分からないが、手伝うことはもはや星の中では確定事項になっているらしい。

星の無闇にキラついた視線を受け止めながら、ハセヲは隠そうともしない盛大な溜息を一つ。

「なんで俺が……と、いうかな……」

一旦言葉を切り、最初から思っていた事を星に突きつけるべく力を溜める。

なるべく下を見ないように心がけながら――――

「なんでこんな所に連れてこられなきゃならねぇんだ!!」

「何を言っている！　気合の問題に決まっているだろうがっ!!」

ハセヲの渾身の指摘を、星は動ずること無く断言してしまった。

その顔には言葉通り、「何を当然なことを言っている」という感情が見え隠れしている。

ハセヲが星に朝早く叩き起されて連れて行かれたのは――――城壁の上。

しかも、特につきでるように高くなっている部分の頂に、である。

ハセヲの指摘は最もなものだと思われるが、ここにはそれを肯定してくれる人物は存在しなかった。

「一生巡り会えぬと思っていた品が、本日販売されるという情報を聞きつけたのでな！　しかし、そこには大きな制約もついていたのだ」

「制約？」

「うむ！　一人小瓶で三壺までしか買えぬというのだ！」

「いーじゃねえか、三壺もありゃーよぉ」

よほど面倒なのか、ハセヲは投げやりに言い返している。

その言葉を聞いた星は、

「なんだと！？」

信じられないといった感じの叫びをあげた。

「次の入荷はいつになるか……いや、そもそも今後も入荷されるのかすら分からぬほどの貴重品なのだ！　ここで全力を尽くさずしてどうするっ！！」

「いや、仕事しろよ。お前、今日は休みじゃなかったはずだろ？」

「ハセヲ、今を生きている我らに最も必要なものは何だと思う？」

質問を質問で返された。

しかも、現実に連れ戻すつもりで放った言葉が、星の様子を見る限り全く効いていないのは明らかだ。

そこでハセヲは、星の意図を掴むために敢えて話にのった。

「そうだな……目的や目標、か？」

「そう、分かっているではないか！　つまりだ、今日という日を逃しては……このメンマを手に入れることができなくば、趙子竜という人物の価値は半減してしまうといっても過言ではないっ！！」

（――メンマでお前の価値は左右されちまうのか？）

そう言いたいハセヲだったが、ここで「当然だ」などと言われてしまったら、自身が抱いている趙雲のイメージが粉々に砕けてしまいそうだったので、何とかこらえることにしたようである。

「ハア、俺も暇じゃねぇんだがな」

「ふむ、月に起こされる前に連れ出してしまったことは申し訳ないと思っているが、そこまで態度を損なわれるというのもどうかと思うぞ？」

「おいっ！？　別に月は関係ねえよ！　俺はただ一般論をだな……」

「いやいや、風も稟も気にしていてな。ハセヲは最近朝は機嫌が良いようだと「分かった！　行けばいいんだろ！」……恩にきるぞ♪」

半ばうなだれるように、ハセヲが了承を告げる。

（やはり、持つべき者は頼(いじ)りがいのある主よな）

星は満足気に頷くと、改めて笑顔を浮かべた。

「さて、では今日という良き日を共に喜びあおうではないか」

再び、星は手を腰に当て、豊かな胸を突き出すように背をそらし―

――

「はぁーはっはっはっはっは？」

力の限り続けようとした笑い声を途切らせることになった。

「はぁ！？」

普段ならば、何てことはない風。

しかし、今日の星は舞いあがりすぎていたうえに、場所も悪かった。

背中を押されるも、すぐにバランスを保とうと踏み込んだ足の先には――屋根が無かったのだ。

「あああぁぁーーーっ！！」

笑い声は悲鳴へと代わり、星の意識はそこで途絶えた。

星　ｓｉｄｅ

「――――っ！？」

私は跳ねるように上半身を起こした。

何か途轍もない事に見舞われたかのように、動悸が激しい。
体温も上昇しているようだ。

とにも、状況を把握しようと辺りを見回す。

おかげというべきか、混乱はすぐに収まってくれた。

――見慣れた仲間たちの姿があったから。

「どうしたんです、星？」

「え、ああ……いや……」

見慣れた筈の稟の姿にどこか違和感めいたものを感じながらも、とりあえず口を開く。

「夢を……見ていたようだ。細かくは思い出せないが、心地の良いものだった」

私がいるのは、月と星、焚き火の明かりだけが頼りの夜の荒野。

耳に入ってくるのは、焚き火が爆ぜる音と、お互いの息使い、そして風の寝息だけ。

稟は火の番をしてくれていたのか、適当な長さに折った枝をくべながら、こちらの顔を覗き込んできた。

（ん？　稟はこのように柔らかく笑う者だったか？）

私の内心の疑問には気付かず、稟は表情に好奇心をにじませて口を

開いた。

「夢ですか。どのような夢だったのです？」

「うむ、それがだな……」

その件は、私も気にしていたことだ。

疑問を一時意識の底にしまい込んだ私は、自分自身でも確認するかのように言葉を紡ぎ出す。

――一つ一つの記憶の断片を噛みしめるように。

「私と稟と風と。主としても、女としても生涯に渡って付いて往こうと思える男と出会い、共に戦っていたのだ。そのような人物がこの大陸にいるとは思えないが……」

言ってみてから、馬鹿みたいな話だと思った。

そもそも、有名勢力の長はほぼ女性なのだ。

そんな人物がいるならとっくに噂になっているはずだった。

到底、現実味のある話ではない。

「ほう、私や貴女が、ですか。それが本当になるなら嬉しい話ですね」

「ふっ、しょせんは夢の話だ。私にすれば、まだそんな都合の良い感情を抱いていたのかと、少し呆れたくらいだ」

そう言って、肩をすくめてみせる。

世の中、そんなに都合の良い話などほとんど無い。

そんな現実（こと）、身をもって知っていたはずだったのに――

「――別に良いのではありませんか？」

「――え？」

思いがけない稟の言葉に振り向く。お互いの距離は変わっていない。なのに、よく顔が見えない。声も心なしか遠くなっているようだった。

「貴女はその気持ちを抱いたまま精進していけばいい。その方が、貴女はきっと強くなれる。私にはそう思えるんです。これといった根拠のある話ではないのですが……」

そこで時間切れのようだった。

私の意識が闇に呑まれていくかのように暗転していく。

「その仕えるべき“方”に巡り会いたいのならば……なおさらでしょう」

ふと目が覚めた。ここ数カ月で見慣れた天井が目に映る。

「何ということだ、私としたことが……」

思わず呟いてしまった。

どこまでが夢で、どこからが現実だったのか。

特別に痛むところもない身体を見まわす。

（あれから……どうなったのだ？）

ハッキリとしない頭を振り、とにもかくも、やるべきことをしようと慌てて身支度を整えて部屋から出た。

（まずはハセヲに声をかけて……いや、先に厨房によるとしよう）

妙に喉が渇いていたため、厨房に向かって歩き出す。

途中では誰ともすれ違わなかったが、厨房には人の気配がした。

彼女はすぐにこちらに気付き、明るい声をあげてくる。

「あ、おはようございます」

「ああ、おはよう」

挨拶を返し、流琉に一言告げてから水を飲む。

あまり喉の渇きが潤った気はしなかったが、少しはマシになったようだ。

「流琉、日が昇ってからどれくらいたった？」

「まだ四半刻（約三十分）ほどですよ。朝早いんですね、星さん」

「……は？」

予想外すぎる返事が返ってきた。

いくら何でもそれはないはずだ。

私がハセヲの元に向かったのが、日が昇ってから半刻（約一時間）ほどたってからだったのだから。

（まさか……）

「では、私はどれくらい気を失っていたのだ？　まさか丸一日だったとは言うまい？」

「……気絶、ですか？」

理解できないといった感じで流琉が聞き返してくる。

「気絶って、何かあったんですか？　星さんたちが“昨日”この城にやって来てから、特に変わったことは……ありましたけど、それはハセヲさんと春蘭様のことで。星さんには何も無かったと思うんですけど」

「なに？」

どうやら丸一日気絶していたため、翌日を迎えてしまったという訳ではないらしい。

だが、気にかかったのはそこだけじゃない。今、流琉は――

「流琉っ！　今日は何日だ!?」

「……え？」

戸惑いながらも流琉が教えてくれた日付は――

（そんな……馬鹿な!?）

私がこの国にやってきた翌日だったのだ。

堪らずに厨房を駆けだす。

流琉が何かを叫んでいるようだったが、気にする余裕もなく、私は夢中でハセヲの元に向かおうとしか考えられなかった。

記憶通りならと、ハセヲの部屋を目指して走っているうちに、全く違う廊下を走っていることに気付いた。

急に景色が、場所ごと変わってしまったとでもいうのだろうか。

相次ぐ不可思議な現象に、私の感覚は参ってしまったかのように鈍

くなってしまっている。

それでも足は止まらない。

そのままどれほど走ったのか。気がつけば、大きな扉の前に立ちすくんでいた。

見覚えは――――ある。

この扉を開いた先に目に入る光景も、その後に起きる出来事も全て『分かっている』。

「……」

頭の中は依然として混乱していたが、身体は反射的に動いた。

『あの時と同じように』、重槍“静カナル翠ノ楽園”を喚装し、扉を斬り裂く。

そしてその先には――――

「僕を見下すなあああぁぁぁああーーー！！」

「テメーの心に聞いてやらああぁぁーー！！」

あの時と同じ光景があった。

そして、あの時は失敗した。

良い気になって油断していたところを、張譲にしてやられたのだ。

ならば――

（よく分からんが、今度は失敗しない！　同じ過ちは……繰り返さない！）

私はあの時以上の気迫を纏い、ハセヲを背後から狙う触手へと疾走する。

これで本当に過去をやり直せるのかは分からない。

それでも、何もせずにはいられないという想いに従って、槍を振り上げた瞬間。

――私の意識が強制的に遮断された。

（ここはどこだ？　夢なのか？　現実なのか？　そもそも……私は生きて“ここ”にいるのか！？）

私は何度なく目覚め、再び眠るを繰り返し、何が確かなものなのか区別がつかなくなりつつあった。

初めてハセヲと出会った時の記憶、初めてメンマを食べた時の記憶、初めて槍を持った時の記憶、優しく母親の腕に抱かれている、乳飲み子だった時の記憶。

私という人物の記憶を逆行している夢だとでもいうなら、ここが終点のはずだった。

これ以前の記憶など存在しない。存在しないはずなのに……

「やめろ……」

私の意識が再び落ちようとしている。それも、これまで以上の強制力をもって。

「やめ――――っ！？」

本能的な恐怖を感じた私の抵抗も虚しく、何度目かも分からない闇に呑まれた。

星　ｓｉｄｅ　了

そこは城からほど近い森の中。その中において少し開けた場所にある岩の上に二人の人物が月見酒をしていた。

互いに背中を預け合い、杯を交わし合う。

顔が赤いのは、お互いに酒だけのせいではないのだろう。

そう思えるほどの世界を、彼と彼女は作り上げていた。

ただ傍にいてくれるだけで全てを許せてしまえそうに思えるほどの、

無条件の信頼関係。

どこか危うげにも思えるほど近い、心の距離。

それを作り上げているのは、月明かりを反射して煌めく、白い学生服らしきものを着た少年と……

（あれは……私、か。後ろにいる男は……誰、なん、だ？）

自分の知らない“星”が、見たこともない男と酒を酌み交わしている光景を、星は夜空から俯瞰していた。

男は、自分が知るはずもない人物のはずだ。

そのはずなのに、胸が妙に痛む。

知らないはずの声を懐かしいと思っている気持ちが、なぜか生まれていた。

“彼”が何かを話すたびに、“自分”は本当に嬉しそうに口を開く。

愛おしげに“彼”の名を“自分”が呼んでいる。

それを受けて、“彼”もまた、“自分”の真名を呼ぶ。

まるで、恋人同士のような光景。

星は、はっきりと羨ましいという気持ちが段々大きくなっているのを認めていた。

自分の知らない、この“自分”は、望む人を手に入れたのだろう。

“彼”は、ハセヲと違って優しい言葉をたくさんかけてくれている。

“彼”は、ハセヲと違って柔らかく微笑んでくれている。

“彼”は、ハセヲと違って――“自分”のことを『女』と認識して接してくれている。

どれもが、ハセヲがもっていない『男』としての魅力だった。

もしかすると、どこか遠い場所（せかい）で、“彼”のことを好きだったことがあったのかもしれない。

それでも――

（ハセヲに――会いたい）

星は、心からそう思った。

今見ている光景が、何であろうと関係ない。

（私はハセヲという存在を知っている）

（ハセヲの不器用な優しさを知っている）

（私を、命を懸けて救ってくれた覚悟（おもい）を……知っている）

共に戦い、笑い、過ごしてきた中で生まれた、星のハセヲに対する想い。

むざむざ目の前で見せつけるかのように、甘い世界を作っている二

人に構っている時間など、もはや星にあるはずもなかった。

（この“私”にできて、私にできないはずがない！　さあ、いい加減に目を覚まそう。ここは私がいるべき場所ではない）

星は最後にもう一度、幸せそうな“自分”を見やり、頭を振って目を閉じた。

目を開けて見えたのは、見慣れた天井だった。

そこまでなら、まだ夢の中かと疑るところだったが、前回までとは決定的に異なる点が一つあった。

（この痛みは……どうやら現実らしい）

痛みを感じることが嬉しいなどと、今後は思う事がないだろう――――複雑な心情の星だった。

どうやら落ちた時にケガを負ったらしい。

それでも背中と肩に鈍痛を感じる程度。

骨に異常は恐らくないだろうと判断できた。

あの高さから落ちたにしては、奇跡的なものだ。

（帰って来られた訳だ、私の現実に）

まだ、最後の余韻が残っているのか、どこか後ろ髪を引かれる想いを断ち切ろうとするかのように、引きつるような痛みを堪えて上半身を起こす。

そして、隣にいた――――最初から気付いてはいた――――ハセヲと視線が重なる。

先に口を開いたのは、ハセヲだった。

「気が付いたか。何か色々とうわ言をつぶやいてたみたいだが……？」

「ああ、もしかすると走馬灯を見ていたのかもしれん」

「シャレにならねぇ事を言うんじゃねえよ。下に洗濯する予定だった敷き布団の山がなかったら本当に死んでたかもしれなかったんだぞ！？」

「ああ、心配かけてすまなかった」

さすがに、ここで死んでいたら間抜けすぎるとしか言いようがない。

星は、素直に謝ることしかできなかった。

（今回は本当に迷惑をかけたからな。ん、そういえば……）

迷惑ついでと、ほんの興味から星はハセヲに質問してみることにした。

視線に僅かなれど、力を込めて問いかける。

「ハセヲ、お主は過去をやり直せるとしたら……どうする？」

「は？　過去を？」

唐突かつ語ったとしても意味の無い質問だったのだが、ハセヲは何となく星の雰囲気を察し、真面目に答えはじめた。

「そうだな、一人ぶん殴ってでも止めたい奴がいた。全部自分で抱え込んで、何も言わずに俺たちの前から消えちまった奴を……救ってやりたい」

「ハセヲ……」

「まあ、それでも結果としては過去をやり直せたとしても、その先はそれまでの過去とは違うんだから、また別の問題が発生するかもしれねえ。そう考えりゃ、堂々巡りだ」

「ようするに、お前は過去はやり直すようなものではない、と思っている訳か？」

自分でも、変に拘っているとは星も思う。

洛陽での事件のことはふっ切ったつもりだが、無かったことになるのなら、それに越したことはないという気持ちもあったからだ。

対するハセヲは、片手をパタパタ振りながら答え始めた。

「そこまで偉そうなことは言わねえよ。俺だって、いつだって胸張

って歩いてられる訳じゃない。立ち止まることだってまだまだある。
でも、立ち止まっても、つまづいてしまっても、それでも、また歩き出すことだけは止めない」

「……」

「つまりは、覚悟の問題だ。そこで止まって悲しみに暮れるのか、出来ることを探して必死にあがくのか。
俺はあがくぞ。どんなに無様をさらしてもな。それが、俺なりの……俺が巻き込んじまった奴らへのケジメだ」

「そうか……」

星は何とかその一言を返した。

同時にハセヲが背を向けて立ち上がる。

表情は見えないが、耳が赤くなっているのを星は見抜いていた。

しかし、その事実を指摘しようにも、星自身も僅かながら顔を朱に染めているため、叶いそうにない。

（……ハセヲめ。どうせならそこは私を名指ししても良かっただろうに）

ハセヲの心構えに触れ、気恥かしくも不快ではない時間が流れる。

しかし、言葉を発するには機を逃した感もあるがゆえの沈黙がしばらく続き……

「じゃあよっ、俺は仕事に戻るからな！」

「あ、ああ……」

ハセヲが退出の意を伝えるという、最終手段（ヘタレぶり）をもって時間が再び流れ出した。

そうすると、他の事を考える余裕ができたのか、何とはなしに星が窓から外を見たところで……

「あああっ！？　ハセヲオォォっ！？？？」

星は信じたくない現実に気付き、扉に手をかけていたハセヲを呼びとめた。

そのまま、頼むから嘘だと言ってくれとばかりに問いかける。

「では、メンマの販売はどうなったのだ！　我が人生は！？」

「人生だったのかよ」とハセヲがうめいているが、星に気にする余裕はなかった。

「外見りゃわかるだろ。お前は半日以上気を失ってたんだ。とっくに終わってるだろうよ」

「そんな……馬鹿な！？」

窓から見える日差しはかなり弱い。間もなく日が暮れるのだろう。

どうしようもない無常感が星を包み込む。

正直何もする気が星には起きなかった。

さすがに人生そのものが失われたとは星も思ってなかったが、それでも相当な気落ちを感じていたのだ。

「ああ、夢にまで見たメンマが……本当に夢でも何回も見たメンマがぁ……」

「そう言われてもな」

（たかが、メンマだろ？）

そう言ってはならないことは分かる程度には、ハセヲも成長していた。

星にとっては、本当に楽しみにしていたものだったのだ。

「ったくよ」

そう言ってハセヲが引き返して来た。

ポケットに手をつっこみ、何かを思い出したかのように言ってくる。

「そういえばな、これだけしか買えなかったんだけどよ」

そう言って、ハセヲが星の手に押し付けるように握らせたのは――

たった一壺のメンマだった。

## とある恋姫の日常風景　『星』編（後書き）

他のヒロインたちの話も少しずつ並行しながら書いています。
今の調子なら、次は『華琳』か『風』か『月』か『詠』でしょうかね。

そして本編のほうは、半年先から更新・・・できるかな？
全く手がつきそうにないんですけど（泣）

まあ、本編に専念できるようにするためにも、拠点話シリーズを書けそうな時には書いていきたいと考えてます。

それでは、またいつの日か♪

## とある恋姫の日常風景　『華琳』編（前書き）

思いのほか長くなってしまいました（私の願望が大いに反映されてますからｗ）
ですが、普段よりは読みやすくなってる・・・かも？

それと今回の話では、以前竜王様からいただいた贈り物を使用していますこと、御了承ください。

それではどうぞ！

# とある恋姫の日常風景　『華琳』編

キィン！　キキィンっ！！

はるか高い青空の下、軽快な音が鳴り響いている。

まだらの雲が申し訳程度に浮かんでおり、風は涼やかに吹きぬける、そんな爽やかな朝の一時。

ガギンっ！！　グシャアーーーっ！

だというのに、激しさを増していく衝撃音が、爽やかなはずの一時を殺伐としたものに塗り替えていこうとしていた。

断続的に響く音は金属同士がぶつかったものにとどまらず、周囲の建造物にまで被害が及んでいると推測できるものとなっている。

音の発生源には二人の人影。

どちらもこの国の人間として有名すぎる人物だ。

そのうちの一人――天の御遣いと呼ばれる少年は、苦虫を１００匹ほど噛みつぶした顔を浮かべながら……

（だいたい！　なんで俺がこんなメにあわなきゃならないかってーと、なにもかもコイツのせいじゃねえかっ！　くそ、負けるか！　俺は絶対に生き残ってやる！）

迫りくる剣を、必死に双剣“虚空ノ双牙”で捌きながらうめいてい

た。

――少し時を遡る。

「おはようございます、ハセヲさん。今日も気持ちのいい朝ですよ」

「……ああ、今日も早いな、月」

起きぬけでハッキリしないハセヲの意識を、優しさで包み込むような月の声が覚醒へと促す。

はじめこそ、一人で起きると拒んでいたハセヲだったが、今ではこれが当たり前となってしまっていた。

現代人らしく、基本朝には弱いハセヲなのだが、不思議と月の声を聞くと目覚めが良いのだ。

加えて、自分の意見を明言しない月が唯一主張したこととあって、ハセヲも仕方無いよなと自身を納得させ、日々のルーチンの一部になったわけである。

その代わりと、ハセヲは月に一つの条件を課していた。

「頼むから俺のことは名前で呼んでくれ。俺の心の平穏を守るために！」

月のような美少女から『ご主人様』と呼ばれて嬉しいと思う男がいない訳がない。

事実、ハセヲの心にも大きな波紋が生じたのだ。

まあ、その直後に発生した大津波（せっかん）によって掻き消されてしまったのだが。

そんな経過をへて、今の状況はできあがった。

周囲に我の強い人物が多いハセヲにとって、月との一時は貴重なものだ。

そう自覚しているハセヲは、ならば限られた時間は有意義に使うべきと、今日も恩恵を享受している。

寝床から身体を起こし、月から手渡された布巾を受け取るハセヲ。

そのまま顔を洗いに行こうと、部屋を出るべく扉に手をかけたところで……ふと振り返る。

「月、今日は買い出しの日だったよな？　俺も警備がてら外に出るから一緒に行かねえか？」

「あ……よろしいんですか？　迷惑でなければ、ぜひ！」

ハセヲの誘いに、月の顔に灯がともったような笑みが浮かんだ。

何の含みもない純粋な笑顔に心が温かくなるのを感じたハセヲは、

「また後でな」と声をかけて廊下に出る。

その顔は普段通りの仏頂面にも見えるが、よく見れば目元の力が少し抜けているのに気付けただろう。

事実ハセヲは、気持ち足取りも軽く、手洗い場に行こうとして……

「――――!?」

瞬時に、意識を戦闘時のものに切り替えた。

何かが迫って来ている――――凄まじい怒りの感情をまき散らしているナニカが。

（この感じは……もしかしなくても……）

そう考えていたところで、ハセヲは視界の端に赤いものを捉えた気がした。

瞬間、ハセヲは“虚空ノ双牙”を喚装。

さらに凄みを増した気配の方へと、双剣を交差させて身構えた。

視線の先には――――抜き身の七星餓狼を片手にこちらへと疾走する春蘭の姿が。

「ハセヲぉっ!!」

ハセヲを視認した春蘭の目が見開かれた。

叫びつつ、剣を大上段に振り上げ、一瞬も迷わずに振り下ろす。

周囲の状況をまるで考えない、その思いきりの良さは、いっそ見事だといえるかもしれなかった。

（ハセヲにとっては、苦いものでしかないが）

ギキィィーーン！！

「今度は何だ、春蘭！　昨日の件なら、もう片はついたはずだろ！？」

ハセヲは、何とか受け止めた剣越しに春蘭へと聞くだけ聞いてみた。

（ちなみに昨日は季衣が教えてくれた、とっておきの店に華琳と季衣の三人だけで行ってきたことが分かってキレられたのである）

「昨日の件も許し難いというのに、それがどうでもいいと思えるほど私を怒らせるとは……いい度胸をしているな、ハセヲっ！！」

「待て！　あれから顔を合わせてねえのに、俺に何ができるってんだ！？」

ギリギリと武器同士がこすれあう音が、ハセヲの背筋を冷やす。

少しでも気を抜けば両断されそうな状況で、ハセヲは当然の疑問を春蘭に突きつけた。

確かに昨日のものより激しい怒気に、ハセヲは記憶を洗いざらい検索してみたが、それらしい情報は見つからない。

（ただ怒ってるだけじゃねぇな。何か別の感情も混じってるみてー

だ）

その感情の正体までは、ハセヲには分からない。

しかし、敢えて言うならば――――ハセヲには春蘭が何かに傷ついているようにも見えた。

本当に何が春蘭をここまで駆り立てているのか。

その疑問に対し、春蘭もまた当然といった口調で返してきた。

「夢を見たのだ！　貴様が訳の分からん姿になって、華琳様をはじめ、私たちを手にかけるという夢をな！」

「……は？　夢っておまっ、ぐっ！？」

「我らを……裏切る気があるとでもいうのかあっ！？」

ハセヲもさすがに意表をつかれた。

思わず“虚空ノ双牙”を持つ力が緩んでしまい、今まで拮抗していた力のバランスが崩れ、ハセヲは弾き飛ばされてしまう。

廊下を二回、三回と転がるも、すぐさま身体を起こす。

追撃を警戒したハセヲだったが、春蘭はその場から動いておらず、うなだれるように立ちすくんでいた。

「信じても……よいかと思いだしていたのにっ……」

その呟きは、ハセヲの心まで届かない。

常の状態ならばともかく、突然の事態により、打ちつけた所の痛みが気にならないほど困惑していたハセヲ。

ただでさえ鈍い感覚が、それはもう絶望的と言えるほどに鈍ってしまっていたのだ。

「ハセヲさん！　それに春蘭様！？　何が起こったのですか！？」

騒ぎを聞きつけてか、月をはじめ、城勤めの兵や侍女たちが駆けつけてくる。

皆一様に驚きを隠せないでいるようだ。

いくら相手が春蘭だとはいえ、ここまで見境無しだとは思え――――ない、と判断したからだろう。

「すぐに華琳か、秋蘭を呼んで来い！　今のコイツは……普通じゃねえ！」

ハセヲは、春蘭から視線を外すとこなく叫ぶ。

いつも理不尽なことでキレられてはいるが、今日のコレは極めつけだった。

何が悲しくて、夢が原因で殺されなくてはならないのだろうか。

（そうだ、こんなふざけた理由で終わるわけにはいかねぇんだ）

華琳や秋蘭の名が出たからか、顔を俯けている春蘭。

冷静になったのか、などとはハセヲは考えていない。

その証拠に、未だ闘気は全く衰えていないのだ。

「相変わらずブッ跳んでんな、春蘭。一応聞いといてやるが……正気か？」

「ああ……私の本能（りせい）が叫んでいるのだ。これ以上惑わされる前に、貴様を潰せとなあああああぁぁぁぁぁーーーっ！！」

「言動がなぁ、どっかずれてんだ、テメーはよおおおおおぉぉぉーーっ！！」

春蘭が顔をあげると、そこには一人の修羅の表情が浮かんでいた。

雄叫びとともに、突進してくる修羅（しゅんらん）を見据えるハセヲも覚悟を決め、迎え撃った。

――結局戦いは、この国の王の怒号が轟くまで続き、城の一角に甚大な被害を与えて終結したのだった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

（ま、どーせ誰が悪かろうと、尻ぬぐいがまわってくんのは俺なんだ。なぜか……）

昔に比べて性格が丸くなってきたのは良い事かもしれねえ。

単に開き直っただけかもしれねえし、（悲しいが）いい加減学習したのかもしれねえ。

ある意味、諦めがついたというか、な。

（こういうふうに考えられるようになったのも、大人になったといえるのか？）

「何をボーっとしているの。早く感想を聞かせてほしいのだけれど？」

「……勘弁してくれ」

華琳の急かす声が、俺を現実へと引き戻す。

セリフの内容とは異なり、華琳の表情は不満を訴えているものではない。

俺を『この状況』に追い込んだ目の前の人物は、淡いブルーを基調とした『ソレ』を両手で可愛らしく掴みながら、上目づかいで俺を見つめていた。

『ソレ』を除けば軽く心揺れそうな光景だったが、現実はそこまで俺に優しくない。

そもそもだ。

ものには限度ってもんがあると思う、いやあるはずだ！

なのに、正直この状況はありえねーだろ！？

（何が悲しくて……俺が華琳の下着選びに協力しなきゃならねーんだ！？）

俺たちがやってきたのは、城下にある服屋。

その中でも、世の中の多くの男にとっては気まずいエリア――――下着コーナーに、俺と華琳はいる。

本当は秋蘭と来る予定だったらしいが、城での大暴れの件で秋蘭は城に残らなければならなくなったらしい。

だからといって、せっかくの自由な時間を潰すのも惜しかったため、俺に白羽の矢が当たったわけだ。

どんな罰をくらったんだか、この世の終わりみたいな顔をしていた春蘭を見た直後だったこともあって（なぜか桂花に「たまには役に立つじゃない」と褒められた？のも気になったが）、それくらいならと安請け合いしたのは失敗だった。

荷物持ちや軽く意見を求められるくらいなら甘んじる気ではいたが、下着（これ）はないだろ！？

まあ、実際下着コーナーに向かうと分かった瞬間に逃げ出そうとはした。

――予想済みだったのか、即座に首筋に当てられた“万死ヲ刻ム影”の冷たさで観念させられたわけだが。

（華琳の奴、俺の反応を見て楽しんでやがるな。本当イイ性格してるぜ……）

俺がアタフタしているのを見るのがそんなに面白いのか、華琳の機嫌は上々だ。

だったら、サッサと終わらせてしまえばいいだけの話なんだが……

（なんでこの時代に、ここまでの製品を作る技術があるんだよ！？華琳が持ってる下着なんて、現代のブラとほとんど一緒じゃねーか！）

この世界の文化に触れて分かったんだが、明らかに当時のレベルを上回る品が当たり前のようにあるのが不思議でならない。

せめて、明らかに女性物の下着だという認識さえできなきゃ、まだなんとかなっただろうにな。

「そんな様子じゃ、いつまでたっても終わりそうにないわね。私は楽しいからいいけれど、ハセヲは早く買い物を終わらせたいのでしょう？」

「――似合ってると思うぞ」

「どこを見て言っているのよ。ちゃんとこっちを見て判断したのかしら？」

平静を装った答えだったが、一瞬の間と、僅かに泳いだ視線を華琳は見逃さなかったらしい。

追い詰めるような物言いの華琳。
声の調子から察するに、絶対分かってて言ってやがる。

「……意地が悪いぞ、華琳。察してくれよ」

「嫌よ、それじゃ面白くないもの♪」

「……」

華琳は本当に楽しそうにしている。
その表情は作り物めいた笑みではなく、見た目相応の可愛らしいものだ。

（ったく、こうして笑ってりゃ可愛いもんなんだが……）

「……今、何か失礼なことを考えていなかったかしら？」

「何のことだ？」

今の返事は、間といい、声の調子といい、我ながら完璧なものだった。
その証拠に華琳も食い下がってきていない。

（あぶねー……本当、無駄に鋭い奴だな、おい）

この上で、追い打ちをかけられるような展開はゴメンだからな。

「それはそうと、ハセヲ。貴方も今後のことを思えば、このような状況に慣れておいた方がいいわよ。星や稟、風と来ることも考えて、男としての力量を磨いておくべきではなくて？」

「何でだよ？　俺と来るよりも、女同士で来た方が気兼ねなくていいだろ？」

「貴方……ちゃんと『自分』を知っていて、それ言っているの？」

半眼で俺に冷たい視線を送ってくる華琳。

何だ、その反応は？　そんな馬鹿を見るような視線を向けられる覚えは無いんだが……

華琳は露骨な溜息を吐き、「……不憫ね」と漏らす。

（よく分からねぇが……このままやられっぱなしになるのは面白くねえ）

どうせまともな返事がくるなんて思っていない華琳に、一矢くらいは報いてやろうと思った。

頭を必死に回転させ、言葉を探す。

そのまま視線を華琳の顔に固定。

吸い込まれそうに思える瞳を見据え、口を開いた。

「色々（余計なことまで）俺のことを考えてくれてるようですまねえ。お前は本当にスゴイ奴だよな。

（黙ってれば）大きな目と小さな唇は人形のように可愛いらしいし、（髪形は変わってると思うが）結んだ髪は良い匂いがするし、厳しくも（俺は対象外だが）優しいところもあって、頭もいい。（からかわれてなきゃ）声も綺麗で、聞いてて心が落ち着く。

お前みたいな奴と知り合えた俺は幸福だよ。そんな華琳なら、何をつけても（どうせよく分かんねぇし）俺には似合って見えるさ」

「そ、そう……／／／」

予想に反して、言葉は滑らかに口から出てくれた。

言葉に出さない想いを刷り込んでいたとはいえ、華琳に言った言葉に嘘はない。

おかげで、どうやら少しは華琳の心を揺さぶることができたらしい。

華琳の色白な肌が薄い朱に染まったていた。

（だあああああぁぁぁああーーーっ！？？　クーンっ！　今の俺には、お前が本っ当に凄い奴に見えるぞっ！！）

――その代償として、俺の精神は大いに削られてしまったわけだが。

華琳に聞こえるんじゃないかと思えるくらい、心臓の鼓動が激しい。

慣れないセリフを吐いたことによる緊張感で、体温も上昇している。

それでも、俺の胸には”やりきった感”のようなものが満ちていた。
強張っていた肩の力を抜き、また一つ大きな試練を乗り越えたと思っていた俺に……

「それじゃあ、これはどうかしら？　何でも似合うと言うのなら、特にどの点が良く似合っているのかを教えてほしいのだけれど？」

「……は？」

無情なる追加注文がくだされた。

気のせいか暗くなった気がする視線の先には、新たな下着を手に取った華琳の姿が。

（コイツはっ！！　まだ俺の心を削り足りねえってのか！？）

すっかり落ち着きを失くした俺に対し、華琳はさらに笑みを深くして俺を見つめている。

まるで、御褒美を目前にした子どもみたいだ。

そんなに褒め言葉が欲しいのかよ……。

「さあ、どうかしら？」

華琳の言葉に押されてしまったかのように身体が後退してしまう。

その先で手が――――“何か”を掴んだ。

（何だ？　一体何をって！？）

見れば、俺の右手は穴に手を突っ込んでいるかのように空間に埋まっている。

驚きから反射的に腕を引いた手の中に、それは握られていた。

「……メイド服？」

「冥怒服？」

濃紺のエプロンドレスに白のフリルがあしらわれた、俗に言うメイド服だ。

しかも、それだけじゃない。

腕を抜いた穴から堰を切ったように続けて出てくる出てくる。

カジュアルからフォーマルまで、十数着に渡る現代の服が飛び出してきた。

文字通り振って湧いた事態に俺は思考がついていかず、呆然としかできなかったが、さすがというか華琳は違ったらしい。

持っていた下着を棚に返し、俺が掴んでいるメイド服を指さして言う。

「ハセヲ。見たことのない服だけれど、もしかしてこれらの服は天の世界のものなのかしら？」

「……ああ、そうだ。これはメイド服っていってな、この世界でいう侍女たちの仕事着みたいなものだな」

「へえ、侍女の仕事着にしては、可愛らしい作りをしているのね」

「主の目を楽しませる意図（ハラ）もあるんだろうよ。それに特化した商売が成り立っているくらいだからな」

華琳の意識が下着選びから移りそうな気配に、俺はこれ幸いと説明を入れた。

思惑通り、未来の服は華琳の興味を大いにかったようだ。

（これで流れは変わったろ……）

そう判断した俺だったが、どうやら現実はそこまで甘くなかったらしい。

しかし――――誰がこの展開を予想できただろうか。

「今なんて言った？」

場所を移し、現在は城からほど近い森の中。

森林浴にはもってこいの環境だっていうのに、状況は限りなく悪い

ものになっていた。

引きがねは華琳の言葉だ。

その突飛のない内容に、俺はたび重なる心労で耳がイカレたのかと深刻に思ってしまったほどだった。

というのも――――

「このメイド服を着てみてくれないって言ったのよ」

「何ふざけたこと言ってんだ!?　これは女用だぞ!!」

「そんなの見れば分かるわよ。そのうえで言っているの」

「どのうえだっ!?　俺にはサッパリ分からねえよっ!!!」

なぜか華琳は、俺にメイド服を着ろという、男の尊厳をガン無視した発言をしてくれやがったのだ。

どういうわけだか、ただ一着を除いた残り全ての服が『俺のサイズぴったりに作られている』と分かったことが、事の発端となった。

華琳が両手にそれぞれ持っているのは、袖の長いロングスカートタイプのメイド服に、白のレースをこれでもかと加えているカチューシャだ。

いくら自分が着れないからって、俺に着せるか普通!?

正気を疑うのも当然の話なんだが、華琳は余裕ある態度を崩すこと

なく続ける。

「実情は違っていたとしても、私は形式上では貴方の上司なのよ。ならば、メイド服を着て上司の目を楽しませてくれてもいいじゃない♪」

「上司（そこ）は否定しないが、メイド服はねーよっ！！！！」

「もう……我がままが多いわね」

「俺かっ！？？　俺が悪いのかっ！！！」

華琳は絶好調のようだ。

女装（しんい）はともかく、俺をおちょくれることが楽しくてしょうがないんだろう。

――俺にとっては、心の底から恨めしいかぎりだが。

（ヤバいな……すっかり華琳の土俵に引きずり込まれてる）

華琳が言ったことに対して、俺が何を言い返したところで結局は華琳の掌の上だ。

このままだと、良いようにされる未来しか待ちうけていないことは明らかだった。

なら――

（どちらにせよ、恥ずかしい思いをするなら……これで逝くしかね

えっ！！）

華琳が確実に想定していない反応を返して、場を荒らすまでと決意する。

そのために必要なモノを手に取り、華琳に突きつけた。

「……ハセヲ？」

「それよりこれを着てくれ、華琳っ！　俺は……お前のメイド服姿が見たいんだ！！」

「……ふーん」

華琳に着るよう頼んだのは、唯一サイズが合いそうだったメイド服だ。

こちらは、袖は短くスカートの丈も膝上までしかない。

手足がスラリと伸びている華琳が着れば、実際凄く似合うとは思っていた。

「では、ハセヲ。貴方は、この国の王であり、貴方の主でもある私に……天の世界の話とはいえ、侍女が着る服に袖を通せと言うの？　私を――自由に支配したいとでも言うのかしら？」

そう言い放った華琳は、どこまでも艶やかな笑みを浮かべて俺を見ていた。

ちろりと唇から覗く舌の赤さは、溶けてしまいそうなほどの熱をも

っているようで、思わずゴクリと喉が鳴る。

どうやら、まだ華琳の予想の範疇だったらしい。

覚悟を固めた俺が、逆に気圧されるほどの切り返し。

（ふんばれ……ここが勝負所だ！）

そこまで考えての言葉じゃなかったが、ある意味そうなのかもしれなかった。

下手したら、華琳の逆鱗に触れたかもしれなかった言葉。

春蘭あたりに聞かれたら、問答無用で斬り伏せられそうな言葉。

普段の俺ならば――確実に首を横に振った言葉。

それでも、今の俺はブレーキを踏む気がなかった。

返事の意味を深く考えることもなく、一気にアクセルを踏み込む。

華琳の腕をとって、俺はズイっと身を寄せた。

一気に近づいた距離に驚いたのか、華琳の手からメイド服がこぼれ落ちる。

「んなことは分からねえ！！　でもな、今は（尊厳を守るために）華琳のメイド服姿を見ることしか考えられねんだよっ！！」

「ち、ちょっと……／／／」

「それが、（立場を）支配したいってことなら、そうでもかまわね

えっ！！！　いいか。今の俺はな、お前（のメイド服姿）が気になって気になってしょうがねーんだっ！！！！」

「バ、バカ！　何て……言葉、を／／／」

ああーーーっ、もう無理、限界、恥ずかしくて死にそうだぞ、俺は！

特に、顔なんて火が出るんじゃないかと思えるほど熱いったらない。

まあ、その努力の甲斐あって、俺の主張は華琳の予想を上回る事ができたようだ。

視線の先では、華琳が何を思ったのか空いている片腕で身体を抱き締めるようにして縮こまっている。

顔は怒りか、恥ずかしさか、はたまたその両方なのか、赤く染まっていた。

いつも無駄に振りまいている威圧感すら消滅しているようだ。

まるでその姿は、少し気が強そうに見えるだけの『普通の少女』のように見えて……

（なんだ、コイツにもこんな顔ができたのかよ）

安心した。

常に余裕をもって威風堂堂とした姿を崩さない華琳にも、まだ人前でこのような姿を見せるだけの余地は残されていたみたいだ。

それを引きずりだせた自分が、少しだけ誇らしくもある。

（よし、この調子で畳み、かけ、て……？）

そこで気付く。

「～～～～っ」

未だにとっていた手から、震えが伝わってきたのだ。

見れば、華琳の身体が小刻みに震えだしている。

同調するかのように、周囲の空気が熱気を帯びてきたように感じられた。

「お、おい？　華琳「いいわ、着てあげようじゃないっ！！」……は？」

「だからっ！　着てあげようじゃないと言ったの……／／／」

「いや、聞こえてるけどよ。本当にいいのか？」

「何よ……貴方がそう言ったんじゃない。それとも、話を誤魔化すだけの嘘だったとでも言うのかしら？」

「っ！？　そんなことはないっ！！！」

信じられない。

あの華琳が――――まるで拗ねたみたいな顔をして俺を見上げている。

だからか、思わず返事に力が入ってしまった。

本当は誤魔化しの思いが強かったはずなのに、今の華琳の姿を見たらそんな考えはどこかに飛んでいった。

「そう、ならいいわ」と、どこか安心したように言う華琳なんて、さっきまでの俺には信じられない光景だ。

（まあ、見れるぶんには嬉しいとこか……）

少し離れたところで着替えてくるつもりらしい華琳に背を向け、腰を下ろす。

そのまま待機しようとしていた俺の背中に――――その声はかかってしまった。

「じゃあ、私が戻ってくる前に貴方も着替えておくのよ。私だけに恥ずかしい思いをさせるなんて許さないわ！　それとこの話は他言無用ですからねっ！！」

「――――！？」

声にならない悲鳴。

待ったをかける暇も無く、振り向いた時には華琳の姿は森の中に消えていた。

（何だこれ……この流れだと着替えないわけにはいかねえ感じだぞ！？）

どーして、こーなった！？
計画じゃあ俺の剣幕に押された華琳が、この話をうやむやにして無かったことにするはずだったってのに！？
これじゃ、恥ずかしい思いをしながら頑張った意味がねえ！
むしろ、盛大な自爆じゃねえかっ！！
（このままじゃ……どうする！？）
とはいえ逃げたら確実に命が無くなるな。
ああもう、こうなりゃ神でも悪魔でも犬でも猫でも、山賊でも幽霊でも春蘭でもＡＩＤＡでも、俺を助けてくれるモンなら何だっていい！
誰か、この状況を何とかしてくれーーーーっ！！！！
――しかし、当然というか俺の声は天（かみ）には届かなかった。
だから、多くを語る気はない。
まあ敢えて言うなら、俺はあの後『天国？』と『地獄』の両方を味わった。
この思い出をぬぐって人生の再起をはかるのに数年はかかりそうな心の傷を負ったわけだが……それでも、もう二度と見ることはないだろう華琳のメイド服姿と恥じらいの顔だけは覚えておきたいと思

う。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

余談であるが、第六感が鋭い者たちは、とても貴重な瞬間を見逃したような気がするとモヤモヤした想いを抱えて一日を過ごしたんだとか。

また、騒動の元となったメイド服は、月と詠が着る形で落ち着いた。
（サイズは月に合うように作り直された模様）

そして、当事者である少年はといえば――

「人をひとり埋められるくらいの穴、掘っといてくれるか？」

「誰を埋めるつもりなのよ、この思考倒錯者っ！」

「……俺が埋まる」

「え……？」

城に帰るなり、桂花にそう言って去っていった少年。

そんな彼を、その日は誰も見つけることができなかった。

～後日談～

華琳　ｓｉｄｅ

「あー！　華琳様ーっ！」

突然、弾むような声で呼びかけられ、私は背後を振り返った。

そこにいたのは、千切れんばかりの勢いで手を振っている季衣。

屈託のない笑みを浮かべて小走りに駆け寄って来る。

「こんばんはっ」

「ええ、こんな時間にどうしたの？　誰かに用があったのかしら？」

もう日が落ちてから二刻は経っている。

普段の彼女なら、とうに部屋に戻っている時間だった。

私の問いに、季衣は無邪気な顔でほがらかに切りだしてくる。

「はいっ、良い店を見つけたんで、また兄ちゃんと一緒に食べに行きたいと思ったんです。それで明日の晩あたりどうかな～と、誘いに行くとこなんです！」

「あら、それはいいわね」

「あ、なら華琳様もご一緒しませんか？」

「そうね……」

“あの出来事”から三日が経っていた。

それからハセヲとは、ほとんど話せていない。

お互いに忙しいということもあったけれど――私自身がハセヲとの距離感に戸惑いを覚えていたからでもある。

（駄目ね、自分でもよく分からない感情を持て余しているみたい）

思ってもみなかったハセヲの主張に、完全に勢いで応えてしまった。

いくら天の世界の事情とはいえ、王である私が侍女の服に袖を通すなんて。

普段の私なら絶対にしない行為のはずだった。

それでもあの時は――

『今の俺はな、お前が気になって気になってしょうがねーんだっ！！！！』

そう言って、真剣な眼差しを向けるハセヲから目が逸らせなかった。

取られていた腕に込められていた力、熱さが今も残っている気さえする。

（戦場ではともかく、日常ではハッキリしない男だと思っていたけれど。この私に対して、あそこまで正面から告白してきた男は……初めてだった）

結果、我ながら軽はずみな行動をしてしまったとは思っている。（同時に、面白いものも見られたわけが）

ハセヲにも言っておいたが、他言できるような話ではなかった。

とはいえ――無かったことにしたいとも思っていない。

なぜかそう思える自分がいることを、私は自覚していた。

ゆえに、ハセヲとの関わりに対して“らしくもない”迷いを抱えているわけなのだけれど。

（でも……そうね。今のままではいけないことだけは確かだわ）

などと考えている間、季衣は黙って私の返事を待っていてくれた。

そのことに感謝の気持ちを持ちながら返事を返す。

「じゃあ、一緒に行かせてもらおうかしら」

「はい！　なら、兄ちゃんを誘いに行きましょう！！」

「そうね」

こうして私たちはハセヲの部屋を目指し、廊下を歩きだした。

「あははー、でもこうなると春蘭様にも声をかけた方がいいですかねー？　また、兄ちゃん一人が怒られちゃうかもしれませんし」

「今の春蘭なら大丈夫だと思うけれど。さすがにこれ以上罰を増やしたくはないでしょうし、私も困るから、ね」

「……？？　そうですか？　でも、拗ねるくらいはあると思うんですけど？」

「気にしないでいいわ、あの娘は大抵拗ねてるか怒ってるもの」

「あははは……そうですか……」

「そこから、私の言葉で飼い主を見つけたかのように笑みを浮かべる春蘭。ああ、本当に可愛い娘よね♪」

思いがけずハセヲと話す機会に恵まれたこと、季衣の陽気な気質に当てられたこともあって、私の心は軽くなっている。

おかげで和やかな（？）談笑が続いた。

もう少しでハセヲの部屋に着くという時、

「ところで華琳様」

ふと季衣が思いついたように尋ね出した。

「なに、季衣？」

「兄ちゃんのこと、どう思ってます？」

思ってもない人物から、さらに思ってもいない質問を受けてしまった。

内心の動揺を表に出さないよう必死にとどめ、慎重に問い返す。

「――――どうしたの、急に？」

「何となくなんですけどねー、兄ちゃんと話してる時の華琳様って、とても自然に見えるんですよー。それに対する兄ちゃんも遠慮せずに話してますしね」

「……そうかしら？」

（他の皆にもそう見えているの？　なんだか……新鮮ね）

確かにハセヲと話していると、段々と作り笑いはなくなって……変な気遣いもしなくなる。

それだけなら、他の皆にも当てはまることかもしれないけれど、季衣が言いたいのは“それだけじゃない”んでしょうね。（まあ、それも微妙なところがありそうだが）

重要なのは“男”であるハセヲに対して、私が『ありのままの自分』を見せ始めているということ。

正直なところ、自分でも驚いているわ。

（どうなんでしょうね。まだ分からないけれど……でも……）

「どうなんですか、華琳様？」

季衣が、期待のこもった眼差しを向けてくる。

それに微笑んで応え、目を閉じた。

再び思い浮かべるのは、私にお願いをしてきた時のハセヲの表情。

（あの時、私の背中を押した感情の正体は……きっと……）

目を開く。

不思議と迷いが晴れた気がした。

「私は……ハセヲのことが……」

〜〜――いいか！　俺は”髪を両側でしばった奴”が大嫌いなんだよっ！！！〜〜

――ピシリ

「「……」」

扉の向こうから聞こえてきた、最近になって聞き慣れた声。
まさに、今思い浮かべていた人物の声だった。

どうやら、目的地まで到着していたらしい。

（そう……そうなのね）

何かがひび割れるような音が、頭の中で鳴った気がした。

それと同時に、天啓のような閃きが身体中を駆け抜ける。

おかげで分かった――それはもう明確に、疑いの余地なく、曖昧な認識を許すことなく。

私は先ほどまで抱えていた疑問が解決した喜びの気持ちを込め……

「気になって気になってしょうがないの。うっかり……殺して自分だけのモノにしたくなりそうなくらい、ね♪」

教えてくれたハセヲにお礼をしなければと、大鎌“万死ヲ刻ム影”を喚装する。

ふと横に視線をやれば、季衣もまた“岩打武反魔”を手に取っていた。

「……そうですねー、“ボクも”気になることができたんで、一緒

に殺(はな)させてもらっていいですか♪」

「もちろんよ」

季衣の申し出を快諾し、扉に手をかける。

私たちの殺気(けはい)を感じてか、中から動揺の動きが伝わってきた。

ハセヲと、もう一人誰かいるらしい。

こんな時間に“誰”と“何”をしているというのか。

（さあ、今度はどんな顔を見せてくれるのかしら、ハセヲ？）

新たな想いを感じながら、恐怖を煽るようにゆっくりと扉を開ける。

そこで、さらに愉快な光景を目の当たりにした私は、

「死になさい？」

愉(たの)しげに呪詛の言葉を紡ぎ出し、問答無用で“万死ヲ刻ム影”を振り下ろした。

華琳　ｓｉｄｅ　了

どーでもいい話であるが、この日から丸二日の間、彼はベッドの上から起きられなかった。

外傷は一切無かったが、精神に絶大な負荷を負ったのだ。

あまりの恐怖に晒され、防衛本能が働いたからか、ここ数日の記憶が抜け落ちているほどだった。

現場に居合わせた少女の証言によると、華琳は躊躇い無く大鎌で彼を斬り裂き続けたらしい。

彼の悲痛な叫びにも構わず――というか、より愉しげに大鎌を振るっていたとのこと。

叫び声が絶えた後でも華琳は止まらず、ピクリとも動かない彼に、嬉々として大鎌を薙ぎ払っていたようである。

オーバーキルも甚だしい、一方的な虐殺。

共に怒り心頭で乗り込んで来た季衣が、引いてしまうほどの光景だったんだとか。

――ちなみに、その間も彼の仕事は容赦なく溜まっており、倒れた理由も思い出せないまま、復帰した早々激務に追われる日々が続いたんだとさ。

## とある恋姫の日常風景　『華琳』編（後書き）

さてさて無理やりな展開でしたが、これで月と詠にメイド服を着てもらうことができましたｗ
竜王様の贈り物である”女装セット”がなければ、『黄昏の腕輪伝説』のバルムンク絡みで何とかするしかなかったんですが・・・うん、ＯＫ、ＯＫ！

それと、アンケートで華琳に投票してくださった読者の皆様、私ではこれぐらいが限界でした。

それでも、また読んでもいいと思ってくださりましたら、次の拠点話の機会にアンケートへご協力ください！

言動はともかく、私の認識ではハセヲの本質はこんな感じです。
ちなみに、最後のハセヲのセリフについては今後の拠点話で触れますんで！

最後に、この話には今後の本編に関わる重要な描写がありました。
色々予想しながら本編の更新を待っていてくださると嬉しいです！

それでは～♪

## とある恋姫の日常風景　『月』編（前書き）

今回は『月』編です！

時系列で言えば、『華琳』編より少し後。ハセヲが立ち直った直後あたりと捉えてください。

それではどうぞ！

## とある恋姫の日常風景　『月』編

――月の朝は早い。

「……んん、今日もがんばろう」

まだ薄暗く、少し布団の温かさが恋しい肌寒さを感じさせる時間帯。
実際、城内でも起きている者はほとんどいないだろう。

だというのに、月は背伸びを一つして未練なく寝床から体を起こす。
そして寝床から降りようとしたところで……ふと隣の寝床が目に入った。

（あれ？　今日は私より早かったんだ、詠ちゃん）

見れば、親友である少女――詠の寝床は空であった。

こういうことは珍しい。
本来ならばここまで早く起きる必要はないのだが、”とある理由から”月は率先して早起きを心がけるようにしているのだった。

『月が早起きするんならボクだって――！？』

そうは言った詠だったが、慣れない仕事からくる気苦労に苛まれている詠が早起きに成功したことはほとんどなかった。

月としては、それは喜ばしい反応だと思っている。

洛陽にいたころの詠であれば、どれだけ疲れていようと自分のこと

を気にかけて、寝過ごすようなことはなかったはずだった。

つまりは、ここ――――彼の元は、詠が気を張り詰めさせる心配がない場所だという証明なのだ。

（本当にご主……じゃなかった、ハセヲさんには感謝しなきゃ）

そんな場所を与えてくれた少年に報いるべく、月は寝床から板張りの床に足をついた。

小窓からわずかに差し込む光と、かすかに聞こえる鳥の鳴き声に、今日もよい天気になりそうだと判断した月はトコトコと衣装棚へ向かう。

取り出すのはメイド服。

天（かみ）の意思によって具現し、とある少年と少女を大いにかき回した一品は、今や月たちの仕事着になっていた。

はじめこそ事情を知らない月は、このような綺麗な服を貰うわけにはいかないと固辞していたが……

「俺の世界で言う侍女の仕事着なんだからいいだろ。それにな、月には似合ってると思うんだよ」

「へ、へぅ……／／／」

ハセヲが涼しい顔で放った言葉に、月は否定の意思を封殺されてしまったのだった。

――とまあ、こういう経緯をへて月はメイド服を大切に使っている。

袖を通せば背筋はピンと伸び、心も引き締められる気がするのだ。

そして何より、ハセヲから贈られたものという事実が月の心を温かくさせた。

（……よし！）

両手に握りこぶしをつくり、気合を入れた月の顔に凛々しさが浮かぶ。

その瞳には、以前までの彼女には考えられない光があふれていた。

（こうやって地に足をつけて……私は生きなきゃいけないんだ！）

かくあるごとに確認している想いを胸に抱く。

罪を忘れたわけではない。

開き直ったのとも違う。

乗り越えられたわけでもない。

それでも”今”ある日常をかみしめ、頼りになる仲間たちと……自分を導いてくれる男（ヒト）と共に、少しでも前へと踏み出すために――

「まずは……」

今日の仕事の段取りを考えながら、足早に月は部屋を出ていった。

――場違いな話ではあるが。

メイドはメイド服を着るからそう呼ばれるのではないはずだ。

メイドとして必要な資質を持っている者こそに贈られるべき称号だと思う。

ならば、今の月にはメイドの魂が（ｒｙ

月　ｓｉｄｅ

（いつもよりちょっと遅れちゃったかな……）

少し申し訳ない想いを胸に、部屋の前に立つ。

朝食の仕込みの手伝いが少し長引いてしまったせいで、いつもより来る時間が遅れてしまったのだ。

これは、私にとって一番大切なお仕事なのに。

（どうかまだ起きていませんように！）

私は焦る気持ちを抑えて、天界でいうところの作法であるらしい”のっく”を行う。

そのまましばらく待ってみたけど、何の反応もないことを確認した私は、一言断りを入れてから入室する。

「失礼しま……す？」

中には（不謹慎かもしれないけど）期待通りの状態な人物――まだ起きていないハセヲさんがいた。

なぜかその寝床の傍らに、詠ちゃんが上半身を預けるようにして眠っていたのには驚いたけど。

（ハセヲさんを起こす前に詠ちゃんを起こしたほうがいいよね。でも、何だか楽しそうな夢を見てるみたいだし……ど、どうしよう？）

近づいてみれば、詠ちゃんの寝顔は頬が溶けてしまいそうなほど緩んで（このときの私には）見えた。

うう、起こしづらいよぉ。

でも、そんなに余裕もないし……。

ハセヲさんは朝が弱いのか、起きる時間は遅いほうだ。

そのため、もともとこの時間は他の仕事が入っていたんだけど、他の皆さんより早く起きて前倒しで仕事をする分、多めにみてもらっている。

今の私にできる精一杯の自己主張。

ハセヲさんと二人きりでいられる時間。

（そうでもしないと、私がハセヲさんと関われる時間なんてもてな

いもんね……）

ハセヲさんはこの国にとって――いや、この大陸の未来にとって必要な人だ。

この世界を蝕もうとしているＡＩＤＡ（脅威）を取り除き、大切なものを取り戻そうと頑張っている人。

普段の態度にはそんな重荷を背負ってるようには見せないのも、あの人の強さだろう。

（だからかな、私にはハセヲさんがまぶしすぎる）

そんな強い心が欲しいと思う。今は無理でもいつか必ず――

「あ……」

知らず、ハセヲさんの頭を撫でていた。

無意識の行動だったんだろうけどビックリだ。

しかも、気付いたというのに私の手は止まらなかった。

ハセヲさんの銀色がかかった白髪を撫で続ける。

（もう少し、もう少しだけ……！）

撫でるたびに心が温かくなっていくのがハッキリと分かった。

心なしか潤んでさえ見えてきた視線の先には、いつもより穏やかな

寝顔を見せるハセヲさんがいる。

その理由が私のおかげだったらいいな、なんて厚かましいことを考えながら時間は緩やかに過ぎ……

「何でもないったらーーーっ！！」

「きゃあっ！？？？」

いきなり跳ね起きた詠ちゃんによって終わりを告げた。

「ど、どうしたの、詠ちゃん？　顔真っ赤だよ？」

「月！？　いや、あの、その……べ、別に何でもないの！　気にしないで……／／／」

「でも……」

そうは言うけど、詠ちゃんの様子は普通じゃない。

私に見られたのを気にしているというよりは、ハセヲさんに何らかの原因があるみたい。

その証拠に、今も詠ちゃんの視線はハセヲさんにチラチラと向いている。

「それだったら月の方こそ顔が赤いけど、どうしたの！」

「そ、それは……／／／」

別に悪いことをしていたわけじゃないけど……答えづらい。

（ああ、もしかして詠ちゃんも同じなのかな？）

そうだったとしたら答えにくいよね……って、あ！？

「朝っぱらから……何だ？　どうかしたのか、二人とも？」

「お騒がせしてすみません、ハセヲさん……」

私たちの話し声で起こしてしまったみたいで、ハセヲさんが上半身を寝床から起こしていた。

ハセヲさんの起きぬけの顔と声は、普段のものより沈んでいて機嫌が悪そうに見えるけど、そんなことは全然ないんだってことを私はこの二カ月で学んでいる。

むしろ、その後の短いやり取りを経て表情を和らげていくハセヲさんを見られることが、私の一日の活力になっているくらい。

ううう……でも気のせいかなぁ、今日は少し本当に機嫌が悪そうに見えるよ……。

「で、何が原因で騒いでんだ？」

「ええっと……それはですね」

そう言って、隣の詠ちゃんへと視線を向ける。

ハセヲさんが起きてから妙に静かだと思ったら、詠ちゃんは顔をうつむけていた。

あれ？　何だか身体も小刻みに揺れてるけど……？

「あ……」

「あ？」

「アンタのせいに決まってるでしょうがあああぁぁーーーっ！！」

「ぐおっ！？」

「だ、大丈夫ですかハセヲさんっ！？」

顔をあげた詠ちゃんが、叫び声と共に渾身の正拳をハセヲさんの人中に突きさした。

大変、鼻血が出てる！？

慌てて持っていた布巾をハセヲさんに手渡し、水を汲みに走った。

（もう、詠ちゃんったら……）

その途中、飛び出していった詠ちゃんも探してみたけど見つからなかった。

でも、まずは何よりハセヲさんの手当てが先だと部屋へと戻る。

ハセヲさんは布巾を鼻に押し当てたまま、天井を仰いで待っていてくれた。

「すいません、後できちんと謝るように言っておきますから」

「まあそれは……よくはねえがいいんだけどよ。おかげで目はすっかり覚めたしな。二度目はごめんだが」

「本当にすいません。詠ちゃんが何であんなことをしたのか、私にもよく分からないんです。ハセヲさんが関係しているのは確かなんですけど……」

「それは仕方のねえ話だ。お前らを巻き込んじまった原因は俺なんだ。詠には嫌われて当然「そんなことはありませんっ！！」……月？」

自分でもビックリするくらい大きな声が出た。ハセヲさんだって驚きで目を見開いている。

でも今のはハセヲさんが悪い。すぐに訂正してもらう必要があった。

「私と詠ちゃんには、ハセヲさんを嫌う理由も、必要も、可能性も全くないんです！　それだけは覚えておいてほしいんです！」

私は貴方の言葉があったから”ここ”にいる。

そんな貴方にそう想われているのは――――とても悲しいことだから。

「……悪かった」

「いえ、分かってくれればいいんです。こちらこそ声を荒げてしまい、申し訳ありませんでした」

「いや、月が謝る必要はねえよ。そうだな……お詫びに”今日こそ”買い出しを手伝うさ」

「本当ですか？　また別の予定が入った、なんて言いません？」

少しだけ意地悪げに聞いてみながら、一つ笑いをこぼす。

それを見たハセヲさんも口元を緩めて「ああ」と応えてくれた。

それが嬉しくて、私はさらに笑みを浮かべる。

ハセヲさんとの間で少し張り詰めていた空気が、何気ないことで元に戻るくらいの関係を築けている自分が誇らしかった。

（うん、大丈夫――）

今のハセヲさんの顔を見て、心の底から私は確信した。

特別な力なんていらない。
選ばれた地位も必要ない。

ただ普通に、平凡に。けれども、このうえない安らぎを与えてくれる”この人”のそばで――

（私は――ここで生きていける）

月　ｓｉｄｅ　了

??　side

「龍(ロン)くん、どこにいっちゃったのかなあ？」

すっかりはぐれてしまった友達の男の子を探して、視線をさまよわせる。

だけど、右も左も前も後ろも人で溢れていて見つからない。
最近になってさらに人の数が増えてきた気がするなぁ。
これも天から来たっていう偉い人のおかげなのかな？

まあ賑やかなのはいいことだと思うけど、今は困ってしまう。

街に来て早々にはぐれるなんて。しかもその理由が……

（何が綺麗な人見つけたー、よ。せっかくおめかしして来たのに……龍くんのバカ）

そう言って人ごみの中に消えていった男の子に、心の中で文句を言う。

たとえ嘘でも、言葉にはしたくなかったからだ。

小さい時から一緒で、ずっと好きだった男の子。

そんな龍くんが一緒に街に遊びに行こうと誘ってくれたのは本当に嬉しかった。

この前の10歳の誕生日に買ってもらってから初めて着た服に、お気に入りの帯（リボン）で髪を結えてやってきたのだ。

最初こそ、ポカンと私を見つめてくれたけど……本当に最初だけだった。

（でも、本当に綺麗な人が多いなぁ。私もいつかこんな風になれるのかなあ？）

何だか遠い感じがした。

通り過ぎる人たちはみんな大人で、私とは比べ物にならない輝きのようなものを放っている。

私一人だけが場違いのような気がして居た堪れないほどだ。

龍くんが私よりも周りが気になるのも仕方ない気がした。

（もう帰ろうかな……）

これ以上ここにいたら嫌な気持ちばかりが大きくなりそうな気がした私は、ふと方向を変えようと立ち止まろうとした。

こんな人通りの多い場所で後ろを確認することもなく。

結果として――

「きゃっ！？」

「おい、気をつけろ！」

後ろにいた人とぶつかってしまい、こけてしまう。

それだけならまだマシだたけど、同時に嫌な音が聞こえたような気がした。

恐る恐る、打ちつけた膝の痛みを堪えて目線を下げると……

「あーーーっ!!　破れてる!?」

最低な気分だった。

わざわざこんな街(とこ)までやって来て、独りでドジを踏んでいる自分が馬鹿にしか見えない。

膝の痛みと、それ以上の心の痛みが私を苛み、膝を抱えてうずくまる。

意地悪な世界から、目も耳も塞いでしまいたかったのかもしれない。

「大丈夫?」

なのに、思わない言葉が私の心を救おうとしてくれた。

私の心は、あっさりとそれに反応する。

それは、今一番聞きたかった声じゃなかったけれど――――今までに聞いた中で一番綺麗な声だったから。

「はい、これで直ったよ」

「あ、ありがとうございます！」

私を助けてくれた素敵な人は、服が破れていることに気づくなり近くの服屋まで私を連れていき、そこで借りた裁縫道具であっという間に直してくれた。

その手際のよさにも驚いたけど、外見はもっと凄い。

薄い紫のかかった髪と瞳に、真っ白な肌。そこに小さな朱がさしたように結ばれている唇。

そして見たこともない服に身を包んでいたから、最初は凄く偉い人かと思っちゃった。（まあ、城には勤めているらしいけど）

声だけでも綺麗な人だろうと思ったけど、実際にもすっごいキレー！！

何より、この人の性格だろう雰囲気の温かさがとても心地良い。

（私がもし……これくらい綺麗だったら、龍くんだって）

そう思ったら何だか悲しくなってきたけど、聞いてみたいことができた。

きっとこの人には縁のない話だと思うけど。

「あの……お姉さん」

「ん？」

「お姉さんは……好きな男の子のことで悩んだりしたことはありますか？」

「へ、へぅ！？」

あれ？　何か変な声が聞こえた気がしたけど……気のせいだよね。

そう結論付けた私は話を再開する。

この優しそうな人なら私が望む答えを与えてくれるだなんて、そんな都合のいい考えを押しつけながらも。

「私……実は好きな男の子がいて。でも、中々気付いてもらえなくて。それで……えっと……」

言葉が途切れてしまう。

自分で言っていて悲しくなってきたのだ。

鼻の奥がツンとすると思ったら、涙も零れてきた。

ああ、今の私って本当にって、え！？

「ほら、涙ふかなきゃ」

そう言ってお姉さんは、取り出した布巾で優しく涙をぬぐってくれた。

勝手に話しだして、勝手に泣きだした私にここまで付き合ってくれるなんて、どこまで優しい人なんだろう。

「よく分からないけど……貴女が泣いていたらその男の子も困ると思うよ。私にも……気になっている人がいるけど……／／／」

「……」

「私は、その人にいつも微笑んでいたいと思うんだ」

花が咲くようなって、こういうものなんだと思えるような笑顔を浮かべるお姉さん。

同じ女の子同士なのに、思わず胸が高鳴ってしまう。

そんな私の姿を見て恥ずかしくなったのか、お姉さんは少し顔を赤らめながらも、そう言い切って布巾をしまう。

――気付けば、涙はすっかり止まっていた。

それから待ち合わせている人がいるというお姉さんとは、服屋の前で別れた。

「気をつけて」という別れの言葉を残し、立ち去ろうとしたお姉さんの表情が一気に破顔したのには驚いたけど。

その視線の先で手を振っていた白い髪が綺麗だったお兄ちゃんが、きっとお姉ちゃんの言っていた気になる人なんだろう。

記憶に刻みつけられたようなお姉さんの笑みは、当分忘れられそうになかった。

あの笑顔を独り占めできるお兄さんは幸せ者だと思う。

（決めた！　私もあんな大人になる！！）

そうと決めれば、ウジウジしている時間はもったいない！

まずは龍くんを見つけっ！？

「え？」

「ハァ、ハァ……やっと見つけた」

「龍くん！　どうしたの！？」

「どうしたのじゃねえーーっ！！！　どこ行ってたんだよ！？」

誰かに手を掴まれたと思ったら、息を切れ切れにして私を見つめる龍くんだった。

私のことをここまで必死になって探してくれてたの？

「ふーん、そこまで心配してくれたんだ？」

「はあ！？　なに調子のってんだ！　さらわれでもしたら寝覚めが

ワリーだろ！！　馬鹿なこと言ってねーで、サッサと帰るぞ、翠鈴（ツォイリン）！」

「……うん♪」

そうは言うものの、掴んだ手をそのままに帰ろうとしている龍くんの手から伝わる熱が心地よかった。

そんな龍くんに向かって私は、今の自分にできる精一杯の笑顔を浮かべる。

きっとこれまでの人生の中でも最高の出来だったはずのそれは――

―龍くんの歩みを速めるだけの効果はあったようだった。

？？　ｓｉｄｅ　了

## とある恋姫の日常風景　『月』編（後書き）

私としては、月ｓｉｄｅを書き上げた時点で終わらせても良かったんですが、それだと短すぎるのかとも思い、このような仕上がりに。

読者の皆様としては、もっとハセヲとの絡みを期待されていたとは思いますが、こういう話が似合うのは月だと思いませんか？

まあ、そのせいで月の出番が少なかった感はありましたが・・・（汗）

え～、ハセヲとの絡みはまたの機会としまして・・・詠の件については、『詠』編で明らかになりますのでお楽しみに！

# とある恋姫の日常風景　『詠』編（前書き）

拠点シリーズもようやく折り返し地点！

今回は『詠』編です！！

## とある恋姫の日常風景　『詠』編

日の出前――詠は自分でも驚くほど穏やかな気持ちで、意識を覚醒させた。

よくは思いだせないが、夢を見ていたようだ――かつて抱いていた志を実現させた自分を。

それでもまだ何かが足りなかったのか、心の望むままに手を伸ばそうとして目が覚めた。

しかし、覚めてしまえば所詮は夢。

もはや、今の自分には取り戻すことは叶わない幻想。

先ほどまでの穏やかさは?き消え、詠の心を虚しさが襲う。

「ああ、未練がましいったらないわね……」

上半身を起こし、はき捨てるようにつぶやく。

無様な自分を嘲笑うかのように。

今の自分は、何の特別な権限もない”ただの侍女”でしかない。

その代わり――最も大切なものを護ることはできた。

隣の寝床で眠っている親友を見やる。

その寝顔は、洛陽にいたころでは考えられなかったほどに安らかなものだ。

（月……）

目が覚めたら『おはよう』と、寝るときには『おやすみ』と声をかけてくれる親友がいる。

自分の命を投げ出してでも護りたかった親友が微笑んでいられる。

ただそれだけの――けれど失いそうになって初めて解った、何物にも代え難い、そんな満ち足りた日々が戻ってきた。

――詠にはよく解っている。

今の状況が、どれだけ奇跡的なのかを。

張譲を利用するつもりが逆に手玉に取られ、いいようにされるしかなかった自分。

描いていた夢は儚く崩れ去り、迫りくる絶望感に必死に抗っていた日々。

挙句の果てには――親友の手を血に染めさせてしまった。

（それでもボクたちは……）

にもかかわらず、自分たちはこうして一緒にいる。

本来ならば、戦に負けた時点で都を混乱に陥れた人物として処刑されるしかなかったのに、だ。

ならば、今度こそ詠は間違えるわけにはいかなかった。

「さて、不本意ではあるけど……今日も働いてやろうじゃない」

そうは言っているものの、詠の足はきびきびと運ばれている。

まだ寝ている親友を気遣い、物音も少なく着替えを済ませる。

袖を通したメイド服は可憐な印象を強く押し出してはいるが、それでも詠の「出来そうな女」という雰囲気を奪い去ることはできなかった。

実際は……ともかくとして、見た目はとても有能なメイドに見える。

「よし……！」

気合いを一つ入れ、詠は部屋を後にする。

忌まわしい記憶よりは遥かに救いがある、侍女としての仕事をこなすべく。

そして――――親友と、その周りの小さな世界を護るために。

詠ｓｉｄｅ

そして一刻後。

「ま、まあこんなもんでしょ……」

多少歪んでは見えるけど、替えの寝具の整理は終わらせた。

前と比べれば大分マシになったし、努力はかってくれるはずよね。

こういった作業を苦手としている自覚はあったけど、泣き言なんて言ってられない。

――これからずっと続いていくことなんだから。

城の営繕管理や生活雑貨などの消耗品の手配にかかる資金面でのやりくりや、指示出しといった頭脳面での能力ならば問題なかった。

だけど、今は一侍女としての立場しかないうえに、進んで前に出て自らの正体を明かすような真似も避けたかったから、誰にでもできるような作業に従事するしかなかったというわけ。

そうは言っても、肉体的にはかなり堪える仕事だけど――

前に聞いた天の世界での生活と違って、多くの仕事は手作業であり、時間もかかる。

特に高位の将官に女性が多いこの国においては、洗濯はもっとも大変な仕事だったりする。

量もさることながら、服の質も高いから洗濯には相当の神経を使うのよね。

簡単な朝食を済ませたら、今日もまた洗濯（じごく）の作業で昼までは潰れる

のかと思うと、目の前が暗くなりそうだわ……。

とはいえ、仕事の手を抜くような真似は”賈文和”としての誇りが……いえ、今はただの”詠”としてだけど許せない。

大変ではあるけど、やるしかなかった。

「はぁ、まあその前に……アイツのとこに行かないとね」

次に目指すのは、ボクの”主”の部屋。

贅沢にも毎朝月に起こしてもらっている事実は、ボクの心を大いにムカムカさせた。

無理しなくてもいいじゃないと何度となく説得したものの、月は決して首を縦に振らなかったのだ。

（アイツのことに関して、ああまで頑なだったのは……きっと……）

その理由を何となく察してしまったから、それ以上食い下がることなんてできなかった。

その代わり、自分も付き合うと反射的に言い返してしまったのは――どうしてだろう。

月が心配だったからという理由もあったけど、あの時はそうしなきゃいけないという想いがボクの背を押したのだ。

「まったく、何でボクがアイツのことで悩まなきゃ……」

そう考えていたところで目的地に到着した。

モヤモヤしていた想いを叩きつけるように、強めに”のっく”してやる。

「入るわよ」

しばらく待っても反応が無いことを確認してから入室する。

中には呑気に眠りこけてるアイツがいた。

身勝手なことだとは解っていても思わず顔が引きつりそうになる。

月はまだ来てないみたいだけど、待つ気にはなれなかった。

ズカズカと寝床まで近づき、容赦なく叩き起こしてやろうと手を振り上げ……

「……せる」

「……え？」

「護って……みせる……」

「……」

振り落とそうとした手はその言葉に勢いを失くし、ポフッと寝床の脇に力なく落ちてしまった。

（ね、寝言!?　驚かせて、くれちゃって……／／／）

おかしい、何だか頭が上手くまわらない。

さっきの言葉がボクに向けられた訳がないと解っているのに……なぜか心が温かいものに包まれたかのような安心感を感じる。

月以外の言葉に安らぎを感じるのが悔しくて、ボクは再度手を振りかぶろうとしたけど……結局できずにコイツの寝床に腰を下ろした。

そのまま無言で睨みつけてやる。

余計な力が入っていないコイツの顔は、普段では感じられない少年らしさを残している。

こうして見ると、とてもあの恋や張譲を倒した奴だとは思えなかった。

（よく分かんない男よね、本当）

『お前という存在が、賈駆にとって価値があるものなら、お前は簡単に死んでいい訳ねえんだ。お前の命を……簡単に背負わすんじゃねえよ』

今の月があるのは……コイツのおかげだ。

ボクじゃ、月を止めることはできなかった。

コイツが告げた、死を選ぼうとしている月に対する怒りと、失う者の悲しみを秘めた言葉。

あの時のボクは知らなかったけど、コイツにも大切な存在がいた。

その人を助けるために頑張っているコイツにとって、ボクの前から消えようとしていた月は……どう見えたんだろうか。

「本当に……よく分かんない男」

別にコイツのことが嫌いな訳じゃ……ない、多分。

感謝だってしているし、月のことを気遣ってくれているのも分かっている。

だからといって、月を任せてもいいとまでは思っていない。

月を想う気持ちじゃ誰にも負けない自信はある。

それでも……あの時はコイツに負けていたのは確かだろう。

――コイツとボクの違いは何なのか？

――コイツの在り方はボクに何をもたらすのか？

何とはなしに目線を合わせて考えたくなったボクは、コイツの隣に身体を横倒してみる。

そのまま寝顔を見つめながら、考えることしばらく――。

（あ……何か分かりそうな気がしてきた）

じっと見つめている間に、コイツとの呼吸の間も一緒になっていたボクの意識に何かが閃こうと近づいてきた――睡魔を共に引き連れて。

まぶたが尋常ではないくらいに重くなってくる。
身体が金縛りにでもあったかのようにビクともしない。

（これは……しょうが、ない……わよね。アンタ、の……せいよ、ハセヲ……）

声を出す力さえも残されておらず、心の内で言い訳にもならない言葉を吐いたボクの意識はそこで落ちた。

なぜか、足りなかった欠片が埋まったような満足感を覚えながら――

「……い、詠！」

「ん……」

やば、寝ちゃったんだっけボク。
早く起きなきゃ……って、え！？

「お願いですぞ！　恋殿の危機を救ってくだされ！　ねねでは、どうすることもできないのです！！」

「……ねね？　恋がどうしたの？」

「こっちです！」

手を取られ、そのまま引きずられるようにして連れて行かれる。

起きぬけの頭は、未だ混乱して働いてくれない。

（あれ？　何か忘れてるような……）

見慣れた”洛陽城”の廊下を抜けて辿り着いた中庭。

そこには――動物の園ができていた。

その中心に恋がいる。

これってもしかしなくても……

「恋？　まさか……？」

「家族……増えた」

「増えたってもんじゃないでしょ、これっ！？　どうすんのよ、アンタの家にも入りきらないじゃない！！」

「詠なら……大丈夫。何とかしてくれるって……信じてる」

「――っ！？」

（何よその目は反則でしょっていうかどう考えたら大丈夫なのよ限度ってもんがあるでしょうああでもこの娘の働きを考えれば……！？）

本能の叫びを理性で縛り、建設的な思考を再開する。

隣では、ねねもすがるような目でボクを見つめていた。

――といっても答えは決まっている。

当然としてこんな難題（むちゃ）を聞くわけには……

「……分かった、三月待ちなさい。その間でアンタの別宅――といっても、動物専用の設計だけど――を用意してあげるわ。その間はアンタたちが責任もってこの子たちを躾けておきなさいよ。中庭（こ）の隅だったら、使っても構わないから……」

「（パアアァァァ）……ありがと、詠♪」

「恩にきりますぞ！」

「ちょっ！？　苦しいったら！　嬉しいのは分かるけど、手加減しなさいよね！」

いかないはずだったんけど……何とかなるでしょ。

ようやく思い出してきたけど、月の下に天下泰平は為った。

まだまだ外部からの脅威は警戒する必要があるけど、内部には少し余裕があるから。

（……別に恋のおねだりに屈したわけじゃないわ）

誰にも聞かれてないのに、内心で言い訳してみる。

そう、そんなことはない。今も滅多に見られない恋のはにかんだような笑顔が見られるなら……なんて考えてない。

――ねねが恋をここまで慕って尽くそうとする理由が、少し分かった気はするけど。

「フン、まあ恋殿の上司であるならば、これくらいの配慮は当然なのです！」

「はいはい」

きっと、自分が恋を喜ばせてあげたかったんだろう。

恋の力強い抱擁に身を任せているうちに、不機嫌になってきたねねを見ながら苦笑する。

（ボクってこんな奴だったかな？）

ふと気になったので省みてみる。

まあ、その必要もないほどにアッサリと答えには辿り着いたけど。

その答えこそ――否、だった。

「……今度は何よ？」

恋を引きはがして自分の部屋に戻ろうとしたところに聞こえてきた剣戟の音。

ここまで激しい音を出せれる使い手は限られてくる。

（ったく、あの二人ときたら……）

そして予想通り、調練場には霞と華雄の姿があった。

「ちょっと！　今の時間は他の仕事をしているはずでしょ！！　何してんのよ！？」

ボクの気配に気づいていたんでしょうね。

声を上げる前に、二人はピタッと武器を止めた。

一応悪いことをしていたという自覚はあるみたいね。

「いやなぁ、華雄の奴が身体がうずいて仕事が手につかん言うから、仕方なしに相手しとったんよ」

「ほざくな霞！　貴様の方こそ、物足りなさを醸し出していただろうがっ！？　無駄に挑発してきおって！」

「そんなことないも～ん♪　これがウチの素やで？　なのに先に武器を抜いたんはそっちや。なら相手せんとなぁ？」

「～～～～っ！？　白々しい言葉を並べおって！　そこになおれ霞！！　その思いあがった性根、我が戦斧によって正してくれる！

！」

「さ～て、思いあがっとんのはウチか、アンタか。白黒つけようか」

途中からボクの存在を無視してヤル気全開になっている二人。

その光景に深く深く息を吐く。

そのまま沸々と込み上げてくる気持ちを乗せ、限界まで息を吸い込んだボクは、

「い～～～～～加減にしなさあああああぁぁぁぁーーーーーいっ！！！！」

怒りの鉄槌となった声を、二人に叩きつけた。

「はー、良い声出せるようになったなぁ、詠」

「次は叫ぶ前に教えてくれ……脳がとろけそうだ」

「……アンタたち反省してる？」

何とか模擬戦を中断させることはできたけど、二人の言動から反省の色はあまり見えない。

まあ、そのへんは指摘しても話が進まないからこの際目をつぶるとしても……

「どうしたのよ、霞？　少し〝らしくない〟んじゃない？」

「……」

思い当たる節があったのか沈黙する霞。

普段なら笑って誤魔化すなり、茶々を入れて場を濁すなりするはずなのにね。

「せっかく平和になったのに何で「だからだろう」……華雄？」

先ほどまで頭を抱えていた華雄が、真剣でありどこか沈痛な眼差しで霞を見つめていた。

霞の肩がピクリと反応したのを見れば、華雄の指摘は的中していたのだろうか？

「どういうことよ？」

「お前たち文官には分からんだろうが、我らは戦いの中に自らの存在意義を見出す者。平和な世となった今、我らはこの力を……自身の居場所を失いかけているような心地がしているのだ」

「そんな！？　だったらアンタたちは「分かっている。誰も乱世を望んでいるなどとは言っていない」……」

華雄の言っていることは、確かにボクには分からないことだった。

確かに文官にとって、これからは戦争のような日々が待ち受けてい

る。

でも、だからといって――

「分かってはいるのだ。そのうえで我らは自身の心に折り合いをつけていかねばならない。この身をどう扱っていくのかを「全然分かってないわよ！！」……詠？」

ああ、全く分かっていない。

普段こちらが何だかんだ言う前に、自分なりの（超前向きな）結論を出して先に進んで行こうとする華雄だとは思えない言葉だった。

まあ今回は実戦が待ち受けてるわけじゃないとしても、力の使い方なんて考えればいくらだって見出せるでしょうに！

「いくら世の中少しは平和になったからといって、やるべきことは山積みなのよ！　そりゃ今までとは違って制圧戦というよりは抑止力的な力の示し方が多くなるとは思うけど！」

そう叫びつつ、ボクの剣幕に驚いてか後退していく華雄との距離を詰めていく。

華雄を圧倒させたことなんて初めてだったけど、そんなことをきにしてられないほどボクは頭にキテいた。

「でもそれが何なのよ！！　それに何の不満があるわけ！？　それだってアンタたちにしかできない立派な力じゃない！　ただ、相手を倒すことだけにしか力を振るえない奴だなんて言わせないでしょうね！？」

「お、おお……」
「……参ったなぁ」
「……霞？」
ここにきて沈黙していた霞が反応した。
しかも先ほどの言葉通り、降参といった感じに両手を上げている。
「ありがとな、詠。ウチらみたいなのには詠みたいな重しになってくれる人間が必要そうや。そうやないと……どこに流されていくのか、分かったモンやない」
「そんな暇をあげるもんですか。これまで以上に忙しくさせてあげるから覚悟してなさい！」
不敵な笑いと共に放ったボクの言葉を受けて、霞は「はは、それはキッツいなぁ」と苦笑いを浮かべていた。
それでも、その表情に先ほどまでの陰りは残っていない。
もう大丈夫みたいね。
「確かに腐っとっても意味ないわ。詠の言うとおり、ウチは修羅やない。探せばできることは……ウチが力を示せる場所はいくらでもあったわ」
「目が覚めたようね」
「おお、不甲斐ないとこ見せてもーたわ。この借りは仕事で返しち

ゃる！　おら、華雄！　いつまでも呆けとらんでさっさと行くで！」

「はっ、誰の話をしている！　言われるまでもないわ！！」

そう言い残し、二人は駆け出していく。

（こんなに熱く語る性格だったかな、ボク……）

再度自身に問いかけた疑問。

――答えは分かっていた。

加えて何となくその理由に気がついてきたボクは、若干の気恥かしさを収めるべく、二人の背中を気がすむまで見守り続けた。

「詠、少しいいか？」

ようやく部屋に戻れたと思ったら、部屋の扉を”のっく”する音と声が届いた。

”のっく”して部屋に入ってくる奴なんて一人しかいない。

仕方なしに「入れば」と突き放すように入室を許可してやる。

「邪魔するぞ」と断って入ってきたのは、月の盟友にして建国の立役者である天の御遣い――ハセヲ。

ボクの在り方に変化をもたらした人物。

そして――行く末は月と結ばれる男。

実際に、月もハセヲに対して好意を感じているし、ハセヲだって願ってもない話だろう。（むしろそうじゃなかったら殺す！　でもそうだったとしても殺したい！）

親友の幸せを願う身としても、今後の国政を見据えての考えとしても二人が結ばれるのは素晴らしいことのはずだった。

だというのに、ボクの心はざわめきを抑えられない。

（月を取られちゃうのが心配なだけよ……きっと）

そのせいか、ハセヲに対してつっけんどんな態度を崩せないボクだったけど、コイツときたら何故か必要以上にボクに構おうとするのだ。

そんな時間があるくらいなら、月の傍にいればいいのに。

「で、どうしたのよ？　深刻そうな顔して……」

「詠、大事な話がある。聞いてくれ」

そう言って身を寄せてくるハセヲから反射的に逃げようとしてしまったボクの両肩をハセヲが掴む。

完全に逃げる機会を失ってしまったボクの心が「これは仕方ない」

と抵抗を諦めてしまった。

力強いハセヲの手に身を委ね、続きを待つ。

「俺が好きなのは「何言ってんのよ!?　アンタには月がいるでしょ!!」……いや、俺が好きなのは初めからお前だけなんだ。頼む、俺と付き合って欲しい」

「じょ、冗談言わないでよ!　何でボクのことなんか……っ!?」

「俺は本気だ。証明してやるよ、嫌なら逃げればいい」

言葉で伝わらないなら行動で示そうとしているのか、ハセヲの顔がどんどんボクの方へと近寄ってくる。

このまま何もしなければ……

（ど、どうしたらいいの!?　別にボクはコイツのことなんて……嫌いじゃないけど!　いや、だからといって好きでも……あああ!?）

頭の中がメチャクチャになってしまっている。

それでもハセヲの腕の力の入り方から、振り払うのは簡単だということは分かっていた。

その気になれば逃げられる。その気にさえなれれば――――。

（ボ、ボクは……ハセヲのこと、なんか）

危険なほどに接近しているハセヲの顔を見るのが恥ずかしくて目をつぶる。

逃げようとは考えれなかった。

それでも――

（……月）

目をつぶった瞬間、浮かんだ親友の顔が詠の口を勝手に動かす。

「アンタのことなんて、好きでも何でもないったらーーーっ!?」

「きゃあっ!??」

縮こまっていた身体を跳ね起こすように叫んでやる。

すると不思議なことに、ボクの正面にはハセヲじゃなくて月がいた。

「ど、どうしたの、詠ちゃん？　顔真っ赤だよ？」

「月!?　いや、あの、その……べ、別に何でもないの！　気にしないで……／／／」

「でも……」

何!?　ようするに夢だったわけ？

はぁ～～、もう驚かせてくれて……って!?

（だからって、夢であんな……あんな事をコイツに言わせようとするなんて、どうしちゃったのボク！？）

そもそも夢の話とはいえ、ハセヲがなぜ当然のようにボクたちと一緒にいたのだろう。

まだ知り合ってから二カ月ほどしか経ってないのに……。

あまりの恥ずかしさに頭を抱えてしまった。

そのまま走り去ってしまいたかったくらいだけど、月の方を何とかするのが先かと思いなおす。

オロオロしている月を横目に、無理やり声を絞り出した。

「それだったら月の方こそ顔が赤いけど、どうしたの！」

「そ、それは……／／／」

我ながら苦しい話のそらし方だったけど、月は引き下がってくれた。

でも……何かしら、この反応？

ハセヲの方へチラチラ視線を向けてるってことは……コイツと関係がある訳ね。

（……頬を赤らめるような、答えづらいような何かをしていたってこと！？）

すぐにでも問いただしたいことだったけど、そういうボク自身も似

たような心境にあるため気が引けてしまう。

質問の矛先がボクに戻っても困るしって……あ。

「朝っぱらから……何だ？　どうかしたのか、二人とも？」

「お騒がせしてすみません、ハセヲさん……」

ボクたちの話し声で起こしてしまったようで、ハセヲが上半身を寝床から起こしていた。

ハセヲの起きぬけの顔と声は、普段のものより沈んでいて機嫌が悪そうに見える。

起きる前に見たあどけなさは微塵も感じられなかった。

「で、何が原因で騒いでんだ？」

「ええっと……それはですね」

そう言って、月が視線を向けてきたのにつられるようにしてハセヲもボクを覗きこんでくる。

その表情が、さっき見た夢とかぶって見えてしまい――思わずボクは下を向いてしまった。

（ヤバい！　ボクいま絶対に赤くなってる！）

あんな夢を見た直後とあって、ハセヲの顔がまともに見れない。

心臓がかつてないほどに脈動を強めていた。

「おい？　どうした詠？　真っ赤だぞ、熱でもあんのか？」

「あ……」

相変わらず下を向いていたボクの額に、温かい手が添えられる。

とたん、急激に体温が上昇したかのような熱さを感じた。

不快さではなく、心地よさを纏った熱を――。

「……少し熱があるようだな。月、ワリイが医者を呼んできてくれ。多分過労からくる疲れが原因だろ。大丈夫とは思うが、念のために診てもらったほうがいい。
詠は俺が部屋まで運んでおく」

「わ、分かりました！　待っててね、詠ちゃん！」

必要ないと、止める間もなく月は出て行ってしまった。

さらに――

「って、何してんのよアンタは！？」

「何って、病人を運んでるんだが？」

「だからって何でアンタに”おんぶ”されて運ばれなきゃならねいのよ！？　自分で歩けるったら！？」

気付けば背中に背負われていた。

「あんま暴れんなって。落としちまいそうになるだろ？」

「……そう言って変なトコ触るつもりじゃないでしょうーね？」

「ん？　触って欲しいのか？」

「――――っ！？　変た「冗談に決まってんだろ。良かった、大したことなさそうだな」……なによ」

その声に心からの安堵の想いがこもっていたと感じたボクは、それ以上強く言うことができなくなってしまった。

良いように丸めこまれているようで面白くない。

せめてもの反撃だと、首筋に回した両手に入れる力を強めてやる。

より身体が密着し、お互いの心音が感じられる気さえしたけど……不思議と恥ずかしさより安心さが上回った。

それでも恥ずかしくはあるんだけど、ハセヲときたら涼しい顔をして歩いているうえに、歩みにも全く淀みがない。

（……何でボクだけがドキドキさせられてんのよ！？）

「どうした？　やっぱ、キツイのか？」

黙ったままだったボクを心配してか、ハセヲが声をかけてきた。

ああ、何でコイツはこんなにも……

「どうしてそこまで心配するのよ？」

「……？？　そりゃ、仲間のことを心配するのは当然だろ？」

声に出す気はなかったはずの言葉が零れてしまった。

それに対するアイツの答えに何故か”満足できなかった”ボクは、どうせ今更だとさらに踏み込む。

「ボクが聞きたいのはそんな言葉じゃないっ！！」

「……どうした？　やっぱり調子が「悪くなんてない！」……でもよ」

未だ訳が分からないと言った感じのハセヲにひどく腹が立った。

（これだけ……ボクの心を掻き乱しておいてっ！？）

いつのまにか自分の部屋に辿り着いてはいたけど、ハセヲの背から降りる気にはなれなかった。

今や、ボクの両手はハセヲの肩を突き刺すかのように握りしめている。

そのくらいの痛みは甘んじて受けるべきだと、身勝手ながらにも思う。

自分にもよく分からない気持ちが渦を巻いている。

それでも――不思議と胸の中で逆巻く感情を払しょくするために、ハセヲに言ってほしい言葉は思いついた。

「ならよ……どうすれば満足してくれるんだ？」

「それをボクの口から言わせる気？　その頭は何のためについてるのよ？　しっかり自分で考えなさい！」

「……お手上げだ。頼むから教えてくれ」

「――っ！？　いいわよ、よく聞きなさい！！　つまり、ボクはアンタの……」

一刻も早くこの感情のうねりから解放されたいと思ったボクは、その言葉を口に出そうとして……唐突に我に返った。

その言葉の意味を考え、ボクとハセヲに当てはめた未来を想像して――

「……何でもない」

「何だよ、そこまで言っておいて隠すなんて気になるじゃねえか。教えてくれよ」

とても”今は”言えないという結論に至った。

だって、ありえないじゃない。

――ボクがハセヲにとって■■でありたいだなんて。

だけど一番ありえないと思ったのは――

（おかしい……そんなに悪くはないかも、だなんてボクが思う訳がない！）

とにかく、誰にも言うわけにはいかなかった。

「男が小さいことを気にするんじゃないわよ！」

「いいじゃねーか、減るもんじゃねえしよ」

「あ～～もう！　何でもないったらーーーっ！！」

意識が急速に持ち上げられていくような感覚と共に、ボクは声をあげる。

今は絶対に口にしたくないこの気持ちは、もう少し心の中にしまっておきたかった。

何かの間違いだとは思うけど、もしも……万が一本当だったなら。

もう少し違う見方ができるようになったボクなら、ハセヲと並んで歩くことを誇れるようになる。

――そんな気がしたから。

詠　ｓｉｄｅ　了

「ど、どうしたの、詠ちゃん？　顔真っ赤だよ？」

「月！？　いや、あの、その……べ、別に何でもないの！　気にしないで……／／／」

――ここで少女は本当に目を覚ました。

夢の内容をハッキリと覚えてはいなかったが、それでも少女の心には少年に対する”想い”が芽生え始めようとしていた。

それが今後どのように育っていくかは――きっと神様にしか分からない。

## とある恋姫の日常風景　『詠』編（後書き）

何か話が性急すぎたかなとか後半グダグダになったかなとか、気になることはありましたがいかがだったでしょうか？

ハセヲにあんなセリフ吐かせようとするなら夢オチかドーピングするしかないんじゃないの？という現状が辛いです（泣）

まあとにかく！　これで（私としては）詠のフラグを立てたという認識ですので、ハセヲと詠のデレを楽しく書いていけたらと思います！

次の更新は・・・ヤル気次第じゃＧＷ中かなと・・・

## とある団員の日常風景（前書き）

祝６０００００ＰＶ達成！！

これはその記念話…ではないですけど、今までにはなかった絡みを入れてみました。

それではどうぞ！

ドアを開けると、賑やかな喧騒がハセヲを包んだ。

食堂はほぼ満席であり、誰もが午後から始まる仕事に備えて腹を満たしている。

このような状況の食堂において最も過酷な戦場――厨房に、彼女はいた。

巨大な中華鍋とお玉を抱え、惚れぼれするような手際の良さで次々と料理を仕上げている。

（武器振り回すよか、よっぽどこっちの方が似合ってるよな……）

小柄な身体に絶大な力を秘めている少女――流琉のもとへとハセヲは近づいていく。

調理に集中していたためか、流琉はハセヲに気付いていない。

そんな彼女に声をかけるのは気が引けもしたが、押し寄せる空腹の波には勝てず、ハセヲは口を開く。

「注文いいか？」

「あ、はい！　何でしょ……」

応対の言葉が途切れ、真剣な面持ちだった顔に輝くような笑顔が灯り――

「お疲れ様です、兄様」

「ああ……精が出るな、流琉」

可愛い妹分である少女に、ハセヲも優しげな微笑で応えた。

流琉は、時間に余裕があるときは食堂で腕を振るってくれている。その実力もさるものながら、『魏』の将であり、可憐な少女でもある流琉の手料理が食べられるのならと、食堂は連日盛況だ。

そのうちの一人であるハセヲも、カウンターに身を乗り出すように身体を預け、適当に注文をして完成を待つ。

そのまま何とはなしに流琉の姿を眺めていると、手を止めることなく彼女が口を開いた。

「この後、兄様は何の仕事があるんですか？」

「今日は午後から休みになってんだが……春蘭と模擬戦をやることになってな。よければ流琉もどうだ？」

「……いえ、誘ってくださって嬉しいんですけど……春蘭さまの邪魔をするのも何ですから、遠慮しておきます」

「……邪魔？　何の邪魔になるってんだ？」

「それは自分で考えてください。あ、それと例のモノは今夜あたりに。……さて、お待たせしました！」

流琉の言葉に頭をひねらせながらも、空腹の目と鼻を刺激する昼食

に気を取られ、ハセヲは了承の意と礼を言ってカウンターを離れた。
そのまま空いていそうな席を探し――
「団長ー！　よかったら御一緒しませんかー？」
聞こえた声の方へと、人混みの中を泳ぐようにすり抜けて向かう。
誘いをかけたのは『天遣隊』の中でも啄県――旅団結成のころ――からの付き合いがある面々だ。
年齢で言えばハセヲから見て兄貴分といった者たちだったが、星や風、稟たちを除けば一番付き合いがあるわけで。
それでも仕事時ならばともかく平時の彼らは、ハセヲにとって”気の置けない人のいい奴ら”――という認識だった。
「お～、さすが団長！　肉の量が多いあたり優遇……もとい愛されてますねー！」
「でも気をつけたほうがいいな。男は胃袋から制圧されていかれるからよ……」
「さすが女房に尻に敷かれてる人間は言うことが違うね！　哀愁がただよってるぞ！」
「うるせえよっ！？　お前なんぞ敷いてくれる女もいねーだろうがっ！」
――訂正。品は悪い奴らであった。

「それより団長、典韋将軍と何話してたんです？　今夜の密会の相談ですかい？」

「いや、それだけじゃないね！　きっと特別な一品の披露会があるんだよ！」

「ま、まさかそれは……伝説の『食べてほしいのは、わ・た』！？」

最後まで言い切ることを許さず、ハセヲは男の口に熱々の餃子をねじ込んでやった。

流琉特製の餃子は素晴らしい出来だったのか、目に涙を浮かべ悶えるようにして男はひっくり返る。

それを気にすることなく、「こぼすんじゃねぇぞ」とだけ呟き、はしの動きを再開するハセヲ。

本来騒がしいのは苦手なハセヲだったが、個性的な女性が多い集団の中にあって、口は悪いといえど男性たちとの気楽な雰囲気を放棄しようとまでは思わなかったのだ。

「団長、正直なところどうなんです？　あれだけ周りに良い女を『はべらせといて』浮いた話一つ聞かないのは……同じ男として心配なんですが」

「……心配って言葉のわりには、妙なトゲを感じるんだが。確かに今夜会う約束はしたがな」

「おお！！　それは一体何のためにですか？」

「ああ、流琉が今まで取っておいた『大切なもの』をくれるって言うからよ」

「「「おおおおおっ!?」」」

ハセヲの思わぬ発言に目を丸くする男たち。

「前は触らせてくれるだけだったんだが……踏ん切りがついたらしくてな。今夜が楽しみだぜ……って、何だよお前ら、その顔は？」

「何でもねーよ、この野郎！」

「アンタはいい奴だ。いつかはこうなると思っていた！　それでもな、理性と本能は別なんだよ！」

「団長、お前は親友だと思っていたのに……どうやらここまでのようだ。もうお前とは友でいられない！」

「俺はこいつらとは違うぜ。応援してやるから、しっかりな！」

「……ツキヨバカリトオモウナヨ」

それぞれが好きなことを言って、ハセヲの背をバシバシ叩きながら食堂を後にしていく。

というか、最後の一人はかなり力が入っていたため、背中がジンジンと痛むハセヲだった。

「くそっ、言いたいこと言いやがって……」

ハセヲは舌打ちしつつ、訓練場で春蘭を待っていた。

目的地に到着したものの、春蘭の姿が無いことを確認したハセヲは壁にもたれ、空を仰ぎ見た。

少し強めの日光に目を細める。

呟いた言葉は、少し湿り気を帯びた風にさらわれた。

見上げた空には大きな雲が見える。

夏が近くなっているのだろう。

「――お？」

「……えーと、こんにちは兄様」

意外な人物の登場に目を見開いたハセヲに、行儀よく挨拶を返したのは、先ほど別れたばかりの流琉だった。

「なんだ、結局来る気になったのか」

「いいえ、そのつもりはなかったんですけど……春蘭様が聞きたいことがあるからと」

流琉にも事情がよく分かっていないようなため、ハセヲは少し視線をずらし、隣に立つ春蘭へと尋ねかける。

「何だよ、聞きたいことって？」

「……お前たちは今夜、二人で逢う約束をしていると聞いた。し、しかも、流琉の大切にしてきたものをハセヲに捧げると聞いたぞ！？」

何かを堪えるように声を絞り出す春蘭。

明らかにご機嫌を損ねている様子に、目を合わせる二人。

どうして知っているのかという想いもあったが、それ以上になぜ春蘭がここまで不機嫌になるのかハセヲには全く分からなかった。

「だから何だってんだ？　お前には関係ないだろ？」

率直なハセヲの物言い。

春蘭のこめかみに、でっかい青筋が浮く。

「に、兄様！　もう少し言い方を考えてですね……」

「だけどよ、実際その通りだろ。まあ…関係ないというか、（そんな余裕はないだろうから）当分は縁がなさそうって「兄様っ！？」……言ったほうが？」

流琉は悲鳴に近い声で叫んだ。

隣に立つ人物（しゅんらん）から立ち昇る”殺意の波動”に恐怖を感じたからである。

思わず身体が硬直しそうなほどの闘気。

ハセヲも遅れながらにも気付いたが――無論、遅かった。

恐怖に怯える流琉の襟首を何かが掴み、有無を言わさぬ勢いで後方へと放り投げる。

そして――

「私を愚弄するかあああぁぁーーーっ！！！」

春蘭は左手で流琉を引き寄せ、その反動で右手を突き出した。

そこにはいつのまにか七星餓狼が握られており、ハセヲの胴を貫かんと放たれる。

「～～～っだあああ！？」

慌てながらも、（悲しいことに）このような事態に慣れつつあるハセヲの身体は反応し、体を開いて回避する。

彼女の実力と剣こそ、『魏武の象徴』と謳われているものなのであるが……ここしばらくは、特定（てん）の人物（みつかい）に対して振るわれることが多くなっていた。

「何でここまでされなきゃいけねーんだ！？」

ハセヲの当然と言える苦情に耳を貸さず、春蘭は叫ぶ。

「星や風、稟たちに囲まれているというのに、流琉に手を出そうとしている貴様が腹立たしいだけだ！」

「何でここで星たちの話が出てくんだよ！？」

「自覚が無いというわけか！？　この不浄者めがっ！」

わめきながら、春蘭は剣を振り回す。

かすっただけで挽き肉にされそうな凶悪すぎる連撃を、ハセヲはかわし続けた。

ハセヲには余裕などなかったが、冷静な判断ができていない春蘭は、渾身の攻撃を続けているにもかかわらず、ハセヲが武器も出さずに対抗しているという事実を受け、更なる怒りをたぎらせる。

「避けるなっ！！」

「馬鹿言えっ！？」

お互いに叫び合い、距離を詰める。

しかしながら――ハセヲの方が僅かに疾かった。

「――！？」

剣を振るために必要な距離――相手との間合いを詰めることに成功したハセヲは、身体が触れ合うギリギリまで踏み込み、春蘭の手首を掴む。

吐息がかかるほどに接近したハセヲの顔が、ここにくるまでに思い浮かんでしまった春蘭の想像――寄り添い合う流琉とハセヲの姿――を刺激した。

「――うわあああああああああっ！！！」

声と言うよりは衝撃波を思わせる春蘭の怒号が、ハセヲの全身を叩く。

「っぐ、どうしたってんだ！？」

頭がグラグラするのを根性で無視したハセヲは、開いてしまった間合いの外で春蘭を見つめる。

その顔は真っ赤であり、呼吸も荒いうえに動きにも精細を欠いている。

かつて見たことがないほどの狂乱状態に、ハセヲも戸惑いを隠せない。

「私に触れるんじゃない！　この変態!!　女の敵っ!!」

「落ち着け！　っち、頼む流琉！　手を貸してくれ！」

再び襲いかかってきた春蘭の攻撃を捌きながら、ひとまず春蘭を止めようと決意したハセヲは声をあげた。

が、少女から反応は返ってこない。

不思議に思ったハセヲが向けた視線の先で――流琉はうつむいて固まっていた。

その顔は、春蘭に負けず劣らずといったほどに赤い。

――何というか、頭に水を入れたヤカンを置いたら沸騰しそうな気さえした。

そして、なぜかその脇には、昼食を一緒にした団員たちの姿が。

「おい！　流琉はどうし「すいません、団長！」……は？」

「団長と別れた後、皆で話をしていたところを夏侯惇将軍に見つかりまして……」

「無理やり口を割らされた挙句、伝えた内容がどうやら間違っていたらしく……」

団員達が告解に訪れた信者のような面持ちで、絞り出すような声をあげている。

「……てーと何か？　春蘭が何で怒ってるかはともかく、元をただせば…これはお前らの勘違いによって起こった状況だと？」

「不幸な偶然の結果かと「アホかあああああ！！」……うう……」

それらを受けた神父（ハセヲ）からくだされたのは、やはり慈悲深い言葉ではなかった。

――まあ、勘違いされてもおかしくない言動をとったハセヲにも悪いところはあるのだが。

しかし、そんな風には考えもつけないハセヲは、今も途切れることのない攻撃を回避しつづけながら思う。

（――なんで俺のまわりにある世界は、こんなにも、俺を陥れるんだろう）

遠く空の果てを見上げ、せつなげに内心の想いを吐露したハセヲは――

「テメーら、何ボーっとしてやがる！　さっさと手伝いやがれ！！」

「そ、そうすればお許しいただけるのでしょうか？」

「そうだな……全殺し一歩手前で勘弁してやるよ。間違って死んじまっても、ちゃんとお前らの死骸の上に死んだ犬の骨とかも埋めといてやるから、死んだ後も寂しくねぇだろ」

「「「……」」」

オズオズと聞いてくる団員たちを突き放すかのように告げてやる。

その言葉を受けた団員たちの顔には一様に乾いた笑みが張り付いていたが、知ったことではなかった。

（そうだ、決めたぞ！　俺はもう、変な厄介事には首を突っ込んだりしねえ！）

ハセヲは心から叫び、春蘭へと突っ込んでいった。

実際はどうなることか分からないものであるが、少なくともこの時のハセヲは固く決意していた。

まあそうだとしても――

こういう想いを抱えている時点で、厄介事に好かれる体質であること。

さらに、具体的な策も無いのに決意だけ固めたところで、アリ地獄から抜け出そうと力の限りもがくくらい無謀なことである、という事実に――彼はずっと気付けないのだろう。

ちなみに、この一連の騒動はこの後更なる展開をみせ、ハセヲはその収拾を図るために奔走することになるのだが――それはまた別の話。

余談

「流琉は俺の妹みたいな存在なんだよ！　そんな流琉と俺が、特別な関係になる訳ねえだろっ！？」

「……待って下さい」

事情を知ったハセヲの断罪を受けるべく、覚悟した団員たち。

そこに待ったをかけられ、もしや救いの手が差しのべられるのでは……と、希望を抱いた彼らを待ち受けていたのは――

「（兄様の）バカーーーっ！！」

ハセヲの何の迷いもない言葉に心を抉られ、涙目となった流琉の痛恨の一撃だった。

## とある団員の日常風景（後書き）

実は恐ろしいことが起こったのです！

ありのままに起きたことを話すと…この話は本来従来の拠点話として書いてたものだったのに、そのキャラが出てくることなく五千字弱いってしまったため、急遽こういう形での投稿になったんです！

前々から思っていましたが、前置きが長くなりすぎですね、私（汗）

なので、次の更新はこの話の最後に言っていた、語られなかった話に焦点を当てたいと考えています！

それではまたいつの日か♪

# とある姉妹の日常風景（前書き）

前回の話の続きなんですが・・・どーしてこーなったｏｒｚ

## とある姉妹の日常風景

「どうだ、今日の私は！？」

その日、春蘭は朝から上機嫌だった。

常日頃から気分の浮き沈みが激しい人物ではあったが、ここ最近は元気がなかったのだ。（特に、昨日は重症だった）

しかし、それが嘘であったかのように、今の春蘭の顔はネジが緩みっぱなしになってしまっている。

未だ城を破壊した責を問われ、敬愛する主から言い渡された罰――一か月の間、閨を共にするのを禁ずる――が継続中であるにもかかわらず、だ。

（……一体どういうわけや、これは？）

ふとしたたびに、「ふにゃあ？」だの「うふふ？」といった思い出し笑いを繰り返す春蘭が気になった霞は、謎をハッキリさせるべく、朝議が終わって廊下へ出た春蘭を捕まえ、探りを入れることにした。

そして、問い詰めることしばらく。

どうやらその答えに関する鍵が、先ほどの春蘭の質問にあるようだった。

（どうって、特に変わっとることなんか……ん？）

普段通りだと思って見つめていた霞の目が、春蘭の左目にとまる。

かつて、自身との一騎打ちを果たした直後に入った横やりにより失われた左目を覆っていた眼帯。

それが、作りや意匠こそ似通ってはいたものの、新しくなっていることに気付いた。

「おお、眼帯を新調したんやな！」

「おお！　そうだ、似合って「ほどほどにした方がいいぞ、姉者」……秋蘭、しかしだな！」

春蘭の背後から投げやりに肩をすくめてやってきたのは、妹である秋蘭。

はばかることなく姉を溺愛している人物にしては妙な態度だ。

姉の喜びを嬉しくは思っているようだが、どこか疲れているような印象を霞は受けた。

「どーしたん？　何か疲れてそうやけど？」

「……ああ、昨晩から事あるごとに感想を聞かれているのだ。初めのうちはそれでも微笑ましかったのだが……二百を超えたあたりからはキツくなってな」

「……マジで？」

「マジだ」

小声で囁くように確認した驚異の内容に、二人は目を見合わせてため息を吐く。

「何の話をしているのだ？」

「いや、姉者がここまで喜んでいるのは、眼帯だけではなくて『あの言葉』のおかげだろうという話をしていてな」

「っ！？　べ、別にだな！　アイツの言葉など気にかけておらんわ！！」

「おや？　私は華琳様のお言葉のつもりで言ったのだが、姉者は誰を想い浮かべたのだ？」

「んなっ！？」

思わぬ秋蘭の言葉を受け、春蘭が口をパクパクさせている。

いい加減、話をそらしたかったのだろうが、聞き方は少々意地が悪かった。

さすがに何度も聞かされて、面白くない気持ちでも生じてしまったのだろうか。

秋蘭は目を細め、面白げに姉の動揺を観察している。

その様子は、嵌められたという焦りと、確かに何故秋蘭の言う通りの言葉を思いつけれなかったのかというような驚愕に彩られていた。

（ふーん。ようするにや、春蘭のコレにはハセヲが関わっとるちゅ

ーわけや）

ここまでくれば霞には全て分かった。

春蘭の心をここまで揺さぶれる人物は限られている。

最近何かと（自分もだが）絡んでいる少年が関係しているのは間違いなかった。

「まあ、それは後で聞くとしてな。その眼帯は誰かから貰ったものなん？」

大体は話の流れ的に予想はついていたが、念のためにと確認をとる。

その言葉に、春蘭は助かったとばかりに飛びついた。

「うむ！　ハセヲがどうしても受け取ってくれと頼んできたのでな。聞けば手作りだと言うし、仕方なく貰ってやったのだ！」

「……そーかい」

エヘンとばかりに胸を張って、そう言ってのける春蘭。

その様子から、どう見ても仕方なしに――――とは考えられない霞だった。

「まったく、浮かれとるから華琳絡みかと思えば。いつのまに春蘭までタラシこんどるんや、ハセヲ！」

「ふふ、妬いているのか？」

「どやろな～、面白くはないけど……。まあハセヲなら、気付けば新しい女を囲っといても不思議はないからなぁ～。気にするだけしゃーないんやない？」

「ああ、普段は鈍いくせに稀にだが無自覚にもこちらの心を奪うかのような言動をとるのだ。本当に性質（たち）が悪い」

しみじみと呟く秋蘭。

それに対し、「誰がタラシこまれてるだとお！」などと頬を染めてほざく春蘭をさらりと無視し、霞は獣の耳と尻尾が生えた幻覚さえ見えるような反応をみせる。

春蘭はその後も弁解を続けていたが、霞の意識は完全に秋蘭の発言に向けられていた。

「秋蘭さん、今の言葉は気になるな～♪　まるで自分が体験したかのような口ぶりやったでえ？　ほら、ここは春蘭とハセヲの経緯も含めて全部吐いてみい！　そーせんと、気になって仕事が手につきそうにないわ～」

「別に構わんが、あまり面白くはないと思うぞ？」

「え～からえ～から！　それはウチが判断することや！」

臆面もなく言い切った霞に、秋蘭は苦笑と共に了承を告げ、話し始めた。

――――しばらく続きそうな春蘭の言い訳を聞き流しながら。

回想録

「……っ、……っく」

息も絶え絶えといった様子で、剣を杖代わりに何とか立っている春蘭を、ハセヲも呼吸を負けず劣らず乱しながら見つめていた。

その周りには、開始早々に気絶させられた天遣隊の団員達が転がっている。

（ったく普段やかましいくせに、こーゆうときだけ気持ちよさそーに寝やがってぇぇっ！！）

元をただせば、こうなった原因はハセヲの物言いにあったのだが、本人は全く気にしていない。（それどころか自分に非があることにすら気付いていない）

まあもとより（盾くらいにしか）期待していなかった彼らのことを意識から外したハセヲは、春蘭を見据える。

先ほどまで怒りにまかせて体力配分もせず、風車のように剣をブン回していたのだが、さすがに体力回復に努めている間に頭が冷えたのだろうか。

呼吸と共に、纏っている雰囲気も落ち着きを見せ始めている。

「それで……？　流琉から貰うのが何でそんなに気に入らなかったんだよ？」

「知れたこと！　貴様のような男に流琉を任せられるわけが「ん？　包丁の話じゃねーのか？」……何？」

「だからよ、流琉の愛用の包丁を譲ってくれるっていうから、手入れの仕方を教えてもらうがてら今夜会う約束をしてたんだが……今の口ぶりだと何か勘違いしてたのか？」

「っ！？　べ、別に勘違いなどしていない！」

春蘭は明らかに勘違いしていたという顔で叫ぶ。
そして、話をそらそうとするかのように、赤い顔で言葉を続けた。

「それよりだ！　なら貴様にとって、流琉はどのような存在なのだ！？」

「そうだな、尊敬できる『仲間』で、可愛い『妹分』ってとこか」

「……それだけか？」

「他に何があるってんだよ？」

語る口調も優しく言い切り、春蘭の追及にも心底不思議そうに尋ねるハセヲ。
この言葉で春蘭の疑問を氷解することはできたが、同時に――――固まっていた少女の心を砕いてもいた。

（ああ……兄様にとって私は、『妹』ではあっても『女の子』ではないんだ）

流琉は、今は嬉しくもあるが将来の見えないハセヲの発言にうなだれるように、その場を後にした。

「ふっ……ふふふ」

「ん？」

立ち去ろうとする流琉に声をかけるより僅かに早く、ハセヲの耳に届いた不吉な感じの笑い声。

そのまましばらく壊れたスピーカーのように繰り返される笑い声が、ハセヲには地獄から響いている亡者の声のように感じられた。

見たくはなかったが、それでも目を向ければ、鬼も驚くような形相を浮かべた春蘭の姿が。

見えない何かに押されたように、ハセヲの身体が軽くのけぞる。

「別に勘違いなどしていないが……紛らわしすぎるわあああああ！！　わざとやっているのか貴様！？」

「何でだ！？　別に勘違いしてねーならいいじゃねーか！？」

聞く耳もたぬとばかりに再度突撃してくる春蘭。

その足取りは、もはや疲れを感じさせないほどに頼もしい。このままだと――

（っち！　やるしかねえ！！）

身を守るべく、ハセヲは双剣”虚空ノ双牙”を喚装。
意識を刈り取るべく初撃を捌き、側頭部をカウンターで狙いうつ。

「――――!?」
「んなっ!?」

しかし、ここで想定外の事態が起きた。

確かにハセヲの一撃は春蘭を捕らえはした。
側頭よりも僅かに横――――春蘭の左目を覆う眼帯を。

両断された眼帯は重力に従い、力なく地面に落ちる。

慌てて振り返ったハセヲが見たのは……

「見るなあああああああああああああああ!!!!」

普段、眼帯に隠されている目を片手で隠し、涙声で見慣れた七星餓狼の腹を叩きつけようとしている春蘭だった。

何となくかわしてはいけない気がしたハセヲは、急所を避けたものの直撃を甘んじて受け、意識を失ったのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「……ヲ。……ハセヲ！」

「……ん」

静かだが意志の強さを感じさせる声音に意識を持ちあげられ、重たいまぶたがゆっくりと開かれていく。

（何が……ああ、そうか。確か春蘭の眼帯を壊しちまって……）

迫る一撃を受け入れ、昏倒したのだと思いだす。

意識を失う前までの記憶を思い出し、目の焦点が合ったのは同時。

そして初めに俺の目に飛び込んできたのは……

「秋蘭？」

「目覚めたか……」

普段の冷静さはどこへやら。隠しきれない焦燥感を身に纏っている秋蘭がいた。

こいつがここまで動揺を表してしまう相手は二人しか思いつかない。

なら、順当にいって――

「どうした？　春蘭に何かあったのか？」

身体を起こしつつ、尋ねる。

一撃をもらった腹が訴える鈍痛はかなりキツかったが、それどころじゃなさそうだと今は無視した。

「ああ、実は姉者が部屋に引きこもってしまってな。何を言っても出てきてくれないのだ……」

「何だって！？」

驚愕の事実を聞いて感じたのは、まず信じられないという思いだった。

失礼な話だとは思うが、ここ三カ月で見聞きした春蘭の人物像から言って、春蘭はどんなに辛い目にあっても部屋に引きこもるといった後ろ向きな手段をとる人間だとは思っていなかったのだ。

俺が抱く春蘭像は、何が起きようとも特定人物にさえ害が届かなければ、その愚鈍なまでの無頓着さをもって、身勝手な自己完結を迎えられる、お得（？）な性質の持ち主なのだから。（一応褒め言葉のつもり）

――そして、次に思ったこと。

あの眼帯が、春蘭にとって大切なもの――たとえば華琳あたりから贈られたもの――だったとしたら。

（まあ、華琳はねえな。だったとしたら、今頃俺はあの世行きだったはずだし）

それでも、あの反応は尋常ではなかった。

まだ耳に春蘭の叫びが残っているかのように思える。

とにかく、眼帯の件が関わっているのは間違いなかったため、秋蘭から詳しい事情を聞く。

秋蘭の方も、流琉から聞けることは聞いているらしく、改めて俺が話せるのは眼帯が壊れた時の話だけだった。

やはりというか、眼帯が壊れた件が春蘭の心にショックを与えているのは間違いないらしい。

「真っ先に思い浮かぶ案は、新しい眼帯を用意することだな。できれば華琳から贈ってもらえるとありがたいんだが……」

「それは無理だ。姉者が華琳様には言わないでくれと言っていたからな。かえって逆効果になるかもしれん。それに私が新しいものを用意すると言っても、反応は薄かったからな」

それがよく分からない。

なぜか春蘭は華琳に報告されるのを拒んだらしい。

しかし、話を聞くとあの眼帯は秋蘭があげたものらしいし、当の本人に悪いからと思っているだけなら部屋に引きこもる理由にはならないだろう。

逆に心配をかけるだけだからな。

そんなことは春蘭だって分かってるだろう。

なら一体どうすれば……

「ハセヲ、頼みがある」

「ん？　何だ？」

気付けば、秋蘭が正対して俺を見ていた。

だが妙なのは、改まったセリフとは裏腹に、態度自体はあまり気乗りしていないということだ。

――まるで、本当なら頼みたくないとでも思っているかのように。

それでも、迷いを振り切るかのように微かに首を振った秋蘭は話し始めた。

「姉者に新しい眼帯を贈ってほしい。ハセヲ、お前自身の手で、だ」

「……は？」

「できれば手作りがいい。それが無理なら、市販の製品に一手間加えるだけでもいいから、お前の手が加わっているという事実がほしいところだ」

秋蘭が言っている言葉の意味が理解できなかった。

まあ、壊したのは俺のせいだから俺が弁償するのは道理だとは思うが、春蘭が受け取ってくれるとは思えない。

俺たちは――というか春蘭は、いつも何かしらのキッカケが原因で小競り合いを引き起こそうとする。

その胸の内が、華琳に忠誠を誓っていない俺への不信感によるものだと分かってはいるから、俺としては何とも言えないわけで。

だっていうのに……なあ？

「別に構わねえが……受け取ってくれるとは思えねえぞ？」

「責任を取ろうと思っているなら、何としても受け取ってもらうまで努力しろ。それで恐らく……上手くいくはずだ」

何を根拠にそんな確信を抱いているかは知らねえが、できることはするつもりだった。

何より――

「なあ、その手に持っているのは「弓だが？」……いや、そうじゃなくてよ」

「ではハセヲ、期待しているぞ。……これ以上は言わせないでくれ」

その瞳が雄に語っていた。

――犯した罪はしっかり償え、さもなければ相応の死（バッ）を受けさせるぞ、と。

（……やっぱり姉妹なんだな）

こんな状況じゃなきゃ、分からなかっただろう秋蘭の行動に戦慄がはしる。

普段大人しい奴がキレたら凄まじいと言うが、まさにこんな感じなのだろう。

（厄介事に首突っ込むのは……ごめんだったんだがな。ま、それも無理な話だったってわけか。なんていうか――どうせこんなふうになし崩しに巻き込まれるに決まってるんだからよ）

どこか達観したような心地で秋蘭の静かなプレッシャーを受け流しつつ、ベッドから立ち上がる。

思えば、いつも春蘭には非常識な対応ばかり受けさせられてきたが、ある意味今回が一番混乱させられている。

ひとまずデス☆ランディのとこへ向かいながら、記憶が途切れる直前に見た春蘭の姿を思い出す。

（泣いてたな、アイツ……）

その事実は俺の逃げ道を完全に塞ぎ、歩みの速度を上げさせた。

まあ……なんだ。

今回に限っては、アイツの顔を見たときから何と言われようが関わる気満々だったのは――他の奴らには秘密だな。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

春蘭　ｓｉｄｅ

「ああ……」

私は見られたくなかった、という言葉を必死に飲み込んだ。

それを口に出した時点で敗北が決し、守らねばならない矜持を折られそうな気がしたからだ。

かすれるように消えた声と共に、力の入らない拳が壁を叩く音が虚しく響く。

立っている気も失せ、寝床に身体を投げ出して呆然と天井を仰いだ。

いつもそこにあったはずの眼帯はもはや無いが、私の左目――――暗く窪んだ眼窩（がんか）――――は何も映してはいない。

その事実は当時の私を大いに焦らせたが――――華琳様の御言葉によって救われた。

傷を負った私を華琳様はもう愛でてくださらないかもしれない、と絶望の淵に立たされた私を華琳様は受け入れてくださったのだ。

（だが……アイツはどうだ？）

この目を見てアイツがどう思うか。

妙にそのことが気になって、私の心はひどく掻き乱れていた。

自分でも信じられないと思うのだが、どうしても今は落ち着くまで一人でいたかったのだ。

こんな醜態、華琳様には知られたくなくて、秋蘭には口止めを頼んでしまった。

（くそ、なぜ私がここまで悩まなければならない……！？）

最近になって考える時間が増えた奴のことで苦しい思いをしていることに私は憤りを覚えた。

それでも気になってしょうがないのだ。

ハセヲ。

いつか天の世界に帰ることを理由に、華琳様に忠誠を誓わない不届き者。

華琳様はそれでも構わないと仰っていたが、私には認められなかった。

万が一にも華琳様の覇道を邪魔立てするやもしれんと日々警戒していた。

その中で目にしたハセヲの人となりは――――私の意識を段々と変えていく。

妙な存在感を放っている奴で、無愛想な態度にもかかわらず、自然と人が集まる。

何だかんだ言って、面倒見も良い奴のようだ。季衣も慕っているようだしな。

さらに、戦場に立てばその強さには私でさえ目をみはるものがある。最初は三人がかりだったとはいえ、最後は一騎討ちであの呂布を倒すほどの実力者なのだ。

実際、何回か共に戦ったこともあったが、（決して伝えはしないが）負ける気がしないほどの頼もしさを感じたほどだった。

（それほどの力をもっているというのに、なぜお前は――我らと共に往こうとしない！？）

ぎし、と何かが軋む音が聞こえた。

それで、どうやら歯を思った以上に食いしばっていたことに気付く。

（……これは、あくまで華琳様のことを思えばの考えだ。私個人の意志では……ない！）

そう考えることで定まらない心を無理やり納得させる。

自分でも驚いているが、今や私はハセヲに対して信じてもいいのではという想いを強くしている。

いや、正直にいえば――共に戦ってほしいと思ってしまった。

その力を、華琳様のためにずっと振るってほしいと思ってしまったのだ。

最近は気がつけばハセヲの姿を追い、一挙手一投足を見つめている。

（だというのに、ハセヲの態度は相変わらずのまま。まったく腹立たしい！）

だから何かと突っかかるような態度をとった。

私という存在を、『魏』という場所をハセヲに認めさせたくて。

自分でも少しやり過ぎただろうかと思うこともあったが、ハセヲは受け止めてくれた。

それが嬉して、心地よくて、でもやっぱり――満足はできなくて。

華琳さまといる時とは別の充足感を楽しみ、同時に僅かだが感じる心の隙間を満たそうとハセヲと戯れた日々。

（だが、これからはどうなる？　明日から我らの関係は……っ！？）

嫌な思考に囚われそうになった私の意識を、扉を叩く音が現実へと引き戻した。

その行為（ノック）の意味を瞬時に理解した私を、正体不明の恐怖（かんじょう）が襲う。

「――何の用だ？」

それでも無視しようとは思えなくて上半身を寝床から起こし、声をかけた。

コイツに関することでは一歩も引きたくはなかったから。

何のつもりでやって来たのか分からないため、妙なざわめきを抑えられない私の心が、

「少し話そうぜ、春蘭」

その何でもなさそうな普段通りの声で拍子抜けしたかのように、落ち着きを取り戻した。

そして――

春蘭　ｓｉｄｅ　了

秋蘭　ｓｉｄｅ

「……さすがだな、想像以上の結果だ」

「別に大したことはしてねえよ。俺はただ当たり前のことを言っただけだ」

（そう言い切れるところがさすが、というわけなんだがな……）

ハセヲから「終わった」と報告を受け、私の胸の内にあった、ささ

くれだった感情が引いていく。

それと同時に『新たな問題』が生じてしまったわけだが、なるようにしかならないかと声に出さずにため息を吐いた。

（これで良かった……のだろうか。ハセヲに頼めば、こうなるかもしれないことは予想できていたのに）

――以前から姉者の言動は気にかけていた。

ハセヲと共に過ごすうちに、姉者の行動が自分がよく知るものに変わりつつあることに気付いたからだ。

そう、行為の方向性こそ真逆ではあるが――その行動原理は、華琳様に対する情動と似通っているのだ。

つまりは――そういうことなのだろう。

まあ、少しばかりではなくもないこともないほどに素直ではない我が姉は、ハセヲに対して抱き始めている想いを認めようとはしないだろうが。

「――どうした、まだ気になることがあんのか？」

「……あ、いや……そういえばあったな」

どうやら顔に出ていたようだ。

心配そうな顔を浮かべているハセヲの気をそらすべく、神妙な顔をつくる。

幸いなことに、この男に関する都合のいい話はいくらでも思い浮かんだ。

「本当に女性の気の惹き方が巧みな奴だ。ああなった姉者をも宥める極意を、ぜひ伝授してほしくてな」

「はあ!?　何言ってんだよ、そんなのできるわけないだろうがっ!!」

「ふむ、座学では興が乗らんか。ならば、私との実践ではどうだ?」

「――――!?」

そう言いつつ、しなだれるようにハセヲの腕をとる。

耳元に息を吹きかけたのは、ささやかな礼のつもりだった。

直後に、真っ赤な顔で上半身をのけ反らせたハセヲを見て上手く話がそれたと判断した私は「冗談だ」とこぼし、背を向ける。

(これで良かったのだろう、きっと。ハセヲ……姉者を泣かせたら許さんからな)

色々と思うところがある相手ではあるが、姉者の目は悪くない――そう思った。

なぜかそう思った瞬間、心に何かが刺さったような痛みを覚えたのはきっと気のせいだ。

素直ではないのは――――姉者の方なのだから。

「待ってくれ！」

だから気にせずそのまま足早に去ろうとした私の背に、その声はかかった。

――――かかってしまったのだ。

秋蘭ｓｉｄｅ　回想録　了

「――――と、いうわけだ」

「へ～……って！？　肝心なところが抜けとるやん！？　結局、ハセヲは春蘭に何て言ったんよ？　秋蘭に声をかけたってとこも気になるし！」

「もう時間のようだからな。続きはまた別の機会にしよう」

すげなく会話を打ち切った秋蘭が顔を横に向けた。

つられてそちらを向いた霞は、今までの話のタネにされていた少年の姿を見つける。

ハセヲも秋蘭たちに気付いたのか、軽く手をあげて歩み寄って来た。

お互いに簡単な挨拶をすませ、用件があったのだろう秋蘭に対してハセヲは口を開く。

「ワリイ、待たせたか？」

「ふふ、そのぶん働いてもらうから問題ないさ」

「……しゃーねえな。んじゃ行こうか」

どうやら秋蘭の仕事を手伝うらしいハセヲは、楽しそうにほほ笑む秋蘭を促して歩き出す。

少し遅れて「待ってやー！」と、話の続きを聞きた気な霞が二人の後を追い出した。

静かになったと思われた廊下の一角。

そこに、突如として凄まじい気迫が立ち昇る。

底冷えするような激情をまき散らしているのは、話を聞いてもらえないためにショボくれそうだった春蘭だった。

顔はこわばり、噴火寸前の火山を想わせるように身体が小刻みに揺れている。

彼女がこうなるのも無理はないかもしれない。

なぜなら、彼女の視線の先には――――

春蘭視点

左腕を秋蘭に、右腕を霞に預け、両手に花の状態
美女を二人もはべらせて、のし歩いている

客観視点

強引に両腕をとられ、連行されている犯人のよう
勢いよく引っ張られているため、引きずられている
それでも、両手に花ではある

――ようなハセヲの姿があったのだから。

込み上げる何かを押し殺すような口調で、春蘭はうなる。

「……いつか斬り捨ててやる」

自分でも制御できない感情が、彼女の眼光を強烈にしていく。

その眼は、しっかりと捉えていた。

大切な妹の表情や仕草に、これまであったハセヲに対する線引きが
薄れていること。

そして何より――

首筋に昨日までつけていなかったはずの『ペンダント』らしき鎖が、
陽光を反射して輝いていることに。

# とある姉妹の日常風景（後書き）

これでこの話は終わりです！　終わりなんです！！

え、肝心なとこが抜けてるって？

そこはみなさんの豊かな想像力でカバー・・・ってわけにはいかないですよね（汗）

言い訳すればですね、内容が（全く）思いつかなかったわけではありません！
そこまで入れると文字数が結構いってしまいそうだという配慮の結果・・・いやまあ、それなら他のとこを削るべきなのは分かってます（泣）

とりあえず今回では収まりきらなかった話は、次（？）の更新で触れられればいいかな～と思っています。

さて！

それでですね、今回の話において春蘭と秋蘭が新たなヒロインに認定されました！！

私の中で、今後の絡みを考えると春蘭は絶対にヒロインにしたいという想いがありまして。
めでたく秋蘭ともどもハセヲの魅力に堕とされたということでｗ

状況的に、それはどうなんだろうと思われる読者の方もいらっしゃ

るでしょうが、ご容赦いただけると幸いです。

それではまたいつの日か♪

## とある姉妹の深層心理（前書き）

思い起こせば・・・前回、前々回と、この話で三部作になってしまったのですね（汗）

まあ、ひとまず今回で夏侯姉妹編は一区切りです。

それではどうぞ！

『彼女の気持ち？』

「「……」」

差し込む日ざしが少し弱くなってきた自室で、春蘭は不機嫌さを隠そうともせずに黙りこくっていた。

腰を寝床に下ろしたまま、左目を隠すように枕を抱きしめている。その姿だけ見れば、ちょっと拗ねている可愛らしい少女のイメージを浮かべられそうだが――いかんせん眼光が強烈すぎた。

文字通り突き刺さりそうな視線を、隣に腰を下ろしているハセヲへと送る。

しかし、ハセヲは何の反応も示さなかった。

気付けばハセヲを部屋に招き入れていた春蘭だったが、話そうと言っていたにもかかわらず、彼は全く口を開こうとしない。

いつになく堂のいった態度で、春蘭のことを気にもとめていないかのように、備え付けの小窓から見える景色を見つめている。

（……どういうつもりだ）

やがて、春蘭の強張っていた顔は次第に居心地が悪そうな表情へと変わっていった。

落ち着きも無くなってきたのか、身じろぎも出はじめている。

もはや、春蘭にはハセヲが何を考えているのか全く分からなかった。

話があるというからには先ほどの騒ぎのことに決まっているし、自分の機嫌を直そうと考えているなら、さっさと話しかけねば何にもならない筈なのだが――

（まさか……私から話を振らせようとでも考えている？　暗に、非がこちらにあるとでも言うつもりなのか……）

ふと浮かんだ考えにより、しぼみかけた怒りを再燃させる春蘭。

唇をとがらせてハセヲを睨むが、やはりハセヲは力の抜けた自然体で、春蘭の怒りなど気にもとめていないように見えた。

――何をしてもまるで手応えがない相手に怒りを持続させるには、相当の気力と根気を必要とする。

戦場にて、国を、仲間を、そして主を背負って戦っている春蘭ならばともかく。

言ってみれば、ヘソを曲げている今の春蘭には……無理な話だった。

対するハセヲは無言。

どこまでも静かに、ただ、『ここ』にいる。

悟りを開いた高僧――といっては大げさだが、纏っている雰囲気はそれに近いものであった。

春蘭の胸で渦巻く感情（いかり）を流すことなく受け止め、呑みこんでいく。

（……卑怯だ、こんなやり方）

何が卑怯なのか自分でもよく分からなかったが、春蘭はそう思わずにはいられなかった。

腹は立っているし、ハセヲのことで気になっていた眼帯（けん）もあったのだ。

なのに――それがどうでもよく思え始めてきたことが。

自分をこの状況に追い込んだ本人（ハセヲ）との雰囲気が、心地いいと感じられるようになっていることが。

「――この、馬鹿者が」

枕越しだったために、くぐもったように小さく響いた声が、今の春蘭にできる精一杯の反撃だった。

「――あ」

しばらく時間が流れて。

部屋に入って初めて、ハセヲが何かを思い出したかのような声をあげた。

「なんだ？」

「今晩、季衣と飯食いに行く約束してたんだけどよ。お前も行くか？」

「お、おお！　そうだな、行っても……」

先ほどまでの気まずさも忘れ、弾けるように声と顔をあげかけた春蘭。

しかし、今の自分の左目（じょうきょう）を思い出したために、言葉は最後まで出てはくれなかった。

春蘭は抱きしめていたままだった枕を掴む腕の力を強め、背中を丸めるように顔を下げようとして――――できずに止まる。

「……これは？」

「俺が作ったんだ」

春蘭の目の前に差し出された眼帯。

意匠こそ以前のものと似通っているが、作りには少し粗さがあるようだった。

しかし、それもハセヲが言った言葉を受けて見れば、一つの魅力に思えてきたから不思議である。

市販のものではないなと見た瞬間に察した春蘭だったが、ハセヲの『手作りの品』だとは予想しておらず、驚きからか目を丸くした。

そのまま吸いつくように目を向けている春蘭を見て苦笑を一つこぼし、ハセヲは言葉を続ける。

「壊しちまってすまなかった。代わりって訳にはいかねえだろうが……受け取ってもらえると助かる。ひとまずでも、これで外出できるだろ？」

「……」

日ごろでは考えられない温かみに満ちた言葉。

春蘭がチラと横目で見れば、笑ってまではいないものの、安心できるような穏やかさを纏ったハセヲがいた。

思わず差し出された手を取ろうと肩があがりかけた春蘭だったが、それでも腕は動こうとしない。

――その原因となっている想いは解っていた。

いつまでもこのままでは駄目だと判断した春蘭は、身体ごと顔をハセヲへと向け、意を決して尋ねだす。

これだけは、ハッキリさせておかねばならなかったから。

「なあ、ハセヲ。お前は私の左目を見て……どう思った？」

「――はあ？」

春蘭の質問にハセヲの口調が一転、何を言っているのかといった醒めたものに変わる。

急に態度を変えたハセヲの真意を図りかねた春蘭が、再度口を開いて――

「だからっ！　私の左目は「それはお前の覚悟の証なんだろ？　それを何怯えた顔してどう思うなんて聞いてんだ」……証、だと？」

心底不思議そうな顔をしたハセヲに中断させられた。

「詳しく聞いたわけじゃねーが、身を削って仲間を、華琳を助けた証なんだろ、左目は。だったら、堂々としてりゃいい」

「……本当にそう思うか？」

「ああ、胸張って証を見ろよ。傷に囚われてなんかやるな。そんな……らしくねえ顔を見せるんじゃねーよ」

悶々と悩んでいた自分が馬鹿らしいと思えるほどの、ハッキリとした物言い。

しかし――その当然といった態度が、心からの気持ちだということは分かる。

そのおかげなのか、春蘭は胸の中にあった”しこり”がとれたような清々しさが広がっていくように感じていた。

とはいえ、素直に安心したような態度を見せる気にはなれなかったため、春蘭は無理やり不機嫌な顔をつくり、そっぽを向きながら――

――

「……らしくないだと？　ふん、貴様には普段私がどう見えているというのだ？」

「ん、虎よりなんぼか狂暴な、恐怖の殺戮戦士」

「……ほう、ならば確かめてみるか」

「その必要はねえよ。これは今までの経験に基づいている事実なんだからな。とっくに味わってるさ」

「――っ！？　こ、このっ……何がおかしい！」

明らかに力の抜けた憎まれ口を叩いてみるが、ハセヲの臆面のない物言いにより、春蘭の声に不穏な響きが宿る。

それに対する「何をいまさら」な返答に、ガーっと虎さながらの気迫を振りまいて腰をあげようとした春蘭の耳を、笑い声がうった。

見れば、片手で口元を隠すように笑っているハセヲの姿が。

しかしながら、その様子はまるで――

「っく、くく……いや、ワリイ。この部屋に入って、いま初めて春蘭に会えた気がしたからよ。やっぱこーじゃねえとな」

「な、なにを……／／／」

悪戯（いたずら）を成功させた悪ガキのような笑みを刻み、満足だといわんばかりに頷くハセヲ。

初めて見るハセヲの表情に、妙な焦りを覚えた春蘭。
そのソワソワしている姿をしばらく堪能したハセヲは、力が緩んでいた春蘭の腕から枕を奪い、少し強引にも眼帯をつけさせた。

そして、ポンと春蘭の頭を一回叩き――

「まあ、ようするにだ。お前はお前のままでいいんだよ。深いことを考えるのは似合わねーぞ」

「……／／／」

予期せぬ受容の言葉に、春蘭の顔が紅潮する。
最後のからかいを含んだ言葉に反応できないほど、春蘭の心に温かい気持ちが溢れていた。

どれだけの時間が経ったのか。

春蘭にとっては一瞬の間だったようにも思える心地の中、ハセヲがすっと立ち上がる。

そして、固まったように動かない春蘭の正面に立ち――

「行こうぜ」

春蘭に向かって手を差し伸べた。

言葉はそっけないものだったが、口元に刻まれている微笑が春蘭の

胸を高鳴らせる。

未だ頭は上手くまわっていない状態ではあったが――

（～～～～ああもう！）

春蘭は心のおもむくままに差し出された手をとり、二人はそのまま淀みなく部屋を後にした。

ちなみに、その日食べた料理は春蘭にとって、ここ最近の記憶にないほど美味しいものだったとか。

その理由に気づけるのは……いつの日になることやら。

『彼女の気持ち？』

秋蘭にとって、ハセヲという人物は様々な理由から無視できない存在だった。

実際に接してみて感じた言動や性格（女性関係には難あり）などは好感をもてるものであり、思いのほか面倒見がよいことに驚いたも

のだ。

春蘭とあれだけ騒ぎを起こしておきながら、辟易とした態度は見せるものの結局無視はしていないあたり、仲間意識を抱いていることに間違いはない。

いつか天の世界に帰ることを理由に華琳に忠誠を誓っていないとはいえ、裏切るような真似をする者には見えなかったのだが……

（――しかし、私はどこまでいっても華琳様の臣なのだ）

その心は、ハセヲとの関わりにおいても何らかの形で表れていた。

秋蘭はその生涯を華琳に捧げている。

だとするなら、華琳の忠実な配下である身として線引きは必要だったのだ。

だったのだが――

受け取ったペンダントを、秋蘭は呆然と見やった。

「――これは？」

「見ての通り、ペンダント……じゃなくて首飾りだ」

努めて冷静さを装った問いかけに、ハセヲもまた同様の面持ちで答える。

「ちなみに、土台は買ってきたもんだが……一部の細工は俺がやってる」

その言葉が、混乱にさらなる拍車をかける。

手にしたのは、トップにストーンデコレートされた蝶々が取り付けられたペンダントだ。

大きさは親指を立てたくらいであり、自身の髪の色を彷彿とさせるスカイブルーを基調とした翅が目を惹く。

それでも、秋蘭が最も注目したのは、おそらくハセヲが手を加えたという部分であろう、蝶の目であった。

（これは……私を模したつもりなのか？）

全体の調度がとれている中で少し精度が欠けてはいるものの、琥珀色に輝く複眼が良いアクセントとなっていた。

おそらくは、元々取り付けられていた複眼をはずして細工をしたのだろう。

カットの技術は、やはりその筋の職人には及ぶべくもないが、込められていた心は伝わってきた。

自分の瞳と同じ輝きを放つ複眼に時折視線を向けながら、秋蘭は無言で話の続きを促す。

その態度から、気に入らなかった訳ではないと察したハセヲは、幾

分気楽になった顔で話を続けだした。

「受け取ってくれ。今回迷惑をかけたぶんの礼みたいなもんだ」

「……気持ちは嬉しいが、これほどの物を貰う訳には「いいんだよ」……ハセヲ？」

返すべく伸ばそうとした手の動きを遮るように呟かれた声。
声音は穏やかなれど、どこか言いきるようにハセヲは口をはさんだ。

「別に今回に限った話だけじゃねえさ。秋蘭には日ごろから（主に春蘭関連で）後始末を手伝ってもらってるしな」

「まあ……それに関しては、私にも関係のある話だから、な」

ハセヲが言葉に出さなくとも思いあたった件に、空いている手でこめかみを押さえ、秋蘭は沈痛な口調で答える。

「言ってはなかったが、私の方こそ感謝している。姉は『ああいう人』だが、それでも女ゆえに傷つきやすい乙女心も持ち合わせているのだ」

「ああ、今回の件で初めて知ったよ。あの外見でそんな風に思わせるってのは……なかなか凄いことだと思うけどな」

「……答えにくいことを言わないでくれ。とにかく――――」

黙って立っていれば、道行く男の視線をいくらでも集められそうな春蘭であったが、二人が共通認識している春蘭の雄々しい（それなりに好意的な表現）イメージを拭い去ることは難しかった。

とにも、それかけていた話を戻すべく、秋蘭は間をとってハセヲに正対する。
同時に、半ば押しつけるようにペンダントをハセヲへと返した。

「用意してもらったのに悪いが、それは受け取れない。だが、本当に気持ちは嬉しかったよ」

「……」

（これで……いいのだ。華琳様を想うためにも、姉者のためにも……）

いまハセヲに言ったことは、半分本当で半分は嘘だった。
正直なところ――ペンダントをくれると聞いて、胸が高鳴ったのだ。

秋蘭はハッキリとそう感じていたが、それでも口は拒絶を伝えた。
『こうあるべき』という自身の心がそう決めてしまったのだから、どうしようもなかった。

ハセヲに気付かれない程度に肩を下ろし、秋蘭は未練を断ち切るように進みだす。

その歩みが遅々としているのは、沈黙しているハセヲを放っておくのが心苦しかったこともあるだろうが、それ以外の要因（かんじょう）もあるのだろう。

（私も姉者のことを、とやかくは言えんな……）

再び胸を締め上げるように感じた痛みを無視しながら、立ち去ろうとしたとき――

「まあ待てよ、もう少し俺の話を聞いてくれねえか？」

「……え、あ……ああ」

背中にかかった声に下がっていた肩がピクリと震え、秋蘭は再度振り向く。

意外にも、ハセヲは話の継続を望んだ。

その顔には、先ほどまでの雰囲気を感じさせないほどの真剣さが表れている。

対する秋蘭は、戸惑いの声しかあげられなかったが、ハセヲは気にせず続けた。

「俺という存在が、この魏（くに）にとって不確かなモンだってことは解ってる。それに、余計な事態に巻き込んでることもな」

「……それは」

「いいさ、それは揺るがねえ事実だ。なら俺は、その中で出来ることをして返していくだけでな。さしあたって今は、華琳たちの手伝いをすることだな。それと……」

「それと？」

ハセヲは纏っていた真剣さを崩し、どこか含むような視線で秋蘭を見つめながら言う。

「お前の気苦労を一つでも減らせればと思っててな。信頼しろとまではいかねえでも、信用はされたいと思ってるわけだ」

「……そういうことを本人の前で言うのはどうなのだ？」

「ああ、そうだな。思ったより動揺してるのかもしれねえ」

そう言っているわりに、調子のいい言葉を吐く舌はよく回っており、表情にも焦りは見られない。

それどころか、秋蘭にはハセヲが楽しんでいるようにすら思えた。

そう考えた秋蘭が眉をひそめたところで、ハセヲがさすがに慌てた様子で口を開く。

「ああ、そんな顔すんなって。別にからかってる訳じゃねえさ。むしろそれだけ、魏（ここ）を気に入ってるくらいなんだからな」

「……なに？」

「時々妙な（百合百合しい）雰囲気になることを除けば……今いる場所（ここ）は悪くねえ。だからよ、秋蘭たちが護りたがってる『もの』を、俺も護りたいって思ってる」

「……あ／／／」

さすがに最後の言葉は照れ臭かったのか、ハセヲは言い終わってからそっぽを向く。

その頬は、ハッキリと分かるほどに赤らんでいた。

しかし――――

（ああ――――もう無理だ……）

秋蘭もまた、頬を朱に染めていた。

お互いに顔を見られなかったのは、幸運だったのか不運だったのだろうか。

先ほどまでとは違う雰囲気の沈黙に、場が満たされていく。

若干の気まずさも感じてはいるが、それ以上の多幸感で秋蘭の心は覆われていた。

どうしようもないほどに押し寄せる感情のうねり。

何の不安もなく安らげるような、それでいて胸の高鳴りを抑えられないような――――矛盾している感情がせめぎ合う。

けれど、幸せであることだけは確かな心地の中、秋蘭は認めるしかなかった。

（どうやら私は――――ハセヲにすっかり参っていたらしい……）

いつのころからかは分からない。

しかし、やっと気付くことができた想い。

秋蘭は、ハセヲのことを好きになっている。

華琳を守るため、姉を支えるため、将としての役目を果たすため。

そのために強くあろうとしてきた秋蘭にとって、ハセヲがこぼした言葉は大きな衝撃を与えた。

たとえ、本当にいるべき場所ではなくとも、今いる魏（ここ）をハセヲは大切に思ってくれている。

護りたい『もの』のために、ハセヲは共に戦ってくれると言っているのだ。

おそらくは――秋蘭（じぶん）自身を含めて。

今まで護るべき対象として男から見られることのなかった秋蘭にとって（直接的な言葉ではなかったとしても）、ハセヲの言葉は秋蘭の心を温かくさせた。

――いつかいなくなってしまう相手を好きになったところで、悲しい想いをするだけ。

これまでは、そう考えて心に予防線を張っていた秋蘭だったが、もはや意味はないだろう。

ハセヲが言った言葉が耳に残って消えそうにないのだから。

これからもハセヲの言動を目にするたびに、自覚した想いと向かい合うことになる。

だとするなら――自分はどうすればいいのか。

この先に待ち受けている結果がどんなものなのか、それは誰にも分からない。

しかし今この時、確かに秋蘭は『幸せである』と自覚していた。

それ故に、この感情（しあわせ）を放棄したいとは思えれない。

ならば――

「……まあ、口では何とでも言えるからな。お前の決意が本物かは、今後の行動を見て判断するとしよう」

「おう、任せとけ」

「フフ……ああ、期待している。それと、な……」

秋蘭はどこかスッキリしたような顔でハセヲに向かって一歩踏み出す。

そして、首を少しうつむかせ……

「一度断っておいてなんだが……首飾りをつけてくれないか。お前の決意を、これに懸けて見守ることにしたくてな」

「……ああ、分かった」

秋蘭の申し出に若干の気恥かしさが湧いたものの、受け取ってくれるという喜びがハセヲの背を押した。

慣れない行為に多少手間取ったものの、ペンダントを秋蘭の細い首筋につけてやる。

秋蘭はつけてもらったペンダントを愛おしげに撫で、襟を緩めて服の内側に収納した。

その優しげな微笑に、ハセヲは今更ながら積もりに積もった照れ臭さを再燃させる。

先ほどまでの余裕は嘘のように無くなり、別れを告げようと口を開いたのだが……

「そうそう、まさかとは思うが……首飾りだけで今までの礼をすまそうというわけではあるまいな？」

「う！？　い、いや！　そんな訳ねえだろ……」

秋蘭の意地悪げな質問に、ハセヲは戸惑う。

その様子は、ついさっきまでの立場が逆転したかのようであり、今までにもよく見られた光景だ。

しかし――これまでとは決定的に異なっているものがある。

（私は華琳様の忠実な臣なのだ。だからハセヲ、お前の居場所はここだ！　ここで共に生き、共に華琳様の力に！　そして、その果てには……）

主に対する不義理を解消し、自身の望みも叶える。

何もせずに耐えるだけの日々を送るよりは、ずっと建設的だと秋蘭はふっ切った。

脳裏をよぎったイメージに胸を弾ませるも、同時にその道の困難さも承知していた秋蘭だったが、もう迷うことはないようだ。

ハセヲの隣に並び立ち、共に歩き始める。

その距離は、肩が触れ合いそうになるほど近い。
これまでは決して縮まることのなかった距離が、なくなろうとしていた。

「さしあたっては……明日の書簡整理を手伝ってもらえると助かるのだが？」

「……分かった」

まさか断るまいな、という素敵な微笑を向けられる。
ハセヲは肩をすくめて了承するしかなかった。

「「……」」

それきり、二人の間に会話は生まれない。
二人の足音だけが響いていたが、それも次第と遠くなっているように秋蘭は感じ始めていた。

（この沈黙（かんじ）は……悪くない）

横を見れば、ハセヲは少々疲れたような顔をして前だけを見つめている。

秋蘭のように、相手の様子を窺おうとする気はなさそうであった。

だが――無視されているわけではない。

ハセヲの想いに触れた今の秋蘭には、それがハッキリと分かった。

視線が交わらなくとも、言葉が交わされなくとも、ハセヲは自分の存在を認識している。

穏やかな空気が、それを証明していた。

仲間として、共に在ることを『当然のもの』として認識しているのだ。

受け入れられている――この事実に自然と口元が緩み、秋蘭は別れるまでつかの間を想いの限り楽しんだ。

今日、ハセヲと話せてよかった――本当に、心から、そう思いながら。

## とある姉妹の深層心理（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

ひとまず、現時点の7人のヒロインたちで第二部は進行していくつもりです。（一人二人は追加があるかも？）

まあ、初期の三人だけでも手いっぱい感はあるのですが・・・がんばりたいと思います！

ちなみに、自覚のあるなしに関係なく、本編での状況を踏まえたうえでの私の認識でハセヲを好きなランキングをつけると・・・

一位・・・星

二位・・・詠

三位・・・風、稟

五位・・・秋蘭

六位・・・月

七位・・・春蘭

――――となっていますｗ

さて、最後に今後のことですが、残るは『稟』と『風』ですね・・・。

少し（かなり?）時間がかかると思います（泣）

気長にお待ちくだされ～

# とある恋姫の日常風景　『風』編（前書き）

お久しぶりです、皆様！
忘れていた人は、改めてよろしくお願いします！！

今回は『風』編、時系列で言えば『華琳』編のちょうど合間の話です。
ですので『華琳』編を読んでからの方が、内容が入りやすいかもです。

といっても、好みが別れる内容だとは思うのですが（汗）

そしてですね！　７００００ｐｖ達成です！！
見捨てずに読み続けてくれた読者様に深い感謝を！！

それではどうぞ～♪

## とある恋姫の日常風景　『風』編

最近になって勢いを増してきた日差しが、ようやく陰り始めたころ。

大分過ごしやすくなってきた城の一角――中庭に備え付けられている東屋――に、一人の少女が腰掛けていた。

オレンジ色の夕焼けが、少女の緩やかで艶がかった髪に、夕立のように染みこんでいる。

時より吹き抜ける風が髪を乱すたびに、金砂が舞い散るかのよう。

思わず、「ほぅ……」とため息をこぼしそうになるような光景だった。

少女が纏っている独特な雰囲気――物憂げな表情と相まって、『深窓の令嬢』へと昇華したかのような佇まいを感じさせるほどである。

実際、通り過ぎざまに少女を見かけた者たちは、どんなに急いでいたとしても足を止め、しばし魅入るように視線を向けていた。

「何をしていらっしゃるのか……、お眠りになってはいないようだが……」

「きっと、我らでは及びもつかないような深謀を巡らせておられるのだろう」

「それにしても、今日は『あの人形』を乗せておられないようだが……」

「私としては、その方がお美しいと思うのですがねぇ」

「笑止！　『あれ』があるからこその程？様ではないか、分かっておらんな！」

誰もがそれぞれの想いを胸に、見つめる視線に熱を込める。
かといって邪魔をしてはいけないことも当然心得ていた。

長居はせずに、彼らは自分の仕事に戻っていく。

とはいえ、その後ろ姿には隠しようのない名残惜しさを漂わせていたが。

一方、多くの関心を寄せられていた少女――風はといえば……

「もうすぐだな、風（マスター）。楽しんでこいよ」

「……本当に付いてこないんですかー？　風としては、別にいてくれても構わないんですよ～」

「前までの俺なら問題なかったんだがな。これじゃ、厳密には二人っきりになれないだろ？」

憂いを帯びた視線を、普段頭上に乗せている人形――宝慧に向け、数刻後の重要案件（デート）に向けての話を詰めていた。

――少し時間を遡る。

その日、というかここ数日のハセヲは、明らかに不自然であった。
いつになく、がむしゃらに仕事や鍛練に励んでいるのだ。
それだけならば何も悪いことでは無い。
しかし、傍目にも一心不乱な姿は、見ていてどこか痛々しさを感じさせるとともに、えもいわれぬ不安を抱かせた。
必要な努力なら仕方ないのだが、ハセヲの『それ』は明らかに必要以上の肉体酷使――――オーバーワークだったのだ。
まるで、何らかの脅迫観念から逃れようとしているかのように。
そんな様子を見かねた風は、さすがに待ったをかけたのだった。
「お兄さん」
「ん、いま急いでんだ。あとじゃダメか?」
「ダメです」
警備から帰ってきて早々に、鍛練場に向かおうとするハセヲの姿に呆れてしまった風は、躊躇なく言い切る。
思わぬ反応にハセヲは軽く目をみはったが、そこで肩の力を抜くように嘆息。
無言で風に発言を促すかのように、視線を向けた。
「最近働き過ぎですよ、お兄さん。もうちょっと身体を労わってあげたらどうですか?」

「……そういうお前は労わり過ぎだと思うんだがな。さっき巡回中に見かけたんだけどよ、ずっと猫と戯れてなかったか？」

「風は自己管理はバッチリなので、あのくらい問題ないのですよ～。なので話をそらさず、ちゃっちゃと答えやがれーです」

ハセヲとしても自覚している部分はあっただけに、風の言う通り話をそらそうとしたのだ。

しかし、風は全く揺らぐことはなく、追及の手を緩めようとはしない。

結局のところ、内面を推し量るという点で目の前の少女に勝てる訳がないと観念したハセヲ。

曇天を背負ったような表情を浮かべながらも、認めるように口を開いた。

「……ああ、詳しくは話せねーんだが、嫌なことがあってな。何もしないでいると思い出しそうになるんで、落ち着くまで身体を動かしたいと思ってよ」

「……」

風が知る由もなかったが、ハセヲがそう思うのも無理はない。

先日の『メイド服事件』による心的ショックが、ハセヲの尊厳を深く蝕んでいたのだ。

今更女装の事実が消える訳でもないのだから気にするだけ損だとも思えるが、ここで割り切ってしまえるような人間にはなりたくないと思うハセヲであった。

幸いなことに、華琳自身もメイド服に着替えたことを恥ずかしがっていたため、事実が外部に漏れる心配はしていなかったが、それでも心穏やかに過ごすにはもう少し時間がかかりそうだったのである。

「だからといって、今のお兄さんを見ていると風の方が落ち着けません。なので、別の手段で心を紛らわせましょう」

「別の手段？」

「そうですよ～、少し……恥ずかしいんですけど、ね……」

突然のしおらしい仕草。
溢れそうな『ナニカ』を堪えるような押し殺した声。
風は、じんわりとハセヲに熱のこもった視線を送る。

「カラダが満たされれば……ココロも満たされるんですよ。風と……一緒にどうですか？」

「――――！？」

ハセヲは思わず息をのみ、一歩二歩と後退してしまう。
しかし、両者の距離は開かない。
風が迫るように追っているからだ。

「風のカラダでは、お兄さんが満足いくまではお付き合いできないかもですが……」

「な、なな何言ってるんだよっ!?　お前はそれでいいってのか！！」

「はい、お兄さんさえ構わなければ……」

「……」

風の言葉を受けて、ハセヲはもう何も言えなくなってしまった。

近づかれたことでハッキリと見えるようになった瞳は、心なしか潤んでいて。

額には軽く汗が滲んでおり、表情も切羽つまったかのように、常の余裕が感じられない。

（本気……なのか？）

だとするならば、覚悟を決めて口を開かねばならない。

この一言で、今後の関係が大きく変わってしまうかもしれないことを。

「――――風、俺は「夕食を食べに行きましょう」……は？」

「美味しいものを食べることも気分転換の一つです。実は、前から行ってみたかったお店があるんですよ～。風はあまりたくさんは食べられませんが、お兄さんは気にすることなく色々食べてください。そのさい、少しだけ分けてくれると嬉しいですね～」

「……」

ハセヲは口を開いた状態で固まってしまった。

対する風は、ハセヲの心情を読み切っているかのように、ニヤニヤとイイ笑みを浮かべている。

（――やられた。本当にコイツは……）

虚しい嘆きを心中で響かせつつ、からかわれたようだと苦笑する。

とはいえ、黙っていたままでは（すでにバレてはいるが）追及の手が厳しくなることが分かっていたハセヲは、慌てて了承の意を告げる。

からかわれたことに対する悔しさや怒りは当然あるものの、心の中のモヤモヤが少し気にならなくなったのも事実だったから。

（まあこれも……風なりに気を遣ってくれてんだよな）

「それで？　お兄さんは風がナニを望んでいると思っていたんですか～？」

何とかそう思いながら、（やはりというか始まってしまった）風の口撃（じんもん）をはぐらかそうとするハセヲであった。

＊　＊　＊　＊　＊

「あの時、兄ちゃんは何て答えようとしたんだろうな？」

「今更どんな想像をしようと意味はありません。ですが、最後に笑うのが風であることは変わりないのです」

昨日行われた一連の問答を思い出していた風と宝慧。

といっても、傍目には一人相撲をしているとしか思えない光景だろう。

事実、これまでにも腹話術（？）めいた言動をとっていた風を知る人物たちからすれば、変わっているとは思われても、そこ止まりで終わるはずだった。

風の対面に置かれた宝慧が――風が触れてさえいないはずなのに――取り付けられている手を、まるで遠慮を告げるかのように左右に動かしてさえいなければ。

――ちなみに、それだけではない。

「とにかく二人で楽しんできてくれ。じゃねえと、あんにゃろがヘタレっぷりを発揮するところを見続けたりしたら……つい攻撃呪文（ツッコミ）

を入れちまいそうになるかもしれねえからなぁ」

そう言いながら短い腕を交差するように組み合わせ、首を横に振ったり。

容易にハセヲの姿が想像できてしまい、風と共に苦笑をこぼしたり。

彼女たちを見つめる者たちには背もたれによる死角のおかげで見えていないが、一連の動作はよくできた仕掛け人形で済ませるには難しい在り様を示していた。

それもそのはず。

『とある事情』により、仮初めとはいえ『人格』を与えられた宝慧は、風の大切なパートナーとなっていたのだ。

宝慧がもたらす知識――偏り多し――により、風の思考力は幅を広げ、深みを増していた。

まあ、どちらかと言えば特定人物に向けられる度合いの方が多かったのだが。

そして今回も……

「時によ、風（マスター）。少しばかり恥ずかしい想いをすることになるが……男心をくすぐる方法があるんだがよ」

「聞かせてください」

言葉には力強さがこもっていた。

しかも、戸惑いや躊躇は一切感じられない。

だからか、宝慧は遠慮することなく話を切り出した。

「ほれ、前に手に入れた服があっただろ。そのうちの『アレ』の使い方なんだがな……」

そんなこんなで、日も沈んだころ。
とある高級料亭の前に、二人の男女が立っていた。

男は、いつも通りの格好に若干の緊張を纏ったハセヲ。
女は、少し背伸びした感のある黒のワンピース、その上に白のボレロを羽織った、お嬢様風の装いの風。

その姿たるや、清楚にして可憐。
一瞬で魅了させた男たちの視線を釘づけにするほどのものであった。

実はこの一品、例の『メイド服事件』の際に表れていた服を模倣して作成されたものである。

天の世界で着られている服として、富裕層の女性陣の間ではブームになりつつあるほどだ。

かくいうハセヲ自身も、普段と異なる風の飾りぶりに戸惑いを隠せていない。

その事実が、周りからの視線をどうでも良いと割り切らせるほど、風の機嫌を向上させ続けていた。

（ひとまず、風のことを女性として意識しているのは間違いないですね～）

柔らかい笑みを浮かべ、風は突っ立ったままのハセヲの手を取り、入店を促す。

「行きましょう、お兄さん♪」

「お、おう……」

その佇まいは、ハセヲをして素直に愛らしいと思わせるものであった。

食前酒から始まったフルコース――結局はコース料理を選択した――は、事前に聞いていた評判通りであり、二人とも大変に満足のいくものだった。

最後に運ばれてきた食後の菓子に舌鼓をうち、まったりとした時間を楽しむ。

「どうでしたか、お兄さん。良い気分転換になりましたか？」

「ああ、十分にな。特に烏骨鶏の炙り焼きは最高だったぜ」

「ふふ、それは良かったです。気に入ってもらえたなら、また来れ

たらいいですね～」

「そうだな、今度は星たちも誘ってみるか」

やはりというか、あまりに”ハセヲらしい”発言に、頬をヒクつかせる風。

想定内の反応ではあったが、当たり前のように言われるのも面白くない。

（また二人で来られたらいい、だなんて……お兄さん相手には高望みですかね～）

さほど期待していなかったとはいえ、風も一人の女性である。

年相応に、気になる男からの行動（アクション）を求める気持ちだってあるのだ。

「……そうですね～」

だからか、どこか気の抜けた返事を返してしまう。

そんななか、ハセヲは風の心情をつゆ知らずに言葉を重ねる。

――やれ、これなら酒好きの星も納得する。

――やれ、これなら稟の健康にも良さそう料理だ。

――やれ、これなら月や詠への良い土産になりそうだ。

これに対し、風は投げ槍になりつつある仕草で返事をしながら、窓の外をボンヤリと眺め始めていた。

夜の帳が降りた街並みを照らすのは、月明かりと周囲の店から零れる明かり、店の入り口に焚かれているかがり火のみ。

往来には、同じく食事に訪れていた人々――仲睦まじく寄り添う恋人たちの姿も見える。

彼らから見て、自分たちはどのように見えるのだろうと、意味もない面白くもない思考に埋もれかけていた風を――

「なあ、風。今日は……本当にありがとうな」

「え……あ、はい」

少し声を上擦らせたハセヲの想いがゆり起こした。

真っすぐ交錯する視線。

恥ずかしさを隠す余裕はないのか、顔を朱に染めながらも――どこか誇らしげにハセヲは語る。

「まあ、全快ってわけじゃねえが、それでも大分マシになった。風のおかげだ」

「もとよりそのつもりで誘ったんです。効果がなかったら、それこそ風としても申し訳なかったですからね。一安心ですよ～」

「おう、これからも世話になる。……それと、な」

「……？」

何かを言いたげな、それでも言いにくいことなのか、目線を揺らしながら口をパクパクと開け閉めするハセヲ。

しかし、意を決したかのように――――それでも視線は横に反らしてはいたが――――ハセヲは口を開く。

「あー、その、なんだ。その格好も……よく似合ってるし、な。また――――着て見せてくれよ」

「……あ」

胸の内に染み入るように響いた言葉。
少しばかり荒んでいた乙女心(せいしん)を、芯から温めてくれるかのような温もりに、風は頬を緩むのを抑えきれなかった。

「……遅いですよ」

そう言うわりに、表情は穏やかなものだ。
つられてハセヲも、緊張で力の入っていた表情を緩める。

(どうやら、風も舞いあがっていたようですねー。まあ、結果としては良しですか)

せっかくドレスアップしたというのに、そういえば賞賛の声を聞いていなかったことを、風は今更ながらに思い出した。

ハセヲの態度を見れば、言われずとも察せられたとはいえ、口に出してもらえた方が嬉しいに決まっている。

乙女心が癒されたことで寛大になった風は、感心の呟きを零す。

「ふむ、お兄さんも少しは”できる男”の嗜みをもっていたようですね。そうですね～、八段くらいのお手前でしょうかー」

「へえ、意外と高いじゃねえか」

「ちなみに最高は千段ですが～♪」

「――――って、そういうオチかよ!?」

思わず反射的にツッコんだハセヲだったが、調子を取り戻した風は構わずに続けるのであった。

「ふぅ、結構疲れてたんだな。ようやく気付けたってーと……少し余裕がでてきたってことか」

自室のベッドに腰を下ろし、ハセヲはようやく認識できた自身の状態を確かめるように手足を動かしていた。

緩慢な痛みと気だるさは感じるものの、ここ最近悩まされていたモヤモヤは大分気にならなくなっている。

その理由に想いを馳せ、ハセヲは思い出すように呟く。

「本当に風様々だな。まあ俺としちゃあ、少し単純だったかもしれねーが……」

周りに誰もいないとはいえ、少々斜に構えた発言をするのは相変わらずである。

しかし、その口元に浮かんだ微笑は彼の本心を鮮明に表わしていた。

と、ここで――――

「お兄さん～、入ってもいいですかー？」

扉の向こうから、謝意を向けられていた少女の声が届いた。

気配は感じ取れていたため、慌てることなく――――顔はきっちりと引き締めて――――ハセヲはベッドから立ち上がって扉を開けてやる。

「お邪魔するのですよ～」

「おう。で、何だ、話って？」

城に戻ってきたさい、話があるからと来室を希望して一旦別れていた風。

普段の服に着替えてやって来た風に手近なイスを薦めたハセヲだったが、

「いえ、それよりもですね～。風が良いと言うまで後ろを向いていてほしいのですよ～」

そう言って固辞した風は、ハセヲの脇を通り抜け、ベッドの方へと向かう。

何をする気なのか判別できないハセヲであったが、扉を閉めてそのまま風に背を向ける。

（一体風は何を……って!?）

――シュルリ

ハセヲの心臓をはね上げる音が、静かな部屋の中に生まれた。

ゆっくりと、しかし止まることなく響き渡る音は、明らかに服を脱いでいる時に出るもので――

「おいっ！　何してんだよ!?」

「何って寝巻きに着替えてるんですよ～」

「――は？　寝巻きって……お前ここで寝るつもりなのか!?」

「はい～。というのも、”誰かさんたち”のせいで風の部屋も損傷してしまいまして、今日から改修工事が始まったんですよ～。今日明日は家なき子ですから。

そんなわけで今日明日だけのことですし、あまり気にせずにいてくれると助かります。ただ一緒に寝るだけですから～」

突如として起こった試練（イベント）は、ハセヲの理解力をあっさりと振り切ってしまっていた。

それは重力に対抗する術を失い、落下したことで生じたであろう服の音により、さらに加速する。

（いやいやっ！　着替えるったって、何も持ってなかったじゃねーか!?　どんな格好で寝るってんだ!?）

そのまま扉を開けてトンズラこきたい想いにも駆られたが、ここは自分の部屋なのだ。

その後はどうすりゃいいと、まとまりそうにない思考の渦にはまりこむ。

かつてない緊急事態により落ち着きがなくなっているハセヲを尻目に、風は滞りなく準備を終え「もういいですよ～」と、振り返る許可を出した。

とにも、話をするならお互いに顔を合わせてするべきだと思ったハセヲは背後へと振り返り――

「～～～～っ！？」

その光景を目にした瞬間、思考や言動の一切を停止させられた。

大きく見開かれた眼が捉えたのは、自分のベッドの上で女の子座りで腰を下ろしている風。

そして、豊かとはいえないまでも女性らしさを損なわせることのない緩やかな肢体を覆っているのは――白いブラウスであった。

あらかじめ下に着込んでいたというのか。

少し大き目のサイズで、上から二つ開かれているボタン。

そこから覗いている肌は、緊張のせいか興奮しているせいか薄い朱に染まっており、凄まじいまでの色香を放っている。

普段はゆったりとした服に隠されており、じっくりと目にすること

のない生足は腰のすぐ下まで開帳されている。
張りがあって滑らかそうな太ももは、大変けしからん衝撃を伴ってハセヲを追い詰めようとしていた。

また、髪型も変わっている。

今は黒いリボンを使って、腰まで届く長い髪をツインテールにしていた。

服装と相まって放たれる『大人の女としての魅力』と、髪型からくる『年相応の可憐さ』という背反するも悩ましすぎる要因が、ハセヲを混乱の極致へと至らしめる。

トドメとばかりに、流石に風も恥ずかしいのか眉尻を下げ、困ったような顔を向けて上目づかいでハセヲを見やる風は、無性に庇護欲を感じさせた。

ゴクリと、意識していないにもかかわらず、ハセヲの喉がなる。

それに合わせて、風もベッドに両手をつき、軽く前のめりになるように身体を少し浮かせた。

――途端、ハセヲの視界を一瞬かすめたモノがあった。

その一瞬で、網膜に焼きついたように離れないモノ。
動かした上半身に合わせてめくれあがったブラウスの奥に秘匿されていたモノ。

それは、上気していた肌よりも更に赤く、小さくも確かな存在感を放っており、可愛らしく突き出ているモノで。

「うおあああああっ！！」

連続して強すぎる刺激を与えられたハセヲの心は、今更になって悲鳴をあげた。

わたわたと扉にぶつかるまで後ずさりして可能な限り風から距離を取ると、

「な、なななななな――――」

「ふ～む」

すでに、まともな思考ができていないであろうハセヲのことを鑑みて――ここまでは計画通りであることをほくそ笑みながら――風は、ハセヲが言いたそうなことを推測して話し始めた。

「なぜ、お兄さんの部屋を寝泊まり場所に選んだかといえばですね。損壊具合の程度の大小はありますが、結構な規模で改修が始まったため、代わりの部屋の数が足らなくなってしまったんですよ～。だからといって、忙しい稟ちゃんや星ちゃんに気を遣わせるのもなんですし。

なら、同じ忙しい人としても、責任の一端を担っているお兄さんに頼めばいいと思ったんですよ～♪」

「なななな――――」

「違うんですか？　なら、なぜ一緒に寝る必要があるのかということですかね？　恐れ多くも主と寝室を共有させていただくのです。お兄さんの性格なら、自分はイスや床を使うと言いかねませんが、

それでは風が安眠できません。なので一緒に寝てくれると助かるのですよ～」

真実の主従関係を結んだ臣下ならば、そもそもこんな状況を作り出す筈がないのだが、ここにそれを指摘してくれる人物はいなかった。

そして、今回の風の推測もハズレだったらしく、ハセヲは相変わらずオウム返しを止める気配はない。

そこで、困ったというように顎元に手を当て、首をかしげながら風は再び口を開いた。

「なぜ、こんな格好かということなら……宝慧が教えてくれたんですよ。いかなる理由であれ、天の国では女性と男性が寝床を共にするなら寝巻にはコレが欠かせないと。

――違うんですか？」

大いに作為的――というか特定個人の願望が入り過ぎ――に感じられる、普段のハセヲならば即座にツッコミをいれたであろう風の言葉。

そもそも、それなら大きめのＹシャツで、事後に着るものであ（ｒｙ

――閑話休題。

「なななななな――」

「おおう？　これもダメですか～。なら……悩ましい風の姿に動揺が抑えられないとかですか？　それはお兄さんの様子を見れば明らかですから、今更言わなくてもですね」

「なななななな――――」

「ふむ、そうなると……発想を変えて、なんで髪型は”ぽにーてーる”とかいう奴にしなかったんだ、とかですか？　風の解析をもって、お兄さんが幼さやお淑やかさをもつ相手に庇護欲を抱きやすいというのは分かっていたんですが……すみません、調べが甘かったですかね～？」

「なななな……な」

ようやくここにきて、ハセヲの声が止まる。

瞬きをろくにしなかったのか、できなかったのか、両目は少し乾いて充血していた。

声は収まったものの、未だに口をパクパクと開閉しているハセヲに風は聞いてみた。

「お兄さんは、結局なにが言いたかったんですか？」

「――――泣いて謝れば、許してくれるのか？」

「……風のことをどう思っているのですかねー、このヘタレは」

「いや、こんな状況で他にどうしろってんだよ！？」

力を取り戻した視線で風――――顔に視線を固定――――を見据え、風を指差す。

「仮に、仮にだぞ！　一万歩譲って寝泊まりは許せても、その格好はありえねーだろ！？　俺だって男なんだ。何かあったら、どーすんだよ！？」

「ふふ、お兄さんは風に『何か』を望んでいるのですか？　まあ、確かに今の風はお兄さんの好みに合わせて装ってますからね～。お世話になる対価だと思っていたんですが、お兄さんの冥い情動まで呼び起こしてしまいましたか」

そう言って、ニヤニヤと笑いを浮かべる風。

その様子を見て、ハセヲは”また”風にからかわれているのでは、と考え始めた。

昨日の誘いの件よろしく、今回のコレにはまた何らかの目的があってのことではないか、と。

そう思うことで少し余裕を取り戻したハセヲの様子を感じ取った風が眉をひそめる。

ここまで掻きまわされっぱなしだったハセヲは、ほんの――――ちょっとした仕返しの気分で風を突き放す言葉（身体的特徴には流石に触れない程度に）を放つ。

「駄目だな、話にならねえよ！　そんなんじゃ俺を惑わせきれねえな！！」

「ほーう、では風の何がいけなかったというんですか～？」

「……確かにその姿には参りそうになったがな。でもな、お前は一つだけ失敗を犯したんだよ！　――――いいか！　俺は”髪を両側でしばった奴”が大嫌いなんだよっ！！！」

先ほどまであれだけの動揺を見せておいて、信じられる話ではない。

傍目から見れば、好きな女の子をからかって気を惹こうとするガキのようなセリフだった。

そんな程度で傷つくような心を持っている風では無かったし、ハセヲが心からそんなことを言っている訳がないということも分かっている。

事実、「いいんですか～、そんなことを言っても」と、風も軽く応じていた。

つまりは、少しは風の意図を乱してやろうと考えてのうえでの行動だったのだ。

このままいいようにからかわれて終わるのだけは認められなかったから。

とにも、サッサとその危険な姿を隠してしまおうと、風の方へとハセヲは歩み寄ろうとして――――手の届く直前で全身を硬直させた。

（――――！？　この殺気（けはい）は……もしかしなくても）

突如として、扉の外から湧いた高密度の殺気。

先ほどまでハセヲの脳内で鳴り響いていた桃色の警告灯が、本来の赤色となって未曾有の緊急事態を告げている。

風の存在に気を取られ、他のことに気を向けられなかったことが悔やまれる。

しかも間の悪いことに、ここ最近になって馴染んできた、この存在感を放てるのは……

ぎぎぎぃぃーーー

最早隠しきれない恐怖を煽るかのように、ゆっくりと開かれた扉の向こうには――人の身を超越した金色夜叉がいた。

怒髪天とは、まさにこういう状況なのであろうか。

身体から陽炎のように滲み出ているオーラが特徴的な髪を逆立たせ、その手に持つ大鎌『万死ヲ刻ム影』をこれでもかとばかりに握りしめている。

ほぼ半裸の風に手を伸ばそうとしているところに加えて、先ほどの発言を聞かれたというこの状況。

ハセヲは、前者はともかく後者はマズかったかと瞬時に悟り、望み薄とは分かっていても、弁解を挟もうとしたが……

「ま、待て華琳！　話せば分か「死になさい？」……っつあああああぁぁぁぁあああーーー！！！」

やはりというか、そんな幸運は訪れず、処刑執行は容赦なく行われ

たのであった。

――余談ではあるが。

風としては、冗談か本気か判別に悩むハセヲに寄り添い、行ける所まで行くつもりでもあった。

それと同時に、少しではあるが望まざる変化（きょぜつ）への不安もあったのだ。

なので、あそこで乱入してきた華琳と季衣によって起こされた惨劇を、風はどこか嬉しく想う気持ちもあった。

ハセヲにとっては災難でしかなかったが、あれほど華琳が逆上していたことから考えても、華琳のハセヲに対する気持ちが一定のラインを超えたものであるのは確実なのだ。

その芽が、今回の騒動によって潰されたのは間違いない。

復活の可能性も無くはないが、ひとまず他の女性陣（春蘭や秋蘭たちなど）への警戒の方が重要であると、風は判断したのであった。

――数ヵ月後に大きな転機が待ち構えていることを予想できる者は、今この時には誰一人としていなかった。

## とある恋姫の日常風景　『風』編（後書き）

いかがでしたでしょうか？

キャラの把握がいまいちだったかもしれないので、違和感を感じられた方がおられましたら御一報ください。

それと、現在これまでに書きあげた話の加筆・修正作業にも取り組んでいまして。

誤字、脱字、文法表現等でおかしいところがありましたら、あわせて教えて下さると助かります！

さて、そして次の更新はいつになるかなぁ……

早くて五日、遅くて一か月ちょっとくらい？

――すいません、いい加減で。

とにかく、最低でも九月の頭までには『稟』編を更新しますので！

それでは～。

## とある恋姫の日常風景　『稟』編（前書き）

私としては早い更新！

それも久々にもかかわらず、温かい感想をくださった方々のおかげです！！

今回の話は、本編ですでに色々とキャラが崩壊しつつある稟さんの話。

それではどうぞ～

――どうしてこうなったのだろう。

何度目を凝らして見ようとも、変わることのない光景に自問を繰り返す。

”こんな現実が認められなかった”からこそ、自分は力を尽くしてきたはずではなかったのか。

ついに見つけた仕えるべき『主』
信頼のおける得がたき『友』
そして、自覚してしまった、自覚されられてしまった――自分にとっての『最愛の人』

彼の前に立ちふさがる欺瞞を晒し暴き、つまらない詭計を掌握凌駕し、この身が練れる策謀を駆使して彼を助ける。

それこそが、この外史において彼女が選択した『道』
考え抜いた先に、決断をくだした彼女の『意志』
同時に抱くことができた、女としての『幸せ』

なのになぜ――

（ハセヲ殿……）

背景も何もない真っ白な空間に、混じりあっているかのような佇まいでハセヲは立っていた。

普段からは予想もつかないような、気の抜けた顔でこちらをじっと見つめている。

ここはどこなんだとか、他の者はどうしたんだとかといった疑問はある。

それでも、今はそんなことはどうでもよかった。

狂おしいまでに胸を締め付ける焦燥感が、彼女――――稟を満たしていたから。

（私は……なぜハセヲ殿に、このような顔をさせているのだっ！？）

たまらなくなって、稟はハセヲに向かって駆けだした。

そんな稟の必死さを見て、ハセヲはさらにソレを顔に張り付ける。

――――口元と頬の力を抜いた、ひどく彼に似合わない微笑（モノ）を。

そこには、稟が惹きつけられてやまなかった彼の瞳に宿る”意志”が、もはや微塵も感じられない。

それが、無事に目的を果たしたことから生まれる安堵によるものならばいい。

しかし、いま浮かべている表情は、見る者の感傷を誘うような――――寂しげなものだ。

このような瞳を持つ者を、稟はよく知っていた。

嫌になるほど見届けてきた。

それは、戦場にて自らが立てた計略にはまり、終わりを迎えようとしている者たちが浮かべていたものではなかったか。

「ハセヲ殿っ！！」

脳裏に浮かんだ嫌な考えを振り払うかのように、稟はハセヲを抱きしめた。

隙間なく密着したことで全身に感じるハセヲの体温。
途端に湧きあがってくる安心感に身を委ねきっていたいという気持ちを抑え、その微笑の意味を尋ねるべく顔をあげた稟は……

「――――あ」

かすれたような声をあげることしかできなかった。

視線の先には、変わらずに微笑を浮かべているハセヲがいる。

しかし、その輪郭が真っ白な背景に文字通り溶けていくかのように薄れていこうとしていた。

次いで、ハセヲの身体から光の粒子が立ち昇り始める。
それに合わせて、焦点がますますぼやけていくかのようにハセヲの姿が消えていく。

稟に見せつけるかのようにゆっくりと、だが確実に。

底知れない恐怖にかられた稟は、がむしゃらになってハセヲから零れる粒子を抑えようと抱きしめる力を強くする。

そのとき――

「――」

「えっ！？」

軽く首を横に振り、ハセヲは口を動かした。

声には出ない言葉だったが、至近距離にいた稟には唇の動きからキチンと伝わったようだ。

そして、その直後。

ハセヲの姿は、力尽きた線香花火のようにあっさりと虚空へと溶けていった。

さんざん夢にうなされた末に、稟は噛みしめていた顎が訴える痛みで目を覚ました。

しばし呆然としながらも、気だるげな上半身を鞭打って寝床から起こす。

口の中が少し切れているようで、苦味がはしった。

片手を目元に添えると、寝起きの涙としては大量の跡が感じられる。

本当にひどい目覚め。

そして、ひどく性質の悪い悪夢だった。

ハセヲが消え去ってから、自分は嗚咽もなく、ただ静かに涙を流して打ちひしがれていた。

大切な人を失った悲しみに心が折れそうで。

自分の無力さに絶望しながら。

すぐに何らかの手立てを講じれば、助けることができるのかもしれない。

始めこそそう考えた稟は、必死になって頭を働かせていたが……冷静な部分では分かっていた。

（私は……っ！？）

出陣すれば最適戦略を即座に提示し、報告書を読めば遥かに離れた場所の状況すら容易に想像がつく稟であったからこそ――――ハセヲに起こっている状況が、自分の手に負えるものではないと判断してしまっていたのだ。

それは確かに真実だったかもしれないが――――いや、真実だからこそ、稟は何もできない自分が許せなかった。

（……後は頼む、ですか）

だというのに。

消え去る直前、そんなことはないとでも言うように、ハセヲが遺した言葉。

彼は、どんな想いをこの言葉に込めて消えていったのだろうか。

（あれは夢だったのだと……割り切るには妙に現実味を帯びすぎていましたね）

この夢見のせいで、昨日の喜びが嘘のように稟の心は沈んでいた。

熱くなっていたところに冷水をかけられて、ひび割れた鋼のように脆くなっている。

これまでにも似たような夢を見たことはあったが、よりにもよって今日見ることはないのにと、稟は嫌な気持ちを吐きだすかのように深く息を吐いた。

だからといって気分が晴れたわけでもないが、持ち前の切り替えの早さで立ち直りを図ろうと、もうろうとする頭を振る。

すると、思い出したかのように鈍痛が襲いかかった。

（……うぅ、昨日は飲みすぎましたか）

ハセヲと星と風と稟の四人で行われた、ささやかながらもかしましく、楽しかった宴会。

そこで起きた『サプライズ』が（翌日は昼からの仕事ということもあり）、稟の心のタガを外させたのだ。

驚くことに、最後の方の記憶は曖昧になっているほどである。

いつもなら抑え役に回っている稟としては、初めての経験だったといえよう。

そこまで自分を高ぶらせたモノ。

あやふやな意識を、引き出しに大切にしまっておいたソレに向け、

取りだそうと寝床から出ようとしたところで、

「おーい、稟！　まだ起きてねえみてーだが、大丈夫か？」

「――――！？」

扉をノックする音と、心配げなハセヲの声が稟の耳をうった。

窓から差し込む日の光は、随分と窓際の方に寄っている。

察するに、普段稟が起きている時刻より大分遅れているようだった。

どうやら稟を心配してやってきたようである。

心臓が大きく拍動し、思わず息をのむ。

返事をする余裕もなく、稟は無我夢中で扉へと向かおうとする。

未だに覚醒しきっていないせいか、震える足を懸命に動かし、随分長く感じられた距離を詰め、

「ん、やっぱり顔色が……っ！？」

扉を開け放ち、ハセヲ――――いつも通りの無愛想顔ながら、心配の色を宿した瞳――――を目にした瞬間、稟は体重を全て預けるようにハセヲに抱きついた。

突然の行為による困惑の眼差し、動揺からか僅かに乱れた吐息が稟の前髪に突き刺さる。

そして、密着した全身からほんのりと伝わってくるハセヲの体温。

それらは、ハセヲがちゃんと”ここ”にいるという証。
自分の腕の中に存在しているという現実。

「お、おい、稟？　どーいうことだよっ、これは！？」

「お願い、です。お願いですから……もう少しだけ、このままで」

「……」

今にも泣き出してしまいそうな、切ない声。
常の少女らしからぬ態度に戸惑いを隠せないハセヲは、二の句を告げれなくなってしまった。

その反応を肯定と捉え、稟は頬ずりをするように、顔をさらにハセヲの胸へとうずめる。

彼の力強い心音が、稟の沈んだ心に活力を与えた。

――現実問題として、普段の稟ならばここまで大胆な真似は出来はしない。

しかし、今の稟は夢の影響から立ち直る前にハセヲの声を聞いたことで誤魔化そうとしていた心が決壊してしまっていた。

まるで母親を求める赤子のように、本能に近いような感情でハセヲを求めているのだ。

当然として羞恥心も抱いてはいるのだが、ハセヲの温もりに満足するか、他の外的要因によって目を覚ますかするまでは離れられないのだろう。

（……震えてやがる。っち、よく分からねえが……しゃーねえか）

迷いに迷った末、ハセヲは所在無げに伸ばしていた両手をゆっくりと稟の肩と腰に回し、あやすように軽く抱きしめた。

頼むからこんな場面を誰かに目撃されないよう、思いつく限りの神様に祈りながら。

女の子特有の柔らかさと良い匂いを前に、理性を飛ばさないよう励みながら。

それは、まるで腫れものを扱うかのような恐る恐るとしたものだったが、稟としては珍しくハセヲから行動（アクション）を起こしてくれたものとして補正がかかっており、大いに彼女を震え立たせる。

ハセヲの努力によって、稟が立ち直る時間は大幅に短縮されそうであった。

――結果として、廊下での熱い抱擁（五分間ほどだったとはいえ）は奇跡的に誰にも見つからなかったことを記しておこう。

「「……」」

さて、堂々と往来で身を寄せ合っていた二人は、今は稟の部屋の中

にいた。

どこぞの種馬くんだったなら、そのまま『コトの続き』に及んでいたかもしれなかったが、今のハセヲには到底不可能なことである。

しかしながら、今の状況はそれなりに愉快そうなものであった。

というのも――

回想録

「……すみません、ハセヲ殿。醜態を晒してしまいまして……」

「いや、それだけの何かがあったってことなんだろ？　なら仕方ねーっ！？」

ようやく気を取り直したらしい稟が身体を離しだしたことに、ハセヲはホッとしたような少し残念なような気持ちで言葉を返そうとした。

だが、途中でハセヲは目をくわっと見開き、あさっての方向を向いてしまう。

稟に抱きつかれていた時点で真っ赤だった顔は相変わらずだが、加えて今は脂汗まで浮かんでおり、心なしか腰が引けている。

（――どうしたんでしょうか？）

なぜ、可動域を超えるほど首を背け、私を見ないようにしているのか。

身体は離したものの、未だハセヲの腰に回したままの自分の手。

そこからジリジリと後退しようとしているハセヲ。

「……ん」

それが何となく面白くなかった稟は、再び身を寄せ始める。

今や恥ずかしさの方が前面に押し出されてはいたが、このような甘えられる好機が次はいつに訪れるか分からなかったための『攻め』である。

それに対するハセヲは、明らかに挙動がおかしくなっていた。

口元を何かを堪えるようにギュッと引き締め、先ほどまで稟の背に回していた手は案山子（カカシ）のように横へ投げ出されている。

（なんでここまで動揺して……っ！？）

ここにきて、ようやく稟の頭脳が人並みに――――といっても四割程度だが――――回転を始めた。

二日酔いに最悪の夢見というダブルパンチを受けた稟の五感が、ようやく正常な働きを再開する。

中でも、特に反応が大きかったのは『触覚』だった。

今まで気がつかなかった（むしろ今の方が心地よかったから）が、ハセヲから伝わってくる感触が、体温が鋭敏すぎるのだ。

まるで感覚を遮るようなものがほとんど無いかのような。

「え、あ……っつ！？」

ハッとして見下ろした自分の格好。

先ほどまでは密着していたために見えることのなかったものが、惜しげもなく披露されていた。

着替える余力が無かったのか、普段着の下に着ている肌着のまま。しかも前が開いていて、ほっそりとした肢体が露わになっていた。

さらに、どう考えてもこの時代の技術では製造不可能なはずのレース地の下着が眩しく光っている。

手の平にスッポリと収まりそうなカップがハセヲの胸に押しつけられて、それはもう素敵な光景を作り出していた。

慌てて回していた手を離し、片方を胸元に、片方を腰元へと寄せて口を開く。

「違いますこれは何かの間違いですむしろ何者かの陰謀を感じます具体的にいえば誰からも指摘を受けないからと調子にのった駄作者（そうぞうしゅ）とかですえええそうですそうに決まっていますでなければ私がこんな失態を犯すはずがありません勝手に鼻血を吹いて倒れるようなイロモノ扱いは卒業したつもりですしチラ見せ要員に為り下がる気もありませんこれからはそんなものを使わずとも生きていけるのがこの

私なはずですそうでしょう失敗とか過失とかお約束なんてものは私には関わりのないことなんですからっ！！！」

ゼーゼーと息を乱しながらも一息もつかずに言い切った稟の剣幕の前に、無言で首を縦に振ることしかできないハセヲだった。

回想録　了

（……やってしまった）

自室にて着替えながら、稟は先ほどまでの痴態を省みていた。

ハセヲに抱きついたまでは――――恥ずかしくはあるが――――いいのだ。

問題はその後の――――

（いくら寝起きだからとはいえ……あれでは誘惑というよりも、ただの露出ではありませんか。軽蔑、されたでしょうか？）

ハセヲ以外の目に触れることがなかったから良かった（？）ものの、人の目につくところで半裸になっていた自分。

天遣隊の指揮をする際は余裕さを崩すことなく、優れた手腕を振る

っている稟とは思えない認識力だったといえよう。

もしこの事実が知れ渡ったなら、冷静沈着な軍師様の可愛らしい一面と人気を呼ぶことになったかもしれないが。

最早失態の補いがつかない事態だと心中で溜め息を吐きつつ、着替えを続ける。

時折、背後に視線を流しながら。

「き、昨日は結構飲んでたけどよ、体調はいいのか？」

「そう……ですね、少し頭痛が残っていますし、気分も悪いです。我ながら羽目を外し過ぎたようで」

稟の視線の先には、部屋の隅で壁と睨めっこをしているハセヲがいた。

無言の気まずさと、静かなことで嫌でも耳に入ってくる衣擦れの音に耐えられなくなったのだ。

声も震えているあたり、この短時間の間に起きた衝撃はハセヲの理性を大いに削っているようだ。

――ちなみに。なぜ稟の部屋にハセヲがいるかといえば、当然として稟が招いたからである。

一連の行動のせいで、お互いに顔を合わせるのは相当に恥ずかしいものではあったが、あのまま別れてはマズいという直感めいたものを稟は感じていた。

ただでさえ魏（ここ）に来てから、ハセヲに対する（女性からの）視線を気にしてか、星も風もハセヲとの距離を縮めるべく動き出しているのだ。

友人として二人のことが大好きな稟ではあったが、だからといって遠慮をするつもりは毛頭なかった。

いつか来るであろう選択の時までは、自分の気持ちに極力素直になるべき。

それが、ハセヲと共に過ごす中で見出した大切な教訓だったのだ。

「驚いたぜ、飲みすぎたからってあそこまで豹変するなんてな。結構溜めこんでたものがあったんじゃねーか？」

「……最後の方は記憶に無いんですが、そんなにすごかったのですか？」

溜めこんでいるとしたら、それは貴方関連によるものが多いですよと、声を大にして叫びたい気に駆られた稟。

しかしながら、再び気まずい雰囲気を再燃させるのも嫌だったため、話題をそらそうとしているハセヲにのることにした。

それでも何の気はなしに聞いてみただけのこと。

まあ、少しばかり饒舌になっただけだろうと思っていた稟は、スカートを履こうと片足をあげたところで、

「ああ、まさかキレられて絡まれるとは思わなかった。首を締めあげられた時なんて別人としか思えない雰囲気だったぜ。しかも言う

だけ言って、最後はブッ倒れるときた」

「――――は？」

あやうく、ステーンと転びそうになった。

理解に苦しむ……というか、自分には縁のないと思われる単語を聞かされてしまう。

（私が……キレて、ハセヲ殿を締め上げた？）

笑えない冗談だと思った。

いくら気まずい雰囲気を何とかしようと多少大げさ気味に言ったとしても、それはどうなんだ、と。

一方で、稟はこうも思った。

ハセヲは果たして、こういう冗談を言うような人だったか、と。

ぶっきらぼうな態度ではあるが、気配りの出来る好人物で。

結果としては、ストレートな言動が多いハセヲ。

であるならば……それはおそらく真実なのだろう。

なぜ今の状況でそれを伝えるのかと、稟は少しだけハセヲを恨みながらも謝罪を口にした。

「――――すみませんでした」

心からの謝罪に、それ以上は聞きたくないという気持ちを込めた言葉。

稟の表情を見ずとも、慌てて「いや、別に……」と返すあたり、ハセヲも責めるつもりで言った訳ではないようである。

他に話題が見つからなかったのか、それとも他に理由があったのか。

実際、続けて何かを口にしようとハセヲが息を吸った矢先。

何となく間を外したいと思った稟は、少し早いが振り返る許可を出した。

読み通り、機先を制されたハセヲは若干眉を寄せながらも振り返り、

「っ！？」

本日何度目かの衝撃を受けることになった。

目に留まったのは、きっちりと普段着に着替え、寝床に腰をおろしている稟。

その手には寝ぐせを直すための櫛が握られている。

そのため、胸元までおろされている髪が普段とは異なる魅力を放っていた。

加えて、未だに醒めきらず上気したままの頬、恥ずかしさと情けなさで少しばかり潤んでいる瞳が、再びハセヲの心臓の鼓動に拍車をかける。

普段のキリッとした姿から一転、柔らかさを纏った佇まいの稟がそこにいた。

（……やっぱり綺麗だよな。髪をおろした姿もいいもんだ）

口には出さないが、軽く呆けたように稟を見つめるハセヲ。

その視線の意味には気付いたものの、流石に今回はもう踏み込む勇気を持つことはできず、稟は髪梳きに専念することにしたのだった。

しばしの間、お互いの呼吸と髪を梳く音が二人の耳に染み込むように響いた。

おかげどうか分からないが、両者が漂わせている雰囲気は穏やかなものになりつつある。

もとより、口数が多いわけではない二人。

それでも、これまでの付き合いから何をするにしても必要以上に気を遣わないでもよいことは分かっていたため、今の状況（ちんもく）を苦にしていない。

長くはない時であっても、密度の高い時間を過ごしてきた二人は、確かな信頼関係を築きあげているようだった。

「ふぅ、今日はもう体調不良（ふつかよい）を理由に、午後の仕事も休んでしまいましょうか……」

普段の髪型にセットを終えた稟が珍しいことを言った。

凪とならんで、何事にも真面目な姿勢を崩さない稟の発言にハセヲも目を丸くする。

「そんなにひどいのか？　稟が仕事を休もうかなんて口にするとこ、初めて聞いたぜ」

「そんなことはないのですが、今日はそれほど重要な案件はありませんからね。とはいえ、桂花殿一人では少々厳しいかもですが……別に構わないでしょう」

そう言い終えた折、稟の瞳に微かな影が宿ったのをハセヲは見た。

その理由に何となく心当たりがあったのだが、ハセヲとしては強く言えない内容だったため、複雑そうな視線を稟に送るにとどめる。

以心伝心。

稟もハセヲを困らせることが本意ではないため、冗談めかして口を開いた。

「大丈夫ですよ。あの程度の雑務、桂花殿ならば華琳様からの褒章を一人占めにするべく、快く引き受けてくれるはずです。仮に想定外の仕事が発生した場合には、私のところに運んでもらえばいいでしょう」

「……ああ」

それは信頼というよりは、少し突き放したようなセリフである。

――稟がこのような発言をするのには、当然訳があった。

この外史においては、稟、風、星の三人は正史から外れてハセヲに忠誠を誓っている。

日頃の態度では、主従の関係としては（主に立場的な問題で）逸脱した光景を目にすることもあるが、三人の心には、ハセヲを敬う気持ちが確かに存在していた。

にもかかわらず、ハセヲは華琳の下に――――盟友という立場をとってはいるが、実質は降った将も同然――――いる。

自らが『主』と定めた人物に『天下』を取らせ、治めてもらいたい。

そう考えてしまうのは自然な成り行きであり、それがこの時代における正しい主従関係の在り方だ。

しかし、別の世界から来たハセヲはこの考えに当てはまらない。

いつの日か、この世界から去ることを明言しているハセヲにとって、世の中を治める手伝いはできても、自らがその座に就こうなどとは考えもしないことだった。

最後まで責任を取れる者が、主導者となるべきというハセヲの主張を稟は尊重したいと思いつつも、心から納得はできなかった。

風や星にしても、態度にこそ表れてはいないが、思うところは当然あるのだろう。

結局、この問題はきちんと消化されないまま、稟たちに甘えるという形で現状維持の方針がとられている。

結果として、目に見える問題こそ起こっていないが、一部の人間関係に軽い軋轢が生まれていた。

それが、ハセヲに対して暴言を吐きまくる桂花と稟の関係だったわけだ。

ハセヲとしては生物が呼吸をしなければ生きていけないのと同様に、桂花は自分を罵倒しなければならないとさえ思っているため、もはや気にかけるまでもない。（腹は立つ時もあるが）

しかし、稟としては正直不愉快だった。

風や星に言わせれば、ハセヲをからかっていいのは自分たちの特権と言い張るだろう。

さすがにそこまでオープンにはなれないものの、広い目で見れば稟の心境も似たようなものであった。

おかげで、あれだけ嫌っているにもかかわらず、飽きることなくハセヲに絡む桂花にもしや……と疑いを抱くほどだ。

（ふぅ、今はそんなことよりも……）

生産性のない思考に見切りをつけ、稟は寝床から立ち上がって引き出しに向かう。

そこから恭しく取りだしたのは、手の平に収まりそうなサイズの木箱。

先ほどまでの沈んだ気分を吹き飛ばすつもりで意気揚々と蓋を開け、

「え……！？」

これまでの痴態がどうでもいいと思えるほどの、本日最大の衝撃を受けた。

そこにあるはずだった――――彼女の人生の中で、初めて男性から贈られた――――指輪が見当たらないのだ。

特別な手工が凝らされたものではない。

稟のような権威ある立場にある者が身につけるには、少しばかり不相応ですらある。

それでも好きな男性が一生懸命選んで贈ってくれた一品は、稟にとってはどんな装飾品よりも尊く思えたのだ。

だというのに――――

（なぜっ！？　昨日試しに身につけてから……一旦ここにしまったはずなのに！）

足元が崩れ、そのまま奈落の底へと落下していくような雰囲気を纏いながら、稟は必至で記憶を辿る。

小さな唸り声が漏れていることにも気付かず、懸命に思い出そうとするが、どうしても思い出せなかった。

せっかくの贈り物を半日も経たないうちに失くしてしまうなど、己には信じられない所業。

それもよりによって、大切な人から贈られた一品なのだ。
その気持ちを裏切ってしまったような思いで、稟は泣きそうだった。
奈落の底に引きずり込まれ、そのままどこまでも沈んでいきそうな稟に、

「もしかして覚えてねえのか？　昨日贈った指輪なら俺が持ってるぞ」

救いの糸が降りてきた。
そう言って差し出された手の上には、確かに指輪が置かれていた。
自身の瞳の色と同じ瑠璃色に輝く、シンプルな指輪。
今の稟にとって、一番の宝物である指輪だ。

「ああ……良かった！　本当に良かった！！」

反射的にハセヲの手を両手で包みこみ、安堵の吐息をもらす稟。
気が緩んだことで涙線も緩んだのか、じんわりと視界が歪んできた。
だが――――

「それじゃあよ……、その、左手を出してくれ、稟」

「え……はい」

潤んだ視線のさきでもハッキリと分かるハセヲの真剣な顔が、稟の心臓を跳ね上げさせる。

何らかの覚悟を固めたように息をのんだハセヲは、優しく稟の左手を取り……

（これは……まるで話に聞いた儀式そのものではありませんか！？）

ゆっくりと、指輪を薬指にあてがったのだ。

それはデス☆ランディから聞かされた、天の世界における婚約の証。

であるならば、そういうことなのかと視線で問う。

以心伝心。

力強く頷くハセヲの顔は赤く染まっていたが、同時に達成感に溢れていた。

「ハセヲ殿、私……本当に嬉しいです。まるで……」

感極まったか、言葉が続かない稟に続くようにハセヲが口を開く。

「ああ、俺も昨日まで知らなかったんだ。お前がこんなにも――――」

「――――”指輪”が好きだったなんてな」

「嘘みたい、に……」

今の稟の心境は、まさにその言葉通りに集約されていた。

救いの糸をよじ登り、もう少しで極楽浄土に達するというところで糸が切れてしまったかのような状況。

この雰囲気を作り上げた男は、ウンウンと自己解釈を続けている。

「昨日も、俺に男なら自分の手ではめてあげるくらいの心意気をみせろって叫んでたしな。いろいろと拘りみてーなものがあるんだろ？」

「……」

ハセヲとしては、この時代に指輪を左手の薬指にはめると婚約の証となる慣習は存在していないと判断しているため、多少の気恥かしさは感じるものの、深い意味はないとタカを括っていたわけなのである。

対する稟は、どこか覚悟もしていたが、それでもこれはあんまりだと心中で嘆いていた。

ちっとも伝わっていなかった気持ちに、稟が涙目でハセヲを睨むのも当然の行為だといえよう。

稟の背後に黒いオーラが湧き出てこようとしている幻を見たハセヲは、また何らかの地雷を踏んだかと戦慄しながらも……そろそろ刻

限が近づいていることを理由に撤退手段（ヘタレッぷり）を発動する。

「……それじゃあ、そろそろ警備に出なきゃならねえから行くぜ。あ、桂花には伝言しとくからしっかり休めよ！」

そう言い残し、そそくさと部屋を後にするハセヲ。

一人残された稟は、凍りついたかのように閉められた扉を見つめ続け。

しばらくして力尽きたかのように、その場に膝を落としたのだった。

「なんだあのトーヘンボクはっ！？　こちらの反応を面白がっている畜生か何かとしか思えないってーの！！　ふざけるなぁーーー！！」

その日の夜、稟の部屋の明かりは深夜をまわっても落ちることはなく。

烈火のような、彼女らしからなさ過ぎる声が静寂を切り裂き続けた。

――その次の日も稟は仕事に出られず、桂花の負担は凄まじいものとなったが、それでも翌日の彼女は幸せそうだったという。

## とある恋姫の日常風景　『稟』編（後書き）

え、今回の話で何を書きたかったんだって？
そんなの、稟の浮き沈みっぷりに決まっている！！

……失礼しました。

長かったですが、これでヒロインズの話も終わり。

次は本編……ではなく！
やってみたかったコラボに挑戦しようと思っています。

といっても、まだ何のプランもないのでいつになるか未定ですが（汗）

え～、それとですね。
本編突入したらしばらくシリアスが続く予定なので、ベタであろうと内容がなかろうと甘い話を書いてみたかったりするんですよ！

なので、良ければ下の選択肢から選んでください。

？詠を苛める話
？月と詠を苛める話
？んな暇あったら、コラボか本編を早く出せ

ハセヲの反応が健全すぎるために、淡泊な話しか出来ない現状を崩す話も一興かとｗ

相手には、ヒロインズの中でも苛めて楽しい詠は外せない！！

とまあ、そーいうことにしたので気軽なお返事を待ってますw

それではまたいつの日か♪

# シアワセナ夜（前書き）

――――やってしまった。

寝る前に気晴らしのつもりで書いていたら……徹夜で書きあげてしまった。

なんで、テンションがおかしくなっている話になってしまったとは思いますが、よろしければどうぞ。

あ、ハセヲのキャラが完全崩壊しているので、嫌な方はお戻りください。

## シアワセナ夜

『聖酒ハオマ』
『神酒ネクタル』
『尊酒シーマ』

これらは、古代ギリシアやインドの神話に登場する霊薬の名を冠した『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』のアイテム。

全体のＨＰ，ＳＰ回復効果を備えた優れ物であるが、この外史（せかい）では回復効果は認められず、ただの酒――しかし、味は絶品――という扱いになっていた。

そして、

『月のタロット』
睡眠の状態異常を与える

『愚者のタロット』
混乱の状態異常を与える

――という、以上のアイテムが今回の話のキッカケとなる。

常ならば意志の強さを感じさせる瞳は、今や隠せない困惑に揺らぎ

ながらも、ハセヲを鋭く見つめている。

いつも不機嫌そうに結ばれている唇は、今や酒気のためか何らかの感情のためか、色香を湛えるほどの女性らしさを放っていた。

「えっ！？　ハ、ハセヲッたら、きゃっ……え、嘘……でしょ？　やっ！？」

普段の毅然とした態度はどこへやら。

それほど、今までに経験したことのない感情が、刺激が、詠の心を揺さぶっているのだ。

知識としては知っているものの、『女』としての経験値は低い詠にとって、今の事態は想定外でしかなかった。

――上半身裸のハセヲを膝枕している詠の太ももを、ハセヲが幸せそうに撫でまわしてくるだなんて。

「あっ、きゃ……んっ……へ、変態！　アンタ、何っぁふ……をしてんの、ったら……、あぁ……んっ！？」

今までに聞いたことがない嬌声をＢＧＭに、ハセヲは未だハッキリとしない意識の中ではあったが、心地よい今の状況を享受するべく

手を伸ばしていくのだった。

――――え、これはどういう状況かって？

まあ、そりゃ訳分からないですよね。

とゆー訳で、デス☆ランディ、説明任せた！

「へ！？　え、え～とブヒね。事の始まりは……」

・風との一件で機嫌を悪くした華琳の機嫌を取り戻すべく、美酒を提供しようとハセヲは考えた。

・選んだ品を、まずは華琳のお眼鏡に叶うかどうか、元都務めの月と詠に試飲してもらうことに。

・太鼓判をもらえたまでは良かったのだが、ハセヲに異変が起きる。

・これまでの酒宴では見られないほど（量も控えめであったのに）、酔いつぶれてしまう。この際に「暑い」だとかで、上半身も裸になってしまった。

・このままでは大変と、デス☆ランディが『月のタロット』を使用し、ハセヲを眠らせる。

・ハセヲの上半身を見たのと酒の酔いで、同時に月もダウン。

・眠るハセヲを部屋に戻そうと思った詠だったが、何となく膝枕をしてやりながら頭を撫でてやっていた。

「――とまあ、オイラの存在を忘れたかのような行動を続けていたら、急にハセヲが目を覚まして、今に至るって訳なんだブヒ！」

はい、よくできました。これで状況は分かってもらえただろうね。

「しかしブヒね、こんな手抜き且つ、ありきたりな展開が許されていいブヒか？　マンネリは駄目街道まっしぐらブヒよ」

いやいや、王道は切り捨てられない魅力を持っているからね。

そして毎度のことながら、私は前置きが長いからさ。だからこそ、今回の話には内容の無い分、『趣向』に凝ってみようと思って端折らせてもらいました！

「……まあ、それがどう影響するかは読し「なに訳の分からないこと言ってのんよアンタはあああぁぁーーー！！」……ぷぎゃヒィィーー！？」

いくら酔っていたとはいえ、デス☆ランディの存在に気付かずにハセヲを介抱（かんし）していたという現実が、詠の心をズタズタにする。

――詠もハッキリとは意識していなかったが、多少自覚はあったのだ。

酒に加えて恥じらいからか、耳まで真っ赤にした顔。

自らの膝で無防備な寝顔を浮かべているハセヲを一途に見つめる潤んだ瞳。

それは紛れもない『恋する少女』がもつ”ソレ”ではなかったか。

そんな、とろけきった表情を見られていたというのか！

そこまで考えたところでたまらず、よく分からない独り言を続けているデス☆ランディに右手を一閃。

八つ当たりを込めた一撃で黙らせたものの、変わらずハセヲの手は詠の太もも――――間もなく付け根に侵入しそう――――の上にあった。

いつもなら引っ叩いてでも抵抗するのだろうが、今夜は酔いのせいなのか別の理由のせいか、そこまではしないようである。

代わりに目をつけたのは、一枚の『札』であった。

（コイツをもう一回使えば……！？）

先ほどデス☆ランディを黙らせた時に落ちたらしい札を、詠は手に取る。

いい加減危険領域に迫っているハセヲの手の存在もあって、詠は深くは考えずに、

「愚者のタロット！」

札の名称を読み上げると同時に札が消滅し、ハセヲをクリーム色の気体が包み込んだ。

ハセヲの身体が数回痙攣したかのように震え、力が抜けていく。

「……バカ。普段はヘタレのくせに……こんな時だけさ」

動こうとしないハセヲの姿に安堵しながらも、納得いかないような顔を浮かべる詠。

軽い八つ当たりのつもりで、少し力を入れて頭を撫でてやる。

その下で、ハセヲは寝心地に納得がいかないとでもいうように、首のすわりを変えていた。

まるで愚図る赤ん坊のようだと詠は思いながら、少し乱れたスカートの裾を直そうと空いている手を伸ばし――

「えっ！？」

伸ばした手をハセヲに掴まれ、グイと軽く引っ張られてしまう。

前のめりになって見下ろすように視線を向けた先に、

「――綺麗だ、詠」

「えぅっ！？」

両の瞳に、微熱を灯したような笑みを浮かべるハセヲがいた。

――かすれゆく意識の端で、デス☆ランディはハセヲの様子を捉えていた。

本来の『愚者のタロット』の効果と、今のハセヲの状況との因果関係を上手く回らない頭で推測していく。

（まさか……酔いのせいで正常な判断が出来ないという状況を混乱効果で逆転されて……逆に、”その場の感情に素直になり過ぎてしまっている”とでも……！？）

そこで限界のようだった。

何にせよ、理不尽な扱いによって心が疲れ果てていたデス☆ランディは、これで楽になれると押し寄せる意識の闇に身を任せて沈んでいった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ

「……バカ。普段はヘタレのくせに……こんな時だけさ」

聞きなれた声が、頭上から降ってくる。

心地よい熱を持っている身体に溶け込ませるように、全身を使って受け止める。

下半身が伝えてくる寝床の感触は、自分の部屋のものじゃない。

前後の記憶もハッキリしない。
しかし、どーでもいいことだった。

ここには、甘くてスッと鼻を透き通っていくかのような香りが漂っている。

匂いの発生源はどこかと探ってみれば、どうやら枕からのようだと突きとめた。

こんなに凄い枕があったのかと素直に思う。
それほどこの枕は、俺の思考回路をマヒさせていた。

人肌のような温もりと弾力を併せ持っている――なんだか安心するもの。

気付けば、俺は頬を枕へと擦り付けていた。

「――っ！？　きゃっ、ちょっと……ダメぇ、ダメだったら！　ん……ほんとに、きゃう……んんぁっ！？」

そのたびに頭上から降りそそぐ、くすぐったげな声。

困っているように言ってはいるが、本当に嫌ならば蹴りが飛んでくることは確実だったため、気にせず続けることにする。

だんだんと艶っぽくなっている吐息が俺の耳を打ち、心を潤してくれる。

この気持ちの正体が気になってきたところで、彼女の顔が見たくなり、重い瞳を開いた。

「――綺麗だ、詠」

「ふあっ！？」

そこには見たこともないほどに『女の子さ』を感じさせる詠の顔があった。

その言葉ですぐさま、必死で照れを隠そうとして失敗したような、見慣れた表情に戻ってしまう。

普段の詠も可愛いとは思うが、さっきの表情もとんでもないくらい可愛かった。

きめ細かく、シミ一つ見当たらない白かった肌は、今やどこも真っ赤に染まっている。

その理由は何だろうかと考え始めるが――とっくにイカれている意識では、詠の顔に見とれて口を開くことしかできなかった。

「綺麗だ。お前って……こんなに可愛かったんだな」

「～～～っ！？　ぅぅぅうううーーー！　バ、バカじゃない！？　酔っ払ってるアンタにそんな事言われたって、言われたって……う、嬉しくなんて……ない、わよって、バカ！！　頭を……う、動かしちゃダメったら。太ももに……擦りつけんじゃ、あっ……んっ、バカ！　何嗅いでんのよ！？」

――これは夢なのか？

なぜか、寝ている俺の横に詠が控えてくれている。

極上の枕を用意してくれてまで、だ。

現実には信じがたい状況だが、感覚が伝えてくる刺激はディテールに至るまでリアルなものだ。

しかしながら、やはり俺が知っている詠はこれほど大人しい人物ではない。

嫌なことがあれば実力行使――主に平手打ち――も厭わない、漢前の人物なのだ。

それでも――

（――まあ、いいか）

揺れる視界。

定まらない意識。

にもかかわらず、妙に鋭い触覚。

ゆっくりと頭を動かす度に、頭上から可愛い声が響くのが楽しいこの状況を、俺は楽しむことにした。

これが夢の中だとしても、今は文句なく幸せなのだ。

醒めない夢はない。

ならば、醒めるまでは――この気持ちに素直になろうと思った。

不思議と躊躇や恥ずかしさは生まれていないが、このさい都合がい

いものだと割り切る。

そう結論付けた俺は、掴んでいたらしい詠の手を解放し、枕の手触りを再び堪能し始める。

「……くっ、調子に乗るんじゃないわよ……って、ダ、ダメよ！シャレにならないわよ、そこから先は～～～～っ！？」

「ん？　急に真っ暗になったな……」

病みつきになりそうな気分で動かし続ける指先が、突如触れたモノ。傾けた首から見える、光沢のある生地の奥に隠されてた、黒い逆三角の生地。

そこでようやく枕の全容が目に入った。

「これは……？」

「覗き込むな、変態、鬼畜、色情狂！　見えちゃう、見えちゃうってんでしょ～～～！？」

「……ワリい、もう見ちまった」

必至な形相でスカートと俺の頭を抑えようとする詠。

その姿を見ていると、謝罪の気持ちが大きくなってくる一方で――俺は感動めいた想いも抱かずにはいられなかった。

てっきり『枕』だと思っていたモノの正体が、詠の『太もも』だったということ。

すなわちそれは、今まで詠が俺を膝枕してくれていたに違いないということ。

嬉しくないはずがなかった。

「そうか、月はああ言ってくれたが、詠にはやっぱり嫌われてんのかと思ってたからなぁ。……これが夢じゃなきゃいいな」

「バ……バカ！　本当に嫌いなら、こんなこと許すわけっ！？……って、アンタ、また！？　んっ……あううっ、このぉっ！」

腰の位置まで這いあがっていた身体を少し下にずらし、再び太ももへと頭をのせる。

加えて右手で詠の頬を撫で始めた。

今なら許してくれる気がしたからだ。

すると、どうだ。

何だかんだ文句を言いながらも、詠は俺が伸ばした手に片手を添え、仕方ないと言いたげな表情で見下ろしてきている。

――昇天するかと思った。

その仕草は反則だろ。

本当に夢だとしたら、もったいない限りだ。

「ううっ……、ったく、いつまで触って……んあぁっ！？」

「だってよ、こうすると可愛いんだからしょーがねえだろ」

下から見上げた詠の顔立ちは、綺麗という言葉だけじゃ表わしきれないくらいだ。

これまで見たことのない火照りきった表情が、とっくに壊れている俺の思考回路をさらに焼き焦がしていく。

まだ、この先があるのか――と思うと、もう少し詠を苛めてみたくなってしまうから驚きだ。

でもきっとこれは俺の性質じゃない。

詠の性質が悪いんだ、ウン。

「か、可愛いって、アンタ本気で……って、こら！　っふぁ、んんんっ！？」

「本当だって。なんなら証明してやるさ、だから……ちょっと静かにしてろよ」

「――――っ！？」

ニヤリと我ながら嫌な笑みを投げかけて、名残惜しくも上半身を起こし、ポカンとしている詠の背後に回り込む。

そのまま首筋から腕を前へと回すと同時に、素早く右手を詠の口元へと伸ばした。

照れ隠しにしても、少しばかり文句がすぎる詠の唇を封鎖するために。

「っぷぁ、んんん……っ！？」

照れを含んだツンツンした声も悪くはないが、今はこの声がもっと聞きたくなっていた。

人差し指と中指を口内に侵入させ、柔らかで吸いつくような感触が心地よい詠の舌を、からかうようにひっかいてやる。

「……っっふっん、んあっ！？」

狭い口内を必死で逃げ回る詠の舌が指先に触れるたびに、脳髄に電気が奔ったかのような衝撃がかけあがる。

その度に、ビクンっ、ビクンっと細かくカラダを痙攣させる俺に合わせるように、腕の中で震える詠の様子が可愛らしくて仕方ない。

同時に、外で待機している親指で瑞々しい唇をなぞってみれば、触れた部分が火傷しそうなほどの熱を持っているかのように感じられた。

と、ここで少し休憩のつもりで指の動きを停止する。（口内には入れっぱなしだが）

溢れた唾液に濡れる唇の端を、親指で優しくノックしてやる。

しばらく続けていると――――きゅっ、と固く閉じられている詠の目のように全身に入っていた力が、ほんの少しずつ緩んでいった。

正直なところ、噛みつかれるかと思っていただけに、受け入れてくれている詠の心の広さには感謝してもしきれない。

だから、もっと言葉（おれい）が必要だと思った。

「ああ……ヤバいくらい可愛いぞ」

「んんん～～～、っぁん！？」

唇のプルプルした感触を存分に味わいつつ、腰に回したまま手持無沙汰にしていた左手をゆっくりと上に持ち上げていく。

指先を腰のくびれに這わせて、ジワジワと詠の反応を窺うように。

「んっ、ふぅ……んぁっ！？」

詠を、俺の動きに合わせて反応させている今の状況が、嬉しいのと同時に誇らしくあった。

今まで、詠をこんな風にされるがままにできたことなどなかったから。

顔を真っ赤に染め、ピクピクと身体を痙攣させている詠。

潤んだ瞳は俺だけを見つめ続け、両手で俺のそれぞれの手を抑えている詠。

その手に込められている力は、ほとんど感じれない。

今の俺よりは、確実に力は上だろうに、だ。

つまり、嫌がっている訳じゃなさそうなんだよな。

（やっぱ、夢なのか……）

現実でこんな事をしたら――いや、絶対できねーな――その瞬間に（悪くて物理的、よくて社会的に）殺されてもおかしくはない。

ここまで大人しくなくてもいいが、たまには肩の力を抜いて話ができたらと思うんだが。

しかし、それはそれとして――ゾクゾクしてきた。

ここまでされるがままの詠の更なる反応を――もっと見たい、と妙に素直な今日の俺は、詠の耳元へ口を近づけて囁く。

「なぁ、このまま”して”いいか？」

「っふぁ？　ぇあ……」

口内から指を引き抜き、なるべく甘えるように囁いたつもりだったが、どうだったのだろうか。

とりあえず、湯気が出そうなほどに真っ赤に染まっている詠を斜め後ろから見やる。

こちらからは詠の表情は窺えるが、詠からは俺の表情が見えない好ポジション。

視線の先では、先ほどの言葉に何を思ったのか、トロン……としていた目に理性の光を取り戻した詠が見える。

口をパクパクと酸欠の魚みたいに開け閉めしながら、スカートの裾

をギュッと握り締めている。

（上手く伝わらなかったか……？）

そう思った俺は、右腕で詠の胸を下から押し上げるように這わせつつ、左手を形のよい顎に添える。

そうしながら、少し意地悪な感じで囁きかける。

「つまりな、こうやって触り続けてもいいかってことだ。それとも止めた方がいいか？」

その言葉の直後、ビクンっと大きく身体を震わせ、動きを停止する詠。

すでに真っ赤だった顔が、更に茹であがっていく。

何やら思い違いでもしていたのかもしれないが、意味は伝わったとみていいだろう。

一分ほど待ったが、何の反応もない詠に痺れをきらし、俺は急かすように活動を再開する。

「〜〜〜っぁん！？　こらっ、なにをっ――――ぁふあああ！？」

耳たぶに息を吹きかけ、ついでとばかりに甘噛み、さらには舐めてみた。

左手で顎をホールドしているため、逃げ場はなし。

そして予想通り反応は返ってきたが、言葉にならなさそうなので自重することに――

「っひぃ！？　んんっ……そこはぁ、ダメぇ……だってぇぇ！！」

――しようとしたが、詠の反応が可愛すぎるため、もう少し楽しむことにした。

――――――――

――――

――

―

それからしばらく。

黒のタイツ（？）に包まれた足をピンと伸ばし、俺の腕にしがみ付かないと身体を支えられそうにない様子の詠を見て、流石にやり過ぎたかと口を離す。

ただ、申し訳なさと満足度でいえば……分かり切った答えが出た。

（泣かせちまったなぁ。色っぽいけどよ……）

折り合いをつけながら心の整理をしていたところで、ようやく余裕が生まれたのか、詠は乱れた呼吸を必死で整えながら、口を開いた。

「……っぁん……んんぁっ、いっ、いい加減に……しなっ、さいよぉ！　っふぁ、女のぉ……あふっ、敵！　ああっ……！？」

口は離したが、俺の右腕は変わらずに、柔らかな胸を押し上げるように蠢いている。

手の平で揉んでいる訳でも、生で揉んでいる訳でもないとはいえ、その感触は十分なものだった。

明らかに反応してくれている詠の動きを見逃さず――特に反応があった場所を重点的に、且つ焦らすように触れ続ける。

だが――

「……そっか、悪かった。現実だろうが夢だろうが、詠が嫌がることはしたくないからな……」

「……え？」

物足りなさはあったものの、やり過ぎた感も十分あった俺は、そう言って立ち上がろうとする。

しかし、その瞬間、

「……どうした？」

ヒシと握られる俺の腕。

見やれば、詠が何か言いたそうにモジモジしていた。

「……わよ」

「は？　聞こえねーんだが……」

小さな、かすれるような声。

俯いているせいもあって、全く聞こえない。

だというのに。

パッと顔をあげた詠は、俺が意地悪していると考えているかように、俺を睨み付けて言う。

恥ずかしくて堪らないが……仕方ないといった感じで。

「ア、アンタはボクの主なんだし……どうしてもって言うなら、つ、続けても……いいわよ」

不安と刺々しさが混じり合ったような表情を浮かべている詠。

しかし、仕方なさを強調しているわりには、俺の腕を取る手に込められている力は強い。

そんな詠が、なんだかとてもいじらしく思え、つい――

「主だからって、何しても許されていい訳ねえだろ？」

「……っ、ううっ、この……アンタ今の絶対分かってて言ってるでしょ！？　それが本性だったのね、この変態！　う～～～～ううっっ……」

「悪かった、冗談だよ。詠がすごく可愛いから、つい……な」

――意地悪なことを言ってしまった。

にしても、癖になりそうなくらい興奮した。

身体が燃えてしまいそうなくらい暑い。

とはいえ。

おかげで、今にも泣き出しそうな雰囲気の詠を何とかするべく、あやすように背後から優しく抱きしめる。

おまけとばかりに、艶やかな濃緑色の髪の生え際から覗いている、滑らかで朱に染まった肌をペロリ……と舌で舐めあげた。

「――――んっっあああっっ！！」

思わず零れた嬌声で開いた詠の唇を見ていて、先ほどまでの名残惜しさを思い出した俺は、再び右手を侵入させる。

驚いたのか、少し噛まれてしまったが――うって変わって、その後は応じるように濡れた舌を細かく指に絡めてくる詠。

初めの頃の一方的な刺激ではなく、通じあった動きから伝えられる刺激は、俺の精神を底なし沼に沈ませていくかのように、どこまでも呑みこもうとしているかのように思えた。

詠の温かい唾液が口内を満たし、クチュクチュと悩ましげな音を部屋中に響かせる。

詠の嬌声を相まって、何とも心地いい旋律を奏でているよう。

「んっ……んあぅ、んんっっ……ひゃうっ、あぅ」

「……感動した」

「ちょっ……とぉ、んっ……あっ、あっ、ああっ、んっ、……っっっあん！？」

気付いたら、左手を胸に這わせていた。
弾力のある柔らかな塊が、俺の指を押し返そうとしている。

おかげで、感動のあまりに手を止めてしまった。
自失していたといってもいい。

それほどまでに衝撃的だったのだ。

未だに手の平に食い込んだままの状態をキープしながら、感慨にふける。

（なんなんだ、コレ……）

これまでの記憶にある、どんなに感触の気持ちいいものにも勝る感動がここにあった。

感触だけでいえば、似たようなものはある。
しかし、詠の胸は違っていた。

再開。揉む。ひたすら揉む。

予想より重量感はないが、適度な膨らみはしっかりとした弾力を備えている。

これほどに自分の本能（こころ）を刺激してくる感覚は生まれて初めてだった。
女性の――――詠の胸という認識が、これほどの感動を生むとは。
クーンが女性と仲良くしたがる理由がよく分かった気がする。（まあ、それだけじゃないとは思うが）

「ううっ……い、いちゅみゃじぇ揉んじぇりゅ……にょよぉ？」

「……凄くいいぞ、これ。いつまでもこうしてたいくらいだ。詠もイイ顔してるしな」

恥ずかしそうに詠が身悶える。
口内に入れられたままで話しているためか、舌足らずな口調になっているのも”そそる”ものがある。

しかし、詠に指摘されるまで、どれほどの時間が流れていたのか。
時間感覚が完全に麻痺しているようだった。

正直、両手で揉みしだきたいところだったが、口の中に入っている俺の右手の指先を、僅かな抵抗とばかりに、優しく、甘く噛んでくる詠も手放せなかった。

すっかり馴染んでしまった詠の柔らかくて熱い舌。
指先から俺の身体全体へ、詠の優しさが浸透していくかのようだ。

なので、俺は左手を駆使し、これまで触っていたように全体を覆うだけでなく、もっと大胆に――――先端をつまむように揉んでいくことにした。

「ヒャシェヲゥっ、あっ、あああっ、しゅごい！　しょこぉ、いいにょお……ヒャシェっっ……ご、ごしゅじぃんしゃみゃあーー！！」

体重を支えることができなくなっていた詠は、再び俺の左腕にしがみ付いてきていた。

舌足らずな口調で呼んでいるのは、俺の名前と……？

「お願い……ご主人様、あっ、あんっ、あっ……っと、もっとボクを見てっ！」

「……え？」

とっさに口内から指を抜いた直後に、詠が放った言葉。

それにより、すでに壊れかけていた俺の頭は、トドメをさされたかのような衝撃を受け、分解されていく。

トロン……とした、詠の唇から俺の指に架かる唾液のアーチも気にならないほどに。

バラバラになった部品が、知らない”ナニカ”に組み直されて生まれ変わり、不思議な感情が生まれていくような感覚が肥大していく。

ただカラダが求めている欲望だけじゃない。

その先に――俺の『心』が求めてやまない情（もの）がある。

自分でも説明しきれないような感情を――詠に対して。

「このまま、先にっ、進んだってぇ……いい！　あっ、ああっ、ボクのぉ、ボクの初めてっ、だってぇぇぇ……あっ、んんんっ！？」

拘束が緩まったことで、こちらへ身体を半分捻じるように振り返り、潤んだ瞳を向けてくる詠を――問答無用で抱きしめた。

対する詠も、ギュッと両腕を俺の首へ回し、痛いほど締め付けてくる。

至近距離で抱き合っている詠から漂ってくる甘い香り。
上半身から伝わってくる彼女の体温と心音。
そして時おり首筋に感じる、俺の指先が慣れ親しんだ柔らかで熱い舌の感触。

それら全てが、俺の脳を沸騰させ、融解させていく。

「……んん！　その……もう少し、ギュッてしてほし……し、しなさいよっ、ご主人様！」

俺を昇天死させたいらしい詠が、腰にまわした手に力を込めろと言ってくる。

といっても逆らう気はないため、素直に従った。

二つの膨らみが俺の胸で潰され、その柔らかすぎる感触を楽しむ――余裕はなさそうだった。

それなりの強さで互いの体を抱きしめ合っているため、呼吸が出来ない……ほどではないが、少し苦しい。（特に、俺の首には詠の両

腕が回されているため）

しかし、詠は満足しているのか力を緩める気はないっぽいので、仕方ないので気を紛らわせようと口を開いた。

「なあ、なんでご主人様って言ってんだ？　お前、その呼び方嫌ってたじゃねーか」

「……月がアンタのいない時には嬉しそうにそう呼んでんのを聞いてたら……羨ましくなっちゃったのよ」

存外に素直な答えが返ってきて驚いた。

もちろん嬉しい驚きだ。

ただ、一つ残念だったのは、詠の顔が見えなかったこと。

きっと、羨ましげで拗ねたようなイイ顔をしてたんだろうにな。

しかし、おかげで息苦しさなんて気にならないほどの、圧倒的な多幸感が俺の心を満たしていく。

まさしく、熱にうなされたように。

身体全てが、燃えさかる炎に変質したかのような気さえした。

「あぁぁん……んっ！？」

どこまでも高ぶっていく心の赴くままに、俺は両手を伸ばす。

右手を、サラサラと流れている髪を梳くように。

左手を、俺の身体で潰れている柔らかな胸に這わせるように。

その瞬間、まるで全てを預けるように身体を寄せてくる詠が――――

■■■思えた。

と、そこへ畳みかけるように、とめどなく響く、艶のある詠の吐息が俺の意識を高ぶらせると同時に、雷のように切り裂いていく。

「ん、んん……」

ああ……ここまで俺なりに頑張ってきたものの――――どうやら終着駅に着いちまったらしい。

「ん、あぁんっ……んっ、ご主人様？　どうしたの？　ちょっ！？　ねぇったら！！」

感覚が遮断されていく。

まもなく意識も完全に落ちそうだ。

まあ、状態が状態だったし、加えて首に回されていた手のおかげで酸欠気味でもあったため、仕方ないと言えば仕方ない。

なので、せめて詠を潰さないよう、最後の力を振り絞って彼女に回していた両手を離し、後ろへと倒れた。

触覚も鈍っているのか、いい音が響いたわりには痛くない。

「ちょっとぉっっ、ここにきてっ！？　こんな中途半端でぇ……やっぱりアンタは最低な奴よ！！　もうっ……バカぁ」

それでもと伸ばした手を、詠は両手で包んでくれた。

だが、伸ばした手は確かに繋がれているのに、すでに指先の感覚は断裂してしまっているかのように何も伝えてこない。

唯一まともに生きている聴覚は、どこかすねたような詠の声を伝えてきた。

申し訳なさで胸が一杯だが、今の俺には伝える手段がない。

だから、起きたら謝り倒すとしよう。

許してくれるか、と冷や汗の浮かぶ光景を想像したが、それはそれで望むところかとも思えた。

「……何よ、今のボクなら助けてもらった時の感謝だって……すごく嬉しかったって……今の気持ちだって伝えられそうだったのに……」

絞り出すように口にした、本当に小さな囁き声。

俺もだ――――と言いたかったが、口は動いてくれなかった。

だから、目を覚ましたら一番に伝えようと思う。

このひとときが最高に『幸せ』だったことを。

詠の可愛い姿を見ていて、胸がかつてないほど高鳴ったことを。

闇に飲まれていく意識の片隅で、おそらくツンとした――――でも、少し悲しそうな表情を浮かべている詠を想像しながら、俺は深い眠りについた。

ハセヲ　ｓｉｄｅ了

その日、朝目覚めたハセヲは混乱の極みにあった。

なぜか上半身裸、しかも廊下で寝ていたからである。

酒の試飲の件で月と詠の部屋を訪れてからの記憶が一切思い出せなかった。

何があったか二人に尋ねようにも、月は途中で倒れた（？）らしく、よく覚えていないというし、詠に至っては、逆ギレされたうえに、なぜかデザートを１０日間おごれと言われる始末だった。

本当に意味不明であったが、どこか腑に落ちないというか落ち着かない思いで、詠の頼みを了承したハセヲだったんだとさ。

――それからしばらく。

詠を見るとなぜか甘い感覚が浮かんでくるようになったハセヲは詠に逆らえず、雰囲気に慣れるまで、馬車馬のように扱き使われる日々が続いたんだとか。

## シアワセナ夜（後書き）

酒酔い＋混乱くらいじゃないと、これくらいの話は書けなかっただろうという今回の試み。

なので、今後はこーいった話はできないでしょうね。

『恋人のタロット』を使うという手段もありますが、これは別作品でＴＥ様がされてましたし。

まあ、今後の流れとノリ次第で検討といったところでしょうか。

それと次回更新は、今月２５日前後を予定しております！

以前の予定より一か月早いですが、本編を再開します！！

それではまた次回！　そしてお休みなさい……

## コラボ話　～～《紫雷の龍》との出会い～～（前書き）

今回の話は、以前に言っていたコラボ企画！
お相手は、紫電さんが投稿している『真・恋姫†無双～紫雷の龍～』です。
なので先にそちらを読んでもらった方が、内容がよく分かると思います。

時系列でいえば、
うちのハセヲは、『デス☆ランディの日記』の話の直後くらい。
紫電さんとこの雷魔は、洛陽から追放された直後くらいの設定です。
それではどうぞ～。

（８００００ＰＶ達成！　ありがとうございます！！）

## コラボ話　～～《紫雷の龍》との出会い～～

月や星の明かりが痛く感じられるほどに降りそそぐ、そんな夜。

すっかり冷たくなった風が、何の遮蔽物もない荒野に佇む人物に容赦無く吹き付け、唸りをあげる。

全身を風に弄ばれているのを気にもとめず、その人物――頭からスッポリと被っている外套から、旅人と察せられる――夜天を仰いでいた。

旅人自体はそう珍しいものではないが、一人きりというのは考えものだった。

このご時世に一人旅をするような者は、よほど世間を知らない愚者か、腕に自信のある強者かのどちらかなのだ。

しかし、その点でいえば、この人物は後者に当たるようである。

体格の良さや何気ない一つ一つの挙動が洗練されたものであることから察するに、只者ではないことは明らか。

夜の闇と月明かりで彩られた蒼色の視界に混じり合うかのように、フードの端から覗いている髪。

そして、月明かりを反射するたびに黒光りする色眼鏡（サングラス）。

どこか不気味でいて厳か。

一種の幻想世界の住人のような雰囲気を放つ旅人の口がゆっくりと開かれていく。

「世界（ほし）が……動き出そうとしている。もう一つの大きな世界（ほし）に向かって……いや、これは引き寄せられているのか……」

空には十六夜が輝き、他の光を打ち消してしまいそうなほどの光度を誇っているにもかかわらず、澄んだ空には星の海が漂っていた。

これだけでも十分綺麗な光景なのだが、旅人には何か別のモノが見えているようだ。

「そうか、お前にはまだ往くべき道が……交わりし運命が待っているのだな」

そう言って、旅人は微笑を浮かべたようだった。

目元と口元の力を抜いただけの、あまり人間らしくはない笑み。

しかし、そこに万感めいた想いを乗せて旅人は詠う。

託宣を告げる預言者のごとき静謐さをもって。

「行くがいい、天の御遣い。
一億の原初を連れて、一億の終焉を連れて、一億の邂逅を――――遂げるために！」

旅人の声に呼応したかのように、星は輝きを更に強め、流れ星となって過ぎ去っていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「「……流れ星か、随分大きかったな」」

遥か遠い夜空――――世界は違えども同じ時間に――――を、ひとすじの流れ星が翔けていく。

その様子をしばらく見つめ続ける少年たちの心は、徐々に重なり始めていこうとしていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「――――どこだよ、ここは……？」

百日の旅団長であり、天の御遣いと認知されつつある少年――――ハセヲは、気がついたら森の中にいた。

鬱蒼（うっそう）と生い茂る木々の隙間から、若干茜色が混じった木漏れ日が差し込んでいる。

太陽の位置をハッキリとは確認できないが、どうやら夕刻が近づいているようだ。

ひとまず周囲の状況を把握し、直前までの経緯を振り返るハセヲ。

一連の行動が手慣れているのは、（悲しいことに）こういった事態

に慣れつつあるからだろう。

目が覚めたら、全く知らない場所にいたという経験はこれまでにもあったし、ただでさえ、いま自分が置かれている状況――――１８００年前の異世界にいる――――が状況なのだ。

何が起きても不思議ではないのだから。

事実、普通なら取り乱すのが当たり前の状況であっても、ハセヲは比較的落ち着けていると自覚していた。

（カイトのせいでお開きになった、アイテムのお披露目会を始めようとしたところで……）

ギルド倉庫へと繋がる穴をデス☆ランディに開いてもらい、そこに手を突っ込んだ途端、〝逆に引きずり込まれてしまった〟のだ。

いくら力を込めて抗おうとも、徐々に飲みこまれていく身体。

朱里や雛里が大慌てで叫びたてていることと、まさかの事態に驚くタイミングを逸してしまったハセヲはどこか呆然としながら、すっかり飲みこまれてしまった右半身を見つめていた。

「これは……ギルド倉庫に繋がっている穴じゃないブヒ！？　なんだってこんな……とにかくいいブヒか、ハセヲ！　必ず助けてやるブヒから、出口となった場所からあまり離れずに待ってるブヒよ！」

珍しいデス☆ランディの心配そうなセリフを聞きながら、ハセヲの身体は完全に飲み込まれ、意識も落ちてしまった――――というわけなのである。

「助けを待つっつっても、どれだけ時間がかかるんだか。とりあえず、飲み水は大丈夫そうみてーだが……」

木々のそよぐ音に混じって聞こえる水のせせらぎらしき音にハセヲは気付いていた。

少しばかり草をかき分けながら進んでみれば、予想通り川を発見。山魚も泳いでいるのを確認したハセヲは、気持ち的に大分楽になった。

風たちから教えてもらった食べられる山菜などを見繕えば、数日程度なら何とかなるだろうと見立てたところで……

「ん？　煙が立ってんな……こんな山奥に誰かいんのか？」

多少景色が開けたことで覗いている橙色に染まった空に、ひとすじの煙が立ち昇っているのを見つけた。

俗世から身を離した隠者が住んでいると言われても信じられそうな場所に、誰がいるというのか。

まさか、本当に隠遁者がいるとは思えないが、狩猟で生計を立てている者でも、こんな場所に住んでいるのかは疑問である。

「……よし」

外界から切り離されたような世界。

歓迎も拒絶もない、ただそこに広がる森

その中を、煙の方へと向かう決心をしたハセヲは、ゆっくりと歩き出した。

目算でも見当がついていた通り、ほどなくハセヲは目的地に辿り着いた。

どうやら河原のスペースを利用して、生活をしている者たちがいるらしい。

近づくにつれて強くなっていった香ばしい匂いから予想はできていたが、焚火の周りに川で採ったのであろう山魚が突き刺されている。

二十本はあることから、四、五人はいるのだろうと推測された。

大木の裏に身を隠して息を潜めつつ、続いてハセヲは人の気配を探り始める。

（静かだよな……この近くには誰もいねーのか？）

時折、火が爆ぜる音や野鳥の鳴き声が聞こえる以外には、気配らしい気配は感じられない。

なので、誰かが戻ってくるまでこのまま待機し、様子を見るかと判断した。

神経を研ぎ澄まし、ささいな変化にも反応できるよう、五感を周囲に溶け込まさせていく。

（さあ、鬼が出るか蛇が出るか……）

――とはいえ、長時間これを維持できるほどの錬度は持ち合わせていないハセヲ。

しかし、魚の焼け具合を見るに、間もなく誰かは戻ってくるだろうという希望的観測を抱いての判断だった。

そしてそれは――最悪の形で、現実のものとなる。

「――動くな」

「！？」

突如、背後に生まれた声。

直前まで全く感じ取れなかった強大な気配を受け、ハセヲの目が大きく見開かれる。

次いで、声にならない悲鳴――実際はのどが震えただけ――をあげて硬直した。

胸を剣で貫かれたかのような衝撃。

体中の毛穴という毛穴が開き、そこから冷たい汗が噴き出ていく。

相手は感情さえも殺しきったかのような冷たい声で静止を促してきたが、それ以前に全身が訴える寒気でほどんど動けそうにもない。

（嘘だろ……？）

呻くことしかできない。

訳が分からなかったが――どうやら、自分は鬼や蛇どころか『龍』にでも出くわしてしまったかのような、軽く泣きだしたいような心境に陥っていた。

無論、諦めているわけではないが……やすやすと背後を取られた事実に愕然としながらも、必死で次の行動を考え始める。

「お前は何者だ？　俺を消すために送られてきた刺客にしては穏形がなってないが……とはいえ、かなりの実力はあるようだな。警戒はしてても殺気は出していないあたり、『本物』ならかなりの曲者だが……」

「……」

ハセヲが必死に心を落ち着かせつつ、状況を打開するための方策を考えていたところで、相手から声がかかる。

少しだけ露わになった声音は、若い男のものだと察せられた。

男も若干迷っているのか、先ほどまで叩きつけられていた覇気が和らいではいる。

しかしながら、依然として予断は許されない。

刺客に狙われていると零しているあたり、男にも相応以上の事情があるようだ。

まあ、こんなところに住んでいる時点で『訳あり』なのは確定だが。

「俺は怪しい者じゃない。それを証明する手立てはねーが、信じてもらえると助かる。ああ、それとな……」

「……？」

男がこちらを刺客の類だと思って処断を迷っているのなら、その意気を挫く必要があった。

「わりと腹が減っててよ、よかったら分けてもらえねーか？」

「……」

上手い手とゆーか、正直ビミョ―な気の逸らし方ではあったが。

ハセヲの発言――まんざら嘘と言う訳でもない――により、張り詰めていた空気は弛緩しはじめていた。

目論見通りの結果を得られたものの、何かを喪失した感が否めないハセヲであった。

――とにも、二人は出会いを果たす。

「それで？　ここはどこなんだ、雷魔？」

軽く自己紹介をしているうちに、完全に夜の闇に覆われてしまった森。

そこで結局、御相伴に預かれることになったハセヲは、一息ついたところで問いかけた。

視線の先で、姓を雷、名を魔、字名を覇龍と名乗った――しかも同年齢（タメ）らしい――少年が、どこにそんなに入るんだと思えるほどの魚を平らげている。

背は高い。

筋肉質ではあるが、締りの良い肉つきをしているおかげか、細い印象さえ受ける。

顔は目つきが少しキツイが、端正なもの。

髪の色は紫。瞳も濃い目の紫色をしている。

また、初めて正面から向き合った際に違和感を感じたハセヲは、ほどなくその正体に気付くことができた。

彼の瞳孔が、龍の目のように縦に割れていたのだ。

どこか浮世離れした風貌の持ち主ではあるが、圧倒的な存在感を放っている少年。

彼は手にしていた魚を平らげると、答えを返してくれた。

「ここは泰山のふもとに広がっている森だ。少し前からここで修行を始めてな、今夜の晩飯を調達してたところにハセヲの気配を感

じて、様子を窺ってたんだ」

一人で山籠りをしているという雷魔。

初めこそ、他にも誰かいるのではと思っていたハセヲであったが、ほぼ全ての魚を平らげてしまった様子を見て納得させられた。

何でも冤罪をかけられて追放処分を受けた末に、ここに落ち着いたらしい。

洛陽でそれなりの身分に就いていたようだが、本人はそんなことを気にかけるでもなく、気楽に接してくれることに、ハセヲは好感を覚えた。

「泰山ってのがどの辺にあるのかよく分かんねーんだが、幽州からだと遠いのか？」

「そりゃ遠いに決まってんだろ。幽州からみりゃ、ずっと東方にあたるんだ。なんだって用があるわけでもないのに、こんなとこまでやって来たんだよ、ハセヲ？」

「いや、それは俺の方が聞きたいことでな。……って、そんな視線向けんな！　俺にだって意味分かんねーことなんだよ！！」

ジトーっという音が聞こえてきそうな半眼でこちらを見据える雷魔の視線がちくちくと突き刺さる。

ハセヲとしても、同じようなことを言われれば同様の反応を返すであろうから気持ちは分かるのだが、それでも事実なのだからと開き直るしかなかった。

「それでも助けが来るアテはあるから、しばらくはここで待機するつもりなんだが……」

「ならよ、俺の修行に付き合う気はないか？」

「……ふーん」

何をしようと考えていた訳でもなかったハセヲの意識に、その誘いは大変魅力的――――後のハセヲは、この時の自分を殴り倒してでも止めたであろう――――に聞こえた。

気のないような空返事を返しつつも、表情に興味を滲ませつつ口を開く。

「山でする修行ってーと、滝に打たれたりとか瞑想したりとか崖登りとかか？」

「そうだな、そういったこともする。肉体的強化はともかく、精神的強化を行うなら、ここみたいな場所は最適なんだ。

具体的にどんなものだかは……体感する方が分かりやすいな。ちょっと立ってくれ、ハセヲ」

言われた通りに立ちあがり、５ｍほどの距離をとって対峙する。

そのまま雷魔は何でもないように言ってきた。

「よし、いつでもいいから打ち込んでこいよ。全力で構わないぜ」

特に構えらしい構えもとらず、精々いつでも動けるよう踵を浮かし

ている程度。

舐めているわけではない――――雷魔の真剣な顔からそう判断したハセヲは、拳を固く握りこんだ。

（いいぜ、そこまで自信があるならやってやろうじゃねえか！）

好戦的な思考とは裏腹に、ハセヲは火照り始めていた身体を落ちつけようと呼吸を整える。

新鮮な空気を肺に満たし、動悸が正常近くに戻ったことを、雷魔に向けていた大部分の意識の片隅で把握した瞬間、

（――――いけ！）

雷魔が変わらず静止しているのを目に収めつつ。

全身の力を弾けさせ、渾身の踏み込みからの正拳を繰り出した――――が、

「……え？」

次の瞬間には、雷魔がハセヲの懐に潜り込んでいた。

同時に優しく触れるようにみぞおちにあてがわれた拳。

それは、これまでのどんな武器よりも恐ろしい凶器に感じられる。

身体の勢いは止められそうにないため、回避も防御も不可。

未だ相手に届いていないハセヲの拳と、こちらのみぞおちに触れている雷魔の拳。

どちらが先手をとれるなど考えるまでもない。

覚悟を決めることしかできないハセヲに、その一撃は放たれた。

「っだあああーーー！？」

派手に後ろに吹き飛ばされ、大地に口づけすることになってしまったハセヲだった。

「戦闘を行うに当たって効果的な方法の一つとして、さっきみたいな相手の意識の外――瞬きした瞬間とか、息を呑んだ瞬間だな――を突くって技術がある。先手の意気を潰して、結果として先に攻撃するってわけだ。

どんな相手だって、初動の際には僅かなりに意識に空白ができるもんだ。そこを突ければ勝ちの可能性はかなり高まるぜ」

思いのほか、ダメージが少なかったハセヲはほどなくして立ちあがり、雷魔から先ほどの講釈を受けていた。

――踏み込んだ足をそのままに軽く拳を押しこんだだけの一撃（ようするに自分の突撃の威力で自滅しただけ）ですませたので、雷魔としては十分に配慮していたのである――

といっても、雷魔が言う技術は理論上有効な手だということは分かるが、実践するとすれば難易度は激高なものだ。

そう考えていた心境が顔に出ていたのか、雷魔はニヤリと笑みを深めながら、人差し指をたててのたまった。

「誰かが言ってただろ。こーいうのは、考えるんじゃなくて感じるもんだ。考えてからじゃ間にあわないからな」

（その元ネタは、こんなに昔からあったのか……）

ハセヲが場違いな感銘を受けているとはつゆ知らず、雷魔は説明を続ける。

「相手の呼吸、重心の移動、筋肉の収縮。これらを意識しなくても自然と把握できるようになれれば完璧だな。向き不向きもあるから、完全習得できるかどうかは別としても、やってみて損はない。

そもそも、本気で強くなりたいんなら無理だろうが無謀だろうがやるしかないだろ？　死ぬほど頑張ってみて、それでも駄目だったらそこで諦めりゃいい。

別にそこまでをハセヲに求めているわけじゃないが……それでも、一緒に修行すれば今よりは確実に強くなれることは保障するぞ！」

自分でも今日初めてあった男に執着しすぎでは、という意識が雷魔にはあった。

嘘はついていないようではあるが、それでも隠しごとがあるのは明らかなハセヲ。

しかし、それは自分も同じことだと雷魔は分かっていたし、詮索するつもりもなかった。

それでも、ハセヲの瞳に宿る意志（ちから）を目にした雷魔は、ハセヲに対し

て興味を持ち始めていたのだ。

己の利益を何よりも優先する役人たちの浅ましさを嫌というほど見せられた雷魔。

沈みゆく漢(ふね)王朝の舵取り争奪戦の犠牲者といえる雷魔にとって、ハセヲという存在は暗闇の中で道標を示す灯火のように思えた。

未だ、荒削りの原石のような獲物(ハセヲ)を前にして、同じ『武』を抱く者としての心が躍る。

自分もどれだけの力を身につけられたかは実戦を通してみないと分からない点もあり、雷魔から見ればハセヲへの勧誘は自然なことであったのだ。

「そうだな、確かに他にすることも思いつかねーし……世話になる、雷魔。それとも師匠って呼んだ方がいいのか？」

「やめとけ。そんな殊勝なタマかよ、お前は。まだ全然お前のことは知らねえが、それくらいは想像つくぞ」

「ああ、そりゃあ助かるぜ。じゃあ雷魔、よろしく頼む」

「おう、こちらこそだ、ハセヲ」

二人は拳を挨拶代わりとばかりに打ち付け、どちらともなく微笑をこぼす。

ここにきて、ようやく穏やかな夜が始まりを迎えたようだった。

しかし、ハセヲは気付いていなかった。

雷魔の『龍』を彷彿とさせる厳かな瞳孔が、この瞬間に限って『猫』のような悪戯めいた光を宿していたことに。

前回の事もあり、雷魔とハセヲは、雷魔の提案通り一緒に修行を始めた。

その内容は、手合わせや崖登り、それに滝修行などを行っていた。

しかし、その様子は雷魔がハセヲを弄って楽しんでいるように思えた。

例えば――――

崖修行にて、

「ほれほれ。早く登って来ないと切っちまうぞ？」

「うるせ！　少し黙って……！」

「……ほう、そんな口利くか。じゃあ、この綱を……」

「ま、待て！　今登るから、切らないでください……」

そんな風に、崖修行ではなくてはならない（というか命に関わる）命綱を先に登った雷魔が手に「短刀」を持って、切ろうとしたりして、ハセヲの焦る姿を見たりして楽しんでいたり。

滝修行にて、

「どうしたどうした、足が震えてるぞ？　もう限界か？」

「震えてねぇ！　まだいける！！」

「……」

「うお！？　ちょ！？　やめ……おわぁ！？」

ドパアアアアアアン！！

岩の上に立って滝に打たれるのだが、少し限界が近づいてきたハセヲの足を蹴ったり、払ったりしてハセヲを滝壺に落としたり。

手合わせでは、

「秘奥義（ひおうぎ）・重装甲破（じゅうそうこうやぶり）！」

ドガアアアアアアアアアン！！

「おい！　今のは受けても喰らってもヤバかったんじゃねーか！？」

「ちゃんと避けてんだから気にすんな。それよか次いくぞ、次」

「ハセヲ……、少し現実を知ってもらおうか」

「うっせー！　見た目のわりに大人気ね―奴だな」

「大人気ないも何も、俺らはタメだろうがっ！！」

「嘘だっ！！！！　絶対サバ読んでるだろ、お前！　どう考えても、十代の雰囲気じゃねーんだよ！」

「ハセヲ……お前の負けだ。お前は――――俺を怒らせた。敗因はただそれだけだ」

ヒュン……

「な！？」

ドガ！！　ドサアアァ！！

「ぐは！？」

「よしよし、これで通算９７勝無敗。１００勝まであと３つだな」

「っち、く……しょう……」

「さあ、ハセヲ。敗者は勝者に従うのが道理だ。では、手始めに…

…ごめんなさいは？」

ハセヲの無茶な攻撃と、年齢に対する暴言にキレて一撃でのすと、倒れているハセヲの頭を踏みながら、ハセヲに謝罪を求めたり。

そんな事をしながら、彼らの修行は恙無く（？）進んでいった。

そして、彼らが出会って数週間後。

今日も今日とて修行に励んでいた。

「天下無双飯綱舞い（てんかむそういづなまい）！！」

ハセヲはバク転の勢いを借りての蹴りで雷魔を空中に打ち上げた後、地に足をつけるやいなや追撃を仕掛け、『虚空ノ双牙（こくうのそうが）』で怒涛の六連撃を無防備な雷魔に叩き込もうとした。

しかし、雷魔はハセヲが追撃しに来た瞬間「空中で」体勢を立て直し、技を放つ。

「閃空裂破！！」

横回転で上昇しながら雷魔は、ハセヲを切りつける。

ガキン！

「ぐっ……！」

ハセヲは咄嗟ではあるが何とか防ぐものの、空中であるため踏ん張ることは出来ず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

だがそれでも、なんとか受身を取り雷魔の方を向くと、目の前に雷魔の剣先が向かってきており、慌てて横に転がって回避する。

雷魔はそれを見て、剣先を戻し、着地した後すぐにハセヲの方に向く。

するとハセヲは遠めに距離を開け、武器を『シラード』に変えていた。

「うおおぉぉぉおおおおお！！」

ハセヲはそう叫びながら突っ込んできた。

そして、突っ込んだ勢いのまま『シラード』を振り下ろす。

だが、次の瞬間――――

ガアァァン！！

何か光ったと思ったら、そんな音と共に『シラード』諸共思いっきり吹き飛ばされるハセヲ。

その顔には驚きの表情が張り付いていた。

なぜなら、雷魔が使っている二本の剣では、防がれるならまだしも

吹き飛ばされるとは思わなかったからだ。

実際、雷魔が現在使っている武器は、片方は日本刀のような剣である『黄竜（こうりゅう）』で、もう片方は鍔のない片刃の直刀である『飛竜（ひりゅう）』を使っている。

この二つでは、大剣である『シラード』を弾いて、自身をも吹き飛ばすことは難しいだろう。

では、どうやって？

答えの出てこない事を考えていると、いつの間にか自分は倒れており、その首には雷魔の『黄竜』が突きつけられていた。

「これで９９戦９９勝だな。１００勝まであと１勝っと」

「……ハァ……ハァ……ち……ちくしょう……」

雷魔はそう言いながら、顔をにやけさせ、ハセヲは悔しそうに顔をしかめる。

「さて、ハセヲ。俺が勝ったから……わかってるよな」

「はぁ……わかってるよ……」

雷魔の言葉に溜息を吐きながらも、起き上がり大き目の桶を二つ持って歩き始めた。

「んじゃ、水汲みよろしく～♪」

その後姿に雷魔は機嫌良く声をかけた。

ハセヲの姿が見えなくなると雷魔は焚き火の準備を始めた。

「……さっきは少し危なかったな」

そうつぶやきながら手ごろの意思を拾う。

（まさか、アレを使って防ぐ事になるとは……ハセヲが成長してる証拠かね？）

そんなことを考えながらも、囲いを作り、次は薪となった。

「さて、薪を拾いにいかないとな」

そう言って、近くの茂みに入ろうとする雷魔。

すると……

ガサガサ……

いきなり向かおうとした茂みが揺れた。

「なんだ？」

雷魔は若干警戒しつつ、『黄竜』の柄に手をかけながら近づく。

その瞬間――――

「アアアァァァアアアアア！！」

そんな叫び声と共に橙色の何かが飛び出し、雷魔に襲い掛かってきた。

「な！？」

いきなりの事で驚きつつも、相手の攻撃を横に回転しながら避け、相手の腕を掴み、回避の勢いと相手の勢いを利用し、投げ飛ばす。

襲撃者は、投げ飛ばされても空中で受身を取り、着地したと同時に雷魔に突っ込んできた。

「ちっ！」

そう舌打ちしつつも、『黄竜』と『飛竜』を抜き応戦する。

ギィン！　……ギン！　ガン！　ガガガガガ！　ガァン！！

それから、しばらくの間金属のぶつかり合う音だけがあたりに響く。

だが、流石に襲撃者の猛攻に焦れてきたのか、雷魔は相手の攻撃を弾いた後、自身の技を使う。

「一旦吹っ飛べ！　獅吼翔破陣（しこうしょうはじん）！！」

雷魔は隙の出来た相手の身体に肩から突っ込み、そこから腕を振り

ぬくと同時に獅子の形をした気をぶつけ、少し相手を浮き上がらせた後、空中に飛び上がりそこから地面を叩きつけ、その中心から衝撃波を発し相手を吹き飛ばした。

これには、先程まで猛攻を仕掛けてきた襲撃者もそのまま地面に叩きつけられた。

襲撃者は、しばらく倒れていたが、すぐに立ち上がり、構えを取る。

だが、今は先程のようにすぐに襲い掛かって来ず、様子を見ているように感じる。

雷魔はそうなって初めて相手の容姿や武器を確認できるようになった。

そして、相手の姿を見て驚く雷魔。

その姿は、人の形をしているが、異形な感じがした。

その理由は、全身が継ぎ接ぎだらけで、また目に生気があるのか分からない。

だが、もっと驚くべき物が襲撃者の手に握られていた。

（あれは……ハセヲが使っている双剣に似ている……いや、それ以上だ。まさに瓜二つ……）

そう襲撃者の武器が、ハセヲの使っている双剣『虚空ノ双牙』と瓜二つだったのだ。

（となると、ハセヲの世界の関係者か？）

そう考える雷魔。

ハセヲには言ってないが、雷魔はハセヲが異世界人かもと思っていた。

今まで追及しなかったのは、確信がなかったのと、詮索する気はなかったからだ。

「お前は何者だ？」

雷魔は無駄だと思いながらも襲撃者にそう質問する。

「アアアァァァァ……」

無反応とまではいかないが、相手の反応は質問に対してではないとわかった。

「……だんまりか」

予想はしていたが、流石に少し気落ちする雷魔。

すると、襲撃者は足に力を入れ、突撃の構えを取る。

「来るか……」

それを見て雷魔も応戦の構えを取る。

「アァァアアアアアアア！！」

それを見て、突っ込んでくる襲撃者。

その瞬間――

「やめろ！　カイト！！」

そんな雷魔にとってここ最近聞きまくっている声が響き渡った。

すると、襲撃者の動きがその場で突っ込んだままの体勢で止まり。

しばらくして、ゆっくりと直立になっていった。

そして、雷魔はそれを確認した後、ハセヲに振り向いた。

「お前の仲間か、ハセヲ？」

両手に水の入った桶を持ちながら、こちらに向かってくるハセヲにそう聞く雷魔。

「ああ、そうだ」

ハセヲは水汲みか、それとも先程の事でなのか若干疲れたような返事をする。

「なるほど。ハセヲと同じく、この世界の人間ではないんだな」

ハセヲはその雷魔の言葉に「そうだ」と答えそうになるが、彼の言葉の中に聞き逃せない言葉があったのですぐに聞き返す。

「雷魔。今、『この世界の人間』って言ったか？」

そのハセヲの質問に雷魔はしまったといった顔をする。

だが、すぐに顔を元に戻し、ハセヲに面と向かって言い放った。

「……ああ」

ハセヲはその雷魔の返事に少し混乱するが、気を落ち着かせ、さらに質問をした。

「どこから気付いてたんだ？」

「ほぼ最初から。この世界の地名を使ってはいるが、明らかにこの世界のものではない服装。それに、武器を隠し持つかのような技術。そして、氣ではない何か特別な技の発動。これらのことがあって疑わない方がおかしい」

雷魔の分析力に少々驚くハセヲ。

それでも、納得のいく内容だった。

「雷魔。あんた……本当に何者だ？」

ハセヲはここであえてそういう質問をした。

「……そうだな。ハセヲの正体も少しわかってきたし、俺自身についても話しておくか」

そう言って、雷魔は真剣な顔をする。

その様子にハセヲの背筋もなぜか伸びる。

「俺はこの世界では、最強部隊として名高い禁軍特殊警護部隊（きんぐんとくしゅけいごぶたい）『天龍（てんりゅう）』の元隊長であり、現皇帝である、漢王朝第十二代皇帝劉宏（りゅうこう）の義弟（おとうと）だ」

雷魔の言葉に心底驚いた顔をするハセヲ。

それから、雷魔は自身の過去の経歴を話し始めた。

半刻後。

雷魔の話が終わり、ハセヲは少々難しい顔をしていた。

「じゃあ、次はハセヲの番だな」

「……は？」

その雷魔の言葉に少し気の抜けた返事をするハセヲ。

「だから、俺が話したんだから、次はお前ってことだよ」

「はい？　え？　……はい？」

少々混乱しているのか、雷魔の言葉に返事をするハセヲの言葉は変になっていた。

だが、すぐに落ち着き、覚悟を決めたのか顔を真剣な表情に変えた。

「……わかったよ」

そう言って今度は、ハセヲの経歴の話が始まった。

さらに、半刻後。

雷魔は何か納得したように頷いていた。

「なるほどな。そんなことがあったのか……しかも、ここことは違う外史があるとはな……」

そうつぶやいた後、何かを考えるそぶりを見せ、何か思いついたかのような感じに顔を上げた。

この時、ハセヲの中では嫌な予感がしていた。

「んじゃ、あいつ――――カイトだっけ？　あいつが来たってことは帰るってことか？」

「まあ、そうなるな」

雷魔の質問に素直に答えるハセヲ。

ちなみに、カイトは現在ハセヲの傍で直立不動で立っている。

「んじゃ、帰る記念に１００戦目をこれからするか！」

「は？　……はあああああ！？」

突然の雷魔の発言にハセヲの叫び声が周辺に木霊した。

雷魔の突然の発言から、四半刻後。

二人は距離を開けて立っていた。

あの後ハセヲは、色々反論して断ろうとしていたが、雷魔に氣による回復術で体力を回復させられ、初めて出会った時並みの圧力を受け、頭を縦に振ってしまい、今に至るわけである。

閑話休題

すると、雷魔がある提案をしてきた。

「この１戦はお互い隠し玉とかをすべて出して、全力で、本気で闘ろうぜ」

「……は？」

そう言った瞬間、雷魔の周りに紫色の雷が走ったかと思うと、彼か

らものすごい圧力がハセヲに襲い掛かり、若干下がってしまう。

（なんつー圧力だよ！？　これがこいつ――――雷魔の本気かよ！？）

ハセヲはいきなりの圧力に内心震え上がっていたが、雷魔はそんなことに気付かずに次の行動に移っていた。

それは、右掌をハセヲに向けていたのだ。

「さっき手合わせで最後の方にお前を大剣ごと吹き飛ばしただろ？　あれはな……この武器を使ったからなんだよ」

バシュゥウン！

雷魔がそう言った瞬間、右掌が一瞬光り、その手には今までどこにもなかった大鎌が握られていた。

「これが俺の隠し玉。大鎌『天竜（てんりゅう）』だ」

このことには流石に心底驚いたハセヲ。

だが、雷魔の次の言葉で現実に戻される。

「さあ、ハセヲ。お目の隠し玉。出せよ」

そう言われ、ハセヲも自身の隠し玉――――大鎌『万死ヲ刻ム影（ばんしをきざむかげ）』を換装し、『武獣覚醒』を行使して朱金のオーラを身に纏った。

「なるほど。それがお前の隠し玉か」

「ああ。『万死ヲ刻ム影』だ」

「なるほど……だから、俺の中にあったこいつがざわついていたのか」

ハセヲの答えに何か納得した様子の雷魔。

すると、そのまま構えを取る。

「さあ、構えろハセヲ。これが最後の手合わせだ」

ハセヲもそれに合わせ、構えを取る。

しばらくの間、両者とも動かないで居たが、木から葉が落ち、それが地面についた瞬間――――

「ハアァァアアアアアアアア！！」

「オオオオオオオオォァァアアアアアア！！」

両者とも相手に対して突っ込んだ。

数刻後。

初めは、お互いの手の内が分からなかったためか、拮抗した戦いになっていた。

しかし、段々と雷魔が押し始め。最終的には、ハセヲの悪いところを指摘しながら、手合わせをしていた。

そして現在、日が沈み、二人は焚き火を囲み、夕食を食べていた。

「なあ、話があるんだろ？」

そう言うのはハセヲ。

雷魔は、ハセヲがバテバテになって倒れた後、手合わせを終了し、最近はハセヲばかりに行かせていた水汲みを済ませた後、ハセヲを起こし、話があると言って、現在に至るわけである。

「ああ」

一方雷魔は、真剣な表情でハセヲを真っ直ぐ見た。

「お前に……真名を預けようと思ってな」

その言葉に、驚きの表情をするハセヲ。

「なんだっていきなり？」

「理由は三つ。俺の予想以上の成長を見せてくれたお礼と、カイトを止めてくれたお礼。そして、前から思っていたことだが、お前の目が澄んでいるからだ」

ハセヲの質問に対しての雷魔の回答に、一瞬目が点になるハセヲだが、次の瞬間には吹き出し大笑いしていた。

「ぶふ！？　ククク……ハハハハハハハハハハ！！」

「なんだよ？なんかおかしなことでも言ったか？」

そのハセヲの大笑いに心外のような表情をする雷魔。

「い、いや……クク……現実にそんな事をいう奴が居るとは思っていなかったからな……ククク」

まだ、笑いが収まらないのか、少し笑いながらも意見を言うハセヲ。

「俺にはわかるんだよ。これまで色んな奴の目を見てきたからな。本当に善行を積んでいる者はお前のように目が澄んでいる。逆に、悪行ばかりしている者は、本当に暗く濁っていて見るに耐えない」

そう自身の体験談を話す雷魔。

その真剣な言葉を聞き、流石にまじめな顔になるハセヲ。

「だからこそ分かる。お前の目はとても澄んでいて、表では色々反発していても根はいい奴だってことがな」

それを聞いて、ハセヲはなんだか恥ずかしくなった。

「だから、預ける。この世界では命よりも大切な真名を」

「……わかった。受け取ろう」

雷魔の真剣な発言を受け、受け取る決心をしたハセヲ。

何より、ここで断れば雷魔の先の発言をないがしろにしたことになる。

それだけは、ハセヲは許せなかった。

「ありがとう。俺の姓は雷、名は魔、字は覇龍、そして、真名は紫電(しでん)だ」

「確かに受け取った。……これまで色々ありがとな。い、一応お礼は言っとくぞ……紫電」

翌日。

いよいよハセヲが別の外史へと帰ることになり、カイトの案内でその外史へと繋がっている場所に向かう一行。

「あ～ぁ、弄れる奴が居なくなるってのはある意味寂しいな」

「やっぱ俺のこと弄ってたのかよお前は!?」

「ハハハ……冗談冗談」

「ハァ……なんか星がここにいるようだ」

そんな会話をしつつ向かっていると。

前方に異様な裂け目と、誰かが立っていた。
その者の姿がはっきり見えるところまで来ると、ハセヲの顔が引きつる。
「ハセヲちゃ～ん。迎えに来たわよ～」
そこには、筋骨隆々で、禿げているのか剃っているのか分からない頭部と、両端に一本ずつ三つ編をして、オネェ言葉でしゃべるおっさんが居た。
「なあ、アレも知り合いか？」
「……ああ。知り合いたくもなかった知り合いだ」
紫電の質問に溜息を吐きながらそういうハセヲ。
「だ～れが、知り合ったその日から悪夢にでも出てきそうなバケモノですって～！？」
「誰もそこまで言ってねぇ！」
ハセヲの言葉が聞こえていたのか、ハセヲの言葉よりも悪化したこと言うおっさんにツッコミを入れるハセヲ。
そんな様子に若干苦笑いをする紫電。
「それで？　こいつは誰なんだ？」

苦笑いしつつも、おっさんの事について聞く紫電。

「ああ。こいつは……」

「んまあ、カッコイイ男の子ねぇ。あなたがハセヲちゃんを助けてくれたの？　だったら、お礼のチッスを……！！」

紫電の質問に対して答えようとしたハセヲの言葉を遮って、いきなり近づいてくるおっさん。

「ちょ！？　やめろ！　俺にはそんな趣味はない！！」

これには流石の紫電も慌てる。

「そんなこと言わずに～！　ンムチュウウ……」

紫電の言葉を無視して、尚も近づいてくるおっさん。

「やめろつってるだろうが！！！！」

ドガアアアア！！！！

「ぶるぅぅぅぁあああああ！！！！！！」

流石に、自身の身の危険が最大域に入ったのか、強烈な右フックをおっさん……もとい、化け物の顎にヒットさせ、化け物は数十メートル吹き飛んだ。

「ハァ……ハァ……で？　あの化け物は誰なんだ？」

まだ、動揺しているのか言葉が乱暴になっている紫電。

「ああ……あいつはな……驚くなよ？」

「なんだよ？　早く言えよ」

もったいぶっていると思ったのか、まだ荒い口調で急かす紫電。

「あいつの名はな……貂蝉（ちょうせん）って言うんだ」

「……は？」

ハセヲの言葉が相当予想外だったのか、少し思考停止する紫電。

「え？　あ？　……はぁ！？」

前世の記憶があるため、その名に対して心底驚く紫電。

「いや、嘘だ……絶対嘘だ……そんなの誰が信じるか……」

紫電はそうぶつぶつとつぶやきだした。

まあ、所謂現実逃避だ。

その後、なんとか紫電を現実に戻し、貂蝉が戻ったところで、本題に入る。

「……というわけで、管理者である私が来る事になって、ハセヲちゃんになにかあったときのためにカイトちゃんを連れてきたわけ」

他にも来たい奴が居たそうだが、流石に幹部クラスだったのでその辺は説得したらしい。

「さて、ハセヲちゃん。そろそろ帰らないといけないんだけど。なにかこの子――雷魔ちゃんに言いたいことはないの？」

その言葉を聞いて、少し考えた後、ハセヲは紫電の方へ向く。

「紫電。短い間だったが色々楽しかったぜ。紫電に色々と教わったこと、向こうでも生かせるように頑張ってみるな」

その言葉に紫電は笑顔になる。

「おう。こっちも色々楽しかったぜ。もう会う事はないだろうが、もし次にあったときは俺の仲間も紹介する。その時もまた一緒に修行とかしような」

紫電がそう言うとハセヲはなんだか照れくさそうな顔をしつつも笑顔になる。

そして、お互いに静かに手を握り合った後、

「「じゃあ、元気で」」

そう同時に言って、ハセヲは帰るために裂け目の中に、紫電はその場から少し後ろに足を向けた。

その様子を見て、若干貂蟬が興奮していたが、紫電に蹴られ裂け目の中に入っていった。

そして、二人は裂け目が閉じられるまで、手を上げ続けていた。

おまけ（白き錬装士側の世界）

裂け目に入りしばらく歩くと明かりが見え、それが段々と大きくなり、次の瞬間には光に包まれた。

そして、光りが収まったと思うと、目の前には見知った連中が立ち並んでいた。

「あ～…え～と……」

いきなりの事で、何を言っていいのか分からなくなったハセヲ。

その様子を見て、目の前の三人は明らかにあきれた表情をして、溜息を吐いた。

「な、なんだよ?」

その三人の様子に若干戸惑うハセヲ。

その質問に頭に人形?を乗せた金髪の少女が答える。

「お兄さん。帰ってきたのなら、まず言う事がありますよね～?」

その少女の発言にハッとなり、苦笑いをするハセヲ。

（そうだな。「帰ってきた」んだからこれを言わないとな）

そう思い、三人の顔を確り見て、

「ただいま。星、風、稟」

「「「おかえり（なさい）主（ハセヲ殿）（お兄さん）」」」

目の前のこの世界に来て初めて出会い、自分のことを主と認めてくれている大事な大事な仲間にハセヲは確りと帰還の報告をした。

おまけ2（紫雷の龍の世界）

裂け目が消えた後の紫電。

「あ～あ。弄り甲斐がある奴だったんだが、まあ、仕方ないか」

そう言って、青く広がった空を見上げる。

すると、遠くから蹄の音が聞こえ、その方向に目を向ける紫電。

そこには、それはもう見事な白馬が立っていた。

その体毛は、白というよりも白銀に近く、目や鬣、それに尻尾は青

い。それにその身体は通常の馬よりも一回りも大きかった。

その馬は、紫電にとって掛け替えのない戦友（とも）であり、大事な仲間（とも）

「『白竜（はくりゅう）』……お前、俺を追いかけてきたのか？」

紫電に『白竜』と呼ばれたその馬は、彼に近づき、鼻をこすりつける。

「そうか……ありがとう」

白銀の錬装士が帰った後、紫電は掛け替えのない友と再会を果たした。

## コラボ話　～～《紫雷の龍》との出会い～～（後書き）

長い話にもかかわらず、ここまで読んでくださりありがとうございます！

リレー執筆で挑戦してみた今回の話、いかがだったでしょうか？
個人的には、いい刺激にもなって満足しています！

んで、いろいろひと段落つきましたから、こっからは本編に集中したいと思います。

次は、第二部　～君願フ道～　が始まるよ～♪
（２５日更新！）

# プロローグ（前書き）

第二部始動！

バババッと進め（すぎ?）ていきますので、よろしければまた私の自己満足にお付き合いください。

# プロローグ

ある街にて。

多くの人々が行きかう路上の一角に、その男はいた。

手入れのされていないボサボサの蒼髪を肩近くまで伸ばし、橙の色眼鏡をかけていて体格もよい。

長らくの旅が続いた結果か、纏っている外套はかなりくたびれていた。

もう少し身だしなみを整えれば周囲の視線を惹けそうなルックスをしているが、男は気にした様子もなく、口を開く。

「世界は……こんなにも色褪せている。知らない者にとっては、どれだけ尊く見えようとも……知っている者からすれば……」

男は道行く人々の顔を眺めながら、どこか痛ましげな顔を浮かべた。

そんな表情を向けられた周囲の者の中には腹をたてる者もいたが、男の放っている不可思議な存在感に気押され、叱責にまで至れない。

よって、訝しげな視線を送るだけにとどめる形で皆去っていく。

いまいち何が言いたいのか判別できない言葉は、ある種の末法思想の信者ではと、不安さえ抱かせていた。

かくいう男には、彼らには見えないモノが視えていた。

身体の中にイメージしている『スイッチ』を切り替えてやれば、ソレはすぐに浮かび上がる。

いつからかは分からない。

気付けば視えるようになったコレのおかげで、男の人生は一変した。

（ああ、世界はこんなにも――――簡単なものだったのだな）

男の目には、道行く人々の身体を駆け巡る力の強さ、方向性、循環するエネルギーの流れが視えていたのだ。

それぞれが光の強さ、色が異なる生命の輝き。

やろうと思えば、その人物のこれまでの人生から、未来の姿まで視ることができる。

無機物は対象外だが、生きているモノならば、その存在を構成するあらゆる要因を理解するまでに至っている。

そんな神様めいた力を与えられた男はといえば、この力を使って何をする訳でもなく、無感動な日々を送ってきた。

己の立ち位置を『観測者』とし、ただ時代の流れの推移を見守るだけの存在だと。

そう考えていた男の時間（じんせい）は、完全に止まっていたといっていいだろう。

――男の独白は続く。

「この世界の行く末など、俺にとっては予定調和の産物でしかない。定められた結果（みらい）を享受するだけのつまらない営み。

その先には、地獄の釜が口を開いて待っているだけだというのに……」

そこまで言って、男は口をつぐんだ。

言うべきことを言い終えた訳ではない。

むしろここからが本番だとでもいうように、男の顔色がよくなっていく。

今の男の顔に浮かんでいる感情は、おそらく歓喜なのだろう。

色眼鏡に覆われた目元はよく分からないが、口元はハッキリとつり上がっていた。

「それでもだ、天は一人の男を遣わせた。世界（ほし）の記録には存在しない、俺にも読みとれない男を！

この数奇に感謝する。よくぞ現れた、白き錬装士よ！　ゆえに、今こそ俺は『観測者』にとどまらず、俺が望む未来を掴むために行動しよう！　だからこそ……強くなれ、ハセヲ」

悠然と宣言する。

思い出すのは、反董卓連合戦の際に目にした少年。

遠目にも惹きつけられてやまなかった、瞳に宿る彼の意志が。
――男の止まっていた時間を、再び動かそうとしていた。

「――ん？」

誰かに呼ばれたような気がしてハセヲは振り返った。
目につくのは、間もなく始まる戦闘に備えて展開している天遣隊の面々。
旅団を解散してなお、自分に付き合ってくれるお人よしの集まりだ。
普段は何かと絡んでくる隊員たちも、さすがに今はケジメをつけてハセヲの指示を直立不動で待っていた。

「どうかしたのか、ハセヲ？」

そう尋ねてきたのは、副長である星。
この世界にハセヲが訪れてから、ずっと行動を共にしている大切な仲間。
こちらを覗きこむように近づかせた星の整った顔に焦りを覚えながら、ハセヲは口を開く。

「いや、誰かに呼ばれたような気がしたんだけどな。気のせいだったみたいだ」

「……そうか。まるでうずくまっていた迷い子が、母親に声をかけられた時のような顔をしていたが？」

「何だよ、そりゃあ……」

どこか面白くなさそうな反応を返す星。

それに対するハセヲの反応も、普段の勢いがない。

少しは的を射ていたということだろうか。

何にしても、これから戦闘が始まるという割には緊張感のないトップの二人だった。

「……コホン、本来私が言うべきことではないとわきまえてはいるのですが。しかしながら、そんな様を晒していては兵の士気を下げてしまうのではありませんか？」

近くに稟がいれば言っていたであろうセリフを放ったのは、新たに天遣隊に配属されてこれが初陣となる人物だった。

長い黒髪をサイドポニーにしており、普段は可憐な顔が、眉間に寄せているシワのせいで今は少し怖い。

全体的に引き締まった体つきをしているが、出るところは出ている女性らしい身体。

だというのに、右手に握られている『青龍偃月刀』が、彼女が並は

ずれた戦闘力の持ち主であることに疑問を挟ませなかった。

「問題ないぞ、愛紗よ。この程度で士気が下がるような調錬は行っておらんし、力の入れどころと抜きどころの判別もできているのだ。お主こそ、もう少し肩の力を抜いてはどうだ？」

「……兵を信頼しているのは結構ですが、だからといって不相応な態度をとっていいわけでありませんよ、星殿。

貴女はもう少し自分の立場というものをですね……」

諭すように説教モードに入る女性。

彼女こそ、三国志にその名を轟かす『武神・関雲長』

色々あって――一時的な措置ではあるが――天遣隊に籍を移している、元劉備軍一の将である。

その義に篤き精神は、唯一の主君から離れたとあっても健在である。

今はハセヲを仮の主として認め、ひいては曹魏の一員として力を振るっているのだ。

いつの日か、主君のもとに戻ることを誓って。

――しかしながら、肝心の星は当然というか素直に聞き入れるつもりはないようだった。

「うーむ、立場的には仕方ないとはいえ、その言葉使いで窘（たしな）められると上司に嫌みを言う臣下のようにしか見えんな」

「嫌みではなくて、忠言です！！　その言い方の方がトゲがあるよ

うに聞こえますよ！」

「……そこまでにしとけよ。関羽も星相手にあんまり熱くなりすぎんな。むしろ、その方が手玉にとられるぞ」

この辺が頃合いかと、割って入るハセヲ。

さすがにハセヲもこの後に控えている大戦を前に、気を抜き過ぎるつもりはない。

それが分かっているのだろう関羽も、ここで騒ぎたてては本末転倒かと引き下がってくれた。

星はニヤニヤした笑みを隠そうとはしなかったが、口出しする気はないようである。

――”北方の雄”袁紹動く。

そこから動き出した情勢の変化の末、曹魏は袁紹と袁術という二大勢力との決戦を迎えていた。

官渡に集結した大軍を迎え撃つべく、布陣したハセヲたちの眼前では曹操と袁紹の舌戦が行われていた。

お互いに青スジを浮かべ、痺れを切らしたかのように攻撃の合図を送る袁紹に合わせ、曹操からも合図が出る。

結果――

「……スゲーな。あれが秘密兵器か」

袁紹陣営が用意していた移動式物見櫓を、真桜が開発していたという投石機が次々に破壊していく。

ここに、闘いの火ぶたは切って落とされた。

重ねるように、曹操から激励と攻撃開始の声が届く。

「それじゃあ行くとするか」

そう言ってハセヲは、右手を軽く掲げる。

途端、細かな光の粒子が右手に集束していき、大仰な鎌の形をとって収まった。

銘を”死出鎌・観音掌”。

とある出来事の際、かつての仲間から譲り受けた強力な武器である。

刃渡りは2m近くあり、切っ先はまるで釣り針のように反り返っているのが特徴の大鎌だ。

しかし、実戦においては敵に対して刃を当てにくく、広範囲を薙ぎ払うのには不向きと言える武器であろう。

――ところが、試しに扱ってみたところ、この形状がハセヲにとって助かるものだということが判明したのだ。

刃に巻き込まないように注意して振るえば――ようするに棍棒扱い――、命を奪うまでには至らないからである。

それでも、薙ぎ払うだけで十分致命的な威力は出るのだが、常時発動している”武器スキル”が、そこを補っていた。

『ダイイング』

ヒットした相手のＨＰを強制的に半減させるという効果により、それ以上のダメージは与えられないのだ。

といっても、重量兵器である大鎌の衝撃までは消せないため、まともに食らえば吹き飛ばされた先で暫く身動きすらできないだろう。

――というわけで。

衆生を救うとされる菩薩の名を刻まれた大鎌は、曹操へと受け継がれた憑神器（ロストウェポン）”万死ヲ刻ム影”に代わって、ハセヲの主武装となっていた。

「いいか、人間はいつか必ず死ぬ。ここで未練残して死んだって、数十年後に寿命で死んだって、結果としてみりゃ同じことだ。だとしたら、いつ死のうが長い目で見りゃ、そんなに変わらないのかもしれねえ」

ハセヲは戦端を開いた最前線を見つめながら淡々と言う。

言っていることは分からないでもないが、これから命がけの戦場に向かうにあたっては不謹慎なことだと関羽は思った。

自分が想っているハセヲが言うような言葉ではないと思いながら――だからこそ、そんな言葉を聞きたくなかったと声をあげようと

したところで、

「……！？」

今度は真剣な表情を崩さない星に手を引かれ、踏みとどまった。

そこで再び視線を戻した関羽が見たのは、空いていた左手でつくった握りこぶしを震わせるハセヲだった。

「じゃあよ、いつ死んでも同じだってんなら――――”だからこそ”、俺たちはいつだって死に抗ってなきゃならねえんだ！　それを肝に銘じとけ！　俺はこんなとこで死ぬつもりはねえし、無駄にお前らを死なせるつもりもねえ！！」

「「「オオオォォォーーー！！」」」

一丸となった隊員たちの想いが――――ハセヲの突き離しているように見えて気をかけている想いに触発されて――――雄叫びとなって大気を震わせる。

かくいう関羽も、その身を震わせていた。

己が浅慮さからくる恥ずかしさと。

それ以上の嬉しさをもって。

（――――ああ、それでこそ、私が……人だ）

内心で再認識を終えた関羽は、ドンと柄を大地に打ち付け、真っすぐにハセヲを見つめる。

その姿を、その声を、その想いをしっかりと受け止めるべく。

「なら続きやがれ！　俺たちは、こんなところで終わるわけにはいかねーんだっ！！」

その言葉で堰をきったように、彼らは死地に飛び込んでゆく。

星の槍捌きが敵の突撃を受け止め、その場に足をとめさせれば。
ハセヲの薙ぎ払いが、関羽の剛撃が、並みいる敵を吹き飛ばし。
風と稟が指揮する隊員たちの連携をもって、包囲殲滅していく。

確かな志を胸に、自分が望む世界を手に入れるために戦う彼らの姿は――――人間の可能性（つよさ）の証明に足る、鮮烈なものであった。

今日もまた、大陸では力ある者同士がぶつかり合い、多くの命を散らしていく。

その先に待ち受けるのは、救いか、それとも――――

## プロローグ（後書き）

次の更新は、今月中には行います！

キーワードは『覚悟』と『開眼』です！！

## 碑文適格者についての設定

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．における、それぞれの適格者のロストウェポンの紹介（一部改変あり）です。

開眼することによって、武器の付属スキルが効果を発揮するとともに、身体能力も向上するようになります。

また、憑神も使えるようになるのですが、認知外空間内でないと使用不可という設定にしています。

さらに、小説版の設定である『感覚強化（独自設定あり）』も加えております。

第一相　『死の恐怖・スケィス』

適格者：華琳　未開眼

大鎌『万死ヲ刻ム影』

スキル：砕魂ノ凶手・改

通常攻撃ヒット時に、与えたダメージの７５％をＨＰに、３５％をＳＰに吸収する。

『肉体強化』

喰らった碑文（ちから）に応じて、攻撃力が強化される。

第二相　『惑乱の蜃気楼・イニス』

適格者：不明

呪杖『陽炎ト踊ル巫女』

スキル『幻惑ノ旋律・改』
　通常攻撃ヒット時に、ダメージ値の５０％を自分のＳＰとして吸収し、アーツ以外でスペルを中断されなくなる。

『聴覚強化』
　聴力が強化される。

第三相　『増殖・メイガス』

適格者：星　開眼済み

重槍『静カナル翠ノ楽園』

スキル『深緑ノ恩恵・改』
　クリティカル発生確率５０％アップ、及びアーツによるダメージを７５％アップする。

『視覚強化』
　動体視力が強化される。

第四相　『運命の預言者・フィドヘル』

適格者：不明

妖扇『其ハ声ヲ預カル聖者』

スキル『不壊の涅槃・改』
　通常攻撃ヒット時に、バッドステータス・混乱を与え、弱点属性の追加ダメージを与える。

『第六感強化』
　自由には扱えないが、数秒先から数日先の未来を視ることが可能。数秒後に限定すれば、任意発動可。

第五相　『策謀家・ゴレ』

適格者：不明

魔典『尽キヌ螺旋ノ業縁』

スキル『無尽ノ機略・改』
　攻撃スペルのエレメンタルヒット発生確率５０％アップ及び攻撃スペルの威力が７５％アップする。

『味覚強化』

味覚が強化される。

第六相　『誘惑の恋人・マハ』

適格者：不明

刀剣『魅惑スル薔薇ノ雫』

スキル『魅惑ノ微笑・改』
通常攻撃ヒット時にバッドステータス・魅了を与え、味方の戦意を大幅に高揚させる。

『触覚強化』
相手の攻撃の感触（気配）を感じることができる。

第七相　『復讐するもの・タルヴォス』

適格者：雪蓮　未開眼

拳当『緋ニ染マル光翼』

スキル『無垢ノ報復・改』
通常攻撃ヒット時に、バッドステータス・マヒを与え、かつクリティカル発生確率を５０％アップする。

『嗅覚強化』

嗅覚が強化される。

第八相　『再誕・コルベニク』

適格者：？？　開眼済み

銃剣『来タリシ転生ノ刻』

スキル『無窮ノ輪廻・改』
　これまでに倒した敵の数に応じて、身体能力が向上する。

『精神強化』
　揺るぎない鋼の精神を維持でき、集中力が強化される。

これくらいですね。
今は不明な人たちも、第二部の中で明らかになります。

中々のチート具合ですが、あまり作品内ではお披露目されない（え！？）かも。

## 碑文適格者についての設定（後書き）

次の更新は、早くて明日！？

遅くても３０日には更新しますので、よろしくお願いします！！

# 第1話（前書き）

今回の話は原作でいうと8章あたり。
プロローグの少し前の話になります。

楽しんでいただけたら幸いです。

# 第1話

「甘えるのもいい加減になさい！！」

肺を満たしていた空気を一気に空にするような勢いで放たれた、華琳の怒声。

小柄であっても、数万の兵を束ねる座につく彼女がもつ声量は、自身の存在感と相まって凄まじいものがある。

それを至近距離で受けた少女は、頼れる軍師である少女に向けていた祈るような面持ちに驚愕を刻んで振り返った。

「たった一人の将のために、全軍を犠牲にするですって？　寝ぼけた物言いも大概にすることね！」

「で……でも、愛紗ちゃんはそれだけ大事な人なんです！」

「なら、そのために他の将……張飛や諸葛亮、そして生き残った兵が死んでもいいというの！？」

「だから今、朱里ちゃんに何とかなりそうな経路の策定を……！」

「それがないから、私の領を抜けようなんて暴挙を思いついたのでしょう？　……違うかしら？」

疑問の形をとってはいるが、華琳の眼差しにこもる力は否定などあり得ないと物語っていた。

事実、問われた少女――朱里は返事を返すことができなかった。

そこへダメ押しのように、華琳から質問された内容に答えた稟の言葉が、普段は愛らしい少女――桃香の表情を暗く染め上げていく。

（……通してやりゃーいいとは思うが、周りの状況がそれを許さねえか。時代が時代だしな。にしても、えらく追い込むような口ぶりだな、華琳のやつ。何か狙いがあるのか……？）

華琳によって苦渋の選択を迫られている桃香の様子を、ハセヲは複雑な思いを抱えながら見守るのだった。

キッカケは、仕事を終え、眠りにつこうとしていたハセヲたちに急遽かかった召集だった。

疲れた体をおして向かった先で、ハセヲは懐かしい人物と顔をあわせることになる。

共に戦ったこともある、劉備の大切な義妹にして抜きん出た実力をもつ関羽が、使者として華琳の城を訪れていたのだ。

「……私は、曹操殿の領地の通行許可を求めに参りました」

再会を喜ぶ間もなく、心苦しげに関羽が切り出した内容は、ハセヲたちを大いに驚かせた。

北を袁紹、南を袁術に挟まれ、東を海に覆われ、西を華琳と接して

いる桃香たち。

この状況で、袁紹、袁術から攻撃を受けることになった桃香たちにそれを捌ききる力はなかった。

だからといって降伏する気もない桃香が思いついたのが、『華琳の領地を横断し、西へ脱出する』というものだったのだ。

この要求が通れば、桃香の願い――――誰も死なせたくない――――は成就する。

とはいえ、今は黄巾や連合戦の時とは違い、同盟を結んでいるわけではない。

そんな中でこの要求を通そうというのだから、相応の対価が求められるだろうことは想像できそうなものであったが――――

「通行料は……そうね、関羽でいいわ」

「……え？」

話が上手く纏まりそうだったところに投げかけられた言葉に、桃香の思考は凍りついた。

目の前には、何を驚いているのかといった感じで、澄ました表情の華琳がいる。

対する自分は、言われた言葉の意味は理解できるが、なぜそんなことを言われるのかといった心地だった。

血の気が引いていくように、顔が青白くなっていく。

（……ふん）

そして、ここにきて黙って様子を見守っていたハセヲは、華琳の迷いのない判断の理由に気がついた。

つい、と視線を横に移せば、こうなることも予想していたのか、拳と口元を引き締めて桃香を見つめている関羽が見て取れる。

（なるほどな、そういう腹づもりだったわけかよ……）

タダで何とかなるとは、さすがに桃香も思っていなかっただろう。

しかしながら、その対価は彼女にとって決して容認できないものだった。

誰も失いたくないからと、思い立った行動だったのだから。

――だからといって、もはや桃香が選べる選択肢は限られている。

関羽を通行料に、他の者全員の命を救うか。

望みの薄い強行軍に、天運を委ねるか。

「「「……」」」

重苦しい沈黙が続く。

関羽が、張飛が、諸葛亮が。

この場の誰もが桃香が口を開くのを待っていたが、彼女はどうしようもない思考の迷宮に迷い込んでいた。

（――愛紗ちゃんを失いたくない）

（――だからって他の人たちを切り捨てるなんてできない）

どちらもが、桃香の切なる願いだった。

自身の理想に共感し、同じ道を歩んでくれる大切な仲間たち。

その全てに手を伸ばし、この状況を打破できる方法はないのか？

（――どうしようもねえよな。なら俺にできることは……）

何も選べないでいる桃香を見かねたハセヲは、もたれていた天幕から背中を離し、桃香に向かって歩き出した。

痛みすら感じれそうな沈黙のなか、動き出したハセヲに注目が集まる。

それらを気にかけず、ハセヲは華琳に『少しいいか？』と目で問いかけた。

何を思ったのか、微笑すら浮かべて頷いた華琳に手をあげて礼を返し、ハセヲは桃香と正対した。

天幕に入った時に重なってから合うことがなかった、二人の視線が交錯する。

力はないが、視線を外すことなく桃香はハセヲを見つめていた。

その出で立ちが、真名を受け取った際に感じられた儚さとダブって見え、ハセヲの口を重くする。

（出来ることなら力になってやりてえ……と思う。だが、今の俺は……）

もしも今のハセヲが集団に属することなく、一人身であったのなら桃香の力になっていたかもしれない。

だが、現実としてハセヲは一軍の長であり、その軍も華琳の下に属している形式になっている。

ならば、自分のせいで周りに迷惑をかけるわけにはいかなかった。

今の自分にとって護りたい者は一人ではないし、力ある者としての責任も果たさねばならないのだから。

だからこそ、今の自分にできることは、これくらいしか思いつかなかった。

「桃……劉備。お前は言ったな、誰もが笑っていられる世界をつくりたいってよ」

「うん……あ、はい」

自身の原点となっている想いを口に出され、弱々しかった瞳に力が戻ってくる。

それを認め、言葉に力をのせる。
彼女のためになることを願いながら。

「口ばっかで何もしてねー奴らがいるなか、どれだけその願いが困難なものだろうと、頑張ってるお前はスゲーと思う。だから、より辛いんだよな。現実は、そう簡単なモンじゃねーってことが」

「……っ」

ハセヲの言葉に軽く息をのんだ桃香は、交錯していた視線を少し下げてしまう。

それでも完全に視線を外そうとはしないあたり、桃香は完全に諦めているわけではないようだ。

（……ああ、そうでなくちゃな）

どれだけ困難な道であるかを知っていたとしても貫きたい想いをもっている者を、ハセヲは嫌いになれなかった。

だから伝えたいと思うのだ。

この世界に来て感じるようになったことを。
見果てぬ夢を追う、底抜けの優しさを持つ、この友人に。

「この世界には、理不尽な死がありふれてやがる。だが、それを何とかしようとしている奴らだっているんだ。お前の信念とは少し違った道を進んでいるとしても、それでも目指すべき未来は一緒な奴らがな。

つまりだ。分かってるとは思うが、その苦しみはお前だけが抱え

ているものじゃねーんだ。俺も、この乱世に生きる奴全てが、大なり小なり感じてることなんだよ」

桃香も、華琳も、きっと孫策も一緒だろうとハセヲは思う。

それぞれが信念を抱いて行動している点でいえば、大差はない。

あとは、どれだけ『覚悟ができているかという差』だとハセヲは感じていた。

揺れる桃香の視線を受け止め、ハセヲはここで畳みかけるように言葉を繋ぐ。

「だけどよ、いつの日か……未来はきっと良くなる。そう信じて頑張ることは、間違ってなんかねえよ。　だからな、中々上手くいかなくても、落ち込んでる暇があったら無駄なことやってるわけじゃねえって、開き直ってでも笑っとけ。

　お前に元気があれば、それだけで頑張れる奴だっているんだからよ」

「「「……」」」

そう言って意味ありげに視線を流したハセヲにつられ、桃香も視線を横に向けた。

その先には、不敵な笑みで、満面な笑みで、はにかんだような笑みで自分を見つめてくれている仲間の姿が。

その光景に、お互い良い仲間に恵まれたよな、とハセヲは思う。

ずいぶん偉そうなことを言ってきたが、ハセヲもこの世界で一人のままだったなら、襲いかかる『死の恐怖』または命のやり取りに関しての『葛藤』で心が潰れていたかもしれないのだ。

――自分たちは、独りではない。

ゆえに、この現状を大切にして行動するなら”もう二つ”伝えなければならないことがある。

再び桃香に視線を戻したハセヲは、表情と呼吸に力が戻ってきた桃香を見つめながら、その名を呼んだ。

かつて自分が受けた言葉を――少し意味合いは異なるが――この世界で自分なりに学びとった言葉にのせて伝えるために。

「そして、なかにはこういった事態に際し、お前は立場ある者として、その責任を負わなけりゃならねえ。これだけは、避けて通れねえ道だ。

だから、常に覚悟するんだ――大切な者を『失う覚悟』を」

「……そんな」

身体を震わせ、絶望めいた表情を浮かべる桃香。

彼女にとっては、死刑宣告を受けたような心地だったのかもしれない。

再び沈んでいこうとしている桃香を、そうはさせないとゆり起すかのように、ハセヲは言葉に力をこめる。

「失うことを恐れるだけじゃ駄目だ。いいか、これからも理想を追い求めたいんなら、失う悲しみも恐れも呑みこんで……それでも進み続けてみせろ！　そうすれば、きっと本当の意味でお前は手に入れられるはずだ。

大切な者を――――『護る覚悟』を」

「あ……」

そこで弾かれたように顔をあげた桃香の瞳には、微かな光が灯っていた。

ついで、再び視線を関羽たちに向け、何かを再確認しているかのようにしばらく見つめる。

そして目線を下げた先――――胸元に両拳を寄せた。

始めは両の手の平を添えるように。

そして、徐々に握りしめていき、最後は祈りを捧げる聖女のように。

何かを噛みしめているかのような時間が流れ――――

再び顔をあげた桃香の顔には、悲壮さが感じられるほどの決意が浮かんでいた。

それと同時に、全身から『紫紺』に輝くオーラのようなものが溢れだす。

「「「――――！？」」」

その場にいた者たち全てが、異質な気配を身に包む桃香を見て息を

飲んだ。

関羽は桃香の身に何が起こったのかと、春蘭は華琳を守ろうと動き出そうとしたが、いち早く我に返ったハセヲが手を振って制止を呼び掛ける。

何とか動きを収めてくれた二人――春蘭は華琳からの追い打ちがあって――に感謝しつつ、ハセヲは唇の端に微笑を刻み、その様子を見守った。

もう自分から言うべきことはなかったし、あとはどんな選択をしようと桃香の意志を尊重しようと思ったのだ。

――ハセヲの前にいるのは、もう途方に暮れていた少女ではないのだから。

「――愛紗ちゃん」

「はっ！」

桃香の呼びかけに関羽は打てば響くように反応し、跪く。

見上げた顔には悲しみを滲ませつつも、力ある目が輝いている。

「今から酷いこと言うね、恨んでくれていいから」

「何を仰います!?　桃香様がそこまで悩み抜いた末の決断なのです。貴女の一の臣として、義妹として、何でも果たしてみせましょう！」

関羽の言葉を受け、桃香が纏っているオーラが更に密度を上げていく。

そこにはもう、何もできずに護られているだけの少女の姿はなかった。

指導者としての務めを、背負うべき覚悟の意味を知った英傑の――――敬愛する義姉の視線を、関羽は誇らしげに受け止める。

「私たちが無事に脱出するために、曹操さんのところへ行ってほしいの。――――けどっ、これでサヨナラなんかじゃない！！　私は諦めない！　必ず貴女を取り戻すためにここに戻ってくる！！」

桃香自身の言葉でハッキリと告げられた、別れの言葉。

しかし、〝そのうえ〟で、桃香は義妹を取り戻すことをも誓約として捧げた。

劉備（じぶん）が桃香（じぶん）であるために、これだけは譲れないと桃香は心を震わせる。

そして――――その想いに応える碑文（モノ）があった。

「これは……？」

纏っていたオーラが桃香の眼前に収縮し、弾けた場所に現れた一振りの刀剣。

不可思議な圧力を放ち、宙に浮いたまま静止しているそれは――――

サーベルを彷彿とさせるフォルム。
バラを思わせる、紫色の刃に刻まれた波紋。
刃の中ほどで半円型に湾曲している部分から展開された、水晶のような四本の光刃。

――切れ味の鋭さを窺わせる細身の刀身をもち、手に持つ者の格を底上げするかのような、神秘的な刀剣であった。

（……桃香は第六相、か。どうやら開眼できたみてえだな）

華琳や雪蓮の時とは違い、換装された憑神器（ロストウェポン）には視認できるほどの力が満ちているようである。

際限なく高まっていくエネルギーが逆りとなって、静電気が弾けるような音すらあげていた。

いきなり具現した刀剣に桃香は目をみはりながらも、ハセヲの無言の頷きに背を押され、真剣な面持ちで刀剣を手に取った。

「――っつぁ！？」

その瞬間、再び全身から紫紺のオーラが溢れ出した。
ここにきて初めて、身体が焼けるほどの熱さを感じ取った桃香の表情が微かに歪む。

しかし、ナニカを刻むように全身を奔った熱は、すぐに冷めていく。

同時に、自身の精神の奥底に”ナニカ”が居座りついたかのような鼓動を感じたが、桃香は不思議と嫌悪感を感じなかった。

（この力は、〝今〟の私を害するモノじゃない。なら、使いこなすことで皆の力になれる！）

まるで、ずっとそこにあったかのように馴染む感覚を受け入れ――――自らの力とする。

桃香が新たな決意を迎えたところで、『魅惑スル薔薇ノ雫』は光の粒子となって消えていった。

「今のが、前に渡した天の世界の武器――――『魅惑スル薔薇ノ雫』だ。頭の中で念じれば、いつでも取り出せる。あとで、じっくり試してみるんだな」

ハセヲは、これほど状況が動いたというのに比較的落ち着いている様子の桃香に内心驚きながらも声をかけた。

桃香は、まだ実感が湧かないのか、先ほどまで握っていた手を確かめるように見つめていたが、ふと視線を横に向ける。

まだ返事を聞いていなかった関羽の方へと。

桃香の誓約（けつい）の現れである揺るがぬ視線を真っ向から受け止め、関羽は黙って拝礼をもって応えた。

正直、悲しくないといえば嘘になる。それでも――――

（今回の件で、桃香様は一つ殻を破られた。その代償と思えば、安いものだろう）

こう思える気持ちにも偽りはなかった。

それに彼女は言ったのだ。
必ず迎えに来る、と。

だから、ここは笑顔で別れるべきだと関羽は思った。
そこで浮かべた笑みの意図を汲んだのか、桃香も笑顔を返してくれる。

少し無理があったものの、関羽が力になりたいと思うに至った変わらない笑顔がそこにはあった。

（さて――――）

そこまでを見届けたところで、自分の出る幕はもうないと悟ったハセヲは踵（きびす）を返し、天幕の外へと向かう。

「――――ハセヲさん」

これまでに込められてきた想いとは少し異なる響きを含ませ、今日初めて桃香から呼ばれた自分の名前。

振り返ることなく、動きだけを止めて待つ。

「ありがとうございます。それと――――私はまだ諦めてませんから」

静かな、されど強い思いの込められた桃香の言葉に対し、ハセヲは無言を貫いた。

礼を言われる必要も、その件については答えは決まっているために

返事をする必要もないと感じたからである。

加えて、ハセヲは確信していた。

そう遠くない未来、必ず桃香と何らかの形で戦うことになる、と。

その時こそ、全力で自分の想いをぶつけてやればいいと思いつつ――ハセヲは背中に感じる視線の強さに苦笑を零した。

予想以上の結果が出たことで、つい桃香とかつての自分を比較しながらも、歩みを再開。

振り返ることなく、今度こそ天幕の外へと出ていく。

――脳裏によぎるは、まだ自分が碑文に目覚めて間もない頃。

目的を叶えるために憑神（アバター）の力を使うことを躊躇わなくなりつつあったハセヲを危惧した”ある男”が、戦いを挑んできた。

立ちはだかる者には容赦をしなかったハセヲは、力の意味を考えることなく碑文の力を解き放ち――結果、暴走させてしまう。

その際にスケィスにズタボロにされながらも男が身をもって教えてくれたのが、力ある者が持つべき『二つの覚悟』だった。

先ほど桃香にも語った言葉は、ハセヲ自身の心を救い、精神をも大きく成長させたのだ。

そして、あの時は傷つけることしかできなかった自分が、今はこうして誰かの道を切り拓く手伝いができている。

この事実がハセヲの心中を、その時の仲間（おとこ）への感謝でいっぱいにさせた。

（アンタが教えてくれたことは、こっちでも一人の女の助けになったぜ、クーン……！）

――自分を必要としてくれるハセヲのために力を振るい、そのなかで徐々に心を成長させていった男の憑神器（ロストウェポン）は、この外史においては桃香の手に渡る。願わくば、自らの居場所（りそう）を求める彼女の未来が明るいものになることを――

ハセヲ　ｓｉｄｅ

外に出て、俺は空を仰いでいた。

何となく天幕を後にしてしまったが、特に何かしなければならない訳でもない。

かといって、勝手に帰るのもマズいということは分かっていた。

幸いというか、周囲に控えている桃香の兵たちは俺のことを覚えてくれていたようで、警戒の度合いはきつくない。

おかげさまで、気楽に空を見上げるくらいしか思いつかなかったわけだ。

最近は忙しかったため、あまり見上げていなかった――僅かに欠けた、真円に近い白き月が輝く空を見つめ続ける。

少し火照っていた身体を落ち着かせられる、柔らかな時間が流れ――新たな来客を告げる足音が届いたところで視線を下ろした。

まるでスポットライトのように輝く月光が照らす道を、ソイツはゆっくりと進んでくる。

美しく降りそそぐ月光の中であっても、見栄え負けしない鮮烈さを誇る黄金の髪を揺らし、やって来たのは俺の主――華琳だ。

供はつけずに一人のようだが、首筋に突き刺さるような視線を感じることから春蘭がどこからか様子を窺っていると俺は当たりをつけ、軽く息を吐く。

対する華琳は、いたく機嫌が良いようだった。

桃香を鼻で笑っていた時のような険のある笑みではなく、何か面白いことでもあったかのような楽しげな笑み。

月明かりの祝福を受け、浮かび上がったその姿はまるで魔性のような艶やかさを放っているかのよう。

「……ねぇ……たら！」

これでもう少し可愛げがあれば、な……

「ハセヲ！　聞いているのかしら!?」

「……ワリイ、少し気ぃ抜いてた。それで、あれからどうなったんだ?」

少し低いところから声がしたと思えば、いつの間にか華琳が随分と近づいていたようだった。

こちらを見上げるような視線が、先ほどまで感じていた美しさを想起させ、少しばかり焦る。

なるべく慌てずに距離をとり、再び火照ってしまった身体を落ち着かせる時間稼ぎにと、結局あれからどうなったのか尋ねてみた。

「約束通り、劉備たちは関羽を通行料に我が領を抜けて行くことになったわ。霞と稟に案内を任せたけど、よかったわよね」

「ああ、構わねえよ。それが適任だったろうしな」

「ええ。そして、関羽だけど……次に劉備たちが魏（ここ）を攻めてくる時まで働いてもらうことになったわ」

「へぇ……って、はあ!?　……あ～、まぁいいけどよ」

「もともと通行料がなくても通す気はあったのよ。それはそれで、こちらにも利はあったもの」

「だったら、俺は余計なことを……いや、そん時は止めてただろうな。なら、これはこれで良かったわけか?」

「ええ。今の劉備の雰囲気は、さっきまでとは雲泥の差。これで俄然おもしろくなったわ」

「何が？」とは聞かなくても、ここまでの話の流れで大体想像はついた。

ようするに、華琳が必要以上に桃香を責め立ててたのは、桃香の背中を引っ叩いてやるようなもんだったんだろう。

桂花も桃香を警戒していたように、華琳が往く先に必ず桃香は立ちはだかってくる。

そして今の桃香は、華琳のお眼鏡にかなった倒すべき敵に認定されているようだ。

今も、俺から少し視線を外して何かを考えている。

おそらく、別れ際に何か言われたんだろう。

その時の様子を思い出しているらしい華琳は、本当に愉しそうだ。

（倒すべき敵が強ければ強いほど、倒した自分の土台となるってか。それでも限度があるだろうによ）

関羽を引き合いに出すくらいだから、それなりに執着してるんだろと思いきや、そんなタイミングで返す華琳が少し無謀にすら思えた。

桃香にしたら、攻め込めば関羽が帰ってきて最高の状態で戦えるわけだ。

そのうえで勝つ気満々そうなのは、俺には予想もつかない考えがあるからなのか。

そう考えると、相手からすれば不気味なほど誘いまくってるとしか思えない約束だが――それでも桃香は必ずやってくるだろう。

（まあ、どうなろうと俺は俺がやるべきことをやるだけだ）

日常（すべて）を取り戻すまでは、誰が立ちふさがろうと踏み越えていく――そう決めた。

それまでは、この主の力になるとも決めてるんだが……

「何だよ？」

さらに笑みを深めて俺を見つめてくる華琳の視線が気になった。

その瞳は、俺も気が付いていない想いすら暴きだしそうだと思えるほど澄んでいる。

状況も忘れ、思わず見とれそうになった俺の耳を、華琳の瞳同様に澄んだ声がうつ。

「ねえ、ハセヲ……一つ教えてちょうだい。今日、貴方が助けたかったのは私？　それとも――」

「……」

思いもよらなかった質問に、俺は何を言っているのか分からないといった感じで、大きく目をみはった。

頭はすぐに理解を知らせてきたが、心の処理が少々追いついていない。

変わらず視線を向けてきている華琳は、そこから先を声には出さなかった。

それでも、誰のことを言いたいのかは、状況的に一人しか思いつかない。

（今度は俺を追いこむつもり、か？　でも、何のために？　とはいえ、不安になったから聞いてみたなんて、コイツのキャラじゃねえし……）

色々考えてしまったが、当の華琳はといえば、そんな俺の姿さえ楽しんでいるかのように笑みを崩していない。

それを見て、俺は余計な考えを捨てた。

華琳の意図が何であろうと、俺は自分の想いのままに動くと決めたんだから。

それを伝えるべく、一歩を踏み出した。

華琳の真横に立ち、右手を動かすと同時に答えを返す。

「――俺は”ここ”にいる。これじゃ答えにはならねえか？」

華琳の頭に右手を下ろし、少し力を入れて撫でてみた。

撫でるたびに鼻に届く甘い香りと、指にかかる柔らかな髪の感触が心地いい。

とはいえ――

「気安く触らないでくれるかしら」

一転、冷たい声を響かせて手は払いのけられ、華琳は前進を開始。

真横に立っていた俺とすれ違う形で、歩き去っていく。

軽く仕返しの意図を込めたうえでの行動だったんだが、お茶を濁したかのように思われただけだったのかもな。

それでも言った言葉に嘘はないんだが――対応マズッたか？

ところが、てっきり立ち去ると思っていた華琳は、俺から５ｍほど距離をとったところで立ち止まった。

振り返りはしねえから表情は読めねえが、大きく息を吐いたのは分かる。

少し肩が下がっているあたり、そんなに呆れられたんだろうか？

「なあ、華「これから忙しくなるわよ、ハセヲ。しっかりと励むことね」……了解」

そう言って歩みを再開した華琳。

その背中は、全てを手に入れた勝者の貫録を放っているようだった。

もはや止まる様子も、振り返る様子もなさそうな後ろ姿をしばらく眺める――だけではすまなさそうだと、俺は慌てて華琳のあとを

追う。

（……さっさと付いていけってか）

さっき華琳の頭を撫でたあたりから、首筋に感じる圧力が強くなってきていることには気付いていた。

振り返ってみれば、俺を空気読めてねえ奴とでも言いたげな視線で睨んできている春蘭の姿が。

「お前にそんな目で見られたくない！」と声を大にして叫びたいのを我慢しつつ――普段より歩みの速い華琳に気付いた俺は、少し歩くスピードを上げてついていった。

ハセヲ　ｓｉｄｅ　了

## 第1話（後書き）

G．U．でも印象深かった言葉。
完全再現は不可能でしたが、これはどこかで使いたかったので、満足しております。

さて、次回更新は未定ですが、キーワードは日常と受難です。

実は現在、残りの夏休みを満喫すべく電車に揺られて九州に向かっているところでして♪

9月からは仕事も本格始動ですから……まあ10日くらいかかるかなぁ？

# 第2話（前書き）

何だか随分久しぶりな気がする……ってそうですよね、もう前に投稿してから一月近く経ってるし。

うん、何かもう言い訳する気もおきません。申し訳ありませんです！！

加えて今回の内容も……関羽ファンに怒られるかもですし。

すみません、本当はこんなに××な人ではないのですが、あるネタと絡ませたかったから、こーなりました（汗）

それと、９０００００ＰＶ達成なのです！！　大台が見えてきたっ！？

# 第2話

努力に勝る才能はない――だなんて言葉は、この外史においては綺麗事だった。

凡人がいくら努力しようとも、彼女たちが放つ輝きの前には相手にもならない。

それでも、やらなければならないことがあるならと努力し続ける気概ある者もおり、十分な高みに到達はできるのだが……彼女たちの境地にまでは至れないのだから。

とはいえ、彼女たちだって当然厳しい修練を積んでいる。

しかし、最後の最後では『才能の差』がハッキリと実力の程を思い知らせるのだ。

――強い力は強い想いをもって、初めて真の強さとなりえる。

そう信じて、己の存在意義を懸けた精進を目指し続ける彼女たちだからこその結果なのかもしれない。

まあその反面、他の事においては並み以下の結果しか出せない者も多かったのだが――彼女もまた、そんな一人だった。

「今回こそ自信作です、ハセヲ殿！　ぜひ、ご賞味ください！！」

（確かに、前回よかマシそうだけどよ……）

「ご指摘を受けた通り、味見もしてもらいました。問題はありません！」

（いやいや……それでも、この色合いは十分やばそうなんだが）

いつもの昼下がり。

城内に設けられた食堂は普段通りの混雑さをみせていたが、ある一卓の周囲だけは空白ができていた。

しかも、そこから醸し出される雰囲気は、まるで戦場を思わせるほど張り詰めている。

その中央にて腰を据えているハセヲは、声にならない呟きをもらしつつ肩を落としていた。

目の前には、真紅に彩られた一品――麻婆豆腐が盛られた皿と白米が置いてある。

いかにも……な一品を自信ありと薦めてきたのは、最近になってハセヲの下に就いたばかりの関羽だ。

トレードマークの長い黒髪のサイドポニーが今日も眩しく煌めいているが、ハセヲの視線は料理に釘付けであった。

（前回は本当にヤバかったからな。でもまあ、味見してもらったうえで自信がこれだけあるってことは、見た目ほどヤバくはねえのかも……？）

そうだといいなあ……というか、そうであってくれと祈る思いで料理を見つめ続けるハセヲ。

彼の脳裏には、つい数日前に初めて関羽が振舞ってくれた料理の記憶が刻みつけられていた。

日頃の疲れを癒すためと振舞われた『一撃必殺餃子』なる、緑色の一品。

癒すどころか、何かが終わってしまいそうな不穏な感じを抱いたハセヲだったが、まあ一口と口にした途端――――文字通りの効果が発揮され、意識を刈り取られたのだった。

その味は、なぜか覚えていない。

ただ、美味いとかマズイとか以前に、問答無用で意識を覆いつくしてくるナニカだったとしかいいようがないものだったという。

とにも、疲労回復を図り、疲れの元を撃滅する想定で作成した料理だったのだと、関羽は復活したハセヲに謝罪し、弁明してきた。

もしかして、現状に不満をもっている関羽の嫌がらせかとも思ったハセヲだったが、薦められた際の邪気の感じられない笑みや、倒れた後の心配げな表情は本物だったと聞かされたこと、これまでの関羽の人となりを見てきたハセヲとしても、そんなことをするくらいならハッキリとした対応をしてくるだろうという判断をくだしたのだ。

だとするなら、料理（これ）は何らかのハセヲに対する彼女の気持ちなのだろうが、予想される結果が嫌なものでしかない以上、結果は同じである。

ならば周囲に助けを求めようにも、前回でハセヲが辿った結末を目撃したためか、あれだけ羨ましいなどと群がっていた団員たちも、今は巻き込まれないよう遠巻きに見守っているだけだ。

「これを食べれば、どんな疲労も吹き飛ばして並みいる相手にも勝利を約束できるだろう、という想いをこめて作ったものです。『百戦百勝麻婆豆腐』と名付けました」

（……確かにこれを食べきれるほどの強者なら、大抵の相手には勝てそうだよな）

ハセヲのジト目から警戒の色を感じ取ったのか、関羽は慌ててフォローにはしった。

「大丈夫ですよ！　試しに楽進殿とデス殿に味見してもらったところ、かたや素晴らしいと絶賛してくれましたし、かたや跳ねまわって走り回るほど元気が湧いてきたんですから！！」

（……ああ、やっぱそうなのか）

「あとになって、デス殿の口調が妙にかしこまったものになってしまったのには恐縮しているのですが……。そこまで感服してくれたということでしょうか？」

（……きっと心を折られたんだろうな）

「さあ、温かいうちにどうぞ！」

（……ぅあぁぁ）

かき混ぜるだけで目と鼻をつく臭いを発する兵器（りょうり）を前に、ハセヲの涙線はすでに降伏してしまっていた。

それを良い意味で勘違いしたのか、関羽の笑みがさらに深みを増していく。

（……万事休す、か）

もはや、食べなければ場が収まらない。

この笑顔をどちらにしても悲しみで曇らせてしまうことになるのだろうが、彼女の成長のためにも食べる方がいいと、ハセヲは意を決した。

すぐ脇に水の入ったコップがあることがせめてもの救いかと思いながら、ハセヲは真紅に輝く麻婆豆腐を白米にかけて口へと運んでいった。

（またやってしまった……）

厨房にて、残ってしまった料理の後始末をしながら関羽は盛大な溜め息を吐いた。

次こそはと気合いをいれて作った料理は、またしてもハセヲをノックダウンさせる結果となってしまう。

食べた瞬間に水を口に含んだハセヲだったが、それも砂漠に撒かれた柄杓一杯の水くらいの効果しかなかったため、水場めがけて途中にいる者たちを吹き飛ばして突き進むという事態になってしまった。

ハセヲに対して感謝の気持ちを伝えるのなら、一番自分に役立てることは戦力的価値だろうが、関羽はすぐにでも今の気持ちを届けたかったのである。

ならばと挑戦した料理であったが、むしろ困らせるだけの結果になってしまい、かなり凹んでいた。

（これでは、まるで嫌がらせをしているように思われてしまうではないか！？　そんなつもりは全くないというのに！！）

――つい数日前、関羽は生涯に渡って仕えるべき主君と別れることになってしまった。

それだけはないだろうと思っていたけれど、起こってしまったのは事実。

主君に、そんな辛い選択をさせてしまった自分の力の無さを嘆くことしかできないと思われたが――同時に、一つ殻を破った義姉の成長を喜ぶこともできたのは幸いだった。

ロストウェポンの出現や開眼など、急な変化に戸惑う暇もなく、関羽はその身を曹操軍に移すこととなる。

そこでの待遇はかなり良く、いつか迎えに来てくれるだろう桃香が来る時までは力を貸そう、と関羽は心に決めていた。

そう思うに至ったのは、曹操軍にハセヲという存在があったことも大きい。

判断に苦しむ桃香の背を押してくれただけではない。

彼の言葉があったからこそ、劉備軍はある種の危機を回避できたともいえるのだから。

結束力の強さが売りの劉備軍にとって、桃香が最も信頼する関羽を手放すのは大きな意味をもつ。

関羽でさえ手放すのなら、自分たちなど迷うこともない――と表面には出さずとも、心の奥底に影を作らせてしまいかねないのだ。

その事実は、今後の戦略上で大きな危険性を孕んでくる。

だからこそ、桃香の決意の意味を――護るための覚悟を固めた彼女の姿をみせるキッカケをつくったハセヲに、関羽は感謝しているのだ。

（だというのに、あの方は……）

桃香や仲間たちと別れをすませた関羽は、すぐにでもハセヲに感謝を伝えるべく帰還準備をしていた彼をつかまえた。

ところが、ハセヲはそこまで考えて言ったんじゃないと関羽の礼を受け取らなかったばかりか、逆に関羽を称えてきたのだ。

「いくら主に言われたからって、あそこまで心からの返事を出せる奴はそういねえよ。それがアンタの強さなんだろうさ。そうだな……思わず尊敬しちまえるくらいだ」

「……っ！？」

ハセヲの言ったことは確かに真実だろう。
関羽自身の桃香に対する揺るぎない信頼があってこその結果でもあるのは間違いない。

だがこの時、関羽がハセヲに対して抱く気持ちが少しだけ意味合いを変えてしまった。

初めて見た、ハセヲの力の抜けた自然な表情。
笑っている訳でもないのに、心安らぐ不思議な己の感情。

自分自身でも完璧に理解できてはいなかったが、この時そうしたいということはハッキリ分かった想いに従い――その結果、関羽は『天遣隊』の一員になったのだ。

以来、あの日を思い出すたびに湧きあがる気持ちをハセヲに少しでも伝えようと、頑張ったのだが……結果は悲惨なものとしかいいようがない。

（あと一回だけ……！　これで駄目なら諦めるつもりでやってやりましょう！　ようは、栄養ばかり考えるから味に気が回らなくなるんです。今度は味の方に気を回して……！！）

とはいえ、忸怩たる想いに心を揺さぶられながらも、このままでいいはずがないという決意を関羽は再燃させていた。

ついつい力余って、洗っていた皿にヒビをいれてしまったのは……可愛いから許してあげたい、うん。

その日の務めを終えた関羽は、街に料理の材料と弁償するための皿を買い求めにやってきていた。

区画や扱っている商品が整理されていることもあり、スムーズに買い物を終えて帰路につこうとしたところ、無視できない光景を目撃してしまう。

「何をやっているんですか、御二方!?　まだこの時間帯は仕事中のはずでしょう!!」

「あっちゃーなの～」

「……」

場所は、オープンテラスチックになっている卓を何台か置いている茶店。

そこにいたのは、自分の上司にあたる二人。

かたや、流行の情報誌と柑橘類の爽やかな匂いを放っている飲み物を嗜みながら、優雅な一時を満喫している少女、于禁。

おさげにした明るいブラウンの髪、ぱっちりとした目を覆うように掛けられた眼鏡、鼻の周りに散らばっているそばかすが愛嬌を放っている。

かたや、関羽には何だかよく分からない絡繰(からくた)を真剣な眼差しで弄っている少女、李典。

明るい紫の髪を両側で軽く纏め、様々な工具を机の上にまき散らしていた。加えて、卓に押しつける形で潰れている、虎柄のビキニで覆われた胸が悩ましすぎる光景をつくっており、道行く男どもの視線を釘づけにしていたが、本人は全く気にも留めていない。

自分とは違い、まだ仕事中であるはずの二人がどう見てもくつろいでいることに疑念を抱いた関羽が強い口調で二人を問い詰め始めたところ、于禁が弁明を始めた。

「これは重要な案件だから仕方がなかったの～！　前にデスちゃんが言ってたんだけど、柚子に含まれている”びたみんしー”って成分は、そばかすやシミを薄くする働きがあるんだって！！　それに阿蘇阿蘇の最新情報も気になって仕事に集中できなかったし、効率を良くするためには休憩する方がいいと思っただけなの～！！」

「……言いたいことはそれだけですか？」

于禁が必死になって弁明をすればするほど、関羽の怒りゲージが増大していく。

身内においては、こういう事態は――よくはないが、まれにあることだった。

それでも、生真面目な性格である関羽には見過ごせることではない。

ハセヲの同僚であるとともに、同じ隊に属する者として、忠言を申し上げる使命感に従い、関羽は口を開く。

「そんなことのために、仕事をないがしろにしていいと思っているのですか！？　いいですか、そもそ「そんなこと、だなんて言わせないのっ！！！！」」……は？」

「関羽さんみたいに、生まれつき持っている人はいいの！　でも持っていない人は、それでも美しくなりないなら努力し続けなければならないのっ！！　たしかに、お仕事をサボっちゃってたのは悪いことだけど、そんなふうに言われるのは納得できないの……」

ところが、関羽の言葉を遮って于禁の主張が賑やかな街並みを切り裂いた。

茶目っけ溢れる顔を真っ赤にし、涙を滲ませた表情で関羽を睨みつけている。

両の拳は、叫び声だけではすまない何かを抑えつけるかのように、フルフルと震えていた。

「……分かりました、それでは先ほどの発言は訂正します。ただし、仰られた通り、悪いことをしていたという自覚はあるんですよね？　でしたら、即刻仕事に戻られてはいかがかと」

「……うん、分かったのー。さっきは大きな声を出しちゃってごめんね」

「いえ、私の方こそ于禁殿が大切に思われていることを踏みにじるような発言をしてしまったようで申し訳ないと思っています」

正直なところ、関羽には于禁が言うところの内容にはピンときていなかったが、それでも己を高めようと努力をしているということは伝わった。

ゆえに、仕事に戻るよう進言は止めれなかったが、于禁はすぐに納得してくれたので、あとは以後気をつけるよう言って去ろうとした

のだ。

少々張り詰めていた空気が弛緩していく、まさにその時、

「さっきからゴチャゴチャとうっさいわ、ボケぇ！！　今良いとこなんやから、黙っときぃ！」

「「……」」

絡繰から目を離すことなく、李典の叫びが轟く。

それと同時に、于禁は何かがキレる音を隣から、関羽は何かがキレる音を自身の脳内から聞いた気がした。

加えて、体感温度すら低下していく。

「ふふふ……、どうやらこの方は、完全に自分の時間を楽しんでいるらしい。ならば、私との時間も愉しんでいただきたいものだ」

「――――っひぃ！？」

底冷えするような殺気（けはい）をばら撒きながら、夜叉（かんう）は地獄の底まで響くような声を出す。

豹変した関羽を見て、于禁は尻もちをついてしまった。

にもかかわらず、李典ときたら未だに緊急事態に気付かず、絡繰弄りに没頭している。

ある意味、あっぱれな奴だともいえよう。

真似したいと思う者がいるとは思えないが。

（――よい度胸です！）

そしてここに、怒りの鉄槌は落ちる。

凄まじい声量は、物理的な衝撃を伴って李典と巻き込まれた于禁を容赦なく打ち据えた。

ハセヲに上手く感謝の気持ちを伝えられない八つ当たりの感情も相まって、説教は長時間に渡って続いたんだとか。

ちなみに、ようやく解放された于禁と李典が城に帰ってきたところ、新たな夜叉が城門で仁王立ちして待ち構えていた。

西日が逆光となって照っていたために、近づくまでその人物が浮かべていた表情に気付けず、逃亡のチャンスを逃してしまったのだ。

「ちょお待ってぇー！　うちらもう十分に関羽はんから説教くらっとんやって！！　ここで更に凪からの肉体言語（せっきょう）なんてシャレにならんわぁーーー！！！」

「一番可哀そうなのは私なのーーー！！　何とか穏便にすみそうだったのにぃーーー！！！　助けてハセヲくーーーん！！！！」

「ふざけんなっ！　俺の方に逃げてくんじゃねえよ！！　巻き込ま

れんだろうがっ！！」

「お前たちは……身内の恥を他軍の将にまで晒すのか！！　悔い改めろぉぉーーー！！」

連続して起こる爆音が響くたびに、大地が揺れる。

輝く閃光が暗くなってきた空を彩るたびに、粉塵が撒きあがる。

この地獄を引き起こしている、長い銀髪をおさげにしている少女――凪は、完全に頭に血が上っているといった感じで、見敵殲滅状態にシフトしているようだった。

そこに、偶々通りかかっただけで巻き込まれてしまったハセヲからしてみれば、何というかもう……残念としか言いようがない。

「冷たいよ～ハセヲくん！！　仲間の危機なんだから、親身になってよぉ～～！」

「お前らは厄介事か、危機しかもってこないだろうがあぁぁ！！　親身になって欲しいんなら、今回のこれを何とかしてみやがれ！！　そうすりゃ次は話を聞いてやる！」

「そら無理な相談やで！　今回を息のびれんかったら次は無さそうな勢いやぁーーー！！」

「俺が知るかってんだよ！　自業自得なんだろうが！！　だったらテメエで考えろよ――回れ右して凪と刺し違えるとか、この場で腹を切るとか！！」

「それじゃ、どっちも死んじゃうのーーー！」

「だから自業自得っつってんだろうがあああーーー！！！！」

心からの叫びをあげつつも、どーせとばっちりを受けるのは確定なんだろうなと、ハセヲは心中を涙で濡らすのだった。

――――このあと、関羽謹製の『必中必倒炒飯』が待ち受けていることを、彼はまだ知らない。

彼とその周囲の日常は、騒がしくも……それでもつつがなく流れていく。

途中に起こった袁紹との戦いにおいては、関羽が名誉挽回とばかりに獅子奮迅の活躍をみせ、曹操軍が快勝を遂げた。

かくして時はもう少し流れ――――、一つの節目となる戦いを迎えようとしていた。

## 第2話（後書き）

日常パートの方が難しいと思う今日この頃。
まあ、たんにネタに困ってるだけなのですが。

せっかく愛紗が合流したのでハセヲと絡まそうとしたら、オチが三羽烏になってしまうとは……

いや、まあ本当は炒飯を無言で全部掻き込み、不味いと評するも前回よりもマシになってきているから次は期待してる、みたいな流れを書こうかと思ってたんですが、上手く纏まらなかったんですよね～。

それに、他のどなたかが書いていそうな話ですし。

なので、さっさと戦争パートに突入します（おいっ！？

次回のキーワードは『開戦』、『三者三様の対峙』です！

ここから物語は（多分）加速しますよ～♪

## 第3話（前書き）

話の流れをスムーズに見させる技能が欲しい！！

……すいません、三者の対決まで書きたかったのに、文字数が結構いってしまったので断念したフォウルです。

ひとまずは、こちらの衝突からどうぞ。

# 第3話

「帰ってきて早々で申し訳ないのだけれど、稟の力を貸してもらえないかしら？　霞と一緒に西方の牽制に行ってほしいの」

「……行けるか、稟？」

「そんな顔をしないでください、ハセヲ殿。今が大変な時なのは皆一緒なのです。ならば、できることをするのは当たり前のこと。ですから……星、風、”あとは頼みました”よ」

「ああ、”心得ている”」

「”分かっている”のですよ～」

「――助かるわ。頼んだわよ、稟」

「御意」

北方の国境付近での偵察任務を終えて帰還したばかりの天遣隊だったのだが、稟はそのまま遠征に参加してほしいと華琳からお呼びがかかってしまった。

かくいう稟の顔には隠しきれない疲労の色が滲んでいたが、彼女が言うことは事実であるため、ハセヲとしてもそれ以上は引き下がることはできない。

事実として、今や曹魏において暇な人物など一人もいないのだ。どこの部署も、猫の手も借りたいほどの忙しなさを呈していたのだから。

袁紹を倒したおかげで河北四州を併合し、領土が倍増した曹魏陣営。

結果、領地経営に関する内部の問題と、外敵に対する警戒という外部の問題も倍増し、かなり忙しい日々を送っている。

武官たちは、かくあるごとに袁家にゆかりのある不穏分子の制圧や偵察任務にかりだされているし、文官たちは併合した領土の折衝問題で手いっぱい。

なかでも、特に忙しいのが軍師たちである。

この状況で稟と風、二人の優秀な軍師をハセヲの手元に常時置いておくことが許されるはずもなく、今も風だけは城に残って別件の処理に追われていたのだった。

実際、ハセヲはここ最近全く桂花の姿を見ていなかったし、稟と風もどちらかは必ず出向扱いで別行動していたため、二人の顔を同時に見たのは随分久しぶりだったりするくらいなのである。

というのも、いざという時の判断で行動できるのが秋蘭くらいしかいないため、仕方ない処置ともいえるのだが。

まあそれも、まもなく片が付きそうな袁紹ゆかりの豪族たちの制圧を終えれば余裕が生まれそうであったため、もうひと踏ん張りといったところだろう。

それに、この忙しさは華琳の掲げる理想が叶いつつあるために生まれているものなのだ。

ゆえに、現状に表だって文句を言う者など――――

「あ～、社会に出る前にここまで働かされるなんて思いもしなかったぜ。今ならサービス残業に励むおっさん達の気持ちがよく分かるぞ……」

「ふむ、〝さーびす〟とやらはよく分からんが、きっとそれに近い心境を私も抱いているぞ。久方メンマを味わえてもおらんし、そろそろまとまった休暇を戴きたいものだ」

――――いないこともなかった。

霞と稟の出発を見送り、中庭に移動した面々。

手入れのいき届いた芝に腰を下ろしてすぐ、ハセヲと星ははばかることなく口を開いた。

その様子を、対面から華琳は笑顔を崩すことなく見守っている。

それがハセヲたちに対する信頼からきているのか、現状を察した上であえて言っている言葉だから多めにみようと判断してくれているのか、ハセヲには分からない。

それでも、今の面子ならば大丈夫だと判断しての言葉だった。

本来なら休憩時であり、自然とここに集う習慣になっているのだが、今日は華琳、真桜、星、風、関羽とハセヲの六人しかいない。

桂花も城内にはいるらしいのだが、手が離せない仕事の最中らしく

不在。

春蘭も南で妙な動きがあったとの報告を受け、先日に出かけていっているし、他の武官たちも同様にそれぞれの任務で城外に出ている。

よって、何かとハセヲに対して絡んでくる者がいないため、気兼ねなく振舞えているのだ。

まあ、誰かの口伝てで伝わる可能性も捨てきれないが。

「ならば、回状でも回しましょうか？　しばらく休むから攻めてこないでってね。

回す相手は……西涼の馬騰に五胡、益州の劉備、南の孫策。このくらいでいいかしら」

「むしろ、んなもん出したら、ここぞとばかりに攻められそうやわ……」

「なに、今でも十分攻め時としては最適ですからな。いっそのこと、そうしてみてはいかがか？」

それはさておき、華琳が冗談めかして言った内容は、事の経緯こそ事なれど、結果は星の言った通りであった。

現在、主要の武将がいない曹魏の武力はかなり心許ない。

ハセヲとしても、この危険性を気にしていたものの、華琳がこの事態に気付いていない筈がないため、静観している。

性格は……だが、勝ち目のない手を使う人物ではないと信頼しているのだから。

だからこそ、そのうえでハセヲが続けて口にしたのは、単なる確認事項にすぎなかった。

「……んで、実際どーなんだ？　どこが攻めてきそうかは見当ついてんだろ？　まあ、大体予想つくけどよ」

「へえ……なら聞かせてほしいわね。ハセヲ、貴方はどう観ているのかしら？」

「……まず五胡にそこまでの事情を掴んで、その隙を突くほどの組織だった行動はとれねーだろ。まあ、間が悪い可能性もあるが、そこまでは気にしてもしょうがねえ。

馬騰もこっちが表立って漢王朝に逆らってね―以上、あっちから攻めてくる理由はないだろうな。

そして孫策に至っては……絶好の機会じゃあるが、まだ袁術から独立したばかりだしな。そこまでの余裕はねーだろうよ。できて、何らかの工作活動くらいだろうさ。

なら残るは……」

皆まで言わず、ハセヲは感情を殺した瞳を少し離れたところに佇んでいた人物――関羽に向けた。

ハセヲが話し始めた時点で視線を感じていたため、彼女との視線がハッキリと重なっても戸惑いはしない。

こうなることは、お互い分かっていたこと。

ゆえに、その時は全力でぶつかり合うだけだった。

普段通りの透き通った双眸が自分を見つめていることに安堵したハ

セヲは、そこで視線を華琳に戻す。

だから彼は気付けなかった。

その直後、揺るぎない意志の光に溢れている彼女の瞳に一瞬の揺らぎが生じたことに。

「はぁ～……お前じゃねーけど、このまま昼寝したくなるのも頷ける天気だよな」

「ｚｚｚ……」

仕事に戻っていった面々を見送り、ハセヲは唯一残っていた風に背中を貸したまま空を仰ぐ。

ままならない先行きに苦労しているハセヲの心を癒してくれるかのように、照りつける陽光は心地よく、吹き抜ける涼風は爽やかで、疲れている身体に眠気を運んでくれる。

世はなべて事もなし。

平和そのものといった雰囲気であるが――その実、綱渡りのような立ち位置にあるのは間違いないのだ。

明日もこうして何気ない日常を享受できる保証はないだなんて信じられないよな、と声には出さず、しかし、それが現実なのだとハセヲは自身を戒める。

と、そこで完全に力を抜いていた風の身体に力が入った。

流石にもう起きるか、とハセヲが背後を振り向こうとした瞬間、

「――覚悟していてくださいね、お兄さん」

「……！？」

まるで、自身の心を読み取ったかのようなタイミングで、聞き覚えのないような冷たい風の声がハセヲの心に突き刺さる。

とっさに返事を返すことのできないハセヲを尻目に、風はそのまま「では、風も仕事に戻ります。サボってはいけませんよ～、お兄さん」と、いつもの調子で立ち去って行く。

しばし呆然と風の背中を見つめ続けていたハセヲだが、気を取り直すかのように再び澄んだ空を仰いだ。

そこには変わらない青い空があったが、やはりというか先ほどまでと同じ気持ちにはなれないのだった。

――それから数日後、劉備からの使者が来訪する。

「……スゲーな、大軍団だぜ」

「そうかしら？」

場所を城の南方にある出城に移し、ハセヲは思わず口に出たといった感じの声をあげた。

眼下に広がるのは、設営の完了した本営に詰めている自軍の兵たちと――その先に広がる平野を覆い尽くすかのように布陣している劉備軍。

加えて、翻る旗は、劉に張、深紅の呂旗に――関。

ハセヲの予想していたことが、更なる懸案事項を含んで現実化したのだ。

――というのも、凄まじい早さで南部を平定した劉備が、反董卓連合戦以後から流離っていた呂布さえも抱き込み、魏の国境を越えて侵入したことが発端である。

そこでまずは使者を送り、共に力を合わせて大陸の安寧のために働こうという劉備の声明とともに、関羽の返還を願ってきたのだ。

そして、対する華琳の返答は、揺るぎない信念に満ちたものであった。

「戻って主に伝えなさい。

――夢見る賢者の戯言に付き合う暇はない。それでも、我が覇道

を違えろと言うのならば力を示せ、とね。
だから約束通り、関羽を返してあげる。全力でかかっていらっしゃいな」

己の劣勢を全く苦にもしていない言わんばかりの態度に、使者は本来こちらにあるはずの余裕を失いそうになって帰って行った。

その際、関羽は何か言いたげな目線をハセヲに向けていたが、結局何も言わぬまま、黙礼だけを残して去っていったのである。

「――本当に籠城戦はしないんだな？　春蘭が戻るのは、明日の夕方頃になるんだろ？」

「最初から守りに入るようでは、覇者の振る舞いとはいえないでしょう。そんな弱気な手を打っては、これから戦う敵全てにみくびられることになる」

「……」

移動した理由の最重要事項が、劉備たちを拠点の手前で迎え撃てると同時に、南方に出ている春蘭がより早く合流できるというもの。

加えて、一般人はいないために気兼ねなく戦うことができるという点も大きかった。

だというのに。

味方は少数であるにもかかわらず、兵達が危険に晒される野戦を敢えて行おうとしている華琳を、流石にハセヲは不満げな視線を送る。

だが、華琳は譲らない。

自分が自分を誇れる振る舞いを崩そうとはしない。

そうやって、これまでの道を進んできた華琳の『意志』を尊重してやりたいと思うと同時に、一抹の不安を隠しきれない。

――そんな想いを抱えるハセヲが華琳に声をかける前に、不敵な笑い声が華琳から零れた。

「この状況で勝てば、より一層天下に曹魏の強さを知らしめることができる。こちらを攻めようとしている連中にも、いい牽制になるでしょうよ」

（でもその前に、ここで負けたら全て終わりなんだが……そんな訳ねえって感じだな。まあこのままでも、いずれ負担がかかり過ぎて参っちまう連中が出てくるかもしれねえし。ここで俺らが頑張れば……他の奴らの負担も減るってか。

華琳の奴、そこまで考えてるんだろうが、だとしたら俺が『こちら側』ってのは……どうなんだろうな）

「そのためには、ハセヲ……貴方にも命を懸けてもらうことになるわ。……頼むわよ」

「……ん」

「……？　何よ、変な顔して」

何やら訝しげな表情をしている華琳に指摘されたことで、ハセヲは自分でもよく分からない気持ちになっていることを自覚した。

団員達を預かる身としては、この選択を受け入れがたい気持ちが大

きいが――――ハセヲ個人としては、こうやって華琳から『当て』にされていることが嫌な訳ではないのだ。

――――現状は厳しいが、向けられた信頼には応えたい。

自分がどれだけ頑張れるかが、この戦いを左右しうる。

ならば、やれるだけのことをするのみ。

少なくともハセヲにそう思わせるほどに、魏（ここ）での生活は彼にとって大切なものになっているのだから。

「気にすんな。お互い、先に目指すものがある以上、ここじゃ終われねえ。なら……勝とうぜ」

「当然よ」

それだけを告げ、ハセヲは華琳に背を向けて本陣へと歩き出す。

その足取りに迷いは感じられず、一度も振り返らずに彼女の視界から消えていく。

その後ろ姿を、桂花が呼びに来るまでの間、華琳は無言で見送っていた。

―――――――――

―――――――

―――――

―――

―

それから、しばらくの後。

唱和される雄叫び、踏み鳴らされる軍靴の音。
そして、肌に突き刺さりそうなほどに感じる『軍氣』が戦場に満ち溢れていた。

厳しい訓練を潜り抜けている曹魏の兵たちに負けず劣らず、劉備軍が放っているそれらは凄まじい。

お互いの主同士の舌戦が決した際、堰を切ったように溢れだした劉備軍の気迫。

その発端となったのは、桃香が掲げた刀剣(おもい)であった。

「これは、夢見るだけの理想(もの)じゃない、叶えたい現実(もの)なんです。いくら甘い戯言だと言われようと、私が私であるためにも……この夢は捨てられない、捨てたくない！
私の夢のために命を懸けてくれる人たちがいて、その想いに支えられて、私はここにいる！　なら、私が何より大切にしなきゃいけないのは、その想いを貫き通すことです！
だからそのために、曹操さん、話を聞いてもらえないというのなら――聞いてくれるまで、戦うしかありません……！！」

ここにきても納得はできずにいるし、理解はできるが受け入れがたいと考えている桃香であったが。
結局は力に頼ることになるのかと、自らの主張の在り様を揺さぶられても。

それでもこの道を歩み続けることだけはやめないと誓った桃香から

解き放たれた紫紺のきらめきが、周囲へと拡散していき――

「「「おおおおおぉぉおおおーーーーー！！！！！」」」

――今の状況ができあがった。

『魅惑スル薔薇ノ雫』の効果により、大幅に戦意を向上された劉備軍。

かといって、心を操って自らを妄信させているわけではない。

彼らの瞳には、理性の光と信頼の温かさが宿っている。

持てる力を十全に発揮できるよう、桃香に支えてもらっている彼らは今、みな『絶好調』なのだ。

（――是非もなし）

ここにきても、華琳が浮かべる笑みは優雅さを失わない。

その実、愉しそうな表情とは裏腹に脳内での戦略構築は凄まじいスピードで行いながら、華琳は愛用している大鎌”絶”の切れ味を確かめるように空を一閃。

自ら前曲を指揮する旨を伝え、全軍に劉備軍を迎え撃つ檄をとばした。

すぐさま遠雷のように響き渡った応ずる声と、隊列に乱れをつくることなく展開していく様子に、華琳は目を細める。

（――ここを越えられなければ、先はない）

間違いなく、己の命運を分ける戦いだと認識しながらも。

共に戦う配下を、兵たちを見つめる瞳に不安は一欠けらも存在していない。

そんな華琳の双眸にうつっている中には――力強く突き進む、純白の”錬”旗の姿もあった。

＊　＊　＊　＊　＊

「おらぁぁあああーーー！！」

怒号と共に振り抜いた”死出鎌・観音掌”による一撃は、ハセヲの視界に入っていた敵を全て叩き伏せた。

そのまま空いた前方の空間に歩を進め、目線を逸らすことなく周囲の様子に気を配る。

そのたびに鼻をつく血の匂い、敵味方を問わず宙を舞う手足や首を捉えるたびに込み上げてくるものは強烈だったが、ハセヲは集中を切らさなかった。

右翼を率いて相手をかく乱することになった天遣隊の先陣に立ち、ハセヲは敵の目を自分に集めるべく、声をあげ続ける。

いくら絶好調の兵たちといえど、ハセヲを倒すには力が及ぶはずも

ない。

とはいえ、一兵卒におけるまで、これほどまでの気迫を受け続ける戦いをハセヲは初めて体験していた。

自らが戦う理由を明確に抱いている者たちの攻撃は、ハセヲの身体には届かなくとも、その精神を常以上の速度で削っていくのである。

（だが、こっちにも譲れない理由があるからな――負けられねえ！）

互いに武器に乗せた信念を力と化し、再び怯むことなく向かってくる敵をハセヲは迎えようとして――

「お前たちは下がれ！　ここは、私が引き受ける！！」

「関羽かっ……！？」

ここ最近聞きなれていた声と姿を、ハセヲは見聞きすることになった。

愛紗　ｓｉｄｅ

初めは、強さこそ大したものだと思ったが、どこか斜に構えた態度

を好きにはなれなかった。

しかしそれも、彼が抱える内面や事情を見聞きしていくうちに、ただ不器用なだけだということに気付いていく。

彼は、自分から積極的に関わりを持とうとするような人ではないが、一度掴んでしまった手を離そうとはしない。

それは桃香様とて同じことだが、彼の想いにはそこに生き様のようなものが込められた誓約があるようにみえるのだ。

ならば、この言葉の答えなんて聞くまでもないだろう。

それでも、私はどこかすがるような想いさえ込めて口を開いた。

「ハセヲ殿、どうか私たちのもとへ――桃香様と共に歩んでいただけないでしょうか？　それは、必ずや桃香様にとって大きな力となるでしょうし……私個人としても、大変嬉しいのです」

「……ワリイな。そこまで考えてもらえるのは光栄なんだが、いまさら華琳のもとを離れる気はねーよ。もう、色々と抱えてるモンもあるんでな」

「……それが、貴方の選ぶ道なのですね」

あらかじめ、解っていたはずの答えが返ってきた。

当然の結果。

それなのに私の心は揺れ動いている。

勧誘は失敗した。
なら、後にすることはといえば――

「違うな、俺はもう”選んじまった”んだ。あとは、アイツが俺の力を必要とする限り。俺の手が届いている限りは、アイツの道に付き合わねーとな。
関羽、だからお前も……本気で来いよ。俺は俺の道を進むために、お前を倒すぜ」

――桃香様の道を阻むものを打倒するだけ。

そして、それをハセヲ殿も望まれている。

そこまで思い、そこまで考えたところで身体はすぐに反応してくれた。

戦闘態勢に移行していく身体に馴染んでいくかのように、心のざわめきが静まっていく。
それに代わって、最も大切な――今の私の原動力となっている想いが溢れてくる。

「我が名は関羽っ！　桃香様の一の矛として、その前に立ち塞がる貴方を倒す！！」

「上等だ！　ただこっちにゃあ余裕がねーからな、悪いが一気に決めさせてもらうぜ！！」

その言葉が意味するところに気付き、青龍偃月刀をきつく握りしめ直し、いつでも飛びだせるよう足を地面につけながらハセヲ殿の様子を窺う。

すると、やはりというか彼は大鎌から離した片手を懐へと伸ばし、アレを取りだしたのだ。

愛紗　ｓｉｄｅ　了

（時間的にも、体力的にもここで使い切る訳にはいかねえ。なら、コイツで……！）

先手必勝という意味においても、大局を見据えた意味においても、有効な手立てだとハセヲが選択したのは、鎌闘士（フリッカー）に与えられた最強のアーツの使用。

この外史（せかい）においては反則級の異能（ちから）の行使をもってすれば、可及的速やかに決着をつけれるだろうと、ハセヲは以前の経験からも考えたのだ。

それは、まだ関羽が天遣隊に所属していた頃。

ハセヲは関羽に何度も頼みこまれた末に、一回だけ模擬戦でアーツを使ったことがあった。

その結果は――――

「地獄蟲の召喚符！」

力ある言葉と同時に持っていた札が弾け、具現した深い闇が大鎌の刃を漆黒に彩っていく。

その瞬間、周囲で戦っていた兵たちが警戒や戸惑いといった表情を浮かべ、動きを止めた。

明らかに超常めいた光景を前に、思考を停止させられたかのようにしばし立ちつくす。

――かつて、その刃で身体を貫かれた感触を思い出したのか、関羽さえも表情を険しくしていた。

ハッキリと視認できるほどに凝縮された力を放出している刃を煌めかせ、ハセヲは大地を蹴った。

大鎌を肩越しに構え、ハセヲの前進と同時に後退していた関羽へと滑りこむように疾走。

間髪なく上段から振りおろした死神の刃を、関羽は体を左に開いて捌き、反撃にうつる……ことなく全力で回避に励もうとする、が……

「環伐乱絶閃！」

空をきった刃が大地に突き刺さると同時に、関羽を中心として取り囲むように具現した悪魔を思わせる八本の巨爪。

全方位から迫る巨爪は、あたかもギロチンのように関羽に殺到する。

（――決まった！）

こうなってしまえば、もはや逃げられない。
ハセヲは勝利を確信した。

迎撃態勢を整えている関羽だが、あの攻撃を同時に捌くことはできないと決めつけたところ――

「――せいやあああああーーーーっ！！」
「なっ……！？」

予想外の光景に目を瞠ってしまう。

関羽は自分の身体を軸に、青龍偃月刀を素早く一回転。
”白銀”に輝く青龍偃月刀の切っ先が一切の停滞を見せることなく弧を描き、巨爪を切り裂いていく。

そして、切っ先から溢れる白銀の燐光の軌跡が円を成した瞬間、神聖なる光に祓われたかのように巨爪は消え去ってしまった。

砕けたガラス片のように虚空に散らばっていく巨爪を呆然と見つめていたのは数秒のことだっただろうか。

慌てて我に返ったハセヲが周囲の様子を見据えた時、左前方に関羽の一撃を捉える。

それには何とか、首筋を狙っていた斬撃の延長線上に柄を挟むことで防御できたが、そこでアッサリと大鎌はハセヲの手を離れて宙を舞ってしまった。

（あ、死んだな……こりゃ）

思ったよりも冷静に、ハセヲは迫りくる『死』を意識した。

アーツ使用時の硬直が解けたのは、自失から立ち直る前だった。

その時に回避に励めば対応できたかもしれなかったが、もう遅いだろう。

間もなく襲いかかる刃は、ハセヲの上半身と下半身を綺麗に両断する。

そう悟ったハセヲは、静かに目を閉じた。

これが自分の終わりなのかと、逃れようのない死を受け入れようとして――

（――ハセヲさん）

（――俺はあがくぞ。どんなに無様を晒してもな）

（――っ！？）

脳裏によぎった仲間の顔が、自身の想いが。

それで本当にいいのか、とハセヲに再考を促し……

（俺は……まだ――――）

どうして諦めようとしたのか。

解りきっていたはずの答えを出して、ハセヲは脱力するかのように全身の力を抜き、軽く前傾。

そのまま、左手だけを関羽に向かって突き出した。

それを怪訝に思ってくれた関羽の追撃が僅かなりとも遅れてくれれば僥倖。

そのくらいの心積もりで、ハセヲは残されたギリギリの時間を使い、力を求め続ける。

意識は、直前までの自分が嘘だったかのように先鋭化していた。

効かせることよりも、この場を凌ぐことだけを意識した対抗策。

「疾風――――」

それは、最も慣れ親しんだアーツ。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにおいて、最速の攻撃手段を持つ職業（ジョブ）に与えられた基本技。

未だ手の中に喚装されてはいないが、アーツ使用時のブーストの恩

恵を受け、身体は反応する。

（――――死ぬわけにはいかねぇんだよっ！）

「双刃！」

関羽の攻撃に合わせるように振り抜かれたハセヲの左手の先に、重い衝撃がはしった。

次いで鈍い音が響き渡り、最後に左手に収まりきらなかった衝撃がハセヲの全身を包み込み、後方へと吹き飛ばされる。

会心の出来だったＷｅａｐｏｎ　ｃｈａｎｇｅは、片手のみではあったが”虚空ノ双牙”を喚装し、ハセヲの命を繋いだのだ。

吹き飛ばれた先で、無理な力の行使の反動で生まれた鈍痛が少なからず感じていたが、ハセヲはむしろその痛みを心地よく受け入れていた。

仮初めの身体とはいえ、感じている痛みは生きているが上でのものなのだ。

下手をしたら、何も感じられない『死（おわり）』を迎えていたかもしれなかったのだから。

ハセヲらしからぬミスだとも考えられるが、やはり彼も万能ではない。

そもそも、こうなってしまったのは状況的な問題も大きいが、自覚のないうちに生まれていた驕りのせいであるともいえるのだろう。

大陸最強といわれていた呂布を倒し、模擬戦とはいえ、関羽、張飛、趙雲といった英傑にも勝利を収めたことのあるハセヲ。

その事実が、戦略上において余裕のないハセヲの判断を見誤らせた。

相手は、今より二千年近い時を経ても色褪せることのない存在を謳わせる猛将。

少しばかり特異な力を持ち合わせているからといって、思いあがれるような相手では決してないというのに。

（アホか、俺は……）

増長していた自分をぶん殴ってやりたい気持ちを抑えつけ、同じ轍を踏むことのないように油断なくハセヲは関羽の様子を窺う。

疾風双刃の威力というよりも、あの状態から反撃が間に合ったことに驚いたのか、関羽は十分な間合いを保ったまま、ハセヲの様子を窺っていた。

その手に握られていた青龍偃月刀は、相変わらず燐光を放ち続けている。

加えて、ようやく客観的な判断を下せるようになったおかげか、それ以外の変化にも気がつくことができた。

（ありゃあ攻撃力増幅（アブコープ）に、防御力増幅（アブボープ）。それと速度増幅（アブドゥ）もかかってんな。これは……”アイツ”の仕業ってか）

考えてみれば、この技は虎牢関でも使っていたのだ。

それを『彼女』が見ていたのだとしたら、何の対策も打っていないはずがない。

相手は強力な地力に加えて、能力増幅（ブースト）をかけられた相手。だとするなら――

（とにかく今は、ここを切りぬけることだけを考えろ！　後先考えるのはその後だ！！）

決意と同時に力を練り上げていく。

この状況を打破するには、『武獣覚醒』では足りない。

絶対に勝たなければならないのだ。

ならば、今までよりも一段上の力が必要だった。

（――使ってやる、来いよ！）

ハセヲは理想を現実とする力を得るために、再び大鎌を喚装。

最低限の警戒ができる意識だけを表層に残し、残りを深層意識に眠る大いなる力へと伸ばしていき――

「――上位拡張（エクステンド）」

静かに紡いだ言葉の直後、黄昏の腕輪から零れ出た漆黒の『影』が”死出鎌・観音掌”を覆い尽くしていった。

『ソレ』は、上空をゆらゆらとたゆたっていた。

風に吹かれるままといった感じだったが、ハセヲたちが戦っている当たりでソレの動きは停止。

下で繰り広げられている戦いに魅入られている――わけではないようで、すぐにお目当てのものが見つからなかったとでもいうように、ソレは動きを再開したのだった。

## 第3話（後書き）

残りの二者の対決やら、先の展開を匂わせる部分については次回にて！

三連休までには出したいところです。

彼女の正体はともかく、影の正体まで予想ついている人はいたかな？

私としては、結構頑張ったつもりなのですが……

## 第４話（前書き）

以前に書ききれなかった部分を書きました！

そろそろパワーバランスが難しくなってくる展開ゆえに、おかしいと思うところが出てくるかもしれません。

なるべく頑張りますので、温かい目で見守っていただけると……

# 第４話

『大切な家族と一緒に、平穏に過ごせる場所が欲しい』

大陸最強の武を誇る少女が戦う理由として抱いているのは、与えられた能力と比較してあまりにも慎ましやかな望みだった。

望みさえすれば、更なる地位や権力を得ることもできるだろうに、呂布はそんなものには微塵の執着も見せない。

その理由は対人能力の低さからだろうと予測し、足りない点を補おうと尽力してきた人物が、呂布の片腕にして、隊の運営や雑務を処理する陣宮であった。

開戦を告げた戦端を見据え、隣に立つ主の声を待って、隊全体に動く期をいつでも伝えられるよう息を深く吐いては吸っている。

自分の生涯をかけて仕えると決めた主の望みを叶えようと意気込む彼女の瞳に、ヤル気の炎が燃え上がる。

これまで、天下無双の呂布に相応しい肩書きを贈ろうと奔走していた彼女だが、今は”そんなものは必要ない”と思うようになっていた。

（恋殿には肩書きなぞ無くとも立派な御仁なのは疑いようがない事実なのです！　その気高さを、その強さを、その優しさを――――今までずっと見てきたねねが知っていれば、それで十分！

むしろ、何のしがらみもない清らかさこそが、恋殿の魅力を高めることになるのですぞ！！）

それよりも、呂布には感じてほしいものがたくさんあると陣宮は考え出していた。

呂布の感情表現が乏しいのは本来の性分のせいだけではなく、成育時における何かしらの外的要因の影響があったのではないか。

そう考えるとするなら、今の呂布に必要なのは無駄な権力よりも、心休まる一時の謳歌だろう。

それを呂布は以前から望んでいたと言うのに、自分が求めるからと、こちらの言うことを聞いていてくれていたのだと、陣宮は歯を食いしばる。

助けるつもりが、結局は自分の望みを呂布に押しつけていただけだったのだという憤りを込めて。

ならば今度こそ、主の望みを叶えるべく力を尽くそうと決意を込めて。

（恋殿はねねをずっと助けてきてくれていたのです！　なら、今日はねねが恋殿の望みを叶えるために頑張る番なのです！！）

――今回の戦いで、呂布がもう一つだけ望んでいたこと。

それは、天の御遣いと呼ばれる人物との再戦。

虎牢関で惜敗した少年への執着を、呂布は明らかに見せていたのだ。

それは陣宮としても、願ってもないこと。

大陸最強である主に偶々勝ってしまった相手に、今度こそ身の程を

思い知らせてやれると陣宮は心の中でほくそ笑んでいた。

「恋殿は何の遠慮もなく、天の御遣いを叩きのめしてやってください！　それがすむまでの雑務はねねが取り仕切ってみせますので！！」

「……ありがと、ねね」

心に染み入るような優しい声が陣宮の胸に響く。

主のはにかんだような笑顔に乗せられて届いた声は、ここが戦場でなければ悶え苦しんでいたかもしれないほどの高揚感を陣宮に与えていた。

だから彼女は気付けなかった。

必死でにやけ顔を引き締めようと自制している陣宮の横で、呂布が続けて呟いた言葉に。

「ハセヲ……今度こそ、恋のモノに……する」

そして、それぞれの思惑をのせた戦いが始まる。

しかしながら、関羽に先を越されてしまい、焦り気味で戦場を真っすぐに純白の錬旗のもとを目指して進んでいた深紅の呂旗は――――その手前で足を止めることになる。

「――悪いが、ここから先へは行かせられん。あの二人の戦いに、水を差してやりたくはないからな」

「……どけ」

呂布に陣宮という得難い片腕がいるように、天の御遣いの少年のもとにも優秀な副官がいたのだから。

こうなることは解っていたこと。
それでも、踏み出したのは彼女の意思。

ならば、せめて決着はつけさせてやりたいと、天遣隊の副隊長である星は考えていた。

（……ままならんものよな、愛紗。お互い、性質の悪い相手に目をつけてしまったものだ）

視線を僅かに泳がせると、すぐに何度もぶつかりあっている二人の姿を捉える。

それなりに距離があるにもかかわらず伝わってくる強力な気配を感じながら、星は心中で溜め息を吐いた。

悩みの原因となっている、今や自分の中で大きな存在となっている

少年は……何というか、間の良い人物であった。

普段は斜に構えた態度やヘタレっぽさが前面に出ているくせに、『ここぞという時』や『いてほしいと思う時』には傍にいて頼りになる存在。

それがどうしようもなく嬉しくて。

同時にどうしようもなく腹立たしくなるわけでもあるのだが。

（今は、時間を稼いでおいてやろう。私としても、前回の焼き増しを見るのは御免だからな。

加えて…呂布も未だハセヲに御執心の様子）

本当に厄介な主人をもったと、内心の想いに反して愉しそうな表情を星は浮かべ、呂布へと正対する。

次いで、手の中にある重槍”静カナル翠ノ楽園”を強く握りしめた。

その光刃は、間もなく始まりそうな力の解放を今か今かと待ちわびているかのように、明滅を繰り返している。

「……お前だけじゃ、恋の相手……無理。……通して」

「つれないことを言ってくれるな。見ての通り、我が主は関羽と戦っておるのだ。両者ともそれを望んでいる。

……そこに割って入るのは、いささか無粋であろう？」

「それでも……恋、戦う。戦って……ハセヲを「ならばっ！！」……？」

可愛らしく首をかしげる呂布を尻目に、星は声高に宣言する。

戦うべき理由が一つ増えてしまったから。

「私を倒してみせろ、呂奉先。天を守護する我が槍牙を潜り抜けることができるのなら、な」

「……分かった」

返事と共に、爆発的に膨れ上がっていく呂布からの気迫。

これで二回目となる気迫を全身で受け止めながら――星は地を蹴った。

「はあああああぁぁぁ！！」

「……無駄」

腰だめに構えた槍から地面を掬うように放たれた、左下段から対角線上への一閃。

その一撃を、身体を半身ひねるだけの完璧な見切りで回避した呂布は、速やかに返し技を叩きこもうとして――

「――――！？」

――驚愕する。

前回の戦いで把握していた、星の実力。

簡単な相手ではないが、それでも問題なく勝利できる相手だという認識だった。

あれから一年と経っていない。
そんな短期間で、強さがそう変わるはずがないという想いで放った一撃は――――

（――――どこにっ!?）

――――空をきったばかりか、呂布は星の姿さえも完全に見失ってしまう。

しかし、すぐに居場所は分かった。

自分の右後方に、活火山の噴火を彷彿とさせるような気の高まりを感じたから。

「もらったあああああーーーー!」

「っつう～～～!?」

蒼い煌めきが、戦場を駆け抜けた。

星は、振り上げた槍によってできた僅かな死角をついて呂布の背後へと回り込み、槍を一閃。

瞬間移動ばりに加速していた全身の運動エネルギーが注ぎ込まれていた一閃は、呂布の腰を両断する――――かと思われたが、間髪で防御されてしまった。

とはいえ、その衝撃は呂布をボールのように吹き飛ばす。

（……危なかった。コイツ……強い）

何とか受け身をとって着地した呂布だったが、その双眸は今だ驚愕で見開かれていた。

その見つめる先に佇む人物が、凄まじい闘気を放っていたから。

「完全に私の実力ではないのは、いささか卑怯な気もするが……そうも言っておれん状況でな。それでも良いというなら相手になろう。

我が名は趙子龍！　天の御遣いを守護するべく、その力の一部を譲り受けた、天の威を司る槍である！！」

その身体を包み込む、明星が放つ輝きのように鮮烈な光を放つ闘気（オーラ）。

以前見た朱金よりも温かみを感じさせる黄金の輝きを纏い、星は”静カナル翠ノ楽園”を構えなおした。

それと同時に、槍を中心として光の柱が天を衝く。

その光景は、日中であるにもかかわらず、その場にいる者に日の出の様子を思わせるほど神々しいものであった。

突如、膨れ上がった光の柱を気に留めることなく、蒼い”ソレ”は宙を舞う。

何を求めているのか全く解らないソレは、しばし空の散歩を楽しみ

続けるようにたゆたい続け……

「……ァァ」

かすれる様な声が出たような気がした途端、明確な意思を感じさせる軌道をとって飛んでいった。

「まさか、この私自ら刃を振るうことにっ、なるとわ……ね！　しかし、それもまた良し！」

久方ぶりに経験する前線は、まだ華琳のもとに夏侯姉妹しか控えていなかった頃の記憶を呼び覚ましていた。

過去を懐かしみ、その余韻に浸れるような状況ではなかったが、肌に感じる戦場の空気は昔と変わりなく華琳を包み込む。

たとえ、前線に立つことは少なくなっていたとしても、忙しい間を見繕っては細々と続けていた鍛練の成果は表れている。

それでも拮抗はだんだんと崩れそうではあったが、これだけ戦えていること事態が奇跡的なのだ。

絶対的に戦力が不足している曹操軍は、かなり善戦しているといえよう。

――しかし、

「雑魚は下がれ！　私が相手をするのは強者のみ！
誰かいないのか！　曹孟徳はここにいるぞ！」

”ポオオォォーーーーン”

転換点を迎える刻が訪れた。

再び襲いかかって来た敵兵を返り討ちにして叫んだ華琳に応えるように響いた『ハ長調ラ音』

同時に空から鬼火のように揺らめく、仄暗い輝きを放つ蒼い炎が舞い降りる。

「……アアアァァ」

「――っ！　お前は……っ！？」

炎の中から現れた異形は、氷のように冷たい視線を華琳へと突き刺していた。

その瞳の奥に、明確な殺意の炎を燃やしながら。

（――ここまでは、預言通りです）

見つめる先で遷移していく戦況が、振るった采配の結果が、あらかじめ裏付けでもとっていたかのように進んでいく。

この展開だけを見るならば、軍師冥利につきるの一言なのだろうが、劉備軍筆頭軍師である諸葛亮こと朱里の表情は、固いものであった。

それもそのはず。

この結果は、自分だけの力で成し得た結果ではないのだから。

――初めは、ただの白昼夢だと思っていた。

次は、単なる偶然の産物だと思った――いや、思おうとした。

しかし、それが三度続いたなら、それはもう偶然の一言ではすませられない。

そう、『頭の中に突如として浮かんでくる光景が現実に起こる』などと。

言うまでも無く、朱里はその名を大陸中に知らしめる賢者である。

だからこそ、我が身に備わった『この力』の有用性と、それ以上の恐怖に早々と気付いていた。

確かに、この『未来視』とでもいえる力は強力である。

この力の源が何なのかは解っているし、その出どころも信用はおける。

しかしながら、与えられた力は蓄えた知識量は超一級であっても、か弱い少女でもある朱里の精神は、明らかに『ヒトの身を越えた力』に対する恐怖心を覚えていた。

単純に力を行使していればいいという話ではない。

突如として与えられた大きすぎる力は、少女の心を決壊させるには十分の容量を誇っていたのだ。

考えてもみてほしい。

与えられた力が、いつも良い方向に作用するという保証はない。

知らないところで大惨事を引き起こしているかもしれないし、本来あるべき流れを捻じ曲げることで、誰かの未来を奪ってしまっているのかもしれない。

だが、知らなかったですませるには朱里は聡すぎた。

気付いていたならば、自分の意思でその結果を作り出したということだ。

自分が望む世界を手に入れるために、他のナニカを犠牲にしてしまうということだ。

戦場に立つ以上、犠牲は避けて通れないものであるが、この力の行使によって被害を受ける者たちにとってみれば理不尽極まりないものだろう。

いくら自分で制御ができないうえに、視える光景も大雑把なものばかりとはいえ、朱里には十分すぎるほどの判断材料になってしまうのだから。

まあ、視えるごとにかなりの精神力をけずられること。
この力に頼るあまり、緊急時の判断に遅れが生じる可能性があるなど、他にも危険性は考えられる。

しかし、それでも――

（私が至らなかったばかりに、桃香様には苦しい決断をさせてしまった！　鈴々ちゃんを泣かせてしまった！　愛紗さんに重すぎる役を任せてしまった！
なら……！！）

歯を食いしばって俯きそうだった視線を前方に固定する。

この戦いの果てに起こる結果を全て受け入れ、それでも望む世界を手に入れてみせよう。
朱里の心は、恐怖心を上回る仲間への罪悪感と、主を助けたいという使命感に突き動かされていた。

「どんなに私の名を貶されようと構わない！　それでも……我が主君の邪魔をする者は、どんな手段を用いても封殺してみせます！」

重ねてきた年月からみれば、明らかに幼ない少女が抱くには重すぎる覚悟ではあったが。

主や大陸の未来を心から憂う、心優しき賢者の想いに応える碑文があった。

「――――間もなく前曲が崩れます。追撃部隊第一陣……開け」

可愛らしい唇から零れたとは思えない厳かな声。

それと同時に振るわれた右手にいつのまにか握られていたのは――――

三又の軸の間から展開している、スミレ色の水晶細工のような六枚の花弁。

優美と実用を同居させたかのようなフォルムを備えた――――天女が持つ物だと言われても頷けそうな”扇”だった。

――――誰よりも世界を愛していたにもかかわらず、愛すべき世界を見失い、絶望の淵に立たされるも仲間と自らの信念のおかげで自分を取り戻した賢者の憑神器は、この外史においては諸葛亮の手に渡る。自らの弱さと強さを知る彼女ならば、世の道標として正しくこの力を示してくれるだろう――――

（……問題はここからですね）

かつて天の御遣いから譲り受けたロストウェポン『其ハ声預カル聖者』を手に、朱里は戦いの流れを高速処理、演算して対策を考えていたが、意識の片隅は別のことに向いていた。

――以前に見た、血に濡れた曹操が膝をついている光景へと。

## 第４話（後書き）

さて、次からは戦闘シーンなのですが、どれだけ皆さまの予想を裏切れることやら。

ハセヲｖｓ愛紗、星ｖｓ恋、華琳ｖｓカイト

書く順番は……誰からにしよう（汗）

とにかく頑張りますのでお楽しみに！

次回のキーワードは『激突』、『開帳』です。

# 第5話（前書き）

さあ、バトルスタート！！

……って、言いたかったんですが、今回は戦闘少なめ。

前置きがまた長くなってしまいまして（汗）

そんなんで、ほどほどにお楽しみいただければ。

あと、今回は以前にいただいた贈り物を使用していますこと、ご了承ください。

# 第5話

――それは、まもなく日も沈もうとしている夕暮れ時のこと。

ハセヲは眉を急角度に吊り上げ、胡坐をかいて座っていた。

眉と同様に不機嫌そうに吊り上がっている双眸が捉えたのは、無邪気な笑顔を振りまいている少年の姿。

初対面の人間ならば愛くるしささえ抱けるだろう少年の正体を、ハセヲは少しばかり知っていた。

「――おい、欅」

「はい？　何ですか、ハセヲさん♪」

ハセヲが不機嫌さを隠しもしないで出した声や睨みつけた視線をものともせず、欅と呼ばれた少年はさらりと返事を返した。

「結局お前は何がしたかったんだ？　俺をからかうためだけに、こんなとこまで来たとは言わせねぇぞ？」

「やだなぁ、からかうも何もボクは純粋にハセヲさんの安否を気にしてたんですよ。だからこそ、程立さんの要請に応えたんですし。まあ、若干ボクの趣味が入ってしまったことは事実ですが、それはそれとしまして……」

「……なんだ？　真面目な話じゃねーんなら俺はもう戻るぞ。アト

リの奴も待ってるしよ」

突如としてこの外史に来訪したきた、正史の世界での仲間たち。

そのうちの一人、ギルド『月の樹』のマスターである欅から話があると、ハセヲは呼び出されていた。

夕日に照らされた彼のお茶目な表情は、その筋の人を悶絶させるほどのあどけなさを醸し出していたが、無論ハセヲは歯牙にもかけない。

これまでにも何度も見てきた欅の表情は、時間を重ねるごとに捉えどころのない風のようなものに見えていたからだ。

本当は腹の底で何を考えているか分からない奴。

ハセヲの欅に対する認識はそんなものであった。

とはいっても、何だかんだ言って信用はしている。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを守りたいと考えて行動を共にしていた仲間としての欅の姿を、『再誕』の反動から助けてもらった恩をハセヲは大切に思っているのだから。

それなりに時間を共有してきたが、相変わらず正体が知れない欅をハセヲは黙ったまま見つめ続ける。

何の意味もなく面白半分でコイツがここまでやってくるはずがない、という想いを込めて。

「そうですね、確かに時間的余裕もそこまでないですし。アトリに

怒られちゃうのもなんですから――本題に入りましょうか」

「……」

改まった言葉とは裏腹に、浮かべている笑顔はそのままに。

不思議と、ハセヲには目の前にいるはずの欅がどこか遠くにいるように感じられたが……一つ頷いて続きを促す。

「ハセヲさんの行動原理はある程度分かっているつもりです。目的は手段を正当化させる……とまでは言いたくありませんが、それでも目の前に迫った惨劇があるならば、戦ってでも食い止めるべき。そう信じることが間違っているとはボクには思えません」

「……ああ」

「たとえ、力ある者のエゴだったとしても……この時代では、力なき者は限りなく無力でしかない。なら、ハセヲさん。ボクは貴方に新たな可能性（ちから）を提示できます」

「新たな……力？」

はい、と力強く頷く欅。

「いずれ、スケィスの力さえ失ってしまう可能性のあるハセヲさんに対する保険でもあるんですけどね。

一つは、対人戦においてはチート級の……制御も難しい大きな力。

もう一つは、対異形戦において必要になる力です。

どちらも、『黄昏の腕輪』の力を行使して使うことができます」

「……腕輪が必要ってことは、使用回数制限があるわけか？」

「はい。それと同時に強すぎる力は、それを扱う人間をも呑みこむ諸刃の剣でもあります。そのへんは、言うまでもなくハセヲさんには解っていますよね」

神妙な顔で頷くハセヲの脳裏には、『あの時』の情景が昨日のことのように浮かんでいた。

――道を外れた力は”暴力”でしかない。

必要以上の力を使うことで、周りの仲間を巻き込むような真似だけはしないとハセヲは固く決心していた。

ハセヲのそんな決意を読みとったのか、欅は気持ち張り詰めさせていた雰囲気を普段通りのものとしていく。

「それで？　その力ってのは、具体的にどんなものなんだよ？」

「分かりやすく言えば、伝説の武器ですよ♪」

「……は？」

笑みを深め、ひょうひょうと欅が口にした言葉は単純明快であったが、逆にハセヲを混乱させる。

まあ、それも当然だろう。

こんな状況下――異世界に来訪中――ではあるが、伝説云々をすぐさま信じる者は頭が少々沸いていると思われても仕方ないとい

うものだ。

「それは、黄昏の鍵みてーな幻のアイテムってことか？」

「いえ、そうではなく文字通りの意味ですよ。神話、伝説、説話に祀られている英雄たちが使っていた武器。有名どころで言えば、アーサー王の聖剣”エクスカリバー”でしょうね。

その中でも、唯一歴史上で実在を確認されている『とある人物』が愛用していた”大鎌”が手に入りましたので、ハセヲさんに進呈しようかと。なんと『不死殺し』の特性がついているらしいですよ♪」

「……ツッコミたいことは山ほどあるが、そんなもんどーやって手に入れたんだよ？」

「――――知りたいですか？」

「いやっもういい聞きたくねえっ！？」

「そうですか？　あ、ちなみにもう一つは、『世界の守護者』の力を借りるものです。

それで、どうします？　力を求めますか？」

あまりにもハセヲの予想の斜めをいく言葉をさらっと吐いた欅だったが、力が必要なことは確かなのである。

ゆえに、どうしても譲れない一点が解決するのであれば……と、ハセヲは問いかける。

「不死者すら殺すなんて大仰な特性は、対人戦ならチートでしかね

ぇが……俺にとっちゃ不都合なモンだ。俺は直接この手で人を殺したくない。せっかく手に入れてくれたものだろうと、ここは譲れねえな」

いくら強力な武器であろうと、そんな特性はハセヲにとって無用の長物であった。

そして、そんなことは欅にも分かっているはず。

ならば――――

「ふふっ、安心してください。先ほどはそう言いましたが、実際は特性を発揮させることまではできないんですよ。ハセヲさんは本来の使用者――――担い手ではないので、真の力まで使いこなすことは無理なんです」

安易に力を求めているわけはなく、起こりえる可能性をしっかり見極めようとしているハセヲの態度に欅は破顔した。

どうやらハセヲの予想通り、欅は情報を出し渋っていただけのようである。

まるで、こちらを試していたかのように。

対して、聞かせてやるように舌打ちを零したハセヲだったが、その表情に険悪さは出ていない。

いまさらという考えもあるが、話がこれで全て終わりだという保証もないからだ。

下手をすれば、今以上の秘密があるとしても――――

「……他に何もなけりゃ、力をくれ。全てを取り戻すための力を……！」

「はい！　あとは腕輪の作用の結果、大鎌の属性が強化されてハセヲさんに宿っている『碑文使いたちの影』の力が発動してしまう可能性がありますが……そうなったとしても問題はないでしょう♪」

「そうか……って、はあっ!?　碑文使いの影ってーと……”アイツ”の力まで使う羽目になんのか!?」

――――過言ではなかった。

というよりも、ネットワーククライシスを回避させてみせたハセヲだったからこそ、驚きも大きい。

まさか、その『元凶』の力を使うことになるなど、予想外にも程があるというものだ。

にもかかわらず、平然と別に大丈夫でしょうと言ってのけ、ニヤニヤと良い笑顔を浮かべている欅。

思わず、湧き上がってくる想いに従い、その細首を絞めてやりたいという衝動がハセヲの両手を震わせる。

「結局のところ、強すぎる力は使用者の”心”次第で『救い』、『滅び』のどちらにも転んでしまうんです。ようは、力の方向性が肝心なんですよ」

「……」

と、そこでハセヲから表情を隠すように反転した欅から”らしくない重みのある声”が響いた。

それは、普段から内面を外に出すことのない欅が初めて見せた、心の一部だったのかもしれない。

いま欅が何を考えているのか、ハセヲには分からなかったが――”一つ”だけ解ったことがある。

「大鎌が最も象徴するのは、処刑執行。敵対する者の命を刈り取るということ。ですが、考えようによってはこうもとれませんか？　大切な花を――仲間や自身の想いを侵そうと伸びてくる雑草を薙ぎ払って護り抜く。綺麗事かもしれませんが、そうあっていけたらと思うんです」

「……ああ、そうだな」

そこで欅はクルッと首だけを回し、横顔をハセヲの方へと向けた。

逆光気味に差しかかった夕日を受け、その横顔はハッキリとは窺えなかったものの、ハセヲは今の欅が浮かべているであろう笑顔は素直に受け入れらそうな気がしていた。

日頃の条件反射のように浮かべている仮面のようなものではなく、本来の想いをのせて零れた表情のままに、

「彼の人物が武器に込めた想いは『守護』。その本質は『影』の力を変換して、ハセヲさんが望む道を叶えるために適した力を与えてくれるでしょう。

ですから……ハセヲさんなら、間違った力の使い方をするようなことにはなりませんよね？」

任せてもいいのか、と確認をしてくる欅。

対するハセヲの答えは変わらない。

確かに戸惑いはしたが、ハセヲにとって譲れない一点が解消されたなら、あとは自分の問題だった。

（使わずにすめば、それが一番なんだろうがな。覚悟はしておくべき、か）

欅から向けられた信頼を受けるに相応しい、そんな自分らしさを見せつけるべく。

ハセヲは、不遜なほどに口元を吊り上げて言う。

「――ああ、当たり前だ！」

「――――上位拡張（エクステンド）」

その言葉を境に、空気が変わった。

いや、呑みこまれていったというべきだろうか。

突如として出現した強大な力の波動が周囲を貫き、広がっていったのだ。

結果、怒号と悲鳴が交差していた戦場の一角に、何とも言えない静寂がおりる。

あわや、手にもつ武器さえ取り零してしまいそうな者が出るほどの不可思議な光景。

もはや敵味方関係なく、周囲の人間たちは呆けたようにその光景を見つめている。

何度となく驚きの光景を目の当たりにしてきた、少年のことを少なからず知っている者たちばかりであったが、”これ”は想定以上の事態だったのだ。

彼らの視線は一人の少年――――より正確にいえば、少年のもつ大鎌に集中していた。

一目で格の高さを窺わせる、凄まじい代物。

重く、鋭く、全てを切り裂く。

”それ”は、”そういうもの”であると明確に意識させる形状。

１００m級の超大型竜の牙を彷彿とさせる漆黒の鎌刃には洗練された美しさこそないが、周囲の人間全ての心を掌握するかの如き存在感を放っている。

対して長柄は人間の大腿骨のような外観をしており、鎌刃を支えるには若干頼りなさそうな細さを呈しているが、実際に掴んでいるハ

セヲにはよく分かっていた。

（コイツは……強力だな。強さの底が自分でも解らねえ）

腕輪から溢れた影を纏った途端に、分解・再構築されて現れた大鎌は、人が手にするには過ぎた代物のようである。

大鎌が放っている存在感の源は、明らかに人間が抱えるには深すぎる『闇』そのものだ。

視ただけで無条件の降伏を宣言してしまいそうなほどの、人の本能を刺激する原初の”一”。

だというのに――

（あれほどの闇に呑まれているというのに……ハセヲ殿の気配は揺らいでいない。むしろ、芯が通ったかのように安定している）

目に見える感覚は未知の闇に対する恐怖を呼び起こしているというのに、肌に感じる気配は穏やかなものだ。

大鎌が放っている存在感に対して、まるで清冽な水のせせらぎを彷彿とさせるハセヲの佇まい。

その相反する事実が、愛紗の額に汗を滲ませる。

――今のハセヲは、間違いなく強い。

当然、強大すぎる力はハセヲ自身も大きく消耗させるのだろうが、そのぶん受ける恩恵もまた大きい。

開戦前こそ絶対に負けられない戦だからと、気が進まないままに朱里から補助呪文をかけられていた愛紗だったが、ここにきてハセヲに対する後ろめたさを感じる余裕はなくなってしまった。

そんなものを抱えて戦っていれば、すぐさま地面に倒れ伏す結果につながってしまうことだろう。

「これが、今の俺に出せる最大戦力だ。つっても、かなりブースト……能力の底上げをしてっから、俺だけの力じゃねーんだがな。だから気にせずかかってくりゃあいいぜ、関羽。お互い、ここで負ける訳にはいかねえだろ？」

「……っ！？　本当に……貴方という人は……！」

内心の想いを読みとられた愛紗は、とっさに表情を取り繕うとして……諦め、俯いてしまう。

一瞬、泣きそうに歪んでしまった目を閉じ、平静を保とうとするが――こんなときだというのに、感情を抑えきれない。

自分でも整理しきれない愛紗の胸中に広がっているのは、ハセヲに対する感謝と未練。

――かつてない力が溢れている今の自分と互角以上に戦える人物がいること。

――そして、自分はそんな彼と共に歩みたいと思っていること。

――別世界の人間であるにもかかわらず、この大陸の行く末を憂いてくれていること。

――なのに、お互いの道は重なることなく、すれ違ってしまって

いること。

区切りをつけたはずの想いが再びせり上がってくるのを、愛紗は必死で押しとどめ――――

「分かりました。決着をつけましょう、ハセヲ殿」

顔をあげた時には、普段通りの表情へと戻った愛紗がいた。

自分に対抗するため、もてる全てをかけてくれたハセヲと戦うのに、余計な憧憬（かんじょう）を抱くのは失礼でしかない。

自分はどうしたいのか、そんなことさえも分からないままに。

結局愛紗は、強い意思と自己暗示によって混沌とした思考を意識の底に封じ込め、戦いのみに意識を集中させる。

「おう。仕切り直しといこうぜ、関「愛紗と呼んでください……！」……ん？」

「他の者と比べて、随分と遅くなってしまいましたが……私の真名は愛紗です。ハセヲ殿には今後、こちらで呼んでいただきたい」

だがせめて、と。

今の自分に許される精一杯の気持ちを伝え、愛紗は青龍偃月刀を構えなおす。

その瞳の奥には未だ涙のカケラがくすぶっていたが、身体はしっかりと戦闘態勢に移行していた。

「じゃあよ……行くぜ、愛紗ぁ！！」

対するハセヲもまた、大鎌を肩越しに構えて応ずる。

――その銘を”黄昏の鎌器”『ラグナロク』

果てのない想いが生んだ、一つの奇跡。

「アアアァァーーー！」

「っく、……せい！」

もう何度目になるかも分からない斬撃を、華琳は大鎌”絶”を巧みに捌いて受け流し続けていた。

攻撃を受けるたびに軋みをあげる絶の刃に、相手の力量の高さをまざまざと見せつけられる思いの華琳。

まあ、それも対峙した瞬間から分かっていたことではある。

――天の御遣いの守護者にして、無情なる騎士”蒼炎のカイト”。

今は劉備軍に仕えている、赤いツギハギだらけの軽鎧を纏った少年は、防戦一方の華琳を容赦なく攻め続ける。

両手に構える三爪の双剣”虚空ノ双牙”から繰り出される斬撃は、どれも遊びの無い鋭手ばかり。

武器としては重みのある大鎌相手に、比較的軽量である双剣でここまで打ち負けているのも厳しい。

何とかそれらを回避しつつ、華琳は久々に”死”の境界線に立たされた戦闘を、ギリギリのところで踏みとどまっていた。

以前、虎牢関にてカイトの戦いぶりを見ていなかったならば、とっくに殺されていただろう。

とにかく敵を倒すことを最優先事項としている傾向がみられるカイトの攻撃は、威力よりも手数を重視したもの。

ひとたび攻撃を加えられれば敵の体勢は乱れ、続けて連続攻撃を叩きこめば、数秒後には地面に倒れ伏す死体が完成することになる。

それゆえ、回転の速さが乗じるにつれての、相手に反撃を許さないほどの攻勢を仕掛けるのがカイトの基本戦略であった。

実際、この戦闘が始まって以降、華琳から斬りかかったのは、初めの数合くらいのものなのである。

その事実に歯噛みするでもなく、華琳は冷静に”機”を窺っていた。

（ここまでデタラメなんて、ね……！　でも、このままじゃ終わらないわよ）

瞬きも忘れて見開いた目に、追撃の刃を振りかざしたカイトの姿が

映った。

同じくらいの体躯を大きく沈みこませ、その分勢いにのった斬撃が華琳へと迫る。

「はぁ！」

しかし、予測通りだった攻撃に華琳は”絶”を斜めに当てて力を受け流すと同時に、前へと踏み込む。

その際に、反転させた長柄による牽制を仕掛けることで、カイトと交差する要領で距離を取ったのだった。

（……ふぅ、このままじゃ保たないわね。もう少し観ていたかったけれど、そろそろ勝負を仕掛けるしかないか）

華琳は、ようやく一呼吸つける間合いまで下がると、チラリとカイトを見つめる。

こちらの消耗は目に見えるほど明らかであるにも関わらず、対して涼しい顔をしているカイトの姿に、華琳は追い詰められていることを意識しつつも、勝ち目はあると踏んでいた。

――彼女が持つ多様な才能の中に、観察力というものがある。

相手の行動パターンや癖を解析し、ある程度の予測を立てて対抗策を講じる、というものだ。

一角の武人であれば、誰しもがある程度は研鑽を積んでいる技能であるが、華琳の”それ”は並はずれた高みにある。

そこで、ここまでの防戦で得た情報を吟味し、華琳は”絶”とカイトに意識を集中する。

周囲に対しては無防備となってしまうが、そこは親衛隊の者たちがせめてとばかりに奮戦しているため、任せることにしたようだ。

――ゆえに。

（返しの刃に全力を傾け、極限まで意識を研ぎ澄ませて、訪れる”機”さえ外さなければ――勝てる！）

繰り出されたのは、予想通りの右上段からの振り落とし、次いで左からの胴薙ぎ。

凄まじい加速からの体重が乗った一撃が華琳へと迫るが、

（ここ……！）

甲高い音とともに、”虚空ノ双牙”が左腕ごと横へと流された。

これまで防御と受け流しに専念していた華琳が、不意に”絶”の刃を今までよりも強く払い返したのだ。

体勢が僅かに乱れたものの、カイトはすぐさま”虚空ノ双牙”を引き戻そうとした。

追撃の右が流された腕が邪魔となって潰されているための、仕方なしの行動だったのだが――そこへ華琳が戻しのタイミングに合わせて”絶”を振りかぶる。

「――ッア、アアァァ！！」

それでも、カイトは迎撃しようと”虚空ノ双牙”を繰りだした。

しかし、体勢が万全ではなかったためか、カイトの迎撃にはこれまでの力強さはない。

対して、華琳の斬撃は体重の乗った申し分ないもの。

本来の道理のままに、威力で勝る大鎌は双剣を弾き飛ばしてカイトへと殺到し……

斬っ！！

カイトを後方へと吹き飛ばした。

とはいえ、迎撃を受けたことで”絶”の軌道が逸れたこと、とっさに生まれた僅かな間で後方へと回避されたこともあって、致命傷には至っていないだろう。

そう判断していた華琳の予想通り、肩から下腹部にかけてまで斬られた痕を見せながらも、痛みを感じさせないような様子でカイトがユラリと立ちあがる。

そのまま、切り口から蒼色の粒子がこぼれ出している様子をしばし

見つめていたが、結局気にもかけずといった感じで再び”虚空ノ双牙”を構えるのだった。

（――――今ので決められなかったのはキツいわね。けれど……やるしかない、か）

立ちあがったカイトを見つめつつ、華琳は再び意識を集中させ始める。

致命傷にはならなかったとはいえ、普通ならまともな戦闘を行うには苦しい程度の傷は与えたはず。

苦しいのはどちらも同じだと、華琳は心を震え上がらせた。

その双眸は、いまだ揺らがぬ戦意を灯している。

対するカイトは、さすがに猪突猛進を繰り返す真似はしないようだった。

先ほどの反撃を受けたことで、どう動こうか検討中とでもいうように、中々動こうとしないカイト。

その様子を焦れることなく、体力回復も兼ねて静観していた華琳だったが、

「――――なっ、あぁ！？」

目の前に現れた幻想的――――華琳にとっては、驚異でしかない――な光景に、思わず驚嘆の声を漏らしてしまった。

蒼く煌めく炎が、カイトを中心として渦を巻いている。

彼の者を包み込むように温かく、仇なす者を駆逐するように猛々しく。

しかし、不思議と熱を感じさせることはなく。

舞うように噴き上がった蒼炎は、そのまま”虚空ノ双牙”に吸い込まれていった。

勢いよく燃え盛っていた規模の炎が凝縮された”虚空ノ双牙”が、直視に耐えないほどの光を放ち出したのと同時。

（これは――――不味い！？）

大地を蹴ってこちらへと疾走するカイトを見据える華琳は、言い知れぬ不安を感じ取った。

際限なく高まっていく力に対抗する術が、全く思いつかない。

きっと、”アレ”が敵の切り札なのだろうと考えることしかできないままに、

「――――三爪炎痕！！」

三条の炎の軌跡が、華琳へと吸い込まれていった。

## 第5話（後書き）

いかがだったでしょうか？

以前に、竜王&竜姫様からいただいた”黄昏シリーズ”より、大鎌をハセヲの切り札として使わせていただくことに。

今後とも、重要な場面では使っていく予定です。

その詳細は、愛紗戦が終わったら説明を入れますね。

まあ、ゲームやってる人なら性能について予想がつきそうな気もしますが……大概チートです。

使いどころは気をつけたいところ。

そして、次回のキーワードは『戦場に咲いた華』です！

では、またいつの日か♪

# 第6話（前書き）

みなさん、こんにちは。
早いもので、執筆を開始して一年と三週間がたちました。

ここに投稿した当時は、書く以上指標となる目標が必要だと考え、
３つの努力目標をたてました。

そのうちの二つをほぼ同時に達成できたこと、本当に嬉しく思います。

一つは、１００万ｐｖアクセス。もう一つは、総合評価１０００ポイント。

両方とも、読者の皆様が温かく見守ってくださった結果です！
本当にありがとうございます！！

これで残る目標は完結だけ。頑張っていきたいと思います！

それでは、今回の御話をどーぞ！

# 第6話

「団長には今までも散々驚かされてきたけどよ、今回は格別だよなぁ」

「……そーだな」

背中を預けて戦っていた天遣隊の団員たちは、緊急時らしからぬ緩い視線を向けていた。

その先には、戦場を縦横無尽に駆け回る、白と黒の疾風と化した二人の姿が見える。

「おおアアアァァーーーー！！」

「でえええぇぇーーーいぃ！！」

明らかに自分たちの常識の外側で激しく斬り結びあうハセヲと愛紗の戦いぶりを、どちらともなく見つめ出した天遣隊と関羽隊の面々。

ただただ凄まじい強さを誇っているという事実以外、彼らに分かることなどなかったため――理解不能・思考停止――の結果が、現在の外野の状況だ。

とはいえ、これは間違いなく後世に語り継がれるだろう名勝負。

その対決の立会人となれる機会を、両軍の兵たちは見逃したくなかったのである。

「でもまあ、これだけは分かるぜ」

その中で、今まで黙って二人の戦いの推移を見守っていた団員が、不意に口を開いた。

その顔に、薄い笑みを浮かべて言う。

「これから見られるのが、俺たちの団長の全力。そして、それを支えるものこそが――――俺たちが尊敬する、団長の『強い想い』なんだよ」

「でえぇぇやあああーーー！」

青龍偃月刀が高速で振り抜かれる。

それ自体の質量に、強化されている愛紗の膂力と斬れ味を加えてやれば、その運動エネルギーの衝突に耐えられる武器などほとんど存在しない。

まさしく、その攻撃全てが必殺。

それこそ伝説級の代物を引き合いに出さなければ、触れた瞬間に粉砕されてもおかしくはないほどだ。

しかし、対する大鎌は”黄昏”の銘をもっていた。

人知れず世界を覆い尽くそうとしている『闇』を狩る少年が愛用しているだけあって、その性能は全く引けをとらない。

ゆえに――――

「オラアァッ！」

斬りあげた黄昏の鎌器と青龍偃月刀が激突した瞬間だった。

物理的な衝撃はもちろん、接触部では異能（ちから）同士がせめぎ合い、耳をつんざく轟音が生まれる。

かたや『反存在の痛打』による、威力上昇。

かたや『不壊ノ涅槃・改』の補助による、弱点属性（ひかり）の追加効果。

武器が纏った無形の異能は、お互いを侵食・破壊しようと力を干渉させ合うが――――どちらも叶わず、反発しあった力のみを拡散させていく。

「くぅっ……！」

「っぎ！？」

少し遅れて両者の方から亀裂が入る音が響いたが、お互いの得物は無傷。

むしろ耐えられなかったのは、足元の大地であった。

激突の反動は、両者の足を通じて大地を震撼させて”なお”余りある加重の前に砕かれたのである。

「～～～っつう、さすがだな……愛紗」

「……ふっ！」

ハセヲの称賛に、鋭い気合いを返すだけで応えた愛紗からの横薙ぎ。

その一閃を、あろうことかハセヲは跳躍して回避してみせた。

数十キロはある黄昏の鎌器を抱えての、優に２ｍを超える跳躍の最高地点で、そのままハセヲは前転の要領で一回転。

縦に円を描く軌跡を辿った黄昏の鎌器による強烈な返し技が、愛紗の頭上へと振り落とされる。

「――――！？」

まるで曲芸師のような動きから繰り出された攻撃に、愛紗は完全に意表を突かれた。

何とか長柄を掲げて受け止めたものの、踏ん張りが甘かったのか、衝撃を流しきれずに片膝をつく形で体勢が崩れる。

「……っはぁ！」

それでも辛うじて凌ぎ切った愛紗は、派手な技を出し終えたハセヲの隙をつこうとした。

だがその一撃も、当然狙われることを予測していたハセヲは対処を図る。

逆さまに落下する身体を片手のみで支え、左足を青龍偃月刀の長柄に叩き込んだ。

「うおぉっ！？」

鉄甲で覆われた靴の一撃とはいえ、旋風のごとき愛紗の一撃を相殺できるはずもなく、ハセヲの身体は後方に吹っ飛んだ。

もとより吹き飛ばされる形で回避するために蹴り込んだのとはいえ、想像以上の衝撃にハセヲは若干焦ったものの、身体を丸めて着地の衝撃を分散させる。

しっかりと受け身をとって着地を決めたハセヲが視線を戻せば、隙なく構えなおした愛紗の姿があった。

堂に入ったその構えに、ハセヲは顔についた土を拭うこともせずに黄昏の鎌器を構えなおす。

「本当に……貴方は強い。ですが、勝つのは私です！」

「やってみやがれ！」

雄々しく叫び返したハセヲに放たれる、地面を舐めるかのような愛紗の剛撃。

凄まじい剣圧に巻き込まれた石礫さえも無数の弾丸となって迫る一撃を、ハセヲが黙って許すはずもなく――

「効くかよぉっ！」

黄昏の鎌器をつきあげ、眼前を横薙ぎ一閃。

緩やかな動きだったにもかかわらず、黄昏の鎌器から溢れた莫大なエネルギーは強烈な衝撃波を発生させ、石礫の弾丸を全て叩き落とした。

「……っせい！！」

裂帛の気合い。

衝撃波によって巻き上がった粉塵の中から、無数の浅い切り傷を負った愛紗が飛び出してきた。

放たれた衝撃波を縦断したものの、その隙間を通り抜ける際に負った傷を気にかける様子もなく、愛紗はハセヲに肉薄する。

「――――！？」

左手で振り抜いた青龍偃月刀を後方へと突き出し、自然と前方に伸びる形となった右手を固く握りしめて脇をしめる。

同時に行われた、大地を踏みぬかんばかりの震脚。

その反動を存分にのせた砲弾のような正拳突きが――――とっさに後退しようとしたものの、間合いの外までは逃げきれなかったハセヲの頬を、抉るように打ち抜いた。

「よっしゃあ！　あれは効いたぞ！」

「～～～！？　団長っ！」

この戦いが始まってから初めてのクリーンヒットに、外野から興奮と悲痛気な声が響く。

「――――！」

しかし、凄まじい衝撃を受けたことで弾かれたように首を捻じ曲げられながらも。

ハセヲの双眸は、はっきりと愛紗の姿を捉えていた。
その強い眼差しは、決して戦いの幕引きを迎えると考えるには早すぎるもので――――

「だらあああぁぁ！」

裏返ったような雄叫びと共に、ハセヲの右足が愛紗の左足に触れるほど踏み込まれる。

直後、そりかえるように後退していた上半身が勢いよく起き上がると同時に、愛紗の腰付近で衝撃が生まれた。

「……っぐぅ！？」

危険を察した愛紗がとっさに腕を戻した瞬間、長柄越しに炸裂した超至近距離からの肘打ち。

技術的には及第点にも至らないものの、込められたエネルギー的にいえば超一級品の打突は、十分な防御に備えられなかった愛紗の身体を衝撃で跳ね上げさせた。

大きくのけ反った上体を、あえて立て直さずに倒れるに任せ、愛紗は後方回転の要領でハセヲから距離をとる。

何回か連続で後転を行い、片膝立ちで起き上がった愛紗が素早く辺りを見回したとき――

「――環伐弐閃！」

左方から追撃の刃が迫っていた。

ハセヲの足元に浮かんだ魔方陣から迸る力が鎌刃にさらなる力場を形成させ、愛紗に牙をむく。

（……っうぅ！？　ここだ！）

瞬時に判断した愛紗は、頭が地面につくかのような低姿勢で環伐弐閃を回避し、あまつさえ反撃までしてみせた。

左肩のあたりに焼けるような熱を感じたものの、歯を食いしばって点をつく直線の攻撃を放った愛紗。

円を描く一閃目をかわされ、返しの二閃目が届くよりも早く。
後から放たれたとはいえ、軌道の距離で後手にまわるハセヲの攻撃は石突による打突を迎撃しきれず、

「……っぐぁ！？」

――――左腕にくらってしまった。

骨が軋む音とともに、苦悶に満ちた声がハセヲから零れる。

それでも黄昏の鎌器を手放さず、間合いをとるべく後退するなかで――――ハセヲは改めて愛紗の強さを実感させられていた。

アーツは確かに強力な切り札である。

しかしながら、人が操るものに絶対などない。

戦術も何もなく、ただの力押しで打ち勝つことができるほど――――愛紗は弱い人物ではないのだ。

今回に限っていえば、環伐弐閃は愛紗に完全に見切られていたからこその、先ほどの反撃だった。

ハセヲの攻撃のタイミングを一部の狂いもなく読み切る――――何度となく愛紗の前で披露していたこともあるし、実際に模擬戦で使ったこともあったとはいえ――――ことができたことに加え、強烈な攻撃に臆さず前へと踏み出せる精神力を併せ持っているのが、関羽という偉人なのである。

（……ってえな。こりゃあ、折れちまったか……って！？）

全く動かない左手に痛ましげな視線を一瞬送り、再び愛紗を見据えたハセヲが目にしたのは、

「どう、して……！　なぜ、私と来てくれないのですかハセヲ殿！？」

思わず目を奪われそうになるほど綺麗な涙をこぼしながら、懇願するように訴える愛紗だった。

――――その姿は、武人というよりは年相応の女性にしか見えないもので。

この光景には、ハセヲはもちろんのこと関羽隊の面々も驚きを露わにしていた。

実直で凛々しい愛紗が人前で涙を流すなど、彼らには全く考えられないことだったのだから。

こうして実際に目にしているというのに、まだ信じられないといった感じで彼らは愛紗を見つめ続ける。

「貴方が曹操殿の力になると決めたなら、それを違えることなどない。そんなことは分かっています！　ですが……納得したくありません！！」

「……愛紗？」

「今さらだと解っているのに……！　ああ、もっと早く貴方に出会えていたなら……っぐ！？」

そこまで言ったところで、愛紗は唐突に顔面に拳を打ちつけた。

その瞬間、先ほどまで纏っていた儚さは霧散する。

「～～～っく！？　忘れてください、今のは何らかの精神攻撃の結果です！！　私の本意ではありません！！！」

「いや……そう言われてもよ」

もとより戦意高揚して火照っていた愛紗の顔は茹でダコもかくや、という感じになっていた。

それでも構えはしっかりしているあたり流石だよなと、ハセヲは場違いな感想を抱く。

どうやら、先ほどの発言に対して理解が追いついていないようだ。

ちなみに愛紗の言う通り、先ほどの発言には肩口をかすめた際に効力を発揮した『反存在の撹乱』が作用していた。

それでも、口に出した想いは――

「それより顔色が悪いですよ、ハセヲ殿。その様子では単に先ほどの攻撃だけではなく、今の状態の方に問題があるのではないですか？　だとしたら、この勝負はもらったも同然ですが」

「……へっ、人の心配をしてる余裕があんのかよ？　そういう愛紗だって、少しずつだが反応が遅れてきてるぜ。強化した力の反動で、頭じゃ分かっていようが身体は上手く動かなくなってきてるんじゃねぇのか？」

仕切り直しを図るように、挑戦的な口調でまくしたてる愛紗。

なぜ意識の奥底に閉じ込めた感情が表面化したのか分からず混乱していたものの、やるべきことまで見失うような下手はうたない。

完璧に見切っていたはずの環伐弐閃が僅かに愛紗を捉えたのは、ハセヲが言うように身体が加速した思考についてこられなくなっているからであるが、状況は圧倒的に愛紗の方へと傾いていた。

ハセヲからの攻撃を受けたはずの左肩だが、傷さえ見受けられない自分。

不思議と痛みを感じた瞬間、ごそっと体力を奪われたような感覚に見舞われ、現在も無視できない消耗を受けてはいる。

しかしそれ以上に、力の反動と左腕の負傷による消耗がハセヲを苛んでいることは明らか。

それでも虚勢を張っているように見えないのは――今だ、ハセヲの瞳から消えていない意思の光ゆえのことだ。

「ならば、そろそろ終わりにしましょう。我が魂魄をかけた一撃のもと、貴方を叩き伏せる！」

「できるもんならな。俺を倒せたんなら、あとは好きにしろよ。協力でも何でもしてやる。
まあ、そんな未来は来やしねーんだがな！」

「――その言葉、必ず守ってもらいますよ」

今までの態度が嘘だったかのように、愛紗の顔から熱が引いていく。掲げる武器のみならず、全身から研ぎ澄まされた刃のような気迫を放つ愛紗の姿は、まさに絶好調といった様子。

ここにきて心技体全てが噛みあったかのような佇まいの愛紗に内心舌を巻くも――ハセヲは不敵な態度を崩さない。

手負いの獣が放つような壮絶な気配ではなく、傲岸不遜ともいえる余裕ある笑みを浮かべたハセヲの姿を、愛紗もまた油断なく見据える。

そして――

黄金の流星が、一人の女性を何度も打ち据えていた。

ろくに反撃を許さないほどの間断ない攻めは、容赦の欠片も見当たらない強烈無比なもの。

それでも倒れることなく立ち振舞っているあたり、女性の方とて尋常でない強者には違いない。

速射砲のごとき連撃を浴びせ続ける者と、機を見て乾坤一擲の猛撃を繰り出す者。

どちらの攻撃も一撃必殺には違いないのだから、単純に手数の差で前者が有利……というわけでもなかった。

傍目にはそのように捉えているのか、後者を見守る者たちの態度には緊張が見えるが、その実は――

（……っく！？　これでもまだ足りないか……！）

内心で苦々しい想いを吐き捨てるように呟きながらも、星は速度を緩めることなく呂布へと迫っていた。

己が誇りである槍術は通じている。
速度でも負けていない。

それでも徐々に追い込まれている。

理屈ではない何か――いうならば、本能の差とでも断じるものであろうか。

結局のところ、持っている『もの』の圧倒的な差が、この結果を生んでいるのだろう。

これが呂奉先。

これが――万夫不当の極み。

「なかなか……当たらない」

ぽつりと呟いた言葉には、苛立ちが混じっていた。

とはいえ、それはこちらの実力に見切りをつけつつある証拠に他ならないと、間合いを取り直して星は引きつりそうな顔を精一杯堪える。

武の道を突き進むことを決めた者なら、誰もが抱く最強への道。

その体現を成した者こそが、目の前の少女であることを――”今は”認めずにはいられなかった。

（――世は広い。ハセヲといい、呂布といい、こうも強い者たち

がいる。だが……私もまた強くなる！）

しかし、目指すべき高みを諦めているわけではない。

強さを求める意味は変わらず。

そこに『最優先対象』を明確化して、星は手を伸ばし続ける。

守りたい者を護り抜く強さを――

（……倒すのは二の次。いま何よりも必要なのは、決着をつけるための時間なのだ）

槍ぶすまの間隙をぬって放たれる呂布の斬撃は、まともに受ければ槍を弾き飛ばされそうになるため、星はなるべく回避に努めていた。

それでも回避しきれない攻撃はいなして軌道をずらす。

何の後押しもなく、純粋な身体能力と内包している氣だけで衝撃波すら巻き起こす呂布という大海を、星は”静カナル翠ノ楽園”を繰り捌いて泳ぎ切ろうとする。

そして――意外と早く、攻勢に転機が訪れる。

「――っし！」

当たらないことに焦れたのか、これまでよりも大振りな呂布の一撃。

右手のみで振るわれた横薙ぎは、踏み込まれた足と伸ばされた腕の長さにより、圧倒的なリーチを誇って星へと迫る。

が――

「っはぁ！」

当然、かわされた時の隙も大きい。

強化されている動体視力を駆使して、紙一重の間合いで回避。

その瞬間、間合いをつめる。

振り回した勢いで、方天画戟は呂布の背後まで回されてしまっていた。

この機ならば、自分の攻撃が必ず先手を取れる。

そう確信した星の瞳に、歓喜の光が灯ろうとして――すぐさま、新たな驚愕に塗り替えられた。

（――馬鹿なっ！？）

呂布がいかに凄まじい身体能力を誇ろうが、大きすぎる反動を殺して切り返しをすることなど不可能。

その認識でいた星の目は、同じ方向から迫りくる一撃――予想外の追撃――を捉えていた。

呂布は、方天画戟を右手から左手に持ち替えて自分を中心に一回転。

初撃から逆方向に切り返すのではなく、同方向からの第二撃を放っ

たのである。

リーチを最大限に活かしたことで遠心力が存分にのった追撃を、攻撃態勢に入ってしまった星が避けることは難しい。

ならば――

「緋々威（ひひおどし）！」

星は回避行動を捨て、迷うことなく切り札を切った。

いま最も必要な突破力を”静カナル翠ノ楽園”に求め、溢れ出た力を前方へ解き放つ。

『深緑ノ恩恵・改』に増幅された力は、槍の輪郭を霞めるほどのエネルギーを生み出し――

両者の中間点で、爆発音が響いた。

強大な力と力の正面衝突。

掛け値なしの全力を込めあった激突地点には、大きく陥没した穴が二つと、一人の人物の姿が。

「や、やりましたね！　副団長！！」

槍で自らを支えるようにして立つ星の姿を捉えるなり、周囲から祝福の声が湧く。

服はもちろん、全身に切り傷、打撲を受けたボロボロの姿ではあったが、団員達には呂奉先をたった一人で倒した彼女の姿がとても畏れ多く見えていたのだ。

対照的に星は、未だ厳しい視線を大地に横たわっている呂布へと向けていた。

その様子は、まるで決着はまだついていないかのようで――――

「……痛かった」

むくりと、呂布が起き上がる。

そのまましばらく身体の調子を確認するかのように全身を動かしていたが、それほど問題はなかったようだ。

どこか身体の動きがぎこちないあたり、骨にヒビくらいは入っているのかもしれないが、少なくとも戦闘に支障がない程度には収まったようである。

（もてる力を全て懸け、そのうえで最善を尽くして……なお届かない相手だというのかっ！？）

対する星には、限界が訪れようとしていた。

受けたダメージよりも、消耗してしまった体力の方が厳しい。

高速機動戦闘は容赦なく体力を使ううえ、開眼したことによって得た力の反動もある。

いま戦闘を続けたところで、始まってすぐに捕捉・撃破されてしまうだろう。

それでもやらないわけにはいかない。

あくまで動揺を外に出さないよう、槍を構えなおした星は、

「――――!?　この勝負、預けたぞ!!」

不意に目に入った光景に、慌ててこの場を後にしたのであった。

先に仕掛けたのは愛紗だった。

神速の踏み込みからの、全身の力をのせた一撃。

風切り音すら置き去りにして、白銀に輝く刃がハセヲを襲うが、

「――――黄昏の鎌器、全解放（フルトランス）」

――――静かな、それでいて万言をこめたような言葉がハセヲから零れた。

途端に膨れ上がる、絶対的な気配。

肌に突き刺さる感覚のみならず、物理的な旋風さえ纏うほどに強力な力の波動。

疲労しているはずの様子を感じさせないほどのプレッシャーを放ちながら、ハセヲは大鎌の鎌刃を外側に向け、右腕を左半身の方へと捻じるように近づけていく。

そして、愛紗が間合いに入った瞬間、ハセヲは右手を振り抜いた。

「「はあっ！！」」

鎌刃に集中、収束していく力を上回るべく、追い求める理想を叶えるべく。

愛紗は高まる想いを刃に重ねる。

どこまでも細く鋭く絞り込み、全ての力を一点に――――

「「「……ああっ！？」」」

両者が交差した瞬間、柏手をうったような音が響いた。

関羽隊の者たちにとっては心躍る――――青龍偃月刀が、鮮やかに対象を斬り裂いた――――音。

天遣隊の者たちにとっては絶望めいた――――黄昏の鎌器の鎌刃が砕け散った――――音。

そんな音の発生源となった二人の姿は対照的だった。

長柄だけになってしまった黄昏の鎌器を見据えるハセヲは、その場から動こうとしていない。

対して、愛紗はすぐさま体を入れ替え、再び間合いを詰めようとしていた。

（まだ終わっていない！　この切っ先をハセヲ殿に突きつけるまでは！！）

仮に、いまさらどんな攻撃がこようとも愛紗は対応しきれる自信があったが、最後のその瞬間まで警戒を怠るような真似はしない。

それが、自らの教訓であり、愛紗のハセヲに対する評価であり、信頼でもあった。

そして、その認識はまさに的中していたのだが――――

「その身に刻みやがれっ！」

――――今回は、相手が悪かったとしか言いようがない。

愛紗の方へ振り返ったハセヲが浮かべていたのは、いまだ不敵な笑み。

掲げたのは長柄だけになった黄昏の鎌器。

だというのに、今も高まりつつある力を迸らせている長柄をハセヲが地面に突き刺した瞬間――――

「――――!?」

戦場に漆黒の華が咲いた。

愛紗を中心として、放射状にそびえ立った六枚の花弁を思わせる刃。

魔性の美しさを誇ると同時に、死出の旅路に誘っているかのような錯覚さえ覚える造形。

その檻に囚われてしまった愛紗は、すでに彼岸に立たされているのでは……という嫌な思いに一瞬怯みそうになったものの、先ほどの環伐乱絶閃同様、かき消してしまおうと全方位を一閃した。

「そんなっ！？」

しかし、迫りくる六枚の花弁はびくともしない。

それどころか花弁に触れた瞬間、白銀に輝いていた青龍偃月刀は元の鉛色に戻ってしまった。

――これこそ、ハセヲが得た切り札。

鎌闘士（フリッカー）に与えられた特大アーツを上回る、ハセヲだけの極大アーツ。

その真骨頂は、よく見れば気付くことのできる、光を全く反射していない花弁にあった。

まるでブラックホールのごとく、光であろうが何であろうが近づいたもの一切を呑みこむ凶悪な刃が、

「摩天――葬掃華！」

三国志に名高き英傑――関雲長を貫いた。

周囲を満たしていた凄絶な気配が霧散し、普段通りの戦場の気配が戻って来た。

それでも、その一部始終を見届けていた者たちは今だ声すら発することができない。

動いているのは、ブツブツと身体の具合を確かめているハセヲただ一人。

黄昏の鎌器は本来の死出鎌・観音掌に戻っており、右手で支えている。

加えて、折れていて動かなくなっていたはずの”左手”をブラブラと振り、その場で何度か軽い跳躍を行った。

そこまでやって、軽く息を吐いたハセヲ。

その表情には、疲労感はもちろんだが満足気な笑みも浮かんでいる。

「……！？　か、関羽将軍！」

「心配すんな、殺しちゃいねぇよ」

ようやく我に返ったのか、慌てて助けに向かう兵たちの邪魔もせず、それだけを伝える。

『反存在の侵食』と『反存在の略取』が上手く効果を発揮したのが分かったらしく、安堵の息を零すハセヲ。

何とか左手も動く程度には回復したようで、本気は無理でも戦闘続行には支障ないようである。

「あれで殺してないとは……ん？　ということは、彼女も団長の後宮候補になるんですか？　さっきの発言からして、十分脈アリでしたし」

「おお！！　そういうこ「……どういうことだって？」……すいません、調子のりました」

まるで、ここが戦場であることを忘れたかのように振舞うハセヲたち。

気が張り詰めていた分、軽く心にゆとりをもたそうとしてくれているのだと、ハセヲが良い方向に勘違いしていたところに、

「――――この力は！？」

よく知っている力の発露を感じ取ったハセヲは、自身の状態を省みることなく現場に急行したのだった。

## 第6話（後書き）

いかがだったでしょうか？
今回からは『．ｈａｃｋ／／Ｌｉｎｋ』のネタが入ってきます。
その詳細は最後にて。

その前にお知らせです。

１００万ｐｖアクセス達成したので、その記念話を書こうと思っています！

時期は、今の劉備戦が終わり次第。
書く内容もすでに決めてあるのです。

とはいっても、ヒロインは星しか出てこないうえにドキドキ青春話などには断じてなりません。
むしろ、その対極にあって誰が読みたがるのかな？という感じかもです。

まあ私が書きたいから書く（これはもう決定）のですが、それだけではどーなのかと思いますので、読みたい話があるようなら御一報ください。

『誰』との『どんな話』にしたいのか。

私に書けそうであるならば、努力したいと思います。

それでは、また次回にて♪
次回のキーワードは『それぞれの意思』、『それぞれの選択』です！

以下は、『黄昏の鎌器』についてです。

外観は、Ｌｉｎｋに出てくるクビアの初期装備『永劫の黄昏』
黄昏の腕輪を使うことで使用可能に。

なので、使用回数制限があります。（現時点では、浸食率は５０％）
それと、痛みの森で入手できた『反存在の〇〇』が付加スキルとして効果を発揮します。

『反存在の痛打』
クリティカルヒット発生確率を２５％アップする

『反存在の窃盗』
攻撃ヒット時に、ダメージ値の２５％を自分のＨＰとして吸収する

『反存在の撹乱』
攻撃ヒット時に、バッドステータス・混乱を与える

『反存在の汚染』
攻撃ヒット時に、対象のＨＰを強制的に半減させる

『反存在の相擁』

攻撃ヒット時に、ダメージ値の２５％を自分のＳＰとして吸収する

ここから下のスキルは、『全解放』時のみ上記のスキルがパワーアップして利用可能に。
ただし、『全解放』を行うと最大１０分以内には”死出鎌・観音掌”に戻ってしまう設定です。

『反存在の魅縛』
攻撃ヒット時に、バッドステータス・魅了を与える

『反存在の侵食』
攻撃ヒット時に、対象のＨＰを現在の１０％にする

『反存在の略取』
攻撃ヒット時に、ダメージ値の５０％を自分のＨＰとして吸収する

『反存在の抱擁』
攻撃ヒット時に、ダメージ値の５０％を自分のＳＰとして吸収する

このときに限り、Ｌｉｎｋでハセヲが使っていた『摩天葬掃華』が使用可能に。

以上、恐ろしくチートな結果になりました！

ですが、対人戦闘以外では使う機会はないでしょうし、実力伯仲の

相手には中々攻撃自体を当てにくいので、結構性能泣かせになるかも（泣）

それでも今後何回かに渡って出てきますので、よろしくお願いします！

# 第7話　前編（前書き）

１０月中には劉備戦を終わらせる予定だったのですが……この調子だと、あと2話はかかるかな（泣）

あ、タイトルでお分かりでしょうが、今回は話の都合上、前後編に分けてお送りします。

それでは、前編をどうぞ！

# 第7話　前編

「――少し、いいか？」

ああ、と男が返事をした直後、部屋の扉を開けて入ってきたのは四人の男たちだった。

みな今の部隊が初めて結成したとき以来の顔見知りであり、部隊長の地位に就いている精鋭たちだ。

平時なら、上司をからかうネタを漁ってみせるほどの図太さを誇る彼らであるが、今回はそういう話ではないと男には分かっていた。

声の調子と浮かべている深刻そうな表情を見るまでもなく、現在の状況がそんな余談を挟む余地がないからである。

そんな中で話し合う内容など――

「今回は、俺たちも腹括らなきゃならないだろう。そうならないに越したことはないが……万が一の場合、何を優先すべきかは”解って”いるな？」

――総じていいものではないことが多いというのに。

これが総意だと言わんばかりの確認をとる一人の言葉に、残りの四

人は躊躇うことなく頷いたのだった。

「――――三爪炎痕！」

放たれた斬撃は、逆三角の形をとった一息の間の三連撃。

迸る蒼炎をも纏った力の奔流が華琳へと迫る。

（駄目、保たない……！）

とっさに大鎌”絶”の鎌刃で小柄な全身を隠した華琳だったが、一方でそれが防御になりえないことを確信してしまっていた。

今まで観察してきたカイトの攻撃が霞んで見えるほどの威力があるのは明らか。

これまでずっと愛用してきた”絶”をもってしても、その鎌刃ごと砕かれてしまう。

そう判断した華琳は、静かに目を閉じた。

数秒後には迫りくるだろう『死』を受け入れるべく。

「……え！？」

そこに予想外の”横”から衝撃を受け、華琳はその場から弾き飛ばされてしまった。

直後、ギィギィンっ、と重く鈍い音が響き、何か温かいモノが降りかかる。

慌てて地面に膝をつく形で起き上がった華琳が見たのは、双剣”虚空ノ双牙”を交差させて身を守るハセヲの姿と――その右胸から脇腹にかけて刻まれた傷跡、そして自分の身体に飛び散った彼の血だった。

「――な！？」

起こりえるはずがない光景を目に、華琳の思考が停止しかける。

だがそれも、自分の身体に飛び散った血の臭いと温かさがすぐさまに現実だと思い知らせてくれた。

そもそも右翼を任せていたはずのハセヲがなぜ……と、助けてくれたことには感謝しつつも、華琳が現状を把握しようと口を開こうとする前に、

「ここまでだ、カイト！　じゃあな！！」

その言葉と同時に地面に叩きつけられた物から溢れた白煙が周囲を満たした。

（間一髪……だったな）

カイトらしき気配の出所を感じた瞬間、嫌な予感に押されて出向いたハセヲが捉えたのは、まさに危機一髪の華琳であった。

とっさに華琳を弾き飛ばし、”虚空ノ双牙”でガードしたものの、左袈裟の一撃を防ぐことはできなかったハセヲ。

結果、今も激痛を訴え続けている右わき腹はひどい状態である。

幸い（？）なのか、斬られたと同時に傷口を蒼炎で焼かれたため――そのままだったなら出血死は免れなかっただろう――最初の出血以降血は失っていない。

気休め程度には装備品効果による自然回復が効いているようであるが、全快には十分な静養が必要になるだろう。

「ハセヲ……どうして貴方がこんなところに!?　右翼での仕事はどうしたの!」

”逃煙球”を使うことで何とか戦闘を離脱したハセヲと華琳。

現在は蒸気バイク”狗王”に乗り込み、城を目指して後退中だ。

もともと一人乗りということもあり、華琳はハセヲが左腕で腰を掴

むようにして持ち抱えている。

傷の痛みと緊張感からくる冷や汗を滲ませている必死なハセヲの姿を見て、少しだけ心が温かくなった華琳だったが、開いた口はすぐさま状況の説明を求めていた。

「それどころじゃなかっただろーがっ！　大体、本気になったカイトの相手なんざもう二度としたくねーんだ。ならサッサと退くのが正解だろ」

見れば、関羽隊の足が止まったこともあり、ハセヲの抜けた前線を上手くまとめて撤退を始めている右翼の様子が分かる。

それに合わせてか、左翼も後退の様子を見せ始め、後曲もハセヲが通る逃げ道の確保に動き出してくれていた。

さすが風だ、とハセヲは心の中で賞賛を送ると同時に、見事な連携をみせてくれている桂花や真桜の行動が胸を熱くする。

こういうとき、頼りになる仲間の存在は本当に大きいものだと心の底から思えるハセヲだった。

「ここで兵を引けるわけないでしょう！？　それは、劉備に対して膝を折るということ。そんなことが認められるものですか！」

「……はあ？」

ところが、華琳の方は戦闘の継続を望んでいるようだった。

事前に言っていた、開戦から籠城はしたくないという意味での戦闘

行為ならば、すでに十分達成出来ていると思える。

しかし、華琳はここにきても桃香を前にして退くという選択肢を取りたくないようだった。

それは、華琳（かのじょ）を曹操（かのじょ）たらしめる『誇り』の問題なのだろう。

「ここまでよくやったじゃねえか！　あとは城に戻って守りを固め、春蘭たちの合流を待って反撃にうつりゃあいい！　誰だってそう思うだろ！？」

「いいえ。あの子に対してそのような手段をとるなんて、この私の誇りが許さないわ！　その結果、野に散ることになったとしても構わな「っっっの、大馬鹿女がっ！！」……な！？」

何気なく顔をあげた華琳が見たのは、視線こそ前方に向けたままであるが明らかに怒り狂ったハセヲだった。

今までに見たことのないほどの表情。

春蘭と喧嘩した時も、ここまで怒っていることはない。

そのためか、意識の空白ができてしまった華琳の隙をついて、ハセヲは話し始めた。

「お前の人生だ。どうしたいかなんて、お前が決めればいいだろうさ。ただな……俺は気にくわねえ」

「……何がよ？」

「はっ！　そりゃあ、お前の態度が！　お前の未来が！　何より、残される奴らの気持ちがだ！！」

「……」

耳元で炸裂した怒鳴り声が、華琳を僅かに踏みとどまらせた。

それでも、依然として納得しきれてはいないようだと判断したハセヲは話を続ける。

「理想を掲げるのは結構だけどな！　今のお前は理想に殉じるというよりは、ただ意地になってるだけに見えるんだよ！！　城への撤退は敗北なんかじゃねえ！　劉備に勝つための、お前の理想を叶えるための一手でしかないだろうが！！

それによ、ここでお前が死んだら……」

何かを思い出しているかのような間があいた。

華琳からは見えていなかったが、前方を見据えるハセヲの瞳がふと悲しみに揺れる。

――その心に去来していたのは、大きな存在感とやりきれなさを残して眠りについた男の姿。

（あんな想いを……アイツらにさせてたまるかっ！？）

自分が”ここ”に来た理由となっている決意にのせてハセヲは叫ぶ。

「お前のことを心から敬愛している春蘭たちをどうする！　今まで必死に頑張ってきたのに、この上でさらにお前の命まで背負わせて

生きていかせる気かよ！？
それと、お前の理想のために死んでいった兵たちはどうなる！？
華琳を信じて戦った奴らの想いを、勝ち目の残ってるここで終わらせていいってのか！？」

「……！？　それは……」

「答えろ曹操！　そんな結末が、お前の言う『覇道』だってのか！？」

「……」

華琳にかかっていた険が和らいでいく。

それと同時に、どこか恥ずかしそうでもあり不機嫌そうであり面白そうとでもいうような――複雑な表情を浮かべた。

――そんなこと、ハセヲに言われるまでもないというのに。

劉備との戦いで思った以上に血を上らせていた自分に気付き、華琳は一回深呼吸。

次いで浮かべた表情を声音は、

「知ったような口を聞くのはやめなさい。我が往く道は覇道をおいて他になく、その過程で起きるもの全てを呑みこんで……その先に望む世界を手に入れてみせるのだから！」

「……ったく。だったらサッサとやるべきことをしろよ。まだまだこれからだぜ」

「ええ、そうね。といっても、誰かさんの行動のせいで既に撤退が始まっているようだけれど……今回は大目にみるとするわ」

「はいはい、ありがたき幸せってな。
ああ、それとよ……」

普段通りの優雅さを纏った余裕ある態度だった。

対するハセヲの声からも固さが抜けていく。

ようやく馴染みのある姿を取り戻した華琳に安心したハセヲは、今の自分だからこそ言える言葉を続けようとする。

それが、きっと魏（ここ）にいる自分の役目なのだと信じて。

「お前は”王”だ。この国の誰もがお前の言うことに従う。だけどな、俺は違うぞ。俺はお前に忠誠を誓ったわけじゃねえ。どうしても納得いかねえことには協力しない」

「そうね、だから？」

「さっきまでのお前なら、取り押さえてでも大人しくさせる！　多少無茶でも、その内容に意義があるなら仕事だってこなしてみせる！　俺がしたいように、春蘭たちとは違う立場でお前の力になるさ。だから華琳、そのためにお前にしてほしいことがあるんだよ」

「……何かしら？」

そこまで言ったところで狗王が止まった。

気付けば城門近くまで到着していたようだが、華琳はそれを気にかけることはなかった。

自分を覗きこむかのように数十センチ先にまで近づいたハセヲの顔から、ここにきて向けられたハセヲの双眸から目が離せなくなったのだから。

「――俺を頼れ。主従の関係なんかじゃねえ、細かいことを気にせずに言い合える『仲間』として、な」

「……ハセヲ」

どこまでもまっすぐなハセヲの瞳が華琳を射抜く。

それを金縛りにあったかのように、意識の全てを掌握されたかのように、華琳は見つめ続けた。

胸に温かい感情（もの）を感じながら。

（何よ……勝手なことばかり言って）

内心の想いとは裏腹に、華琳の両手は腰に回されていたハセヲの腕をギュッと抱きしめた。

もう狗王は止まっているのだから、その行為には意味がないことに

も気付かずに。

「っく！？」

そこに苦痛に顔をゆがめたハセヲの声が響いた。

言うまでもなく、カイトから受けた傷は酷いものだ。

振るう力は超人的であっても、身体は人の身。

一定以上の損傷を受ければ、壊れるのは自明の理。

とても精神力だけで補えきれるものではない。

今のハセヲを動かしている想いが何なのか、ついさっきに触れたばかりの華琳が口を開く前に――――

「後のことは任せたぞ、真桜！　俺はそのための時間を稼ぐ！」

「っきゃあ！？」

自分の身が放物線を描いて飛ばされていき、その先にて待ち構えていた真桜に受け止められた。

華琳の全身に飛び散っている血に驚愕したものの、その様子から本人の血ではないことに気付いた真桜は辛そうな視線を、こちらに背を向けたハセヲに送るが、

「了解や、ハセヲ！　ただ無茶して死んだりしたら、許さへんからなっ！！」

絶対に引きはしない、という決意が背中から伝わってきたのだ。
問答は時間の無駄だと判断するしかなかった。

（私に”ああ”まで言ったのだから、死ぬなんて認めないわよ……！）

腕を真桜にとられ、引きずられるようにして城へと戻っていく華琳は、兵の収容が終わり次第に城門を閉鎖する旨を飛ばす。

振りかえりはしなかったが、意識の半分は戦場に立つ少年に向けられていた。

何とか両足を踏ん張って大地に立つも、その佇まいは明らかに弱々しい。

普段ならば肩越しに構えている大鎌も、今は身体を支えるために使われていた。

（風たちの迅速な判断のおかげで兵の収容は順調。あとは、アイツさえここで食い止めれば……！）

ハセヲが無理をおしてここに残った理由は、間もなく接触する相手にあった。

その読みは正しかったようで、”彼女”は補足した撤退する兵たちには見向きもせず、ひたすらに自分を目指して馬を駆けてくる。

自軍の兵たちすらも置き去りにして、単騎で突き進んでくる気概。
距離が縮まるごとに膨れ上がっていく強者の気配。

普通なら考えられない行動を可能にする戦闘力を有した存在。
一度手を合わせたなら、いつまでも色褪せることなく心にのこる武技の持ち主。

「よお、久しぶりだな……恋」

「ハセヲ……会いたかった」

虎牢関以来の顔合わせになる二人は、互いに笑みすら浮かべて対面を遂げた。

挨拶すらも、まるで再会を懐かしむ旧友のような気安さを感じさせるものだが――その身に纏う雰囲気は、研ぎ澄まされた刃のように周囲を張り詰めさせていく。

「ハセヲ……そのケガじゃ……恋に勝てない。降参……する？」

「馬鹿言え。そう言うお前だって身体の動きがぎこちねえぞ。だっ

たら、こっちも遠慮はいらねえな！」

「……そう。なら……！」

「っ！？」

呟きに等しい小さな声に、ハセヲは一瞬身体が訴える痛みを忘れた。

この機会をどれほど待ち望んでいたというのか。

それほどまでに、目の前の少女が放つ気迫は強烈なものだったのである。

「今度こそ……！」

「そうは……いかねえ！」

自失していたのは一瞬。

ただ目の前の少女であれば、その間に打ち倒すこともできたはず。

そうしなかったのは、ひとえに正面からぶつかり合いたかったからに他ならない。

ゆえに、ハセヲもその気持ちに応えるべく『武獣覚醒』を行使して朱金のオーラを身に纏う。

傷の程度でいえばハセヲの方が深刻ではあったが、そんなことを感じさせないほどに纏ったオーラは力強く揺らめいていた。

その様子を、恋もまた嬉しそうに口元を緩めて見つめ――ハセヲが”死出鎌・観音掌”を構えなおすのに応じて表情を引き締める。

そのまま一歩ずつ地面を踏みしめながら、二人は間合いを詰め始めた。

まさに一触即発の空気が満ちていこうとしているところに、

「――――そこまでだ、ハセヲ」

「星？　何を……っぐ！？」

不意に姿を現し、ハセヲに近づいてくるなり星は首筋に手刀を落とした。

途端、纏っていた朱金のオーラは儚く霧散し、ハセヲは力なく星の胸にくずおれる。

何が何だかよく分からないが、懸命に意識にかかってくる闇から逃れようとあがくハセヲの前に、

「悪いが……ここからは俺らの相手をしてもらうぜ、呂布さんよ」

今まで見たことがないほどの覚悟を固めた顔をした五人の部隊長たちが揃っていた。

各々の武器を構え、絶対的な力量差を前にしても不退転の決意に瞳を燃やして。

「何……言って、やがる……！」

言っている内容を、これから起こりえる光景を、ハセヲは理解してしまった。

させじと、必死で意識を繋ぎとめようとするが――ここが限界のようだった。

消耗しきったハセヲの身体は、意に反して完全な眠りにつこうとしている。

――大切な仲間を戦場に残して。

「団長、アンタにはアンタにしかできないことがある。だからここは俺たちに任せてほしい」

「これは俺たちが決めたことだ。団長がそんな顔をする必要はねぇんだよ」

「そうそう、自分より一回りも若い団長に散々無茶をさせてきた俺たちとしちゃ、ここらで取り返しをしなきゃ釣り合わないだろ？」

「そういうこった。だから、むしろ嬉しい気持ちなんだぜ。やっと団長に胸張ることができるってんだ！」

「なので副団長、団長を頼みます。そいつは俺たちの”希望”なんで！」

（馬鹿……野、ろう……！）

それで悟ってしまった。
どうあろうと彼らはもう止まらない。

それでも、と悲鳴染みた声をあげようとしたものの、ハセヲの意識はそこで完全に落ちた。

一方で星は、強大な相手を前にして恐れず、揺るがず、祈りすらこめるようにハセヲを託す言葉を受け、力強く頷く。

彼らの意思と選択に、深い感謝の念を抱きながら。
彼らと共に戦えたことを誇りに思いながら。

かたじけない、という言葉だけ残し、そのまま振り向くことなくハセヲを抱えて星は城へと駆けだした。

「……どけ。お前たち……良い奴。……殺したく、ない」

「だったら、このまま帰ってくれりゃあいい。俺たちの仕事はアンタを倒すことじゃねえ。時間を稼ぐことなんだからな」

「……無理。ハセヲ……連れて帰る」

「そんなことは認められねえな。俺らも立場とか関係なくハセヲのことを気に入ってるんでね、渡すわけにはいかねえんだよ！」

静かに、されど譲らぬ気迫をこめて呟かれる呂布の言葉に真っ向か

ら立ち向かう男たち。

実力差は明確だが、こと戦いに臨む信念を秤にかけるなら両者の想いは拮抗していた。

ゆえに――――

「お前たち……本当に、良い奴。でも……邪魔するなら……倒す」

「やってみやがれ、最強！　でもなあ、俺らの意地だって捨てたモンじゃねえぞっ！！」

「「「「「っオオオォォーーー！！！」」」」」

デス☆ランディから餞別にもらっていた強化アイテムを使用し、彼らは一丸となって最強にぶつかっていく。

後先のことをまるで考えない愚直なまでの攻めは。

なりふり構わない剥き出しの闘争心は。

本当に、本当に僅かなれど――――最強の高みに彼らを届かせ、今の魏軍にとってはどんな金銀財宝よりも価値のある時間をもたらした。

## 第7話　前編（後書き）

皆さまの反応が別れると思う内容だったでしょうが、後編もこの流れに沿った話が続いていきます。

まあ他にも臨場感の問題とか心理描写とか、内容以前の問題もありますが、私ではこれが限界ですね。

なるべく早めに更新しますので、楽しみにしていてくだされば幸いです！

# 第7話　後編（前書き）

後半、自分でもグダグダになった気が否めないですが……まあ、そんな感じのことを言いたかったんだと、スルーしてもらえると助かります。

# 第7話　後編

――――これは夢なのだろう、きっと。

「はあ？　意味分かんねーんだけど」

護っている気でいて、実質は護られていたのかもしれない自分。

「いいじゃないですか、団長！　警護でも荷物持ちでも何でもいいですから同行させてくださいよ！」

「前回の腹いせなのか、夏侯惇将軍の隊の訓練に参加させられることになったんです！」

「あんなのに参加したら軽く死ねますよ!?　後生ですからっ！」

「それくらいなら、たとえ団長と侍女の御二方との甘～い空気を見せつけられるとしても、遠乗りに参加した方がマシってもんです！」

「進むも地獄、退くも地獄ってんなら……俺たちは団長と共に逝きたいんです!!」

「――――言いたいことはそれだけか？」

そして、何だかんだと自分を独りにさせてくれない、騒がしくも嫌いにはなれなかった――得難い仲間との日々。

この世界で育まれた大切な絆。

ずっと続いていけばいい、続けてみせると決めていたのに――

しかし、これは”夢”なのだ。

目覚めてしまえば、もう見ることは叶わないだろう――記憶のカケラ。

「……っう!?」

何かを振り切ろうとするも、結局は失敗したような気分でハセヲは目覚めた。

見たことのない部屋だったが、おそらく休憩室の類なのだろう。

裸の上半身には清潔な布巾が当てられ、その上に包帯がしっかりと巻かれていた。

気を失ってからどれほどの時間が経っているのか分からなかったが、

少なくとも窓から差し込む光はない。

にもかかわらず、今も外から聞こえる雄叫びは、今だ戦いが繰り広げられている証だった。

そこまで気付けたところで、いてもたってもいられなくなったハセヲは寝床から身を起こそうとして、

「勝手に起きてんじゃないわよ、半死人の分際で！　アンタみたいな奴でも今は戦力になるんだから、死ぬならこの戦が終わってからにしなさいよね！！」

「……桂花？」

なぜかいた桂花の声で動きを止めた。

おおよそ、考えられない状況にハセヲの思考が停止する。

今も戦闘は継続中であるはずなのに、なぜ桂花がここにいるのか。

その理由が、ハセヲにはさっぱり分からなかった。

「……ちょっと待ってなさい。すぐに誰か呼んでくるから、それまでそこから動くんじゃないわよ！？」

それだけを言い残して、桂花は速やかに退出していった。

しばし呆然と慌ただしく閉められた扉を見ていたハセヲだったが、

それどころではないと再び寝床から離れようとして、

「何をしようとしている？」

「……星」

また慌ただしく響いた扉が開く音と、静かな怒気を滲ませた星の声に縫いとめられたかのように停止する。

そのままハセヲのすぐ近くまでやってきた星は、浮かび上がってた腰を寝床へつかせた。

とっさに抵抗しようとしたハセヲだったが、今の彼には普段の力が出せるわけもなく、上半身だけを起こした形で星と向かい合う。

「そんな身体で何をするつもりだ？　せっかく拾った命を無駄に捨ててしまったが、全力は尽くしたからとでも言って死ぬ気か？」

「……大丈夫だ。だいぶマシになったから、十分戦え「そんなはずがないだろうっ！！」……っ！？」

口に出そうとした言葉を、ハセヲは途中で呑みこんだ。

自分と同じように身体中に手当てを施された星であったが、その身に纏う気迫は雲泥の差。

その苛烈な眼差しが、ハセヲの論を封ずる。

「あれから八刻ほどしか経っていない。たしかに多少はマシになっているようだが、それでも無茶だ！

いいか、間違えるなよハセヲ。こんなことでお前の命を失わせるために、〝彼ら〟は命を懸けたわけではないのだ！」

「っ！？　じゃあ……アイツらはやっぱり……」

「いや、全員命は拾った。今は別室で安静に「本当かっ！？」……しているが、しかし共に戦うことは……もう」

星の言葉に顔を輝かせたハセヲだったが、続けられた言葉に打ちのめされる。

――――別に生きていればいい、という話ではない。

彼らには彼らの人生がある。

何とか命は拾ったのだとしても、今後は苦しい生活が待っているだろう。

組織だった社会保障制度などないこの時代で生きていくには、大きなハンデを抱えさせたことになったのだ。

その原因が自分にあるというのに、安易に生きていたことを喜ぼうとした自分に、ハセヲは大きな怒りを抱いた。

しかも続いた話によれば、彼らはどんなに打ち倒されても這いあがり、何度も何度も呂布に立ち向かったのだという。

どうやら呂布が手心を加えたからこその結果のようだが、それでも驚かずにはいられない。

「前に春蘭と戦った時はアッサリと気絶しやがったくせに……！」

それ以上は続けられず、ハセヲは口を閉ざす。

いつの間にか握りしめられていたハセヲの拳は真っ白になっていた。
身体もぶるぶると震え、寝床を軋ませている。

（本当にお前という奴は……）

もはや顔もあげていられないといった感じで背中を丸めているハセヲをしばらく見つめていた星は、今の自分の心に突き動かされるままに行動することにした。

ハセヲの横に腰を下ろし、首筋に腕を回すようにして密着。

そのまま何の抵抗もしないハセヲの顎に手を添えて顔をあげさせ、一気に距離をゼロにした。

「っ！？」

ほんの数秒前まで抱いていた現実感（じこけんお）が、圧倒的な非現実感（くちづけ）で塗り替えられた。

眼前に、目を閉じた星の顔が広がっている。
後頭部をホールドして迫ってきているため、逃れることはできないし、どうしたらいいかもハセヲには考えられなかった。

彼女がこちらの魂まで求めているかのように口内を吸い上げる音がはっきりと聞こえ、ハセヲの頭をクラクラさせる。
背後に回されていた手が、優しくハセヲの背中を愛撫していく。

――ここまでされて、ようやくハセヲは星にキスされていると認識できたのだった。

それは、いつぞやの事故のときのような口づけではない。
恋人同士のそれでもない。

相手からの一方的な求めによるものだったが――それは確かにハセヲへと届いていた。

「……少しは落ち着いたか？」

どこか名残惜しげな表情を一瞬で消し、星は少しだけ乱れた呼気を整えてから口を開いた。
対するハセヲは、頷きを返すので精いっぱいだ。

深い優しさに満ちた双眸に、全ての意識が惹き寄せられるよう。

今の自分はどんな顔をしているのか、ハセヲには分からなくなっていた。
ただ一つだけ分かったのは、これからどうするべきか考える余力が生まれたことだ。

どこまでも沈んでいこうとしていた手を無理やり掴んで上を向かせただけのもの。

しかし、それで十分だった。

「ふん、では歯を喰いしばれ」

その言葉の直後に放たれた正拳を甘んじて受け入れる。

先ほどまでとは反対の衝撃で頭がクラクラしたハセヲだったが、それで身体の中に芯が通った。

再びお互いに視線を合わした二人が浮かべていたのは、それぞれが馴染み深い不敵な笑みだ。

何ができるのか、何をするべきなのか、自分で考えて決めることができる姿を取り戻したハセヲを、星は眩しげに見つめる。

「今のお前なら話しても大丈夫そうだから話すが……あと半日を越せるかが我らの山場だ。私も間もなく参戦する。お前には、みなの疲労がもっとも厳しくなる夜明け後に頑張ってもらう予定だ」

「ああ、分かった」

「それまでは何としても保たせてみせる。だから、今は体力回復に努めろ。彼らに後を託された身としては、お前を死に逃げさせるなど絶対に許さん！　やるからにはきっちり最後までやり遂げてみせろ！」

「――――ああ、そうだよな」

ハセヲの胸の内には、依然として部隊長たちに対する悔恨の念がある。

あの時、彼らは『自分で決めた』と言っていたが、ハセヲにはそれだけに思えなかったのだ。

自分で決めたなら、その選択の結果にも後悔はないといえる。

しかし、”その選択をせざるをえない”という状況だったとするなら。

本当は何を選んでもよかったはずなのに、その時の状況が”この決断こそ全てだと錯覚させた”とするなら。

五人の人間の可能性を決定づけてしまったこと――その重さがハセヲの歩みを止めさせた。

それでも――

（”どっち”にしてもだ……！　このまま何も残せずに死んじまったら、どんなツラしてアイツらに詫びればいいって話だよな。そもそも、初めからそう考えられなかった時点で身勝手にもほどがあるぜ。はっ、華琳のこと、俺も言えやしねーな）

何もかもが言い訳に思えたからこそ、ハセヲは声には出さずに自嘲した。

そして、今度こそ求められている行動で取り返すことに決める。

”今”のハセヲが果たすべき約束を守るために。

――命を懸けた彼らの顔を、失望に歪ませるわけにはいかなかったから。

「ワリいけどよ、また眠らせてくれねえか？　分かってても、気が昂ぶって休めそうにねーんだよ」

「ふっ、承知した」

ハセヲの内心を読みとったかのようなイイ笑顔を浮かべた星が、再び手刀を落とす。

そして、あっさりと意識を手放して倒れかかってきたハセヲを受け止め、寝床へと寝かしつけた。

ここに連れてきた時とは異なり、呼吸は安定しているし力強い。

精神的にも落ち着きを取り戻した今のハセヲならば、回復効果も向上するだろう。

「……全く。そう思うなら、今度はそちらからして欲しいものだな」

再び眠りについたハセヲを見据えていた星の表情は、どこか拗ねていそうに見えるものへと変わっていた。

今度は安らかな顔で眠りにつこうとしたハセヲの唇が、言葉を紡ぐために僅かに動いていたのを見逃さなかったからだ。

その言葉に刺激され、先ほど交わしたばかりの口づけの余韻が蘇ったのか、星は目元を細め、唇に手を当てた。

そんな場合ではなかったが、心に灯った炎のような感情を制御することができなくなってしまっていたのだ。

――強がってばかりで、自分の中の弱い感情を外には出そうとしないハセヲが打ちひしがれている。

そこまで弱っているのに加え、それを自分の前で曝してくれている事実が星の胸を大きく高鳴らせた。

目の前で傷ついている愛しい男を、放っておくことができなかったのである。

「まあ、今後に期待しているさ……我が主」

平時のハセヲが見たら魅了されていたこと間違いなしの艶やかな笑みを零し、星は部屋を後にする。

ひとまずの懸念事項は解消された。

思わぬ活力も得れた。

――なら、あとは今できることを為すだけ。

部屋を出た瞬間、その顔は一騎当千の強者にしか見えない凛々しいものとなり、高らかに足音を鳴らして廊下を進みだした。

戦場へ。

（夜明けか……）

白み始めた地平線を一瞥し、華琳は内心で溜め息を吐いた。

真桜の秘密兵器や全ての将兵の尽力のおかげでここまでは保たせていた曹魏軍。

関羽や呂布、そしてカイトの参戦がなかったからとはいえ、素晴らしい奮戦ぶりだ。

とはいえ、さすがに疲労はピークに達しつつあったのだが――華琳は不思議と負ける気がしなかった。

眼下に迫りくる劉備軍を城壁の上から見下ろす。

先ほどまでとはうって変わって、ずいぶんと取るに足らなく見えた。

――その理由が”彼”に関係しているものだということは、もはや疑いようがない。

（そうね、私は”天”に従うのではなく、”自分”に従うのでもなく――ただ己が心（ほこり）のみに従う！　なら、この想いすら呑みこめなくて、何が覇王か！？）

そこで華琳は右手を肩越しに持ち上げた。

普段ならいつも携帯している大鎌”絶”は、すでに戦場で失っている。

しかし、全く問題はない。

「万死ヲ刻ム影……！」

力ある言葉と共に喚装された大鎌が右手に収まり、曙光を反射して美しく輝く。

鎌刃からうっすらと零れ出る”赤いオーラ”が、何かの予兆を告げるようにくすぶっていた。

迫り来る異形（きょうい）に対抗する力をもたらすべく――

回想録

「――どうして、ハセヲはあそこまで必死になって”人の想い”を大切にしようとしているのかしら？　あまり大げさには話したがらなかったけれど、向こうでも大きな世界（もの）を背負っていたようだし」

「……そうですな、本当によく分からない奴だと今でも思わされます」

間もなく約束の刻限だからハセヲを迎えに行くという星を、華琳は思わず呼び止めてしまった。

得難い人物という認識はあったのだが、それに輪をかけてハセヲという存在がよく分からなくなってきたのだ。

忠誠を誓うわけでもなく、命をかけて自分を守ってくれた。

その果てには、もっと頼れとまで言う始末。

それが『仲間』としての、彼が大切にしている想いなのだとしても、華琳には納得しきれないものがあったから。

そして、彼のことを聞きたいと思った理由はそれだけでもなかった。

「ただ、ハセヲは”あの通り”とても傲慢で……”ああ見えて”とても優しい奴なのですよ。誰だって自分が一番かわいいものですが、ハセヲは関わると決めた者になら、自分の全てを懸けてでもぶつかっていく――そんな奴です」

「――ようするに馬鹿な奴、ということ？」

「ふむ、そうともいうでしょう。しかし……嫌いにはなれませんな。とはいえ、自覚無しなだけに危なっかしいところもありますし、もう少し色々気付いてほしいと思うこともありますが……」

そこまでで言葉を切り、どちらともなく困ったような笑顔を零して

から、星は城内へと進んでいく。

その後ろ姿を、華琳はずっと見つめながら思い返していた。

――洛陽にて垣間見たハセヲの記憶。

華琳には理解できない出来事が大半だったが、それでも過酷な経験であったことは間違いない。

その中で、ハセヲは大切な女(ひと)を取り戻すために、追いつきたい男の背中に手を伸ばすために――見てきたこと、体験してきたことをそのまま呑みこんで自分の力にしてきたように思えた。

その原動力こそが”人の想い”によるものなのだが、これまで華琳にはいまいち納得しきれなかったのだ。

己ひとりで確立させた強さこそが、自身を支える”柱”と成りえるもの。

他者との共有がなければ得られない、相対的な強さなどが最終的に役立つのか、と。

――しかし、実際にハセヲは身をもって証明している。

戦場においては弱さにしかなりえない感情をバネに、地力を上回る呂布や関羽をも相手にしているのだ。

自分の弱さを認め、受け入れて――それらを乗り越えられるだけの『強さ』をハセヲは手にしている。
現在戦っている劉備にしても、似たような境遇だといえよう。
自分には、そんなことができるのだろうか。

（無理にそうする必要があるとは思えないけれど……ハセヲを頼ることが、その第一歩になることは確実なのでしょうね。だとするなら……）

しばしの間をおいて、華琳は視線を戦場の方へと向けた。
粉骨砕身で動き回っている味方たちに最善の道を示し、覇道（ほこり）を貫く決心を変える気はない。
必要であるならば、私情はもちろん、苦難に満ちた生涯に身をやつしても構わない。

――だが、

（ハセヲにできて、私にできない道理は――ない！）

今後の助けになるのなら、多少の不具合には目をつぶってでも体得してみせる――いや、そもそも不具合（そんなもの）に囚われる自分ではないと、華琳は半ば開き直っていた。
華琳にそう思わせるだけの重さを、ハセヲの信念は有していたので

ある。

加えるなら、もう一つの要因（かんじょう）も関係していたのだが――それが分かるのは、もう少しだけ先の話。

回想録　了

「――来たか」

どこか確信をこめていたかのように呟いた華琳の視線の先。

劉備軍を見下ろす城壁の上にあって、さらなる上空にソレは具現した。

蒼い炎を煌めかせ、一直線にこちらに向かって降下してくる。

「――ァァァアアっ！」

はっきり肉眼で視認できる距離にまで近づいたカイトは、手にしている”虚空ノ双牙”を背後へと振り上げ、まるで全身を弓のようにそり返らせる。

何か大技を使うつもりなのは明白だった。

ならば――

「打ち砕く！」

今の自分ならば、カイトにも負けはしない。

自身の気迫に応えるように噴きだしたオーラが激しく渦巻いているなか、華琳は力強く握りしめた大鎌でカイトを迎撃するべく、力を解き放つ。

妙な一体感さえ覚える”万死ヲ刻ム影”は、華琳（しょうしゃ）の求めるままにアーツを発動させ、

「無双隼落とし！」

「蒼天大車輪！」

緋色の一閃が、蒼い連撃を弾き飛ばした。

車にはねられた野良猫のように、カイトが吹き飛ばされていく。

「……アアアァァアア」

空中を滑るようにして制動をかけ、そのまま浮遊しながらこちらを見据えるカイト。

先日に与えた傷は見当たらず、背後から噴き出ている青炎は記憶の

もの以上に燃え盛っていた。

だが、それがどうした。

今の自分が臆するには値しない。

何が相手だろうと打ち倒し、先へ進む。

――――そう決めた。

「ここで終わる訳にはいかないのよ。そのために必要なら、この力だって呑みこんであげるわ！

それでも――――私は私だ！　この身がその誇りを捨てはしない限り、私はいつだって私でいられる！」

華琳の叫びが空気を震わせる。

それを聞いていた周囲の兵たちは、揃って目を丸くした。

叫びながら〝万死ヲ刻ム影〟を振り上げたその瞬間、城壁を震わす轟音と共に、赤い火柱が天を衝いた。

まさしく火山の噴火を彷彿させる圧倒的な力の放出に、周囲の空気が――――いや、世界そのものが鳴動する。

鳴動が強まるにつれて、火柱は一層輝きを増し、表面にプロミネンスのような迸りさえ走らせた。

「――――アアア！」

対するカイトも静観しているわけではないようだ。

短く鋭い叫びを合図に、背後で燃え盛っていた蒼炎が体内からも溢れ出てくる。

より清らかに、より高温に。

世界の異常を浄化するべく与えられた『聖なる炎』は、使用者であるカイトを”その役目に特化した存在”に書き変えようとしている。

（――いいわ、来なさい！）

対する華琳は、何が来ようとも対処できるよう力を収束し始めていた。

燃え盛るように滾っている火柱のエネルギー全てを、体積だけを縮めて密度をどこまでも上げていく。

天を衝く巨大な”それ”を、発生源である少女が纏っていくかのように。

そして――

「アアアァァーー！！」

”貴様”すら呑みこんで、私は前へ進む！！」

臨界点まで凝縮した力を内包し、二人は宙を舞った。

赤と蒼の軌跡が最短距離を疾走して激突し、大鎌と双剣が火花を散らした瞬間。

お互いが練り上げていたエネルギーが決壊し、展開されつつある認知外空間そのものを震撼させた。

――そのとき華琳は確かに聞いた。

己の内より、産声をあげるかのように響いた『心音』めいた拍動を。

## 第7話　後編（後書き）

次回にて劉備戦も決着……予定です。

ハセヲにはどれだけ出張ってもらうか検討中。
一番頑張ってもらうのは、もちろん彼女なのですがｗ

さてさて、次回のキーワードは某映画風に『ハジマリの始まり』ってことで、またいつの日にか♪

## 第8話（前書き）

ふふふ、何とか決着させました！

久しぶりの一万字オーバーですよ。

また好き勝手な内容となっておりますが、よければ読んでやってください。

# 第8話

その空間（せかい）は、光と音によって埋め尽くされていた。

「――――――っ！！」

「■■■■■■っ！！」

突き出された大鎌の刃が、三爪の双剣が、最短距離を最高速度で疾走して激突。

鳴り響く轟音に負けじと上げられる雄叫びと共に鎬（しのぎ）をけずり合う。

ここまでくると、つばぜり合いから逃れて仕切り直し、というわけにもいかない。

互いに二の太刀を考えていない一撃は、少しでも拮抗を崩した瞬間にどちらかの命を奪うこと確実な勢いだ。

両者の力は現状ではほぼ差がないことから、勝負の分かれ目は『精神力』の問題になりそうだった。

（やって、やろうじゃない……！）

骨は軋み、筋肉は悲鳴をあげ、全身がバラバラになるのではないかと思える衝撃が駆け巡っている。

――だが、一番気になるのはそんなものではなかった。

それは、どこからか聞こえてくる『心音』

徐々に拍動の間隔が短くなってきており、〝何か〟が産声をあげようとしているかのよう。

これまでの自分を変質させるかもしれないナニカが。

（いいわ、来なさい！）

自分を呼ぶ心音（こえ）が聞こえる。

これまでには聞こえなかった、別に望もうとも思えなかったナニカが溢れてくる。

闇に浮かぶ、不気味な姿。

それを照らし出す三つの紅い瞳（ひかり）。

ゆらゆらと意識の隅に見え隠れするソレを、華琳は抱き寄せようとする。

今の状況に至るキッカケとなった、とある少年が身をもって示した言葉（おもい）。

今の〝これ〟は、その延長線上の産物なのだと分かっているから。

（私は――――ここにいる！）

その呼び声に応えよう、と決めた瞬間、華琳の身体が小さく震えた。

大きく開かれた蒼い瞳――――その網膜に炎のごとき真紅が灯り、瞳孔が赤く染まっていく。

身体に纏っているオーラの揺らめきに合わせて揺れる瞳に、少年の面影が重なったとき――――

「――――スケィスっ！！」

華琳の口から知らないはずの言葉が紡がれ、その身体を赤い紋様が奔り抜けた。

その碑文（な）を呼ばれたことで、明確な形をとることができた力が集っていく。

曖昧だった輪郭を、より力強く、より鋭く、強烈無比なものへと。

定まり切れていなかった意識を、より確かに、より清らかに、静謐なものへと。

その全てを身に宿した華琳の姿は、黒衣を纏いし『死神』と化していた。

「失礼する。そろそろ刻限だが……っと、もう起きていたのか」

その声が聞こえていなかったかのように、寝床から上半身だけを起こしていた少年は、備え付けの窓から外を見つめていた。

微かに差し込む曙光が、少年の銀髪を鮮やかに浮かび上がらせている。

もとより細身の体格をしており、現在その身にしっかり巻かれている包帯の姿と相まって、その光景だけなら『儚い少年像』に見えなくもないだろう。

しかし、少年――ハセヲを迎えに来た星は、そんな気など微塵もおきていなかった。

ただそこに座しているだけなのに、その姿から視線を離せられない。

傷ついた身体は癒えておらず、消耗した体力も回復しきれていないはず。

なのに――

「――ああ、何だか誰かに呼ばれた気がしてよ」

ふと目覚めちまったんだ、と言って苦笑を浮かべたハセヲを見て、星は静かに安堵の息を零した。

今のハセヲには、先ほどまで漂わせていた気配は感じられない。

――洛陽にて経験した、『死の具現』とでもいうべき存在感を。

とはいっても、当時の十分の一にも満たないような残滓に過ぎないものであったが。

それでも十分強力なのであるが、当のハセヲには得心のいっているような顔で出撃の用意を整えている。

破れてしまっている服に顔をしかめながらも袖を通し、手袋とシューズを装着。

ゆっくりと腰を寝床から上げ、具合を確かめるように手足を回していく。

このように、妙に落ち着いているハセヲとは対照的に、驚愕から抜け切れていない星が先ほどの気配のことを問いただそうと口を開いたところに、

「なっ!?　この感覚は……！」

「……ああ、認知外空間だな。展開したのはカイトだろ」

胸の奥がざわめくような感覚が巻き起こり、星は目をみはった。

それが事実なら、洛陽で張譲がやってみせたように、カイトもまた異形へと姿を転じる可能性があるのだ。

ただでさえ強敵であるカイトが、だ。

（状況は切迫している……！　なのに、なぜハセヲはここまで落ち着いているのだ!?）

まるで、気絶から回復した直後のハセヲと入れ替わったかのような心地の星。

その焦りを感じ取ったのか、ここでようやく星の顔をマジマジと見やったハセヲは、なんてことはないといった表情で内心を語る。

その声には、確かな信頼が込められていた。

「アイツは相手に見合った力しか使わない。てことは……だ。いま追い込まれてるのはこっちじゃねえ。認知外空間を展開しないと勝てねえ、と思わされてるカイトの方なんだよ」

どこまでも地平線が広がるだけの世界――――認知外空間。

自身の身に起こった変化、それに合わせるように姿を変えたカイト、そして今も続いているつばぜり合い。

いずれもが、これまでの華琳の人生では考えられなかった事態だ。

なかでも、目の前のカイトに至っては、その姿を大きく転じていた。

神々しさと空虚さ。

どこか矛盾していると思えるのに、不思議と胸にカチッとはまる。

そんな雰囲気を醸し出す巨人――――『蒼炎の守護神』が現在のカイトの姿だった。

愛用の武器である”虚空ノ双牙”を繋ぎあわせたかのような剣翼を背後に展開しており、そこから噴き荒れる蒼炎が、ジェットノズルの如き推進力を発揮している。

両腕、両足は胴体から切り離れているが、肩や膝といった関節部から噴き出した蒼炎によって動かすことができるようであり、結果として恐るべきリーチとパワーを生み出していた。

交差している武器は刃渡りの長い三枚刃の剣になっており、両者の攻撃が届く間合いの差はほぼなくなっている。

（ああ……）

確かにカイトの変異は恐ろしいものだが、されど華琳の身に起きた変化もまた凄まじい。

鮮やかに、猛々しく、まぶしいばかりに輝く力の奔流。

黒を基調とした装飾具で覆われた細身の肢体に、赤い光を放つカーテンのような腰布を身に付けた出で立ち。

その顔には三角形の頂点の配置をとった、赤い三つ目が妖しく輝いている。

（……ああ）

大鎌”万死ヲ刻ム影”はその鎌刃を、収束した力場によって形成された緋色の連結刃に変容させていた。

万難を排し、敵対する者全てを斬り伏せるに足る力強さを放っている。

（……そうだったのね）

精神と身体を満たしていく、圧倒的な至福感が華琳を包みこむ。

ここにきて、華琳には全てが分かった。全てが理解できた。

洛陽（あのとき）から感じ続けていた奇妙な感覚、そして――その意味を。

その『心音』が何のものなのか。

その存在は、自分に何をもたらすのか。

――自分は、どうするべきなのか。

鮮明になった意識が思考を加速させる。

ハセヲから譲り受けたものの、与えられた力をただ行使することに感じていた抵抗感。

自分を変質させるかもしれない、未知なるモノの片鱗に対する警戒心。

それらが邪魔となって、開眼には至らなかった自分。

しかし、今は自然体――やや開き直り気味だが――なために、余計なものに心を曇らせることなく力を振るえている。

全ての障害を破壊し、道を切り拓くことができる力を。

敵対する者を打倒し、背後の者たちを護れる力を。

――今の自分なら受け入れられる、そう思えた。

（これが……ハセヲの見ていた世界、か）

――これぞ、創造主が生みだしたプログラムが一つ、『死の恐怖――スケィス』

モルガナ因子を持つ八人のみに許された力の具現、その最秘奥である。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄにてハセヲが駆った死神は、時の壁さえ越えて華琳へと受け継がれたのだ。

「アアアアァァーーー！！」

両者の激突地点でばら撒かれているエネルギーが際限なく高まっていく。

接触部分は凄まじい摩擦熱を放っているようで紅く染まり、激しい火花を散らしている。

両者の図は、サイズ的には大人と子どもの相撲といった様であるが、優劣の差はなかった。

仮に、お互いに距離をとっての斬り結び合いになっていたとしたら、経験の差によって華琳の勝ち目は低いものとなっていただろう。

そこを華琳も分かっていたがために、現在の状況はありがたいもの――まあ、その場合は何とかして今の状況に持ち込むつもりだった――であったといえる。

後は、互いに持てる全てをかけて前進するのみ。

そして、その結果は――――

「こんなっ、ところ、で――――負けるものかあぁぁっ！！」

より強い決意が華琳の構える大鎌に宿った瞬間、均衡を保っていた両者の距離が縮まった。

距離にして数メートル。

たったそれだけの――――今までは果てしなく遠く感じていた距離がジワジワと縮んでいく。

カイトはその場から”動いていない”。

華琳が徐々に、徐々に、カイトへ向けて前進を始めたのだ。

高速振動している鎌刃が、カイトが交差させている双剣を分断していく。

その表面では、融点を越える熱が発生し溶解が始まっているのか、煙すら立ち昇っていた。

蜘蛛の巣のごとく亀裂を生じさせながら、大鎌の刃が双剣を砕き進んでいく。

単純な斬撃なだけに、重い。

今の華琳だからこそ込めることができた重みを大鎌に乗せて、ついには――――

斬っ！！　轟っ！！

双剣を両断した鎌刃を、華琳は敢えて振り切らずにカイトの右肩から下腹部の辺りまでで止め、蓄えられていた力を前方へと解放。

限界まで収束させられていたエネルギーが逃げ場所を与えられ、歓喜をあげて踊り狂うように炸裂した。

「……ア、アア……アァ」

視えない障壁が砕けるような音が響くのと同時に、カイトが放つ気配が大きく減衰する。

やはりというか、ダメージは凄まじかったようだ。

力無くよろめきながら、崩れ落ちるように前傾していくカイトを見据える華琳は勝利を確信した。

一気に決着をつけるべく、華琳は大鎌を振り上げる。

無防備にこちらへと倒れこんできているカイトの首を刎ね飛ばそうとして――

「――――！？」

俯いて見えなかったカイトの瞳が赤く輝いたのと同時に、強烈な殺気が放たれた。

とっさに左方に回避しようとした華琳だったが、接近し過ぎていたことが裏目となる。

巨大な剣翼から発せられる蒼炎が行く手を阻み、長いリーチを誇るカイトの腕が、スケィスの細首を締め上げる。

「……っが、っぐぅ！？」

次いで大鎌を持っていた右腕も押さえられ、喉の奥から絞り出されたような声が漏れた。

どう考えても、カイトの負った傷は致命傷だ。

にもかかわらず、いま自分が受けている力の源は一体何なのか。

「アアアっ！！」

その答えは、まさしく必死といった短い叫びと共に顕現した力の前に明らかとなる。

華琳の眼前に展開された、砲身を思わせる深緑の花弁。

そこに集い始める、シャレにならないほどの高密度のエネルギー体。

迸る余波だけでも身体を切り刻まれかねないほどに吹き荒れる剛風。

まるで、嵐を万分の一に凝縮したかのような非常識極まりない代物が――――ゼロ距離から発射された。

「っつあああああぁぁぁああああ！？」

――何のことはない、それは捨て身どころか、カイトの命そのものを糧とした最期の一撃。

まさに、全てをかけて敵を打ち倒し、主に勝利を捧げようとする”騎士”らしい行動である。

しかし、射線上に吹き飛ばされながらも華琳は何とか堪えていた。

ここさえ凌げれば、カイトに次の手はない。

ならば、その一撃を耐え抜くまでとした意思に反応したのか、腰に巻かれていた光のカーテンが眼前に展開され、ギリギリのところで踏みとどまっている。

側面に回り込むように移動できればよいのだが、身体は一切動かせる余裕がない。

荒れ狂う剛風に光のカーテン越しに全身を叩かれながら、嵐が過ぎ去るのを待つ華琳だったが――まるで終わりが見えてこない。

凪ぐことなどあり得ないとばかりに勢いを増していく風の威力と音を前に、どうするべきか考えようとした華琳の耳を、

「こんなもんか？　お前の底力は、よ」

不思議とはっきり聞こえた、馴染みつつある声がうった。

高みから見下ろしているかのような言葉、見えなくとも予想できる皮肉気な笑み。

それが――――

「舐めるなぁっ！！」

華琳に認められるわけがなかった。

怒りの声に呼応したのか、スケィスの全身から更なる赤いオーラが溢れだし、荒れ狂っていた剛風を呑みこんでいく。

その光景を華琳は見開いた両目で捉えていたが、意識はここにはいない少年に向けられていた。

「我が大鎌は曹魏の誇りなり！　これに歯向かう者ことごとくを打ち破る！」

高らかに叫びを上げ、華琳は決然とカイトを見据える。

怒りの炎に身を焦がす華琳だったが、意識の奥底では冷静に現実を受け入れていた。

――――最大出力では勝ち目がない。

カイトの”それ”は文字通り命懸けの攻撃。

それに”打ち勝つ”というなら、こちらも同様の手段に打って出ね

ばならないが、その先に意味などない。

ならば――

（一点集中で貫く以外に道はない！）

選択肢は一つしかなかった。

対するは、巨大すぎるゆえにカイト自身にも制御しきれていない、暴走一歩手前の力。

だからこそ、荒れ狂う力の奔流に目がいきすぎていて気が付けなかったが、今なら分かった――圧倒されるほどの攻撃の所々に生じている〝ムラ〟や〝無駄〟を。

そこを突いてやれば、エネルギー総量では劣っていたとしても現状の打破は可能、だと。

「これでも……っ！」

込み上げてきた力を鋭く絞り込み、右腕に砲身を形成。

火の粉のように振りまかれている燐光が視界を遮るが、華琳が目標を見失うことはありえなかった。

カイトには、もはや動くだけの力も残されていない。

この一撃が目の前の剛風を貫きねじ伏せることができなければ、自

分の負け。

そう断じて、華琳は、

「――――くらいなさいっ！！」

叫びと共に収束砲撃（データドレイン）を放った。

周囲を覆い尽くしていた剛風すらかき消すように疾駆する赤の砲撃。

その一撃は射線上のエネルギーを引き千切るように前進し続け、貫通しても衰えをみせることはなかった。

そのまま吸い込まれるかのように一直線の軌道をとってカイトへと突き刺さり、そして――――

拡散したエネルギーによって、カイトはもちろん、空間（せかい）そのものさえも弾き飛ばした。

（何とかなったけれど……このままでもヤバいわね）

ひび割れていた空間が駄目押しの一撃を受けたことで砕け散り、同時に纏っていた力も霧散した。

元の姿に戻った華琳はどうなったかというと――――現在”自由落下

”の真っ最中である。

視界を埋め尽くしていた赤い閃光が消え去り、普段通りの戦場が見えてきたまではよかった。

が、どうやら憑神戦闘を続けているうちに高度上空まで浮かび上がっていたようで、現実世界に戻った瞬間にこの有り様である。

そして言うまでもなく――あと十秒ほどもあれば――このままだと激突死は確実だ。

せっかくカイトを倒したというのに、直後にこのような死に様を晒すなど間抜けとしかいいようがない。

とはいえ、こうなっては今の自分にはどうしようもない。

ならば、道は一つだった。

「何とかしなさい、ハセヲ！」

空以外に何も見えない虚空に向かって手を伸ばす。

その手が掴まれない、とは華琳には思えなかった。

ゆっくりと、しかしそこに確かな信頼を込めて伸ばした手を――

「任せとけ！」

手袋越しにも伝わるハセヲの温かい手が掴む。

そのまま胸に抱き寄せるように左手で抱えられた華琳は、緊張で強

張っていた身体から力を抜いた。

少々乱暴ではあったが、それでもしっかりと抱きしめられて密着したハセヲの胸に、華琳は安心して身を預ける。

対してハセヲは、右手に大剣”シラード”を喚装。

シラードの腹に乗るように態勢を整え、間近に迫ってきた地面を見据えながら叫ぶ。

「しっかり捕まっとけ！　衝撃がくんぞ！」

まだ地面までは距離があると思いながらも、華琳が両手に回す力を強めた瞬間、

「――――っく！？」

下から何かを叩きつけられたような衝撃が二人を襲った。

その反動によって落下の衝撃を相殺し、僅かに身体が浮いた瞬間をハセヲは見逃さず、

「跳ぶぞっ！」

シラードを蹴って、何とか地面へと着地を決める。

何とかハセヲたちは無事に大地へと帰還を遂げたのだ。

「二人とも無事か！？」

周囲の安全を確保しながら近寄ってきた星に、ハセヲは無事な証拠

だと言わんばかりの笑みを見せた。

綱渡りの行動だったというのに、まるで成功して当然だったという感じのハセヲに星はとっさに二の句が継げなかったが……とりあえず無茶をした主を一発殴っておいた。

というのも、ハセヲが上空まで昇れたのは、碑文の力で強化された星の槍の勢いを借りて投擲されたからであり、先ほどシラードにぶつかった衝撃は、星に手渡しておいた『破魔矢の召喚符』による魔法攻撃（ルレイザス）（オ）だったのだ。

魔法攻撃を半減させる”シラード”とはいえ、下手をしたら――――むしろその可能性の方が高かったのだが――――二人揃って撃墜という結果になっていたかもしれなかった。

しかも、その引き金は星になってしまうのだから笑えない。

「まあ、成功したんだから良かったじゃねえか。そもそも腕輪が使えりゃ問題なかったんだが、昨日の今日で上手くいかねえみたいだったし、他に方法も思いつかなかったんだしよ」

「……ふん、随分と必死なことだな。ところで、いつまで抱きしめているつもりだ？」

面白くなさそうな表情の星の指摘に、ようやくハセヲは抱きしめていたままで大人しくしていただった華琳の存在を思い出した。

だが、左手の力を抜くも華琳の身体は離れない。

その理由は単純明快。

腰に回したままだった腕の力を華琳が抜いていないからなのだが、その理由には見当がつかないハセヲ。

視線を向ければ、華琳は華琳で引きつったような笑みを浮かべてハセヲを見つめていた。

（貴方ときたら……！？）

身体を張ってまで助けてくれた、ここまではいいだろう。

しかし、その後はほぼ無視された形となっていた。これはマズい。

期待させるような態度を示しておきながら放置されるというのは、誰だって腹を立てるというものだ。

まあ、それもＴＰＯをわきまえた場合に限ってほしいものなのだが……そこにまで考えが及んでいない辺り、華琳も疲れで頭が回っていないのか、それとも他に原因があるのか――まあ、ハセヲには分かる訳もなかった。

「とりあえず、城まで退くぞ華琳。このままだと、アイツに捕まっちまうからよ」

とにも、現状が厳しいことに変わりはない。

顎で示された方角を向くと、先日より今まで静観を保っていた真紅の呂旗が行軍を開始していた。

さすがにこれはマズいと、星と華琳は佇まいを正す。

それにホッと内心で安堵の息を零したハセヲは、ふと上空を仰ぎ見た。

周囲の戦場（じょうきょう）には見合わない、抜けるような蒼穹。

そこに溶け込んでいきそうに思える燐光が、ハセヲの腕に――黄昏の腕輪に吸い込まれていく。

（……ワリい、カイト。俺の勝手に突き合わせた挙句、こんな目に遭わせちまって……！？）

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの特性が残っているなら、復活は可能かもしれない。

あとでデス☆ランディにでも聞いてみるかと、ハセヲが心に決めた時――状況が動いた。

「桃香様、恋さんが出撃していきました。どうやらハセヲさんはまだ戦えるようです。

ここが最期の好機、ここで勝負を決めましょう」

劉備軍筆頭軍師である朱里が、複雑そうな表情で報告と申し出を告げた。

敵としてみれば、厄介なこと。
かつて共に戦った仲間として見れば、生きていてくれて嬉しい。
そして、そうなった原因は自分にある。

だが――――そんな想いに囚われることすらも、今の自分には許されない。

しかしながら、結局朱里はハセヲが出てこないなら戦いたくない、と怪我を負っていることも理由にして参戦を一時拒んでいた恋を説得しきれなかった。

朱里としては、怪我をしていることを差し引いてでも恋が参戦してくれさえすれば曹操を倒せる目途がついていたのだ。

しかし、結果としては恋が参戦の意思を見せることはなく、ここまで戦況を長引かせてしまうことになった。

愛紗が倒れてしまったことも大きい。
現在も目を覚ましていないが、命には別状ないようだ。

それでも兵の士気や鈴々に与えた影響は大きかった。

桃香の”魅惑ノ微笑・改”の効果は凄まじいが、永続効果ではないし、常時発動させることはできない。

適切なタイミングを指示して発動してもらっているが、望んでいた短期決戦を決めるには足りなかった。

未来視によって得た『カイトが曹操を倒すかもしれない』というヴィジョンも、すでに勘違いの結果だということが判明している。

加えて、当のカイトのことといえば、先ほどまで感じられていた気配が不意に消失してしまったことも気にかかっていた。

普段ならば、姿は見えずとも朱里や桃香には何となく存在を感じられていたのに、だ。

しかし、現状ではそちらの確認に割く時間的余裕はない。

手に入れた情報では、今日の夕方くらいには本隊が戻ってくるだろうと予測されていた。

ならば、今こそ最後の機会だと朱里が桃香に兵の士気高揚を願い出たのだが――

「……悔しいけど、ここまでみたい。朱里ちゃん、みんなに撤退の知らせを伝えてくれる？」

「――――え？」

思ってもいなかった言葉が返ってきたことに目を瞠り、朱里は桃香を見つめる。

彼女は、何気なく西の空を見つめていた。

表情には現れていないが、その瞳には確かに悔しさが滲んでいる。

急遽撤退を選んだ理由を桃香に尋ねようとする朱里より僅かに早く。

「大変ですっ！！」

大慌てで駆けこんできた伝令の言葉を受け、朱里は絶句した。

「旗は……何あれ！？　こんなに大量の旗って……どこかの連合軍なの！？」

「ん～と……」

城壁にて指示を飛ばしていた桂花と風は、地平の果てに見える砂塵と大量の旗に動揺していた。

ただでさえ厳しい現状に、あの規模の増援まで受けてしまっては勝ち目など無い。

周りに兵たちがいるのが分かっていても、うろたえるのを抑えきれない桂花とは異なり、風は普段通りの口調を維持したまま誰の旗かを確認しようとする。

大量の騎馬隊を先導して、一直線にこちらへと向かって来ているあの集団は――――

「旗印は、夏侯、楽、許、郭……それに紺碧の張旗。みんなお味方の旗ですねー」

予定ならば、もう半日以上はかかると予想されていたはずの――――
しかし、待ちに待った頼もしすぎる味方が到着した瞬間だった。

「よっしゃあっ！　間に合うたみたいやな！」

「そうでなければ困ります！　さあ、視察では発揮できなかった貴女の力、存分に見せていただきますよ！」

「任せとき！　ここで頑張れんよーな輩は、どの陣営にもお呼びじゃないわぁっ！」

「……ハセヲ殿、いま参ります！」

「春蘭様！　城の旗は健在ですよ！　華琳様たちは御無事です！」

「当ったり前だー！　我らの華琳様だぞ！？　そう簡単に負けるはずがあるまい！」

「はいっ！　兄ちゃんや城のみんな、頑張って耐えてくれてたんですね！」

「うむ！　まあそれも当然なことなのだが……ここまではよくやったと認めてもいい。ならば、次は我らの番だ！　皆のもの、続けぇ！　一刻も早く、華琳様を劉備の包囲網からお救いするのだ！」

「華琳様がご健在である以上、こちらの動きを見れば全てを理解してくださるだろう」

「そうですね。なら、こちらも……！」

「ああ。稟の作戦に従い、連中の背後から一気に叩くぞ！　我らの主を、城に残りし仲間たちを、我らの盟友に剣を向けたことを後悔させてくれる！」

「はいっ！」

「あれー？　あそこにいるの、華琳様とハセヲくん、それに星姉さまみたいなのー」

「んー、あのハッキリしとらんっぽい感じなのは、確かにハセヲやなぁ。さすが、ヘタヲ！　両手に花の状態やのに、どっちにも手ぇ出せず、挟まれとるようにしか見えへんわ！」

「お前ら、もう少し緊迫感というものをだな……ハァ、もういい。

間もなく接敵する。派手にいくぞ！」

「了解なのー！」
「がってんや！」

西方から、南方から。

続々と集結した曹魏の将兵たちの軍氣が、巨大なうねりとなって空気を揺らがせる。

その気性は”怒”。

掛け替えのない主君を脅かし、苦しめた存在を、彼らは許しはしない。

――――決して。

「我が目指すはただ一つ！」

「劉備を打ち払い、我らが主をお救いすることだ！」

「「「おうっ！！」」」

「ならば往くぞ！　総員、突撃ぃぃぃぃっ！」

我らこそ『天道を歩む者』の配下だと主張するように、春蘭が抜き身の七星餓狼を天へとかざす。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！！」

その背を、一丸となった将兵たちの声が押した瞬間だった。

激しい軍靴の音を響かせ、疾風迅雷の動きをみせる曹魏の本隊が――

「「「おおおおおぉぉぉぉーーーー！！」」」

――撤退を開始した劉備軍の背後に喰らいついた。

「――戦いの趨勢（すうせい）は決した。だが、少しでも彼女の意志に迷いがあったなら、この結果は得られなかっただろう」

心なしか嬉しそうに呟いたのは、虎牢関の時にもハセヲの戦いぶりを見ていた男だった。

砂にまみれてくすんでいる蒼髪を気にかけるでもなく、風に吹かれるがままにしている。

男が現在立っている丘から戦場まではかなりの距離があるのだが、彼には全く問題ないようだ。

そこで、男が演技ぶった動きで演説家のように両腕を左右に広げた。

聴衆は誰もいないが、やはり彼には問題なかったようだ。

胸の奥から溢れ出そうな『感情』を堪えるように、男は口を開く。

「今日という日を呼び寄せた君の強い意志の前に、目の前の困難はもはや困難ではない。そのまま突き進むといい、誇り高き覇王よ。ここに、ハジマリの扉は開かれた。

――黄昏は近いぞ、ハセヲ……！」

見るべきものを見届けられたからか、男は満足そうに口元を吊り上げ、荒野を北の方角――許昌の方へと去っていった。

## 第8話（後書き）

今回にて華琳も開眼。
ついでに、気持ちの方もほぼ形をとらせてみましたw

次回は、劉備戦を終えた後の話。
何人かのキャラたちに焦点を当てたショートストーリーの集まりみたいになる予定です。

それが終われば……！

# 第9話（前書き）

ようやく完成（？）したので投稿しますが、注意してください。

描写しきれず、うやむやにしてしまっているところ多数です（汗）

# 第9話

「……除隊願いを出したんだってな」

籠城の時間を稼ぐために、命を懸けて呂布と対峙した天遣隊の部隊長たち。

そんな彼らが休んでいる部屋を訪れたハセヲの開口一番が”それ”であった。

その言葉を受けた彼らは、揃って仕方ないとばかりに首を縦に振る。

今やそんなことすら難しいのか、軽く呼吸を乱しながらの緩慢な動作。

それほどまでに、彼らが負った負傷は甚大だった。

ほぼ全身に何らかの怪我をしており、五人とも腕の感覚がなくなるなり、足を砕かれて立つことすらままならないなど、今後の生活にも一苦労する状態。

――だというのに。

彼らの表情には、これからはもう共に戦えない悔しさこそ滲んでいたが、今後の生活に対する悲嘆には染まっていなかった。

今後もずっとそうであるかは分からない。

しかしながら、確かに今この時――彼らの心は『ある想い』で満

たされていた。

「すいません、団長。俺らはここまでです」

「満足に動けない俺らのことは、もう切り捨てていってください」

「故郷で風の便りを楽しみにしてますよ。団長たちの活躍ぶりを、ね」

「そうなりゃ、俺らだって自慢できますよ！　この人と同じ部隊で、俺らは戦ってたんだってさ！」

「これまでありがとうございました！　楽しかったですよ、本当……！」

口々に胸の内を語り、彼らはハセヲの答えを待つ。

じっと五人の視線を受けながらもハセヲは口を開こうとせず、しばし無言の時が流れた。

部屋にやってきた時から何かを堪えるように顔をしかめていたハセヲだったが――ついに決心したのか大きく息を吐く。

「なに全て終わった気で話してんだ、お前ら？　除隊なんて認めねぇぞ」

「「「「「は？」」」」」

なに馬鹿なこと言ってんだ、とでも言いたげな顔でハセヲは彼らの願いを一蹴した。

予想もしていなかった返答に、五人の顔が困惑に歪む。

それも当然だ。

今の自分たちに、これ以上何ができるというのか。

足手まといにしかならない自分たちなど必要ない。

であるならば、速やかに立ち去るほかないと思っていたのに――

「別に戦場に出るだけが仕事じゃねえだろ。裏方の仕事は山ほどあるし、後進の奴らの教導だってできる。なら「やめてくれっ！！」……あ？」

「アンタには、俺らみたいのに構う前にやらなきゃならねえことがあるだろう！？」

「同情はいらねえっ！　俺らは望んだ道をとった結果、こうなっちまっただけだ！　だから……捨てていってくれよ！」

ハセヲから希望めいた言葉をかけられた彼らは、正直その手を掴みたいと思ってしまった。

それでも結局、口から零れたのは否定の意を告げる慟哭めいた叫び。

自分たちのことで足踏みさせるような真似をハセヲにさせたくないという彼らの想いが、賛意を告げる気を起こさせなかった。

それは、ハセヲに希望を見出した彼らにとって純粋で尊いもの。ならば、この願いを聞き届けることこそが、彼らの心を汲むことになるのではないのだろうか。

「同情なんかじゃねえ。これは、俺がそうしたいと思ったから決めたことだ」

だが、ハセヲはそう考えつつも――自らの思うところを語り始めた。

「お前らはまだ”ここ”にいる。ここで、俺のことを気にかけてくれてんだろ。そんなお前らを過去形にするのは納得いかねえんだよ！」

共に駆け抜けてきた戦場は数知れず。

そんな彼らのことを、もう共には戦えないからといって『大切な仲間がいた』などと過去形にするつもりは、ハセヲにはなかった。

それこそ、随分と自分を買ってくれているらしい彼らに幻滅されても構わない。

他にも、苦しい想いをさせてしまうかもしれない。

しかし――例えそうなろうとも、この決定を貫き通したい。

「観念しろ、これはもう決めたことだ。俺はお前らを置いていく気はねーからな、しっかり追いかけてこい。
――――分かったな？」

それが死者に鞭打つ言葉でしかないことを、ハセヲははっきりと理解していた。

彼らの覚悟を拒絶し、自分の我がままを彼らに強要するなど、なんて勝手な態度なのだろうか。

それでも、五人の想いが真摯なものであることが分かってしまうだけに、ハセヲもまた真摯に己が胸の内を語った。

どんな文句を言われようとも、どんなに打ちひしがれた姿を見せられようとも。

――――お前たちを手放してやらない、と。

「「「「「……ははは」」」」」

彼らがどんな行動に出ようと、受け入れてくれるまで受け止め続けようと決心していたハセヲに向けられたのは、力無い笑い声だった。

「まさか、まだ俺らを扱き使うつもりだとはなぁ」

「……本当、とんでもねえ人の下についちまったもんだ」

「アンタ馬鹿だよ。まあ、そんな人に付いてくって決めた俺らはもっと馬鹿だったってわけだ」

「……はぁ。ゆっくり療養しながら今後のこと考えるつもりだったけどよ、そうもいかなくなっちまったな」

「ああ、我らが団長の命令だからな。従うしかねーよなぁ」

お互いの顔を見つめながら、彼らは仕方なしといった答えを返した。

その言葉とは裏腹に、浮かべている表情には先ほどまでのものより活力がある。

困ったような笑みの中に、芯が通ったような力強さが根付く。

「分かったなら、今はしっかりと休め」

素っ気ない言葉をかけながらも、ハセヲは内心で深く彼らに感謝していた。

自分は先ほど、お互いの関係を壊してしまいかねない言葉を口にした。

結果として、それぞれがそれぞれの決意を受け入れて、今までとは違った自分になったはずなのに。

（――お前らの方こそ大馬鹿なんだよ）

にもかかわらず、いつも通りの態度がとれる彼らの強さを、ハセヲは深く実感していた。

『捨てていってくれよっ！』

彼らはそう言ったが、本気だったなら気持ちが変わるはずがない。

問題も障害も、やりたいことをやるために乗り越えるべきものとしか思わない。

全ての人がそう思えることではないが、彼らにとっては揺るがない願いであったのだ。

「じゃあな、たまには顔を出すからよ」

頬が緩んでいくのを自覚したハセヲは、退出する意を見せる形で表情を隠した。

そのまま五人に背を向けて歩き出す。

気を抜くと笑ってしまいそうになる衝動を堪えながらも、部屋を出る間際に、

「……ありがとう、な」

声には今の気持ちを素直にのせて伝えていった。

それを聞いた五人は、一様に呆然とハセヲが出ていった扉を見つめる。

が、その表情が”年がいのない笑み”へと変わるまで、大した時間はかからなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

劉備戦を終えて数か月ほど経った、ある日の昼下がり。

ハセヲたちの姿は、いつもの中庭にあった。

ようやく戦後処理の件でも峠を越したことと、使者として西涼の馬騰のもとに赴いていた春蘭が戻ったために、経過報告兼休憩がてら顔を出しあっていたのだ。

それもひと段落しつつある雰囲気のなか、ハセヲは何とはなしに全員の顔を見渡しながら考えていた。

（……コイツらとの関係もずいぶん変わってきたよな。最初の頃に

は考えられなかったくらいだしよ）

自分の左右を固めるように陣取っている風と稟、その隣に星。

対面には、この国の王である華琳。その両脇には春蘭と秋蘭が控えている。

そこから少し離れた所には、お茶の給仕をしてくれている月と詠の姿があった。

いずれの人物たちも、ハセヲにとっては大切な『仲間』であることには違いないのだが――彼女たちとの距離感をはかりかねる事態が起きることが、最近の彼の悩みでもあった。

その中でも最大の件が、星とのキスだ。

今でもハセヲは星の顔を見るたびに頬が紅潮しそうになるのだが、対する星は（ハセヲから見て）平然としたものだった。

ゆえに、あのキスは状況を収拾させるためのものでしかなかったのだと、無理やり自分を納得させることしかできなかった。

とはいえ、他にもやり様があっただろうに、わざわざその方法を選んだのは――星の優しさか、それとも他の理由のためなのか。

（っ！？　やめだ、やめだ！　この件は永久保留っつーことで！）

自分で考えてもおめでた過ぎるとしか思えない結果に行き着いたハセヲは、そこで頭を振って思考を放棄した。

ついで、星のことを侮辱してしまったかのような罪悪感にも囚われて軽く凹んでしまう。

――真実を本人に聞く、という選択肢はハセヲの中にはもとより存在していなかった。

「「……」」

その様子をしっかりと見ていた風と稟の視線がハセヲに突き刺さったことで、彼は俯きかけていた顔を上げた。

気付けば彼我の距離はずいぶんと縮まっている。

（別に嫌ってわけじゃねーんだが……やっぱ落ち着かねえ）

肘と肘が触れ合いそうな距離感。

ここ最近になって妙に距離感を詰めてこようとする二人に対して、内心で戸惑いの声を呟くことが多くなったハセヲだった。

傍目には、タイプは違えども美少女である二人を侍らせている男にしか見えないのであるが、ハセヲにとっては現在の状況となった理由が見えてこないため、戸惑うことしかできなかったのである。

一体、何が楽しくて自分などに執着しているような態度をとっているのか。

主だからとはいえ、有能すぎる軍師二人がそこまで自分に対して価値を見出せるとは思えないハセヲなのだった。

さすがに、共謀して自分をからかっているわけではなかろうが――

「――？」

そこまで考えたときのことだった。

二人のものとは違う視線を感じ、ハセヲは視線をさまよわせる。

直後、軽く息を飲んだ。

こちらの内面など素知らぬ、といった感じで自分を見上げていた華琳と視線がぶつかる。

そこで華琳は、ハセヲが自分の視線に気付くのを待っていたかのように、身を一歩前へと寄せてきた。

「そういえば思い出したのだけれど……」

そう言いつつ、柔らかな微笑を浮かべる。

相手の心を貫き、生かすも殺すも自分次第で動かせそうな笑み。

それに対して、ハセヲは背中に冷や汗を流していた。

まじまじと華琳を見据える瞳には、彼らしからぬ怯えのような色が滲んでいる。

これまでの彼の経験から導き出された考えが、現在の状況に対して

警鐘を鳴り響かせていたからだ。

そういえば、なんて言い方をしているが”いま言うこと”こそが、彼女にとって望ましいのは間違いなかった。
それによって、求められる最大限の結果が得れるからこその言葉なのだろう。

しかし、そこまで分かっていながらハセヲには抵抗しようもなかった。

底知れない光をたたえた華琳の理知的な瞳には、体格や力で勝っていようとも不用意に軽んじることをためらう何かを感じてしまったからだ。

「……何だよ？」

「貴方に個人的な”御礼”をしなければ、と思っていたの」

ならば、と覚悟を決めたハセヲが口を開いた矢先、華琳は意味ありげな笑みを浮かべて言ってのけた。

そして、状況的にその言葉を額面通りに受け取れるハセヲではない。

「……お前の言う御礼ってのは、『今日一日、貴方を私専用のイスにしてあげる』っつー類のもんか？」

「何だとっ！？　そんな御褒美、コイツには過ぎたものです華琳様！」

ハセヲの言葉に羨ましそうに反応したのは春蘭。

そこはいつも通りなのでスル―したハセヲであったが、華琳の物言わぬ視線が気にかかった。

先ほどの茶化した発言にも、気を害したようには見受けられない。どこまでも自然な笑みを浮かべているだけだ。

それがかえって不気味に思え、警戒を深めていくハセヲに華琳は再び口を開く。

「なぜ警戒しているのかと言えば……それだけ思い当たる節があったからよね？　いくら客将の身であっても、命令違反に不敬罪に当たる言動をとっていい理由にはならない。結果としては助かったこともあったから、公の場では言及しなかったけれど――罪は罪よね」

「……」

「まあ、だとしても今までに言及しなかったのだから、そこを今さら蒸し返したりはしないわ。だから、これがどういう結果に繋がるかは、受け取る貴方次第ということよ」

投げかけた皮肉の裏に可能性として思い浮かべていた懸念事項を言い当てられ、ハセヲは小さく息を飲んだ。

華琳の言うことを信じるなら、ハセヲの言動を咎めるつもりで何かをするわけではないようだ。

だからといって安心はできないハセヲだったが、結局は投げ槍気味に両手を上に上げた。

もう好きにしてくれ、と言わんばかりに。

その姿には、関羽を打倒した時に放っていた気迫の欠片も感じられなかった。

――彼の名誉のために付け加えるなら、これは戦略的恭順であって無条件降伏したわけではない、きっと。

「なら、一歩前に出てもらえるかしら？」

「……ああ、一体何をおおぅっ！？」

手招きしてハセヲに近寄るよう指示した華琳に応えたハセヲが足を前に動かした瞬間、天地が逆転した。

同時にハセヲとの間を詰めていた華琳が出足払いを仕掛け、ハセヲを仰向けに転ばせたのだ。

足元に何の注意もしていなかったハセヲはとっさに受け身も取れず、芝生越しの大地に後頭部をぶつけてしまう。

目を閉じて目元に滲んだ涙を堪えながら、ズキズキと響く鈍痛に苛まれた頭を抱えるため、両手をまわそうとしたハセヲより僅かに早く、

（……なんだ？）

彼の頭を包み込んだ手があった。

小さくて細い指が、ハセヲの髪や頬を優しく撫でていく。

不意の感触に驚いて目を開いたハセヲの視界に、抜けるような蒼穹と美しい金髪が映った。

陽光を吸い込み、より輝きを増しているかのように映る金髪がハセヲの視界を埋め尽くしていき――

「「「〜〜〜っ！？」」」

ハセヲのみならず、周囲の者全てに驚愕を与え、中庭に静寂をもたらす。

しばし、時が止まったかのように誰も動くことはなかった。

いや、正確に言うならば見えている範囲内では……なのだが。

その証拠とばかりに、クチュクチュと艶めかしい音が響いていた。

発生源は、仰向けに倒れたハセヲの横に腰を下ろしている華琳の口元。

すなわち、ハセヲに覆いかぶさるように華琳が交わしているキスこそが静寂をもたらした原因だった。

柔らかい身体と――――さらに柔らかく燃えるような熱をもった華琳の唇が押しつけられ、ハセヲを容赦なく追い詰めていく。

星と交わしたキスと比べて、明らかに巧みな”それ”は紛れもない女の手管（てくだ）と呼ばれるもの。

こういう方面に関しては『初心者（ヘタレ）』であるハセヲに抗える術などあるはずなかった。

（なに、が……起きて、る？　俺と……華琳、が！？）

この状況からの脱出どころか、現状把握すら怪しいハセヲ。

そんな彼を救った（？）のは、やはりというか周囲の者たちだった。

「ハセヲ、貴様っ！？　華琳様に何をしておるかぁっ！！」

それは、信じられない光景を見たという顔から復帰した春蘭の怒号。

これまでにもよく聞かれていた声に少しだけ別の感情も乗せた声が、立ちこめていた妖しい雰囲気をブチ壊す。

しかし、その反応も予測済みであったかのように、華琳は眉をひそめることもなくハセヲから離れて立ちあがった。

その際に、お互いの唇にかかった銀のアーチが『ある者たち』にとっては憎々しさを、また『ある者たち』にとっては悲しさを加速させる。

バキン！
ガシャン！
ガチャ！
ダッ！
ギシィ！
スッ……
……フゥ

そこで様々な音が漏れた。

ハセヲには全て把握できなかったが、特に気にかかったのは二つ。

一つはどこかへ走り去っていった詠。

少し遅れて月が追いかけていったのだが、どうしたというのだろうか。

そしてもう一つが、舐めていた棒付きキャンディ（？）を噛み砕いた風だった。

その顔は能面のような無表情となっており、かなりの迫力がある。

おおっぴらに感情を顔には出さないが、抱いている感情は意外と豊かな風。

そんな彼女だけに、ハセヲの背筋を冷たい何かが駆けあがる。

「それで、貴方はいつまで寝てるつもり？　芝生の上はそんなに寝心地がいいのかしら？　それとも……良すぎて足腰が立たなくなっ

たとか「んなわけあるかっ！？」……ふふふ」

蒼穹の下、陽光に照らし出された不敵な笑顔。

魅了の妖術でもかかっているかのように視線を外せない華琳の瞳を見つめながらも、ハセヲは思わず叫びながら立ち上がる。

華琳を乱暴に振り払うわけにもいかずに硬直していた先ほどまでとは異なる、反射的な動きのおかげだった。

いまだ思考回路はうまく機能していないうえに、心臓の鼓動が激しくてならないまま。

紅潮した頬に片手を添え、徐々に唇をゆっくりとなぞるように動かしている華琳の姿がそれを助長していた。

その悩ましげな動きにハセヲの意識は捕らわれ続け、

「覚悟しろおおおーーー！」

「って、やべぇ！？」

結果として、回避のための時間を失ってしまった。

抜刀した剣を振りかざして春蘭が迫りくる。

冗談抜きに当たったらあの世逝き確実な一撃は、

「――――まあ、待て」

「邪魔をするな、星！」

ひょいっと無造作に伸ばされた重槍『静カナル翠ノ楽園』によって受け止められた。

周囲の者たちの中では比較的落ち着いている秋蘭と並び、いつも通りに見える星が進み出て、ハセヲを背後に庇う。

春蘭のように激情に駆られている訳でもなく、風のように感情を殺したような態度をとっている訳でもない。

まさに普段通りの――”不自然なほどに”自然すぎる星の態度に、ハセヲは違和感を持つことなく頼もしげな視線を送る。

持つべきものは、いい仲間だと。

が――

「――少しだけ我が主と話をしたくてな。それが終わった後ならば……好きにするといい」

「「っ！？」」

気が付いたら喉元に容赦なく剣を突きつけられていた。

まさにそのような星の追い打ちに、春蘭とハセヲは二人揃って息を飲む。

ハセヲからは見えなかったが、春蘭の顔が少しヒクついていたあたり、星がどんな表情をして話していたのか考えるだけで恐ろしい。

――もはや、孤立無援なのは間違いないようだった。

「光栄に思いなさい。男としたのは、今のが初めてだったのよ」

その言葉を最後まで聞くことなく、ハセヲは行動を開始した。

華琳の言葉に反応した面々の隙を唯一のチャンスとみなしたハセヲは、迅速に戦略的撤退を試みる。

（華琳の奴！　少なくとも春蘭はこーなることは分かってたはずで御礼も何もねーじゃねぇか！？　いや、まあ……確かに凄かっ……って！？）

後ろを振り向くまでもなく、馴染みのある強大な気配が高速で接近してくることに気付いた。

かたや、猛り狂う感情を爆発させているように。

かたや、静かな怒りを一点に集中させたかのように。

どちらにしても、捕まったらただではすみそうにない。

ある意味、劉備戦の時よりも絶望的な状況が――大いなる受難が始まったのだった。

（さあ、私は〝認めた〟わよ。あとは貴方がこのまま私にとって『対等』であり、この想いを受け止められるだけの気概を見せてくれればよいだけ）

（やってくれやがりましたね……！　あの件で安心していた風が馬鹿でしたが……このままでは終わりませんよ～華琳様？）

（宣戦布告、というわけですか。ですが……冗談じゃありません！　貴女にハセヲ殿は譲りません！！）

（臣としては嬉しくもあるが……複雑だな。どうしてお前は、こうも私を困らせるのだ）

中庭に残った者たちは、立ち込める嫌な雰囲気をものともせず、それぞれの思考にふける。

（ええいっ！？　ハセヲが腹立たしいのはいつも通りだが……今回は妙にモヤモヤするぞ！　とりあえずスッキリするまで殴らせろ！）

（状況が違うとはいえ……私の時には見られなかった態度の真意。聞かせてもらうぞ、ハセヲ！）

追う者たちは、迷うことなく抱える想いを行動に乗せて足を踏み出す。

（なんでっ！？　どうしてボクが泣かなきゃいけないのよっ！　別にアイツが誰とイチャついてようが、月にさえ手をだしてなきゃ大丈夫なはずなのに！）

（……詠ちゃん。道のりは険しいけど、後悔だけはしないようにお互い頑張ろうね）

与えられている部屋にこもって鳴き声をかみ殺す者と、それを扉越しに黙って見守る者は、内心の整理をつけつつ今後の自分を見据える。

全ては、一人の少年のために――

――それから約３０分後。

逃走劇はいまだ継続中であった。

場所を城内から市街の方まで拡大し、縦横無尽に逃げまくるハセヲ。

さすがに緊急事態でもなく市街地を抜刀したままは走らないようで――春蘭は星にたしなめられるまで気付かなかったが――捕まる＝即死の可能性は減ったかに思われた。

まあ、それでも全く安心はできないわけだが。

（どうする！？　どうすりゃあいい！）

答えの見えない思考を重ねながらも、ハセヲはひたすら逃げ続けた。

全力疾走を続けている身体には、すでにかなりの疲労が溜まっている。

それでも足を止める気にはなれず、最小限の制動をかけて曲がり角を左へと突き進んだ彼の前に、

「うぉっ！？」

大きな肉の壁が立ちはだかっていた。

そこに飛び込む気だけは起きず、ハセヲは全力で体を捌く。

しかし、捌いた方向にも別の人物がいたことにも気付いた。

続けての回避行動がとれないと即座に判断したハセヲは、激突を回避するための最終手段を図る。

「っだあああぁぁ！」

渾身の横っ跳びから身体を丸めこむように地面へとダイブ。

後頭部を守りつつ、ゴロゴロと地面を転がり、

「っぐ！？」

対面にあった屋敷の塀にぶつかって止まった。

疲労困憊のところへの追加ダメージは大きく、追われているというのに身体を起こす気にもなれない。

「……」

「ようやく追いかけっこも終わりだな、ハセヲ！」

すぐさま、静かな怒りをたたえる夜叉と激情を抱える修羅がハセヲの背後に立つ。

もはやこれまで。

せめて手早くすませてくれるとありがたい、などと願ってはみても叶いそうにない絶望感に打ちひしがれていたハセヲを、

「久しぶりねぇ、ハセヲちゃん♪」

「ようやく逢えたな、ハセヲ……！」

危うくぶつかりそうになった二人が呼んだ。

その人物たちを目にした三人ともが、驚きに目をみはる。

星と春蘭は、鍛え抜かれた全身にピンクのビキニパンツのみを履いただけの、イッちゃってる人としか思えない男を警戒していた。

だが、ハセヲは変態のことなど目にもかけていなかった。

その双眸が射抜くように見つめているのは、旅人用の外套を纏った長身の人物。

その声を聞いた瞬間、脳裏をよぎったもの。

不思議と聞く者を包み込むように響くと同時に、心の奥にスルリと言葉（ナイフ）を突き刺されるように放たれる声。

かがり火に群がる虫たちのごとく、危険があると分かっていても周囲の者たちを引き寄せるような存在感。

最期の瞬間まで、本当に何を考えているか解らなかった男が――

「オー……ヴァン、なのか？」

目の前に現れた気がして、ハセヲは絞り出すように呟いた。

## 第9話（後書き）

そんなこんなで、華琳さまもハセヲ争奪戦に参加。
八人目のヒロインに認定ですw

他にも見所をみせるべく何やら書いてはみましたが、次回は記念話です！

テーマは『心優しき』『異常者たちの』『狂宴』となっております。

それではまたいつの日にか♪

# １００万ｐｖアクセス記念　前編（前書き）

ひとまずの前編をお送りします！

このネタとなった根幹は、個人的にお気に入りな『とあるゲーム』のイベントからｗ

結構キャラが似てるんじゃ？と思ったことから始まってしまったこの企画ですが、果たしてどうなることやら（汗）

# １００万ｐｖアクセス記念　前編

「うむ、イイオノコではないか！」

――人は失敗する。

失敗しない人なんざいるわけないし、仮にいたとしても俺はそんな奴についてきたいとは思わない。

失敗を通じて自分を見つめ直し、よりよい未来の自分を手に入れる”糧”とする。

そんな当たり前の道程を経験してない奴の言うことは、正論ではあってもきっとどこか破綻してるだろうから。

手遅れなことに、目の前の”コレ”は存在そのものが破綻しきってるようだが。

「これ、どうしたというのじゃ？」

――人は堕落する。

だが、その理由ってのは何だ。金か？　権力か？　色欲か？　怠惰か？

まあ、いずれの末路を辿ろうと……こんなことにだけはならねえ、なっちゃいけねえと思う。

世の中にはその手の奴らもいるんだろうが、少なくとも周りに迷惑をかけるような生活は送ってないだろう。

その点でいえば、”コレ”には自重の欠片すらも見えねーわけで。

「なんじゃ、さっきから無視しおって……！」

はぁ……認めよう。

今回の”コレ”は正直お手上げもんだ。

ここまで来て言うことじゃねえとは俺も思うんだけどよ。

「いいじゃないハセヲちゃんっ！　どうしても立会人になってほしいのっ！！　これから先に何が待ち受けてるか分からない以上、ワタシも打てる手は打っておきたいのよん。

それに”彼”なら大丈夫♪　なんたってワタシより強いんですものぉん！　なら、ハセヲちゃんがどちらの力になるべきかは明白でしょ～！」

――――ことの始まりは、このように貂蟬からあまりに見苦しい顔でお願いをされ続けた結果だった。

何でも古い知り合いであり、貂蟬の師でもある人物から最後の修行を受け、力を高めたいらしい。

この世界の状況を聞かされ、その言い分が分かるだけに俺としても固辞することができず、はるばる海を渡って倭（ここ）まで来ることを承諾

しちまったわけだ。

まあ、コイツの知り合いってだけで警戒する必要があったはずなのに……思わぬ有名な名前を聞いたことが”アイツ”との旅に行きたがってた俺を何とか納得させたんだ。

変態だろーと、キチガイだろーと、化け物だろーと。

間違いなく強い貂蝉の師匠だという人物なら、俺にとっても何か学べるものがあるかもしれねえってな。

だってのに――――

「ああっ！　そのどーでもよさそうな視線が儂の繊細な心を突き刺してゆくぅ……！

痛い……！　じゃが、これが主の与える試練だというなら耐えてみせるぞ！」

――――”コレ”から何を学べというのか。

ああ……ないな、完全無欠に何もない。

とゆーか見ていたくもない。

俺が元の人物にもっていたイメージは破壊されきって修復不可能。

元の世界に帰ったとしても、その名前を聞いただけで拒絶反応が出ることは間違いない。

「ちなみに聞くが……アンタのどの辺が繊細だって？」

神殿のような趣の木造建築物の一室に通された俺の目の前には、いい年こいたジジィが一人。

古代人らしく、髪を二つに分けて耳の横で上下に丸めており、ビシッと本人は決めているつもりであろうカイゼル髭が俺の神経を逆なでする。

――まあ、そんなことも”アレ”に比べりゃ瑣末事なんだが。

なるべく正視しないよう身体を半分ほどひねりながら、どーでもよさげに問いただしてみた俺の言葉に反応し、

「おぉぅ！　見よ、この引き締まった大胸筋を！　悲しみを乗り越えるために鍛えはしたものの、心と身体はとかく別物。熱い胸板に反して、心の臓の鼓動は儚いものよ。

――どれ、何なら聞いてみるがいい」

眼前に広がる、褐色の肌。

フィットしたジャケットをはだけて纏い、マイクロビキニチックな胸当てと白のふんどしを装備した変態の親玉が迫りくる。

「天下無双飯綱舞（やかましい）ぃぃぃぃっ！」

「っぐっぽわぁぁぁぁぁっーーー！？？？」

最大レベルの身の危険を感じた俺は、思わず手加減抜きで双剣のアーツを解き放っていた。

バク転の勢いを借りての蹴りで変態を空中に打ち上げた後、地に足をつけるやいなや追撃を仕掛け、喚装した”虚空ノ双牙”で怒涛の六連撃を叩き込んでやる。

叩きつけられた勢いは相当なものだったらしく、部屋の壁すらぶち抜いて変態は吹っ飛んでいった。

ふぅ、悪は滅びたぞ……って!?

「あ……とっさなことで本気でやっちまったけど、生きてっかな」

我に返り、慌てて確認に走る。

「あれくらいなら平気よ！　ワタシたちは、相手のどんな想いすら受け止められるよう鍛えてるからぁ♪」

壁の穴に近寄り、辺りを見回したが視界内に人影は見えない。

だがまあ貂蝉の言う通り、簡単に死んだりはしないだろう。

姿は変態でも、中身は紛れもなく傑物だと分かる程度には、俺も感じとれていたから。

「しかしだな、周りの者たちが騒いでおるぞ。仮にも、彼らの主に手を上げたわけだからな」

軽く眉をひそめて、後ろに控えていた星が呟いた。

今回の旅路に唯一付き合わせたコイツには悪いと思ってるが、あそこで手を出さなきゃ俺の精神が危なかったぞ、確実に！

確かにもう少し穏便に済ませれた手があったかもだが、そんなことは今さらだ。

加えて、変態に人権はないって、どっかの誰かも言ってたしな。

「だってなぁ……”あっち”でも似たような反応をしてくる奴はいたけどよ、アレは正直規格外だろ？　だったら、迫りくる危険に対しての正当防衛ってことで、気持ち良く許してくれていいと思うぞ、俺は」

このまま真っすぐ華琳たちのもとに戻り、ここでの出来事を全て忘れ去りたい想いに絶賛駆られまくってる俺は、自分でも中々の傍若無人ぶりだと思えるセリフを吐く。

星の言う通り、段々騒がしくなってきた人の声を現実逃避するように聞き流しながら――

――場所を移して。

「やりおるな、貂蝉。中々に不器用ながらも素敵な一面をもったオノコと共にいるとは。不覚にもこの”卑弥呼”、彼から安否を問わ

れたときは胸がキュンっとしたぞ」

心配してやって損したと思えるような豪気さを放つ、このおっさんの名は卑弥呼。

日本人にとって、その名前が想起させる人物像といえば、邪馬台国の王、呪術をもって政事を行った神官、謎に満ちた素姓の人物といったものになるだろう。

小学校の社会でも習う、歴史的人物の一人。

しかし――この外史においては、その正体はただの変態であった。

「ふふ、中々に愉快な御仁のようだな」

（何が愉快だ!?　ちょっと逢うのを期待してたのに、実際は”変態（なの）だった”俺の虚しさはどうすりゃいい!）

今も恥じらうように浮かべている笑みが、何ともいえない衝動をもって俺の全身を震わせている。

怖気が走るとしかいえない光景だが……まあ我慢だ、俺。

ここでツッコんだとしても疲れるだけで、何の生産性も――

「ぐふふ、いいでしょう卑弥呼。ハセヲちゃんはワタシが見こんだ素敵な人なのよん♪」

「……っく！　お主、見せつける気か!?　儂を差し置いて二人だけの世界など作らせはせんぞぉ！」

諸手を上げながら威嚇めいたポーズを取って迫る変態が一匹。

あれ、変態の数え方って”何匹”でいいのか？　まあ、”何人”じゃあ人間に失礼だしなぁ……ちくしょうっ！　今度は上手く撃退しねえと！

「うるせぇぞ、変態！」

「っな！？　誰が変態じゃと「テメェしかいねーだろうが、変態！」……うぅ、そんなになじるでない！」

「やかましい！　変態は変態だ、変態！　いいか、変態！　変態の分際で俺たちと同じ空気吸いやがって、変態は変態らしく牢屋の中で臭い飯でも食ってろ！　なぜなら変態だからだ！　分かったか変態！」

「まあまあハセヲちゃん。そろそろ止めてあげないと、卑弥呼の漢女心が「なに自分は違うみたいな反応取ってんだ！」……え？」

「この変態どもが！　いちいちクネクネすんな変態！　見苦しい下半身晒してんじゃねえぞ変態！　拘束したうえで砂糖水ぶっかけて、アリの巣の前に放置してやろうか変態！」

「「……」」

懲りずに近寄ろうとしてきた変態に、仕方なしに人としての道義を説いてやった。

同時に言いたいとこも言い切ってスッキリした俺の目の前には、物

言わぬ変態が二匹。

作戦終了、目標は完全に沈黙したようだった。
今度は真人間らしく理知的な対応がとれたようだ。

ふむ、と満足げに頷いた俺に、星が微妙な視線を向けてきていることに気付いた。
コイツがこんな表情をするのは珍しいんだが。

「どうかしたか？」

「……いや、らしくなく饒舌だったと思ってな。それに気付いていたか？　貶している間中、愉しそうに目を輝かせていたぞ」

「やめてくれよ、まるで俺が毒舌家でそれを楽しんでいるみてーに聞こえるじゃねぇか」

まったく、俺にそんな気はねぇぞ。
むしろ不本意ながら、俺は楽しまれる側の方だからな。

そういう手合いなら、俺の周りにはバーゲンセールみたいに溢れてるやがるからよ。

――ラスボスは言うまでもなく華琳（アイツ）だし。

そう言うと、なぜか星に溜め息を吐かれたのが気になったが、それ以上に。

「おい、さっさと本題に入ろうぜ。そのためにここまで来たんだからよ」

いい加減、わざとらしくメソメソと泣き真似をしているコイツらが煩わしくなってきていた。

可愛げのある女の子がやるならともかく、種族的な思考として男がやってもイライラするだけだ。

しかし、変態どもは立ち上がる気配をみせようとしない。

「……なあ、さすがにその姿だけがお前らの本質じゃねーんだろ？　なら、見せてくれよ。俺にお前らのマジなところをな。（まあ、ありえねーだろうけど）その様子次第じゃ、見直すかもしれねえぜ？」

仕方なしに呟いた俺の言葉に反応したのか、変態どもの肩がピクっと揺れたと思ったら、

「師っ匠ーうっ！　今日は頼みがあってここまで来たのよぉーー！！」

「その名で儂を呼ぶということは……漢女道亜細亜方面前継承者である儂に逢いに来たということか！

よかろう、話してみるがいい！　迷える漢女を導くことこそ、我が至上命題。その張り裂けんばかりの胸の内を赤裸々に語ってみせよ！」

全身の筋肉をバンプアップさせたかのように震わせながら、何やら超変態にシフトアップした二匹。

「……何か始まったな」

「うむ、面白い匂いがするぞ♪」

星の言葉に同意はできそうにない。

訳が分からねえが――――とりあえず、声の調子に合わせて動く姿が生々しすぎるのが問題だ。

できれば目を瞑りたかったが……それはそれで危険なために断念。

さっさと退散したいと願ってやまない足を、何とかこの場に縫い止めて、成り行きを見守る。

「この世界に訪れようとしている危機を乗り越えるため、ワタシもできることをしようと決めたの！　そのためには、師匠の協力が必要なのよ！」

「ほう、何やらきな臭い噂は耳にしていたが、お前がそれほどに思い立っていたとは……！
で、なんだ？　頼みというのは？」

「ワタシに……漢女大乱祭を受けさせてほしいのっ！」

「「オトメタイランサイ！？」」

「まさか……お前が、そこまでの決意をしていようとは」

何やら二匹の間の空気が重くなった。

それほどまでに、その”何たら祭”が意味するところは大きいらしい。

まあ俺にとっちゃ、今晩が無事に明かせるかの方がよっぽど気懸かりなんだが。

「何やら面白……面妖な響きですが、どんなものか聞かせてもらえますかな？」

いや、言い直した方が悪くなってるぞ、星。

しかし、お前も物好きだな。なんでこんな奴らに興味津々なんだか。

俺には考えられねーんだが、ここに来るまでも貂蝉とはそれなりに話していあたあたり、意外と話題が合うのか？

「最高の漢女になるために通る、地獄の試練よ！」

サムズアップしながら、気持ち悪い笑みを浮かべて貂蝉。

コレに今更どう磨きをかけるってんだ？

単純に最高＝最凶ってんなら納得だけどよ。

「漢女大乱祭……！　そうっ！　漢女大乱祭っ！！」

車に挽き潰されたカエルの断末魔のごとき叫びが響いた。

卑弥呼は俺たちに背を向け、何とかシリアスっぽい雰囲気を演出しようとしているらしいが、見た目のせいで滑稽にしか見えないのは言うまでもない。

――実際、星は必死で込み上げてくる笑いを堪えている。

変態は所詮死ぬまで変態。どんな綺麗事を並べても、その事実は揺るがないってのにな。

「今まで星の数ほどの漢女たちが挑戦し、文字通り、星となって消えていった……」

その方が、周りの奴らにとって安心できると思うのは俺だけか？

「肉体を極限まで酷使した後、精神を極限まで試される！
祭りを無事に生き延びた者こそ、名実ともに最高の漢女となれるのだ！！」

言ってることには重みがあるが、その内容が”アレ関連”ってとこが致命的だ。

どう考えても、良い方向に話が展開される気がしない。

「だが……負けた時の覚悟はできているな？」

「うっ……」

「敗者にかける情けは無い！
負ければ恐ろしい洗礼を受け、肉体的苦痛に加えて、漢女にとって”至上の悦(よろこ)びを受ける資格”すら失ってしまうことになる！」

「ううううっ……！」

「その時は、貂蝉。お前でも容赦はせんぞ！」

怖いのか、両腕で自分を抱きしめるように震える貂蝉。
だが、それ以上に自分を奮い立たせる”何か”があるのか、貂蝉の瞳に光が宿る。

「ワタシは負けないわっ！　必ず、やり遂げてみせるわよぉん！！」

「よーく言った！　それでこそ、我が愛弟子！！」

貂蝉が参加を表明した瞬間、卑弥呼は嬉しさを表現したいのか、妖しげな踊りを始め――

「なあ、妖しい奴は制裁を受けてしかるべきだろ。後の禍根を断つ、という意味でもここで抹殺した方がいいと思わねえか？」

「まあ、気持ちは分かるが……あ奴自身の将来をも賭けた戦いが始まろうとしているのだ。それを見届けてからでも遅くはあるまい」

「……っち、しょーがねえか」

異常なテンションで踊り続ける卑弥呼、闘志を燃え上がらせる貂蝉

を視界の端に収め、俺は本日何回目かも分からない盛大な舌打ちをついた。

言動はともかく、抱える想いは良くも悪くも純粋な奴らなのだ。

せめて、この結末を見届けてからでも――なんて判断を、やはりというか俺は翌日に死ぬほど後悔することになる。

## １００万ｐｖアクセス記念　前編（後書き）

これで、前置きは終了。
後編にて、恐るべき祭りの正体が明らかに！？
ハセヲと星はどうなるのか！？

……私もまだ決め切れていませんが、そんなこんなで後編に続くっ！！

## １００万ｐｖアクセス記念　中編（前書き）

少し後編が長引いてしまったため、三部作にてお送りします。

あ、ハセヲがもはや別人ですｗｗｗ

# １００万ｐｖアクセス記念　中編

長旅の疲れを取って祭りに望むべく、その日は休息をとって迎えた翌日。

変態二匹の動向にはもちろん注意していたが、予想に反して穏やかな休息を送ることができたために、多少の気疲れは残っていても、身体は快調そのもの。

そんな気疲れも、現在歩いている場所が放っている雰囲気が和らげてくれている。

「もうすぐ森を抜ける。その先にあるのが……漢女大乱祭の舞台となる『天の岩座（いわくら）』だ」

神殿から歩くこと一時間。

人間の手が加わることのない、自然の神秘の集大成を誇るような聖域――大土山の麓を俺たちは進んでいる。

霊験あらたかな森の隙間から零れる木漏れ日が、風になびいて起きる木々の葉がこすれる音が。

全ての要因が素晴らしい調和をもって、俺の荒んでいた心を加速度的に癒していってくれている。

ああ、なんて空気がうまいんだろう。今の俺なら、変態”二人”に

も少しは優しく接することが出来そうな気がする。

おし、今なら奴らを”人間のカテゴリに入れてやる”ことくらいはできそうな俺だ！

「見えたぞ、あれがそうじゃ」

森を抜けると、すぐに目をついた巨石。

まだかなり距離があるはずなのに、はっきりと分かった存在感は、実際近づいて見た途端に圧倒されるものであった。

無神論の俺でも、何やら畏れ多いものを感じる。

何となく、襟元を正したくなるような心地だ。

これなら、万物に神が宿ると信じていた古代人にとっては格別な象徴になるだろうな。

ちなみに、星も何か感じるものがあったのか、結構な時間をかけて巨石を見上げていた。

「さあ、祭りはこの岩座の中にある神殿にて行われる。儂はその一番奥にて待っておるから、覚悟を固めたなら”入ってこい”。

それと言うまでもないと思うが……一度入ったならば、勝つか負けるまでは脱出は叶わぬぞ！」

そう言うやいなや、卑弥呼は岩座の”中”に吸い込まれるように消えていった。

（これは…！？）

「これは入口の一種みたいね。どこか”ここ”とは異なる空間に繋がってるみたいだわ」

片手を巨石に当てながら、貂蝉が呟いた。

実際、その手が引き押しされるたびに、巨石という水面に波紋がはしったかのように揺れが生じている。

「……手の込んだ仕掛けなこった」

「ふむ、ますます興味深い。さあ、往こうぞ！」

ガシッっと星に手を取られ、引っ張られる形で吸い込まれていく俺。

目の前が暗転し、上下の感覚さえも不明瞭な空間を漂っている気分になった。

唯一、星に握られた手の感覚だけが明確に伝わってきている。

卑弥呼の言うことが本当なら、嫌になったらバッくれるという手が打てなくなったわけだが。

（あ～あ、こーなったらもうしょうがねえか。アイツには紫電と出会った件や洛陽の件で助けてもらった恩もあるし、いざという時の手助けくらいなら……）

退路が不明な以上、一刻も早く脱出するためには、この祭りを速やかに終わらせる他にない。

森の雰囲気に癒されたおかげで気持ちが前向きになっていた俺は、
そこで暗転した世界に光が差し込んできたのに気付き、

「……っ！？」

直後、急に回復した視界を空いていた手で覆い、息を飲んだ。

少しばかりキツめに照りつけている日差し。
足元が確認できないほどに、膝下くらいまで生えている草の絨毯（じゅうたん）。
そして――――妙に弾力のある地面。

「何なんだ、ここは……？」

地平線が見えるほどに広がった草原に、俺と星は放り込まれていた。
貂蟬と卑弥呼の姿は見えないが、それは別に問題じゃない。

ただまあ……

「なあ、あっちから何か向かって来てねえか？」

「ん？　そのようだ、どれ……っ！？？？」

俺には、砂塵が巻き上げながら何かが近づいてきているだけにしか見えなかった。

あの規模だと一個中隊くらいの人数はいそうだな。

しかし、星の強化された眼は近づいてきている者たちを正確に捉えたらしい。

つまりだ、コイツが大きく息を飲んで目を逸らすほどの異常集団が近づきつつあるってわけだ。

前言撤回っ！

やっぱ帰りてえぇぇぇーーー！！

激しく嫌な予感がするんだが！？

だが、時間は無情に流れ続け……

「よくぞ参られた、異国の客人よ」

全員が似たような髪型と顔立ち、そして格好をしている奴らと遭遇してしまった。

無駄に白い歯を光らせて、爽やかそうな笑みを浮かべた連中と――――

「あああ……心が……俺の心が濁っていくぅ……」

駄目だ……せっかく癒されかけていた俺の心が、深い絶望に染まっていく。

眼前には、やはりというかパンツ一丁の男ども。

ん、それくらい今更だってか？

いいや、一番の問題は”そこ”じゃねえんだよ。

「それで……？　ここは一体どこで、お主らは何者なのだ？」

「ここは漢女大乱祭の聖なる舞台、漢女ヶ原！」

「輝く日差しは漢女の微笑み、しなやかに広がる草原は漢女の髪、温かな包容力をもって我らを支える大地は漢女の柔肌よりできている、決戦の地よ！」

「そなたたちは祭りの参加者ではないようだが、ここへ踏み込んだ以上、我らの相手はしていただく！」

「そう、我ら漢女大乱祭実行部会の面々をな！」

勇ましくも、星が奴らに質問を投げかけた。

問われたことには律儀に答えてきた奴らだったが、言ってる内容は俺たちにとってウンザリすぎる展開だ。

しかしだ、今はそれよりも！

たとえ無駄だろうとは解っていても、言わなきゃ気が済まないことがあった。

「――――ありえねえ、いくらこの世界の創造主（さくしゃ）がアレだからってありえねえぞ！！　何でお前ら全員、肌色のパンツ一丁なんだよ！？」

……そうなのだ。

まるでコントにでも使うような肌色のパンツのみを装着した、三百人近い集団。
遠めからだと素っ裸にしか見えない、ヤバすぎる集団。

ハッキリ言って、異常を通り越して恐怖染みた光景でしかない。

まっとうな暮らしをしている奴らに対する侮辱、いっそのこと人間のパチモンって認識でいいのかもしれねぇ。

「……というか、岩座（ここ）ってお前らにとって神聖な場所じゃなかったか!?　そんな場所でその格好はどーいった了見だっ!?」

……って、そんなのよそ者の俺に言われるまでもなく知ってるよな。

てことは、だ。
救えないことに、”コレ”はコイツらにとっては異常とみなされてねーわけだ。

むしろ、こんなふうに問いただしちまったら……

「その通りですよ。だからこそ、我らは肉体と精神の開放を目指し、日々これ鍛練に身を入れるべく、お互いの心を高め合うのに最適な衣装を用意したまで」

……ちくしょう、もっとおぞましい答えが返ってきやがった。
……駄目だコイツら、早く何とかしないと。

「底の知れた言い訳しやがって。すね毛やら胸毛まで丸出しにして何言ってやがる!?　その姿を見れば一目瞭然、世界にとっての異

物だと確信したぞ、俺は！　だったら……汚物は消毒されるのが道理だよなぁ？」

「ふふ、血気盛んな客人だ。我らを相手にどこまで強がれることか。ちなみに、この空間内は特殊な効果によって、”どのような攻撃を仕掛けようと”死に至ることはなくなっている。痛みこそ普通に感じるが、致命傷以上の損傷を受けた場合は、漢女ヶ原の『癒しの力』が発動するから安心せよ」

――何だって？

「そんなに怯え召されるな。一気に仕掛ける気はありませんゆえ……残りの者たちは準備運動でもしながら待機させておきましょう。どちらにせよ、我らを全滅させねば先へは進めないのですがね。――まずは、この私を相手に、力で押し通り願いたい」

変態Ａが、見当違いのことをぬかしながら進み出てきた。

丸腰なところ、拳闘士なんだろうが……まあそれもどーでもいい。

「おおぉ……確かに良い運動ではあるが……アレだと、男同士で■■■■いるようにしか見えんな」

何やら変態どもはペアになって片方がブリッジ態勢となって身体を上下に揺らし、もう片方がその腰当たりに手を使わずに乗って振り落とされないように耐える、という運動を始めていた。

だが星の言う通り、傍目にはふざけているとしか思えない光景を作り出していたんだが……そんなことに心を揺らすな。

いま俺が成すべきことは――

「さあ、いつでもどうぞ」

「……」

無言で頷きを返す。

視線の先で、進み出てきた変態Ａが構えをとった。

自信ある態度に裏付いているように、隙らしい隙は見つからない。

だが、そんなの関係ねえ。

――俺はコイツらを倒す。

そのためなら何でも”出来る”。何にだって”なれる”。

不思議と、そんな気がした。

「終わらせてやる……！」

「っ！？」

瞬間、全身に力が満ちた。

武器はまだ喚装せず、解き放たれるのを待ちかねている身体の呼び

かけにだけ従う。

その結果――たった一歩で変態Ａとの距離をゼロにした俺は、その勢いのままを殺さぬままに渾身の蹴りを叩きこんだ。

「遠慮はしねえ！　決めてやるっ！！」

まだまだ。

そこで攻撃を止めはしない。

何とか両腕をクロスさせて直撃を防いだものの、両足が地を離れ、されるがままになった変態Ａを蹴りのラッシュで打ち上げ続けていく。

その数が七発を記録したところで限界を迎えたのか、変態Ａの防御を八発目の蹴りが貫いた。

ただまあ、意識は刈りきれなかったようだ。

苦悶の表情を浮かべながらも、地面に叩きつけられる形で着陸した変態Ａ。

しかし、奴が慌てて反撃の態勢を整えるよりも圧倒的に早く、

「斬空刃――」

俺は追撃を放つ態勢へと移行していた。

――思い浮かんだのは、鞘から剣を抜き放つイメージ。

ただ必要な加速を得るための――総じて威力を高めるための手段を、〝世界の壁さえ越えて〟求めた末に、

「――無塵衝！」

伸ばした手が届き、求めた力が剣に宿る。

一瞬の交差の間に、双剣〝虚空ノ双牙〟で斬り刻んだ回数は二十。

普通なら即死級の技だったはずだが、倒れ伏している変態Ａはまだ生きているようであった。

ピクピクと痙攣している変態Ａに周囲の草が絡みつき、妖しげな光を放っている。

まるで蜘蛛の糸に絡めとられた昆虫のようだが――確かに、本当に死ぬような事態にはならないらしい。

妖しい奴は、制裁を受けて当然。

しかし、それにも限度はあるだろうが、死ななきゃ〝罪〟にはならない。死ななきゃ〝反省〟しなくてもよい！

おお……！

俺は、今まさに天啓って奴を受けたのかもしれねえ！

「ふっふっふ……」

思わず笑いが零れた。

今の俺はきっと、とてもキレた”アルカイックスマイル”ってやつを浮かべているんだろう。

「今の俺は燃えまくっている！　心の平穏を取り戻すために、全力を尽くして戦ってやるぜ。

さあ……ちまちま一人ずつなんて言わず、まとめてかかってきやがれ。待ち時間を減らしてやるからよぉ！」

変態Ａを倒した直後、ふざけた準備運動をしていた奴らは動きを止めて俺を見つめ始めた。

その顔に、タラリと汗が滲んでいるのも無理はないだろう。

今の俺は、鬼だってビビるんじゃないかと思えるほどプレッシャーを放っている自信があるからな。

それも全部、お前らが悪いんだぜ？　ちょお～っと悪ふざけが過ぎたんだからな。

それにしても良い機会だ。

どうにもストレスが溜まってて、その吐け口を探してたところに、変態が不殺空間背負って飛び込んでくるとはなぁ♪

「手助けはいるか？」

「いらねえ。ここは、俺に任せまくるがよかろう！」

「……そうか、ならば私は彼らの冥福を祈っておくとしよう」

なんだ、星は優しいんだな。

でもよ、俺は違うぜ？

どーせ死ぬようなことはねーんだし、この際だ。

――――色々ハッキリさせとこうぜ。

「いいか――――人生をどー生きようと、テメーらの勝手だがな！
お天道様の下だろーが、日陰だろーが、人間なら守るべき条理ってモンが存在すんだよ！　そこんところを、お前ら『最低最悪シリーズ・ザ・人間のクズ』どもに教えてやらあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

疾風迅雷の白い悪魔。

その表現にピッタリな勢いをもって、俺は変態どもを強襲していった。

## １００万ｐｖアクセス記念　中編（後書き）

この記念話は、ＩＦルートです。
本編では、別の分岐を辿ることになっています。

ですから、かなりの無茶苦茶があったとしても、本編の方には影響しませんから安心（？）してください。

後編の方も、なるべく早く更新したいと思います。

# １００万ｐｖアクセス記念　後編（前書き）

すいません、更新遅くなりました！

ですが、こーいった話を書くのは楽しいですね。

私は貂蝉も卑弥呼も好きですよ、ネタキャラ的な意味でｗ

# １００万ｐｖアクセス記念　後編

「まあったく……なんで俺が、こんな……！　どうしてこう……俺の周りには、一癖も二癖もある奴ばっかりが集まってくるんだろうな」

「お主がそういう星の下に生まれているからであろう。本当に、ハセヲの傍にいると退屈せぬな」

乱れた息を整えながらも、歩く速度を落とすことなく独りごちた俺の言葉に、星がしれっと反応してきた。

今の言葉は、自分には関係ないといった感じ。

――――確かに癖のある奴には認定されてるが、それと兼ねて、大切な仲間カテゴリの方に識別されてるんだけどよ。

愉快そうに笑う星に軽く口元を緩めて応え、ここで足を止める。

終着点らしき場所に辿り着いたからだ。

死屍累々の草原に現れた空間の歪み。

そこを抜けて辿り着いた先に、”それ”はそびえ立っていた。

同じような草原の中にどっしりと佇む、高床式の一戸建て建築物。

卑弥呼が言っていた神殿で間違いないだろう。

隠そうともしていない、奴のものらしき強大な気配が中から感じ取

れる。
どうやら、貂蝉の奴はまだ到着していないらしい。
「先に辿り着いちまったのか。どうすっかな……手っ取り早く、建物ごと破壊したほうが楽そうなんだが」
「……今のお主の言うことだと冗談に聞こえんな」
「いや、わりと本「お待たせぇ～ん♪」……っち、機を逃したか」
「その様子だと貂蝉、お主も戦闘を繰り広げてきたようだな」
どっからか湧いてきた貂蝉もまた、俺と同様に肩を上下させていた。
傷らしい傷は負っていない（注視などしたくもないから、ザッと確認しただけ）ようだが、コイツがここまで消耗するほど手強い相手だったんだろうか？
「まあねぇん。数は大したこと（大体千人くらいだったかしら？）なかったんだけどぉ……傷ついて無防備に倒れた彼らを物色（てあて）してあげようとするたびに横やりを入れられちゃって！　あんまりにしつこかったから、最後は怒り爆発しちゃって……後先考えずに撲殺（らんぼう）してしまったのぉぉーーー！！」
「「……」」
「気が付いたら、ワタシ以外は全員昏倒してて……でも、もーちょっと逞しくてもいいとも思うのよねぇん」
もはや、何も言うまい。

星と無言の視線を交差させ、同時に頷く。

”コレ”は、こーゆー生き物なんだろうから。

「……何だか突き刺さるような視線を感じるわぁ」

「それよりだ、さっさと進もうぜ。ここが目的地なんだろ?」

そう言ってサッサと進んでいくと、案の定小走りに駆けよってくる貂蝉。

後は、さりげなく歩幅を縮めて貂蝉の横に並び、安全(バリヤー)を確保する。

何かあろうものなら、すぐに貂蝉を盾にできる位置取り。

取り巻きが”ああ”だったのだから、その親玉には十分な備えがいるだろう。

元々、これは貂蝉の問題なのだから、ここは一番頑張ってもらわねぇと困るってもんだ。

だからな、これは仕方なしの位置取りなんだ。

同じことを考えているのか、星も似たような間を取っているし。

よし、頑張れ貂蝉(にくのたて)。

「それじゃあ、開けるわよ?」

がっしりとした造りの扉を貂蝉が開き、貂蝉に付いていく形で俺た

ちも中へと入っていく。

外から見た目に反して、中は広かった。
ちょっとした体育館くらいはある。

板張りの床が広がっていて、対面の壁には大きな鏡が祀られているように掛かっていた。

その前に、背を向けて正座している卑弥呼の姿が。

「よくぞ、辿り着いた。ここが真の決闘場所だ」

重々しい声が、静かな屋内に響き渡る。
思いのほか、最終決戦っぽい雰囲気が張り詰めているな。

でもまあ、きっと……

「師匠！」

「師匠などではない！」

「「「っ！？」」」

正座のまま片手をビシッと伸ばし、貂蟬の呼びかけを切って捨てた卑弥呼。

すると、そこからノーモーションで身体が浮き上がる。
そのままバク転の形で、身体を捻りながらこちらへと向き直りつつ

立ち上がりやがった。

キョンシーが起き上がるみたく、突拍子のない動作と――それ以上に衝撃的だった光景を目の当たりにした俺たちは、揃って息を飲む。

なぜなら……

「儂の名は、戦舞蝶姫（せんぶちょうき）！　亜細亜方面漢女大乱祭実行部会長である！」

「……わ、分かったわ！　戦舞蝶姫っ！」

”パピヨンマスク”を装備して、妖しさをパワーアップさせた変態が、本人は決まってると思いこんでるだろうポーズを取っている。

蝶の羽をイメージさせたいんだか、両手首を曲げた状態で上に伸ばしたその姿は――うん、蛾（が）にしか見えねーな。

もちろん、毒を持ってる類の奴だ。

しかし、『馬鹿とはさみは使いよう』って言うが、これはどーしようもなさそうだな。

パッと思いついたのは、ストレス発散用のサンドバック。

けど、これを見ている限り新たなストレスが生まれ続けるしな。

……本末転倒な結果しか見えてこねえ。

「戦舞……蝶姫だと！？」

「ノイローゼなんだよ、アイツら。気にしても、どーにもならねぇ」

星が大きく目をみはっている。信じられないモノを見たかのように。

まあ、無理もないさ。

ここはすでに、常人には計り知れない魔窟と化しているからな。

ただ、俺の声も聞こえてなさそうな当たり、相当の衝撃だったらしい。

確かに、あの”マスク”はねーよなぁ。

「挑戦者よ、いざ、かかって参れっ！」

「その前に、一つだけ聞いてもいいかしらぁん？」

「……はぁ？　なんだ？」

ヤル気に満ち満ちた変態仮面に、貂蝉が待ったをかけた。

「負けた時に受ける洗礼をいうのは、一体どういうものなの？」

「はぁーはっはっは！
もう負けた時のことを考えておるのか？」

俺も少し意外だった。

ムカつくほどに暑苦しくて、見苦しくて。

それでも、後ろを向くことだけはない――――ある種の芯の強さを持っていそうな貂蝉。

それが、らしくもなく弱気な態度を見せているあたり、ここから先は真剣勝負だってことなんだろうか。

「――――よろしいか？」

「よろしいぞ」

「私も知りたいですな」

考え方を改めようかと悩み始めた俺をよそに、星が持ち前の好奇心を発動させたようだ。

まあ、俺としても気にはなっていたから、ちょうどよかったのかもしれない。

口には出さないが、この場の雰囲気に便乗するように俺も視線に込める力を強めていく。

「ふうむ……ならば教えてやろう」

俺たちの視線に折れたのか、変態仮面は噤んでいた口を開いて話し始めた。

――――後になって思い返してみれば、ここがターニングポイントだったのかもしれない。

「漢女大乱祭に敗れた者は、罰として、勝者から身体に一本、〝スジ〟を通されるのだ！」

「っな！？」

「「……スジ？」」

貂蝉の奴は意味が分かったらしいが、俺と星の頭上にはクエスチョンマークが乱れ飛んでいる。

心なしか顔を青ざめさせている貂蝉を見る限り、よっぽど過酷な罰なのだろうか？

普通なら『スジを通す』と言えば、道理のいった行動を貫くことだろうが、変態仮面の言い草から考えると別の問題になりそうな感じだった。

そもそも、『一本』という指示があるのだから、言葉通り〝勝者が何らかの具体物〟を〝敗者の身体に通す〟ということになるんだろう。

じゃあ、ここでいう『スジ』ってのは……？

「ま、まさか……！」

俺と同様に考えを巡らせていた星が、先に真実に辿り着いたようだ。

思わず、何のことなのか尋ねようとした俺だったが、

「戦舞蝶姫、あなたが勝ったら！？」

ハッキリと分かるほどに指差した手を震わせながら、貂蝉が問う。

頼むから違ってくれ、と願いを込めるように。

そして――――

「うむ、儂の”ピー”をお主の”ピピー”に”ズギューン”して……やるのじゃ！」

理解できない言葉……いや、音が聞こえてきた。

そう、俺の耳が拾って脳が受け止めた言葉は、俺には全く理解できない音の”ふきだまり”みたいなモンだった。

――――コイツが何を言ったのか、その意味は分かる。だが、それだ

けだ。

理解なんざ、できる訳がねえ！

「ワタシが勝ったら！？」

それは貂蝉の奴も一緒だったようだ。

軽く後ろによろめきながらも、もう一方の可能性について問いただすが……

「その場合は、お主の”ブー”で儂の”ブブー”を”バキューン”することになるのぉ」

「な、なんという覚悟か……！」

「嫌だ……！　そんなの……どっちだろうが絶対に……！」

迷いを振り切らせるどころか、どちらに進んでも地獄しか見えねえ道を突きつけられた。

対象が俺じゃないとはいえ、想像しただけで怖気が走る！

そーいうのは、創作物の中だけにしとけっ！

ガチでやるんじゃないわあああぁぁぁっ！！

どーにも心の制御が上手くいかない俺と違って、星の反応は対照的だ。

星は、あくまで勝負に対する姿勢と覚悟を尊重している（？）のか、どこか温かい目で二人を見守っている。

俺はといえば、気を抜いたら腰が抜けてしまいそうになるほど、全身の気力が弱まっていた。

今となっては、同じように打ちひしがれている貂蝉の姿に共感を抱けるほどだ。

「こんな話、まともじゃないわよぉ！？」

――ああ、まさかコイツの姿のおかげで、まともな判断が出来ているのが俺だけじゃねえ、と安心できるとはな。

いいぞ、もっと言ってやれ！

「それじゃあ……勝っても負けても、苦しいのは変わらないじゃない！

もし負けたら、ワタシが心に決めた人にあげるはずだった”初めて”を失ってしまうのおぉっ！！

勝ったとしても、この身は”男の身体”だという事実を受け入れることになるでしょうっ！！」

「その通り！　肉体はもちろん、精神をも極限に試すのが漢女大乱祭の本質よ！
　揺るぎなき事実を受け入れて……それでも祭を乗り越えた者こそ、真の漢女と言えよう！！」

「ふむ、まさにお主たちの尊厳を懸けた戦いが始まるのだな。これは……見届けねばなるまい」

「……あああああっ！？」

馬鹿だった。やはり馬鹿だった！　結局馬鹿だった！！

あまりの悔しさに、頭を抱えてしまう。

変態の態度に期待するなんて、俺は相当参ってるようだ。

これは……早く退散しないと危ねえかもしかねえな。

明らかにおかしいはずなのに、なぜだか自分の方がその場の枠にはまっていないような雰囲気。

変態二人は今更だが、星はといえば……変態への好奇心三割、俺へのからかい七割といったところか。

まあ、放っておいても星なら問題なさそうなので、俺は俺で行動を開始することにした。

こんなところから、いち早く脱出したい。
そう決心した俺は、素早く入口に向かおうとして――

「どこへ行かれるのかな、ハセヲ殿？」

「……俺がここにいる必要はねーだろ。外で待ってるから、用が済んだら「そうはいかんのだ」……何でだよ？」

変態仮面の言葉に、首だけを振り返らせて理由を尋ねる。

それと同時に、あくまで自然を装って全身に力を満たしていく。

一応聞く姿勢を見せてはいるが、ほとんどただのポーズだ。

いざとなれば、すぐにでも外へと飛び出せるように。

または――力ずくにでも、と。

そう判断したのは、今まで貂蝉に向けられていた変態仮面の視線が射抜くように俺を見据えていたからだ。

見た目は毒蛾のポーズをした変態にしか見えないが、俺の意識は奴の中身が放つ気配に囚われて離れてくれない。

「ここへ足を踏み入れた者は、すべからく祭の関係者となり、祭の一部始終を見届ける義務が生じるのじゃ。この規約に反するというのであれば、実力行使もやむをえん」

「ほー、やれるもんなら……」

入ってきた扉を開けて外に出る、というのは諦めた。

確実に捕捉される方が早いだろう。

なら――――

「やってみやがれっ！！」

しっかりと踏みしめていた足に込めていた力を解き放ち、変態仮面へと討って出た。

板張りの床を踏み抜かんばかりの音を響かせた直後、双剣”虚空ノ双牙”を喚装。

「寝てろぉぉぉっ！」

一直線に変態仮面へと迫っていき、間合いに入った瞬間に剣を振り抜いた……

「っぐぉ！？」

……はずだった。

そのはずなのに、変態仮面は最初の妖しげなポーズのまま。

俺はと言えば、その眼前で膝をつかされてしまっている。

どうやら、俺の攻撃は無力化され、奴のカウンターをくらってしまったらしい。

腹を貫かれるかと思える衝撃が背中まで響き、しばらくは立ち上がれる気がしなかった。

「大丈夫か、ハセヲ？」

「……ああ、油断してたわけじゃねーのに、このザマだ。あの野郎、仮面なんかかぶって深刻な馬鹿なんだなと同情してやりゃあ、恩を仇で返しやがって……！」

「深刻な馬鹿とは……深刻よなぁ。それと、今の発言で恩知らずと思える者は少ないと思うぞ？」

駆け寄ってきた星の手を借りて、座ったまま楽な姿勢を取る。

後半の耳に痛い話は聞かなかったふり。

次いで、先ほどの交戦を思い返してみるが、正直どーなったのか自分でもよく分からなかった。

双剣を振り抜こうとした瞬間、変態仮面との間合いが一気に”遠くなった”かと思えば、双剣が空振りに終わった瞬間、今度は一気に”近くなった”のだ。

星に聞いてみたところ、変態仮面はその場から動いていなかったらしい。

どーいう原理かは分からねえが……コイツは、姿も見た目も悪い意味で規格外なのは確実なようだ。

「さあ！　立会人の準備もできたようであるし、始めようではないか！

後は、汗が結果をはじき出してくれよう！！」

「……やるしかない、のね」

「ふふん、怖気づいたか？」

纏わりつくかのように向けられていた視線が俺から離れ、再び貂蝉へと突き刺さる。

ジリジリと歩み寄って行く変態仮面の言葉に、貂蝉はしばらく何も答えなかった。

だが、

「ふふふ……」

徐々にその身体が震え始めた。

それに乗じて湧きあがるように溢れてくる強大な気配。

零れる笑いが大きくなるにつれ、貂蝉の表情が恍惚に彩られていく。

初めてコイツと会った時に見たものへと。

「ふふふんっ、いいわぁ、越えていってあげようじゃない！　命を燃やし、試練を越えて……守ってみせるわ、純潔をっ！！」

そう言いつつ、尻をギュッと引き締める貂蝉。

面白そうに、その様子を見守る変態仮面。

さらにその様子を観客気分で見渡す星。

零れそうになる虚しさと悲しみの涙を懸命に堪える俺。

何か……もう、色々手遅れすぎるな、本当。

「かかってらっしゃあぁぁぁいっ！」
「いいぃ行くぞおおおぉぉぉっ！！」

それぞれの想いを胸に、二人の変態が雌雄を決するための闘いが始まった。

「はあ……はあ……っ」

見苦しくも凄まじい……そんな激闘が終わりを告げた。

肩で息をしながら、満身創痍といった状態で立っている貂蝉の前には、膝をついた変態仮面の姿が。

闘いの舞台となった神殿はほぼ半壊しており、ずいぶんと見晴らしがよくなってしまっている。

「見事な技量だ。私もまだまだ精進が必要なことがよく分かった」

星が惜しみない賛辞の言葉を送った。

かくいう俺も、言葉にこそ出さないものの、少しばかりは同じ気持ちを抱いている。

その身体一つで、よくあそこまで戦えるもんだ。

変態仮面が繰り出す毒手を幾度となくその身に受けながらも、最後の最後で決定打を先に決めたコイツの強さは本物だった。

そこに関してなら、認めてもいいほどである。

姿は、変態でしかないことに変わりはないのだが。

「イイ感じだのぅ！　これほど気持ち良く祭を終えられた記憶はないぞ貂蝉！」

何とか身体を起こし、変態仮面は大きく伸びを一つ。

溜まっていた疲れを吐き出すように深呼吸してから、仮面へと手を伸ばしていき、

「し、師匠？」

「お前にコレを託そう」

付けていた仮面を貂蝉へと手渡した。

仮面の下の顔は無残に腫れあがっているが、浮かべている表情は眩しいほどの笑顔だ。

思わず全力で目を逸らしたくなるほどに、な。

だというのに、星の視線は一向に――――仮面を取って、ただの変態にランクダウンした――――卑弥呼からブレていない。

何をそんなに凝視するかのように見つめているんだろうか？
気が進まなくて、確認できない俺である。
「これは……？」
「〝蝶姫〟の仮面だ。これをつければ、今日からお前が戦舞蝶姫となれる」
どーやら、新たな変態仮面就任の運びとなったらしい。
が……ちょっと待て？
まさか、ほんっとーにまさかとは思うんだが！
こんなことのために〝ここ〟まで来たとは言わない、よな！？
「……悪いけれど、これは受け取れないわ。仮面なら、もう間に合っているから。きっといつの日か、またコレをつけて戦える日が来る気がするのよぉ～♪
それと、師匠。ワタシの真の目的は〝もう片方のモノ〟なのよん！」
何故か星の方に流し目を送りながら、卑弥呼の申し出を断る貂蝉。
星自体は貂蝉のことを気にかけるでもなく、今だに卑弥呼――――正確にいうなら、その手元――――を凝視している。
何を気にしているのかよく分からないが、俺としては貂蝉の言葉の真意の方が気にかかっていた。

貂蝉がここまでやって来た理由。
俺をこんな目に合わせてまでやり遂げた祭の果てに、一体何が……？

「そうか、ならば受け取るがいい！　これぞ、漢女ならば誰もが羨む必須道具！　その名も……」

そう言って、おもむろに胸元へと手を伸ばしていく。

何を取り出すつもりなのかと、俺は固唾を飲んで見守る。

多くを期待してはいない。

自分を納得させられる――――は無理だろうから、せめて誤魔化せる程度のモノを……どうか！

そして――――

「〝穢れなき漢女の胸当て〟よ！」

得意げに差し出してきたのは、卑弥呼が先ほどまで付けていた胸当てだった。

それを見た瞬間、思わず冗談だと思いこもうとした。

だって、そうだろ？

ここまで来て、こんな目にあって――――それが、こんなもののため、

だと！？

だが、貂蝉の反応を見る限り、コレが正解だったらしい。
嬉しそうに受け取り、飛び跳ねて喜びを表現している。

「……なあ、どうしてソレを欲しがってたんだ？」

「え？　付けるために決まってるじゃない」

何を言ってるのかという顔で言ってくる貂蝉。

そりゃあ、そういうものなのは分かってるが、そーいうことが聞きたかったんじゃねえ！

「だからっ「それとね、これに付加されている特殊効果が素敵なのよぉ！！」……どんな効果なんだ？」

「それについては、儂から説明しよう」

解説を名乗り出てきた卑弥呼。

頼むから、まっとうな理由を聞かせてくれよ！？

そーでもなきゃ……

「これは、穢れなき漢女に反応して様々な恩恵を与えてくれる宝具なのだ！
　身につければ、代謝は促進され、肌は瑞々しさを保ち続ける！
感受性の調整も可能で、殿方がどのような行為を求めてこようと対応可能！　すぐさま絶頂に至れるほど昂ぶらせることも、千日手の

ような持久戦を見据えて抑えることも自由自在！　どうじゃ、凄いであろう！」

「……へぇ」

自分でも驚くほどに乾いた声が出た。

悲しいことだが……どーやら俺は、人生を棒に振っちまったらしい。

なら、その原因をつくった奴には相応の向きを受けてもらわねえとなぁ？

「先ほどの戦いでは使用しなかったが、身体能力の強化も意識下で調整できるぞ。無理のない範囲で使ってゆくことだ。敗れた”儂”には、もう装着できないものだからな」

「ふふっ、ありがとう師匠♪　これで于吉ちゃんたちへの対策はバッチリね！」

変態どもが何かを言ってるようだったが、俺はもう奴らの声を意識的にシャットダウンしていた。

殺意（いしき）は鮮明なのに、感覚が妙に遠い不思議な気分。

ひどく疲れている、心も、身体も。

それでも成さねばならないことのため、俺は剣を取ろうと思った。

――――おっと、でもその前に、な。

「……星、ちょっと離れてろ」

ひとまず、星をここから避難させようと思った。

だってのに――――星は星で恍惚めいた視線を変態どもの方へと向けていたのだ。

「ああ……素晴らしいな」

「っ！？」

何が、とは恐ろしくて聞けなかった。

星の視線の先では、貂蟬の両肩を腕で抑えた卑弥呼が床に貂蟬の身体を押し倒そうとしている。

『肉体の試練』を乗り越えた次は『精神の試練』らしく、ここでハッスルするつもりらしい。

「受け入れろ、貂蟬。これが漢女大乱祭の仕上げなのだ！　儂も、先代と共に乗り越えたのだからな！」

「へ……！？　い、いや……でもぉ！？」

変態どもは、俺たちのことは全く気にしていないようだ。

痛々しい空気を作りつつ、新世界へと旅立とうとしている。

ああ、だったらいくらでも好きにすればいいさ。

色々と学ばせてもらった駄賃代わりに、俺がその背を押してやる。
そうしようと決めたんだ。

――俺は、今回の旅で多くの事を学んだ。
その大部分が、普通に生活する分には必要のない知識だったわけだが……ある『真理』を掴んだ気がするんだよ。

「ガツンと来い、ガツンと！　その方がイイぞ」

「や、やめなさい卑弥呼！？」

奴らに近づきながら、俺は大剣”シラード”を喚装。
肩に剣の腹を乗せて掲げつつ、ふらふらと幽鬼のように歩み寄っていく。

殺気は出ていない。
そんなものは当然すぎて出すまでもないといった心地だ。

そのためか、変態どもは俺の接近に気付いていないようだ。

今までだったらもっと取り乱していただろうに、不思議と今は落ち着いている自分。
それがおかしくて、俺は少し笑ってしまった。

それはきっと、”真の恐怖”と”混乱”を引き起こす原因が分かったためだろう。

見た目通りの変態は、予想する必要もなく変態でしかないのだから気にしてもしょーがないのだ。

それよりも、一見まともそーに見えながら、実は信じがたい華琳（しょうわる）だったり、桂花（どくぜつか）だったり、春蘭（あばれうま）だったり、今回の星みたいに不可解な嗜好を持ってたりすることで引き起こされるもんなんだってな。

実際、目に余る変態どもの奇行よりも、それを窺っている星を見ている方が怖すぎる！！！！

――後になって分かったことだが、この時の星は卑弥呼のふんどしに差しこまれていた蝶の仮面を見つめ続けていただけらしい――

つまり、現在の俺の周囲こそが戦場なのであって、変態どもが何をしていようと気にするだけ無駄なのだ。

そういうものなのだから仕方ない。

でもな、だからといって――

「……いらねえ。こんな見せ物はいらねえ！」

「「え？」」

ここまでの徒労を踏み倒させるつもりはなかった。

清算だけは、してもらわねーとな。

「――なあ、俺からもスジを通してやるよ。遠慮せずに受け取ってくれ」

そう言うやいなや、俺はパンツに手をかけていた変態どもへと容赦なくシラードを叩きこむ。

「き、きくぅーーー！？」
「ら、らめぇーーー！？」
「往生しろおおおおおおおおおっ！！」

それからしばらく、耳障りな悲鳴が漢女ヶ原に虚しく響き渡ったのだった。

## １００万ｐｖアクセス記念　後編（後書き）

記念話も終わりましたし、次から本編を再開しますね。

一応予定としては、”彼”とのオリジナル展開へと突入って感じです。

今回の話で辿った分岐とは異なる話ですね。

ただ、年度末が近付いてきたこともあり、ただでさえ遅い更新速度がより遅くなることが予想されます。

そこは社会人という立場から、ご了承いただきたいです。

次回のキーワードは『出会い』と『旅立ち』です。

お楽しみに！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0535o/

白き錬装士、恋姫世界に旅立つ

2011年11月28日07時47分発行